
believed it daybreak

結里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

believed it daybreak

【Nコード】

N2158R

【作者名】

結里

【あらすじ】

彼女、西龍院玲華は莫大な資産を築いている西龍院グループ当主の孫で、俺たちの通う私立西龍学園高等学校の理事長の娘という生粋のお嬢様だ。そんな彼女と付き合いだして二ヶ月が過ぎたある日、彼女は俺に一ヶ月会えないと告げにきた。切実に待っていてほしいと言う彼女に俺は頷く。一ヶ月なんてすぐだと思っていたが、想像よりも寂しさを感じていた。そんな折、彼女が婚約したという噂を聞き、それにあわせて周囲で動くものがあった。玲華に会おうと決意をした俺は行動に移し、理事長に会いに行ったのだが、それは西

龍院家に関係することだった。しかも余計なことをするなと理事長に釘を刺されてしまい。

* * *

come with tomorrow 新しい場所へ 第二段！
男女ダブル主人公でおおくりします。

第一章・・・ 1

灼熱の夏が終わりを告げていた。あくまで、暦の上ではまだ暑さは尾を引き、とつてい秋とは体感できない気温が続いている。そんな九月中旬。このくらいになると、俺はここまで昨年暑かっただろうか、と違ってしまふ。しかしおそらく、これも例年通りの思考なんだろう。

それでも夜はまだいい。熱帯夜でないことはさすがに体感できる。俺は寝る気なんてまだなくて、仕方なしに数学の教科書を広げていた。宿題というやつだ。進み具合は中の下といったところだが、速度をあげる気はさらさらない。

だいたい傍らでパソコンの電源が入っている状態で、すでにやる気がないことは表れている。

(これしか通信手段がないって問題だよな……)
俺は携帯を持っていないから、誰かから連絡があったらこのパソコンのみだ。家の電話は元より誰にも番号を教えてないし、知っている者には「かけてくんない」と言っている。

元々そこまでマメなほうではない。メールも電話も面倒くさいと思うところがある。

そんな俺がここ最近、部屋にいるときは常にパソコンをつけるようにしているなんて、数ヶ月前では誰が考えられただろうか。

それもこれも、やり取りの大部分を占めている彼女のためだったりする。

気にしてるだけでも変化だと俺自身は思うのだが、こちらから発信しないところに彼女は文句を言う。

ほぼ毎日会っていて、いまさらなにを書けというのだろう。

(あ、きた……)

メールが着信されると鳴るように設定してある音が報せてきた。

受信時間二十二時五十分。

予測どおり、西龍院玲華せいりゅういんれいかから。玲華の携帯電話のメールアドレスだった。

俺と同じく私立西龍学園高等学校一学年で、学級委員長をしている。父親は同学園の理事長という生まれも育ちも生粋のお嬢様。

俺の彼女に昇格したのは七月末だ。そんなに経ってないと思うべきか、もうそんなにという感覚が微妙なところに陥る。それはこの二ヶ月が密度が高く、あつという間に過ぎたからに他ならない。

昇格なんていうと俺からの目線なのだが、実際には彼女の方が何倍も引つ張っていく存在だ。男の俺としては情けないと思うけれど、勝てるところが少ないと認めてしまっているので、いまは格を上げることが水面下では頑張っている。

メールの内容はたった一文だった。

今から出てくれる？

俺は眉をひそめてから、普段締め切っているカーテンを開けてみた。

そこにはいつもの高級車があった。

初めてのことだった。こんな夜に来たのは。

突然の展開で、理由を探してみたがはつきりと思い当たるところがない。曖昧に、だったら掠めたことがあった。

ほぼ毎日会ってる、というのは嘘ではない。学校に行けば会えるからだ。

しかし実は九月に入ってから玲華は休みがちだった。いや、休むというより遅刻や早退が増えたのだ。なんたることか授業にまるまる出なくても、部活時間にはやってきていたりする。その逆もあった。

だから平日は毎日会っている、で間違いではない。ないのだが、話す時間はあきらかに激減していた。

その変化は厳密に言つと夏休みの後半からだった。

半ばぐらいまではほとんど毎日一緒にいたのだ。この家にも来ていた。

ちょうどその頃、俺の家　神崎家には不在がちだった家族が全員揃うようになっていた。変化が有ったような、無いような何とも言えない状態が、ゆっくりと、だが確実に時を刻んでいく。一時期はそのためだろうと思っていた。我が家の事情を知っているから気を遣っているのかなって。

数少ない会話の時間で、そうじゃないらしいことは本人が訂正していたけれど。

実際には毎日会えているわけだから、そんなに気にする必要はないと深くは訊いていない。尋ねたところで答えてくれない空気を読み取ったのだ。

そういうとき、玲華は頑として言わないだろう。そういう性格だったのも知ってるから、突っ込めないのだが。

(もしかしてそのことで?)

ようやく言うつもりになったのかもしれない。

皆は自室にこもっていたため、誰にも咎められずに家から出るこゝとが出来た。

そつと足音を消すように出てしまふ自分が悲しい。別に疚やましいことなんてないんだから、もっと堂々としていればいいのだ。

バレて困ることといえば、近所の目を気にする母親が怒り出すことぐらいだろう。

(それが一番困るんだって)

母親はヒステリックな性質を持ち合わせていて、一度キレると厄介なのだ。

玄関を出ると、室内では分からなかったが風が強かった。確実に夏は終わりに向かっている。

俺が出てくるのを察したようで、すでに玲華は車から降りて傍かたわらに佇んでいた。片手でなびく長い髪を押さえ、口元にはいつものように笑みが浮かべられている。

俺の好きな、優しくて強い笑み。

「どうしたんだよ、いきなり」

「あんだ他に言いようないの？悠汰^{ゆうた}」

照れ隠しもあつてか、ぶつきら棒な言い方になった俺に玲華は苦笑する。

それに笑みで返しながら、足早に彼女に近づいた。

お抱え運転手の眞鍋^{まなべ}さんは、玲華に言われているのか出てこないいつものように我^{われ}関せずという姿勢を完璧にこなしている。

「だって珍しいから」

「まあね、ずっと来られなかったからね」

「おまえ……来なかつたんじゃなくて来られなかったのか？」

「ちよつと家のことでイロイロあつたのよ」

「家つて、理事長？」

俺としては玲華以外の西龍院家の人と言われれば、まず玲華の父親が出てくる。

だから事情を話さなかつたのだろうか？あまり家の話をしても、俺には分からないとでも思ったのかもしれない。

「そうじゃないわ。あまり詳しいことは言えないの」

「ふうん」

突っ込んで聞けない何かが、そこにはあつた。学校でも感じた空気。

嘘が嫌い、と彼女に話したことがある。その為かもしれない。玲華は嘘をつかない変わりに、言えないとはつきり意思表示した。

それならば俺は聞けるはずがない。

風を受けながら、玲華は黙っている。だから俺から促した。

「で？どうしたんだよ、何か急用？」

「うん……」

髪をかき上げ耳にかけると、玲華は頷いた。

いつもはさらりと言い切るのに、どこか言いにくそうな言葉運びだと思った。いきなりここへ来た本題を、なかなかあかささないから。

「うん、そうなの。悠汰、あたし暫く学校を本格的に休むことになったわ。ここにも来れない」

「え？」

それは予想していない内容だった。すぐにはどう返していいかわからない。

「でも大丈夫よ。必ず戻ってくるわ」

「戻る？」

その言葉に違和感を覚えた。

どこかへ行くということだろうか。

何処へ？

「だから待っていて。悠汰」

「どれくらい？」

「そうねえ……一ヶ月くらいかしら」

「なんだ」

思ったより短くて拍子抜けした。

「なんだとはなによ」

「おまえ大袈裟だよ。わざわざ言いにくるから、半年とか一年とか言われるかと思っただろ」

「ああ、そうね」

頷きながら玲華は俺の手をとった。僅かに玲華の体温の方が温かい。

彼女はその手元を見つめている。

「そうよね」

「どうした？なにが……なにか俺に……」

手伝えることはあるか、と聞きそうになった。玲華から決意をしている意志が感じられたのだ。

何かをやるうとしている？

なにを？

「うっん。これはあたしの……あたしがやるべきことなの」

そう言って彼女は微笑むと手を離そうとした。持ち上げられた手を降ろせずに、俺から力を加えて握り締める。

聞きたいことが山ほどあった。いくら答えてくれないと肌で感じ

ていても、たった一ヶ月のことでも、このまま帰らせたくない想いが湧き上がる。

出来ることなら束縛したい。どこにも行かせたくない。しかし先手を打たれてしまった。見栄もあって、自分だけ余裕が無いようには思われたくない。

玲華は俺の次の言葉を待っているようだった。

それでも、葛藤がすさまじくて何も発せない。

見つめあったまま、沈黙が流れる。

彼女の頬にかかった髪を、自由な右手でかき分けて首の後ろで止めた。

「ダメよ、悠汰。こんなところで」

上目遣いで玲華が釘を刺す。

「誰も見てない」

しばらく会えない、という事実だけははっきりしている。

そのことが俺を大胆にさせた。

何かを言いかけた玲華より一瞬早く、その唇を重ねる。

玲華は避ける素振りは全くせず、応えてくれた。だけど顔を離すと睨みつけてきた。

「あんた、だんだん臆面がなくなってくるわね」

お嬢様らしからぬ態度と口調。それも俺にとっては当たり前になっている。

「普通だろ！べつに！」

語調を荒げてしまつて少し後悔する。当の玲華は、そのようにことも動じず、悠然と笑った。

「そうね」

いつもより少し、儂い色が窺ってしまったけど、そのことも触れたいは出来なかった。

* * *

玲華が学校に来なくなつて一週間が経つた。

担任の杉村先生は、家の事情でしばらく休むことだけを生徒たちに告げると、後はいつも通りに進行していった。良家の子が多い学校で、ざわついたり批判を上げるものは誰もいない。

いつも通り……………。

確かにいつも通りなんだけど、あきらかに俺には物足りないなにかを感じている。

これまでよりも強く。

いつの間にか玲華が隣にいて当たり前になつていたことに、自身が驚いていた。

居場所にまた迷うんだ。

理事長が玲華のために与えた部屋 名目は一応部室 に、一応顔を出してみるものの滞在時間は遥かに短かった。

あそこに居ると、より実感する。

玲華がいないこと。

ぼつんと在るだけの玲華の机だとか。

玲華がなんとか理事長から手に入れた冷蔵庫の中に、彼女が飲むためのオレンジジュースが全く減らずに残つたままな状態であるとか……………そういう些細なことが、すぐくくる。

(戻つただけなのに……………)

入学した頃は一人でした。

その状態に戻つたと思えば良いだけなのに。

どうして、あの頃より寂しさを感じてしまつんだらう。

(情けねえよな)

女がいないだけで、こんなに左右されるのはみつともない、とは思つんだ。

だからなんとか、表面上は何でもなさそうに振る舞つてはいる。

その日はいつも通りに高田秀和たかたひでかずからコーヒーをいれてもらつたり、

あまり会話は無いけれど、確実に以前より和やかな空気あたたかみでいる浅霧あさぎり世羅せらの様子を窺つてみたりしていた。

秀和は西龍院家の庭師の息子で、世羅は玲華の幼馴染みだ。そういう繋がりの三人の空間に、俺が入り込んだのはまだ玲華が彼女になる前からだった。

ここを居場所にしていいからね、と笑いながら言ってくれたけど、玲華がいないとどうも落ち着かない。

早々に俺は部屋を出た。

すると目の前に、廊下の窓越しにもたれるように立っている人がいた。

というより待ち構えていたようだ。

「よお」

見たことある顔だ。

明るすぎない茶色い髪。いつも人を小馬鹿にしている目。この金持ちの多い学校にしてはガラの悪い生徒だ。

(名前、なんだっけ)

名前を覚えるのが激しく苦手な俺は、されたことは嫌なほど思いだせるのに、その名だけは出てこなかった。

憶えたい相手でもない。

なにせ俺をとことんバカにしてくれたのだ。

俺は無視することに決めた。絡むとロクなことがないのは分かっている。

「待てよ、生意気なくそガキ」

通り過ぎる瞬間、腕を掴まれた。

やっぱりやり過ぎすのは無理だったか。

「どちら様でしたっけ」

本当に思い出せなくて聞いてしまった。

「おまえ、いい性格してるよな」

「いや、本当に分からないんですけど……」

「美山みみやまだよ、美山真人まこと」

ああ思い出した。下の名前は初めて聞いた気もするが。

俺を生意気だと言って暴力を振るってきた二年生せんにしゅうせいだ。あれ以来初

めて話した。

「で？どうしたんですか？美山先輩」

「おまえ本当にいい性格してるな」

なぜか不機嫌そうに美山先輩は睨みつけてくる。

やばい、と思った。

あまり関わり合いになりたくない。なんとか逃げないと、思っ
て慎重に言葉を探す。

「いいからちよつと来い」

だけどその前に、美山先輩は俺の腕を引いて強引に歩き出した。

このまま適当にあしらって、今後目をつけられても厄介だ。仕方
なく俺は大人しくついていくことに決めた。

広すぎる校内で、しかも今は放課後だ。人気のないところはたく
さんある。

その中のひとつでもある、移動教室が立ち並ぶ廊下を歩きながら
美山先輩は言った。

「おまえ目つき変わったな」

「……………」

どつという意味で言われているのかが分からない。

だから無言で通した。

「ここでもいいや」

運動に力を入れていて、文化部が異様に少ないこの学園は、この
とき家庭科室には誰も居なかった。

俺を先に中に入れると、美山先輩は後ろ手でドアを閉める。

「また、この間の続きでもしようって言うんですか？」

それだけは避けなければならぬ。こんなところで昔の自分を出
すわけにはいかなかった。

「はあ？なに勘違いしてんだてめえ」

だけど美山先輩は心の底から、意外そうな顔をした。

それに違和感を覚える。

また殴ってくるのかと思ったのに。

「だったらなんで……」

「なあおまえ、あの噂知ってるか？」

いきなり話を持ち出された。遅ればせながら反問する。

「……噂？」

「知らねえんだろうな、誰もおまえには言わないだろうし。まったくお上品過ぎるぜ、この学校。信じらんねえ」

「は？」

ぶつぶつ呟く美山先輩に訝しく思う。

この話運びはなんだろう。

だけどなぜか凄く嫌な予感がした。わざわざこの目の前の男が、自分に良い話を持ってくるとは思えない。

「みんな知ってることだ。西龍院玲華と亨（みづひ）が正式に婚約したってなどこか嬉しそうにニヤニヤ笑って美山先輩が告げた。

意外な話の方向に、一瞬眩暈（めまい）を起こしそうになる。

亨とは綾小路亨（あやのこうじ）と言って、美山先輩とクラスメートで共に俺を殴った奴だ。というより、仕掛けてきた張本人なのだ。玲華のことを好きで、俺が目障りだという理由だった。

「また、勝手に言ってるんだろ？」

勘違いをよくする奴だ。それはわかっているのに、嫌な感じが収まらない。だから誤魔化すように視線を落とした。

「それがどうやら今回は本当っぽいんだよ。確かな筋からの情報だ」「どういうことだよ」

余裕がなくなっていくのを感じる。

自然と敬語で喋れなくなるのが、その証拠だ。

それに気づいたのか、更に美山先輩の口元が上がる。

「西龍院家の中から流れている情報だ。亨側じゃなくてな。この意味が解るか？おまえ」

俺の頭に、西龍院家というキーワードでまた理事長が浮かぶ。

「おまえは捨てられたんだよ。あのお嬢さんは亨の方を選んだんだ」
そういうことか。

こいつは俺の痛いところを知っていて、そこを突いてきたんだ。
挑発の羅列。

やっぱりあのと時の続きなのだ。

拳ではないけれど、そんなこと俺には関係なかった。

「だから？なにが言いたい！」

「戻ってきたな。その目を見たかったんだよ」

美山が嘲笑する。

俺はその言葉に必死に抑えようと思った。

どんな目をしているかなんて、自分では自覚なんてできない。だけど怒りに己を支配されてはならないことは解っていた。

「……本人に、聞いてみないとわからない」

「だったらおまえは知っているのか？今なぜ、あのお嬢さんが学校を休んでいるのかを、さ」

なぜ？

家のことで色々あった、とは言っていた。

だけどそれだけだ。

聞かなかった、俺も。

「綾小路は来ているのか」

「ああ。一日休んだが後は来ている」

その言葉を聞いて俺は駆け出そうとした。
しかし。

「だけど部活は休んでるぜ。今日ももう帰ってる」

足を止めざるを得なかった。

きつく唇を噛みしめる。

一刻も早く真実が知りたいのに。

綾小路に聞いたところで俺の望む言葉が得られるとは思えないが、今の自分にはそれどころではなかった。

なぜ美山の言葉を信じたのか、自分でも分からない。

それでも美山は俺より知っている気がした。嘘や口からの出任せには思えなかったんだ。

「その休んだ後から出た噂だからな。みんな言ってるぜ。信憑性しんぴやうせいが高いってさ」

「おまえは知っているのか？本当のことを」

「さあ？」

わざと肩を上げて両手を広げるポーズを作る。どこまでもバカにした態度だ。

「本人に聞くんだろ。連絡とればいいじゃないか」

それもそうだと、思った。

玲華に聞けば一発だ。

あんなに言ってるの？ってまたいつものように苦笑されて終わるんだ。

それとも、あれはねって、いつものように傲然ごうぜんと微笑みながら説明されるかだ。俺が脱力しながらも納得できる説明を。

「はあー。なに、おまえ。やっぱりつまねえな、見所あるやつだと思っただのに」

美山が残念そうに呟く。

それに睨み返して俺は家庭科室を後にした。

* * *

あれから二日。

いくら玲華にメールをしても返信が無かった。

家から勇気を出して電話を試してみたのに、繋がらない。コールも

しないで留守電に切り替わるのだ。

なにをしているんだ、あいつは。

いままで、なにも聞かないでいたことを後悔した。

だけど玲華は言ったんだ。

必ず戻ってくるよ。

戻るってというのはどこかへ行くという前程の言葉だ。

(違う)

違うだろう？玲華は避けていただろう？綾小路のことは。いくら俺のことが嫌いになったからって。

(違う)

嫌いになったのなら、わざわざ待っててなんて言わないだろう。わざわざ、そのことを告げに、あんな時間に家にまでは来ないだろう。だけどその内容を伝えてこなかったのは真実だ。

(違う！)

どう思えばいいのかすら、わからない。

何を信じればいいのか見えなくなってくる。視界が暗い。

「……くん、神崎くんってば！」

昼休みだった。

クラスの談笑中の中から俺を呼ぶ声が聞こえた。

ところ構わず思考の渦にはまっていたようだ、とこのとき気づく。顔を上げると、席替えをして隣の席ではなくなった拓真が、わざわざ一番前から一番後ろまで来ていた。

「なに？」

「なにじゃないよ、何回呼ばせるつもり？」

「呼びたいかと思って……」

「嘘だね。玲華さまが休んでて寂しいんだろ」

こいつも知ってるんだ、噂を。

知ってて、言わなかった。俺を気にして？

「んなことねえよ」

「あるね！最近の君ときたらポーとし過ぎだよ」

「……………」

「素直に認めるのが一番だよ」

いつもの会話なのに少し苛立った。

突っかかっているように聞こえてしまう。

「関係ねえよ」

こんなふうに、冷たく切り捨ててしまえる自分が更に苛々する。

怒鳴らないように心がけているだけなのに、結果優しくできない。

拓真が悪いんじゃないのに。

「 神崎くん。荒^{すく}んできてない？」

「 いいからなんだよ？用があるから呼んでたんだろ」

「 ああそうだ。三年のセンパイが神崎くんに会いにきてるよ」

気にしてなさそうに、拓真は前の出入り口を振り返った。

そこには三年特有の濃い緑色のリボンを付けた女生徒が一人立っていた。

見ない顔だ。

といつても三年生に知り合いはいない。

「 あんだって？」

「 ボクは聞いてないよ。ほら、早く行ってあげなよ」

動こうとしない俺に拓真が急かす。

めんどくせえ。

ダルい体をなんとか立たせた。

すると途中に座って雑談していた二人組が俺を見ずに言った。

「 また神崎くんか」

「 モテるな」

人の気も知らないで、とまた不機嫌になる。

こいつらも噂を知っている。

知ってくるくせに。

なにも知らなかったのは俺だけだ。

ちつと抑えられずに舌打ちが出ると、二人がビビったのがわかった。

た。それでも何も考えられない。フォローが出来ない。

そのまま俺はその女の前に立った。

「 なんか用？」

その先輩は決して好意的ではない俺の態度にも怯^{ひる}まずに、なぜか愉^{たの}しそうに笑っている。

きつい猫のような目が印象的だった。短めの髪は耳の三分の二までを隠していた。その下からシルバーのピアスが光っている。

薄く化粧もしているように見えた。

この学園は決して校則がゆるいわけではない。ただ、家柄をみて判断しているときがある。

きつとこの女生徒も良い家柄なんだろう。

「ここじゃなんだから、移動しない？」

確かに、教室内と廊下にいる奴らの視線が痛い。

俺はついて歩きながら、こつこの最近多いな、と黙っていた。

誰かについて行くという行為がだ。

そして、彼女が連れて来たのは屋上だった。

普段は入れないようになってるのに、今日はあっさりと開いた。

「ここのカギ、よく壊れてるんだ」

そう言っただけは外に出る。

それに続くと、真夏より柔らかい陽の光を浴びた。

よく晴れていた。風が心地いい。

「まずは名乗らないとね。わたしは一条京香よ。京香って呼んでね」

どこかのご令嬢にしては軽いしゃべり方だ。

名前が韻を踏んだようなもので、玲華が思い出された。なんの因

果だ、一体。

(なに比べてんだ…)

はた、と我に返った。

これでは無意識に意識しているみたいではないか。

「わたしね母の姓を名乗ってるんだ」

いきなり京香は聞いても無いのに語りだした。

柵にまで近づくことなく、扉の横の壁にもたれながら。俺は距離

を保って聞いていた。

「それでね父の姓は西龍院って言うんだよ」

「えっ？」

やっとそこで反応できた。というより、思考が現実に戻ってきた

からだだった。

そこで彼女が俺を呼び出した理由が、別の意味を持ち始める。

「でも父と母は事実上他人になってるんだ。今はね。父の母が源蔵

様の愛人ってやつだったの。父はそれでも西龍院を名乗らせてもらっていたんだけど」

「源蔵？」

「知らない？源蔵様って西龍院グループの会長している人よ」

ということは、玲華の祖父でもあるということだ。

一度だけ、確か玲華が言っていた。

お祖父様にはたくさんさんの愛人がいると。そしてその全ての子供を認知している、と……。

おそらくだが、彼女から出た名前がその祖父だろう。入学当初、拓真から財閥クラスの孫だとは聞いていた。

子供が多いということは、枝は広がり孫はさらに多くなる。

「だから？」

つまり何が言いたいのだろうか。

素っ気なく促すと、京香はどこか無邪気に声を出して笑った。

「やっぱり噂どおりだね。神崎悠汰くん」

噂、ウワサ、うわさ。

いい加減ウンザリしてくる。

自分はいつたい、どんな噂をされているとこのだろうか。そこまで浮いた行動をしているつもりは全くないのに。

だいたい玲華のことといい、そこにいない他人のことを話して何が面白いんだ？

不思議でたまらない。

「睨まないで。でもそんなあなた嫌いじゃないわ」

「つまり、なんの用だよ」

「玲華の噂も聞いてるんでしょ？」

初めて玲華の名前をだした。

やっぱりそういうことか、と確信する。

しかし京香の狙いはまだ読めない。

「ねえ、玲華に会いたくない？」

小首を傾げ、俺の胸の内を揺さぶるようなこと言ってくる。

「おい、はつきり言えよ。だからなんだよ」

「だからね、会いたいならわたしが協力してあげるって言いたいの。わたし玲華と小さい頃からよく一緒にいたんだよ。従姉妹いとこにあたるからね」

「玲華がいまどこにいて、なにをしているのか知ってるのか？」

「うん。知ってる。でも言えないんだ」

あの時の、玲華と同じようなことを言う。

「言えない理由は？」

「それが決まりだから、かな」

まったく、分からない。ますます苛々する。

何が起きているというのだ、玲華に。

(それとも西龍院家に ?)

なんなんだよ、西龍院家って。

「言えないで協力って、なににする気だよ？」

「あなた、あんまり鋭くないのね。玲華が選ぶ男にしてはちょっと意外ね」

「うるせえ、悪かったな」

いちいち相手をしてしまう。

この好意か悪意かもつかめない女に、踊らされている感じがした。まともに反応しすぎている。

「わかった。分かり易く言ってあげる」

わざわざ前置きをして彼女は続けた。

「玲華はいま亨くんと婚約してるでしょ。だけど玲華はあなたのことはまだ好きだと思うんだ。だからね、会いたいならおびき出せばいいのよ」

綾小路の名前まで出してきた。やはり婚約の話も本当なのか。

従姉妹の彼女まで認めているのだから、これでは否定が出来ないではないか。

悔しい気持ちを隠して対話を続ける。

「おびき出す？」

「そうよ。変わりにわたしとつき合ってるってことにするの。そうしたら玲華はいてもたってもいられなくて、今いる場所から出てくると思う。学校（こうこ）にね」

なんだこの女は、と思った。

話を聞いてもつかめない。

つかめないのは、あまりに異質だからだ。考え方が。

「フリでいいの。そう、噂（うわさ）だけでいいのよ」

「それで？何の得になるんだ？おまえに」

「もちろん、わたしにも狙いはあるよ。だけどそれはまだ言えないんだ」

ふふつと含み笑いをしてそう告げる。

また、それか。

「そんなんで納得すると思うか？俺が」

「じゃあひとつ、とてもはつきりした事実を言おうか」

一度頷いて見せてから、京香は言う。

「あたしね、玲華のこと大っ嫌い！なの。だから玲華が望んでないことをしたいなあと思ってるのよ」

大嫌い（だい嫌い）と強調したときに感じた、はつきりとした強い意志。笑みの中に鋭（とが）くなった眼光。

だけど、なにか引つかかりを感じていた。

それは多分最初から。

「望んでないこと？」

またオウム返しに対応してしまっ（ま）て、少し後悔した。

鋭くない、と言われたばかりだったのに。

だけど京香はそれよりも、よく聞いてくれたという表情をする。

「玲華は神崎くんが関わることを望んでない。だから遠ざけたの。でも無理なのにな」

それからふつと目を伏せた。微笑んでいる口元はそのまま。

関わらせないように遠ざけた、という言葉が嫌なくらい耳に残った。

そういうやり方、嫌いだったはずなのに。

(嫌い、だったよな)

俺は玲華のなにを見ていたんだろう。

本当に嫌いだったのだろうか。本当にまだ、俺を好きでいてくれるんだろうか。

完全に、見えなくなった。

「で？どうする？この話を呑んでくれたら、もう少しなら詳しく話してもいいんだけど」

駆け引きをしてくる。

ギリギリの狭間で一瞬揺れた。

だけど。

「ナシだ。俺はそういうのが嫌いなんだよ」

それだけで、屋上から立ち去った。

それだけは確かだ。俺はしたくない。そういう小細工だけはしたくなかった。

だから心ももう誤魔化せない。

俺は残された休み時間を使って、秀和の教室に向かって走った。

あいつは、西龍院家に関節的にはあるが関わりがある。もしかしたら、なにか知っているのかもしれない。

本当はもっと前からそうしたかった。なりふり構わず問いただしたかった。

でも玲華が待っててと言ったから。

信じようと思ったんだ。

俺はぐちゃぐちゃな気持ちのまま、隣のクラスのドアを開けた。

それから視線を一巡させて秀和の姿を探す。

「神崎さま？」

だけど後ろから声をかけられた。

何度注意しても様呼ばわりを変えようとしなない、意外と頑固な秀和が、ちようどどこからか帰ってきたところだった。

「ヒデちよっと」

勝手に腕を掴んで少し教室の出入り口から離れた。

「どうしたんですか？珍しいですね、部室以外で話すの、なぜか嬉しそうに秀和が言う。」

いつも通りの笑顔。

それすらも苛立たせる要因になっている自分に、少し愕然がくぜんとする。さすがにまずい、と思う。

他人を軽視しすぎている。

「悪い。おまえさ、いま玲華がなにしてるか知ってるか？」

一言謝って、それでも直球に聞いた。

「玲華さま、ですか」

秀和は躊躇ためらいがちに視線を外す。分かりやすい反応。

よく考えればこいつも噂を知っていて、言っただけでこなかった一人だ。気を遣いすぎるところがあるから、さすがに言えなかつたんだろうとは思う。けどもう知っているんだ、俺は。だから秀和も全てを喋って欲しかった。

「噂なら聞いた。だからおまえが知ってること全部話してくれ。頼む」

かなり必死にまくしたてていた。みつともないとか、もう考えている余裕が無い。

少し迷ってから秀和は顔を上げた。

「ぼくが知っていることを全部話しても、神崎さまは納得なさらないと思います」

「え？」

いつもとは違う、おどおどしてない強い目を眼鏡の奥から覗かせて、きつぱりと秀和は続けた。

「ぼくも全部知っているわけではないんです。だから知りたいのであれば、もっと別のところを攻めてください」

「なに言ってるんだよ、おまえ……」

「だけど玲華さまは神崎さまが知ってしまわれること、望まれていません」

あの女と同じ。

まったく意味が分からない。

玲華の望みだと？

どうしてそれを、周りから聞かされなければならない。どうして俺は周りから聞かなければならない。出来ることなら本人から聞いてるんだ。

「知らねえよ！俺が知りたいって思うのがそんなに悪いのかよ！」

「落ち着いてください。神崎さま」

「らしからぬ低い声で、秀和が諫める。」

廊下を行き交う生徒の注目を集めてしまった。

いたたまれなくなつて、そこから離れて角を曲がる。ついてきた秀和が後ろから口を開いた。

「ぼくは神崎さまは知るべきだと思います。でもそれはぼくからじゃない。きつと神崎さまが知るにはそれ相応の覚悟が必要になつてくると思います」

「ヒゲ……」

「本当に玲華さまを思われるのでしたら……お願いします。ぼくが言うべきことじゃないとは思いますが、どうか玲華さまを助けてあげてくださいっ！」

「なにを言ってるんだ」

玲華を助ける？

なにか困っているということか。まさか危険な目に？

「すみません。ぼくが言えるのはここまでです」

本当に申し訳なさそうに秀和はそう言うと、ぺこりとお辞儀をして教室に帰って行ってしまった。

俺は髪をかきむしる。

余計に、もやもやしたものが増えた気がした。

それでも何とか抑える。

そのまま自分の教室に入り、世羅の元へ向かった。考えられるべきところへは全て当たりたかつたんだ。

「世羅」

世羅は自分の席に座って、静かに本を読んでいた。俺が近づくと顔を上げる。

「どうした？ 険しい顔して」

「悪い」

世羅の前ではいつもより強く、平常心でいなければと思ってしま
う。

なるべく感情的にならないように。

「玲華のことなにか、聞いているかと思って」

世羅なら、なにか知っていても教えてくれない可能性もあった。

いくら穏やかになったといっても、数ヶ月前にぶつけられた嫌悪感
からそう思う。

「意外だな。玲華はおまえにも言っただけだったのか」

「ただ俺の表情を読み取ったのか、世羅は独白めいた言葉を吐い
た。」

「にもってことは、世羅にも？」

「そうだ。だから私に聞くな。こちらにもすべての情報が入ってき
ているわけではないんだ」

「ここ最近見た中では一番きつい目で睨みつけてくる。」

世羅にも言っただけだったのか、玲華は。

「すべてではないなら、知っていることもあるんだよね？ それを教
えてくれ」

「中途半端に知って満足するのか？」

秀和と同じようなことを言う。

「わかんねえよ。……なにも聞いてないんだから」

「情けない顔をするな」

少し柔らかい表情を見せてきた。意外なものを見て驚く。

「いいか？ 神崎がたとえ知ったとしても、今回は私の家では太刀打
ちできない。ただおまえは玲華を信じればいい」

また、家の話。

世羅の家だつてとても大きくて金持ちだ。それなのにあっさりそんなふうにするなんて。

「少しは自信を持ってよ。おまえは玲華が選んだ男だ。私にがっかりさせるな」

なにがなんだかわからなくて、もう少し聞きたかった。だけどそこで昼休み終了のチャイムが鳴る。

仕方なく、席に戻るしかなくなった。

第一章・・・2

昔の自分……。

それはあまりにも感情むき出しで、すぐまわりに攻撃的な態度を示していた。幼いころ両親に虐待されて、連鎖を自分で止めるために常に温厚な人間になろうと思ったんだ。

努力して気をつけてきたけれど、いまの俺はそれとも違っている。くり返し、なんだ。

新しい自分が、たまたま昔の自分に似てただけで。どれだけ心を誤魔化していても、軸となる部分は変わらない。どれだけ、周りのものが変化したとしても、それでは意味がない。

怒鳴らないように、キレないようにしたって、根っこは維持されている。揺るがなくて。

普通だろ、別に！

そう玲華に言った自分。

だけど普通が何かなんて、わかっていなかった。

普通なんてわかってないんだから、どこかの基準を真似する必要なんてない。

そう言ったのも俺だ。兄貴に。

しかしそれは玲華が最初に言った言葉だった。

俺は稀まれに、他人の台詞で影響を受けたものをそのまま口にしていくときがある。それでは説得力が無い。他人の心は揺れない。

自分の言葉で言わないと駄目なのだ。

(こういうとき、どう想うのが普通かなんて)

普通をちゃんと理解できなければ、嫌いな自分のみが残る気がする。自分の常識を貫けば、周りを　玲華を傷つけてしまう恐れがどうしても払拭できない。

(普通)

(……の、愛し方……なんて……)

自分と普通がマッチしていれば、こんなに苦しくないんだろうか。世間一般が言う優しさ。それは道徳的なものであって、自己犠牲とは違うはずだ。

玲華が俺を関わらせないように遠ざけたことが、京香の言うとおり本当であるのなら、それは優しさじゃない。しかしそう言い切るのにも躊躇われる何かがあつて。

(だって玲華は優しいから)
優しくして強い、と思っていたから。

「珍しいですね。あんな神崎さま」
「櫻井さま。いまはそつとしておいてあげてください」

微かに聞こえる会話は、でも俺の頭にまでは届いてこなかった。
(櫻井？いつ来たんだ?)

部室の、いつもの座り心地の良い真つ赤なソファに寝そべりながら、俺はぼんやりと考え事をしていた。

秀和に用事があつて訪問してきた同じクラスの女生徒を、遅ればせながら認識する。

「そうか、君は初めてみるんだな。あれが奴の本来の姿だ」
世羅がなにか言つてる。

これはもしかしなくても俺の話しか。
あんなつてどんな……。あれつてなに……………。

おもむろに立ち上がったら、三人の視線を一拳に集めた。おかしいな……。そんなに前触れなかったんだろうか。

「帰る」

一言断つてその場を後にした。
体に力があまり入らない。立ち上がるときにクラクラした。でも倒れている場合ではなかった。

俺は迷いに迷つて、玲華の家に行くことに決めたのだ。
様子を知りたい。

たとえ本人がいなくても、理事長や玲華の母親、小百合さゆりさんに聞けば分かることだろう。

迷った原因は、やはり玲華の言い残した言葉が俺を止めていた。待っていてと言われて行くということは、裏を返せば玲華を信用していないということを態度で示しているような気がして。

それでもはつきりさせたい。京香の話聞いたら止められなかった。これでも二日葛藤したのだけれど。

綾小路にはまだ話が聞けていない。

教室まで行っても不在ばかりだ。今日も放課後、すぐにやつの教室まで向かったのにすでに帰ったと聞かされた。綾小路は弓道部に在籍しているが、部活は今月に入ってから全滅だという。

こうなると、玲華絡みの用事でいないと考えるのが妥当だろう。

しかしそれと同時に、避けられてるのかもしれない、とも思うようになっていた。

来ているときでも会えないというのがまず怪しいし、昼休みに見かけたことがあったのだけれど、顔を見るなり全力疾走で回れ右をされたのだ。

これが避けられていると言わずして何と言う？

なぜあいつが避けるのか分からない。しかし避けるということは疚しいことがあるからだ。

(疚しいこと?)

綾小路にとつて、もし本当に玲華が婚約を望んでいるのなら、避ける必要はない。それどころか優越感たっぷり顔で自慢してくるに違いない。

あいつなら、間違いなく。

だからといって、なにか裏があるんだとしても、俺をかわすくらい造作ないはずなのに。

「あ、大丈夫？神崎くん」

やっぱりおかしいのかもしれない。

拓真の幻聴が聞こえる。いるはずのない廊下に。

……っというか何度見直しても、そこには拓真本人がいた。

「なにやってんだ？部活は」

拓真は吹奏楽部だ。数少ない文化部のひとつ。

「神崎くん、これからどこか遊びに行かない？映画とか……カラオケでもいいし、ご飯食べに行ってもいいしさ」

俺の質問をぶっ飛ばして、なにやらぶっ飛んだ流れで、そんなことを言ってきた。

やはり本物じゃないかもしれない。

一応寄り道は校則違反で普段のこいつを見ていたら、そういうの破りそうにないから。

「行かない」

素通りしそうな俺を拓真は止めた。

「なんか元気がないから心配なんだよ」

しつこく食い下がってくる。

「心配ってなに？同情の別名？」

またなに言ってるんだ？俺は。

「神崎くん！」

どこか叱りの含まれた声を聞いた。

こいつも俺が優しいと思った人だ。この優しさは自己犠牲？

わからない。解らないけど、拓真の誠実さがいま俺には苦痛でしかない。

「なあ、おまえさ。知ってたんだよな、噂。なんで俺に隠した？」

ハツとなって拓真は息を呑んだ。

他の表情は見落としていたのに、それだけは鮮明に残って不思議な感じがした。

その隙をついて歩き出す。その返しも待たずに。

「噂だろ、ただの。神崎くんは信じてるの？」

後ろから声を投げかけられたけれど、追ってまではこなかった。

その答えを俺は持っていない。

一度は信じる方に傾いた。美山から京香に立て続けに襲撃にいられた感じがあつて……。

（立て続け？）

あの二人は別々ではないのか？なぜ俺はいま、一纏めに考えようとした？

漠然としていて解らないことだらけだけど、どこか遠くで事が動いているのは確かだと思えた。

「悠汰くん」

昇降口を出て、帰る道のり。

校門のところでもた京香が俺の前に現れた。考えてた直後で妙なタイミングだと思う。

あれから、時間が合えば付き纏われるようになっていた。休み時間になると教室までやってくるし、俺が綾小路を探しに二年の階に行ったときも会った。

まるで見張られているみたいなきげに陥る。

おそらくそれは、噂になるようにだろう。俺が避けていたとしても、たとえ一方的でも、学校内では面白おかしく語ってくれる人がごまんといる。

「……………」

些細な苛立ちを感じて、わざと無視して素通りしようとした。

だけど構わず京香は俺の隣に並んだ。

「つれないなあ。昨日ね、玲華に会ってきたんだよ」

なにを企んでいるのか、わざとそういう話を持ち出してくる。

「聞きたくない？玲華の様子」

「別にどうでもいい」

「ああ、やっぱりそれが本音かあ。伝えておいたよ。あなたが愛想をつかしてるって。そしたらね、玲華ももう、あなたのことはどうでもいいですって。ヒドイよねえ。なんか亨くんにか、いまは目が向いてないみたい」

ベラベラと聞いてもないのによく喋る女だ。紛れもなく誰も喜ばないような内容を。

俺の中ではすでに、これからのことで頭がいっぱいだったただけだ。あの家に行けば全てあきらかになる。

それに京香から聞いてはいけない予感がした。

「わたしね、玲華とよく比べられてたんだ。親にね。歳が近いせいかな」。あの子には負けるなですって。あと、正式な妻から産まれた子の子でしよう？うちは周りにいくら騒がれたって所詮は妾の子。僻みとかも手伝ってさー」

この話で京香に感じていた引つ掛かりが、すつとほどけていった。同じようなものを感じていたんだ。

比べられた者という共通点。

俺も比べられていたから。兄貴と。

「苦労したんだな」

本音がするつと出てきた。

「うん。でもあの家では珍しくないことなんだよ。なにせそういう話ばかりだからさ」

京香はさっぱりと言い切ったが、どこか寂しそうに見えた。きつと俺のそれより根は深い。たった一組だけの兄弟の話ではないのだ。俺は何となくわかってしまった。

この間見た、玲華が大嫌いと言った彼女の意思。あれが本音でもあり、そして……。

(憧れ)

そう、憧れがなければ嫉妬はしない。

「だからさ、手伝ってよ。悠汰くん」

「どうやったら繋がるんだ？前の話と」

「わたしは気にしてないんだけど、親が気にしてるんだってば。いまの玲華を」

「で、その内容をいまは言えないって？」

「うん、そう」

「おまえな……」

俺は呆れ返るしかなかった。

京香は妙な感覚に陥らせる人柄だと思う。

初めは拒絶から入っているのに、気づいたら会話が続けていたの

だから。雰囲気話しやすく持っていつてくれているのかもしれない。

「だってあたし本当は教えたいのよねー。秘密事って苦手だよ」

「じゃあ教えるよ」

「ダメ、駄目よ。悠汰くんが協力するって言うてから！そう言われてるの！」

「誰に？」

「それは言えないの！」

「あんな……」

堂々巡りをしたいわけではないのに、結局こうなるのか。

力が抜けるのを感じた。

「……ったく、しょうがねえな」

「えっ？受けてくれる？」

俺のぼやきに京香が声の調子を変えて、一度跳ねた。現金なやつだ。

「しないって。俺は嘘が苦手なんだ」

「えー。わたしと似たようなもんじゃん」

嘘と秘密は似てるのか？

そうだとしたら、なぜ出口がこうも違うのだろうか。不思議でない。

「じゃあ本当につき合おうよ」

「だから……どうやってたらそういう極論に……」

「わたし好きだもん。最初から素直に言えば良かったね。本当はつき合いたかっただけなの、わたし」

人懐っこい笑顔を向けてくる彼女に僅かな違和感を感じた。

……感じてしまった。

悪気はまったくなさそうではあるが。

「嘘だろ」

「本気だよ。わたし今まで玲華の物を羨せうしんだことがないんだ。そのわたしが言うんだよ。玲華に遠慮できないくらい好きって」

彼女は嘘を重ねてくる。

本気なのは真実かもしれない。それくらいの気迫があるから。でもそれだけだ。

「俺はモノじゃねえ」

玲華付随の俺に価値を求めているんだ。俺じゃない。

それが分かってしまうのだ。

「失礼な言い方になったのは謝る。ごめん。でもわたしも必死なのになが、そこまで……」

訊きかけて、無駄だと悟る。言えない内容に繋がっているだろう。それにそろそろ、この話には飽きてきていた。

「じゃあキスして。それでもう、つきまとうのやめるから」

また笑みを浮かべて、京香はとんでもないことを言い出した。

そこまで言われると真意がまったく見えなくなる。迷宮に入り込んだみたいだ。

「……………」

探るように見つめる。俺より背の低い彼女を。

まったく怯まない、どこか挑発的な笑顔。上目遣いで見上げてくるその眼には、少なくとも俺には奥底の揺らぎが見えなかった。

本気か。

本気だけが真実。

「そういうのやめろ」

「意外と堅いんだね。そういうギャップも素敵だよ。でも女性としてはガツカリね」

「っーか、俺が楽しくないだけだ」

「なんでよ。玲華とはしてるんですよ」

「おまえは玲華じゃない。当たり前だろ。当たり前すぎて呆れる」

ふと、京香の歩みが遅くなって下がったのに気づいた。

それに合わせて顔を向ける。

「そう、あなたは比べないのよね。……悔しい。どうして玲華にはいつもそういう人ばかり集まるの？悔しいわ」

俯きながら、少し震えていた。涙ぐんでいたのかもしれない。そのまま踵を返して元来た道を歩いて行ったから、真相は判然しなかった。

しばらくその背中を見つめて、俺も帰る。
すぐにどうでもよくなっている自分に、気づいていた。

* * *

少し前までの自分からは想像ができない。あのころはすぐに立ち止まっていたから。周りに醜く^{すか}縋^{つか}ってばかりで。といつても、やるべきことがわからなかったというのも事実ではあるのだが。

でもいまはまだ打つべき手がある。

それだけで感謝したかった。

動いている分には、悩むために使う脳が減少するはずだ。

玲華の家には毎回眞鍋さんの運転手つき高級車で来ていた。一人で来るのは初めてのことだ。

そのまま真^まつ直^なぐ来て、やや緊張しながらチャイムを鳴らす。すでに空が朱^{あか}く染ま^そまっている。まだ気温は高い。

何気に空を一瞥して数十秒後。

いつものように大きくて立派な扉を開けたのは、執事の葛城^{かつらぎ}さんだった。

「玲華お嬢様はおりません、神崎様」

そして真^まつ先に告げられたのがこの言葉だった。俺が何も言わないうちに。

「どこにいるんですか？」

「そのことについて、ですが。どうしてもお知りになりたいのであれば、旦那様がお話しを伺うと申しております」

姿勢を崩さないいつもの態度のなかに、どこか厳しさが介在していた。

なぜ俺がここに来たのか、聞くまでもないようだった。知りたいなら覚悟しろ、そう言った秀和の言葉が浮かぶ。それでも。

「知りたいです。どうしても」
なにがなんだかわからない、いまの状況よりはマシなはずだ。

葛城さんはようやくその表情に柔らかさを含ませた。どこか悲しげな笑みで。

「ではこちらへ」
短く告げ案内をしてくれる。

お馴染みの濃いグレーのソファ。最近知ったことだけど、部室のソファと同じメーカーらしい。

どつりで、と納得してしまう座り心地の良さだ。

中に通してもらおうと、すでに理事長はそこに座っていた。

あのパーティーの日以来、初めてちゃんと対面する。学園では見かけることがほとんどない。

「お久しぶりです」

まだ緊張は続いていた。

理事長が沈痛な面持ちでいたからだ。

「やあ、やっぱり来てしまったんだね」

その表情は硬いままで、それでもなんとか笑みを作っている感じがした。

「わたくしも一緒にさせてくださいな」

葛城さんが伝えたようだ。小百合さんがダイニングに入ってきた。

小百合さんは愛猫のシルバーをその身に収めている。これもいつもの光景だった。

「そうだね。それがいい」

理事長は隅により、小百合さんが座るスペースを空けた。そんなことをしなくても十分に余裕がある広さなのだが、そういう気遣いが癖になっているのだろう。

俺はその前に促されて腰を下ろした。

これからだ。

張り詰めた空気のなかで、それでも俺の心は逸る。^は逸る。

「君がここに来たということは、玲華のことを聞きにきたんだね」
組んだ指を膝に置き、やや前屈みで理事長が口を開く。

「そうです。玲……彼女は、どうして学校を休んでるんですか？
なんでここにいないんですか？なにを……」

「神崎君」

抑えが利かなくなつて、立て続けに質問を浴びせようとする俺に、
理事長が制止をかけてきた。動かない姿勢のまま。

「そのことを答える前に確認しておきたいことがあるんだ」
低くて真剣な声。

以前会つた時とはまったく違う。

「なんですか？」

「どれだけ君は西龍院家のことを知っている？」

また出た。そのキーワード。

西龍院家だ。

まさか玲華の父親自身から出るとはさすがに思わなかつたけれど。

「ここではない、玲華の祖父。つまり私の父のことだが」

「俺は……。その、たくさん愛人がいてその子供も認知しているか
ら相続争いが元々あつて。それで……」

それで。

(確か理事長は自分から実家を離れたつて)

理事長は自分から離れたと言つていたはずだ。

確か、そう、相続争いに巻き込まれないように……。

(相続?)

「まさにそれだよ。本家ではいま、その争いの真っ只中だ」

「え？」

本家？

玲華は家のことで色々あつた、とは言っていたけど本家って……。
理事長が離れたことで、もう関わりがないんだと勝手に思い込ん

でいた。

「何も知らないみたいだな」

言葉に詰まった俺を見て、理事長が大きなため息を吐いた。

隣では小百合さんが何も言わずに見守っている。いつもの優しい笑みで、だけど持ち前の明るい声は全く発せず。

シルバーはその膝でじっとしていた。あまりアクティブではないあの猫は、いまも眠っているのだろう。

そのとき葛城さんが紅茶を出してきてくれた。ここに来ると紅茶の確率が高い。

「もしかして、玲華もそのなかに？」

俺は、玲華の言葉を思い出していた。

必ず戻ってくるから、と。

(戻るって本家からってことだったのか?)

だったら、綾小路との噂はいつたい……。

「神崎君。ここからはそう軽々しく話せることではないんだ。だから君が本家に……私の父にどこまでたて突く覚悟があるのか、私は見極めたい。実際にやるかどうかは置いておくとしてもだ」

「え？」

覚悟の二文字が出て、やっと秀和の言っていた言葉に繋がるような気がした。

「君が玲華に対してどのように想っているかだ。君たちがつき合い出したことは聞いたよ。玲華がいなくなってから、小百合からね」

「あつ……」

そういえばまだ報告というか、挨拶というか……そういうのをちゃんとしてなかった。

俺は恐縮しそうになる。

だけどもいまはそれどころではなかった。理事長もそこを求めているわけではないのだ。いまは。

「俺は、家のことはよく分かりません。だけど、それでもあいつ……彼女がもしいま困っているなら助けたいって思います。何回も彼

女は助けしてくれたから。今度は俺の番だと思うから」

自分で言いながら、どこか当て嵌らない感じがしていた。

嘘ではない。本心からそう思う。

でも僅かに感じる不一致。的確ではない、何か。

「っていうか、護るって約束して。……じゃなくて、えっとそれも嘘ではなくて。だからつまり……ああ、そうか。好きだから。会いに行きたい。逢いたい。その為なら何でもする」

ふと思いついた言葉は、歯車がピタリと合い俺の胸を震わせた。単純な話だった。

噂が気になるとか、玲華が心配とかそれも確かにあるけれど、それを抜きにしても逢いたいんだ。

「そう。　　どうか？彼は」

一言頷いて、理事長は小百合さんに顔を向けていた。

「充分だと思うわ。だって若いもの。そういうパワーは信じていいと思うの」

小百合さんはいつもどおり、ゆったりとした口調でそう言うてくれた。

ちゃんと思いを伝えられない俺を嗤ったりせずに、理事長も頷く。仕方ない、というふうではあつたけれど。

「わかった。教えよう。だけど聞いたからって変に気負うことはないよ。あくまで君自身の判断をして欲しい」

そう前置きをして、理事長は語りだした。

「事の始まりは、君が初めてこの家に来た日なんだ。そう、奇しくも浅霧さん宅のパーティが行なわれた日だ」

「え？」

そんなに前から？

確かにそんな日があった。あのとき、俺は玲華について出席したんだ。そのためにこの家に来た。

「同じ日にたまたま父から玲華宛に呼び出し状がきてね。父はそういうのに厳しくて、背くことを許さないんだ。しかし私は強引にあ

の一族から離れている。今更公式な呼び出し方に警戒したんだよ。それで玲華抜きで会いに行った。しかしそのことですごく怒らせてしまった。今思えば失敗だったよ、ただひとつの腹案だったものを決定事項にさせてしまったんだ」

そこで理事長は一口紅茶を飲んだ。それだけの短い時間も惜しく感じてしまう。

「父はなにを思ったのか、後継者に玲華を選んだんだ。もちろん彼女は最初は断り続けていた。しかし最終的には決意をしたんだ、候補の一人になることに」

「候補？」

「父が親戚や企業の関係者を招集して開かれた会で宣言したらしい。『西龍院玲華に全権を継がせ、全財産を遺贈する』とね。私は全ての権利を放擲ほうてきしている。だからその会に呼ばれることさえ許されないう立場だ。その孫を選んだということ、周囲の反感は凄まじいものだろうと予想できるよ。資産だけでも正確には不明だが何百兆とあるだろう。それを狙うものも何百人もいるんだよ」

「……………」

その内容は俺の予測の範疇を超えていた。あらゆる数が大きすぎて、まったく実感がわかない。

俯きがちだった俺の顔を、覗き込むように身を乗り出して理事長は続けた。

「問題なのはここからだよ、神崎君。先ほど言ったよね、候補だとそう、まだ決定してないんだ。父はそれから皆に条件を出した。納得いかない者は一度玲華が譲り受けた全権から好きなだけ奪い取れとね。それとこのことは口外しないように命令を出した。口外したものにはいくら署名があっても遺贈させないと」

「奪つ……………」

背筋が凍った。

それは決して生易しいことじゃない。奪うとは暴力的な言葉だ。ならば玲華は危険な立場ということになる。

「無論、現金つかみ取りみたいなことはさすがにしないよ」

俺の考えを読んだのか、理事長はそう言っただ笑った。

「誓約書みたいなので一筆書かせるんだそうだ。このポストは誰々に引き渡しますとか、財産の一部を誰々に譲り渡しますっていう内容だね。それでも玲華が傷つけられないという保証はない。筆跡と印鑑証明の印さえあればいいんだ。どういう手をつかってもそう、たとえ意志を薄弱にさせてでも作り上げる連中は出てくるだろう」

よくよく聞いても、結局恐ろしいことに変わりはない。

そんななかに玲華がたった一人で置き去りになってるなんて。

「どうして彼女はそんなこと引き受けたんですか？」

「………なにか、想いがあつたことだっただっていうことは確かだよ。玲華はそんなもの望んでいなかったからね。しかし真相は……いや、玲華にしかわからないかな」

切なそうに理事長の目が伏せられた。

「父は建前上ではあるが玲華が選択する猶予期間を渡した。それまでに父を説得できなかった、というのも大きく影響しているだろう。玲華はもう無理だという判断をして、条件を出す代わりに引き受けたと本人から聞いてるよ」

「条件？」

「そう、開始時間の延長だ。最初は加奈^{かな}という子供の美雪^{みゆき}ちゃんの結婚式の日^ひにそのことを発表する予定だったそうだ。それが九月までに延ばされた。……元を鑑みれば、私が玲華を残してパーティーの日に行ってしまったことで、その期間が遥かに短くなってしまったということだ。そこは後悔しても足りない」

結婚式。

あの日は神崎家にとっても大きな事件があつた日だ。

玲華はそんなときに、自分のことより他人を選んだ。世羅と俺を。そんな事実が裏に隠されていたなんてまったく知らなかった。その後何れも彼女は言わなかったから。

(なんで!?)

そのことには憤りを覚えた。なぜ、言ってくれなかったのか。なぜそんな選択をしたのか。

(俺はまた、玲華に迷惑をかけていた)

知らないうちに。

その後もずっと。ただ彼女の優しさに甘えて。

「俺のせいだ。俺が情けないから、放っておけなかったんだ!いつもそつだ!あいつは!」

拳が震える。

うちのことが解決するまで一緒にいてくれたんだ。

まさかそんな前から続いていた結果が現在いまだなんて。一人のうとうと甘えていただけだったんだ、俺は。

「そこで神崎くんが罪悪感を感じることもなんてないのよ」

小百合さんが静かに口を開いた。

「あの子がそうしたくてしたの。それでいま、あの子に大変なことが起こっているとしたりって、それはあの子の問題なのよ」

まったく変わらない小百合さんの口調と優しい笑み。

それはまるで聖母のようだった。子供を産むという行為をしたものだけが許される強さ。

「今更何を言ったって始まらないわ。それよりこれから何が出来るかを考えるのが先決よ。そうは思わない?あなたも神崎くんも」

そして女性特有の強さと正しさ。

間違いなく玲華が引き継いでいる部分だと思った。

「ああ。そうだね。まだ現在も玲華は頑張っている途中だからね」
それに肯定する理事長。

本当に理想の夫婦だと思う。親の愛を目の当たりにして、焦がれる気持ち呼び戻される。

「神崎君」

そして理事長は俺に向き直った。

「申し訳ないけれど、私に分かることまではここまでなんだ。玲華

が私に報告してくれたことまで、なんだよ。玲華が本格的に本家に入り込んでからは全く状況がつかめていない。私にも許されてないんだ」

「え？」

「私でも……いや、この件に関する者以外は本家に入ることすら赦ゆるされてない。なんとか入り込めないかと、ずっと手をまわしてはいるんだが、それでも一度も入れていないんだ。この意味がわかるかい？」

ここへきて、最も沈痛な表情を理事長は見せた。

親バカと周りにまで評価されている理事長だ。きつと俺なんかよ
りずつと辛い立場にいる。

「私は公的にあの家と断裂したからね、余計に難しいよ。君にたて
たく覚悟があるかと聞いたけれど、出来れば余計なことはして欲し
くない。君が勝手に動くことで玲華の邪魔になつてしまふ可能性が
ある」

「……………」

だったら、諦めるというのだろうか。

ここまで来て、冗談じゃない。

「邪魔にならないようにします。それで、その本家つてどこにある
んですか？」

俺が尋ねると、理事長はぐつと見据えてきた。射るような目に、
それでも複雑な色が含まれている。

負けるわけにはいかない、と俺も見つめ返す。

しばらく視線のみの交信が続いた。

やがて理事長は大きく息を吐き出した。ため息というより、クツ
ションを間に挟んだような仕草。

「君が本気なのはわかった。それと今の君にこれ以上を望んではい
けないこともね」

「どういう意味、ですか？」

なにかを諦められた。

それだけが敏感に察知できたことだった。幻滅されることに恐れ続けていた俺は手の平を握り締める。

「それは自分で考えてくれ。解るまで、合格点はあげられないな」
自分で考えて？

ずっとひっきりなしに考えているのに。

俺が鋭くないからだろうか。でもそんなの初めから個人差があるんじゃないのか。

「理事長。だったらひとつだけ教えてください。玲華はどうして学校にこないんですか？……入り込んだっていうことは、外出もしてないんですか？」

一つだけと言いながら、気づいたら二つ質問していた。

「私は反対したけど、それは彼女自身の作戦だよ。外にいて狙われる手段と範囲が拡大することを阻止しようとしているんだ。今月はもうずっと本家から学校に行ってたんだけどね、いよいよ本格化したっていうことかもしれない」

「京……一条が言った、関わらないように遠ざけたって、本当だったんだ」

力なく俺は呟く。

それに反応したように、理事長が顔を上げた。

「一条？京香ちゃんだね。彼女とも面識があるのかい？」

「あ、いえ……まあ……」

どこまで話して良いか躊躇われて、俺は言葉を濁した。

「彼女が君に接触したのはこの件で？」

さらに理事長は突っ込んで聞いてくる。それは素直に肯定した。

「そうか。ならば君もすでに目をつけられていることになるね。気をつけて、としか言えないけれども……」

「ちよつと待つてください。目をつけるって……俺に、なにか……」

利用しようとしたのはわかっていた。だけどその真意は、つまり彼女も玲華の署名が欲しくて？

そんな裏があったとは。

そうか。だから“言えない”なんだ。

口外したら財産がもらえないから。

「本家のこと。もっと話すべきかもしれないな。君には。すでに関わってしまったているのなら」

「他にもなにかあるんですか？」

「……いや、ただあそこの人たちはほぼ欲深い連中だということだよ。その為には何でもする。本当に気をつけてくれ。君一人の人間なんか抹消できてしまう人たちばかりだから」

「抹消って……」

「いろんな意味で、だよ。ただ死に至らしめるということだけじゃない。死よりも苦しめるやり方もこの世にはあるんだ。その実行力も出来てしまう心も彼らは持ち合わせている」

そう言い切った理事長の顔はここへきて、一番険しくなった。

だから……だから理事長はそれらを捨てたのか。

関わって家族がそんな目に遭わないように。遭う可能性を少しでも減らしたくて……。

「なら玲華も危ない」

ようやく俺は玲華の危機に直面できた気がした。

それでもまだほんの序章に過ぎなくて。

「そうだよ。だから玲華は綿密な計算のうえで動いているはずだ。君というイレギュラーが本家に手を出せば、玲華にとってもより危うい状況になる」

だから生半可な気持ちで本家に近づこうとは思わないでくれ、と理事長は念を押ししてきた。

そして俺は返す言葉を完璧に失うこととなった。

* * *

知る前より頭が混乱している気がする。

玲華の家に行けばすっきりすると思っていたのに。

結局俺は雰囲気にもまれて綾小路のことも訊けなかった。俺に報告に来た次の日から本家に閉じこもってるって言っていたから、理事長も詳細を知らないのかもしれない。

そして次の日。土曜日の昼だ。

俺はそれでも本家に来てしまっていた。

もちろんあれだけ言われたのだから入る気は起きないけれど、少しでもどんなところか知りたかったのだ。

場所は兄貴が教えてくれた。なぜか、兄貴は知っていた。

「巷では有名だ。やはり大富豪だからな。噂にはなるさ」

そんなことを自分一人で調べられない俺の能力では、確かに太刀打ちなんてできるはずがないんだろう。

だから理事長は諦めたのかもしれない。

その前に久保田くぼたさんに連絡を試してみた。

久保田さんは、久保田修次しゅうじといって数ヶ月前に知り合った探偵をしている人だ。二十八歳で凄く偉そうな態度をしていて、何度もムカついているうちに、助けくれたりもして頼もしく思うようになった。だから今回もなにか良い案を出してくれるんじゃないかと期待したのだ。

けれど、出てくれた助手の祥子しょうじさんにいないと言われた。なにか大きな依頼が来て不在がちだという。今回はちゃんと祥子さんに言ってるから大丈夫だろうと思えた。

（つーかもう十五分……。どこまで続くんだ？）

木々が鬱蒼と生い茂っていく中に、その敷地はあった。市街地からはそこまで離れてはいないが、それでも徐々に増える人工的に植えられたような木で本邸が隠されていく。

俺は塀伝いに歩いていった。

間違はなく世羅の家より大きい。一周するのだけでも一苦労だった。

しかもレンガ塀が高すぎてよく中が見えない。上部分三分の一くらいがなんとか見えているくらいだ。

洋館、と呼ぶのだろうか。窓の数だけでも半端ないほどある。正面入り口にあった門もゴールドで光っていた。

（これじゃあ確かに受け入れ体制でいてくれないと、さすがに無理だな）

いや、なんとか上からなら……。

ふと思いついたけれど、どうせ世羅の家のようにセンサーなどあったりするのだ。無駄な足掻きだ。

「なにかご用ですか？」

ほうと考え事をしながら歩いていたら、後方から声をかけられた。ギクリとして振り向く。

「あ、スミマセン。別に用ってわけじゃ……。」

なにを怖じ気ついてるんだ？俺は。用ならあるじゃないか。

声の主は二十代前半くらいの若い男だった。

切れ長の細い目で、でも冷たいとは思わせるものではなくて、逆に優しいような雰囲気を出していた。

少しホツとしてしまった。悪いことなんかしてないのに。

「ああ、見学かな？たまにいるんだ。物珍しそうに観察していく人が」

まったく嫌な顔を見せずに彼は近づいてきた。

まずい。関わってはいけない人かもしれないのに。

「あ……ここの家の人ですか？」

逃げるタイミングを計りながら訊いた。

違うと言ってくれと祈る。単なるご近所さんだと……。近所つてどれくらい先が近所だろうか。まったくお隣の家という存在が見えないけれど。

「まあね。さっきも見かけた人が、まだいるなと思ってね」

「あ……。」

見られていたんだ。この家の中の人に。

どう対応していいか、一瞬にして闇の中に入る。不審者だと思われていそうで焦った。

とりあえず謝ろう、と直感的に思う。

「あの、すみません」

「ああ。もしかして玲華のお友達？」

さらりと続けられた言葉に俺は目を瞠みはった。

まさに的中している。

だけどその反応こそが肯定を表してしまっていた。

「大丈夫だよ。誰にも言わないから」

知っているのか否か、彼はそう言って変わらない優しい笑みのままだった。

第一章・・・3

彼は笹宮比紹と名乗った。

二十歳で大学に通っているという。

比紹は恐くない人だ。

俺が狼狽うづたえてもちよつと怒鳴つても変わらないでいる。つい呼び捨てにしてしまつても、タメ口を利いても細い目をさらに細めてただ笑つてるだけだつた。

そういうところは久保田さんより大人に感じる。

彼を見ていると、理事長の言うとおり、本当に中が凄惨な状況なのか疑いそうになつてくるから不思議だ。

逃げようとしていた俺が、なぜいまだに彼について塀の周りを歩いているかというと、中のことを教えてあげる、と言われたからだ。だから俺が問い詰める前にあつさり語つてくれた。遺産相続のことも全て。

「ぼくはそういうのに興味はないからね。でも誰が結果的に財産を手に入れるか、それを見届けたいと思つて残つてるんだ」

比紹は本来ここに住んでいる身内とは違つらしい。

今回の件で押し寄せた分家の一人だよ、と教えてくれたときも彼は笑つていた。

少なくとも理事長が言つた恐ろしい連中には該当しないんじゃないか、と思えてくる。口外しても問題がないから、彼だけが例外なのかもしれない。

「源蔵様に呼ばれて押し寄せてきた親戚筋のうちの一人なんだ。あの会は凄かつたな。親戚全てが集まるつてそうないからね。しかも西龍院グループの重鎮とか、源蔵様と関係を持ったといわれているだけの人もいて、百人は超えてたよ。いまは親戚だけだけどその三割くらいがこの家のなかに残つてるかな」

すごい……、少なくとも三十人寝泊りできてしまう家なんだ。

そう言ったら、使用人がそれぞれついているからその三倍くらいにはなるよ、とさらりと返されてしまった。

ますます呆気にとられる。

「なるべくならきみに協力したいな」

「なんで？」

「きみが唯一玲華を救える人だと思っただよ」

「無理だろ。中に入れないんじゃない……」

「それなんだよね。外部に洩らすなという規則はあったけれど、部外者を入れるなどは言われてないんだ。ぼくが協力すれば何とかなるかもしれない」

「え？じゃあ……。あ、でも理事長……玲華の父親でもなかなか入れないって」

手をまわしているのに、一度も入れずにいると言っていたのではなかったか。

「あの人は余計に、だよ。自ら離れた人だから、周りの人も今更関わるなって言いたいんだろうね。協力してくれる人がいないんじゃないかな」

「でも玲華の父親だろ？」

「ここでは関係ないんだよ。親権者とか、そういう拘りこたわがなくなっているんだ。いまは玲華には源蔵様の後ろ盾があるけどね」

「ふうん」

やはり俺にはよく分からない世界だ。

まったくピンとこない。

「親子関係が一般家庭より希薄なのは確かだよ」

静かに、穏やかに彼は言う。自分もその中の一人だと先ほどは明かしてくれたのに、どこか他人事のように聞こえた。

「玲華は……どうしてます？」

「発表の前は源蔵様についていろいろまわったみたいだね。いまはこの中に引きこもってる。署名を希望する人たちが長蛇の列をつくっていてね、ひとりひとりを相手にしてるよ」

「とりあえず玲華はまだ無事なんですね」

人伝でも得られる情報はありがたい。

「無事と言えるかな」

だけど比紹はこんなことをさらりと返してきた。

「確かに身体は無事だよ。だけど周りの人を拒絶し続けている彼女は、傍^{はた}からみても壮絶で恐ろしくもある。まるでばっさばっさといていつてるみたいだ」

「恐ろしい……」

「きみは彼女にそういうのを感じたことはない？つまり絶対的な存在で下にいる者を見下ろすようなことだけ」

「見下ろすなんて、そんなことはあいつはしない……けど……」

だけど王者の風格なら感じたことはあった。

クラスの皆を一言で黙らせた、そういう圧倒される空気。そういうのは確かにある。

途中で黙った俺に、また比紹は大人びた笑みをみせた。

優しく見抜かれる。

「玲華はそういうところ源蔵様にすごく似ているよ。ぼくは源蔵様は狂ってしまったているんじゃないかと感じたことが何度もある。今回の遺言にしてもそうだ。そしてその域に彼女が到達してしまわな
いか、すごく心配しているよ」

「狂っ……」

ドキリとするような内容だった。

思い当たる動機ということではなくて、会話そのものが、どこか怖くなってしまふものだったのだ。

「でも彼女はもう狂っているのかもれないな。そうでなければとてもあんなことできない」

「あんなこと？」

「まるで、源蔵様の強すぎる力を得て、その力を使いたいみたいに見える。最強の武器を手に入れた猛者のようにね。それくらい
の非情さがあるよ。はじめから署名をする気はないんだろっな」

俺は思わず建物を見上げた。

「ただで見えるのは扉だけだった。それがまるで玲華の心のように思えてくる。」

玲華はいま、何を考えているのだろうか。

俺には見つけられない。

「だからきみに協力したいんだ」

また彼は反復した。

「いま彼女を助けられるのはこの家の人間じゃない。ここまで来たきみにぼくは賭けたくなつたね」

誠実な目をしていた。どこか切なげに。

まるで染み渡るように俺も泣きそうになった。

理由はきつとひとつじゃないけれど。

「俺が中に入っても、出来ることなんてないかもしれないのに？」

「そもそも玲華にとって俺ってなんなのか、それがすでにわからない。いい。」

「きみで駄目なら彼女は止まらない。そう思うよ」

「綾小路じゃなくて？」

「そうだ。綾小路とのこと、彼なら知っている。そのことを聞かないと。」

「彼は作戦のうちかなとぼくは思ってるよ。もしかしたら彼も利用されているのかもしれない」

「あいつが？」

かなり意外だった。

綾小路がどうこうということではない。あいつはきつと玲華が頼めばなんでも引き受けそうところが前々からあったから。

そうではなくて、玲華が利用しているという点だ。

「でもぼくにもさすがに解らなくなってきたよ。彼女が心変わりをしているかどうかはね。やっぱり亨くんなら家柄に問題がないし、源蔵様の後を継ぐなら相手はそれなりの人をつて考えてるのかもしれない。それだけは本人に聞かないと……ただ彼では彼女を止

められない。彼は結局イエスマンになってしまっから」

心変わり、という単語が嫌に重く押し掛かってきた。

人の心は移り変わる。そういうのも確かにあるのだけれど。

(まさか、玲華が……?)

とても信じられない。

だけど俺の鼓動が速くなっているのは確かだった。

「あ。一周した」

ようやく最初に見たゴールドの門が見え出してきたのは、このときだった。

誤魔化すように腕時計を見ながら話を変える。

これは時間を示すという役割以外のことを以前はしていた。その部分はすでに久保田さんの手によって取り除かれている。

「時間を計ってたの？」

「まあ、なんとなくだけど……。三十五分もかかるんだ。やっぱりでけー家」

「……おもしろい人だね、きみは」

どこか苦笑混じりに比紹が呟いた。ほっといてくれ。

* * *

比紹は連絡先を覚えてくれて、あのまま別れた。何かあれば連絡していいよ、と言っていた。

ようやくあのとんでもない家への足がかりが出来たような気がする。

比紹の出現は心強くもあつたけど、その話の内容にまた思考がもつていかれていた。

何の計画かは教えてくれなかったけど、綾小路との婚約を否定しなかった。

(家柄……)

俺には遠い昔の話だと思っていた。一緒にいて驚かされることも

稀にあるけれど、価値観の相違はそんなになかった。

耐えていたのだろうか、彼女は。

「おまえ本当にどうしようもない奴だな、神崎」

相変わらず部屋のソファでごろごろしている俺に、気づくと世羅が近寄ってきていた。

腰に腕を当て上から見下ろされる。

もともとキツイ目つきなのが、さらにつりあがっていた。

「そんなに溜まってるのなら運動部にも入れ。その方が幾分人の為になる」

溜まるってなにながだ、と憤然する。

突っ込んでも良かったけど、とくに言葉にはしなかった。世羅なりに気を遣っているのかもしれない、そう思ったから。

だからといって、以前の玲華と同じようなことを言わなくても、とも思う。

「おまえは平気そうだよな」

「当たり前だ。馬鹿なおまえと一緒にするな」

「バカ？」

「露骨に辛いつて顔にかくなつてことだ。私に嫌味だとは思わないのか」

「……………」

嫌味？どこがだろう。世羅の言っていることが解らなかった。

世羅は女性だけど玲華が好きなんだ。それで俺のことを煙たがっていた。それなのに図々しくここにいることが嫌味なんだろうか。

「じゃあ、見るなよ。俺の顔なんか」

「本当に阿呆だな！まったく！玲華もなんでこんな男なんか心配してるんだか」

「え？」

言葉の裏に隠された何かに気づいて俺は顔を上げた。

心配してる？現在進行形で？

「おまえ玲華と連絡……………」

「玲華から伝言だ！余計なことするなとな！」

それだけ言い放つと世羅は踵を返した。自分の机に戻るために。それを俺は追うために起き上がった。

「ちよっ！なんだよその伝言って」

「言つたとおりだ」

「なんでおまえには……いや、それより余計なことって……」

「土曜日本家に行ったんだって？ちゃんと玲華は知っていたんだよ」
目の前が真っ暗になった。

玲華だけがなにもかもを知っていて、俺はなにも知らない。

そして玲華は止めるのか？俺が動くことを。

「世羅さま。やめてください。もう言わなくてもいいでしょう」
ずっと見守っていた秀和が遠慮がちに口を挟んでいた。

でももう遅い。

すべて伝え終わつた後だ。

「つまり玲華にとつて俺は、やつぱり……」

足手まとい。迷惑をかけつづけているのか。

イレギュラーな存在と理事長は言った。それは異端。いてはいけない者。

なぜだろう。悲しみより怒りがこみ上げてきていた。

「勝手なことを！俺に何の説明もなしでそんなこと世羅に伝言するなんて」

何を考えてるんだろう、玲華は。

わかっているつもりでいたのに、全然中身が見えていなかったのか。
「おまえまさか、玲華に怒ってるのか？」

一旦席に戻つた世羅が、再び俺に近づいてきた。腕組をしたまま軽蔑の色を滲ませている。

「他に誰がいるんだよ！あいつの行動は勝手なことばかりだろ！」

「自分が見抜けていないだけだろう？私には玲華らしい行動だと思
うが？」

「知ってる余裕かよ！」

俺より多くの情報を持っていて、さらには連絡まで入ってる。無視されてる俺とは違う。

「少しはマシになったと思っていたが、やはりおまえは周りの見えない馬鹿だな。玲華はおまえの精神安定剤か？ たった半月会えなくて効果が切れるのか？」

すでに、戻ってるのか……俺は。

気づけば怒鳴ることを抑えることさえ忘れてる。

「くそっ……！」

このままここにいてはいけない。

それだけが俺に出来る精一杯の対策だった。

誰もいない廊下を走る。身体中が火照るように熱かった。怒りで血圧が上昇してるのかもしれない。

少しでも紛らわせるために不必要に全力で走った。

「あ、悠汰くん」

昇降口にいつものように京香が立っていた。一緒に帰ろうとしているみたいだ。

少し走っただけなのに息切れがする。

そんなことを気にしている余裕はなくて、俺は京香に迷いなく近づいた。

「おまえ、綾小路の家知ってるか？」

やはりあいつには話を聞かないといけない。

「亨くん？ 知ってるけど、行っても会えないと思うよ。それに居ないんじゃないかな？ いまは」

いないということは、あいつは玲華に会いに行っているのか。

(逢いに……)

逢って、なにをしてるんだ？

「それよりどうしたの？ そんな険しい顔して」

京香が俺との距離をつめてきた。

鏡がなくて確認はできないけど、そのときの俺はものすごい形相をしていたと思う。

「なんでもない」

伸ばされた京香の右手を避けるように顔を背けた。利用はさせない、噂にならなうてはいけない。理論を考えるより前に、直感的にそれだけを思う。

帰る、と一言だけ言い残してまた俺は走り出した。

頭にあつたのは比紹のことだった。

それにはどうしたって家に帰るしかないんだ。電話にしるメールにしる連絡手段も連絡先も家にあるのだから。

生まれて初めて、早く家に帰りたいと思った。

頼れるのは結局比紹しかない。唯一協力してくれると言ってくれた人だからだ。

* * *

緩やかにでも確実に気温は低くなっている。

立っているだけで汗をかくという不快指数最高潮の真夏ではすでない。

それどころか昨日の雨が止んで、空が晴れわたって清々しい。

街では入り乱れた季節感。

いち早く流行を取り入れた女性などは、すでにブーツに秋物の風体でいるが、少し視線を外すと未だに半袖Tシャツ一枚きりの男性もいたりする。

(なんでこんなところに……)

俺は比紹の携帯電話に直接かけた。講義がつまっているということで、水曜日のこの日になり、比紹の大学の近くのこの場所を指定されたのだ。

真昼の繁華街のオープンカフェ。

まだ学校では授業中だ。学校を抜け出してきたから制服のまま、不審そうに店員に見られた。

今週から衣替えがあつて、龍のシルエットをした校章が左胸に縫

いこまれているブレザーの制服は、じんわり汗をかきそうなくらいちよつと暑い。

暑さだけじゃないかもしれない。この居心地の悪さが問題だ。なにせ高校生が行くにはお洒落で、高級感が溢れている。

体がだるくて、背もたれに預けたまま待っていると、十分くらい遅れて比紹が来た。

「ごめんね。学校休ませちゃったね」

相変わらずカジュアルで、長袖Tシャツにジーンズだった。身軽そうで羨ましい。

「いや、そんなんは全然……」

授業なんて今更どうでもいい。正直いまはこのことしか考えられないのだ。

ウェイターが注文を取りに来て、比紹はキャラメルラテを注文していた。

甘そうだな、と考えていたら、おかわりは？と比紹が聞いてきた。すでに一番安いアイスコーヒーを頼んで飲み切っていたのだ。

いらないと首を横に振り、それよりと続けた。

「俺こそすみません。忙しいのに」

この人にはこの人の生活があるんだ。そこだけは忘れてはいけな

い。

「いいよ。玲華のことだよ。きみがわざわざ連絡くれたのは」「そうなんだ。あいつ余計なことするとか言ってるみたいで、よくわかんなくて……。比紹なら何か知ってるかなって」

自分で思っていたより情けない言い方になった。これでは愚痴ってるみたいでなんか嫌だ。

それなのに比紹はまったく気にしてなさそうだった。

「ただど穏やかな表情が少し悲しそうに下がる。」

「とうとう恐れていたことになったよ」

その変化にドキリとなった。

「なに？」

「まず順を追って話そうね。ここだけの話で、まだ公にはなっていないけど、源蔵様がお亡くなりになられた。これで彼女はさらに追い込まれていくよ。後ろ楯がなくなっただけからね」

なんだ、その展開は。

俺は目を大きく見開いた。名前も数日前に初めて聞いて、顔も知らない人の死は、実感なんてあるはずがなかった。それでも、玲華がもつと危険になるっていうところだけが、俺にとっては衝撃的で。「それからね、これは前回会ったときに言えなかったんだけど。彼女に夜這いをかけてレイプしようとした者がいる。それは彼女の父親の弟の子供なんだ。つまり彼女には従兄弟にあたる。その彼が昨日殺された」

「え？」

淡々と語る比紹の言葉は、注意して聞かなければ頭に入っていないものだった。

それでも鋭く感覚に突き刺さる単語。

可能ならば、耳を塞ぎたい。もうこれ以上にも聞きたくない。

(玲華に……なんだって……?)

そしてその張本人がすでにいない？

俺が呑気に学校なんて平和で穏やかな空間にいる間にも、確実に玲華には大変なことが起こってるんだ。

「紐で首を絞められてね、絞殺だった。残酷なことするよね。その人、幸祐くんっていうんだけど、すごく無念そうな顔だったな……。こちららも公にはなっていないけれど、皆彼女を疑ってしまっているんだ。復讐をしたんだって」

首を絞められる恐怖。

それは俺も知っている。

無念そうな死体の顔も、見たことがある。そのときの事が思い出されて、俺の手がカタカタと震えだした。

比紹の顔が見れない。でも変わらない声質で彼は淡々と続けていく。

「もちろんぼくは信じてないよ。……でも、だったら誰が？つていう疑問は確かに残るんだ。現場はあの家の地下室でね。玲華は自分になにかしてきた者たちをばんばんそこに送っていたんだ。地下室は牢屋になってるからね」

「ちゃんと聞かないといけないのに、頭がうまく整理できない。もっと深く尋ねたいこともあったのに声が出なかった。」

「俺のなかの玲華と、比紹が話す玲華が一致しない。」

「これはここ数日で彼女が変化したためか？それとも俺の知らない玲華の部分なのか？」

「なにが言いたいかわかるかい？地下室はそのとき玲華が支配していたんだよ。他の人は入れなかったんだ」

「でも玲華はそんなことしない」

「やっと言葉に出来たのが、その一言だった。」

「どうしても信じたくない。」

「もちろんぼくもそう思う。……いや、そう思いたいよ。ただ彼女にはいろいろ取り巻きみたいなのがいるからね。護衛と称して強引に連れ込んだ部外者も一人いる。彼女自身がなにもしなくても、彼らなら可能かもしれない」

「取り巻きが勝手に？」

「それならば玲華でさえ振り回されてるんじゃないのか。」

「……………なあ、俺を中に入れてくれるってやつ、いつ実現する？」

「それでも玲華に会いたいと？」

「ああ。早く会いたい。早く真実が知りたい」

「それだけが唯一のやるべきことだ。」

「最初に理事長に告げた“会いたい”と、たとえ意味合いが少し変わっていても、玲華に会わなければなにも始まらないし……………終わらない。」

「他人に安心感を与えるような、大人の笑顔をして比紹が言った。」

「じゃあもっと深く計画を練るよ。誰にもばれずに玲華の部屋まで行ける方法をね」

「悪い」

いまは比紹に頼るしかないんだ。一人でするにはあまりにも中のことがわからない。

彼は少し考え込んでから口を開いた。

「じゃあさ……………明日もぼくは一日講義で埋まっちゃってるんだけど、夜なら空いてるんだ。それまでに考えておくから、そこでぼくの計画を話そうかな。悠汰くんは夜とか大丈夫？」

夜……………。

少し前まではバラバラで不在がちだった親が、夜には二人とも揃っている。いるのかわからないのかわからないような存在だった兄も、いまはちゃんと俺のことを視野に入れてる。

僅かにそういったことが頭を掠めたけれど、他のことはどうでもよくなっていた。

「そうだな。早い方がいい。なにがなんでも行くから」

玲華に会えるなら俺は行かなければならない。

死んでも、止まりたくないことだけは確かだった。

* * *

子供の頃からなにも変わってないよ、と比紹は言った。

ぼくたち子どもは、大人たちが様々な密談とか交流をしているときにな、よくあの家の庭で一緒に遊んでいたんだ。

ああ、そうだね。世羅ちゃんとか亨くんもその内に含まれるよ。親戚だけじゃなかったんだ。

想像つきそうだと思うけど、その中心はいつも玲華だったよ。お山の大将なんて似合わないけどね、まさにそれ。で、世羅ちゃんが片腕みたいにぴったりくっついてるの。

でも強引なところはあったけど、強制的ではなくて、なんていうかな……………みんな気づいたら玲華から離れられなくなるんだよ。魅力

っていうのかな。

その中でもやっぱりそれに嫉妬や羨望なものでみるものは出てくる。それがね幸祐くんだったな。女の癖に生意気だーとか言っちゃって。

あまりにその反感が強いから、玲華が言ったんだ。

「じゃあこのドリルやって、いいテンとったほうが正しいってことにしましょ」って。

たしかそれは幸祐くんの宿題のドリルだったかな。

あのと時玲華は小学二年生で幸祐くんは五年生だったよ。そう、幸祐くん亡くなった彼だよ。

家庭教師をバリバリつけて英才教育をしていた玲華は三学年も上の勉強もすでに教わっていたんだ。それでね、なんと幸祐くんに勝っちゃったんだ。

あれはまずいなってぼくはいまでも思うよ。だって幸祐くんのプライドはスタボロだろう？

「そんなのどーでもいいからさーいっしょにあそぼうよ。そのほうがたのしいよ」

そう言いながら、ドリルを投げ捨てて笑った彼女は力強かったな。玲華はあのと時からどこか人を操る術を知っていたんだね。幸祐くんは彼女の笑顔で素直に輪に入っていたんだ。

だけどそれは上辺だけだったのかもしれないね。負けた彼は従うしかなかったんだ。

だってそうだろう？

あんなに歪められた性格に育ってしまったからこそ、彼は死んでしまったんだ。あのまま素直さを持ち続けてたらさ、今回あんなこととしてないよね。あんな非道なことをさ。

そしたら地下に閉じ込められることもなくってさ、彼はいまも生きていたと思うんだ。

だからね。

だから、と比紹は一旦口を切った。

そして俺のほうを見た。

「だから彼女の存在は罪だよ」

ぼんやりと俺は比紹の話聞いていただけだった。呼び出されたバーが、お洒落な雰囲気だったのも手伝っていたのかもわからない。

どこかチカチカとしたものが目の前にぼんやり光っていた。

意識とか感覚がどこか遠くに飛んでいく。

何も感じられなかった。

「本人は自覚しているのかな。彼女の近くにいるとね、離れられなくなる症状が出るよ。まるで良くないクスリの禁断症状みたいだね。依存と快樂でさ。でもそれは自覚されることなく染み込んでいくんだ。世羅ちゃんとか亨くんがいい例だね。今でも絶対的な存在として玲華のことは見てるだろう？でもだから、親戚の子どもたちにとっては良かったのかもしれない。その後、^{かおる}薫さん……玲華のお父さんがあの家から離れたことによつて強制的にだけど、それから離れられたんだよね」

「じゃあ比紹も？」

「もちろん。彼女の魅力は眩しかったからね。焦がれていた部分は否定しないよ」

だから俺は玲華に操られていたんだ、と比紹は言った。

こんなふうに俺がいま彼女に会いたいと思うのは、その禁断症状だよ、って笑って言った。

話の内容もこの場所も、それから玲華も全てが遠くに感じる。

説得力とか、信憑性の有無だとか、そういうの全てがどうでもよくなっていた。

(なにしてるんだっけ……)

アルコールはそんなに入っていないのに、すごく前後の起伏が乏しい。

ここに来て三十分ぐらい経って今頃、家から出てくるときに見つかった兄貴の顔とかが思い浮かんだりしていた。

兄貴は止めてきた。こんな時間にどこ行くんだって。俺は腕時計を見る。クロノグラフの針が十一時三十分を差していた。

気をつけないと終電……、と少し後から思う。

「コントロールされないでね」

比紹が念を押す。

コントロールという単語がひどく心に障った。なにかあるんだっけ……。それもよくわからない。

「大丈夫だ」

あまりも根拠もないことを俺は答えた。まるで合言葉として用意されたもののように。

「そうかな？あまり他人を信じたらいけないよ。つけ入られるからね。きみはそういうところ素直そうで心配だな」

心配だと、他にも最近別の人から聞いたような気がした。既視感。それがいまの俺には思い出せない。

「そんなことねえよ」

そんなにすぐ他人を信じたり出来ない。疑惑はすぐに感じるんだ。信じていたら、いま俺はここにはいないだろう。

玲華を、信じていたのなら。

「いつがいいかな？」

カルーアミルクを飲みながら比紹は話を元に戻した。

比紹は甘いものが好きなようだ。

「計画……」

そう、計画の話をしにきたはずだった。ここへは。

全てが……まわりの景色だとか人の顔だとかがぼんやりとした感覚にいたるなかで、唯一はつきりしていることがある。

俺は、あのでかすぎる家に忍び込み玲華と会う。

何がなんだか分からなくなる前のたったひとつの想いは、まるで義務的にそれだけは捨てられないでいた。

「そう計画だよ。いつ実行にうつす？」

あくまで俺に決めると、比紹は言っていた。

俺が決意したうえでやらないと失敗するかもしれないから、と。

「いつでもいい。……いや、出来るだけ早く」

「じゃあ明日にする？」

「え？」

すこしドキリとした。あまりに指定された日が早くて。

可能なのか。

どうやらすぐにでも“セキュリティを操作すること”は可能らしい。

「ぼくはコンピュータールームに忍び込むよ。それで一部だけ切り替えておく。その隙にきみは中に入るんだ」

それが比紹が言った計画だった。

あまりに簡単なことのように比紹が言うから、俺もそれがどれだけ無謀なことだとかは考えなかった。

中のことは想像がつかないということもある。
だが。

「絶対誰にも見つかったら駄目だよ。どんな制裁が下されるかわからない。法的な不法侵入罪とは訳が違うからね」

そう言うつてことは事を起こすことより、見つかった後の方が厄介なんだろう。

「わかった。んじゃあ明日」

そんなに気負うこともなく、俺はすんなり答えていた。

* * *

決行は深夜。

当たり前といえば当たり前だけど、それを聞いてから落ち着かない自分がいた。

丸一日空いてしまうことが残念だった。

明日じゃなくて今夜、と答えれば良かったのかもしれない。

(そうすれば、家に帰らなくても良かったのに……)

あれからやっぱり終電の時間は過ぎて、そしたら比紹がタクシーを拾ってくれて、そのお金も負担してくれた。

比紹はカフェのアイスコーヒー代もバーのカクテル代も、こちらが何か反応を起こす前に払っていてくれていた。

そういうの悪い、という気持ちは残ってて、なんとかしようと思っただけど……。

全部自分が誘った場所だからとか、自分が時間忘れていたからとのらりくらりとかわされて、財布を出す暇さえ与えてくれなかった。で、帰ったら二時くらいで、兄貴が起きていてまた見つかった。

「どこに行ってたんだ」

わざわざ部屋から出てきて、廊下で訊かれた。

別に悪いことなんてしていないのに、ちよつと顔が見れなくなっていた。家でしかかけない眼鏡の奥が直視できない。

俯いたまま答える。

「べつに……友達と会ってた」

言い訳のように友達、という言葉を使ったらやっぱり違和感が残った。

比紹は友達じゃないから。

(じゃあなに……)

比紹は何。

計画の共犯者？協力者？先導者？

どれもピタリと当て嵌めてくれない。

「酒を飲んでいたんだな。あまり顔色が良くない。なにかあったのか？」

たて続けに訊いてくる。

苛々していた。意識が不明瞭なままでもはつきり感じる窮屈さ。

「今までほつたらかしにされすぎたせいかな……。そういう過干渉、すぐくウザイ」

自分でもこんな低い声が出るんだ、と思うような怖い声が出た。

でもそれを自覚する前に部屋に入ると、兄貴はそれ以上突っ込んで来なかった。

散らかった部屋で頭を抱える。

計画の話以外、なにも思い出せないのに気づいた。思い出そうとも、思わなかった。

無いなら無いでいい。

その程度のものだ。

ただ抱えた頭がキリキリと締め付けられるように痛み出した。身体中の関節も軋むように痛い。それから胸焼けのように吐き気が伴って、すごく不快だった。

痛みは次の日になっても消えなかった。

二日酔い、とは違うと思う。

でも耐性ができたのか、痛みが緩んできたのかあまり気にならなくなった。そういうものだという認識でしかない。

学校の屋上、というスペースを知ってから俺は意外と居心地良くて、よく来るようになっていた。誰も来ないから、本当に都合が良かった。

それでもなぜか教えてくれた京香とも鉢合わせすることがなくて、ずっとコンクリートにそのまま寝転がって空を見上げる。体がダルくて、寝ているほうが楽だった。

雨の日が一日あったけど、それでもここに来た。外には出ずに階段と扉の間に座っていた。

「ああ！」

だけど今日は彼女も来たみたいだった。

俺を見つけると素早く近寄ってくる。

「わたしの居場所だったのになー」

ちよつと責めた色を滲ませながら、でも笑いながら京香は隣に座った。

「それは悪かったな」

反対側に寝返りを打つ。それでも出て行く気力はなかったから。

京香は構わないとように、平然と言う。

「いいけどさー。別に私有地ってわけでもないし。……いいっしょ？ここ」

そして俺を覗き込むように彼女が見つめてきた。

「ああ。ラクだ」

他人がいなことがこんなに楽だとは知らなかった。

今まで、玲華が近くにくる前に一人きりでいたときは、そんなふ

うには感じなかった。ただ自ら一人になると、おのずとそうなっ
てしまう状況とでこんなに違うとは思わなかったんだ。

いまなら、あの頃はそこに寂しさが伴っていたと認めることが出
来る。

だから京香が来てがっかりしている自分も確かにいた。

勝手な話だとはわかってしている。ただ事実としてそこにあるだけだ。

「でもさ、意外だなー。きみも授業とかサボっちゃうんだ」

「え？」

授業？

そういえばさつきチャイムが鳴ったような気もする。遠い記憶の
中で、それは何時のどの刻ときを伝えるものの音だったのか、認識でき
ていない。

「いまナンジカンメ？」

「三時間目だよ。うち世界史なんだ。あれ嫌い。別によその国の、
しかも昔のことだよ？知ってどうすんの？って思っちゃって全然頭
に入ってこないんだ。しかもセンセイも教科書読んただけでツマ
ンナイ」

だからこの時間はよくサボるの、と京香は言った。

そうか。それは大変だな。おまえも先生も。

それぐらいの返しをしたような気がする。

うちはなんだっけ。っていうかそもそも俺は何ジカン分授業から
離れているんだろうか。

「悠汰くんはいつからここにいるの？」

俺の思考とマッチした質問が浴びせられる。

一瞬、間が空いた。それから努力して頭を働かせる。

その質問には“今日は”というものが前につくんだろうか。だと
したら。

「朝から」

「ふうん。ホント意外。机の前にいるのも辛いのか？それとも教室の
中が辛いのか？玲華がいないから？」

「ウルサイ」

かなり実感のこもったうるさいが出た。

辛さなんて何も感じない。本当に悪いけど、今は比紹と前に進むための会話以外がすべてどうでもいいんだ。

「かわいそうだね、そういうの」

京香がはつきりと可哀相と口にしても、俺は無感だった。

以前ならはつきりと嫌悪を表していたのに。

「ねえ。わたしが癒してあげようか」

そう言っただけ京香は俺の肩を押して自分側に倒した。抵抗の力が入らなくて、雲ひとつ無い青空が回転して真上に来る。

そしてその空が視界から完全に消えた。どこにも触れずに彼女の顔だけが大きくなった。

俺は彼女の耳元に光るシルバーピアスに目がいつていた。縛られているものは何もないのに、逃げるとか、避けるという思考がすでに欠如していて。

それで。

「こんなところにいたのか！」

第三者が、屋上と校内に続く扉が開いたために目の前の視界が広がった。

京香がそちらを振り向いたから、俺から離れたんだって、そういうことすらどうでもよくて。

「世羅」

憎々しく呟く京香の声をすごく近くで聞いて、その第三者が世羅だと知った。

（世羅？）

確か今は授業中だと京香が言ったはずだったのに。体を起こして俺も振り向くと確かに世羅が突っ立っていた。どこか怖い顔をして。

「京香。何をしている？」

「べつにーあなたに報告するようなことはなにもしてないけど？」

「ここから出て行け」

「そんなことあんたに言われる覚えもないけど!？」

語調をキツめにして京香が返す。

この二人がこういう会話をする間柄であることを俺は初めて知った。

よくよく考えると比紹が幼馴染みの話をして、京香も小さい頃から玲華を知っていると言っていた。そこで京香もその幼馴染の一人であることを思いつくべきだったのだ。

女性にしては大股で世羅は俺たちのところに近づいてきた。

「確かにそうだな。そんな話はどうでもいい。おい、神崎行くぞ」

そして俺の腕を掴む。

こんなところにいたのか。

そこで世羅が誰を探していたのか分かった。

わざわざ授業を抜け出してまで。

「なに?」

なぜ世羅がそこまでしてるのか分からなかった。不思議と俺のため、というところは思い浮かばなかったのは、やっぱり今までの経緯があるからだろう。

「いいから来い」

世羅が命令する。

それを振り払う努力さえ、俺は怠^{おこた}っていた。

京香は何も言わずに見送っていた。と思う。何も声を発しなかったから。

そしてそのまま玲華の部屋まで連れて行かれた。教室へかと思っていた俺は少し意外に思ったけど、それだけだった。

放課後以外に、ここへは来たことがない。しかもあの言い合いをしてからまったく来なくなっていた。

「なんだよ」

俺はいつもの低位置に座りもせず、ただ突っ立ったままで訊く。

ここまで世羅がするっていうことは、絶対玲華絡みだと信じて疑わなかった。

それならばそれは“どうでもいい”ことだ。

世羅もとくに落ち着こうとはせず、立ったまま言う。

「おまえ、今の自分みてどう思う？玲華の前でも今の自分、出せるか？」

やはり玲華の名が出た。

それぐらいの印象。

「関係ねえだろ」

サボったことを怒っているのだろうか。それとも京香に隙だらけな自分に？

「京香とも比紹とも接触するのはやめろ」

そして世羅から比紹の名が出て、俺はさほど意外には思わなかった。

すでに幼馴染みの一員だったことを聞いていたからだ。

「なんで世羅がそんなこと言う」

やめろよ。

我が物顔でそんな忠告すんなよ。俺の行動を制限すんな。

「それが玲華の望みだ」

比紹の言葉が浮かんだ。一度は忘れて、沈んだ記憶の底から。

世羅ちゃんも亨くんも絶対的な存在として玲華のことは見てる。

「俺は玲華のイエスマンじゃない」

すべて彼女の言うことに肯定したりしない。操られてもいない。

俺は俺自身の意思で動く。

そうだろう？玲華がどう思おうと関係ない。自分は間違っていない。

世羅は一度ため息をついた。

「玲華から伝言だから言う。おまえは玲華を信じる。それだけでいい。比紹の言うことに耳を貸すな。……そうすれば、私もなるべく

おまえに玲華の状況を話そう」

「いらない」

今夜、すべてはあきらかとなる。
だから。

世羅の忠告は不要なことだった。従う理由はない。

「おまえ、すでに比紹と……」

「俺には！」

どこか愕然として呟く世羅に、俺は言葉を被せていた。何もこれ以上聞きたくなくて、また怒鳴ってしまった。

「分からない。俺には。おまえが正しいのか、比紹が正しいのか……。だから、俺は手っ取り早い方法を選ぶ」

確実に協力してくれる方を。前に進んで行ける近道を選ぶ。

いくら世羅が俺にしては意外な優しい扱いをしてくれたとしても、私を否定するということは玲華を否定することだぞ」

重々しく、世羅がそう言った。まるで警告を発するみたいに。

「だから関係ねえって」

ちよつと俺は笑った。笑ったと思う。

玲華は関係ない。俺がどうしたいかが重要なんだ。そう、それだけのこと。

俺と世羅は違う。そして綾小路とも。

絶対にコントロールなんてさせないし、禁断症状でもない。

世羅はそうか、とだけどこか残念そうに呟いて、そこで話は終わった。

* * *

ずっと屋上にいるわけにもいかなくて、俺は人気ひとけのないところを選んで校内を歩いていた。

体中がダルくて仕方がない。早く夜になればいいのに。

そう思っって見上げると綾小路と美山が遠くに見えた。

学園の東の塔。その外壁に設置されているコンクリートの階段の最上階に、背中を向けてもたれかかっている。

咄嗟に俺は中庭の木に身を隠した。

綾小路がいる。あいつにまだ話が聞けていない。しかし俺の姿を見たらまた逃げるだろう。

しばらく二人の姿を目に留めたままで、どうしようか考える。

集中力のない頭で導き出された答えは。

昇降口に張り込みをすることにした。

いつ綾小路が出て来てもいいようにだ。おそらく今日も部活を休んでどこかで早退するんだろう。校門のところに早々とお迎えの高級車が一台見える。

そしてチャイムが鳴り、午後の授業が始まってから綾小路は姿を現した。

そういうタイミングも俺を避けるためとしか思えない。

靴を履き替え昇降口を出たときに、俺はようやく前に立ちはだかる。

「何してるんだ？授業はとっくに始まっているだろう」

俺の姿を見てもさして驚きもせず、あっさりと綾小路はそんなことを言った。どこか呆れているような色が含まれている。

すでに下用の靴だから、こいつはそのまままで校舎に上がる、なんてことはしらないと思った。

プライドだけは高いから、みっともない足掻きとかはしないタイプだ。

「そんなん待ってたら、おまえ帰るだろ？」

「ああ。そうだな」

あっさりと綾小路は頷く。

一変したその態度に俺は妙な感覚に陥った。

もう、逃げないのか？諦めたのか？

不審げに思っている俺に、ゆっくりと近づくと近づくように校舎を出てくる。

聞きたかったことを、口にしようとしたときだった。

綾小路は突然、全力で走り出した。俺の前をあっさりと抜けて校門の方へ走る。

(そういうことかよ！)

やられた、とか思う暇なく俺はそれを追う。

伊達に俺に大口を叩いていたわけではなかった。綾小路はとんでもなく速かった。

だから俺も手を抜かずに、全力疾走する。追うべきものが目の前にいると、自分でも驚くぐらいのスピードが出た。

もう少して捕まえられる。

そう思ったとき、直滑降で綾小路が左に曲がった。教室から生徒に見られないようにだと、後からではわかったけれど、そちらとは逆のテニスコートに続く方へ綾小路は進んでいった。

そのときは気づく余裕もなく俺はただ追いかける。

「……てよ、このっ」

逃げられるのが、こんなに悔しいとは思わなかった。

意味も知らされず、避けられて俺はムカついていた。だからかもしれない。陸上部並みに速い綾小路のブレザーを俺は掴むことに成功した。

校舎と塀の間の柔らかい土の上に、俺たちは勢い余って転がる。

「なんで逃げるんだよ」

動けないようにすぐさま上に馬乗りになって、綾小路を見下ろした。

やつの目が見開かれる。なぜだか知らないけれど、すごく驚いた顔をしていた。

「何故こんなに走れてどこにも入ってないんだ」

しばらく肩で息をして、それからぽつりと呟いた。

なんの話かわからない。

いや、そんなことはどうでもいいんだ。俺はこいつに聞きたいことがあって……。

(聞きたいことって、なんだっけ……………)

ふと、頭の中を探るように考えた。

玲華のことか？でもそれは比呂が教えてくれている。

…………… 婚約のこと？

(それはもう…………… どう、でもいい…………… ことだ……………)

そうだろう？それよりも大変なことが玲華に起こっているんだ。

俺は直接玲華に聞く。だからもういい。

逡巡させているうちに、綾小路が力一杯俺を押しした。あっさりとそれを許してしまう。だけど、もう逃げる素振りはしないで、服装の乱れを整えていた。

「おまえ、玲華がたった二十日不在になっただけでこれか。どこまで玲華に^{すが}縋れば気が済む」

「それは関係ない」

なにも世羅と同じようなことを言わなくてもいいではないか。

(おまえらと一緒にすんな)

元々、玲華に崇拜していたのはおまえではないのか。猫を被ってお嬢様に相応しくあるうと演じていた彼女に、そのまま信じて狂っていたのはどこのどいつだ。

そう言いたくなるのを必死で抑える。

「ではやはりあの噂を信じて病^やられているのか」

「どうでもいいんだよ、そんなこと」

そんな話で誤魔化されない。

「もう、どうでもいいんだ」

「だったらなんだ？他に何の用がある？」

「おまえ今もあの家に行ってるのか？」

重要なのはそこだ。どれくらいこいつが関わっているのか。

「それを知ってどうする」

綾小路は怪訝そうに反問した。

「あの家、中はどうなっている？」

「まさかおまえ、行くつもりなのか」

なにかを察したような、鋭い顔をした。

「神崎、おまえ自分の感情だけで周囲を無視して忍び込むつもりなんだな」

「いいから質問にだけ答えろよ」

「後二日ぐらい待てないのか？玲華がなぜおまえを遠ざけてるのか、本当にわからないのか？」

「おまえうるさい。逃げてたくせに責めんなよ」

玲華に利用されてるだけのくせに、俺に説教なんかするな。

しばらく綾小路は厳しい目でじっと見ていた。それに相手をしてやる気もない。

「玲華が哀れだ。あんなに頑張っているのに、好きな男に邪魔されるなんてね。本当におまえみたいな馬鹿のどこが良かったのか、僕には分からないよ」

玲華が俺を選んだ……理由？

(そんなの………)

彼女はなんと言っていただろうか。俺は記憶の引き出しを探した。最も納得できる言葉を。

「教えるつもりはないから僕はもう行くよ」

まだ見つからない内に、綾小路は去っていく。

しかし、不意に思い出したようにやつは振り向いた。

「これを言うのを忘れていた。美山が“目を覚ませ”だとさ」

前後の脈略を吹っ飛ばして、俺の顔に向かって人差し指を突きつける。

なんのことが訳がわからない。

だけど綾小路は説明もなく本当に帰っていった。

* * *

「困るな」

為す術もなくその場でじっと立ち尽くしていると、声をかけられ

た。

顔を上げると、比紹がここでは目立つだろう普段着で歩いてくる
ところだった。

「聞こえていたよ。あれでは亨くんに今日のこと見破られちゃうじ
ゃない」

本当に困ったような、でもいつもの笑みも浮かべている。

「悪い。少しでも情報があれば、見つかるってへマはしれないと思っ
て」

「それはぼくが教えてあげられるよ。見取り図だって用意したから」

「あつ、そっか……。そうだよな……」

なにをしてるんだろう、俺は。

結局なんの情報も得られず、比紹の好意を無駄にただけなんて

「きみのせいじゃない。ちゃんと言わなかったぼくも悪いよね。大
丈夫だよ。絶対にぼくがなんとかするから」

「ほんと悪い」

本当に比紹は頼りになる。それに、俺が失敗しても責めない。

こんな人に、初めて会った。

失敗すればそれ相応の罰が与えられるものだと、思っていたのに。
だけど、それと同時に俺は知らなかった。

責められないのも辛いんだ。罪悪感が余計に残るのは何故だろう。

「いや構わないよ。ぼくは迎えに来たんだ。打ち合わせも込みで早
めに会いたくてね」

しかもしつかりしてる。

そういえば待ち合わせ時間とか決めずにいた。最初から比紹はそ
ういうつもりでいたんだ。

「ああ。行こう」

午後の授業のことなど、俺の頭にあるはずがなかった。

* * *

警備システムを操作できるのはたった五分間だよ、と比紹は言う。コンピュータールームの回路に侵入し、バレずにいる時間がとうとうとらしい。

さらに人が 血族の人間だけでなく使用人含めての人が 通りにくい道筋を比紹は示した。

ここは怪しげな場所にある怪しげな飲食店だ。何が怪しいってメニューはないしこじんまりしているし、なにより照明が暗い。

そのなかで見取り図が広げられていた。彼の椅子の隣には黒い大き目の鞆。何が入っているのかはすでに聞いている。

そしてここには他の客はいなくて、ひとりだけカウンターの向かい側に男性がそ知らぬ顔で座っていた。やる気がないのか煙草だけ吸っていてあとは何もしてない。

彼は干渉してこないから大丈夫だよ、と比紹が言った。

随分慣れた場所みたいだった。

そしてここへ来て三分後くらいには俺も拘こたわらなくなっていた。

「覚えられた？」

「ああ」

かなり入り乱れているし、あまりに広いけれど今の自分には何でも出来る気がしていた。

不思議だけど、自信があった。

正面の門からつまり、玄関からは、玲華の部屋は一番離れた最上階にあった。南向きの部屋。

入るのは正面より僅か十メートル西寄りにずれた一角。

そのこのセキュリティだけ、切り替えるということらしい。監視カメラの映像とセンサーを感知しないように。

実はそこが一番セキュリティが弱いのだと教えられた。

「センサーって一つきりじゃないんだ。いろんなふうに交差してすぐたくさんある。カメラもいろんな角度でそれぞれ設置されてるね。ここの上下左右だいたい八十センチくらいずつが最も狙い目なんだよ」

どうして比紹はそんなに詳しいんだろうか。あそこに住んでいるわけでもないのに。

「ぼくなりには調べたんだよ、きみのためにね」

とか何とか、聞いてもないのに先読みして言っていた。

そこは問題じゃないと思った。

ここを通り抜ければ、この自分でさえ原因不明のもやもやした感じが消え去ると……それだけしか考えられない。

「何か口にしたら？時間、まだちょっとあるから」

なにかのついでみたいになら比紹が言った。何でも言ったら出してくれるよって付け足して。

だけど何かの重しはずつしり胸に悶^{つか}えているようで、これ以上なにも受け付けない感じがある。そのなかで喉が焼けるように熱かったから、水だけもらった。

一口飲んでから、緊張してるのかもなって、どこか遠くで思う。

気づくといつの間にか比紹は店員と二人で喋^喋っていて、俺はひとりで見取り図の前にはんやり座っていた。

ひとりにしてくれてるのかもしれない。

俺が緊張してるから。

わかりやすい人間だと、言われたのは誰にだっただろうか。

知られて困る真情など俺にはない。

だから無視した。俺も一番楽な姿勢でいた。いま楽なのは、余計な人との接触をなくすことだ。一度もこの店員と話していなかった。

そんな状態がどれくらい続いたのか分からない。会話はひとつも耳には届いて来なかった。

「じゃあ、行こっか」

比紹がようやく話しかけてきたのは、すでに決行直前だった。

それを合図みたいにして俺は立ち上がる。

あんまり深く考えられない、すこしズレた頭の中で、もっと緊張しなければ嘘だと冷静に感じていた。

西龍院の敷地まではタクシーで来た。

比紹には玲華や綾小路みたいに専用の運転手っていうものがないらしい。

そんなにはくんちはお金持ちじゃないよ。本当にちよつとぶら下がっているだけの分家なんだ。と言った。

それがどういふレベルなのか俺にはよく分からない。

それでも例によって彼に全て払わせてしまっていて、さすがに焦った。

俺の問題でやってもらってるから、って主張したけど、年下の高校生に払わせられないよ、と笑ってまた先に支払いを済ませていた。門よりちよつと離れたところでタクシーを降り、正面の門の周辺にそびえ立っている木に隠れるように跪く。

比紹が持ってきた鞆を置いた。ここに忍び込むための道具が入っている。

そして時計の針を狂いのない様にお互いに合わせた。

今更他の打ち合わせは必要ない。すべて終わっている。

「じゃあ行ってくるね。気をつけて」

一言だけ囁いて比紹は先に中に入っていく。

その背中を見つめていたけれど、何ら関心が抱けなかった。実感が湧いてないんだ。

(ダメだな)

それが駄目なことだけは凄くよく分かるのに、どうしようもなかった。

活を入れないと、奮い立たせないと負ける。

それは分かる。

打ち合わせの時間まで、俺は何とか心を奮起させようと頑張っていた。

木々の隙間から漏れる夜空を見上げる。

上弦の月が、やけに印象的に俺の目に残った。

丑三つ時も過ぎた深夜三時五十分。

それが約束の時間だった。

時間より三分前に鞆の中の中身を取り出す。

フック付きロープだ。

使い方は教えてもらった。比紹は忍者みただよね、って面白そうに言ってた。

(早く、行かなきゃ……)

事務的に俺はそれを持って塀の前に立つ。そして比紹が言った間隔を確認する。

(見つかったら、どうなるって?)

法的な不法侵入罪とは訳が違うからね。

それが一体何を意味するのか、そこは聞けていない。でもおそらく、いまがピリピリしてる状況だから邪魔されたくないんだろうとは思う。

それならば問題ない。俺はそんなものを狙いにきたわけではないのだから。

もし見つかったとしても、そこを丁寧に説明したら解ってもらえるのではないだろうか。

俺の場合、説得力のあることは言えないけど。

不意に掠めた思考を打ち消し、ロープを投げた。

上手く一度であちら側にフックが引っ掛かった。三回強く引っ張り強度を確認する。

それからレンガの塀にスニーカーの底に一步一步力を込めた。

思ったより腕力が要る。

「……っ！」

三分の二を登ったところで、拳が塀に擦れて皮がめくれた。

もっとスムーズに登れるイメージでいたのに。これはみっともな

い。

だけど俺は必死だった。無視して先に行く。

なんとか塀の先端に片手が届いて、あとは懸垂で頂上に到着した。暗くて下が見えないけれど、いまの俺には関係なかった。

感覚が鈍っているのかもしれない。いつもなら高くて躊躇うところを、さっさと降りる。

着地するときに少しバランスを崩した。

(ヤバイ……)

何とか踏みとどまったけど、知らない間に足腰が弱まっているのかもしれない。最近怠惰な生活を送っていて、寝転がってばかりいたから。

がさりと、遠くから音がした。

俺が着地したときと同質の音。

それで俺はそちらを見る。

「あ……」

ちょうど人影が同じように高いところから飛び降りたんだと解った。一階と二階の踊り場にある窓が開いている。

まずい、と思う前に、俺は見てしまった。その人を。

(なんで……)

どうしてこの人がここにいるんだろう。

夏休みには頻繁に会っていた人だ。見間違えるはずがない。

(久保田さん……が、ここに……?)

必死で辻褄を合わせようとする頭。

そうか、玲華だって久保田さんの知り合いだ。

久保田さんはすごく頼りになるから、玲華だって頼るってことは冷静に考えれば解ることだった。

「ああ、そうか……。祥子さんが言ってた仕事で不在してるって、このことだったんだ」

確か大きな仕事が入ってたって。

つまり玲華は正式に依頼したんだ。その内容まではわからないけ

れど、おそらく護衛かなにかならう。

そういえば比紹が言っていたではないか。護衛と称して強引に連れ込んだ部外者も一人いる、と。それが久保田さんだとしたら納得がいく。

ちゃんとしたスーツ姿で彼は距離をとって立ち止まった。

「悠汰」

名前を呼ばれて、俺はドキリとした。

あまりに硬質な声。

らしくないなんてものじゃない。いつもの声とは違うものだったから。

でも俺は知っている。これは仕事用の久保田さんの声だ。ここまで厳しくて重いのは、初めて聞いたけれど。

「おまえをここから先には行かせない」

「な、に？」

その内容にはすぐに認識できずにいた。

なにを言っているんだ。なんの前置きもなく、あまりにも一方的な発言。

「だが、おまえはここを通りたいんだな？」

「ちよ……ちよつと待てよ。なんだよ……なにが……」

「二度は聞かない。答えるんだ」

俺がいくら動揺しても、久保田さんは説明もなしで命令をする。

これは本当に久保田さんか？

見たことのないほどの、恐い顔だ。顔のつくりだけ同じにした別人に見えた。

「当たり前だろ。そのために来たんだ」

別人なら遠慮することはないだろう。

俺は知らず知らずのうちに睨みつけていた。

見つかったのが久保田さんで良かったと、一瞬でも思ってしまった自分が情けなく思える。

その人は懐から何かを取り出した。俺を見つめたまま腕を振りそ

れが長くなる。

そしてそれを俺に向かって投げつけてきた。当たる前に足元に転がる。

(警棒……?)

それは警棒だった。ネットでしか見たことのないものだ。

「だったらオレを倒してから行け」

そう言われて反発心からその人を見る。その人も警棒を握り締めていた。

なんだ、この展開は。

ただ解ることは、その人の目は本気だった。

「なんでだよ……」

「チャンスをやると言ってるんだ。本来ならばそこへ降りることすらおまえは許されていない」

「おまえ、だからって……」

「オレはおまえを排除する。そしてそれは彼女の、西龍院玲華の意思だ」

「！」

まったく俺の喋る隙を与えずに、静かにその人は語る。

最後の言葉は衝撃的だった。胸に突き刺さって、痛かった。

この人が俺の知っている人ならば、こんな言い方しない。こんなやり方なんて選ばない。

俺は落ちている警棒を見つめた。

(でも……だけど、俺は……)

そんなこと出来ない。

「解ったか？ 彼女はおまえが来ることを望んでいない。それでも通りたいたいならオレを倒せ」

また、そんなことを言う。

「おまえはそれで良いんだ？」

だから俺は確認をした。

「ああ。オレもおまえはここに来るべきではないと思ってる」

「……どいつもこいつも」

笑いがこみ上げる。

馬鹿じゃないのか、みんな。なにを必死になってるんだ。久保田さんまでなに言ってるんだ。

俺がただ玲華に会っただけなのに、なんをそんなに妨害する必要があるんだ。

ああ、そうかよ。これが玲華の意思なんだな。だったら……。

「おまえも玲華に操られてるんだ」

「何？」

ピクリと久保田さんが反応した。

だってそうだろう？

久保田さんは説明もなく、こんなこと言う人じゃない。変わってしまったんだ。

「それで？やるのか悠汰」

「できるわけねえだろ……。でもここは通る」

通る。そこだけはゆずれない。

だってそのために来たんだから。

「通るなら、やれ」

何度目かの短い命令後、久保田は地を蹴った。

構えてもない俺に向かって警棒を突き出す。

そこからは条件反射だった。咄嗟に警棒を拾ってそれを払う。

手がビリビリと痺れた。

(そんな……)

この人は本気だ。本気の出している。

俺が戸惑ってる間にも二打目、三打目が繰り出される。

「っ……！やめろよっ！」

もうやめてくれ。

攻撃されることよりも、その本気が痛い。

俺はギリギリのところでかわすことぐらいしか出来ない。

久保田さんはもう、なにも言わなくなった。

打ち合う音と土を蹴る音だけが暫く続く。

(いい加減にっ)

スタミナが切れる、と感じた。

形振り構わず、一度だけ相手の顔に向かって横殴りに払う。

久保田さんは難なく避けた。

「何だよおまえ！俺は玲華に会いたただけだっ！その何が悪いんだよ！」

その隙をついて下がり、距離をとった。

「知る必要はない。おまえはただ待ってる」

「嫌だ！なんでみんなそう言う！？」

説明もなしでそればかりだ。納得しろと言う方がどうかしてる。

「覚悟とか俺のためとか！訳わかんねえ……でも、あいつが一人、大変なことになってんだろ」

そこだけは間違いなくて、変な計画を立てないといけない状況なんだ。

「大変なんだよな」

もう一度俺は確認した。久保田さんの表情からなにかを読み取るうとする。

「そのためにオレがいる。オレのほかにも護衛ならいるんだ。だからおまえは必要ない」

だが、変わらない。俺のなかに後れ馳せながら怒りが込み上げてきた。

「てめえ、よくもそんなこと……」

「それから笹宮比紹と会うのもやめるんだ」

ビシツと警棒を振りながらそれに被せられた。

またそれかよ。俺の行動をおまえが決めるな！

「だからっ！命令すんなっ！」

怒鳴り散らしたいのに、また無視されて久保田さんは突っ込んできた。

クロスするように引き、勢いをつけてなぎはらうように。

それに慌てながらも下がってかわした。
しかしすぐさま上がった腕を振り下ろしてくる。
俺は下がることしかできなかった。

そうしていくうちに背中が壁に当たる。

(しまった)

逃げ場がない。

それでも久保田さんは跳躍した。勢いを含めた一撃。
横に逃げなければ。瞬時に判断し、体重移動を試みる。
しかし、そのとき。

何故か動けなかった。脚にきていたのかもしれない。ガクンと膝
が下がっただけで地面から足が離れなかった。

ヒヤリと背筋に冷たいものが走る。

それでも久保田さんは止まらない。

上がりきったその右の脇腹に隙を見つけた。グツと警棒を握る手
に力を込める。

でも……………。

それだけだった。

確実に狙えば止められたのに、俺は動かなかった。

そして、とてつもない衝撃を頭に食らう。

脳が確実に揺れたのを感じた。それからこめかみ辺りから濡れて
ゆく感覚。すごく気持ち悪い。

「おまえっ！なんで反撃しないんだよ！」

意識が遠のきそうになる感覚が襲ってくるなかで、それを手放さ
ないようにしたいと、強く思ったことは憶えている。その隙間から
聴こえた久保田さんの怒鳴り声。

(なんでって…………)

馬鹿だ、こいつ。そんなことも忘れてしまったのか。

あのとき言った自分の言葉なんて、それくらいのものかよ。

おまえが言ったんだろ、暴力を封印しろって。

どんな理由にせよ、殴ることは暴力だ。そういうことを解決

するために使うな。

それを聞いて納得したんだ、俺は。普段から封じておけば、いつか攻撃的な自分は消えて無くなるかもしれないって、思ったんだ。

「馬鹿！だからっっておまえ！自分の命がかかっているとときにまで抵抗しないでどうすんだよ！」

ああ、駄目だ。

なにも見えない。なにも考えられない。

「だからっ！おまえは駄目なんだ！極端なんだよ馬鹿！」

なにかまだ叫び声が聞こえる。だけど遠い。

叱ってるのだけはとりあえずわかる。

「ばかやるっ……」

なに？聞こえない。

せめて、どんな顔でいるのかを、知りたい。

「なにも心配すんな、悠汰。大丈夫だから。きっと上手くいく。オレがかせるから。だからおまえも頑張れ……」

なにか、聞いておかなくてはならないことを、言っている気がする。

ちゃんと、起きて……聞か……な、きや……。

揺れている。

規則性のある振動を感じる。

それでも決して動かない。体勢を維持する努力なんて、欠片もしていないのに……動かない。指先ひとつ動かない。

運ばれているんだ、と思った。

どこへ？

俺はまだやらないといけないことがあるのに。どこかへ行っている場合じゃないのに。あと少しで辿り着けたのに。

俺のするべきことってなんだろう。

おまえは必要ない、っていう久保田さんの声がやけに残っている。それからすごくたくさん“馬鹿”って言われた気がする。

あんまり言われるとシャレになんねえからやめるよなって、怒鳴りたかった。

命がかかっていると大袈裟なんだよ。おまえにそんな殺気なかつたくせに。おまえに、そんなことできるわけないって、ちゃんと知ってたんだよ。……ってちゃんと聞いたかった。

でも断念された。

目の前が真っ暗になったんだ。

瞼が重くて開かない。

それから寒い。

すごく寒い。

頑張っでどこかを動かそうとすればするほど頭がガンガン痛む。意識を手放せと訴える本能。

そうすれば楽になるから。

(ラクになりたかっただけなのか、俺は)

キレイごとをいくら並べても、結局それが答えか。

悠汰、好きよ。

あの日、玲華がしばらく逢えないと告げに来た日の別れ際、彼女はそう言った。

悠汰のことが好き。だから大丈夫よ。

なんでわざわざ念を押した？まるでそう言わないと、自分自身が不安にでもなるかのように。

そうだよな。

強そうに見えるけど、彼女も普通に怖いことはあるんだよな。知っていたはずなのに。

あたしを護ってくれるんじゃないかったの？

あれはいつ言われた言葉だっただろうか。

だけど結局、護ろうとさせてもくれないじゃないか。

いつも。今回も……。

……違う。

俺に純粹に玲華を護る気持ちがあつたかと訊かれれば、俺はたちまち目を逸らしてしまうだろう。

だってラクになりたかつただけだから。現状を知って、自分を落ち着かせたかつただけなんだ。おまえの、無事な姿を。笑っている顔を。

それじゃあ愛想を尽かされても仕方ない、よな。

* * *

ここがどこで、自分が誰でいつまで何をしていたのかわからない。

目覚めたらそんな感じだった。

なんだかとても切なかつた感情だけが、胸に残ってるみたいだった。

眠っている間、話し声がしていたような気がする。意味まではつかめない。遠い場所で聴こえたり、近くなったりしていた。

それから嫌いな臭い。嫌いだと判る臭いが、ここには充滿してい

る。ここにはいたくない。

(あ……)

家族の顔が出てきた。

順々に視界が開けてくる。それから 全てが。

(ああ、そうか……)

記憶の混乱はおそらく物の五分。それだけ。

忘れていた方が幸せだったのかもしれない。そう思うほど無神経になってる。

ここは親父の病院だと、思い出せたらすぐにわかった。ここへは何度か来たことがある。

誰もいない。個室だった。

とりあえずホツとしてしまう。誰とも絡みたくない真情は、怪我をしたところで変わってなかった。いや、寧ろもつとひどい。

なにもいまは考えたくなかった。

時間とかの感覚がわからない。とりあえず暗いから夜なのはわかる。その程度。

だけど時計を確認するほどの興味もなかった。腕時計は外されている。

(クサイ……)

薬品のおい。臭覚だけは放っておいても自然と醸し出してくるから厄介だ。無視できない。

この臭いを嗅いで思い出す光景がひとつ増えている。今までは子供の頃の落胆した気持ちだけだったのに、今は兄貴が父親を刺したことが克明に呼び起こされていた。

思い出すと、あの時の血の臭いまで混ざっているような気さえしてくるから不思議だ。

気分が悪くなる。

「あ。神崎くん？」

突然病室のドアが開いたと思ったら人が入ってきた。

(拓真)

なんでこいつがここにいるんだろう。
俺はまた幻覚でも見ているんだろうか。

「良かった。目、覚めたんだね。呼んでくるから待ってて」
ドア付近まで来て、そう言うなり踵を返して出て行ってしまった。
誰を、呼んでくるんだろう。

そういうことが、いまの俺にはすぐには思いつかない。
だけど人が来るのは嫌だという感情が湧き上がりはじめていた。
勢いよくベッドから上体を起こす。

「痛っ……」
途端、頭に激痛が走った。そのまま動けず両手で頭を押さえつけ
る。

頭に包帯がされているのにこのとき気づいた。むしゃくしゃして
包帯を掻きむしっても、しっかり巻かれていてほどけない。

「畜生……」
もう嫌だ。こういう痛みとか苦しみは。もう充分だ。
でも。

嫌だと思うのに、殴れなかった。……久保田さんを。

すごい気迫で、本気だったと思う。でも隙はあった。あったのに
……。

(イタイ……)
胸が痛い。息苦しいほど。

俺のことぐらい見透かしてるはずなのに、久保田さんは手加減し
なかつた。本気で拒んでいた。

一番最初に現れたのが久保田さんだとわかったときには、かなり
驚いたけど、なにより一瞬安心したのに。

久保田さんなら通してくれると思った。それどころか、協力して
くれるんじゃないかとまで考えた。

甘かつたんだ。

頑張れ……。

微かに根底に残っている言葉があった。

(頑張れって言った?)

誰が?

思い出せない。

これ以上何を頑張れというんだろう。

「神崎くん! まだ起きたらダメだよ!」

また、拓真の声がした。かなり焦ったような声が、今度は先ほどよりも近くまで。俺の近くで聞こえた。いつの間にか。

顔を上げると、拓真の背後に兄貴と……それから父親がいた。思わずそのまま顔を伏せる。

「おまえは進歩がないな」

父親の呆れた声が振ってくる。どうせまた、無様な失態をした俺に見切りをつけたんだろうと思った。

「悠汰。おまえ何してたんだ?」

兄貴も同じ位置に立っていた。父親と同じ側に。

もう庇うことさえ厭わしく思っているのかもしれない。こんな失敗をした俺に。

「関係ないだろ」

俺は煩く思っわづらってベッドに潜り込んだ。

ダメだと、危険信号がする。痛んだ頭の片隅で、こんな気持ちのまま会話をしたらいけないと。

「彼、萩原くんに聞いたよ。最近授業にも出てなかったそうだな」

兄貴が近寄ってきたのが気配で分かった。

「うるさい」

「干渉されるのがウザいのは聞いた。けどな、夜も出歩いてこんな大怪我して、それで何も言わないってことは許されないんだ。何があつたか話してもらおう」

兄貴は硬質の声だった。怒っているのかもしれない。

なんで? 怒られる理由なんてない。

そう思ったら止まらなかった。

ガバツと布団を右腕で押しつけ感情に任せて怒鳴る。

「兄貴に言われたくないんだよ！自分だって好き勝手してたんだろ！ほっとけよ！」

僅かに、でも確かに兄貴の顔が歪んだ。傷つけたんだと気づいた。ここでそんなこと言わなくても良かったのに。意図しなくても、兄貴を責めるような意味が含まれてしまった。

自分の馬鹿さ加減が悔しくて、また布団で自分の顔を隠す。

（違う）

こんなことは間違っているってわかってても、どうしたら良いのか完全に見失ってしまう。

言わなきゃ。言わないといけない言葉が、ある。

「そうか。それは悪かったな」

だけど兄貴が先に言葉を発した。

「今日は帰る。また明日来るから」

そう言うのと数秒して扉の開閉する音がした。本当に帰ったんだ。

……俺が謝る前に。

（馬鹿）

俺が馬鹿だった。久保田さんの言うとおりで。

「悠汰。おまえ俺にあんなに偉そうなことを言っておいてこのザマか。たいしたものだな」

「……………」

「親として事情は聞かせてもらうぞ。それから罰を考える」

この人は変わらない。いつも俺が何か問題を起こしたらこう言うんだ。

だけど俺は変わった。良くも悪くも。

もう怯えて黙り込むことは出来なかった。

「親として？よく言えるよなそんなセリフ。自分だって未だに答えが出せてねえじゃねえか！離婚も出来なければ母親と全うに話もしない！そんなんで偉そうにバツとか言ってるじゃねえよ！」

「神崎くん！」

拓真の叱る声が聞こえた。

「そんなことを布団被ったままでしか言えないおまえはなんだ？そういう態度ばかりとっていると、周りから人がいなくなるぞ。……それでも俺は構わないがな。無駄な交友関係を律する手間が省ける」父親もそれだけ言って帰ったようだった。音だけで判断した。

布団剥がされて、殴られるかと思ったのに。

以前のあの人ならそうしてたと思う。

人がいなくなる、というキーワードが上滑りして落ちていくみたいに掠めた。

いまの俺にはよくわからない。

「神崎くん。良くないよ、ああいう態度。二人ともすごく心配してたんだ。君がなかなか目覚めないから」

「拓真が、説教かよ」

「違うけど。でも言いたくなるよ、いまの神崎くんを見てると。だから授業サボってたことも言わせてもらったよ。最近おかしいから」

「これで普通なんだよ、俺は。これが本当の俺なんだよ。だからおまえももう帰れ」

いまは碌なことが言えない。口を開けば傷つけるような言葉しか出ない。

「なんだよそれ。そうやって今度はボクを追い出すの？でもボクは帰る気はないんだ。神崎くんの本音を聞くまではね」

静かだったけど、有無を言わせない何かを拓真から感じた。

こいつも実はおかしくなってんじゃないか？こんな奴だっただろうか。

「本音なんて、知ってどうする」

「君が辛そうなのはボクでも分かるよ。見ていてすごく分かる。だから少しでも助けられることがあればって思うんだ」

助け？

出来もしないのによく言う。比紹も同じように言ってくれたのに、結局失敗したんだ。

（そつだ、比紹）

彼はどうしているんだろう。俺の侵入がバレたせいで、比呂にも何か迷惑がかかっているかもしれない。

俺は布団を退かして、ゆっくり起き上がった。もう、大丈夫だった。

だから拓真に言った。

「だったらここから連れ出せよ。ここにいたくない」

「駄目に決まってるだろう！バカじゃないのか、君は。あと最低でも一週間は安静にしてないといけないって言われてるんだよ！」

「怪我ならもう大丈夫だから。行きたいところがあるんだ」

「神崎くんはなんにも分かってない！脳は今のところ問題ないって先生言ってたけど、本当は大事な神経ぶっ飛んだんじゃない？」

「おまえ！喧嘩売ってんのかよ！」

「君と喧嘩して勝てるわけじゃないよね。君はねえ、怪我だけじゃなかったんだよ！風邪をこじらせて肺炎だつてさ！あとあんまり寝てなかっただろう。栄養も偏つてたみたいだし。何やってんのさ！だからこんなに目覚めなかったんだ！」

「ちよつと待てよおまえ……。耳元で怒鳴るな。頭に響く」

「なんだかグツタリしてしまう。」

状況が呑み込めない俺にそんなに責めるか？普通。

肺炎つて嘘だろ、と思った。

だつてそんな症状はなかった。咳も出なかったし、熱も……。

(熱は、わからないか……)

なにせ測つてないんだから。でも頭がくらくらしていたような気もする。

「自業自得だよ。自己責任の範疇だよね」

「俺はどれくらい寝てたんだ？」

「やつとこの質問に俺はたどり着いた。」

なかなか目覚めなくて辺りで、聞き逃していたことをいまごろ思い出したみたいに甦る。

「丸二日だよ。今日は日曜日だからね」

「え？」

思っていたより、かなりの日数が経っていた。まったく感覚がつかめない。

(二日?)

確か二日って。

曜日の感覚はどうでもいいけど、二日というキーワードは最近聞いた。綾小路があと二日くらい待てないのか、ってあの日に言っていた。

俺は頭を抱えた。痛みではなく、思い出そうとするときの条件反射だった。

「玲華。あいつ、戻ってきてないのか？」

玲華の祖父が言った二十日の期限。それが今日だったはずだ。

ならばもう、あの家にいる必要はないんじゃないのか。相続のことなんて知らないけれど、俺は単純にそう考えていた。

「玲華さまはまだだよ。神崎くんは玲華さまに会いに行っただね」
なぜか断定的に拓真は言う。まるで予言者のように、どこか優しげに。

「行っただけど、会えなかったんだ。久保田さんが……邪魔した人がいて。でもその人が言うには玲華は俺が来ることを望んでないって言うんだ。あいつが何を考えているのか、俺はわからない。わからなくなってしまう」

気づいたらスラスラと喋っていた。あまりに惨めで説明するのも嫌だったのに。

拓真が、真剣に聞いてくれてるからだと思う。なぜだか解らないけど。

「心配してるよ、玲華さまは。きっと君のためなんだ。あの噂だってそう。それ以外考えられないよ」

「そうは、思えない、俺には……。俺は間違えたから。玲華の足を引く張るようなことをしたから、きつともう、心変わりを……」

「それって順番違うんじゃない？ボクはそうは思わないけど、もし

も今回のことが玲華さまの足を引つ張ることなら、なんでその前に拒むんだよ。そもそも君が動く前に噂は流れたじゃないか」

そう。確かにそうだった。あの噂で原動力となっただんだ。混乱してる？

でも不思議とその一箇所に感情が留まっっていて、動かない。

そうでなければ説明がつかない。きっと他に理由があっただんだ。心変わりする理由。

「じゃあ、俺に愛想尽かしたんだろ」

「どうしてそう思うの？」

「わからない」

ひどく疲労感を覚えた。そんな理由知りたくもない。

「わからないはずないよ。ちゃんと考えなよ」

だけど拓真は諦めなかった。俺の変わりに必死になっているような気さえしてくるほどの、力強い声だった。

「もういいんだ。ちょっと寝たいから、おまえもう帰ってくれ」

「神崎くん……」

最低だ。

寝る気なんてないのに言い訳みたくに使ってしまう。これは正直ではない。意地っ張りでもない。ただの嘘だ。

人が嘘をつくなんて、本当に簡単なことだ。

「結局、君は何も言ってくれないんだね」

静かに、言葉を落とすように小さく拓真が言った。

「いつもそうだね。ボクには何も言わないよね、神崎くんは」

「なんだよ？」

なにを言っている？拓真は。

「どうしてボクがここにいるのか、そんなこと君にはどうでもいいんだね」

「拓真？」

「久保田さん、知ってるよ、ボクも。一度会って喋ったよ」

「え？……ああ、保健室で？」

拓真が言いたいことがよくわからない。

でも拓真が会ったというならあの日だ。綾小路とか美山に絡まれた日。絡まれて過呼吸になって意識不明になった俺を、久保田さんが保健室まで運んだと聞いている。

「その日じゃないよ。球技大会の時、久保田さんは玲華さまに会いに来たんだ」

「ああ」

そうか。そういうこともあったなと、いまごろ思い出した。

学校まで久保田さんは行ったんだ。拓真が会っていても不思議じゃない。

「久保田さんが玲華さまに君のことを語った日だよ。ボクも君のこと知ってるんだ。全部じゃないけど、君が事件に振り回されていたのを聞いてるんだ。家族とうまくいってないってこともね」

抑制されたように淡々と拓真は語る。

俺は眉をひそめた。なにが言いたいんだ、こいつは。

「聞くだけ聞いて何もできないから、すぐ気になったし心配したよ。君は何もボクには言わないから……ボクから何か言ったり出来ないじゃないか！それをフォローしてくれたのは玲華さまだよ！一応ボクには報告しとくって、もう大丈夫だって教えてくれたんだよ！」

「拓真……」

知らなかった。そんな裏の事情があったなんて。

拓真はずっと黙っていたんだ。あんな前からずっと。

「ただ玲華はあの時だから、気遣っていたのではないか。だって現在いまじゃない。」

「だけど拓真には他にも友達いるし。俺のことでわざわざ気にさせるのって優しくないだろ？」

いいだろ？わざわざ暗い話なんかしなくても。

学校の教室のあの一角では、俺だって現実から離れたかったんだ。きつと。

「なにそれ？うわっ！サイテーだ！」

大袈裟に拓真は嫌な顔をした。でも本気だったと思う。本気で引かれてた。

「サイテーだよ、俺は。だからもう放つとけば」
本当に。

最低なことしか言えない。危機管理がなっていない。

心が一定の場所から動かなかった。

「ほっとけなんて言うけどね！だったらほっとかれても大丈夫なようにしてるよ！それがちゃんと出来てから言えよ！」

拓真にまた怒りが舞い降りた。怒らせてばかりいる、今日は。

「玲華さまだつてそうだよ！神崎くんが大変だから病院に来てあげてつて！メールくれたんだ。ごめんねつて、玲華さまが謝ることじゃないのに！」

ポケットから最新形の薄い携帯を取り出して、拓真は俺に見せ付けるように突き出した。

「おまえには来るんだ、連絡」

俺にだけにこない。やっぱりそういうことじゃないか。世羅にも綾小路もあいつに何らかの関わりを持っているのに。

「なんでそこにいつっちゃうのさ！君だけ連絡こないのがどういこうとかちゃんとわかれよ！」

「だから！何度も言わせるなよ！嫌われてるんだろう？もう！」

「違うだろ！今玲華さまは大変で！詳しくは知らないけど思ったよりその大変が長引きそうで！それまで君に連絡ないのは辛くなるからだろ！君にだけ連絡ないんだよ？それは君が特別だつてことじゃないか！声を聞いたら会いたくなる！でも会えない状況で。我慢してるんだよ、玲華さまは！何でか解る？これでわからないって言うたら絶交だからな！」

一気にまくしたてて、拓真は肩で息をしていた。僅かに涙目で、かなり興奮しているようだった。

それで俺は。

俺は少しだけ動いていた。頑固に根が這って留まっていた場所から、心が動いた。

「拓真、なんでおまえが泣いてるんだ？」

「うるさいなっ！ボクは君みたいに怒鳴り慣れてないんだよっ。こんなに怒ったこと、今までないっくらい怒ってるんだからなっ、悪いけど」

痞えながらも拓真は言い切った。腕で目をゴシゴシ拭ってる。

感情と共に自然と出た涙みたかった。

そういうのは純粹で、綺麗だと思った。いまの俺にないものだ。

「悪いな。泣かせて。ごめん、馬鹿で。……でも」

でも、と頭が纏まらないまま口にして。

玲華のことを言いかけてやめた。怒鳴り慣れてるそもそもどうなんだって言おうとして、やっぱりやめる。

「でも、絶交は高校生にもなっただろうかと思う」

考える間もなく言葉をつむいだら、もう一度うるさいなって言われて睨まれた。

* * *

いきなりでごめんね。

悠汰が大変なの。怪我して総合病院にいるわ。

あたしのせいなんだけど、詳しいことはまだ言えない。

勝手なお願いだと思うんだ。でもお願い。悠汰を、助けてあげて。もう萩原くんには頼める人いないのよ。

あたしは期限が伸びたから、まだ悠汰の前に出ることが出来ない。

でも必ず戻るわ。悠汰と萩原くんのあの教室に、必ず帰るから。

拓真は帰りがけに俺にメールの内容を見せてくれた。

よくわからない中で、胸だけが騒いだ。じっとしてられない衝

動が突き上げる。

「無茶させるために見せたわけじゃないよ！大人しくしてよ」

次の日は祝日で休みだった。

俺はそんなこと当然頭になくて。病院を脱け出そうとしたときに、朝早々にやってきた拓真に見つかった。

こんなことなら、形振り構わず真夜中に実行しておけば良かったと、またいまごろになって思う。

「おまえ……暇なのかよ……」

「違うけど、玲華さまに頼まれたからね。意地でも君を安静にさせるよ」

「結局。おまえも玲華が好きだよな」

俺の周りは全員、玲華が好きだ。それが比紹の言うようなことなのか……それはわからないけど。

「なに？嫉妬？心配しなくてもボクは玲華さまはもちろん好きだけど、君のことも好きだよ」

「……………」

やっぱり拓真は拓真だった。こういうことをスラスラ言える辺りが。

聞いている方が恥ずかしい。

「だから神崎くんは寝てていいから」

「俺は本当にもう大丈夫なんだ。むしろ動きたい。というかここにいたくない」

「我が儘だなあ。まあ分かってたけどね」

拓真はぶつぶつ呟いた。敢えてそれには返さないでおく。

外科医からの説明は受けた。いまが問題なくても今後数日で悪化するかもしれないこと。それには定期的に検査して内出血をしてないか見守ること。

(なんかメンドイ……)

いまはそれどころじゃないのに。一刻も早くこの状況をなんとかしたいのに。

「なんとかなんねえのかな……」

「退院のこと？それとも玲華さまのこと？」

「とりあえず両方。もう一度あの家に行くんだったら、ここにはいられないだろ」

「まだ行くつもりなの？意外とシッコイね」

意外としつこいって玲華にも言われた気がする……。かなり前に

「おまえは意外とキツイよな。そんな言う奴だったか？」

「元からこうだよ。っていうかもう神崎くんには遠慮しないことにしたから」

「ここにも本性隠していたヤツが……」

「誰だつてさ、嫌われたくなくて汚い部分は隠すものじゃないの？ボクは明るくて良い子って言われたこともあるけど。無意識に隠しているところもあると思うんだ。円滑な人間関係を構築するために」

「円滑な人間関係ねえ……」

「君はねえ、最初から遠慮なしだよ。そういうところ。ちよつと羨ましかったんだ。だからもっと話したいって初めに思ったんだよ。そういえば入学したところ、こいつはやたらと話しかけて来た。そんなこと考えていたとは……侮れない。」

本当はみんな単純そうに見えても深いんだな、と思った。いつも楽しそうに笑っている奴だと、そんな浅墓な目でしか俺は見れていなかったんだ。

それから拓真は、本当にずっと病室にいた。

余程俺が信用できなかつたみたいで、傍らの椅子に座つたまま読書していた。

君は寝てなよつて言つたきり集中している。なんの本なのかブックカバーがしてあってわからないけど、とりあえず分厚かった。

昼過ぎに、兄貴が宣言通りやってきた。俺は億劫で布団に潜りこんだままだつたけど、拓真と交わす話し声でわかつてしまった。

そして入れ替わるように拓真は立ち上がる。

「気を遣わなくても、居てくれて構わないよ」

「いえ、ボクもお昼ご飯食べたので、それまで神崎くんのこと見張って貰えますか？隙あらば脱走しようとしてますんで」

そういえばコイツはご飯食べてないよな。俺は病院食なんて初めから食べる気もしなくて置きっぱなしになっていた。看護師に文句言われながら下げられたけど。

拓真はちゃっかりしていた。告げ口と同時にそんな役目を兄貴に押し付けるとは……。ムカつく。

「ああ、なるほど。了解した」

冗談混じりに兄貴は笑ったようだった。

とりあえず怒ってないみたいで、ホツとする。

本当に拓真が出て行ってから、兄貴が変わりにそこに座った音がした。

なぜか息を殺して俺はじっと気配を窺う。

……っか、失敗した。

これでは起きるに起きられない。どうしよう。どういうタイミングで起きればいいんだ？

自然に、いま起きたように振る舞って、それで……。あ、来てたんだ兄貴って……。

そうだ。それで完璧じゃないか。

それにはまず、そうだ、まず寝返りを……。

(……………出来ねえ……………)

んなわざとらしい真似は到底出来ねえ。

といつても、今の状態が充分にわざとらしくて苦痛だ。

どうしようも完全に迷路に迷い込んでいたら、布団の向こう側から低く笑う声があった。

「おまえな、起きてるのバレバレだよ」

「気づいてんなら言えよな！」

俺は思わず怒鳴りながら起きた。ばつちり兄貴と目が合う。

やられた。

こつという姑息なことが、なぜかすんなり出来てしまう人なんだ。

腹黒いんだ、兄貴は。

「寝た振りをするなら呼吸はしといた方がいい。無音だと逆に怪しいからな」

「そんなんじゃないよ！狙ったわけじゃねえぞ！たまたま、流れで

……」

「ああ、わかった。そういうことにしておこう」

俺の弁解を聞きもせず兄貴は笑んでいた。

昨日のわだかまりがなくなっていて、不思議だった。

多分違っているのは俺の方だ。もやもやは完全には晴れていないけど、確かに前より楽な部分がある。体調が良くなってきたというせいかもしれない。

「ごめん、兄貴。いろいろヒドイこと言った」

「全部本当のことだ。気にしなくていい」

なんで兄貴はこんな大人なんだろう。二個しか違わないのに。嫌だな。

「俺はおまえが無事ならそれでいい。言いたくなったら言えばいいから」

「……………」

でも兄貴。俺はまだ諦められないんだ。心のどこかでずっと、玲華を追っている。

玲華が俺をどう思おうと、会いに行かないとぶんぎりがつかない。それで余計に嫌われることになっても。

というより、まだそういうことでしか動けない。他の手段が思い付かないんだ。

「そこで黙られると、まだ何か良からぬことを企んでいるのかと疑うけどな」

「別に企みなんて……………」

比紹に会いたい。携帯があればすぐに連絡が取れたのに。

「なあ、俺はいつ退院できる？兄貴」

「まだ決まってない。最低一週間は検査入院だ」

「俺は病院の臭いが駄目なんだ。そんなにこんなところにいたら、おかしくなりそうだ」

「悠汰……」

「家で安静にして、あとは通院になんない？」

兄貴や拓真の心配は分かる。だけどせめて少しでも動ける隙があれば。

「話してみよう。親父が許すか分からないが」

「悪い」

あの人は子どもを監視下に起きたがる人だ。

きつと兄貴から言ってもらえれば、許しは得られそうな気がしていた。

「勝手に脱け出されるよりはマシだからな」

兄貴はそう言っただけで俺の頭に手を置いた。

そういうの、子供扱いされてるみたいで、嫌だからやめろって言うてるのに。

「罪悪感が、残った。」

誰かに優しくされればされるほど、いつも罪の意識に苛まれる。

それは多分昔から。

いまは、胸に陰謀めいた意志があるからだろう。俺は兄貴を利用してしまった。だから、だ。

ならば以前は？

子供の頃は……。

（慣れて、いなかったんだ）

慣れていないんだ、今も。

優しくされるような人間じゃないと、そう思うから。いちいち申し訳なくなるんだ。

もう一度俺は悪い、としか兄貴に言えなかった。

いままででは考えられないほど、拓真が隣にいる。

「大丈夫？頭痛くない？吐き気は？」

一定の時間を置くと、思い出したようにそう聞いてくる。俺の目を覗き込みながら。

なんか変な使命感を持っているみたいだ。

兄貴に無理をいって外に出してもらえたけれど、それは条件つきだった。

必ず誰かといること。そして少しでも頭痛や吐き気がしたらすぐに言うこと。

(子供じゃねえんだから)

信用されていないんだと思う。

確かにそれに値する行動を、これまで俺も出来ていなかったわけだから、文句は言えないけど。

「頭痛も吐き気も殴られる前からあったけどな」

事実を話すと拓真が睨みつけてきた。

「それって風邪の症状じゃないの？」

「そんなんは俺は知らねえけど……」

俺が目覚めて更に二日。

拓真はなんと朝わざわざ家にまで来た。俺が療養を兼ねて学校をサボろうとしていたら、ウチまで来て「出掛けるつもりならボクをつれて行かないと駄目だよ」と言ってきた。

それで出掛けるのはなんか癪に障って、意地でも部屋にいたら、そのまま自然に拓真も居ついたという流れだ。

まるで見張られているみたい。

居心地が悪くなって、仕方なく出掛けるころには、昼をとっくに過ぎてそろそろ夕方という時間帯だった。

というか、やることないんなら家に来なよ、と拓真は言ったのだ。

ずっと家にいても本ばかり読んでいたくせに、俺がつまらなそうにしているのでも思ったのか、そう気を遣ってきた。

「知らないって……呆れた。そういう返しするかな、ここで」
「テーブルを挟んだ俺の前で拓真はぼやく。」

「つつか、いいのかよ。おまえも結局学校サボってんじゃん」
「ボクは体調不良で休みなんだよ。親から学校に話がいってるからさぼりじゃないよ」

「なんだよそれ。甘やかされてんな」
「サボりは親公認かよ。」

本当に甘いと思う。

拓真が呼んだ拓真んちの車でここまで連れてきてくれたし、来てみたらやっぱりこいつはお坊ちゃんって感じで、玲華んちには劣るけどすごい豪邸だし。テレビで見えるお宅拝見の家みたいに広い。

（俺が知らないだけで、使用人ってのはどこの家にもいるものなのか？）

ついそんな勘違いを起こしそうになる。

いや、まて。確か中学時代の友人、純平じゅんぺいの家には誰もいなかった。

そつだ、一般的なのは紛れもなくあつちだ。

家にも数ヶ月前にはいたけど、あれは両親が家事を放棄したのと、子供を見張るためだった。確実に存在意義に違いがある。

拓真の部屋は俺の部屋の二倍はあった。様々なジャンルの本が埋まっている本棚が学習机を囲っている。

漫画とかCDとか、置き場が無くて仕方なく置いてあるような、よく分からない置物とかで占めている俺のただひとつの本棚とは訳が違う。……違うところばかりだな。

「そんなに本読みたいなら俺帰る」

話しかけたら答えてはくれるけれど、すぐに本に集中してしまう拓真に、俺は申し訳なさとお惚ねたような気持ちからそう言う。

すると一瞥睨んでから、拓真はドサドサと本をテーブルの上に十冊くらい置きだした。俺の目の前に題名が見えるように重ねて置か

れる。

下から『最先端セキュリティ住宅編』、『金持ちから防衛方法を学ぼう』、『凶悪化する泥棒』、『あなたの危機管理大丈夫？』隙は必ずできる』、『センサー回路の秘密』、『真似しちゃ駄目よ、泥棒になる方法』……そんなタイトルの本がずらりとあつた。

「ボクが好きでこんな本読んできると思わないでよね。君が目覚めてから買ったものだよ」

「……拓真」

俺は感動してしまった。

ただの本好きの暗い奴かと思つたのに……。やっぱりこいつには敵わない。敵う奴も少ないけど。

「まだ諦めてないんだろ？ だったら知識がいるじゃないか」

「そうだよな……。俺は人に頼つてばかりだな」

人に話を聞いて安心しようとしたり、今回の事だつて比路がいなければ自分は独りでなにも出来ないで、ただ苛々していたただけだ。動いている分、少しでも成長している気になっていたけれど、違う。

なにも変わつてない。変われていない。

「そのことなんだけど、前ははどうやって忍び込もうとしたの？ 何かヒントがあるかもしれないから教えてくれる？」

「……」

失敗したことがヒントになるか分からなかったけど、俺は話すことに決めた。

比路に悪いとか、話すことで拓真に迷惑かけるとか、いろいろと頭を掠めたけれど、ここまでしてくれようとしてくれる拓真にもはや黙つてはいられなかった。

徐々に拓真の顔が険しくなる。

「その比路つて人、信用できるの？」

「なんだよ、おまえまで」

世羅も久保田さんも比路と関わるなと言つた。

俺には彼のなにながそんなに警戒させるのか解らない。

「だって彼はその家に住んでるんだろ？友達を連れてきたとか言っ
て、堂々と入れさせてくれればいいじゃないか。なんか、わざわざ
危険な方を選んでるみたいだ」

「んなことねえよ。あそこはいま他人に神経質になってるからって。
だからこれしか入る方法がなかったんだ」

無理やりに侵入する方法しか。

「それってどこまで本当なのかな？だって神経質になる理由って財
産のことだけだろ？玲華さまに関係ある人だってバレれば拒まれる
だろうけど、比路って人は端っこの分家だっていうし。あ、じゃあ
久保田さんはどうやって入れたの？」

「さあ？」

俺に聞かれたって知らない。

玲華と比路では許されている範囲が違うのかもしれない、という
ことしか思いつかなかった。

「なんか釈然としないな……」

拓真は難問を突きつけられたみたいに考え込んでいる。

俺は不愉快に思えた。

最も不安を感じていたときに助けてくれたのは比路だから。比路
に会えた事で道が進んだことは確かなのだから。

「やめろよ。比路を疑うの」

「神崎くんは信じてるんだね？」

「ああ、そうだ」

すんなり言葉が出た。信じるとか、そんなに大袈裟に考えてなか
ったのに。

なんの躊躇いもなく肯定できた。

（そうか。俺は信じてるんだ）

比路を疑う、という選択肢すらいままで無かったから、頭になか
っただけで。

「でも玲華さまはその人に関わって欲しくないと思ってる」

「なんだよ。なにが言いたいんだよ」

「そう言ったんだろ？世羅さまを通じて」

まだ拓真は眉根を寄せて難しい顔をしている。

「どうせ玲華の言うことの方が信じられるって言いたいんだろ！おまえも！」

なんだよ、みんな玲華玲華って。

確かにあいつは頭も良いし完璧だし、みんなに信頼されてるけど。拗ねないですよ。ここは大事なところなんだよ」

「誰が拗ねるかよ！会ってもないくせに人を疑うってどうなんだって言ってるんだ！」

「ちよつと神崎くん、落ち着いてよ。どうしたんだよ、そんなムキになって」

……どうした？

どうかしてるのか、俺は。

気持ちの整理がつかない。殴られる前の、病院で拓真と話した以前の自分に戻される感じがあった。

はつきりしない、ふわふわと揺れ動き一定に留まらない心情。そのくせ頑固にひとつのところから根っこが動かないで……。

(ムキ？)

向きになっているだろうか。

(比路はなに？)

前にも一度陥った意識。

俺にとつての比路はなに？

友達じゃない。計画の協力者が、共犯者なのか先導者なのか……。どれも違う。

(だったらなに)

「とりあえずボク考えるよ。だから一人で動かないでよね」

「なんで……玲華が望んでないことを、おまえはしてくれるんだ？みんなただ待つてろって言ったのに……」

周囲の人と同調するところがあるくせに、ここだけは違う。そん

な拓真は理解ができなかった。

拓真はひとつ首をかしげ、高く積まれた本から顔を出しながら言った。

「っていつかさ、周囲に君たちの事がモロバレだっていう、そういう事実はどうでもいいわけ？」

「……あ……」

そういえば、とくに誰にも付き合ったことを報告なんてしてない。それなのに噂が出てモクラスメートたちに気を遣われていた事実だとか、美山の言い方も知っていたなだとか、そんなことにも俺は気づかずについて……。

あれ？

そういえば世羅にも綾小路にも京香にも言われた。玲華が選んだ相手みたいなことを。

「あれ？」

比路もあらかじめ知っていたから、俺に協力してくれたわけで。兄貴もいつの間にか当然のように彼女の話……。

「なんで？」

混乱した後、ようやく拓真に聞いたら彼は信じられないって顔をしてから、すっごく長いため息を吐いていた。

「まあともかくボクは君の友達だからね。助けたいって言ったのも嘘じゃないし」

「……玲華に心酔してたくせに」

「それとこれとは別だろっ！あいかわらず腹立つな！」

ぷりぷり怒って拓真は本を片付けだした。

それでようやく無神経なことを言ったと自覚する。

「友達だと思ってていいんだよな！」

それから真っ直ぐな目で訴えられて、謝る間もなく俺は勢いに押されて頷いた。

すると満足そうに拓真は笑って、残りの本も本棚に収める。

なんか……こいつこそ本当は騙されやすいタイプじゃないのか？

「それで？なにかいい方法は見つかったか？」

話の筋を逸らしたくて、本筋に戻った。

なんか嫌な汗をかいたな。

「何個かあるけど、どれも確実じゃないね。もう少し待ってよ。絶対完璧なの見つかるから」

立ったまま俺を見下ろして言う拓真は、とても精悍な面構えをしていた。

いつも爽やかなやつだと思っていたけど、こいつはそれだけじゃない。俺より断然深く物事を考えている。

初めて悔しさを覚えた。

同年代でいつも身近にいる拓真だからこそ、敵わないのが悔しかったんだ。

* * *

次の日、俺は学校へ行った。

これ以上休んだら拓真まで休ませることになってしまおうと思ってのことだ。

父親も兄貴も、一人になられるよりマシだと考えたのか、学校へ行くことを止めたりしなかった。

久しぶりに教室に入ったら周囲はざわついていた。

俺の頭にはまだ包帯があつて、好奇心な目を向けられた。

そんなことになるとは思ってもみなかった俺は、ようやくそこで包帯を取る。

トイレの鏡の前で取ったら、傷口は髪に隠れてそんなに目立たなかった。こんなことなら初めから取ってくればよかった。

(なにやっつてんだ、俺は)

何度目かになる自己嫌悪に陥る。

一時間目と二時間目の間。一年生の教室が並ぶ二階の男子トイレ。

……だよな、と確認したくなる。

俺が包帯をゴミ箱に棄てていると、なんと個室から美山が出てきたからだ。

なんでコイツがここにいるんだろっ。

「おい。やっと目が覚めたか？」

手も洗わずに俺に絡もうとする。

「クソした手でさわんなよ」

「それぞれ。あー良かった。つまんなくならなくて」

俺が睨みつけながら言ったら、すごく可笑しそうに鼻で嗤った。やっぱりこいつはムカつく。

自然に人を見下すようにできているみたいだ。

「なにしてるんですか？こんなところで」

「ちよっとこれからつき合ってくんない？」

俺は美山の言い出した言葉に眉をしかめた。

こいつが絡むと碌なことがない、となぜか心髓で感じる。

「いやだ」

「うわっ即答。馬鹿じゃねえのおまえ」

「この流れでついて行くと思う方がどうかしてる」

あまり相手にしないようにしてるのだが、ブツブツとぼやいてしまっ。

「そーんなこと言って良いのかなー。おまえの願いが叶うのに」

「……は？……」

いまなんと言った？

(俺の願い)

それはあの家に行き玲華に会うこと。一刻も早く。

「だからーこっちについてくれば、今夜またチャンスがあるんだってさ」

なんで美山がこんなことを言うんだろっ。

それでも一瞬、確かに俺は迷ってしまった。

拓真の顔が浮かんだ。今まで頑張ってくれた拓真に悪い、という想いから首を横に振る。

「……それは、こつちでなんとかするから、いらない」
「はあ？つたく……相変わらず頭でっかち」

普段いないはずの美山がいるせいか、男子トイレには誰も近寄ろうとしない。何人か同級生が入ろうとしたけど、気まずい顔して出ていった。

こいつがいたら迷惑になる。

俺は強引に外に出ようとした。俺が出ればこいつも出るから。

だけど美山は行く手をふさいだ。

「待てよ。しよーがねえな。こつこつ手は使いたくないんだけど……」

…これ見ても」

そして美山は内ポケットからデジカメを取り出した。画像が見えるように俺の前にかざす。

「！」

俺は息が止まりそうになった。

屋上で京香とサボっていたときの、画像。顔が最も近づいていた瞬間。

なんでこんな物が……。

背筋が凍って、だけどすぐに怒りがこみ上げた。

「おまえ！」

「怒んなよ。俺もこれは後味悪くてさ、後悔してんだ。隠し撮りなんてサマになんねえ」

「後悔している奴がこつこつというタイミングで出すかよ！」

「だよなー。だからー、おまえはただ黙ってついてくればいいの」

全く悔やんでる感じもなければ、謝ろうという気配もない。それどころか脅しの道具に使う。

ムカつくなんてもんじゃない。

こつこつ奴は許せない。

「こんなもので脅されない。別に悪いことはしてない」

「あっそう？でもさ、あのお嬢さんに見られたら誤解されるんじゃないの？ちょうどいい角度だろ、これ。本当にしてるみたいだもん

な。さつすがオレサマ」

未遂だと分かっていて脅しているのか。

玲華？

彼女がこれを見たら……なんだって？

もう愛想をつかれていた可能性もあるのに。

あるけど、もし傷つくようなことになったら？

それは駄目だ、と咄嗟に思う。

俺はあの家に行く。それだけで玲華に迷惑をかけているのに。これ以上は余分なところで玲華に負担をかけたくない。

「わかった。その代わりに俺の目の前でデータを消すと約束してくれたら、だ」

「ああ、いいぜ」

ニヤリと笑って美山は、あっさりとその場でデータを消した。

迷いのない手つき。これには俺の方が驚く。

「いま消しているのか？」

「おまえ変なところで頑固だろ？一度した約束は破らない。違うか？」

「……………違わないけど」

少し、意外だった。

こういうことを美山が言うとは思わなかったのだ。

「じゃ、いーじゃん。行こうぜ」

それから美山は俺の肩を叩いた。

兄貴に言われたのは一人になるなことだけだ。拓真じゃないと駄目とは言われてない。

言い訳のように頭の片隅でそう思った。

「あっ！おまえ、手えまだ洗ってないだろ！」

思い出してすぐ口に出したら、美山はちよつと面食らってた。きたねえ奴だ。

* * *

美山は学校を出て、そのまま電車に乗った。その間、どこへ行くのか何度聞いても教えてくれない。

「面白いとこ。着いてからのお楽しみだ」

そんなことを繰り返すだけなのだ。

まだ平日の午前中で、こんな時間に制服姿でいると少し目線を集めてしまった。

電車の中が居心地が悪い。俺たちは座らずに出入り口付近で立っていた。

俺は少しでも目立たないようにしたかったけれど、美山は慣れているのかまったく気にしている素振りがない。

「あんたちには、お抱え運転手はいないのか？」

玲華の家の運転手、眞鍋さんの車に送られることが増えてしまつて、お陰で俺まで車に慣れてしまっている。

駄目なところで影響を受けているのかもしれない。

上を知ったら降りられなくなりそうで怖いのに。

「あんなの見張られてるみてえじゃん。俺んちの家訓はそれぞれ自由生きるだもん」

「ふうん……」

自由の結果がこれか。

多少の束縛は子供には必要かもしれない。あくまで、多少だけど。

「うちは放任主義だけど、その代わり他人様に迷惑かけたのがバレたらすつげえキレられるんだ」

「迷惑かかってるんだけど？」

俺は美山を睨む。

「バツカ。こんなんは迷惑の内に入らないだろ？愛だよ愛」

「はあ？」

まったく話が通じない。っていうかこんな軽い男だったのか……こいつ。

ちよつと悪寒が走ったけど、風邪の名残ではないはずだ。

「俺は群れるのは嫌いだから友達とか少ないけどさ。代わりに気に入った奴は近くに置きたいんだよな」

「はあ……」

「おまえには素質がある。だからだよ」

「なにがだから？」

「愛ってやつだよ。おまえは気に入った」

「はあ？」

同じ反問をしてしまう。何を言っているんだ？こいつ……の世界だ。

今度は鳥肌が立つ。けれどこれも風邪ではないだろう。

「綾小路と仲良かったよな？確か……」

「ああ、やつはダチ」

「俺は？」

「手下」

「……」

やっぱりそういうオチか。勘違いする前に確認出来て良かった。本当に良かった。

こいつの手下なんて冗談じゃない。百害あって一利無しだ。

「あ、おまえいま迷惑だと思つたる」

「手下なんて言われて誰が喜ぶか」

馬鹿にするのもいい加減にしてもらいたい。

俺にだってプライドがある。

「バツカだなー俺の手下になったら怖いもんなしだぜ」

「おまえのその考え方が怖い」

「はあーおまえ、なんで亨がおまえのこと嫌ってるか全然自覚ないんだな」

「玲華のことだろ？」

好かれないとも思わないけど、嫉妬してるんだろう。綾小路は。

(あ……)

確かもうひとつ、本人から理由を聞いたな。

俺は今頃思い出していた。いや、少し前までは気をつけようとしていたはずなんだけど……。

「そうデシタ。あなたは先輩デシタね」

「てめえ、ムカつく」

慣れない敬語を使ってやったのに、美山は余計に不機嫌になった。おっかしいな！。

久保田さんは怒らなかつたよな、確か。

タメ口聞いても敬語をつかっても怒られんなら、タメ口でいいんじゃないの？と思ってしまう。

「おまえには敬意が足りないんだよ。人を人とも思わないところあるだろ」

「それをあなたから言われるとは思いませんでしたけど」

「それだよ、おまえ。丁寧語話せばいいってもんじゃねえんだぞ。

」ココロが伴ってないんだよ」

「……………」

なんでこんなに真面目に叱られてるんだ、他でもない美山に。

「あいつ言ってたぜ。礼儀知らずだとずっと注意してるのに直らないうて。そういうところを改めてくれないと好感なんて持てるはずがないってさ」

別に綾小路に好感なんてもたれなくてもいい。

そうは思うが、そんなことを他人にわざわざ言ってるっていうのは意外だった。

「そついえばおまえ、綾小路に変な伝言しただろ」

俺はようやく思い出していた。確かあいつ、目を覚ませとかなんとか言ってたような……。

「っへ？あいつマジで伝言したの？律儀なやつー」

「どついう意味だよ、あれ」

「ああ。もういいんだよ。あれでとは思えないけど……一応ましになつたみたいだしな」

電車内のモニターを見ながらぼそぼそ美山は呟いた。

突っ込んで訊こうとしたときに、電車が駅に止まった。扉が開くと美山がなにも断らずに先に降りる。

五駅ぐらい過ぎていた。

(ここは……)

最近も来た場所だった。

比路の大学が近くにあるはずだ。比路と会うとき、決まって俺はこの駅に降りた。

(なんでここに……)

美山のこれまでの関わりが俺の頭を巡った。

京香とのあのタイミング。あんなに狙ったように写真が撮れたのはなぜだ。

いやそもそも美山は“今夜もまた”と言った。それは前回の失敗を知っているってことだ。

(また、いまごろ気づくなんて)

本当に俺は鋭くない。

でもなぜだ、と思う。なぜ美山が比路や京香と関わりがあるんだ。「まだ何も訊くなよ。着いたら全て解るからな」

俺の考えを読み取ったのか、美山は先手を打つ。

ホームから改札に出て、ずっと美山の後についていく間、俺はなにも言えなくなっていた。

なにか嫌なことが起こりそうな、そんな予感がする。

そして、こういう予感はかなり高い確率で当たるってことも、俺はどこかで知っていた。

だから。

震えがくる。

見えない何かが迫っている時が一番恐いのはどうしてだろう。

「おい、なんつー顔色してんだよ。おまえ、もつと気楽に生きるよ」一度だけ美山は振り向いてそんなことを言った。

気楽？

簡単に言ってくれる。そんなふうに来たら、とっくにしていると

思う。

「おまえは気楽そうだよな」

何も言えないのも悔しくて、つい口から出た。

「バーカ」

だけでもう、美山は振り返らなかつた。ただずんずんと歩いていく。

その道筋も俺が歩いたことのあるところだつた。徐々に気持ちが悪く塞いでいく。

理由はまだ解らないけれど、確実に落ちていた。

「ここだ」

そして辿り着いた場所は。

玲華のところへ侵入する日に比路に連れてこられた場所だつた。アングラな店名もなにも記されていない扉。

美山が先に入って、中が開けるとこんな時間でもここは暗かつた。「比路」

やっぱり、中には比路がいた。カウンターに座っていたけれど扉が開く音で、椅子ごと回転させてこちらを見ている。

その隣には京香。カウンター奥にはあまり顔を覚えてないけれど、あのときの男性が今日も煙草をふかしていた。

「あれっ！こんなところでも会うとはね。びつくりー」

京香は俺の気も知らないで、満面の笑みを向けた。

やっぱりこの三人はつるんでいたんだ。少し考えれば分かることだ。まったく頭が働かなかつた自分に腹が立つ。

「いいから座れよ」

立ち尽くしてる俺の背中を美山は押した。

それがきつかけのように俺は動けた。やつの手を弾く。

「どついうことだよ！これは」

肩をすくめて美山はカウンターに近づいた。答えようもしない。その代わりのように比路が立ち上がって俺のところへきた。

「なに怒ってるの？ぼくはきみの事が心配だつたんだよ。それで、

もともと友達だった美山くん、きみが学校に来たら教えて欲しいって頼んであったんだ。あれからきみがどうなったのか気になってね」

「え……あ……そう……」

「そついえばそう、だった。」

あれから初めて会った、比路とは。

病室ではずっと会って聞きたいことがあったはずなのに。

どうして俺はこんなに恐かったのか、それ自体がわからなくなっていた。

「窓から見てたよ。玲華の護衛に殴られてたよね。酷いね、彼。きみの気持ちなんか全然無視してさ」

久保田さん。

すごく怖い顔をしていた。俺に怒っていたのが嫌なくらい伝わって。

「おい。別に俺と比路さんは友達じゃねえぜ」

不意に美山がカウンターから遠い声を放つ。それに比路は答えなかった。

「でも大丈夫だよ。今度は失敗なんかさせないから」

力強い言葉。相手に安心感を与える笑顔。

「なあ、比路はバレなかった？あの日、誰かに怒られたりしなかったか？」

「うん。大丈夫。ばれてたら今頃ここにはいられないよ」

「そうなんだ」

良かったと思う。それだけが気がかりだったから。

これで思い残すことはない。

「だったら比路。もうしなくていい。俺は俺で玲華に会いに行くから」

拓真と一緒に頑張る。そう決めたから。

あいつが必死になってくれて、俺は心を取り戻せた気がするから。まだ完全ではなくても、確かに動いたんだ。

「なにそれ？」

比路は眉を寄せながら首をかしげた。

少し今までの比路からは違和感のある仕草だった。

「えっと……悪い。でもこれ以上迷惑かけらんないし」

「困るな。今更そんなこと……」

それから俯いた。

もしかしたら傷つけたかもしれない、と思った。俺はよく無意識に人を不快にさせるから。また失敗したのかと思った。

だけど、次に顔を上げた比路は……。

笑い方が変わっていた。細めた目の奥は鋭くて、今までの柔らかさが嘘みたいで。

「比路？」

「きみはぼくの言うことに従ってもらわないと困るよ。じゃないと玲華が助からない。それでもいいの？」

「なんで比路はそんなに玲華を助けたいんだ？」

玲華を救える人だから俺に協力したいと、比路は前に言った。そもそも根本的に、なぜ比路が玲華のためにそこまで動くのかわからない。

それよりこの変化はなんだろう。

動機が速くなった。

「悠汰くん。雰囲気少し変わったね」

比紹からひととき笑みが消えた。

変わったのは比路ではなく俺？

「あの探偵と話したせいかな？それともお兄さん？」

「なに？」

彼が何を言いたいのかわからなかった。変化があるのかどうかも自分ではわからない。

「ダチだろ」

なぜか美山が間に入る。美山には何の話か解ってるようだ。

「友達？ああ……いるよね。きみにも友達は。そうか、その影響か」

「萩原拓真くんよね」

京香も椅子から飛び降りて、近づいてきた。比紹の一步斜め後ろで止まる。

俺の話をしているはずなのに、三人が別次元で会話しているみたいだ。遠くて核がみえない。

「拓真くんっていうんだ。どんな子？」

「可愛い好青年って感じかな。明るくて男女問わず友達がたくさんいるタイプ」

俺への質問になぜか京香が答える。拓真と、面識があったのか。

「ああ。なるほどね。そのなかの一人が悠汰くんか」

「悪いかよ」

「もちろん悪くはないけど。そういう子にきみは合わないかな。そうは思ったことない？価値観違うなって。その子にはきみの苦しみは理解できないと思う。きみは感受性が強いから、そんな気がなくても影響を受けてしまう。その子と離れた方が、きみは穏やかでいられるんじゃないかな」

比紹の言うことは、いちいち俺の心に刺さってきた。

焦燥感が湧き上がる。

納得できる場所があった。拓真は優しいやつだからこんな俺にも協力しようとしてくれる。

だけどもあまりに立ち位置が違う。共通するところがひとつもないのは確かだ。

（友達になる資格がないのは俺……）

だからあいつといると悔しくなる。俺より円滑な人間関係をあっさり築けてしまえる同級生のあいつには。

「これ見て、もらっちゃった。よく撮れてるよね」

「京香！」

唐突に京香は一枚の写真を取り出した。それに鋭く比紹が制止をかける。

はーいと言いながら渋々しまったけれど、一瞬でもわかった。あ

れは美山が撮った先ほどの写真だ。

「美山！おまえっ」

「怒んなよ。別に俺、嘘はついてないぜ。データ消去もマジだし。ただそのまえにプリントして渡しただけ」

相変わらず悪びれもせず、美山はカウンターに頬杖をつきながら言う。

「まさか……京香が俺に近づいたのって」

このためか。こういう写真をとるために、京香は好きでもない俺と？

「誤解しないでね、悠汰くん。これは玲華のためなんだ」

悲しげな表情を浮かべて、なぜか比呂が答えた。

「玲華のため？」

「そうだよ。玲華を外に出すにはきみの力が必要だったんだ。玲華を早くあの家から出さないと、どんどん彼女は狂っていくからね。

でも今彼女は完全に閉じこもってしまっている。この写真を見せても完璧に平然としてたよ。すでにあの家に侵食されてるみたいだ」

「玲華に、見せたのか？すでに見ているのか……玲華は……美山の脅しに乗る必要はなかったんだ……」

いろんなことが頭をよぎった。

玲華は動揺しなかった。傷ついたりはしなかった、のか。

ならば良かったと思うべきなのだろう。なのに、なぜか喜べない。

「美山くん、どう言っただけを連れてきたの？」

「しょうがねえだろ。そいつ俺に警戒心バリバリなんだから」

「日頃の行いが悪いんだよ、真人くんは」

「京香にだけは言われたくねえ」

三人の会話が上滑りする。

どういふ関係だとか、もうどうでもよかった。

ただ視界が暗かった。玲華のことではいっぱいになる。

「まったく、仕方ないね。とにかくそういうことだから。友達に任せないほうがいい。拓真くんだけ？彼は部外者だよ、関わらせ

ない方がいいよ。本当に危なくなるまえに」

「拓真は……比紹が友達として俺をあの家を迎え入れたら良かったんじゃないかって言った……玲華のことを隠して。そうすればあんな危険なことをする必要はなかったんだって」

なにを言おうとしてるんだろっ。

どうすればいい？俺は。比紹と拓真とどちらに着いて行くべきなんだ？

そんな迷いから出た言葉だった。

「違うよな？わざと危険な方を選んだんじゃないよな？」

「それはぼくも考えたよ。でもぼくは彼処あそこに居させてもらってる身分だ。いまはね。だから安全性より確実な方を選んだだけだよ。結果、失敗してしまってきみには申し訳なかったと思ってるけど」

「そんなこと……」

「あー……もういい」

俺が否定をしようとしたところで美山が遮った。

ウンザリ感を遠慮なく出して、頭を掻きながらこちらに素早く歩いてくる。

「もういいだろ。帰ろうぜ、神崎」

スレ違いざまに肩を押された。そのまま俺を連れて出ようとする。変わり身の早さに、直ぐにはついて行けなかった。

「美山くん、どういうつもり？」

「どうもこうもねえよ。もう用は済んだだろって言ってんの」

美山はなにやら機嫌が悪そうだった。

それはわかる。いや、それしかわからないというべきか。

「裏切るのは許さないよ」

「はあ？初めから仲間じゃねえよな、俺ら」

「悠汰くん！きみもだよ！ぼくを裏切らないで。今夜ここでまた待つてるから」

比路からどこか切実さを感じ取った。

すぐには展開についていけなくて、茫然としているうちに、美山

は俺を外まで連れ出してしまった。

「ちよっ……待てよ！まだ俺は比紹と話が！」

「あいつの話は聞くな！」

こちらの言い分を一切聞かずに、美山は切り捨てるように言い放った。

こいつまで、そう、言うのか？

なんで？

少なくとも今の会話の、なにが豹変させる要因となったのか分からなかった。

「てめえ、なんの分際で……」

「おまえがなんで腑抜けになったのか見ていてわかった。っーか戻らなくていいだろ、もう」

「何の話だよ？連れてきたのおまえだろ？説明しろよ！行けば全部解るって言ったじゃないか！これじゃ、全然わかんねえよ！」

「言われないとわかんないのか？てめえはっ！」

「わかるわけないだろ！俺たちは他人なんだから！何を考えてるかなんて知らねえよ！」

人の心が簡単に読めたら、こんなに苦労はしてない。玲華のことでこんなに取り乱していない。

それよりもっと昔。

子どもときだって、親の気持ちが読めていたらもっと、うまく……。

「あーわかったよ！俺が悪かった！だからそんな顔すんな」

「俺はまだわからない……」

「ったく、もっと根性ある奴だと思ったのに」

「悪かったな」

根性なくて。

すぐマイナスに針が触れて。悪かったなと思った。

「あーもう。つまり！おまえ比路に操られてんじゃねえよ。あいつはおまえが思ってるような奴じゃねえから」

操られてる？誰が？

そんな気はさらさらないし、俺は自分の意志でついて行っただけだ。

だけど、それよりもいまは、目の前のこいつが何を考えてるのかっていうほうが重要だった。

「おまえが、良い奴なのか悪い奴なのか判らない」

「はあ？おまえの頭ん中、そのどっちかしかねえのかよ」

「他に何かあるんだよ」

「だからおまえは比路に騙されんだ」

「おまえ！」

なんでこんなこと言われなければならない？

全く説明もしないで、一方的に！理不尽だ。

「あいつは奥が深い。俺らじゃ辿り着けないところまで墮ちていて

……歪んでる」

そのとき言った美山の目がすごく怖くて、先ほどまでの軽さがなくて、俺はゾクリとした。

しばらく頭の中で、ずっと今までの比路と自分のやり取りを思い返していた。無意識に。

それでも、なぜだか比路のことは悪く思えない。

これが操られてるってことなのだろうか、とちよっと考えた。

俺はそのまま学校へ戻った。だけど美山は、あんなとこに一日に二回も行くのはごめんだ、とか言ってふけていった。

電車を降りて、一人で着くころには三時間目が終わろうとしていた。

この学校はセキュリティがきつちりしていて、校門は登下校時間以外は閉まっている。申請がないと開かないのだ。前回綾小路が帰るときには、あいつが届出をしていたから開いていたんだと思う。

だから俺が帰るころには当然閉まっていた。

美山が別れ際、いい事を教えてやるといって、抜け穴を教えてくださいななければ、俺は未だに入れていなかっただろう。

というか「体育館裏に生えている樹が、塀を超えて枝が下に伸びている部分があるから、そこから登って中に入れ」なんて、なんつー大雑把な……。

玲華のあの家にも木々が生い茂っていた。

こつやつてあそこも入れんじやないかと一瞬思ったけど、あそこにはセンサーがあるんだつて、瞬時に思い直した。都合よく外に出ている枝も、その逆も当然なかったし。

やっぱりカメラよりもセンサーが厄介だな、と思う。あれできつと住人に知れてしまうんだろう。

(あれ?)

そういえば俺は殴られた後、どうやって出たんだろうか。

久保田さんが出してくれたんだとは思うけど、どうやってセンサーをかい潜ったんだろう。

もしかしたら、中からは簡単に出れるのかもしれない。

……つていうか、俺は成功していたらどうやって出るつもりでいたんだろう。

確か比路とは入り方は打ち合わせしたけれど、出方はまるきり話

しに出なかった。

(まあ、俺も玲華に会うことしか考えてなかったし……)

そんなことを考えながら人気を避けてチャイムが鳴るのを待った。もうサボることに慣れている自分に驚く。

授業に出なかった一回目というのは、あまり自分でも覚えていない。ぼんやりしていたら、授業が始まっていたというのが実際のところだから。

親からの他人を介しての束縛があつて、実は中学時代も一度しかサボったことはない。罰という名の暴力をふるわれてからは、もうそんなことはやる気すら起こらなくなったのだ。

休み時間になって教室に戻ったら、すかさず拓真が睨んできた。

「神崎くん。なにか言うことあるよね」

「……悪い」

それ以外に何が言えるんだ。

「自分がどういう体調かわかつてる？」

「まあでも……一人じゃなかったわけだし」

「相手が美山先輩ってことだけで大問題だよ」

吐き捨てるように拓真が言う。

やっぱりバレバレだったらしい。きつとまた、噂とかいうものが立っていたんだろう。

「珍しいな、拓真がそんなふうにするの」

「自分があの人になにされたか忘れたんじゃないの？」

「忘れてはないけど……」

まずい。拓真が本気で怒ってるみたいだ。これはかなり心配されていたんだろうな。

もう一度悪いと謝った。

それから昼休み時間になると、拓真から話がしたいと改まって言われた。

誰にも聞かれないところがいいと言われたので、例にならって屋上を案内する。だけど外に出てみると肌寒かった。

「こんなところにいたんだ。それじゃあ風邪も悪化するよね」

「あのときはまだ暖かかったんだけど」

「そうだよ、ここ二、三日で急激に冷え込んだんだから」

「わかっただけなら言うなよ」

「君は暖房完備な病室にいたから知らないと思って。教えてあげたんだよ」

こいつはどんどん遠慮がなくなってくる。もしかなくても、一生勝てないんじゃないか。

とくにいまは、俺の方が罪悪感があるから強気に出れないところがあった。

「それで？学校脱け出してどこに行ったの？」

「……美山に連れて行かれて比紹と京香に会ってきた」
仕方なく素直に話す方を選ぶ。

心配かけたのは悪かったと思うし……。それに話さなければいけないことも確かにあったんだ。

「だからさ、今夜もう一回比紹とやってみようかと思うんだ。悪いな拓真」

「やっぱりちよつと変じゃない？その人」

最後の美山の言葉までは伝えてないのに、ひと通り聞いただけで拓真は訝しがった。

「どこがだよ」

また俺は不愉快になる。拓真も美山も一方的すぎてムカつく。

「あの家に迎え入れるやり方は、考えはあったって言ったんだよ？」

「そつだ。だけど居候の身だからって……」

「だったら京香先輩にそれをしてもらえば良かったんだ。仲が良いんだろ？京香先輩と」

「なんで京香……」

「京香先輩は元々あそこに住んでる人だよ」

「えっ。でも一条だよな、苗字」

「いろいろと複雑みたいだよ。京香先輩は戸籍は西龍院だけど、本人の強い希望で学校では一条って名乗ってるんだって」

「おまえ京香と面識あるのか？」

「そういえば京香も拓真のことを知っていた。」

「校内では有名な話なんだけど……。面識は一度だけ、京香先輩が神崎くんを呼びに来たときだけだよ」

「そうだ。そんなこともあった。」

「じゃあなんで京香は拓真の人柄まで言うことができたんだろう。」

「これも俺が知らないだけで有名な話なんだろうか。」

「おまえって有名人？」

「なに言ってるの？」

「質問が唐突すぎたようで、拓真から呆れ顔が返された。」

「では違うということか。」

「もしかしたら……」

「先ほど比紹に言われた言葉がひどく残ってる。」

「拓真くんときみは合わない。」

「共通しないって。」

「なぜ比紹の言うことはいちいち説得力があるんだろう。ちゃんと理論付けて言ってくれるからだろうか。」

「なあ拓真、俺らって一緒にいないほうがいいんじゃないか？」

「なに、言ってるの？」

「先ほどと同じ反問をキツ目な口調でされた。」

「俺はこんなだし、おまえに迷惑かけてることの方が多い。今回もおまえがこんなことに手を貸すっただけで、おまえに危険が及ぶかもしれないんだ。こんなことにおまえを巻き込みたくない。それに今回だけじゃない。俺といることで、悪い奴におまえが目をつけられる場合だってあるだろ」

「俺の周囲にいるから、京香は拓真のことまで認識したのかもしれないと考えられた。」

「比紹は悪い奴じゃないけど。美山とかだって知っている感じだった。」

たし……。

「ちよつと待つて神崎くん。もしかして誰かにそう言われたの？…
…もしかしてその比紹さんに？」

本気でなに言ってるの？って顔された。

俺はそれには答えられない。ここで頷くと、比紹のせいにしてい
るみたいで、何も言えなかった。

拓真の話が出たときの比路の変化が忘れられない。

なにを言いたかったんだろうか、比紹は。

「……ねえ、いま頭痛とかって大丈夫？」

俺の顔を覗き込みながら、何度目になるかわからない問いかけを
される。これには心配させたくなくて、頷いた。これまでと同じよ
うに。

すると。

間髪入れずに、殴られた。拳で。

ちよつと掠めた感じだから痛みもなかったけど、別の衝撃があっ
た。あまりに想像できないことで、驚きの方が強くて。

茫然としていると、拓真はちよつとバランスを崩していた。なん
とか踏みとどまって、それから涙で滲んだ眼を向けてきた。

「信じらんない！馬鹿じゃないのか！君は。ここでそんなこと言う
かなあ？……言っとくけど！ボクは人を殴るのも初めてなんだから
ね！」

また俺は非常識なことを言ったんだ、と思った。

殴られたことに脅威はなかった。ずっと避けようとしていたこと
だったのに。殴ることも、殴られることも。

きっと拓真の人柄だ。普段そういうことからかけ離れた、誠意あ
る人間性だからだ。

「ちくしょう。むかつく。殴る方も痛いんだ……」

俯いてポツリと呟く。

だから、やっぱり……。どうしても傷つけてしまう。

自分は影響されやすいと言われたけれど、俺だってきつとそれを

与えてる。拓真に。

確実に悪の方へ。

「友達だと思っただけでいいって言ったじゃないか。ボクが気に入らないならそう言えよ。そうじゃなくて本気で言っただけなら……そういう考え方改めてよ」

拓真の言うことは奥が深くて、すぐには理解できなかった。でも本気でぶつかってきているのは痛いほど分かって。

「ごめん……」

「いいけど。神崎くんがその人を信じたい気持ちはわかったよ。でもちよつとだけ待って欲しい。ボクもいろいろ見つけたんだって言ったよね、入る方法。やるのは神崎くんだから、一緒に話し合おうよ。最後には神崎くんが決めていいからさ」

いつもの人懐こい笑顔になった。胸のどこかにしこりが残ったままだったけど、俺もなんとか笑った。

* * *

「けつこう大胆だな、おまえ……」

壁で風を遮りながら座り込み、俺と拓真はそのまま屋上で即席の打ち合わせ会議を執行することにした。

俺は一度見た見取り図をなるべく思い出しながら、簡単に白紙に書いた。

そして拓真は作戦一から五までを、パソコンでまとめて打ち出された用紙を、家から持ってきていた。その二枚を地べたに広げながら話し合う。

その中の作戦二が俺の目をひいた。

「これにする？でも、これこそ帰り道が確保できないよ」

「帰りはいい。久保田さんとかに出してもらえるだろ？」

「あんまり軽く考えない方がいいと思うよ」

また拓真に呆れられてしまった。

「出るのは簡単だろ。センサーでバレたってそのまま逃げればいいんだから」

たとえ、久保田さんが協力してくれなくても……。

俺は続きのその言葉を呑み込んだ。

「うーん……そうかなあー」

拓真はあまり納得していなさそうだ。

「それに他のだと非現実的すぎないか？……一部の堀にこつそり穴を開けて入り、あとでハメておくって……これって作戦かよ？」

ちなみにいま読み上げたのは作戦五だ。おまけで入れたとしか思えない杜撰な内容だ。

「ウチの関係の人で、話のわかる人がいるんだ。その人をお願いすれば手伝ってはもらえると思うんだけど……時間がかりすぎるのが難点かな。センサーに触れなくても、開く前にバレちゃうね」

「ウチの関係の人？」

「父の仕事の関係の人」

考え込みながらも説明してもらったけど、まったく俺には理解度が上がらなかった。

そういえば拓真の父親がなにをしているのかも俺は知らない。

「なんの仕事？」

「いろんな催し物で特攻とかの演出をしてる会社。依頼によってだけど、大道具とかセットも造ったり、構想を練ることまでするんだ。父はその社長してる」

「ふーん」

いろんな仕事があるんだな。自分の視野が狭すぎるのを痛感した。ああ、だから作戦二が可能なんだ」

「そう。ボクも大きいこと言ったけど、結局その人に頼らないと今回は何も出来ない。そこが悔しいんだけどね」

紙から目を離して、拓真ははにかむように笑う。

充分だと思った。そういう人が周りにいることもひとつの才能だ

から。

顔が広くなれば、様々なところで可能性が広がる。それも拓真が円滑な人間関係を構築しているからなんだ。

「でも、その人にも迷惑かけることになるよな」

「神崎くんはそこは気にしないでいいよ。そこはボクがその人に気にかけることだ。その為にボクがあいだにいるんだから」

「そういうものなのか？」

「たとえば神崎くんがそこを軽く見て失敗して、なにか迷惑になるようなことが起こったら、それはボクの顔に泥を塗ったことになるんだ。だからどちらかというと、その人にじゃなくて、ボクに対してどれだけ思いやる気持ちがあったかどうかが重要になってくる」

「う、うん……」

よく解らない。それはどう違うんだらうか。

ちゃんと拓真にも迷惑かけたくない気持ちはあるけど。

「それより作戦四はどう？これもまだ案だけの状態で、調査が必要なんだけど、帰りを考えればこれかなと」

「ああ、駄目。俺、高所恐怖症だから」

「ええー」

サクツと断ると、凄く意外そうな顔をされた。

ちなみに作戦四は、ハンググライダーもしくはスカイダイビングで、上空から屋根に降りて侵入するというものだった。これも常識極まりない。

調査が必要っていうのは、恐らく上に向けてセンサーがあるかどうかだろう。つまり上空からの警戒度だ。

「ただど実は、この学園の塀ぐらいの高さもギリギリだったんだ、俺は。」

限界がどこまでかなんて自分でも知らないけど、上空はかなりヤバイってことはわかる。

「本当に？ナントカと煙は高いところが好きって言うけど？」

「てめえ……」

貶しすぎだ、拓真。なんとかって、わざと濁されたところが余分にムカつく。

「言っとくけどスキューバも駄目だからな！」

「なに威張ってんの？」

事実を言ったらさらに呆れられた。ちつくしょう。

「最初に言つてよ。計画の段階から配慮したのにー」

「聞かれないのに言えるか、こんなこと」

みっともなさすぎるだろう。それでなくても散々ダサイところ見られてんのに。

「他にあるなら言つといてよ。閉所は？暗所は？狭所は？女性は…」

…大丈夫そうだよな

「うるせえ！ねえよ！」

まったくもう……。

ありがちだろう？高い所が怖い人なんて。

大丈夫な人の気が知れない。普通に怖いじゃないか。

拓真は真面目に俺が言ったことをメモしていった。やめてくれ、と思つて論点を逸らす。

「それに帰りはいいつて言つただろ」

「それは駄目だよ、やっぱり。玲華さまと久保田さんがあれだけ阻止したかったのは、君という存在を隠すためだと思つんだ。たぶん行きも帰りも見つからない方がいい」

神妙な面持ちで拓真は返した。

どうしてもそこは納得がいかない。だけどそれについては何も言わなかった。また怒り出されたらたまらない。

「もうバれてんじやないか？あの日久保田さんに殴られた後、センサーに触れずに出れたかどうかわからないし。きつと病院につれてくために慌ててただろうし」

たぶん。慌ててたよな？

最後の方、まだ記憶が曖昧だけど……。

思い出そうとすると、前は頭が痛くて。いまは頭痛はしないけど、

代わりに胸が痛むから、考えないようにしてた。あの瞬間のことは。「久保田さんじゃなかったよ。君を病院に連れてきたの」「え?」

俺はてっきり、あのまま久保田さんが連れてきたものだ……。「もうちよつと若いつていうか。黒い男の人だった」

「黒い?」

「全身が黒い服で、印象も暗い……」というか静かというか地味というか……。そう、影みたいな人だったよ」

「誰だよ、そいつ」

「ボクは玲華さまのメールで知れたから、君より早く病院に着いたんだ。それで会えたんだけど、君が手術室に入ってボクたちが騒いでる隙にいなくなってた。だからごめん。名前とか聞けてない」

(そんな……)

久保田さんじゃなかった。

それがどうしてこんなに心にきているのかわからない。

慌ててくれたと思っていたけれど、もしかしたらそうじゃない……っていう、可能性がでてきたからかもしれない。

捨てられたのだろうか、自分は。本当に、邪魔だっただけなんじゃないのか。

「ごめん。もつと早く言うべきだったね。ただ、その人は玲華さま側の人間だと言っていたよ」

俺の顔色を見ながら拓真は言った。

「玲華側?」

「うんそう。ボクは神崎くんの友達だって名乗って、どうしたんですかって事情を聞いたんだ。そしたら、答えられないけれどこれだけは言えるって。久保田さんは頭を殴るつもりじゃなかったって。殴る直前、咄嗟に力を抜いたんだって」

「そつ、か……」

バカだな、俺は。

何も現状は変わってないのに。

(なんで、それだけで……良かった、なんて
そう、安心するんだろう。)

まだ本人から真意は聞けてないのに。その人が真実を話しているかどうかもわからないのに。

「神崎くん？」

膝に顔を埋めた俺に、拓真が心配そうな声をかけてきた。

「なん、でもない……」

ずっと胸につかえたものが、咽喉を通過して頭にまできた感じがした。脳を巡って涙腺を襲う。

でも泣かなかった。

泣かないように必死で耐えた。

いま涙が解き放たれると、立ち向かう意気込みとか闘志が崩れ去ってしまいそうな気がしていた。

大きく深呼吸を繰り返す。かつてしていたものとは異なる意図で。

なんとか治まった頃に、拓真が言った。

「やっぱり神崎くんは玲華さまに逢わなきゃ駄目だ」

「拓真……？」

「ボクは事情は詳しくないけれど、もしかしたら玲華さまが間違っている可能性だってあるんだ。このままだったら、玲華さまが帰ってくる前に全部壊れてしまうかもしれないよ。そんなの嫌だ！」

「玲華が、間違ってる？」

なぜかいままでそのことに頭がいかなかった。

そうか。玲華も間違うことがあるんだよな。すでに遠い存在で、あの頃と現在いまではズレがあるのかもしれないけれど、人間だったら間違うこともある。

それから、拓真は俺が駄目になるとは言わなかった。全部って言った。

止まらない欲望でこれまで突き進んでいたけれど、ずっと心のどこかで自分を責めていた。

俺がしていることは、自分のことしか考えてない自己中心的な行

動だつて。自分が安心するためにしていることだつてわかったから。でも拓真はそこを責めない。叱らないで、それどころか協力したいなんて言う。

「拓真。決めた」

少し意識を変える。

自分のためだけじゃない。こうなってしまう前に戻れるように立ち向かおうと。

(戻るじゃないな)

変化はあつていい。ただ、それでもこれからを笑って過ごせるように。遺恨を僅かでも残さないように。

進化する。

「作戦二でいこう。俺は拓真の協力であの家に行く」

「神崎くん……」

比路には悪いけど、今夜あの店には行かない。

拓真の方を信じたとか、そういう次元の話ではなかった。拓真は俺たちの輪の中にすでにいた人だから。こうなる前を知っている人だから、拓真と計画を実行しようと思つた。

* * *

こういう侵入のときは深夜に行うのはセオリーらしい。

人に見られる可能性を、少しでも減らしたいわけだから当然とも言える。だから前回はちょっとそれより早い。

しかし今回はちょっとそれより早い。

一般論としてだが、小さい子供とお年寄り以外ならば起きているだろう時間。所謂てっぺんだ。

拓真は俺に菊池きくちさんという人を紹介してくれた。火薬の扱いにはプロフェッショナルな人らしい。

すでに作業に入ってもらつてる。

「あたりまえじゃないか。失敗してボクのがバレたら迷惑かか

るのは親だよ」

拓真は今日のことを両親に打ち明けてしまったそうだと。それでマジかよ、って返したら、憤然としてそう言っていた。

だからそんな覚悟までして協力しなくていいのに……って言ったら、頭を軽くはたかれた。

あいつはどうかやら一回殴ったら、二回も三回も同じだと思ってる節がある。

「でもそれで親に止められないんだから凄いやな」

「信頼度の差じゃないの？君は日頃の行いが悪いんだよ」

菊地さんの準備が出来上がるまで、俺たちは例によって樹の影に身を隠していた。

やるまえに戦意喪失になりそうなことは言わないでもらいたい。脱力する。

「でも神崎くんはお兄さんが理解あるじゃないか」

「兄貴……？」

「どうせ言っていないだろうと思って、ボクからちゃんと報告したよ」

「……嘘だろ」

「そしたら弟をよろしくつて。良かったね」

ポンと軽々しく俺の肩を拓真は叩く。

「いつの間に兄貴と連絡先なんか……」

「君が寝てるま」

素知らぬ顔してサラリと言いのけた。

だったら初めのほうかよ、さっさと見えよな。そーゆーことは。

「相手が玲華さまのことなら仕方ないって言ってたよ。神崎くん、本当に現状もなにも伝えてなかったんだね」

そう言いながらも、やつは爽やかな笑顔を向けていた。

俺としては女のこと余裕をなくして思われるのが癪で、言えなかったんだ。

こんな軽口をたたいてる間にも、菊地さんは着々と準備をしてい

た。表に面したところから爆発音が聴こえる。

「始まったね」

緊張の含まれた一言を拓真が発した。

ああ、と俺は短く頷く。

「気をつけてよ。本当に行きだけの作戦だからね」

「わかってる。おまえももう行け」

いつまでもこんなところでウロウロしていたら、見つかってしま
う。

中に入るのは俺だけだ。

現場にも来なくていいって言ったのに、断固としてついてくるん
だから。

「うん。玲華さまによろしくね」

殺し文句みたいなものをわざと付け足して、拓真は走って行った。

(ばか……)

無駄に力が入るようなこと言いやがった。

それでも俺は動く。さらに奥へ。

一発目は騒ぎだけ起こすもの。人々をその場に集めさせ、塀に穴
を開けるためのものだった。

耳を澄ましながら移動すると、微かだが遠くから叫び声が聴こえ
る。

俺は玲華がいるという部屋から、最も近い塀にフック付きロープ
を投げた。前回より落ち着いて登れているせいか、スムーズに上ま
で行くことができた。

(きた……もう一発)

そして二発目は停電させるために配線盤のある部屋を狙うものだ。
家の中が真っ暗になった。

ここまでは計画通りだった。場所は見取り図でわかっていたから、
ラジコンにつけて遠隔操作するという計画。

菊池さんはなるべく近いところにいるんだろう。電波が届く範囲
に。

見つかる危険性もあつたけど、ちゃんと拓真が逃げるための車を用意させているから大丈夫だと思う。

前回使用したフック付きロープは、おそらく久保田さんが回収しているだろう。そう予測し、新たなものをちゃんと用意したのだ。思ったとおり、ロープどころか俺が侵入した痕跡がなにもない。

（高い……）

こんなに高かったのだろうか。前は本当に余裕がなくて、なにも考えられなかったことが逆に良かったみたいだ。

一瞬だけ躊躇う。しかしここで時間をとられるわけにはいかない。意を決して俺は飛び降りた。足底が痺れる。

ばかでかい敷地を俺は走り出した。そしていくつも並んである窓のひとつを適当に選び、その前でベルトに挟んでおいたボールを引き抜く。

「悠汰くん」

いきなり横から声がした。気配を感じておらずギクリとなる。振り返ると、外に比紹がいた。

どうして、と思う前に、そうか比紹なら爆発音でなにか察したのかもしれないと考えた。

「比紹……」

「やっぱり悠汰くんだったか。無茶なやり方したね」
「どうしてここが？」

いくらなんでも、この広い敷地の中で俺が侵入する場所を絞れるのは不思議でしかない。

「見取り図を見せてあげたのはぼくだよ。電気系統を落とすならどこから侵入しても一緒だからね。ならば玲華の部屋に近いところから入るんじゃないかと思ったんだ。すぐに到着しないと予備電源が作動するでしょう？」

「あ……」

単純に凶星という話だけではなかった。

（予備電源、あつたんだ……）

しまった。完璧だと思っていた計画に、実は穴があったらしい。拓真も気づかなかつたんだろうか。

「それで？ センサーを通り抜けて、次の建物にはどうやって入るつもりだったの？」

俺の持つているものを見ているくせに、わざと比紹は聞いてくる。「強行突破で悪かつたな。こじ開けようと思ったんだよ」

「ほんと考えなしだね。それじゃ侵入者がいたのバレバレだよ。こちきて、ぼくが開けた窓があるから」

いつもの笑みを浮かべながら比紹は歩き出した。

(助かった)

暗闇の庭の中を俺はついていく。

「待ってたけど来ないから、もうやめたのかと思っちゃった」

「悪い比紹。でも裏切ったってことじゃないから」

非難の色が声に含まれていて、焦りながら謝った。

「まあ仕方ないよね。きみが面白い人つてのは知ってたし」

「え？」

「ここだよ」

比紹が出てきた窓は、いまは誰も使っていない客室だと説明された。それにしても広い。この空間を無駄にしてるなんて、勿体ない話だ。

暗くて詳細は解らなかったが、完璧に洋風を真似ているらしい。

俺が靴を脱ぎかけたら、比紹が土足のままで良いと言った。

「ここからは一人で行きなよ。ちゃんと場所把握してるんでしょ」

「ああ。助かった」

本当に、有り難かつた。お礼を言って出ていこうとすると、比紹が待ちなよと言って呼び止めた。

「一つだけ話しておきたいことがあるんだ」

「いまじゃないと駄目か？」

できれば停電しているうちに動きたい。

俺には焦燥感があった。

「そつだよ。きみが玲華と会う前に言っておきたいんだ。本当はあの店で話すつもりだったんだけどね……」

あくまでも静かに比紹が続けた。

玲華に会う前にとつ言葉で、俺は走り出したい衝動をこらえ比紹に向き直る。

そして語られた内容は俺の想像を遥かに超えたものだった。

第二章・・・ 1

悠汰に最後に会ったのは九月十八日だった。その次の日から本家に潜入し、引きこもっている。

事の始まりは七月。

あのパーティのあった週の末、土曜日だった。警戒していたお父様が張り切って『わかった。パパたちで話を聞いてくる。玲華は来なくていいよ』って、言っていたからにお任せしたんだけど、結果は……。

『怒らせちゃった。ごめんよー玲華。やっぱり玲華が行かないと収まらないみたいだ』

っていうことで、次の土曜日に行かなくちゃならなくなった。

両親も一緒に行ったのだけれど、遠ざけられあたしひとりと呼ばれた。

お祖父様のお部屋は誰もが入れる場所じゃない。限られた使用人ぐらいだ。

身内であろうと入らせなかった。対面するときは、それ専用の部屋があつたから。

それなのにあたしはそこに通された。

中にはお祖父様とあたし、それとお付き役の千石明之さんせんじくあまゆき（推定二十六歳）だけだった。

千石さんは謎のお人だ。あたし達がこの家から離れてから雇われた人だが、いつもひっそり佇み、お祖父様以外の人との会話をしていないのを見たことがない。陰のようにいつも存在を消している。

長年勤めている秘書や執事は別にいるのに、お祖父様はその人たちより新参者の千石さんを近くに置いていた。あたしはお父様が帰省するときに、ついて行くぐらいだったので、数えるほどしか会っていない。

お祖父様の部屋はあたしから見ても広かった。普通の一軒家ぐら

いはある。

中央に置かれたベッドにお祖父様はいた。

うえから薄目の生地の布が張り巡らされ、すぐにはお顔が拝見できない。どの時代のどこの国に感銘を受けたかは知らないが、王様みたいな部屋だった。

「ご無沙汰しております。先日は失礼いたしました」

瞑目して頭を下げるあたしに、布越しに手招きされた。

「玲華か。よく来た。近くに」

「はい」

それは謁見を許されたということ。

布をかき分け、これまた大きいベッドの脇に跪く。そしてあたしはお祖父様と対面した。

「大きくなつたのう、玲華」

そう言う祖父の顔色は土色だった。

「お祖父様、ご気分が優れないのですか？」

「まあな。ワシももう歳だ。そんなことより、先週はなぜ来なかつた？」

「どうしても外せない用事があつたのです。不義理いたしました申し訳ございません」

「玲華。ここには畏かしこまらねばならない相手はいないよ」

「そうですね」

お祖父様には本性はとうに知られている。

いや、繕う姿勢の方が後からきているのだ。生まれた頃から可愛がってもらつてるから、隠しようがない。

今更猫を被る必要は確かになかった。それでも、許可の言葉が出るまでとは思つたのだ。本来は畏まるべき相手ではあるのだから。

「今日おまえを呼んだのは他でもない」

嫌な予感があたしを襲う。

それは急激にきたものではなかった。呼ばれていたときから感じていたのが、より強くなつたというのが適切なところだ。

「財産分与の話、だ」

「！」

そして、的中した。

その後お祖父様の胸の内を聞かされることとなる。それはあたしの予測を遥か超えたものだった。

「引き受けてくれるか？玲華」

言葉尻は柔らかいが、目では断るな、と言っていた。

それを前にするとどんな大人でも抵抗できなくなってしまう。…と、お父様たち大人は言っていたけど、あたしには関係も問題もなかった。

「うっわーナニソレ。お祖父様、性格わっるうーい」

「お、お嬢様……」

あのひっそりとしていた千石さんが慌てふためいていた。けど当のお祖父様は豪快に笑う。

「ワシにそんなこと言えるのはおまえぐらいだ」

「余生ぐらい大人しくしてたらどーお？」

「そう出来るものであればな。しかしおまえも知っているだろう。

ワシは一度決めたことを行動に移さなんだことはない。必ずおまえは頷くしかなくなる」

確かにそうだった。

不言実行、はたまた有言実行、そして何がなんでも実行！というのが西龍院源蔵という人物だ。

あたしは苦し紛れに笑う。

「嫌いに、なつてしまいそうよ。お祖父様」

お祖父様はそれでも面白いものをみたような、興味をひかれたようなものをその表情にうかがわせた。

「構わんさ。憎まれるのがワシの仕事だ」

そしてあたしは引き受けた。

色々なことが頭を巡ったけれど、引き受けると決めたからには徹底的にやりたかった。だから悠汰の件が片つくまで待つてもらったのだ。

それからはできる限りお祖父様と共に行動した。お祖父様の仕事といえは、とにかく人に会うことが多い。国内を牛耳っている大臣や官僚といった方から、海外にまで飛んで世界の大物たちと会ってきた。おかげで、本場のパリで社交界デビューなんてものにまで出させられたけど。

お祖父様はあたしという存在を周知徹底しただけで、ただ一人の孫として連れまわしたのだ。特にはつきりと後継者だという案内はしていない。

それは伏線だった。

身内に知らしめるための。そう、フリだけのものだ。

あえて通知をしなくても、これだけお祖父様と一緒にいれば上層部には情報がいく。

そうすれば勝手に警戒をし、自然に勘繰ってくれるのだ。それはこれ以上のないくらいの説得力になる。

そうしておいて、お祖父様は正式に人を集め発表した。

悠汰に離れることを告げた次の日、時間にして午後二時。

西龍院家にはすべての親戚筋が大広間に集まった。

それは近い血筋のものから、遠い分家や、なかには一度西龍院源蔵と関係を持っただけの身内まで。

普段めつたに来ることを許されていない者もこの日だけは特別だった。

いや、親戚だけではない。

企業と同グループに籍を置くものも僅かだがいた。

それもそのはず、一族の長である源蔵が今後のことを語ると宣言したからだ。

ざっと見渡しただけで百人は優に越す人々がその会場を埋めた。皆正装している。

お祖父様といまは亡きお祖母様の間には三人の実子がいる。その一人がお父様だ。他にも複数の。しかも一般的にみると人数的にも年齢的にも範囲が広い。女性と交遊関係があり、その全ての子供を認知してきた。

しかし妻として 法的に配偶者として 存在したのは一人きりだ。どんなに密になろうと内縁関係で止めて^{とど}いる。

それほど奥方は特別だったのだと、周りは噂するが、実際に本人が語ることはなかった。

この会場では、それに加え使用人などが準備に駆けずり回っている。しかしそれでも圧迫されることなく受け入れられている広間は、本家の敷地の内にあるものだ。

「いよいよ源蔵様が決断された」

「遅すぎたぐらいだ」

「何を言われるつもりなんだろう。こんなに人を呼んで」

「あなた鈍いわね。ここへ来て発表することなんて一つでしょう」
ざわざわと聞こえる人々の談話のなかから切り取られて聞こえた会話。

ここへ来て。

そうだ、この空間を作りし人はもうあまり時間が無い。

そのことを皆知っている。ご病気で衰えているという噂だけが駆け巡っていたのだ。

それでも孫の晴れ姿は拝みに行ったことも、これまでよりは断然少なくなっただけはあるが、海外へ渡ったことも周知の事実。

だからこそ自分の目で確認したい人も中にはいるのだろう。本当に一族の長が弱まっているのか。

それが本当だとしたら、その次には。

(いくら派手にしたいからってやりすぎよ、お祖父様)

あたしはその末端に近い席に座っていた。この日のために、お母様の専属スタイリストの吉野さんに用意してもらったピンク色のドレスを着て。

お父様はここに来ることを許されていない。正式に除外されているからだ。

なんとか引つかかっている枝の先の分家より、この家に関わることを認められていない。

その子供であるあたしが居ることに、不審げな目線をあからさまに送ってくる人たちは少なくなかった。

(……つたく。変わらないわね、この家は)

だからこそお祖父様も苦勞するというもの。

だけとお祖父様もその内の一人でしかないことも確かだ。分かっているからこそ本人も、こういう形を取る。

「皆様、お待たせいたしました」

約束の時間、二時を十五分ほど超えたとき、お祖父様の第一秘書をしている椿原慶二さん(しほきはらけいじ)がマイクを通して呼びかける。

会場全体が一段高くなつた舞台に集中し、静寂に包まれた。ピリツと緊張が走る。

挨拶もそこそこに、椿原さんはお祖父様を呼び込んだ。

お祖父様はその壇上に車椅子で登場した。

噂は本当だったのだ。痩せている。これほどまでに憔悴しておられたのか。あれではもう。

息を呑む音と囁きあう人の声。

これは本当にその為の席なのだ。憶測は確信に変わる。

その直後、呑むものが息から生唾へ移行する。目に当てられた現実から、欲望を含む希望的観測へ。

そしてお祖父様は杖をつきながら車椅子から立ち上がった。

マイクを通して声明を発表するために。

前置きは短く、すぐに本題は語られた。厳かな声で。

『私の命は長くない。そこで私は遺言書を作成した。その内容はここにいる西龍院玲華にこの地位と全財産を遺贈するという内容だ』

そこにいた全ての者の視線が一気にあたしに向かってきた。戸惑いと羨望と悪意の眼差し。

分かつていたことだ。予測の範囲内。

あたしは胸を張ってその全てを受け止めた。

僅かだつて怯むことは許されない。それが約束だから。

『玲華。おいで』

お祖父様に促されるまま、あたしは立ち上がった。

皆の視線があたしが移動するのに合わせて動く。付き纏まとわれれてくる。痛いほどの意識を含めて。

あたしは壇上上がった。そこでやっと皆と視線を合わせる。ひとりひとりを射抜くように見つめた。

「なんとということ……！」

先陣を切って怒りを露あらわにしたのは実の息子、お父様の弟である西龍院毅たけし様だつた。

実際に重要な企業をいくつも任されているし、政界との関わりも強い。

この中では一番の有力者で、最も後継者に相応しいと言われている人だ。

「あなたは正気か！？こんな……っ！まだ高校生じゃないか」

それを皮切りに次々と声上がる。

「そうよ！しかもあの薫かおるさんの子供でしょう？そんな権限どこにあるというのです！」

「何が出来るんだ？彼女に」

「あり得ない！こんなこと許がいたんされない」

不審と当惑。そして慨嘆がいたんの渦。

お祖父様の手前であるため、口にくそしないが“なんでこんな小娘に！”という意味合いが含まれていた。伏線を張ったところで、その想いは半減しないらしい。

予測を超えない反応にお祖父様は静かに続ける。

『黙れ。まだ話は終わっていない』

ピタリと全ての音が消えうせた。

そしてさらにお祖父様に注目が集まる。

『不服な者は多かるう。彼女が最も相応しいとワシは思うが、何故なにゆえそのように思慮するのか解せぬのであろう。確かに玲華はまだ何も功績を挙げてはおらぬ。それは遠い位置に在り、その契機が与えられなかった為だ。未成年かつ、拭えぬ男性優位の目線。そして封建的な風習。それらを差し引いても彼女が相応しいと言っておるのだ』
『誉めすぎだ、とあたしは思った。』

要らぬハードルをここまで上げるお祖父様のやり方に眉をしかめたくなる。

それでも凜と。目を逸らさずに悠然と微笑む。

それがお祖父様の指示だ。

言われなくてもそうする。それがあたしの……。

『しかし猶予をやるう。ワシの意思だけを押し通して狂気に陥られたと思われても癪だ。そう、それが嫌ならば、阻止したいと思うならば二十日以内に彼女を説得することだ』

お祖父様はそこでちらりと椿原さんに視線を送った。

椿原さんは頷いて予め持っていた一枚のA4サイズの紙を皆に見せるように開く。

『説得した証としてこの書面に玲華の署名捺印をさせよ。さすればその者にも遺産が、望むなら権力と地位が手に入る。こういう内容の遺言書を書いてあるのだ。その在り処はとある人が持っている、とだけ言っておこう』

そう、お祖父様は持っていない。それは探し出されて処分されないようにするためだ。大事に保管されている。

こんな無茶苦茶な内容を明かして、反発的に強硬手段に出る輩だっていないとは限らないのだ。

いや、要る。

ここには。必ず。

『このことを一族以外のものには晒してはならない。この屋敷にいる

者と、今ここで聞いている使用人は例外としよう。洩らした者には法的に権限があるうと一切受け取ることは無い。無論犯罪も然り。使用人がこの戒めを冒せばその主人に責任をとってもらう』

これが、お祖父様の考えた計画。

あくまで外れた道を歩かずに、知恵を絞り一介の女子高生と勝負しろと言っているのだ。

というより「犯罪を犯してはならない」という一言を追加させたのはあたしだった。そうしないと矢でも鉄砲でも持って来こられるともかぎらない。

(どこまで効くかはさておき……)

皆のあたしを見る目が変わっていく。

狩られる気分に陥った。背筋を冷たい汗が通る。

それでも凜と、在り続けた。

それがあたしの性だから。

* * *

その後からあたしにひとつの部屋を与えられた。いや、それは適切ではない。

マンションでいう2LDKの役割がその中にある。それでひとり分。だからホテルのスイートルームと言った方が近いかもしれない。浅霧家は完全な“和”だ。かつてパーティが開かれた館はまだ洋向きだったが、本邸も世羅が部屋にしている離れも日本古来の屋敷になっている。

ただここは全体的に“洋”。欧州風の建物。

お祖父様は浅霧家の当主功男様のように日本の趣おもむきに拘こだわってはいない。

まだ若い頃にヨーロッパの様式に惹かれこの家を建てさせたと言っている。

(人が必要だわ)

信頼のおける人が。

お祖父様は事前に使える人材を用意してくれた。それは主にはボディガードだった。あたしが傍若無人な輩に反則な手を使われないように。

それとお付きの人。身の回りの世話をしてくれるメイドと、用を言い付けることができる世話役。

「で？どうしてそれが貴方なのかしら？」

それらすべての筆頭に立つのは、なんと千石さんだった。ここへきて知った。

お祖父様はただ、信頼できる人材を選んでやったとだけ。

部屋に入って、やっとほっと一息つけたあたしは、ソファに座りながら傍らにただ立つだけの彼を見上げる。

ここには彼しかいない。あたしが人払いをしたから。

「私では役不足だと？」

「違うわよ。貴方があたしのとこにいて、お祖父様はどうするのよって言ってるの」

お祖父様だって、必ず安全とは言えないのに。

寝首をかかれるとまではさすがに言わないが、それを完全否定できる相手たちではないのだ。

「あの方の指示です」

なんの表情も窺わせずに千石さんは言い切る。

「そうじゃなければ誰がこんな小娘に、とでも言いたいなの？」

「そんなことは、まったく……」

なにも読めなくて、いくつかの想像の内から選んで突きつけてみたら、千石さんはやや困った顔色を覗かせた。

おっしやあ！鉄壁崩してやったもんね！とかまではさすがに思えない。

「ちよつと陰湿なやり方だったわね、ごめんなさい」

「は？」

訳が解らなかつたようだ。

(つて、こんな遊んでる場合じゃなくつて)

遊ばれてるとは微塵みじんにも思っていないだろう千石さんは咳払いをひとつした。

「ともかく、これはあの方が望まれていることです。貴方は 玲華様は為さるべきことに集中なされば良いのではないかと……」

真面目が服を着ているような人だと思う。

お祖父様の望み。

それを言われるとぐうの音も出ない。

あたしの為すべきこととは、これから続々とやってくるだろう有象無象を相手にすることだ。

お祖父様は、最終的には玲華の思うとおりにはやればいと仰っていたけど、あたしは説得に応じるつもりはなかった。

「わかってるわ。じゃ、さっそく頼まれたいことがあるんだけど」にんまり笑つてあたしはそう切り出す。

はい、とこれまた丁寧に千石さんは一礼した。

あたしが千石さんに頼んだことは三つ。

その中で、まずすべての周りの人たちに会いたいと言った。

お祖父様を信頼していかないわけではないが、自分で確認しないと安心できない。この身を任せるに値するかどうかの判断を。

お祖父様には従順だがあたしは不満がある、という人がいないわけではないのだから。

ボディーガードは全部で七人。誰も彼も真つ黒なスーツでサングラスをかけていて一目では見分けがつかない。

西龍院グループがスポンサーとして出資しているスポーツ団体から、引き抜いてこられたのだと説明された。

「ここにいるのは皆、その競技では使いものにならなくなった者ばかりですよ。その中で身体能力がもともと高かった者を源蔵様を選び、護衛のための能力をさらに磨いたのです」

最も「年長でいかにもまとめ役」だと雰囲気から醸し出していた一人がそう語った。名前は前田まえださん。

後は苗字だけ順々に名乗っていく。左から泉さん、山元さん、富士沢さん、岩野さん、大野さん、加藤さん。なんかみんな口数が少なくて読めない人ばかりだ。

「そういえば千石さんもそうやって引き抜きに？」

ふと、疑問に思っつて背の高い彼を見上げた。

「いえ、私は違います」

千石さんも多くを語らない。そこから少し待ったけど、だからこうなんですという説明が無かった。

まあいいけどさー。ちえー。

適当に見張つといてという指示だけだして、さつさとボディーガードの人たちを表に出した。

そして次に、あたしは身の回りの世話をしてくれるという女性を中に入れた。

いま世間で流行っているコスプレ風のメイド服をきた女性が二人現れた。

二人とも高校生ぐらいで同じ顔をしていた。髪の毛は首の辺りで切り添えられていて、艶々な黒髪。二人とも。

双子のようだ。

「麻衣、と申します」

すごくにこやかに笑いながら向かって左の子が言う。

「亜衣です」

すごく無表情にポツリと右の子が言う。

(うつ！モエ？)

これが世間一般が言う萌えというやつなのだろうか。一般的かどうかは知らないけど。

「可愛いかも……」

「はい？」

ぼそりと呟くあたしに、千石さんが律儀に腰を折ってまで聞き返してくれた。

わざわざ言い直すつもりはないわ、こんなこと。

「いーえ。……二人は学生じゃないの？なんでこんなところに？」
さつさと断ち切つて、二人に訊いた。

それにいかにも社交的な方、麻衣ちゃんが答えてくれる。

「わたくしたちの家は代々このお家にお仕えしてきました若村家わかむらで
ございますので、産まれる前から決められた血の運命さだめなのでござい
ます」

「時代錯誤まじな言い方ね」

「はい。というのは大袈裟で、期間限定で手を貸してほしいと源蔵
様に頼まれたのですわ。普段は中学三年生、お嬢様のひとつ下です
コロリと調子を変えて麻衣ちゃんは同年代がするような、軽い笑
い方に変わった。

直々にお祖父様からというのが気になった。

自分から動きすぎだと思つう。普段であれば誰か人を使わずだろ
うに。

(それだけ賭けてるつてことね、このことに)

「ま、いいわ。仲良くしましょ。歳の近い同姓は有り難いわ」

「勿体無いお言葉」

「堅苦しいのはキライよ」

あたしだつて気を抜ける場所が必要なのだ。

この本家の中でも、素を出せる相手がいないととてもじゃないけ
ど二十日も耐えられない。

「かしこまりました。なんでもお言いつけくださいませ」

そう言つて麻衣ちゃんはお辞儀した。となりの亜衣ちゃんは結局
一言も喋らず、お辞儀だけ合わせてしていた。

全然解つてないじゃないの。もー。

* * *

それから夕食の時間になった。

すごおーく広いダイニングで、言えばなんでも出てくる。ってい

うかここもうすでにホールね。

それぞれ与えられた部屋で食べる者も少なくない。それは自由だ。あたしもそれでも良かったんだけど、なるべくこの身を周囲に晒しておいた方がいいと思った。閉じこもるのは危険だ。

お祖父様の意思を聞き、自分には関係ないと帰っていったもの。かなりいたことを千石さんから聞いている。

それでも、あたしと交渉すればなんとかなると、僅かな希望を持っている人たちがとどまったから、そこにはたくさんの方がまだいた。

千石さんには他の頼みを与えたため、この家から離れている。

だから前田さんをつれてあたしはここにいた。あまり締め付けないラフな白いワンピースに着替え、上からニットのカーディガンを羽織る。

あたしが皆の前に姿を現したとき、一瞬その場の空気が変わった。しんっと静まりかえり注目されたのだ。

しばらくは続くんだろう、慣れるまでは。

ため息を押し殺していると、その人たちの中からあたしに声をかける人がいた。

「玲華！」

そして痛いほど腕を荒々しく掴んでくる。

「毅叔父様。お久しぶりですわ」

そう、まず一番初めに接触してきたのはお父様の弟、毅様だった。お父様によく似ているが、なぜかこちらの方が厳格な雰囲気がある。

本家に居続けた者と、捨てた者の違いだろうか。お祖父様により似ているのも毅叔父様だ。

「ちよつときなさい」

有無を言わせず同じ三十人掛けのテーブルにつかされた。入り口から遠い上座の方だ。

どこに座ればいいか一瞬悩んでいたあたしは、まあいいかと大人

しく腰をおろす。

そこには叔父様だけではなく、その奥様八重子やえこ様もいた。

二人とも厳しい目で見つめてくる。

「玲華、おまえ父とどんな話をしたんだ？」

他の会話は無用とでも言うように、単刀直入に叔父様は言う。

「別に何も。こういう発表をすると教えていただいただけですわ」

「それで玲華は引き受けたのか？兄さんは知っていることなんだろう？」

「ええ。お父様は反対なさいましたわ、最後まで」

「そうだろう。兄は腹立たしいほどの常識人だ」

あらあら、とあたしは内心想う。

こんな小娘に全感情をぶつけてくるほど、この人に余裕がなくなっている。それほどまでに驚愕な内容だったに違いない。

お父様より皺が多いのでは？と思わせるその顔に、更に眉間に皺をつくって叔父様は言う。

「それでおまえは何のつもりだ」

「焦らないでくださいませ。わたくしはお祖父様の想いを遂げたいと思っただけですわ」

「父の想い？」

低く唸るように呟く。

「冗談じゃない。今更あの人に何の望みがあるというのだ」

「そうよ。それにおかしなことだとは思わないの？貴方にその荷が負えるとも？」

おば様も静かに口を開いた。

まあ、ここまでは想定内だ。だいたいこんなことを言うてくるだろうとわかっていた。

「わたくしは面白いと思ってしまったのです。何も無い高校生活の中ではわたくしの能力が埋もれてしまう。試したかったのですわ。自分がどこまで出来るのかを」

「だからといってこんな人を人とも思わないやり方！事業は子供の

お遊戯ではない！」

叔父様が声を荒げたちようどそのとき、あたしの前に料理が置かれた。

半分ぐらい済んでいるが叔父様たちと同じメニューだとわかる。

一瞬沈黙が流れ、あたしから切り出した。

「お遊戯とはまた、言葉が過ぎますわね」

「玲華、おまえ浅霧家の一件に手を出したそうだな。あんなもので変な自信がついたんじゃないだろうな」

知られている。

お祖父様だけじゃない。ここにいるほとんどの者が、得ようとするればどんな情報でも耳に入ってくる者たちだらけだ。

間違いない事実か、ただの噂かはともかく。

「いいえ。わたくしが為したことなどささやかなことです」

じつと見据えられ、それから生真面目に叔父様は告げた。

「とにかくだ、さつさと署名してしまえ玲華。私ならあの人の重責ぐらい負える。君の父では無理なものがない」

足りない。

そんな言葉ではあたしは動かされない。

お祖父様の域には到達しない。

ぐらいですって？なにが解るといふの。お祖父様のそしてあたしの想いが。

「ちよつと待ってください兄さん。抜け駆けは許しませんよ」

またひとり、この場に割って入ったものがいた。

源蔵お祖父様の三人目の実子、稔みのる叔父様だ。

この人はお父様と毅叔父様とは歳が離れた弟だ。お父様は今年四十五歳、毅叔父様は四十三歳で稔叔父様は確か……。

(えーと……、十一歳離れてるからいま三十二歳か)

三十代前半にしてはちゃらちゃらした雰囲気は抜けない。道楽息子というのを絵に描いたような人だ。確かまだ独身。

一応礼節をわきまえようとしているみたいだけど、その口元に含

まれた笑みには厭らしさがあつた。

殺叔父様は嫌悪感を隠しもせず吐き出した。

「稔、おまえは金が欲しいだけだろう。そんな低俗な狙いなら黙っている」

「わかつてないな、兄さん。ここに残っている者はほとんどがそれ狙いだよ。兄さんぐらいだよ、権力欲しがつてるの」

「金が欲しいなら遺留分がある！それで大人しくしておくんだな！」
いつの間にか、兄弟喧嘩になっていた。

「そんな法律がこの家の何を守ってくれるって!？」

稔叔父様も鼻息を荒く怒鳴っている。口元は笑っていた。

この巨大すぎる血族は国の法律など握りつぶしてしまえるくらいの権力がある、と稔叔父様は言っているのだ。

「あなたたちお止めなさい。大勢の前でみっともない」

止めたのはおば様だ。ナプキンで口を拭い席を立った。

食事は終わったようだ。

「まだ二十日あるわ。この子にどこまでできるのか見物だわね」

どこか愉快そうにおば様は微笑んだ。

いつの世も肝が据わっているのは女性の方、というものね。

「そうだな。じっくり説得するでしょう。それまで誰にも折れないでくれ」

叔父様もそう言って立ち上がった。二人ともこの場から離れていく。

そして残ったのが稔叔父様とあたし。

稔叔父様は構わず隣の席に座ってきた。

「やあ玲華ちゃん。綺麗になったね」

まったく。この人も変わらない。

「叔父様もお元気そうで」

「オジサマなんて堅苦しい。稔と呼んでくれ」

「はいー？」

しまった。つい地が……。

ピクピクと眉が動く。

「ねえ、おれときみが組んだら最強だと思わない？」

ああそうか。

これも交渉のひとつか。高尚ではないけれど。

(なんてね……はは……)

「だからさ、今夜きみの部屋に行ってもいいかい」

耳元で囁くと、叔父様はあたしの肩に腕をまわしてきた。

色仕掛けね。血が濃すぎるとか今は考えてないんでしょね。

ほんとに！まったく！知性のかけらもない。

あたしはすつと立ち上がった。

ここに居るのはもう充分だと思った。手をつけられなかった食事が寂しそうに見えて心が僅かに痛んだけれど。

「時間をわきまえていただけなら、いつでもお待ちしてますわ。

もちろんそれがお祖父様が言う説得に値することでしたらね」

構わないわ。

力づくだろうと泣き落としたろうとしてくれればいいわ。

それであたしの心を動かせるのであれば、だけどね。

あたしはそのまま出口に向かった。

その間中ずつと注目されていたことに気づく。ひそひそと会話する声が聞こえる。

そしてあたしの耳にわざと届くように発する言葉も。その声は十中八九が女性のものだった。

「あの子、優雅にみせてるけど実際にはすごく乱暴な言葉を使つみたいよ」

「ええ？そんなの？」

「学校ではやりたい放題ですって」

「そういえば綾小路家あやのこうじの長男に手を上げたとか」

「まあ、野蛮ね」

学校で噂になっていることは、全てばれていると思ったほうがいい。

あたしはそう判断した。

* * *

結局夕食は部屋でとった。改めて亜衣ちゃんと麻衣ちゃんにつくってもらったのだ。

それを終えて部屋でくつろいでいると、一人の訪問客が現れた。その人は部屋の前で待機している前田さんに念入りにボディチェックを行われたらしく、少々不機嫌そうな顔をしていた。

「まるでお姫様だね、玲華。まったくこの僕にこんな仕打ちを」

「あ、綾小路！」

そこには綾小路亨が立っていた。

この人は同じ学校の一学年年上で、かつてあたしのことを婚約者だと勝手に思っていた人だ。

その気は無いことは、これ以上ないくらいはつきり言っている。それなのに何の用事があるのだろうか。

「どうしたのよ」

ちなみに本性はばれている。

「僕の家はこの家の傘下じゃないか。呼ばれたんだよ、父がね。それに今日は祝日だったから、ついてきたんだ」

「じゃなくて、なんでこの部屋について訊いてるんだけど」

相変わらず噛み合わない相手だ。あたしは顔をしかめた。

綾小路家が来ていることは知っていた。壇上から見つけたのだ。

「決まってるじゃないか。君の助けになりたいんだ」

勧めてもいないのに、勝手に一人掛け用のソファに座るし。

しょうがないからあたしも会話する体勢になった。

「助け？」

「そうだよ。君はいま後ろ楯が無くてとても無防備だ。たいしたものではないけれど、綾小路の名前でもつけておけば少しは安心かな、と思っただけ」

そうか。傘下とはいえ、綾小路家もなかなか巨大だ。対立なんてことになれば損になる部分が多い。

そして綾小路はそれを利用するために……。

「あたしと婚約発表でもするつもり？」

「さすが話が早いね。そう、形だけでいい」

「それで貴方には何の利益メリットがあるの？」

交換条件に何を持ってくるつもりだ。あたしは慎重に話を運んだ。

「ただ君の力になりたい、では信用してもらえないのかな？」

「貴方には署名しないわよ」

「君ね……」

これほどないってくらい綾小路はため息を吐き出した。

まさかマジ？

少し呆気にとられる。

「だってあたしには返すものがないもの」

「僕は玲華が好きなんだよ。それだけで十分な理由じゃないか」

ただ好きだから？

本当だろうか。いや、本当だとしたら尚更困るわ。

「知ってるでしょう？あたしは……」

「ああ。わかってるよ」

あたしが悠汰の名前を出すことなく、彼は頷いた。

「だったら……」

「だけど君なら分かってるよね。最初は本当にただの説得だろう。」

皆は君をただの小娘だと思っている。しかし君は絶対に折れない。

そう、ただ訴えるだけでは君は頷くつもりはないんだろう？……と

なると、その内攻撃は荒いものになってくる。それに完璧に対処す

るには対象が多すぎるんだ」

「……………」

綾小路の言うことは、すでにあたし自身考えていることではあった。
だからと言ってこの人は無関係だ。迷惑をかけることになる。

きつとそれを含めての申し出なんだろうけど。

「少しでも君からその負担を除きたい。この名前で少しでも躊躇わせることが出来るなら……と思うんだよ」

「有り難う、と言っておくわ。素直に感謝できる話よ。だけどそれで貴方は本当に良いの？あたしは何も返せないわよ」

「くだいな。純粋な想いだよ。信じてくれ」

相変わらず気障だけど、純粋だからこそあたしは迷った。

さまざまな打算と良心が渦巻く。

(でもあたしも酷い人だわ)

それを利用しようという気持ちに傾いている。普段なら間違いな
く突っぱねるところだけど……。

「無神経を承知で言うわ」

「なんだい？」

「あたしが貴方の申し出を引き受けるなら、それは別の利得がある
からの。貴方には不本意になることよ、それでも良いの？」

わざと遠回しに言う。それでも綾小路には伝わっているだろう。

「いいよ。君の為になるのなら」

この人は真正銘の馬鹿だわ。そして優しい人。

あたしはそれに応えられないというのに。

先ほどの噂を聞いてあたしは確信したのだ。悠汰のことにまで、
たどり着いている人がいるだろうということに。悠汰を使ってあた
しを脅してやることも考えられる。

それだけはさせてはならない。

悠汰を関わらせたくない。

綾小路が婚約者ということになれば、悠汰を利用しようという人
が減ってくれるのではないかと期待していた。

そのために、あたしは綾小路を利用する。

一時期は最低な人だと思っただけで避けまくっていたのに、おかしな話
だわ。

「バカね」

「悪いけど、僕もこれ以上嫌われたくないからね」

「充分、見直してるわよ。綾小路先輩」

自然の笑顔があたしから出てきた。

すると綾小路先輩はすつくと立ち上がり。

「ご褒美なんてくれるかい、玲華」

「調子にのんな！」

いきなり歩み寄ってきた綾小路を、あたしはその脛すねを容赦なく蹴つ飛ばした。

まったく。これがなければいい奴なのに。
と。

そのとき、いきなり扉が開いた。綾小路がなにか嘆なげこうとしている前だった。

「玲華様、ただいま戻りました」

千石さんが抑えた声で現れたのだ。痛がりながらそれでも突っ立っている綾小路は、綺麗に無視されている。

そして、その後からあたしが呼び出した人が、きちんとスーツ姿でついできた。

(よしよし)

にんまりあたしは笑う。

ちゃんとした格好させて来てよ、と千石さんお願いしてあったのだ。

「おまえ、オレの事ただの何でも屋だと思っているだろう」

久保田くぼたさんは挨拶も省いていきなり睨みつけてきた。

相変わらずの態度だ。

だけど、これで力強くなる。

本人には言わないけれど、あたしは久保田さんを頼りにした。

久保田さんは探偵をしている。浅霧家の一件で知り合いになった人で、それからもちよこちよこ関わりがあった。悠汰が間にいたからだ。

「冗談でしょ？正式な依頼よ」

「うそつけ、ただの暇人だと思ってるだろう」「
どうやら今日は虫の居所が悪いらしい。」

まあ、千石さんに強引に連れてこられてきたようだから無理も無い。こういうやり方嫌いそうだしな。

それでも来てくれたことには感謝しなくてはいけない。

まだ言わないけど。

「いいから。話、聞いただけ聞いてよ。絶対損はさせないからさ」

あたしは知っている。ここまで来た時点で、久保田さんに断るつもりがないことぐらい。

渋々という感じで久保田さんはどかつとあたしの前に座った。

それから綾小路も帰らなかったから、三人で話をする事になった。今の状況と、今後の予定をあたしは伝える。

千石さんはやはり佇んだままでその様子を見守っていた。

第二章・・・ 2

あたしがことの事態を説明しているあいだ、ずっと久保田さんは眉をしかめていた。

依頼の内容、あたしを護衛して欲しいと伝えても、さほど驚いた素振りを見せたりしない。

どこかあたしと悠汰のことで、近々なにか起こるといつのを知っていたようだ。問い詰めたら、功男さんから悠汰が苦勞することになるだろうと、明言されたのだと白状した。

「あなた、まだ功男様と繋がってたの？意外ね」

「一度だけだ」

変わらない不機嫌な口調で言う。まだこの状況に納得できないのか、そのときの状況が釈然としないものだったのか、あたしにははつきりしない。

背もたれに大きくもたれかかりながら、偉そうに久保田さんは言った。

「事情は解ったけどな、いきなりこんな呼び出しは無いだろう。準備期間があつたなら、その間に言えよな」

「なるべく秘密裏に事を運びたかったのよ、しょうがないでしょ」

「この事、悠汰は知ってんのか？」

その名前にあたしは反応する。

「久保田さん。その名前はここでは出さないで」

これだけで、久保田さんには察してもらえらるだろう。悠汰にも言わずに進めてきたことを。久保田さんと会うときはいつも悠汰がいた。だからこういうやり方しかできなかったのだ。

案の定、彼は呆れたようなため息を吐いた。

あたしが久保田さんに護衛を頼んだのは、千石さんや前田さんがまだ信頼できないという単純なものではない。

彼らがたとえ信頼できるボディガードだとしても、それだけな

のだ。久保田さんは、なにかあれば自分で判断して動くことが出来る。そこが決定的な違いだ。その判断もあたしはアテにしていた。それなのに、まだ諦めの悪い態度をしている。

「それより祥子君に何も言ってきたくないし、困るんだよ。こういう依頼のされ方すると！」

「それなら大丈夫よ。さつきあたしからメールしといたわ。先生をよろしくお願いいたします、ですって」

久保田さんの前に立って携帯を見せ付けながら、にんまりと微笑んだ。そしたら久保田さんはがっくりと肩を落として、なんつー用意周到な……と呟いた。

彼の事情ぐらい熟知している。祥子さんは久保田さんの助手だ。ほんわかした印象を醸し出しているけれど、実はしっかりしている人だ。

ああいう人は見習いたいと思う。あたしの気性では無理だろうけど……。

「見積りなんていらなから、後から正式な額を要求してくれればいいわ。お父様が払うってことで了承は得てるの」

「ちよつと待つてくれ、玲華。この男は何者だい？」

ずつと黙って見守っていた綾小路先輩が口を挟んだ。それに久保田さんが、僅かに冷たい反応をしたのを、あたしは見逃さなかった。だから仕方なくあたしから紹介する。

「久保田さん。探偵してるのよ」

「なんて俗っぽい。こんなもの信用できるのか？」

「おまえよりマシだ」

ついに本音が出た。

こういう咄嗟の反応が、内面は理論派というより情緒派なんだろうなと思わせるところだ。

「なんだって？玲華がどう思っているか知らないが、この件では遙かに僕の方が存在価値がある！訂正したまえ！」

「オレはいいぜ、別に。このまま帰っても」

「ああ！その言葉通り帰った方がいいな。痛い目にあって泣く前に！」

「ちょっと待って。なんでそこで喧嘩になるのよ！」

想像したより、二人の性格は合わないみたいだ。なにより綾小路先輩からの空気が刺々しい。

「別に喧嘩しているつもりはない。少なくともオレには。……とにかく、オレはあいつには嫌われたくないんだよ。勝手に共犯にしないでほしいんだが」

厳しい上目遣いであたしを見てくる。

それが二の足を踏む本当の理由のようだ。

「解ってるわよ。だからさっさと終わらせて戻るのよ！いつもの日常に」

「おまえがさっさとサインしちまえば終わりだろ」

「ことはそんなに単純じゃないのよ」

あたしは自分の定位置に戻って、どっさりと腰を下ろした。

「玲華」

斜め向かいから綾小路先輩が重々しく口を開く。

「本当は何があるんだい？何か裏があるようにみえるんだけど」

「なによ。お祖父様があたしを選んだのは見込み違いだったと言いたいのお？お祖父様をも蔑視した言葉ね」

ふん、とあたしは顔をそむけた。

その動作をじつと久保田さんに見つめられているのがわかった。

なにかを見抜こうとしている目だ。

そんなことないよ、と返してくる綾小路先輩は反して弱々しかった。

「それで？今後としてはこのお坊ちゃんと婚約発表して、オレとかこの鉄面皮が君のことを守って……それで？その先には何があるんだ？」

久保田さんのなかでは、綾小路先輩がお坊ちゃんで、千石さんが鉄面皮になってるようだ。

千石さんに連れてこられるときも、あまり良い雰囲気じゃなかったんだろうなって想像できる。だけど千石さんはそう呼ばれても、ただ立っているだけで、一度もぴくりとも表情を変えなかった。

「はつきりさせとこう、君の狙いを。味方が欲しいなら手の内を明かすべきなんじゃないのか。なにも言わずにただ守ってくれってのは虫の好い話だ」

「それは……」

痛いところをつかれた。

あたしに狙いがあることを、久保田さんは読んでいたのだ。

「貴様。なんとという無礼な……」

「黙ってる」

綾小路先輩が反発するのを、一言で久保田さんは制した。経験値の違いからか綾小路先輩は黙る。しかしそれすらもプライドに障っているようだった。

「君がゲーム感覚でやってるのならいい。こちらこそそれなりに守ってやるさ。でも違うんだろう？そして周りも本気ときている。だったらこちらこそ生半可な覚悟ではやられるんだ」

気づいていないのかしら、久保田さんは。その言い方は、ほぼ引き受けていると言っているようなものだ。

あとは納得のいく目的をあたしが言えるかどうか……。

「……あたしが、お金目当てだとは思わないのね」

勝手にそう思っていてくれたのなら、どんなに楽だっただろうか。

でも久保田さんはそういう面では優しくない人だ。仕事に、誠意を持ってやってるからこそ、厳しくなるんだ。

「そんな単純じゃないんだろ。たとえお金目当てとしてもその先には必ず理由がある。そうみえる」

「僕も、玲華がただの欲望に駆られてっということは考えられないよ」

綾小路先輩もあたしの性格を知っている。

二人に同時に見つめられて、はつきりと困ってしまった。
「わかった言うわ。でもいまは駄目。ちょっと時間がほしいの。あ
たしだけの問題ではないから」
そう言っただけのことぐらいいしか、いまのあたしには出来なかつ
た。

* * *

それからすぐに西龍院家ではあたしと綾小路先輩の正式な婚約発
表がなされた。

あくまで内密に一族内のみで知らせるように。

大部分は祝す者、遠巻きに見つめる者だったが、中にはそれが単
なる予防線であることが解っているだろう。

この時期だ。それは仕方ない。

それでも正式発表である以上ないがしには出来ない。それがそもそも
の狙いだったから、特に問題視にはしなかった。

次の日から、久保田さんには自由に館内を歩き回ってもらった。

「あなたには先入観がないから人間観察をしてほしいの」

そう言つと片眉を上げて、複雑な表情をしながらも部屋から出て
行った。

この家の中は、おおまかに表すと六つの大きな建物が、これまた
広い廊下で繋がれている。広さは様々だ。奥の塔が左右に二つ、一
番高くて五階建て。正面の門側には三階建ての塔が真ん中の広いフ
ロアと繋がっている。

真ん中の一番奥が、また三階建てで最上階がお祖父様のいる部屋
だ。二階はお祖父様専用の使用人が住んでいる。一階には家族の者
がお祖父様と会う為の部屋がいくつもあった。訪問する人数に合わ
せて使い分けているらしい。この塔自体がアポがないと近づけない
ようになってる。

そして中央の中庭には、これまた大きい噴水がある。

中心の噴出し部分の周りを埋める溝は二メートルくらいの幅で深い。そのうえ暗くて底が見えない。

子どもの頃から近づいてはいけなないと、大人たちに言われていた。客間は西の塔と、その前の三階建ての塔。

さすがにこの部屋より豪華で揃っている客間はないけれど。

東側の五階の塔から先。毅叔父様や稔叔父様といった本来の住人の部屋があるところへの立ち入りは、そこに住む者以外許されていない。

久保田さんも行けないだろう。ガードマンがちゃんと立っているのだ。

同居しているのはお祖父様を筆頭に毅叔父様一家と稔叔父様。

そしてお祖父様が囲ってる女性、伊津子様にその子供清二様。同じく十和子様とその子供の加奈様と加絵様姉妹。

あとは女性が死去や離れて子供のみ残っている状態で、清志郎様一家に和志様一家に、いまだ独り身の恵美様だ。

家系図のまとめを、見取り図とともに久保田さんに渡した。その先でのあの複雑な表情だ。呆れてものもいえない……といったところだろう。こんなもの、争ってくれと言っているようなものだから。

(あたしだって、これが普通なんて思っただけだよ)

なにも知らない子どものころは、これが当たり前だと思っていたけれど。

いくら身近にそういうものを見せ付けられたとしても、お祖父様に惹かれた女性たちの気持ちは理解できない。

特別になれないと解っていても、一緒になりたいと思わせるなにかがお祖父様にあるのだろうか？

それとも、自分だけは本当に特別だと幻想を抱いたのだろうか。

男の理想とはこういうものだ。それをワシは具現化したに過ぎない。

一緒にいるなかで、お祖父様はそう言っていた。

(かなりの利己的主義ね)

きつとお金だけで引き寄せられた女性もいるのだろう。それを納得したうえで、お祖父様はここに置き認知までしている。そのどこが理想なのかさっぱり理解できない。

「聞いているの？玲華さん」

「……もちろん、聞いてますわ」

しまった。聞いてなかったわ。

あたしといえば、あれからひっきりなしに部屋に誰かが来ている状態だ。

一人ずつ　　もしくは一組みずつ　　と個々で対応すると宣

言し、そのせいで順番待ち状態だ。

好感を持たれようと優しく話しかける者が大部分を占めたが、やはり中には脅すようなことを言う者、卑猥で下劣な言葉を投げる者もいる。

あれから三日経ったが、さすがに疲労感をおぼえる。

いま目の前にいるのは毅叔父様の奥方八重子様だ。毅叔父様に所用があるようで、奥方直々に訴えに来たのだ。

内容は、主要人物だけを相手にしるということだった。こういう平等な対応に慣れていないらしい。自分たち夫婦は、とくに特別だと自負しているのがまざまざと感じられる。

「他の方たちなど相手にすることはありません。夫やわたくしが本気になれば、あなたも無事では済まなくなりますよ」

「そうはいきませんわ。皆に平等にチャンスを与えるのはお祖父様の意志です。あなた方の説得の場だけ設けていては、それは不公平ではありませんこと？」

「玲華さん、後継者になりたいのではないの？」

「ええ。なりますわ。しかしお祖父様の仰るとおり、皆に納得していただくにはこの試練は必要不可欠だと思っております。本音といたしましては、こうしてる間にも本質的なところを勉強したいのですけれどね。そう、いまの企業すべての現状を把握したい、と……」

挑む気持ちで八重子様を見据える。

大規模な企業になればなるほど、人の目につきにくい闇の部分ができる。八重子様は僅かに視線を逸らした。毅叔父様がまつさらな清廉潔白とは言えないようだ。そしてこの人もそれを知っている。

「いまから勉強ですか。遅すぎるのではないの？引き継いだ途端、落ちぶれるのが目に見えていますわね。言っておきますが、経済学などで学んだところで素質がなければ何にもなりませんよ」

「そう、人を惹きつけるものが必要ですわね。他の誰よりも、そこには自信がありますわ」

「なんですつて？」

「恐怖政治は続きません」

赤子をひねり潰すごつくな残忍さを毅叔父様は持っている。あくまでいまは大人しくしているが、いつそれが豹変するかわからない。毅叔父様がここへ来たときには、そう思わせるような刺すような視線を放ってきていた。

「小癩ですわね。君子気取りですか」

八重子様はそう吐き捨てた。この人も女性としての貫禄が充分ある。使用人が皆、怯えて仕えていることをあたしは子供の頃から知っている。

また来ます、と言い残して八重子様はあくまで優雅に切り上げた。いますぐどうこうするつもりはないようだ。まだ期限があるからかもしれない。

とにかく夜は毅叔父様、昼は八重子様が必ず一度来る。最後までこの手法で押し通すのは、並大抵な精神力でないと、もたないかもしれないと思った。

八重子様が部屋から出て、安堵感から深い吐息が出る。

これは早めになんとかしないと、いつ限界に来るかわからない。

「休憩なさいますか？」

あたしが次の言葉を発しないからだと思う。千石さんがそう言うてくれた。

体だけ反転させて、ソファに行儀悪く体を預けながらあたしは訊く。

「いいわ。ねえ、それよりあのことなんだけど……」

あたしがした三番目をお願い。

それがまだ果たされてなかった。

「それでしたら明日約束が取れました」

動かない目で抑揚なく告げられた。

それならそうと、早く報告してほしい。

「あなた、なにか企んでるの？」

「なぜですか？」

なんの変化もなく反問される。

「違うのなら、なにか不満なのかしら？あたしのすることが」

「どうしてそう思われるのか、まったくわかりません」

「あたしがこの家と関係ない人を呼ぶのに反対だから、すぐに言わなかったんじゃないの」

仕方なく直球で訊く。この人にはまわりくどい言い方では駄目なのだ。

多少、苛立った自分を戒めた。

「いいえ。そのことはとくには……。ただ、あの方も忙しいようで、なかなかお時間が空いてないようでしたので、はっきり決まるまでは、と」

「そのことはって言ったわね。さっさと白状しなさいよ、不満があるなら」

ここまで追い詰めてようやく、千石さんの表情が硬いものに変わった。目が泳いでいる。

「私の意見など聞いてどうしようというのですか？」

「あのねえ。隣でただ黙って立たれているのが、どれほど圧迫を感じるかわかる？あたしはお祖父様じゃないんだから、思ったことは言ってくれて良いのよ」

千石さんは感情を表さない。

「だけどそれは無関心でいるわけではないのだ。それならば言うて欲しい。無用な警戒もあたしだってしたくない。」

「逡巡したように黙り、そして意を決したようにあたしを見た。」

「では、僭越せんえうながら申し上げます。私は久保田修次を近くに置くことに不満を抱いています」

「……………え？」

意外なところに話が飛んだ。ワントンポ反応が遅れる。

「ええと……………。それはどういうことかしら……………」

「実は貴女に頼まれて彼の事務所へ向かっているときのことです。私は何者かにつけられていました。それらはすべて振り切れたと思います。私にまで目を向けている人がいるのです。彼がそれに対抗できるとは思えません」

「だからね、言いなさいよ……………そういう事実は……………」

あたしは頭を押さえた。つけられていたなんて初めて聞いたわ。

「振り切れたので問題ないと判断しました」

「わかったわよ、もう。それで？久保田さんの評価が低い理由は？」

「私が目的の建物に到着するその直前に、ちょうど彼は現れました。どこかから丁度戻ってきたところだったようです。上下スウェットに、手にはコンビ二袋。予め写真で顔は確認済みでしたが、その姿でまず私は一抹の不安を感じました。そしてその男の力量を測るため、気配を殺して近づき、なにも発せず、渾身の力を込めて殴りかかったのです。その数秒後、あの男は振り向きました。私はその顔面すれすれのところまで力を静止させ、遅すぎる、と。この男では駄目だと瞬時に判断したのです」

「……………」

一番長いおしゃべりを聞いた。余程がっかりしたんだと思う。

そして、久保田さんがあそこまで不機嫌そうに現れた意味が解った。そういう試され方をされるのも嫌いそうだ。

そんな状態で、よく来てくれたと感謝しなければならぬのかも
しれない。

「 ですので、私は反対です。貴女はいざというときの為にあの者を呼び出したのでしょうが、あの者に貴女を守れる技量があるとは思えない」

「あなたにしては珍しく自発的な行動ね。なぜ試そうと思ったの？」

「勝手なことをしたと罰せられても構いません。ですが我らでは力不足だと言われるなら……余程の」

「誰も力不足とは思ってないわ。罰する気もないから」

あたしは最後まで聞かずに被せた。

そこは嘘ではない。あたしはお祖父様とは違う。

あたしの期待したいところを千石さんに伝えていないわけだから、彼にとつては不本意なんだろう。自分より強いと思われている、久保田さんという存在が。

「貴女はあの者にどんな期待をなさっているんですか」

「期待？」

「調停役にあの者を選んだ。そうとしか思えないのですが」

お祖父様の想いを、ただひとり共有しているこの人だから言えることだ。そう想像するのも頷ける。

実際には調停役なんて、久保田さんには向いてない。

「違うわ。ただこの一族以外の人間を、近くに置きたかっただけよ。あたしの自己保身のためにね」

「玲華様から見れば、私も他の護衛の者も信じられない。そういうことですか？」

静かに、でもはつきりと千石さんから疑心を感じた。

ここで怒るということは、この人は信用していいのかもしれない。そもそもお祖父様が近くに置きたがる人だ。初めからそこは視野に入れていたのだけれど。

「あなたがそれに不服だろうとそこがあたしの狙いよ」

「ですが……それでは……」

千石さんの言葉尻が濁る。

さすがに言いすぎたかなと反省した。

しかし本来の目的とは別にもうひとつ、危険因子をはらんでいる人を浮き彫りにするのもあたしの役目だと思っっているのだ。

「あたし自身はあなたのことをまだよく知らない。最初から他人を信じるのは難しいわ。でもこれから知っていくのよ。千石さんも思うとおり動いてくれていいの。その行動の中で徐々にあたしは信用できてくると思うの」

初めから他人を信じてしまえる人もいるのだけれど。

そう、悠汰みたいな人が。

申し訳ないけれど、あたしはそういふうになれないように育ててきた。この家で。

「千石さんなら素質があると、あたしはすでに思ってることだしね」
そう補足をしてあたしは微笑んだ。

長すぎる前髪の間隙から、僅かに照れが含まれた彼の目が見えた。

* * *

あたしが久保田さん以外にこの件と関係ない、つまりこの家以外の者を連れてきたのはその次の日だった。

そう、頼んでいたことの三つ目だ。

その人のために時間を空け、自分の部屋に招き入れている。

「相続人の廃除？」

「ええ。遺留分、つまり親、配偶者、子供に保証されている制度ですが、その対象となる人を被相続人　つまり源蔵様の意思によって相続権を奪う制度なんです」

「ああ。そこが相続の欠絡とは違うところなんですな」

呼んだのは恰幅のいい六十代の弁護士いいたまきたかの飯田雅孝先生だ。

いまここ、応接スペースでは弁護士相談が行われている。いや、勉強会というべきだろうか。これまでと比べて空気が和やかだ。

「そうですね。欠絡は法律上のことで欠絡者は遺贈も受け取れませ
ん」

飯田先生はもうそんなに暑くないのに、汗をかきながら黒い鞆からA4サイズの紙を数枚取り出した。

「分かり易く判例をお持ちしました」

「ふうん、表立って該当しそうな人はいないわね」

一通り見てから、つい思ったことが口に出た。同じやるなら、該当者を少しでも減らしたかったのだ。

久保田さんが遠巻きに見ている。どこから帰ってきたかと思えば、コーヒーを自分で入れて、そのままキッチンにとどまっているのだ。でも関わってこようとしない。

とりあえず無視することに決めた。貴重な時間だ。そんなことに囚われてはおられない。

飯田さんはハンカチを握り締めて、はあ、と呟いていた。

この人はお父様がこの家から出たときにもいるいる助言をくれた人だと聞いた。見た目にそぐわずやり手な人なのだ。

そして悠汰の兄、惣一そういちさんの事件も担当した弁護士さんだ。

「しかしこの家にはこの家のルールがあるようですね。それがどこまで国会権力に通用するかは私にはわかりません」

「構いませんわ。覆すのにもそれ相応に失うものもあるもの。足枷にはなるはずです」

そうでなければ困る。しかし毅叔父様あたりならば、あまり意味は無いかもしれない。

お父様も血族に宣言したものの、法的には放棄してない状態だそうだ。被相続人、つまりお祖父様が亡くなって初めてその権利が生きるからだという。

あたしとしてはそこは問題ではない。必ずお父様はそのとき、放棄の手続きをするだろうと思えるからだ。

（それより問題にしていそうな人がいる、ということが問題なんだけどね……）

「源蔵様が遺言を残さなければ法定相続人のみの問題で済んでいたでしょう。正式な配偶者は死別なさっておられますので、お子様だ

けです。しかしあのような遺言を残されるおつもりでしたら、あなたが署名した者にも遺贈をするということになります」

飯田先生の勉強会は続く。

「孫は代襲相続で含まれるはずの者だけですが、それ以外でも適用されてくる。いや孫だけでなく、源蔵様の内縁の方たち、兄弟姉妹、果てはその子供、そしてその孫……すべてですね。内容によっては、まったくの他人でもあなたが認められた者には遺贈すると、そういうことになってしまいます。つまり争う者が増えるだけです」

「あたしも内容までは見てないのです。でも祖父はそういう意図でしようね」

「いったい、何の為に」

初めて飯田先生は踏み入ったことを聞いてきた。

確かに、理解できないだろう。これだけを聞いたのであれば。

「それは分かりませんわ。祖父の胸中に触れるのは何者にも赦されていませんので。それより、こういう遺言は有効なのですか？」

「見ていないのでなんと……。しかし源蔵様であればわざわざ無効なものは作成しないでしょう。二十日すぎて書き直すということも可能ではありませんし……」

「ああ、そうですね」

このとき、ピクリと久保田さんが反応したのが見えた。

なにか気づいたのかもしれない。あの人は鋭いから。

それから、数十分経って授業は終わった。いろいろ聞いたけれど、今回のことにあまり役には立ちそうにない。それでも今後のためにはなりそうだった。いち知識として。

「ごめんなさい。飯田先生。お忙しいときに、わざわざお呼びして」

飯田先生を扉まで見送ってそう締めくくる。

「いいえ。彼の方ももう終わりました」

にこやかに皺を作ってほっとした表情をしていた。

「あー、そうなんですか？どうなりました？」

「保護観察処分に」

あえて軽く尋ねると、極秘に短く、答えてくれた。あたしが気にしていたことを知っているからだろう。

「そうですか」

あたしもほっと一息ついた。

これで、少なくとも悠汰はお兄様と離れなくてすむ。あの家にはあの人が不可欠だから。

飯田先生が出て行って、扉を閉める。

それからずっと不可解そうな顔をしている久保田さんを見た。

「惣一さんのことよ」

この人も無関係ではない。

こういう人だからなにも言わないけれど、きっと久保田さんも惣一さんの判決を気にしていたと思う。

「お嬢、本当はそれが聞きたくて呼んだんじゃないのか？」

また素直に喜べばいいのに、そんなことを言っただわしてくる。

あたしは不敵に見える笑い方をした。

「弁護士呼んだのよ。法律のことに決まってるじゃない」

あっそ、と久保田さんは呟いて空を見た。

「それよりどうしたの？途中から入ってきたと思えばそのまま残って」

「ちよつと一時離れさせて貰おうかと思ってな」

「そうね。今はまだそんなに激化してないし、そろそろあなたも準備が必要よね」

状況も流れも見えてきて、やっと久保田さんは自ら行動を起こしたくなったようだ。なにか思うところがあつて、必要な防具アイテムがほしいと考えているんだろう。

あたしがそういうと複雑そうな顔を向けた。

考えを読まれたのが嫌だったのだろうか。

「……ん。まあ、そういうわけだから数時間貰っわ」

「祥子さんによろしく」

わざとそう付け足したら、今度ははつきり辟易の色をその顔に浮

かべた。

「そのままオレが逃げるとかは考えないのか？」

「逃げたら一生言い続けるわ。みんなにもチクるから」

「あのなああー」

久保田さんが脱力してる。

それにはお構いなしで、あたしは部屋に戻ってメモ帳とペンを持つてきた。テーブルにおいてサラサラとペンを走らせる。

「ついでにこれを用意してきた」

「子供のお使いか、オレは」

ぶつぶつ呟きながらも久保田さんは受け取る。

そして読むとため息を吐いた。

「」

「手に入る？」

挑むような上目遣いで、真面目に聞く。

「当たり前だ。オレを誰だと思ってる」

半分呆れながらも、頼もしい一言を久保田さんは放つ。

これだから期待しちゃうのよね。

第二章・・・ 3

怒涛のような日々。

まさにそんな表現がぴったりだと思う。一癖も二癖もある人たちで様々なやり方で説得しに来たけれど、共通してるところもあった。それはまったくあたしという人間を見てないことだ。

単なる金のなる木。

ここまで分かりやすいと、嫌悪を通り越し、更には呆れまでもを通り越して、清々しくあるのだから不思議だ。いや、ホントに、まったく。

お祖父様が皆を呼び出し声明を発表してから、一週間ほどの時間が経っていた。

その日もこれまでと同じように署名を否定し続けた。人の説得をここまで断るといふ行為をしたことは当然ない。それも長期間に渡って。

(思った以上にくるわー)

一番落ち着けるのが夜だった。皆には二十三時で面会を打ち切るということはある。

わざわざ宣言しないと深夜でも来そうだったから。これでも遅くさせられたのだ。

人の出入りがなくなる時間帯。

しかしだからこそ警戒が最も必要な時間だ。

護衛の人に二人ずつ入れ替わりで扉の前に立ってもらっている。

中には誰もいない。

怨念のような負の感情。それを毎日のように浴びた。

それは穢けがれになる。

そのために、楔くわをする。

シャワーを浴びてから塩水を飲むのが日課になった。

形だけのものだけど、しないよりマシ。その程度のものだ。

本当なら塩水に浸かって体を洗い浄めたいところだけど、そんな時間はないし、長時間バスルームにこもるのは躊躇ためらわれた。

夜も深まってくると、あたしは自宅から持ってきたパソコンで情報収集している。なんでもない外の情報から、この家に関わることまで。

(悠汰からメールが……)

パソコンを起動させると、はじめてこの日悠汰発信でメールが来ていた。いつもはあたしが送って、その返事ばかりなのに。

充電中で近くに置いてある携帯電話を手に取る。

着信履歴が残ってる。

(電話が、苦手だったのにね)

悠汰がここまでするということは、やはり不安にさせているんだろう。

留守電。

あたしは聞きたい気持ちを抑えて、そのまま机の上に置いた。聞いたところで、どうなる？

まだ言うべきにはいかない。そんな状態で連絡をとっても、辛くなるだけだ。

(ちゃんと戻るから)

届くはずのない祈りを、想いを何度も胸の中で唱えた。

そのとき、遠くから音が聞こえた。些細な小さな音。

それは多分隣の部屋、ダイニングからだ。

さつと気持ちを切り替える。

警戒する。

あたしは立ち上がり、常備していた上着を羽織り、ベッドルームの扉をゆっくりと開いた。

仄暗い部屋を凝視する。

誰も、いない。

だけど広すぎて死角が多かった。部屋の明かりを点ける。

応接スペースを通り抜け、隣のリビングエリアに向かった。

「何を探してる？」

突然、後ろから声をかけられた。いるはずのない第三者。低い男の声。

あたしは距離をとりながら振り向いた。

だけどすぐさま腕を掴まれる。

「こんばんわ、玲華ちゃん」

その男は毅叔父様の息子、幸祐しゅうけだった。十八歳。大学生だ。昔よく遊んだ幼馴染みの一人だけど、歳が離れてるせいにかすぐに遊ばなくなつた。

長めの前髪を右に流し、横は僅かにはねさせている。

遊び人の風体は、毅叔父様より稔叔父様の息子と言った方がぴったり納まるから不思議だ。そんなことは万に一つの可能性もないけど。

「訪問時間は終わつてましてよ、幸祐兄様」

幸祐はあの発表の日からあたしを色情を含めて見ていた類のうちの一人だ。

最もうんざりするタイプ。

「夜に会いたくなるんだよ、君とは」

「無粋ですわね」

下品な笑い方をする男だった。

あたしはそれにはつきりと拒絶の意を現す。これが最善の策だ。

そして掴まれたままの腕を振りほどいた。あっさりと幸祐はそれを許して、変わりに尋ねてきた。

「どうやって入ってきたか訊かないんだ？」

確かに気にはなってる。

このあまり才のない男が、たった一人で警戒の目を切り抜け入ってきたとは思えない。

しかしいまは、どうやってこの招かれざる客を追い出すかということのほうが先決だった。

「それはその内に。それよりどういったご用件でしょうか？」

嫌なほど分かっているのに、わざと訊いた。

いつでも逃げれる態勢を作る。微かに震える脚に力を入れた。

「決まっているじゃないか。どちらが野暮かな。強情なおまえを陥れるなら、こちらも力づくでということだ」

「毅叔父様にでも命令されたのかしら？」

「父は関係ないさ。俺をいつまでも認めないから俺にだって出来るってところを見せたいだけだ」

「分かりやすいですね」

本当に、解りやすい。虫唾が走るほど。

あたしは上着の隠しポケットから武器を取り出した。

久保田さんをお願いした物だった。

収納可能なプラスチック製の黒い警棒を、さっと伸ばして前に突きつける。

「ならば話は簡単です。こちらは拒否するまで」

「本気？」

幸祐が呆れを含めた嘲笑をした。

まだ侮っているのだ。それがこちらには好機となる。

というより、あたしの勝ち目となるのはそれしか無かった。

「ええ。武術の心得ぐらいありますわ」

「体は成熟してるのにまだまだ子供^{ガキ}だな。ノリが悪くて周りにシラけられるだろう」

いやらしい笑い方に、卑猥な発想。

「ノリが良いのと、ただ馬鹿騒ぎして軽薄な人になるのでは大違いですわよ」

「そういうところ変わらないな。でもそういう意地張るの、やめたほうがいい。男にモテないから」

「一人の人に好かれればそれで結構です」

「ふうん。それって亨？あんな奴どこがいいのさ」

戯言を口にしながらも、幸祐はじりじりと寄ってくる。あたしはそれに対して横に移動した。

後ろにはキツチンスペースで行き止まりだ。なるべく広い方へ逃げ道を作る。

「無駄だ」

言っや否や幸祐は飛び掛ってきた。猪突猛進。

単純で隙だらけな動作にあたしは瞬時にしゃがみ足を狙って警棒で叩きつけた。

これまでの怒りを込めた。八つ当たりも含めて、遠慮は一切していない。

「うあっ！」

バランスを崩して彼は倒れた。スタンドライトに突っ込んで、派手な音が響く。

これで、誰かが来てくれたら。

僅かな期待が脳を霞めた。

いや、そんなものは計算に入れないほうがいい。もっととんでもない輩を呼び寄せては絶望的だ。

あたしはすぐには二打目を打たずに距離をさらにとった。

「この野郎。人が優しくしてりゃあいい気になりやがって」

仮面が剥がれて激昂している。

女にかわされたことが余程ショックだったようだ。怒りからか痛みすら感じてない。

「わたくしに手を出すということが、どれ程の無礼か身を持って知りなさい！」

一喝し射るような視線を向ける。

「お嬢様ぶりやがって！本当はみんな知ってたんだ！おまえが実は下品でがさつな女だってことはさあ！どんだけ繕ったって隠し通せるもんでもないぜ！そんなおまえをこの俺様が抱いてやるってんだ。有り難く受け取れ！」

耳を穢された。

言葉の陵辱だけですでに充分だった。これ以上は受け付けない。

その意思で警棒を握る手に力を込める。余計な言葉を挟まずに気

迫を込めた。怒りの気を放つ。

それに相手が怯んだようだった。

一瞬怯んで、それこそがプライドを傷つけられたのだというように、睨みつけてきた。

「なあ、本気で逃げられると思ってんの？」

絶対的な種族の差。それを味方につけ、さらに男は武器を持つ。

どこに潜めていたのか、その手にはドイツ製の自動式拳銃が握られていた。

どこまでも卑劣な。

「それは毅叔父様の庇護かしら？」

この男が一人でこんなもの手に入れるほどの度量があるとは思えない。

「どうでもいいんだよ。本当はめんどくさいことは嫌いだね。最初からこうすれば良かったな」

「武器がないと、女の一人も捕まえられないのね」

あたしの挑発に幸祐は舌打ちをして、大股で近づいてきた。逃げ道は閉ざされている。拳銃という名のものによって。

すぐに距離が縮まる。

その武器をあたしの頭に押し付けた。

「いいから黙ってるよ。大人しくしてりゃ楽しめるんだ」

そしてあたしの手から警棒を取り上げて投げ捨てた。

絶体絶命、なんて思わない。

まだチャンスはあるはずだ。この男が油断するとき。決して心までする屈することなくあたしは男の目を見据える。

銃を持ってない左手で、あたしの顎を掴んだ。

「いいねえ、ぞくぞくする」

男の顔が近づいたとき、あたしはその奥を見ていた。

視界にはその部屋の空間だけが映っていたけど、耳には届いていなかった。確かにバサツという乾いた音がしたのだ。

刹那。

「はい、そこまで」

いままであたしが持っていた警棒を拾うと、そう言いながら久保田さんは幸祐の頸椎けいついを後ろから叩いたのだった。

時間にして一瞬。幸祐に振り返る暇も与えなかった。

しばらくあたしは呆気にと取られていた。

なんで？どこから？

出入り口の扉は閉まったままだ。

幸祐は一発で伸びていた。

久保田さんはすかさずその男を捕獲した。どこから持ってきたのか縄でグルグル巻きに縛り上げる。

「どこから入ってきたの？」

「天井裏」

仕方なくあたしから声をかけたら、久保田さんは素っ気なく答えた。

「天井裏あ？そんなモンあったの？」

「あつたみたいだな。他にもいろいろ隠し通路があるみたいだぜ、この家」

一人で好きにしていって言って、ほつたらかしにしていたら物凄いのを見つけたようだ。

あたしは安心をしようとして、思いとどまった。

その前に確かめないといけないことがある。

「で？久保田さんはどうやって狙ったように来れたの？」

「……………」

久保田さんが寝泊りしている部屋は別の塔にあった。使用人と同じクラスのところだ。

さっきの音に反応してっっていうことはまず考えられない。

「もしかして、天井裏からあたしのことずっと見張ってたの？」

「あのな、誤解のないように言っとくけど……………」

「じゃあ盗聴器？」

「おまえらカップルは同じようなところにとどり着くな……………」

どこか呆れたように久保田さんは呟く。

そういうやり取りが悠汰との間であったことをあたしは知らない。だからあっそう、とだけ返しておいた。

「こいつがお嬢を見る目が異常だったんでな。ちょっと気になってたんだよ」

人を見る目は確からしい。

「まさか、他にも盗み見みたいなことしてないでしょうね」

「するか！天井裏に来たのは今回が初めてだし、言っとくけどおまえのことも興味はないからな！」

「まあいいわ。今回はそれで信用するとして……。なんかしたら祥子さんに言いつけるから」

あたしが最大級の防衛策を打ち出したら、久保田さんはがっくりと肩を落としていた。

この反応を見ているうちは大丈夫だろうと思える。

念のため、つてものはどんなときでも必要なのよね。

ちよつと観察していたら、久保田さんはひとつ大きな息を吐き出すことで気持ちを切り替えていた。

「そんで本当にこんなもん見つけた」

そう言いながら久保田さんはポケットをまさぐって、黒いものを取り出す。

そしてあたしの手のひらにそれを乗せた。

「これってまさか……」

「そう盗聴器」

条件反射であたしは部屋の一帯を見渡す。それを読み取って、久保田さんが付け足した。

「もうここにはない。すべて取り除いておいた」

「え？」

「オレが一度戻ったのは発見器を持ってくる為だったんだ。ひとつキッチンで見つけてな、他にもあるかもしれないと思って。そしてら出るわ出るわ。いろんなタイプの周波数が選り取り見取り！」

軽い口調で恐ろしいことを口にする男だ。まったく。

あたしは頭が痛くなった。

「でも反応してるのにどうしても見つけれないものがあったな。それで探し回っていたら天井裏を見つけた、という流れだ」

「いったいいつそんなん探してたのよ」

「お嬢が夕食に行っている間だ。誰にも見つからずにやりたかったからな」

飄々と悪びれもなく！

あたしはなんだか悠汰の苦勞が身にしみてわかるような気分になった。

『あいつは尊敬できるけどいい加減なところがあるんだよな。人の裏をかいてもまったく悪いことをしたって思っ
てないんだ。それどころか楽しんでるから質たちが悪い！』

そうぼやいていたことがあった。それがこれか。

まあ、期待以上の仕事をしてくれるし文句は言えないが。

「報告しなさいよね！今後からは」

「だからまだひとつ残ってたんだって」

「それでも筆談とかあるじゃないのよ！」

「めん……」

途中で久保田さんが言葉を途切らせた。

あきらかに、めんどくせーって言おうとしてたわね、この男はっ。

「でも大丈夫だから。もう無い。保障する」

なに胸を張ってんのよっ。もう。

仕方なくあたしは話を切り替えた。

「じゃあ、もしかしてコイツも天井裏から？」

幸祐を見下ろしながら呟いたら、久保田さんの雰囲気
が切り変わった。

その目が、深刻だった。

「いや、こいつは扉からだ。普通にな」

「」

「これがどういう意味か、お嬢になら解るよな」
嫌なほど、解った。

扉には少なくとも二人の護衛を置いていたのだ。手引きがないと入れない。とくにこの男ぐらいの手腕であれば。

「いまの時間警備してたのは誰？」

鋭くあたしは聞いた。

「連れてくる」

久保田さんはそういうと扉から出て、その男を中に放り投げた。すでに気を失っていて、縛り上げられている。久保田さんがやったようだ。

その顔は加藤さんだった。一人だけだ。

「うまいこと言ってもう一人の山元は離れさせていた。こいつとあの男がこの扉の前で目配せしたのを見たんだ」

淡々とも厳しい調子のまま久保田さんが言う。

「幸祐が入って行ったところでもまずコイツを倒して、それから天井裏で見張ってた。悪かったな、遅くなつて」

「……………」

久保田さんが加藤さんを倒しているところを見て、すでに気づいていた。

この人が一部始終を見ていたこと。

はあ、と大きなため息をついてあたしは言つてやった。

「いいわよ。充分よ、ありがとう。拳銃持ってたのもどうせ知ってたんでしょ？だから泳がせたつてところかしら？」

「相変わらず鋭いな」

顔をしかめて久保田さんは呟いてから、下に転がっている二人を見た。

「なあ。どうする？こいつら」

指示を仰いでくる。決めるのはあたしの役割だった。

「そうね。全ての人にこのことを発表するわ。それでこの二人は地下に閉じ込めておいて」

「地下、ね」

全てを知っているふうで久保田さんが呟く。

この家の地下には牢屋がある。といっても暗くジメジメした昔ながらのものではない。普通の部屋に柵があるだけだ。

一族が罪を犯した場合に入らされる。国家に任せず、この家なりのしきたりのうえで罰する場合に。

「期限が過ぎるまでよ。後のことはそのとき考えるわ」

それはそのときの状況によって変わるだろう。

ずっと入るのか、無罪放免かは。とりあえずあたしには裁く権利はもっていない。

「はいはい」

ちよつと面倒くさそうに久保田さんがそう言って、二人の身柄を持っていつてくれた。一気に二人の男を抱えられるとは、見た目にそぐわず本当に出来る男だと思う。

千石さんにはまだその凄さが分かっていないだけだ。

本当に出来る人は、その能力を普段は隠している人ではないだろうか。

久保田さんの背中を見送りながら、やっとあたしは本心から落ちて着いた。

思い出したように、全身が震えたのはその直後だ。

* * *

それからさらに三日が経った。

いよいよ折り返し地点。あと十日で期限の二十日が終わる。

幸祐の仕出かしたことを知って、内部は揺れた。

毅叔父様は激怒し、一刀両断に切り捨て、あんな奴は息子じゃないとまで言い切った。それで逃げられるんだから、対した痛手を負わせられなかったということになる。

まとめて戦意喪失になればいいな、とは思ったけど、そう甘くは

ないようだ。

そしてあたしは。

そろそろ いや、とつくに飽きてきていた。この流れに。

「玲華！おまえこれに署名しなければ一生後悔することになるぞ！
それでもいいのか！」

「あなたに署名したら、一生後悔しそうですわね」

「どういう意味だ！」

「他の方を抑えあなたを選んだ。そう思われてはわたくしの一生が
汚点に染まりますわ」

「貴様ー！！」

目の前の訪問客が、フルフルと怒りに震えて立ち上がったときだ
った。

護衛の山元さんと千石さんが、両脇から百キロ近くある巨漢な彼
を 清志郎様を抑えにかかった。

この人はなかなか負けん気の強い、そして不機嫌に陥りやすい夕
イブだと、とうに分析している。だからこの人が来るときには護衛
の人をひとり中に入れていた。

幸志郎伯父様はこの十日で一番あたしに会いに来ていた人だ。

五十三歳。一番最初に生まれた、お祖父様の子。

彼には上に二十五歳の幸菜と二十三歳の哲郎、十九歳の瑞穂とい
う三人の子供がいる。初めの方は妻の早苗と共にここへ来ていたが、
今では一人で対面してくるようになっていた。

彼のお母様とお祖父様が結婚していたら、嫡出の長男になってい
たはずの人だ。だからこそ引けないのだろう。

無駄に豪華なロココ調の安楽椅子のアームレストに肘を置き、頬
杖をついたまま彼の憎悪を身に浴びる。

「碌な死に方は出来ないと思え！！」

怨念と言っている。

それぐらいのものを感じた。

あたしは感情を出すことなく、平常心を装いながらも立ち上がった。

た。

「節度ある議論が出来ないのでしたら、もう用はないですね。わたくしも他に会わねばならない人が支えておりますので、どうぞお帰りください」

「なんだと！貴様におれの気持ち解るものかつ！認められた血統に産まれながらあつさりと捨てることの出来る無神経な野郎の娘になつ！」

「ええ。わたくしたちは貴方のお気持ちは一生解らないでしょうね。しかしそれは貴方も同じこと。父の気持ちも貴方には生涯理解できないわ」

わざわざ、肯定することもなかった。

だけと言わずにはおれなかった。

いくら相手が傷ついているとはいえ、父のことまで蔑むようなことを言われたら止められなかった。ただの意趣返し。

そのまま二人の護衛の手によつて、幸志郎伯父様はこの場から連れ出された。

「大丈夫ですか？玲華様」

千石さんが戻ってきて、そう声をかけてきた。

この人と交わす言葉が少しずつ増えている。

「大丈夫。次の人呼んで」

はい、と一礼し千石さんは出て行く。

あたしは椅子に座りなおし、テーブルの上に手をつけられずにいたぬるい紅茶を喉に流し込んだ。

しばしの静寂に、双子の一人が紅茶のおかわりを持ってきてくれる。

この光景ももう慣れたものだった。

「ありがとう。麻衣ちゃん」

すぐには手をつけず礼だけ言う。

麻衣ちゃんはふと顔を上げた。

「いいえ、亜衣です」

感情の色を含まない目。

「そう、悪かったわ」

さらりとそれだけを返した。

これもよくある展開だった。ぎりりと唇を噛む。

(冷静にならないと)

いくら装うことが出来ても、内側がドロドロでは意味がない。見落としてしまうものがある。

「お待たせいたしました」

千石さんが律儀にお辞儀をして帰ってきた。

そして連れてきた相手を見る。

あたしは誰がどの順番で来るか、知らずにいた。最初のうちは聞いていたけど、ここまできたら慣れもあってか、それを怠るようになっていた。

それが、失敗だった。

次に来た相手。

それは、こうなってから初めての相手だった。

「久しぶりね、玲華」

「京香」

その名を呼ぶとともに、あきらかに感情を表してしまっていた。戸惑いを。

京香は認知された子供の一人、和志伯父様と政代様の子供だ。同じ学園にいる、二つ年上の義理の従姉いとこ。

「どうして貴女が？」

「いいじゃない。たまには話がしたくなったのよ。こうでもしないと、今のあなたには会えないものねえ」

どこか嫌味を含みながら、京香はあたしの前に座った。今までの対面相手がするように。

この人に良い印象を持ったことはない。

天敵、という言葉が相応しかった。

「知らなかったわ。京香も狙っていたのね、財産を」

「冗談でしょ？そんなものに興味はないよ」
「だけどあつさり」と京香は否定する。

（それもそうか）

幼馴染みと遊ぶ仲間の中に京香も含まれていた。幼い頃から知っている。目の前の人物の想いぐらい。

それは逆に言うと、京香もあたしのことはよく知られていた。やりにくい相手だ。

「あんた、まだ比紹に良いように使われてんの」

「ここへはわたしの判断で来たの！ヒロは関係ない！」

比紹の名前を出しただけで、彼女は揺らいだ。

じゃあ凶星じゃない。

しかし、ということは比紹も狙っているということだ。あの油断ならない相手に。

京香は警戒に値しない、とあたしが判断したときだった。彼女はその眼光を鋭くさせた。

「神崎悠汰、に逢ったわ」

「……会ったって、あんた同じ学校じゃない」

悠汰の名前を出されるのは嫌だったけど、態度に出すわけにはいかない。

あたしは軽く睨む程度にとどめた。

わざと強調するようにフルネームで言ってきたのだ。なにかある、と即効で判断した。

「喋ったって言ってるのよ」

「……わかってるわよ、ちょっと突っ込んだだけよ」

「憎ったらしさは変わらないね！」

「お互い様」

動悸がばれないようにまた頬杖をつく。

「彼、なかなか面白い人だね。わたし好きになっちゃうかも」

「比紹を捨てて？」

「そう。わたし彼とつき合うかも」

「……………」

そういうことか、とあたしは見極める。

この手の脅迫めいた話が出るのも時間の問題だろうとは思っていたのだ。

なるべくなら、避けたかったけれど。

「彼もね、もうあなたなんか知らないって。愛想が尽きたんだって」

「見え見えの展開ね」

「嘘じゃないよ。いま学園ではあなたと亨くんの婚約の噂で持ちきりだからね」

「あなたがばらしたの？」

聞かなくても明白だった。

お祖父様が口外してはならないと言ったのは遺言のことだけだ。

あたし発信の行動まで制限されていない。

ならば、京香があたしをこの機会を利用して陥れたいと思うなら、これは滑降の狙い目だったということだ。

失敗だった。

手を打っていなかったことは、あきらかにあたしの落ち度だ。

「さーね。でもそんな噂ぐらいで傾くようじゃ、最初から対したことない付き合いだったのよ」

「あなたには悠汰は無理よ」

「どこが？どこがそう思わせるの？」

ポ口を出した。

やはり、京香はそこまで深い話を悠汰としていない。あたしはそう直感で思った。

悠汰を信じることが出来る。それがあたしの強みになった。決して嬉しそうな顔などしないけれど。

「ダメねえ。分からないの？悠汰の良さ」

「わかるよ！彼は先入観で見ない人だよね！」

家柄のことを言っているのか、と気づいた。

西龍院という組織は巨大で、名前を出しただけで皆は怖気づく。

少し遠巻きに扱われるのは昔からよくあったことだ。

ひどいときには仲が良くなった子と引き裂かれたことがあった。まだ幼稚園の頃だ。その子の親が怖がったのだ。万が一にでも自分の子が、あたしになにかしてしまうことがあれば、この家の人間がどんな報復をするかわからないと。

そんなことはないのに、名前だけで懸念したのだ。

(変わらないわね)

そんなに経ってないのに、少し懐かしさを感じる。

悠汰は知らなかったただけだとしても、その分け隔てない態度に何度安心したか数え切れない。

知ったとしても変わらないでいてくれることを、ただ願っている。お父様のところじゃない、この家のこと。

出来れば、ずっと知らせずにいたかったのだけれど。それはもう無理なのだと思いつた。すでに関わらせているのだと。

「それからわたしとあんたを、ちゃんと別で扱う人よね」

京香が憎しみの色をこめた。

ここ数日で見すぎている感情の色。嫉妬心。

「だからこそ、あんたじゃ無理なのよ、京香。悠汰はあんたには靡なびかない」

「相変わらず対した自信ね。すつこい楽しみにしてるから。いつまでそんな、悠然と構えていられるのか！」

そう捨て台詞を吐いて、彼女は部屋から出て行った。

ここへきて、まとまった疲労感があたしを襲う。どさりと背もたれに全身を預けた。

(悠汰)

ずっと昼間には思い出さないようにしていた名前。

それは逢いに行きたくなるから。切なくなる。弱くなる……。

どう思っているのだろうか、悠汰は。

噂を聞いて、動揺しているのではないだろうか。

あの留守電の内容は、やはりそういうことなんだろう。

京香の言葉はあたしの胸中を騒がせた。

態度に出さないことには成功したけれど、あたしを不安にさせることが彼女の狙いなら、まさにそれは的確に叶ったことだった。ずつと蓋にできていたものが溢れ出す。

「ちよつと休憩を挟むわ」

そう千石さんに言い捨てて、あたしは奥の部屋に入った。

最もプライベートな空間。ベッドルーム。

ここには一度も、誰をも入れていない。

そこであたしは気持ちを切り替える。

だけど、いつものようにはいかなくて……。いつもより、時間が必要だった。

* * *

そろそろ、やり方を変えなくてはいけない。いつまでもこんな不毛な対面方式をとって受け身でいても始まらない。

そう思っていた矢先だった。

朝の五時。あたしは叩き起こされた。

というか、叩かれたのは寢室の扉だったけど。

「お嬢！起きろ！」

そして叩いていたのは久保田さんだった。この人も深夜から早朝までよく動いてるな、と思う。いったいいつ寝ているのだろうか。

その切羽詰った声に尋常ではない何かを感じて、あたしは急いで身支度をした。

そして顔を見てさらに嫌な予感が増す。

久保田さんは声に変わらず険しい表情をしていた。

「どうしたのよ？」

「いいか。落ち着いて聞け。どうやら源蔵氏が死んだ」

「え？」

あたしは目を見開く。

(そんな)

そんなことあつてはならない。

まだ早い。残された時間はまだあつたはずだ。

「病気が急変したらしい。千石に連絡がいつて分かつた。あいつはもうあちらに向かつてる」

どこか遠くから久保田さんの声が聞こえていた。

「だけど考えを一気にまとめ、彼を見上げた。

「あたしも行くわ」

そのまま二人で部屋を飛び出した。お祖父様のところへ。

第二章・・・4

一人がこの世からいなくなったというのに、ここまで誰も悲しまない状況というのも滅多にないことだろう。それは一種異常なものに見える。

久保田さんと猛ダッシュしてたどり着いた塔には阻むものがないかった。それどころではない状況なのが、こういうところから伝わってくる。

そしてお祖父様の部屋にもすんなり入れさせてもらえた。中には第一秘書の椿原さんと、専属の主治医である小谷^{こたに}さんと、それから千石さんがいた。

布が邪魔をして、お祖父様が見えない。

近寄ろうとしたとき、椿原さんに止められてしまった。

すぐにどこから聞きつけたのか、中心にいる親戚筋が後に続いてきている。どこから情報を聞きつけたのだろう。

先頭はあたしと久保田さんだった。

久保田さんは千石さんに聞いて、だったのに。それ以外で知る方法とは……。

(まさか)

あたしのなかにひとつの予測が立つ。でもそれが、どういうことを意味するのかまでは確信が持てない。

ある程度集まったところで、小谷さんが周りに視線を流しながら、重々しく言葉を発した。

「皆様。四時三十二分ご臨終です」

半信半疑で駆けつけた者たちの顔色が変化した。ざわめきが起こる。

久保田さんは隣で驚愕していたのが気配でわかった。

「どういうことだ？十日前はまだ動いていたじゃないか」

毅叔父様が青ざめている。

それに応えるように椿原さんは降りている紐を引っ張った。
するとするすると布が上がっていく。

そこには横たえた一人のご老体が横たわっていた。

一目見て判る。すでにこの世と切り離されてしまった者の顔だ。

（お祖父様！）

駆け寄りたくなるのを必死で抑える。ここで理性を切り離し錯乱状態に陥ることができたなら、まだ楽だったのかもしれない。

だけど様々なことが頭を巡り、唯一できることはただこの事態を見守ることだけだったのだ。

「源蔵様のご意思でどなたもそれ以上近づぐことを許しません。すべてはわたくしが取り仕切りたいと思います」

何人かが駆け寄ろうとしたとき、椿原さんが拒否を許さない厳しい声でそう伝えてきた。

こんなときまで、対面できるのはお祖父様が気を許した使用人のみだなんて……。

「なんだと？なにを仕切る気だ」

「すべてのことです。葬儀全般のことから遺言状の発表までです」

遺言状、と聞いて周囲の空気があきらかに変化した。椿原さんを下に見ていた連中が怯んだのだ。

「そつだ、あれはどうなるんだ」

「まさか本当に玲華さんの手に？」

「しかしまだ二十日たってないじゃないか」

囁きあう声はすべて耳に届いてきていた。

まさに胸騒ぎがしているあたしの胸中を、代弁してくれているみたいだった。

「遺言は本当に残されているのです。ですからまだ有効です。それまでこのことは他言無用に願います。このようにこの一族が揺らいでいることを、外部に知られるわけにはいけません。落ち着くまで葬儀は行いませんので」

「他言無用って……」

椿原さんの申し出にまた周囲がざわついた。

「葬儀をしないだつて？ばかっている」

「死体はどうする気なんだ！」

「ご遺体は冷凍保存いたします。これもわたくしめに課せられた命令です。つまり源蔵様のご意思。そういう内容の遺言もございませぬので、皆様方あまり不用意な行動を起こされなきよう心得てくださいませ」

不満を持ちながらも逆らうものはいなかった。あくまで表面上では、だが。

この展開が吉と出るのか凶と出るのか……。

あたしには後ろ盾がひとつ無くなった。お祖父様という最も大きな効力が。

「れいかおねえちゃん」

不意に袖を引っ張られた。

それではつと気づく。いつのまにか大半がぞろぞろと大人しく帰っていつているときだった。

声を掛けてきた張本人は、あたしの脇にいて見上げている。可愛いらしいボンボンの髪飾りを高い位置に結んでいる七歳の少女。名は……。

「なあに？真帆ちゃん」

あたしは同じ目線になるようにしゃがんだ。無垢な笑顔で真帆ちゃんもあたしの左手を取る。

子どもが苦手だといっていた久保田さんは、とくに関わろうとせず遠巻きに眺めていた。

「おねえちゃんがおいちゃんをころしたの？」

そつだ、この子もお祖父様の孫だ。間違いなく。笑顔が歪んでいる。

「こんな幼い子供にも、しっかりこの家の風習は絡めついて纏わりついている。間違いなくこの血族の一員だった。」

先に前にいた大人達が振り向く。あたしたちに、確かに注目していた。

「違うわ」

子供にも、子供相手だからこそ、全力できっぱりあたしは否定した。

眼光が鋭くなっているのに、遅れて気づく。

「そうなんだ。くるしくなって、おいつめられて、さっさと財産がほしくなったのかとおもっちゃった」

「真帆」

一人若い女性が、掬すくい上げるように真帆ちゃんを抱き上げた。母親の茜あかね様だ。

連れて行く前にしつかりとあたしを睨みつけていた。

真帆ちゃんの場合は突飛でそこには何の根拠もない。現に病死しているお祖父様を前にして殺されているとは誰も思わない。明確な事実。

それでも、この少女がしつかりと財産という、世間並みの子供には縁遠い単語を淀みなく発したのは間違いなくて。

そのことが、いかに両親の間で繰り返り広げられている通常語になっているのか、窺い知ることが出来た。

「あたしもう対面方式で皆に会うのはやめるわ」

自分の部屋に入ってまず、あたしは久保田さんにそう告げた。

千石さんはお祖父様の件を隠滅させるのに一役かっついていて忙しいようだ。まだここには戻ってきてない。

前田さんたちには、誰が来ても通してはならないと言ってある。扉の前で引き続き守ってもらっている。

「防戦一本でいくのか？」

戻ってそうそうソファにくつろいでいる久保田さんは、なにか言いたそうな顔でいた。

「だいたい誰がどんな人か見極めたから、もう必要ないのよ」
あたしの本来の役目は、皆の挑戦に立ち向かうことではない。
律儀に面会する必要はないのだ。これからは少しでも自分の身を
守らなくちゃならない。

というわけで。

その日から部屋で食事をとることにした。もともと夕食以外はこ
こで食べていたのだが、食事だけでなく部屋に籠ることに決めたの
だ。
で。

「なんでオレが毒見なんか…」

まず久保田さんをお願いしたのがそれだった。

いままでは千石さんにやってもらっていたのだけど、いないんだ
からしょうがない。

久保田さんはいままで、別の使用人たちと食事をしてきたから知
らなかったようだ。目を丸くしてぼやいていた。

「食事に毒、なんて初歩的なことで命を落とすたくないわ」

「毒見役はいいのかっ」

「大衆の面前で、大袈裟に毒見をしてもらったのよ。確実にあた
しを仕留められないのに、誰がわざわざやるのよ。自分の立場が危
うくなつて終わりじゃない」

「本当に、最近おまえはほとんど殺伐としてきているな……」

ダイニングキッチンに移動してきた久保田さんは、それでも拒否
はしなかった。

ぶつくさ呟きながらも席に着いた。

食事は、麻衣ちゃんと亜衣ちゃんが作ってくれている。この二人
は本当に家事のスペシャリストだ。作れないものないんじゃないだ
ろうか？あたしが注文したもので断られた物がない。

他にも掃除や洗濯物をクリーニングに出してくれたり、千石さん
たちでは補えない、女性特有のお願いも彼女たちがこなしてくれる。
一通り毒見をしてもらってから、ようやくあたしは食べた。

今日は和食だ。お味噌汁から口にした。

「亜衣ちゃん。どんどん料理上手くなってるわね」

やっぱりあたしって日本人だわ。改めて痛感する。

といつても、洋食も大好きなんだけど。いまは和食ブームなのだ。

「麻衣ですよ。お嬢様」

まったく気にしてなさそうにニッコリ麻衣ちゃんは微笑む。亜衣ちゃんは無表情で久保田さんのコーヒーを注ぎ足していた。

(また、か……)

内心だけで、冷や汗をかいた。

この展開はどういうことなんだろう。あたしが気がつかないうちに、精神に負担がかかっているのだろうか。

「そう。でも美味しいわ」

心の内側を隠してあたしは受け流した。

一連の流れを、なにも言わずに久保田さんは見届けていた。なにかを考えていそうなのに、なにも言わない。

しかし妙な空気が漂う前に、久保田さんが口を開く。

「で、話を元に戻すがな、おまえにはこれからどうする予定だ？」

「敵を誘きだすことにするのよ」

「はあ？」

いかにも呆れたという声を出す。

そんなに突拍子も無い発言だとは思わなかったけれど、仕方なく説明を続けた。

「お祖父様がないいま、彼らには脅かされているものが殆どなくなっているのよ。幸祐のバカは何も考えず先陣を切ったけど。ああいう輩が増えてくると読んでいるのよ、あたしは」

「だから？なんでわざわざ」

「だからよ。四方八方から来られるより、分かりやすい方向から来てもらった方がガードもしやすいでしょ。久保田さんも」

「んなこといつて爆弾でもぶっこまれたらどうする気だよ」

「それは素早く解体してもらわないとね。久保田さんに」

「おい。出来るか、そんな神業」

久保田さんの目がつりあがった。

おかしいなあ、久保田さんならたとえ出来なくても、任せとけとか言うと思っただけだ。

根拠の無い法螺ほらは吹かないようだ。

「でもソレ、あり得るわね……。いまあたしが死ねば、とりあえず法律的に分与されるものね」

「おまえ、ちよつと自棄になつてねえか？」

真剣に考えてるのに久保田さんが茶々を入れる。

しかしその言葉とは裏腹に、目は真面目だった。あたしの本心を見極めようとしている。

だからあたしも、それを見つめ返して真面目に言った。

「いいえ。何一つ諦めてないわ」

そう、やるなら徹底的にだ。

期限がきたときに、後に持ち越したりなんてしない。すべてをやり切つて戻るんだ。悠汰のもとに。

* * *

この家にある監視システムは完璧だ。

警戒用にとりつけられている器械アイテムは最先端の物が使われている。

昔のヨーロッパを見立ててるのに矛盾しているとあたしなんかは思うのだけど、理想と現実は違うということらしい。

そのコンピュータールームはお祖父様が雇った警備人が管理している。お祖父様からみて公平にはなっているのだ。しかしいまは加藤さんという寝返る者がいるように安心は出来ない。中立ではないことをわきまえておかなければならなかった。

セキュリティは外からの侵入者から守る為だけのものではない。

隠しカメラは内側にもついていた。廊下の各場所に。

そこであたしはパソコンから侵入し、自分で把握していた。どこ

にカメラやセンサーがついているのかを。

しかしそれだけではない。

あたしは千石さんにあらかじめ要求していた。こちら側の警備の強化を。

久保田さんが目を輝かせて、それらを見ていたのが印象的だった。やはりあの人は、隠しているけれど絶対にメカオタクだ。

そしてその内の一つが超小型センサー。

あたしの部屋の向きになる外に、それは取り付けられている。対象は庭と塀の外。半径百五十メートル。

窓からの攻撃に備える為だった。

ここは正面からは奥まった位置にあたる。この辺り一帯は見渡す限り西龍院の敷地だ。だからその道を通るものは皆関係者。

だいたい通るのは黒塗りのベンツだったり、白いフェラーリだったり……要は車での走行。

センサーは、高速二十キロ以内に動いたものに反応するようになっている。

いちいち行き交う車にまで感知していたら、本当に警戒すべきものが埋もれていくからだ。

この広い敷地で徒歩で、しかも裏門からどこかへ出かけるという人物はまずいない。何かの目的がない限り……。

そのうえで、そういう機器を選んだのだ。

それを取り付けて初めてギンゴンと感知の合図があったのは、お祖父様が死去して次の日だった。

まだ太陽が傾きかける前。

「あ、悠汰」

窓に寄りかかり、あたしは発見した。

久保田さんがそれに反応して隣に並ぶ。千石さんがまだ不在で、一応久保田さんは出歩かず身近で護る役目になってくれている。

「なんで比組と……」

呟きながらも、京香のことを思い出した。もしかしたら、とうとう

う比紹がなにか仕掛けようとしているのかもしれないと。

比紹はこの家では目立った行動をしていない。

それでもなにか仕出かすとは予測できたはずだった。京香の話から。

あたしに嫌な予感が襲う。

悠汰は背中をこちらに向けていて表情は見えないが、比紹はどこか穏やかに笑っていた。

「あれ、悠汰の好きそうなタイプだなー」

こちらの心情なんてなにも知らない久保田さんはどこか暢気だ。

「嫌な言い方しないでよ」

つい本気で非難してしまった。でも確かに苛立っているのを感じた。

「でも当たってるだろ？ああいうしつかりした優しい兄さんタイプ」

「自分もそうだと言いたいのか？まったく、凶々しいわね」

「あのな……」

容赦なく突っ込むと、久保田さんの言葉が詰まった。

どういうわけか、悠汰は久保田さんのことを尊敬していた。というより、懐いているという単語がびつたり当てはまるかもしれない。そのうえ、当人もまんざらでもないというふうなのは、見ていて嫌というほど解っている。

「人が足りないわ。悠汰を護ってくれる人が……」

深刻な問題だ。比紹や京香と接触させないようにしたい。

二人だけじゃない。この家に関する者は誰一人として近づかないでもらいたいのだ。

「オレがちよつと行って忠告してきてやるっか？」

「あんたじゃ無理よ」

「てめっ」

「だってあんた、一方的な物言いするでしょ？で、怒鳴り合いして終わるのがオチよね。最悪もつとひどい状況になるわ」

「……………」

なぜか久保田さんが詰まっていた。あたしの言ったことに自覚しているんだろう。

(このままじゃ……いけないわ……)

最悪な状況になることは目に見えている。

ここまで二人の行動を制限できなかった自分を責めた。

せめて、ここからは少しでもなんとかしないとイケない。この中からでも出来ることを。

「ねえ、久保田さん。お願いがあるの」

そしてあたしが頼るのは、結局久保田さんだった。

窓の外を向いたままのあたしに、久保田さんは何かを感じ取ったようにこちらを見た。

「お願い、ね……」

「そう、命令でもなく依頼でもなく“お願い”よ」

「まわりくどいな……」

嘆息して促すように黙った。

あたしらしくない言い方だったのかもしれない。確かにまわりくどい。

だって、すごく頼みにくいんだ。

それでもあたしは、頼まなくちゃいけない。あたしは顔を上げた。

「悠汰がもし、ここへ来ることになったら、久保田さんが追い返してほしいの。もう二度と来ようという気を起こさせないほど、凄惨なやり方で」

久保田さんの目が見開かれた。すごく驚いている。

(そうよね。そんなこと、したくないわよね)

ここまで築き上げた二人の関係を、これで壊してしまう可能性だつてあるのだから。どちらがより心の傷を負うのか知らない。それでも……。

「あたしの名前を出しても構わないわ。あたしにやるように命令されたつて。それでもいいから、来させないで。ここには」

久保田さんはそれでも視線を逸らさなかった。

あたしの本心を探るような目は変わらない。

「それがおまえの望みか」

「そうよ」

あたしも真つ直ぐ久保田さんを見つめた。すると久保田さんは負けた、というような表情をする。

「わかった。おまえの意思を引き受けよう」

もしかするとこの人は、すべてではなくてもなにか見抜いているのかもしれない。

そう思わせるような、覚悟をした男の顔をしていた。

* * *

「だからさー言っただけじゃん。あんたしか頼める人がいないのよっ」
そしてその夜。

さらにあたしは手を入れる。可能な限り予防線を張っておく。
いきなり携帯から電話をしても、相手の世羅はなにも聞かずに対応してくれた。いつも通りに。

『私の話を奴が聞くとは思えないが』
本当に、いつも通りで素っ気ない。

「そんなことないわよ。最近世羅、ちょっと優しいときあるでしょ。悠汰に対してさ。あたしが気づいてないけども思った？」

そう、あたしは知っている。何年の付き合いだと思ってるのだからか。

『それは初耳だな』

しかし世羅は認めようとしない。

悠汰は最近、どこか世羅に腫れ物に触るようになっているときがある。それは過剰すぎると思うときもあった。きっと世羅自身も気づいているのに、わざわざ伝えていない。そんな世羅も問題だとあたしは思っていた。

まあ……世羅が苛めすぎたせいってこともあるけど……。

「本当はこんなこと頼むべき立場じゃないことはわかってるのよ。でも相手はあの比紹だから……」

『比紹、ね』

世羅も比紹のことは知っている。

幼馴染みの一人だから。といつても、昔から何を考えているのか読めない少年で、あたしたちに近づこうともしなかった。

あたしたちが遊んでいても、比紹だけはいつも遠巻きに見ているだけだったのだ。

そこに京香が興味を示し、ついて歩く。それが当たり前の光景になったのはいつからかだっただろうか。

けれど、その中で一度だけ比紹が大声を張り上げたことがあった。

『あの時の怒りようは激しかったな』

思い出したように世羅も言う。

あまり関わってなかつたので原因は不明だけど、幸祐が何かを言ってみたかった。それに怒って首を絞めたのだ。大人たちが制裁に入らなければ、幸祐はあのとときにこの世を去っていたかもしれない。それぐらい凄まじかった。

「そうよ。何を考えているのか分からないやつが悠汰に近づいているのよ。よりによってこのタイミングで」

『だがそのタイミングとやらを、私に教える気はないんだな』

世羅の言葉に、あたしはぐっと言葉が詰まった。

「……………でも聞かなかつたのは世羅も同じよ」

訊かなくても信用してくれている。それだけは肌で感じる事ができた。

同じような世界で生まれた世羅なら、まだこちらの事情が理解できるだろう。

だけど悠汰は違うのだ。

家で判断されたくないし、したくもないと思う。それでも、こういう状況に陥ると、嫌でもそれを自覚しなくてはならない。

あたしは語調を改めて会話を続けた。

「とにかくさー。比紹が用心すべきな人だとか、ここに来るなとか言ってるんじゃないのよ。ちゃんとあいつは上手くやってるから、おまえも信じて待つてろって、それだけ後押ししてくれたら良いんだって」

『そこに行ったのか、奴は』

「昨日ね。だから比紹と絡んでるところ見ちゃったんだってばー」

『全く教えてやらなかったのに、情報をつかんだのか。称賛に値してやってもらいかもしれんな。愚直な行動に呆れはするが』

「あんたね……」

なんかその光景が目には浮かぶようだ。

そういう態度をするから、いつまでも悠汰が過剰な気遣いを止めないのではないだろうか。

『綾小路様も絡んでるのだろう？会っているのか？』

「会ってないわよ。あまり言えないけど……。だいたいあいつに頼んだところで、全うしてくれるとは限らないわ」

綾小路先輩は毅叔父様に制止をかけられている。あの人がこの状況で関わらなくなるのは有り得ない。

いまはあの手この手でここに入る算段を取り付けようとしている、という連絡は逐一きていた。

婚約は認めるが、認めるからこそ正式なものになるまで貞操は守れ、とか何とか言われているそうだ。

「もちろん大切に扱っている、会うだけなら良いでしょう、などと応戦はしているんだけどね。やり取りをしていくうちに、それを叔父の貴方から言われる筋合いはないだろうという結論に達して、しまいには平安時代の通い婚のことか言っちゃったりして……。墓穴を掘ったよ……」

というのが直近の情報だった。なにをやってるんだか……。

こんなことなら学校なんて無視して、僕もあの家から離れなければ良かった、とぼやいていた。

それでもいまの段階で、毅叔父様が綾小路先輩を適当にあしらえ

ないというところは事実としてある。だからこそ毅叔父様本人が対応してくれているわけだし、その間は彼はあたしに手を出す暇がないということだ。

綾小路先輩もそれをわかっていて、部活も休んで毎日交渉に来てくれている。そこは素直に感謝できた。

『確かに。彼は君の為になることに關しては完璧にこなすだろうが、奴には為にならないことを完璧に全うしそうだ』

「だからあんたね！冷静に本当のこと言わないでよ！」
まったく……世羅も頭が良いから誤魔化しがきかない。

今回は綾小路先輩発信で、悠汰になにかするとは思えないんだけど……。なにせ前科があるからな。

『信じる、とは一度神崎に言っただよ』

半オクターブ上がった意外な言葉を耳にした。

「え？マジで？世羅が？」

『玲華……』

素直な反応をすると、今度は世羅が絶句した。それから拗ねたような空気が伝わってくる。

『しかしそれも無用の長物だったようだな』

「そ、そんなことないわよ。たまたま届かなかっただけよ。ほらっ悠汰は波があるからさ。様子見て落ちてるなーってときに言ってみてくれる？」

『妬けるな……』

『ちよつと世羅……』

『わかつてるさ』

本当にあたしは無神経なのかもしれない。世羅の気持ちを知っていて、こんなこと頼むのだから。

しかしいつも通りの態度を取ることが、あたしの出した回答だった。あたしが離れることを何より恐がった世羅に。

わかった。一度言ってみよう。そう言っって世羅は通話を切った。

お祖父様がその生涯を終えて三日が経った。

いまだに椿原さんからはなんの発表もない。千石さんはこちらに戻ってきたが、何も語らないしあたしもとくには問い詰めたりはしなかった。

久保田さんは疑問を感じてはいるかもしれないけれど、とくに口を挟むことはしていない。

そしてあたしへの攻撃も目立つものになりつつあった。

直接的に奇襲をかけてきたものの、千石さんや前田さんはじめ、護衛隊に取り押さえられるというのが三件。窓に向かって爆弾……とまではいかなかったが、催涙弾を投げかけてくるものがいて、だけど例のチャイムで事前に発見できたものが一件あった。

それらはすべて現行犯を地下に送っている。そういう才のない者は主要な人物ではない。

「ただの残党ね」

もとより遺産をもらえない立場の者が、駄目で元々、当たって砕ける精神でやってきた感じだ。

そして久保田さんは、今朝も盗聴器を発見していた。それと隠しカメラもひとつ。

盗聴器はひとつでもあれば、受信機との周波数さえ合えば誰にでも聴くことが出来る。便乗受信というやつだ。

だからひとつとして残してはならなかった。

そして、この部屋には空室だった時間は一秒だってない。

(ということは内部犯)

あたしと久保田さん以外の誰かが、一口噛んでいるのは確かなよ
うだ。

大々的にぶちまけられなくて、ストレスが溜まる。気味が悪いっ
たらない。

「えー！ちよっと何やってんのよ！何よその流れは！それじゃあ逆

効果じゃんーもー」

夜九時。ソファに寝そべり足をひじ掛けに投げて、携帯電話を持ちつつ、これ以上なくらくらくつろいでいた。

いまはなにも聞かれてないという、確信があるからできることだ。こういうトークでストレス発散できるから女子は気軽でいいのよね。久保田さんがまだ残っていて、こちらを気にしているのがわかったけど、無視した。あの人にいまさら猫を被っても仕方がない。

千石さんにはもう帰ってもらってる。久保田さんにも帰っていいって伝えたはずんだけど。またなにか、訴えたいことがあるようだ。

「それじゃあ、あたしとあなただけ結託してて、悠汰をのけ者にしてるみたいになってんじゃん！絶対誤解してるわよ、悠汰」

土日を挟んだ月曜日、世羅が結果報告をしてきたのだ。すべてを聞いて判断できた。

あまりの流れに久保田さんなんて気にしてられない。

「やつが出ていったあと、秀和にも叱られたよ。言葉を選べとな。私としては解り易く端的に言ったつもりなのだが」

「端的すぎるのよ」

「ああ。秀和とまったくの同意見だな、玲華。どうやら私は誤解を与えたと理解しても、それを解こうとはしない性質らしい。それではこの結果も無理のないことだろう」

「……ってあのねえ、そこで諦められたら困るのよ！ヒデの言っとおりだと思っわ」

「諦めとは違う。納得したと言いたかったんだ」

「ああそうなの？それでもねえ、困るわよ社会出てから」
「なんだか頭が痛くなる。」

秀和も秀和だと思う。その場にいたのなら、もう少しマシなフオローは出来ないものだろうか。

「君が望むなら、もう一度だけ挑戦してみよう。……見返りに、成功したらご褒美をくれないか？」

「はあ？」

『そうだな。キスなんてどうだろうか』

「ええ？ちよつと世羅！なにそれ？どういうことよ！」

「……………」

奥の方で久保田さんが、いきなり変化したあたしの調子に、ピクリと反応していた。

『私には何の得もないから、失敗したのかもしれないと考えたんだ。やる気というものは、どんなものに対しても必要だろうか？』

含み笑いをしながら、とんでもないことを言ってきた。

この笑いは半分は冗談で半分本気だ。あたしは頭を抱えながら、色々なことを思い巡らせた。

このままでは逆効果で終わるということが、一番強く脳内に残る。

「あーもー……。わかつたわ。その交換条件のむわよ。そのかわり、あたしが見ても分かるくらい成功したらね！それと欧米並のスキンスリップな意味合いよ！」

あたしは世羅なら嫌じゃない。

でも世羅からしてみればあたしとは気持ちが違うわけで…………。

一応、念入りに、思いつきり布石を打っておく。

『条件が多くないか？……………まあ仕方無い。いまの言葉、忘れないで。有耶無耶やむやむにしたら一生呪うから』

世羅の言うことは、冗談か本気が判断に困るからいけない。しかし長年の付き合いで、冗談が三割くらい含まれてると感じた。本当に呪う気なら、言わずにさっさとするタイプなのだ。

あたしが頷いたものだから、本気な部分が増えたようだ。

「はいはい、とにかくよろしくね！このままで終わりにしないでよ。あたしも適当に対応して通話を終わらせた。

失敗だったかしら……………と一瞬自責の念に駆られそうになったけれど、悠汰の心が静まるのならこれでいい。

あとは。

携帯をテーブルに投げ置いてから、久保田さんにガンを飛ばす。

「なによ？」

絶対なにか言いたげなのだ。先にこちらから促しておく。自分で入れたコーヒーを持ったまま、僅かに戸惑っていた。

「ちよつと世羅嬢が可哀想みたいだけど？」

久保田さんも世羅と面識があつた。

「あーいいのよ。あの子Sサドに見えがちだけど実はMマだから」

「……おまえ、本当にお嬢様か？」

「違つわよ。だからあなたも“お嬢”とか呼ばなくていいわ」

最初に玲華嬢と呼ばれたときは嫌味かと思つた。しかし功男様は功男氏だし、呼び方に妙なこだわりがあるようだ。

「……慣れた今頃言われてもな」

この人、実は呼び方を迷つてたのかしら。やっぱり変な人だわ。

「それより交換条件つてなんだ？」

「プライベートよ。聞かないで」

あつそうと、久保田さんはコーヒーを飲み干した。

「世羅嬢に任せないで自分で電話でもすればいいだろう」

「それこそ余計なお世話よっ！放つといて！」

感情的に怒鳴つてしまった。これでは足元をすくわれる。

あたしの態度に、久保田さんから柔らかい雰囲気がつつと消え去つた。そうなれば彼には敵しさだけが残る。

「おまえそろそろ教えるよ。もう聞かれてる可能性もないんだろう」

とつとつきたか、とあたしは思った。きつと初めからこの話をしたくて、電話が終わるのをまっていたんだ。

本来の目的。

時間が必要だとあたしが言うてから、ちょうど二週間が経っている。

これでも、もつたほうなのかも知れない。

「もうちよつと待てないの？」

苦し紛れなことを言ってしまう。

出来れば聞かないでほしかった。このまま言わずに期限を迎えら

れたら良かった。

それは久保田さんだから言いたくないとか、そういう単純なものではない。むしろ久保田さんなら、聞いてもらった方が先に繋がる可能性だってある。

（あたしの気持ちの問題なんだ）

話したくないだけなんだ、自分が。

まだ、それは気持ちが切り替えられないでいるという証。あたしにしては引きずっている。

「本来オレは、仕事をしていく上で依頼人の目的は必ずあきらかにしていたんだ。今回は例外中の例外だ。オレとしてはこれ以上の譲歩はない」

久保田さんは許さない。なし崩しに終わらせたりしない人だ。ならば言うしかない。

（ううん。本当はずっと誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない）

悠汰にも、世羅にも言えなくて、苦しかったのかもしれないと、そう思った。

きつと冷静にはまだ語れなくても、こんなふうに強引にでも聞いてくれる久保田さんに、少しだけ感謝をしたくなった。

「それはそうよね。あなたが仕事に対して誠実なのは感じていたわ」
あたしは一呼吸おいてから、その身を起こした。諦めた感覚が滲む。

容赦なく久保田さんは応接スペースへ移動してきた。

（この人が、もう少しでもいい加減な人なら……）

そう思いかけて、やめた。誠実ではじめのある人だからこそ、あたしは依頼したんだし、悠汰も慕っているのだ。

あたしは語ることに決めた。

* * *

そしてその次の日の早朝。

雨が降っていた。

ここに閉じこもっていたから、まったく実感湧かなかったけど、台風がきていたんだそうだ。

だからこの洋館の中で、もうひとつの死体が作られることとなっ
てしまったのにも、誰も気づかなかったのだ。早朝の激しい雨の音
で異変はかき消された。

……何者かの手によって。

そう他殺だ。

あきらかにそうと分かるように残虐に。

あたしも久保田さんも、とうとうきたか、という結論に至って
いた。

誰かがこの混沌とした状況に乗じて、普段の鬱積をこっそり始末
したのだ。いや、もしかしたらこれすらも財産絡みの遺恨のひとつ
かもしれない。

久保田さんは、とにかく警戒を強化することだけが最善の策略だ
と言った。

「これ以上どう強化するのよ。それより案を出しなさいよ。頭を使
うのよ」

あたしは追い詰められた気分になっていた。

微かに、だけれど確かにこびりついて取れない罪の意識。

「お嬢が考え抜いて出した結論が一番早道じゃないか……。急がば
回れっつーしな」

「結局それ？目的を話して損したわ！返して！」

「あのな……」

久保田さんに当たってもなにも解決はしてくれない。

殺された人物の名は西龍院幸祐。

そう、あたしを力づくでモノにしようとした男。そして、この家
の中の誰かが犯人だ。間違いなく。

場所は地下室。

直接死に至った起因は頸動脈を締め付けられた窒息死。見開かれた瞳は無念さが広がっていた。

その鍵は開かれていない。つまり柵の外から幸祐の首を絞めたのだ。

絞められた白い紐はそのまま遺体とともにそこにあった。

あたしが唯一ひとりきりになる時間帯に起こった悲劇でもあり、ほとんどのものが、あたしを疑っていたのだ。そこに根拠など無い。流れとしても辻褄が合わないだろうに、ただの私情だけで疑惑の目を向けてくる。

それは、お祖父様が亡くなったときに、一人の少女があたしに言うてきたものと、まったく同様な意味合いだった。

もしあたしが犯人なら、鍵を持つてるんだから死体をそのままにしない。

そう、証拠が無いから表向きにはそこで話は途絶えた。そして皆、この件をいまは伏せようという結論に至った。

言葉巧みに言い訳をしていたけれど、警察やマスコミにこんな大事なときに関わらせたりはしない、とあきらかにそう言っている。

誰もが一人の男の死を迷惑としか捉えていなかった。実の父、毅叔父様でさえも。

やはり一般の常識とかけ離れたところだ。

あたしは久保田さんに指示をした。従来得意としていた調査に乗り出すことを。

千石さんには部屋に残ってもらい、久保田さんがひとりで昨日から聴き込みに行っている。

しかし当然ながら久保田さんはあたし側の人間ということが知れ渡っていたわけで、協力的な人は多くなかったそうだ。

「非協力だけならまだいい。あきらかな敵意的な態度はどうしたものかと……」

「否定的な人間に協力させるのがあなたの仕事でしょう？それとも何？実はココロ折れてんの？」

こんな状況で泣き言などやめてもらいたいものだ。あたしは久保田さんに発破をかける。

「どうやら、礼儀正しくノックして訪れているのに、顔を見るや否や、そこにある物をガンガン投げてくる者もいるんだとか……。」

ここまであからさまだと、怪しいというよりその人間性を疑う。

礼儀を示している相手に礼儀で返すということを、遠慮のひと欠片もなく捨てているのだろう。

あたしもじつとしていらなくて、久保田さんについて行くと主張した。

「おまえがいると余計に拒絶されんだろ
なぜかきっぱり断られた。」

確かにその通りなのだけど、久保田さんには言いにくいがあたしには言えるって人がいないとも限らない。

「それにおまえ、出歩くと危険が増すだろう？」

不機嫌さ丸だしで言われた言葉だとしても、それは確信をついて強引に持つていけない。

うづく気持ちを抑えて久保田さんを見送った。

しかしただ待っているだけでは能がない。あたしはあたしの出来ることをしなくては。

自室からパソコンを持ち出した。

「私に言ってくださいと申し上げてるではないですか」

千石さんは毎回気遣ってくれる。

「いいのよ、箸より重いものを持ったことがないわけじゃあるまいし……。」

正直なところ、あまり部屋には入れたくないのだ。千石さんとうごうなるとかは考えにくいが、そこだけは最後の砦としたかった。あたしがパソコンを使用して見たい情報はもちろん幸祐についてだ。

携帯電話を見せてもらえれば一発なのだが、毅叔父様が個人情報
を握り締められて明け渡ししてくれそうにない。

しかたなく、あたしは追い込まれたときにだけする悪行を開始し
ていた。

もちろん罪悪感が残る。仕方ないと言っても、悪いことだって自
覚はある。

それでもどうしても犯人を見つけたかったから。

(あたしが地下室なんて送らなければ、もしかしたら……)
闇に陥りそうな意識をなんとか踏みとどめ、指を動かす。

昨夜は幸祐がブログをしていたことまで掴んだ。そこからネット
ワークを駆使して、人間関係を洗っている。

ブログの内容からはかなり女性関係にだらしなかったのがわかっ
た。

あたしもその内の一人のフリをして、接触をはかっていく。しか
しこういうところで繋がっている者は、その殆どが遊びのようだ。
付き合っていた時期が重なりまくっているのだ。

(見たまんまの姿じゃないの！)

なんとという為体ていたいくだろうか。大学でも勉強は疎かになっていたらし
い。

しかしここでやめるわけにはいかないと、更に手を加えようと
したときだった。

「！」

傍らに佇むことが仕事と化してしまっていた千石さんが、不意に
動いた。

「どうし……」

「静かに」

声をかけようとしたけれど、緊迫な声で短く遮られる。

千石さんの目線はドアの方にあった。

この部屋は防音加工がなされていたせいか、あたしに変化があっ
たようには感じなかった。それでも千石さんにはなにかを感じ取っ

たらしい。

扉の前まで素早く近寄り、そつと扉を開く。

あたしは距離をとりつつも、その後ろについていった。

千石さんは一度下を向き、それから左右を確認した。あたしからは千石さんの背中しか見えない。再び声をかけたくなるのを、我慢してあたしは待った。

すると千石さんがようやく振り向く。

「玲華様。やられました」

ぼつりとそれだけ呟いた。表情は、変わらない。それでもあたしは、なにか良からぬことがその先に待っていると、感じ取っていた。

千石さんはそつと扉を大きく開き、そして言った。

「奇襲を受けたようです」

「！」

あたしの目に、そのとき護衛していた富士沢さんと岩野さんが、倒れ込んでいたのが映った。

倒れている二人の状態を確認したいのに、あたしたちはまだそれが出来ずにいた。

突然、あたしは千石さんに押された。かなり強くて、踏みとどまらずに倒れてしまう。

(なに?)

瞬時に千石さんの方を見る。

一人の細身で長身な男が、部屋に侵入しており、千石さんに襲いかかっていたのだ。

(誰……)

今回の対策として、この家に残った者は皆、把握していたつもりだったけれど。

しかしその顔は初めて見る。ここに住んでいたときでさえ、見たことがない、若い知らない男の人だった。

その男は先端の尖った細いナイフを持っていた。

武術で対抗しようとしている千石さんは不利だった。どちらにも言わずに部屋中を駆け回る。

「きゃあっ!!」

キッチンの方で仕度をしていた亜依ちゃんが、こちらの事態に気づいて悲鳴を上げた。

あたしは低姿勢でそちらに移動する。

「玲華様!」

千石さんの鋭い声であたしは振り向いた。すると、長身の男があたしの方へ向かってきているところだった。

「!」

捕まると思ったとき、常備身につけるようになった警棒を伸ばす。しかし同時に腕が伸びできてあたしは手元を捕まれた。

速い。

その男は素早かった。あっという間に警棒をもぎ取られ、代わりにナイフを突きつけられる。そのまま引きずるように扉まで歩かされた。

踏ん張って止まろうとしても、男の力に敵うはずもなく連れて行かれる。

そのとき、パンという重くて濁いた音がした。同時に男が止まる。(そんな……。千石さんも持っていたなんて)

彼の手には自動式拳銃が握られていた。硝煙が微かに上がる。弾丸はあたしたちのすぐ脇を通過していた。

その音に亜衣ちゃんが再度小さく悲鳴を上げ、麻衣ちゃんも奥から様子を見に来た。

出てきては駄目だと、二人に叫びたいのに声がでない。

侵入者もナイフから拳銃に持ち替えた。俊敏な動きで、二発千石さんに向けて発泡する。

近い場所での鋭い音に、条件反射で体がビクリとなる。その流れ弾が花瓶に当たって割れた。

千石さんはソファの陰に隠れながら、続けて威嚇をした。

侵入者が千石さんに集中している腕を関節しているすきに、あたしは身につけた護身術でつかまれている腕を関節とは逆の方へ曲げた。

男は諦めたのか、あたしをつき放す。と、あっという間にドアに手をかけ、そして出ていく前に一度振り向いた。

そしてなにもない空間に一発撃ち放った。

(え?)

何事か確認するまえに、男は出て行ってしまった。

あまりの早い展開にしばし茫然となる。

千石さんは追わなかった。あたしの元へ駆け寄る。

「お怪我はありませんか？」

「……………」

すぐには答えられなかった。

千石さんがしゃがみ込んだままのあたしに手を差し伸べてくれる。

それを頼って、あたしはなんとか立ち上がった。

「亜衣ちゃん、麻衣ちゃん大丈夫？」

二人も言葉が出ないみたいだ。ただ頷くことしかしなかった。それでもそれを見て、あたしはほっとなった。

「あなた……………そんなもん持つてるなら先に言っといてよね！」

「はあ、私にとっては当たり前な物でしたので……………聞かれませんでしたし」

きつ目に主張したのに、当然とばかりに千石さんに悪びれたところはない。

あたしは深呼吸をひとつした。

「で、誰よ。いまの」

「私も初見でしたが、おそらく……………深影みかげのものかと……………」

「深影？」

その名には聞き覚えがあった。
この血族の中で、隠密的な行動を専門として引き受けていたのが、代々続く深影家であった。

決して表には出ない、裏の仕事。汚い仕事を全面的に請け負っている分家。

しかし深影家は誰の元にもつかず、お祖父様……………代々の当主と直結していたはずだ。

「どういうこと？密かにお祖父様の指示で？」

「もしくは……………何者かが手懐けたのではないのでしょうか？」

考え込みながら千石さんが答える。

「まさか。いくらなんでも……………」

「深影家当主、というよりいまの方はそのご長男では？」

「なにか知ってることでもあるの？」

深影家はいつも公の場には出てこない。あたしには何の情報もなかった。そういう存在があるという大人たちの会話を、幼少期に一度耳にしたぐらいだ。

「いえ、私も詳しくは……………」

「どんな些細なことでも良いわ、教えて」

「はい。深影家のご長男、慎様は、その家系の中でも最も有力な後継者で、それに向いている男だと言われているようです。当主よりもその性根に迷いが無いとか。しかしそれゆえに危険なのです。人を陥れたり殺したりすることに快楽を覚えている伏しが有り、当主でさえ諸刃の剣となりかねない男だと伺ったことがあります」

なんて人なんだろう。だけど確かに、いまの男に隙はなかった。一種不気味な空気を纏っていた。

護衛の二人が気がかりで、あたしはもう一度扉の前に立つ。

恐怖からすぐに開けないでいると、後ろから千石さんがドアのレバーを握った。

「私が」

いいえ、と突っぱねるつもりだったけれど、有無をいわず後ろに追いやられた。

「ちよつと、あたしの役目よ！」

「まだあの者が潜んでいないとも限りませんので」

淡々と進め、あっさり扉を開け、倒れたままの二人の横に跪いた。再びちよつとつと思つて焦る。それが理由ならもう少し慎重に開けるべきではないのか。

だけどどこにもあの男はいなかった。

「おかしいですね」

「なにがよ？」

全体を見渡しながらあたしは尋ねる。

「まだ息があります」

そののなにがおかしいのよ、と言いかけてはつと気づいた。

そうだ。あの男が千石さんの言うとおりの深影慎ならば、息の根を止めないわけがないのだ。

二人とも気を失っているだけのようだ。外傷が見つけれないから鳩尾にでも入れられたのかもしれない。

「これでわかりましたね。深影は何者かに命令されて動いています」

「……………」

命令されている？ 一体誰に？

お祖父様はなにか言い残してからいなくなったのだろうか。

それともこの家の誰かに唆されたのだろうか。

しかしそれでは辻褃が合わなくなる。ただ気絶で止めると言われて大人しく従うとは思えないからだ。だとしたら千石さん……いや、あたしには本気で向かってきていたのかもしれない。

(それともこれは警告で、次回は……)

先ほどの異様な目つきを思い出して、背筋が冷えた。

「久保田さんと前田さん呼びましょう」

今回は誰の命も奪われなかったけれど、次はないかもしれない。期限が後三日で終わる。だから焦って実力行使に出つつあるのかもしれないのだ。

ここが踏ん張りどころだと思った。

(！)
あたしは連絡をするために携帯を置いてあるテーブルに移動した。

携帯電話の横、ノートパソコンを見て固まった。

液晶部分を弾丸に撃ち抜かれていたのだ。

あたしの唯一の情報源である端末が、使えなくなっていた。

「簡単な話だろ」

六人掛けの応接スペースに、ダイニングの椅子とアームチェアなども総動員し、全ての人を集めた。

倒れた二人は暫くして気づいたので、いまはそれぞれの部屋で休んでもらっている。

なので護衛の四人と麻衣ちゃんに亜衣ちゃん、千石さんと久保田さんとあたし、九人で顔をそろえた。

そのなかで、久保田さんだけが悠々とダイニングの椅子に態度悪く座ってる。

「なんなのよ、その余裕は」

あたしは冷ややかな視線を送った。自分があれほど恐ろしい目にあったというのに、このくつろぎ加減が腹立たしい。

ただのやつかみだと解っているのに、表立っては出さないけれど。要は、こいつらがその深影つてやつより強ければいいんだろ」

そのうえこんな身も蓋もない言い方をするものだから、前田さんたちからピリつとした空気が発せられた。

(どうしてこの人はっ！)

こんなんだから敵を作りやすいんだって、気づいてないのかしら。仲間割れをしている場合じゃないのに。

「たとえば監視カメラ等で予め深影が来ることを予見できたとする。しかし結果やられるんじゃ意味がないとは思わないか？」

「それにつきましては、油断としか言えません。しかし我々はすでに深影家について認識しました。同じ過ちは繰り返しません」

毅然とした態度で前田さんが答える。

「ならいいけどな……」

「じゃあカメラだけでも設置しましょ」

「我々が信用できないと？」

「違うわ。ここ防音になってるでしょう？だから中からまったくわからないのよ。それが困るの」

ちなみに防弾能力もあるが、侵入されればそれで終わりだ。

先ほど千石さんが最初に扉を開けたとき、深影慎は天井と壁の角に張り付いていたらしく、上から登場したんだそうだ。ヤモリのような男だ。

「しかしあのPCどうするんだ？」

久保田さんが話を変えた。

いままでセキュリティシステムをあれで把握していたのだ。あの状態ではカメラなんて設置しても使い物にならない。ダミーと同等になってしまう。

「実家に戻ればもっと性能のいいものがあるのに……」

齒痒さから唇を噛みしめた。

といつてもデスクトップでは持って来るのに目立ちすぎる。

「まあそれはオレがなんとかしてやるとして。どうする？カメラ増やしていままで通りか？」

なんかあつさりと凄いことを前置きにされた気がする。

しかしそれには触れないでおいた。

「どうかしら？前田さん」

リーダーの意見を聴く。

「私に決定させて良いのですか？」

「あなたたちの領域でしょう？僅かでも危険を感じるのであれば、別の案をあたしから提示させていただくわ」

四人は顔を見合わせた。そして軽く頷き合い前田さんが代表して言った。

「先ほど申しましたとおり、同じ失敗は繰り返しません。ただあの二人はもう少し休養が必要です。無論残りの者でカバーしますので、それだけ許していただければ」

「もちろん結構よ。それとこれまで防弾チョッキを着てなかったのなら、これからは着用していただけるかしら？」

皆が集まる前、千石さんから護衛の職に付くものにはあいかし予め拳銃とともに防弾チョッキも支給されていることを聞いた。

どこの国の話よ、と思つたが、この国でも銃絡みによる事件は皆無ではない。ならばやはり必要なんだろう。

「かしこまりました」

軽く前田さんは頷く。

「久保田さんも着てくれる？」

「オレはいい。あれだって完璧じゃないんだ。頭とかを狙われたら終わる。あんなもん重いだけでオレには合わない」

話を彼に振ると、同じ調子そのまま断ってきた。

どこからくるんだろう。ここまでの思い切りの良さは……。ちよつと呆れたけれど、そこでこの場は一旦解散となった。

メイドの二人も片付けを終えて立ち去ると、ようやく久保田さんと深い話をする。

「で、今日の報告は？」

「相変わらずだ。収穫なし。ただ、面白い会話を盗み聞きしてきた」
勿体ぶって久保田さんは一度立ち上がり、キッチンへ向かった。

これまでの習性を鑑みるに、コーヒーを入れに行くんだろう。

そう予測を立てると、相違があった。発見器を持ち出し何度目になるかの盗聴器チェックを開始する。

すると、一際甲高い音が角の方でしていた。

「また？」

嫌なくらい聞いた音だ。

「またみたいだな」

素っ気なく返すと、オフにして片付けていた。回収したものはすべて纏めて同じ引き出しに閉まってある。

すでに慣れてしまっている空気が悲しい。

それから久保田さんはやはりコーヒーを入れ出した。毎日平均三杯以上飲んでいる。絶対胃を悪くするとあたしは予測をたてている。

「現場に行ったら、ちょうど毅氏と椿原氏に遭遇したんだ」

入れたてのコーヒーとともに、どっかりとソファに座り直す。

「毅叔父様？」

襲撃のあった同時期に毅叔父様も動いていた。

もちろんその事実のみではシロという判断はできないけれど、あたしは頭に一情報として書き込む。

こんな昼間に、彼がこのなかにいるのは、かなり珍しいことではないだろうか。

幸祐が閉じ込められてから、地下室へは誰も近寄ろうとはしていなかった。しかし警備などもつけてなかったし、入ろうと思えば誰でも入れる。

「青筋を立て毅氏が詰め寄っていた。わたしはあれの父親だ。なぜその亡骸と対面できないとな」

「……」

「この件が片付くまでは誰も近づかせられないと丁重に椿原氏は断っていた」

「亡骸つて浩佑のことよね」

すでに幸祐の遺体はあの場にはない。椿原さんがお祖父様と同じところに冷凍保存しておくと言った。

現場を荒らすような真似をしていいのだろうか。と、思ったのだが、確かに警察に公に出来ないと言ったのであれば、ずっと放置しておくわけにもいかない。

この家はそういう公的機関にもあつさり抵抗できてしまう。久保田さんは、真面目に生活してる自分が馬鹿馬鹿しく感じる……と嘆いていた。

「だろうな。この件とこのことは関係ない。あの人はあれが死ぬことも予見して、期限内は誰とも対面させるなどでも遺言に書いたのか、と凄い剣幕だった」

あたしのなかで僅かな違和感が生まれた。久保田さんがニヤリと笑う。

「おかしいと思わないか？」

「ええ」

幸祐の遺体の前に皆が集合したとき、真つ先にこのこともお祖父様の件同様、ふせるべきだと言い出したのが誰でもない毅お祖父様だった。

全く悲しみや苦しみなどの類を見せず、それどころか見下したような眼で遺体を見ながら言ったのだ。あのときの顔と、その言動は結びつかない。

一般的な家族という認識はこの人は成立してないケースが多い。おそらく損得勘定ぐらいにしか引掛かりがないのだろう。

(父親があの人で、子どもはあれ……だもの)

それでも亡骸を見たい、とここまで激昂するほど主張するさまは、違和感以外のなにもでもなかった。

これはなにかある、と思ったほうがいい。

きつと久保田さんも同じ感覚に陥ったのだらう。

一口で半分くらい飲み込み、そして続けた。

「椿原氏が言うには、浩佑側には源蔵氏がいる。だから本音ではどちらに会いたいのか、わたくしは判断致しかねます、だってさ」

「そう……」

つまり毅叔父様は、子どもに会うフリをして、本当はお祖父様に近づこうとしていると椿原さんは思っているんだ。実はどこにお祖父様が眠っているのか、誰にもあかさされないでいた。

なぜだらう。

その真意はわからない。だけど椿原さんは叔父様の目的が読めているのかもしれない。

「やっぱり、油断のならない人ね……」

それがあたしの結論だった。大人しく真つ向勝負で来てくれる人ではない、ということだけひしひしと伝わってくる。

「加藤さんは、まだ？」

「変わりなしだ」

顔をしかめながら久保田さんが答えた。

ずっと久保田さんが加藤さんに事情を聴きに言っていた。それでも加藤さんは黙秘を続けているのだ。

久保田さんの話では、なにを言ってもどんな脅しをしても、生真面目で毅然とした態度を崩さないらしい。

すでに腹をくくっているのか、簡易なベッドの上に胡座をかいて堂々たる姿勢で座ってるそうだ。

使用人と血族者の境が、地下牢にも設けられている。

幸祐のいた地下一階は本当に普通の部屋に、出られないように鉄格子がしてあるだけのもの。しかし加藤さんがいる地下二階は質素でしかも狭い。コンクリむき出しの昔ながらのものではないが、必要最小限のものしかないのだ。

だから殺害時にもなにも聞こえず、加藤さんは事件にも気づかな

かったと供述している。大雨も手伝っていたから、それは本当かも
しれない。

黙秘しているのは、誰の命令で幸祐の手助けをしたかという箇所
のみだ。もつともそこが一番知りたいことだったりするのだけれど。
「なあ、あの拷問の道具はなんだ？」

不意に久保田さんが興味津々というふう^{ふう}に聴いてきた。

実は地下二階の奥にそういうものが置いてあるのだ。

「お祖父様の趣味よ。昔実際に使われたものをヨーロッパやなんか
で収集して帰ってくるの。あたしはやめといた方がいって、以前
から一応忠告はしてきたんだけどね」

「以前つて……小学生だろ、おまえがここ出たの。……昔から言う
ことマせてたんだな」

「どこがよ！」

むかつときて睨んだら、久保田さんはそっぽ向いて、べっつにと
呟いた。

「まさか、久保田さん拷問して喋らそうとしてない？」

加藤さんに、拷問する気なのかしら。

この人ならやっても絵になりそう^{そう}で凄く怖い。

だけど久保田さんは心外^{こころがはず}って顔をした。

「そんなことするか。見ているだけで痛々しいだろう、とくにあの
棘付きの椅子。他にも使い勝手の不明なものまでありやがる。オレ、
あんなのやって絶命させない自信がない」

「どういところで力不足を感じてるのよ」

しかも自信がないという人の態度ではないし。

「つつつてもなー、いまは加藤しか聞けそうな奴もいないんだよな」
やや本気のぼやきを、ため息交じりで言った。

実はそのあとに奇襲^{きしやく}かけてきて、閉じ込めている人たちはどこか
病んでいて話しにならないんだそう^{そう}だ。

イカれちまつてる、と久保田さんは表現していた。どこか妄想し
ながら喋るか、怯えながら黙^{おび}っているかのどちらかだという。

次は自分が殺られるという勘違いをしているのかもしれない。

ということ、いままともに久保田さんと会話をしてくれのが加藤さん一人だけなのだ。それはあたし側ではない人としてだけれど、「あなたがそのつもりなら、好きにしていいわよ」

「だからやらないって。それにあいつやっても喋らないと思うぜ。それくらいしぶとい」

珍しいことだけど、久保田さんは加藤さんを高評価しているようだ。話しているうちに、情が生まれたようだ。

仕事中に情を入れたケースとしては悠汰がいる。ただ高評価する人はあたしとしては初めて会った。加藤さんのほうが二十五歳で歳下だと言っていたのに。

(つまり加藤さんが大人なのね)
精神的な話で。

それならば毅叔父様が、清志郎伯父様が……。いずれにしても下っ端のものに動かされるタマではないということになる。だからこそ、幸祐にただ手を貸したということが考えられないのだ。

その証拠が出れば、その人も地下室へ放り込める。あたしも少しは安心できるというものなのだけだ。

* * *

次の日の夜だった。始めて椿原さんの方から動きがあった。

正式に遺された遺言書を発表すると宣言したのだ。

そこでまたここに残っている全員が広場ホールへと集まったのは、夕食時間をすべての人が終わらせた十時だった。

椿原さんの隣には顧問弁護士の人もついていた。だから皆、表向きはおとなしく聴いている。

内容はほとんど前回と同じものようだったようだ。

ただ、たった一言追加があった。あたしも知らなかった、聞いていなかった一言。

しかしその一言が最も醜悪で最も厄介だった。

つまり、それは期限のことだ。二十日は二十日で変わりはないのだけれど……。

「え？お祖父様が死んでから二十日？」

加筆されていた。その部分のみが。

「やっぱりなに考えてんだあのジジイ……」

あたしの隣で久保田さんも舌打ちをしている。

お祖父様が亡くなったのが先週の金曜日の朝だ。今は木曜日だからつまりあと二週間この状態が続くというわけだ。それはあたしに署名をして認めてもらえる期間だ。

「これが助けになるか、それとももっと危険が増すか……」

倒れ込みたくなった。フルマラソンのゴール寸前で、もう十キロ追加で走ると命じられたときのような衝撃。

確実にあたしが遺贈を受け取る直前と、まだなんとかなると相手側に思わせることが出来るこの状況と、どちらが危険なのか見極めが難しい。

正直このまま本来の期限二十日を迎えるのは恐ろしいものがあった。深影慎を筆頭に、危険な輩がまだこの敷地内を自由に徘徊しているのだ。

「やるしかないだろうな」

久保田さんの仕事も延びる。だけど最早逃げるといふ選択は初めから無いみたいだ。

それはとても有り難いことだと思う。

あたしより前の方で殺叔父様は、他の誰よりもその書面を手にして確認したいと主張した。

それを椿原さんは断る。

「少なくとも、期限を終えるまではどなた様にも手を触れさせてはならない。これも源蔵様の命令でございますので」

「すべてそれで済ませられると思いやがって！」

あたしはこの言葉で、ふと思いついた。昨日のこの二人の会話。

毅叔父様は遺言状を求めている。

遺言状をこつそり破棄すれば、今なら証拠隠滅は可能だから。

後からいくら騒がれても物的証拠がなければ強引に持つていけると彼は見ているのだろう。確かにそれを通せるだけの権力ちからがある。

しかしその在処もずっとあかされないでいた。

この敷地内を探し回り、それでも見つからないとなると、後はお祖父様と共に眠っていると毅叔父様は考えたのかもしれない。

(あれ……?)

「おい、もう部屋に戻るぞ」

ふとなにかが頭を掠めたけれど、久保田さんに強制的にそう言われて刹那、消え去ってしまった。

皆が動く一歩手前で、あたしは帰らねばならない。人で混雑したなかで、慎のようなものに襲われたらひとたまりもないからだ。

久保田さんと千石さんに挟まれて、あたしはその会場を後にした。

* * *

次の日の午前中。ようやくあたしのもとにパソコンがやってきた。久保田さんがなんとかしてやるって言ったのは、外に出て調達してくるだけだったようだ。

(また大袈裟に隠してえ)

格好つけたかったのだろうか。朝一番に出たようで、あたしが目を覚ます頃にはデスクスペースにすでに置かれていた。

「好きなだけお得意のハッキングをしてくれ」

「嫌な言い方しないで」

ハイスペックのデスクトップパソコンだ。

これなら思うとおりのことができる。

「また聞き込みしてくる」

本当にパソコンだけ置くとそそくさと久保田さんは出て行った。

まあ他にすることもないわけだから、調査に身を入れているんだ

ろう。護衛なら千石さんがいるし。

これで重要な情報でももってきてくれれば言うことはない。

「せめて本気で付き合ってる人がわかればなあ」

「その女性が犯人ですか？」

珍しく千石さんがあたしの独り言に反応した。

「そんな単純じゃないだろうけどね。そもそもあの時この家にいる人じゃないと無理だから。でもそういう人がいれば情報が得られて先に進めるわ」

チェアに座り左右に回転させながら、どうしたものかと思案する。ちよつとぐらい関わりある人ぐらいしか、ここではわからないのだ。

LAN経由で人間関係以外の情報を得ようとしたときだった。

あたしの携帯が鳴った。

(世羅?)

こんなお昼になることはまず珍しい。あたしはつい日時と時間を確認してしまった。

金曜日の十一時すぎ。まだ三時限目の最中だ。

怪訝に思いながらも電話に出た。

「どうしたのよ?」

『いきなりそれが挨拶か?……元気そうだな』
変わらない世羅の語調。

あの電話のあとから四日も経っていることに気づいた。連絡がないということは、事態に変化がないんだろうと思っ、あたしからはとくになんのアクションもしてこなかった。

そのあとがこれでは……。

「悠汰になにかあったの?」

鋭くあたしは尋ねた。

すると電波に乗って微かに笑う声が聞こえた。

『とくにはなにもないよ。まだね』

「まだってどういことよ」

『いや、今日ようやく玲華の言うとおりフォローしようとしたんだ』
「遅くない？」

責めたくはないが、悠汰のことを考えれば気を揉まずにはいられない。

月曜日に話をして報告が金曜日とは。思い立ったら即行動の世羅らしくない経過だと思った。

『仕方ないだろう。やつが授業に出ないから、会う機会がなかったんだ』

「どういうこと？休んでいたの？」

あたしは自分の耳を疑った。

謹慎はあつたけど、それ以外は一度だって休んでいなかったのに。『いや、学校には来てみたいだな。姿はちよくちよく見ていたのだが授業はさぼっていたんだ』

どうして、と言いかけて、あたしはやめた。

もしかしなくてもあたしのせいだ。今回のことが関係しているとか考えられない。

『仕方ないから、今日は私も二時間ほど授業をさぼらせてもらった。週を持ち越したくはなかったからな』

どこかわざと恩着せがましい色を含めて言う。

あたしは気持ちが悪くて、それは聞き流すことにした。

「それで？結果は？」

『残念だよ。ご褒美を逃してしまった』

まったく残念がっていないようで、世羅の言い方には変わりがない。だけどそれがすべての答えだった。

「今度はどんなふうにならしたの？」

『私の知っていることは話してやるとまで言ったのに、いらないと答えてきた』

そこで世羅の声が硬いものになった。些細な変化だったけれど、あたしは聞き逃さない。

『玲華。神崎はすでに比呂とかなり深い間柄になっているようだ』

「え？」

『これは私の勘だが……、やつは比紹に感化されている。操られると言つても過言ではないかもしれない。気をつける、玲華。なにを仕掛けてくるかわからんぞ』

「そんな……」

あたしの知らないうちに、またこの家に近づいてきている。

それは駄目だと思った。

やはり逃れることは出来なかった。

久保田さんにした“お願い”。それが近づいてくるかもしれないと、あたしはこのとき覚悟をし始めていた。

そして午後。

綾小路先輩からも電話が入った。この日初めて悠汰と接触したことをまず最初にあかしてきた。

この人も時々連絡をくれるけれど、それはすべて今日もこの家に入ることを失敗したという報告のみだった。

「悠汰を避けてたの？あなた……」

『そんなことするはずがないじゃないか。ただ会つても話すことはないと思っただけだよ。神崎の安心のために僕は利用されてはやらないとね』

「あんたね」

どこまでも悠汰を目の敵にしている。京香が以前あたしたちの噂が学校にまで流れていると行ってきた。だからこの人が説明してくればすべて丸く治まったはずなのだ。もちろんあたしは、この人がそんなことをするはずないと思って、わざわざ世羅にまでお願いした。実際世羅の話を聞く限りそれは予測できたことではある。

『噂を流した人物がわかったよ。美山が比紹に言われて京香とともに流したと白状した』

美山先輩ね、とあたしはため息をつきたくなった。

あの人と直接関わりはないけれど、良い噂はひとつも聞かない。悠汰のこともあって、あまり関わるつもりもなかった。

「美山先輩はどうして手を貸したの？」

「ただ面白いからとだけ言っていたな。比紹に言われた通りにすれば、神崎が元に戻ると思ったようだ」

「元？」

「最近のあいつは、見ていてヤバイ目つきになっていってき。僕は今日初めて接触したからわからなかったけど、確かに不安定な精神を感じたよ。彼の目は焦点がどこか合っていないように見えた。気迫が感じられないのに、どこか必死でさ。必死だと思えたのは、この僕を捕まえるくらいには本気で走っていたからね」

これは……。

あたしが思っている以上に、悠汰に負担をかけさせているのかもしれない。

綾小路先輩は、あくまで噂だけど、百メートル走で十秒台をたたきだしたこともあると聞いたことがある。

いまままだ体育でどこか制限をしながら運動をしている悠汰が、本気を出して走ったんだ。

「告げ口みたいになるけど、言わせてもらう。神崎は、もう噂のことはどうでもいいって言っていた」

「え？」

「玲華。やつがわざわざ言い直した“もう”で僕は察知した。おそらく最初はその事が聞きたくて二年の教室にまで訪れていただろうけど、神崎の中でその中身は変わったんだと思ったよ。だから比紹からかなりの情報をつかんでると言える」

これは世羅から聞いていた情報と繋がる。世羅だけの、ただの勘ではない可能性が高くなった。

あたしは目の前が遠くなりそうな感覚に陥りそうになり、なんとか押し止めた。

「比紹は、どうしてそんなこと……」

『さあね。それは美山も言わなかった。ただ僕は今日帰るときに比紹の姿を見たんだ。学校のすぐ近くで』

「比紹が？」

『そう。それで僕は確信した。神崎を操っているのは比紹だって。比紹の手によつて神崎はそこに忍び込む気だと。神崎がした質問、まさにそちらの家の中のことだったからね』

「うそ……」

綾小路先輩からもでた。操っているという言葉。

（それから、なに？）

比紹が、忍び込ませる？

（それが狙い）

あたしには比紹の狙いが徐々に読めてきた。必ずそれは親切心からしているわけではない。比紹は失敗させるつもりだ。

「どうして、教えてくれるの？」

ふと、疑問に思った。これまで完全に悠汰の話は無視していたのに。

『きみが不利になることぐらい、僕にだってわかるよ。やっぱり馬鹿だね、あいつ。僕でもこんなにすぐ想像がつくのに。玲華にとつて最悪の状況になることがさ』

やはりあたしのため、か。

嬉しさよりも申し訳なさのほうに勝ってしまった。あたしはどうあつても、それには応えられないのだから。

『どうだろう？先手を打てるような情報だったかな？』

「ええ。とつても助かったわ。ありがとう」

間単にお礼を言つてあたしは通話を終わらせた。

なんとかしなきゃ、と思つて焦る。こんなまわりくどいやり方ではなく、もつと本質的に手助けしたいのにそれがままならない。

（まずは目先のことね）

どうやって侵入するつもりなのか知らなければ、追いつ返すことは出来ない。

あたしは再びパソコンに向かった。

あたしはすぐに久保田さんを呼んだ。

事情を話すのに、千石さんを追い出したりはしなかった。

いままで悠汰の話題はなるべく久保田さんといるときにしかしていない。けれど悠汰を止めてもらっている隙にも、あたしを狙ってくる輩がいなくても限らない。そのための護衛は千石さんがするわけで、だからこそ話を聞いてもらわないといけないということもあった。

だけどそれだけではなく、あたしはすでに千石さんを信用しているのかもしれない。

「久保田さん」

右手に携帯電話を持ち、パソコンを眺めていたあたしは、ふと顔を上げた。

それに久保田さんが諦めたようなため息を吐く。

「行けばいいんだろ。行けば」

「そうよね。行けばいいのよ。それから」

それから、とあたしは続けようとしたけど、久保田さんはその言葉を待たなかった。

「わかつてる」

苦虫を噛みつぶしたような顔で出て行った。

いつかこんなときが来るってことは、分かっていた。久保田さんも、あたしも。悠汰がこの辺りを歩いている姿を見てから。

あたしは、昼間に来たふたつの連絡内容から比組の企みを見抜いた。

ここへ入るには、なんにしても監視システムをどうにかしないとすぐに嗅ぎつけられる。

正面から入っても使用人に追い出されるのがオチなのだ。

久保田さんの第一回目は、あたしが予め言っていたのと、千石さ

んという同行人がいたから問題なかったのだ。それでもジロジロと不審気に見られたってばやいていたけど。

あたしは少しでもその監視システムに動きがないか見張っている。監視システムをみていると、おのずと見えてくる。最も弱いところ。予測を立て、その間に久保田さんには移動してもらったのだ。

今日、という保証はない。

それでももし悠汰が来ることがあれば、絶対に未然に塞がなければならなかった。

久保田さんもそこは同感のようで、居座るつもりでいるようだ。

あたしが監視システムを注意深く見ていると、しばらくしてから小さな変化があった。読みどおり、比紹が介入しているのだ。

ひとつのセンサーが切り替わった。

すぐにあたしは久保田さんにメールした。

ちょうど向かった場所と相違はない。これで間違いなく久保田さんは悠汰に会っている。

「千石さん、あたしも行くわ。ついてきて」

久保田さんには言っていなかったけれど、あたしは部屋でおとなしく待っているつもりは最初からなかった。

（良かったわ、今夜で）

これが何日か先になったら、あたしたちにも隙が出てくる。そのまえに悠汰を止められることは好都合だ。

（好都合……）

何気なく思ったことに、ドキリとなった。

いつからあたしはこんな考え方をするようになったのだろう。

今回の目的を達成するために、いままでのやり方を変更したり意気込みが必要だった。けれど根本的な、自分が信じているものだから、そういうものまでは心を売るつもりなんてなかった。

あたしは侵食されていつているのだろうか、この家の風習に。

雑念を振り切れられないうちに、その場に着いた。正面の三階ホールのバルコニー。こんな時間だから誰もいなくて、ひっそりとし

ていた。

広い窓を開けずにそこから下を見る。

悠汰が警棒を握り締めて久保田さんになにか訴えている姿が見えた。

(痩せてる……)

悠汰はまた、あまりご飯を食べてないのかもしれない。すぐに身体に表れるからすごく心配になる。

でもそれはあたしのせいだ。負担になっているんだ。

このまま悠汰の前に飛び出したくなかった。

でもまだ、終われない。ならばこの気持ちは封じなければならぬ。

「あつ……」

下で、久保田さんが殴りかかっている。悠汰は逃げ場を失ったようだった。

動悸が速くなった。嫌な予感がしてハラハラする。

あたしからは、よく見えた。

久保田さんが悠汰の左腕を狙って、警棒を振りかざしたんだ。だけど、悠汰がバランスを崩したのが見えた。なにが要因となったのかは不明だったが、がくと下がったのだ。そのせいで警棒がちよつと悠汰の頭と同じ位置になった。

だけど勢いがついていて、久保田さんは止まらない。

そのとき久保田さんは、かわりに左腕を必要以上に上げて、自分のわき腹にわざと隙をつくったようにみえた。

きっとそれしか出来なかったんだと思う。

なのに、そのまま悠汰からはなにもせず、警棒が頭を直撃していた。そのまま横に吹っ飛んで倒れる。

その距離でかなりの衝撃だったことを物語っていた。

(馬鹿！)

あたしから全身の血が引いた。

久保田さんが慌てながら悠汰に近づいていったけれど、こちらか

らは会話は聞こえない。

あたしはすぐに千石さんのほうを振り向いた。

「お願いっ！助けて、悠汰を！病院に連れて行ってほしいの！いますぐに！」

思わず叫んだあたしに、千石さんは複雑そうな顔をした。

「しかし玲華様。いまあなたと離れるわけには……」

「他にお願いでいる人がいないのよ！先回りして車を玄関に着けて！」

頭を打つたのだ。一刻も早く悠汰を病院に連れて行かないといけない。そう、敷地の外だ。

しかし救急車なんて派手なものを、呼べるはずがなかった。

あの様子では久保田さんも冷静さを失ってるみたいだし、揺らさないように気をつけて運転してもらうなら千石さんが適任だ。

「わかりました。源蔵様の車の一台をお借りします。私が運転することもありましたので、鍵の場所はわかってます」

「お願い。センサーはあたしがなんとかするわ。用意できたらメールして」

「はい」

乱されることなく千石さんは一礼して出て行った。

あたしも移動する。走りながら携帯で久保田さんにメールした。

千石さんが病院に連れて行ってくれる。

あたしはその間にセキュリティを何とかするから、その際に悠汰を外に連れ出して。

車を正面につけるわ。その後に悠汰が来ていた痕跡を消して。

いつものように文章を選んでいられない。簡素な命令文になってしまった。

しかしそんなことを気にしている場合ではない。

あたしが目指す場所。それは地下牢がある塔とは別の、東側の一

階。そこに分電盤があることは調査済みだった。

そう、すべての電力を落とすのだ。セキュリティに注ぎ込まれている電力も含めて。

不幸中の幸いで、深夜すぎということもあり人と出会うことがなかった。

* * *

この敷地内のブレーカーが落ちたのはほんの数秒のことだった。それで充分だとあたしはちゃんと分かっていた。メールのやりとりで、そこにはそつなく行動した。

きっちり予備発電機の大元から、すべて断ち切ることをあたしは忘れなかった。

そしてあたしはまた走っていた。

どうしても感情が抑えられなくて、じつとなんてしてられない。

千石さんの代わりに前田さんを護衛として選んだ。

あたしが一人きりで部屋に帰ってきたのと、いきなりの指示に前田さんは躊躇っていた。

一緒に部屋を守っていた山元さんに後のことをお願いして、有無を言わずあたしは前田さんを引き連れて走った。

西の建物の三階にあるコンピュータールームへ。

だけどその途中に比路はいた。

二階と三階の間の階段の踊り場にいた。

エレベーターを使っていたらすれ違って、会えなかっただろう。

直感が働いたというより、エレベーターを使用することでエレベーター内のカメラに映るのを避けたかったのだ。

客間が多い三階には空室が目立っている。恐らく比路は、その部屋に潜り込んでその窓からちゃんと見ていたんだろうと推測した。

あたしの姿を見て、比路は笑った。心の底からの微笑み。だけど裏があることはもうわかっている。

「やあ玲華。珍しくきみから動いているね」

「どこかの馬鹿が馬鹿なことをしなければ、あたしにそんなことをする必要もなかったんだけれどね」

あたしは比路を見据える。

どうしても聞きたいことがあった。どうしても言わなければいけないことがあったから。

「馬鹿？それってぼくのこと？」

「当たり前でしょう。悠汰に変なこと吹き込むの、やめてよね」

「珍しいね。玲華がそんなにダイレクトに言うの」

本当に面白そうに比路は笑う。

昔からそうだった。

どこか腹の底を別に持つていて、それを隠すように笑うのだ。それは完璧に幼少から創られていているものだから、悠汰が見抜けなくても無理はない。

「ここには言っても解らないような人が多いみたいなのよ。だから直接的に言うように心がけているの」

「ああ。それはそうだよ。遺産とかさ、あんなのに群がる大人たちを見ていたら嫌になるよね。どうしちゃったんだろうみんな、って」

「あなたは遺産目的ではないのね？では誰かに頼まれてこんなことしてるの？」

「もちろん違うよ。そしてぼくはぼく自身の都合で動いてる」

どこか謎を潜ませるように比路は薄く笑う。

常にその声は柔らかく、だからこそ異様だった。

彼は何を企んでいるんだろう。どういう想いからこんなことをしているんだろう。

「悠汰くんは失敗したんだね」

窓の外の方を見ながら比路は言った。

その先には久保田さんが悠汰といた場所がある。

「あなたの望むとおりにはさせないわ」

語調を強めにあたしは言う。

どんな裏があるかと、この人だけは見逃してはならない。彼は最もしてはいけないことをしているのだ。

「悠汰くんを惑わせたことを怒っているの？でもぼくは本当のことしか言っていないよ。それでどんな結果になろうと、それはきみが間違っていたってことさ。きみが間違っているんだ」

先導するように彼は告げる。

「責任転嫁も甚だしいわね」

「そう？最も明確にしていると思うけど？」

「同じ事実でも、言い方によっていくらでも相手に感じ方を違ったように話せるわ。わざと誤解させるように大袈裟に言ったりね。あなたはどのように言ったのかしら」

「気になる？」

「ニヤリ、と比路は笑った。

その笑みこそが、彼がしてきたことへの証拠のように感じた。

彼は一方的なものの見方しかできないのだ。こちらの事情を知らないのだからそれは仕方無いことだけれど、そんな状態でどこまで誤解のないように悠汰に伝わるのか。それは不可能に近い。

だからこそ比路は悠汰に真実は語っていない。そう確信した。

「でもやめとく。きみがショック受けるといけないから」

「比路！」

「ねえ、なんで彼を選んだの？ぼくはずっと不思議だったんだ。あんまり聡明じゃないよね、彼。ぼくにも簡単に信用しちゃってさ」
あたしの怒りの一声を無視して比路は窓から離れた。そして近づいてくる。

前田さんがあたしの前に来ようとしたけど、それをあたしは止めた。

「こんな男に怯んだりしない。

「あの困った部分を補うほどの特技が別にあるのかな？それとも…」

「…」

すつとあたしにだけに聞こえるように声を潜めた。

「夜が凄いか？」

「！」

瞬間、あたしの怒りが全身を駆け巡った。

殴りたくなるのを必死で抑えて、その分を眼に宿した。眼だけで人が殺せるならば、いまのあたしはそんな眼をしていたと思う。

こんな侮辱に負けてやらない。精神を侵されてはいけない。

この男を殴るのはあたしじゃない、と思った。

「そんな顔しないでよ。冗談だよ」

腹が立つほど朗らかに声を出して笑った。

「ああ。そうだこれ、プレゼント」

そしてポケットからなにやら取り出し、あたしに差し出す。

あまりに自然の流れで、自然に受け取ってしまった。

するとそれは一枚の写真だった。

場所は見覚えがある。一度しか行ったことはないけれど西龍学園の屋上だ。

一人の男子生徒が寝転がり、その上から女生徒が顔を近づけていた。遠目だし、女生徒の頭で顔がどちらもわからないけれど、なぜだかあたしは直感的に思ってしまった。

悠汰と、京香だ、と。

女生徒の方は間違いないと思えた。髪型と、比路から手渡されたという事実。

悠汰は……。

(あたしにはわかる)

この寝転がり方。足の投げ出し方。手の置き方。すべてをよく見ていたから、わかってしまった。

「誰だかわかるよね？面白いものもらっちゃったから是非きみにあげなくちゃと思ってね」

あたしを動揺させる為の手段。

ただそれだけのために。

許せないという態度を抑える努力を、あたしはあえてやらなかった。

確認したいことがあったからだ。

「誰が撮ってるのよ」

「それは内緒。もちろんぼくじゃないよ」

「じゃあ誰にもらったの？」

「それも言えないな。でも撮った人と同一人物だよ」

平然とした態度で比路は言い切った。

こういふ言い方するのなら、確かに嘘ではないだろう。

だけどそれでは、悠汰に絡むのは京香と比路だけじゃないという証明になっただけだった。

「ねえ。これって浮気？」

また。あたしの動揺をさそうような言い方をする。

もう必要ない、と思った。

この人から得られる有益なものはなにもない。ならばこちらもなにも与えてやらない。

だから隙も見せない。

それには答えしないで、あたしは別のことを突きつけるように言った。

「あたしから見れば、遺産に群がる大人たちもあなたも同じ存在よ」

比路の眉が一瞬だけしかめられた。

それを確かめるとあたしは踵を返す。突っ立ってるしかなかった

前田さんに、行くわよと目で合図した。

やはり比路の中では、自分は違うと思っているようだ。

そこにアイデンティティをおき、優越感を持って上の方から見下している。全ての人を。

だけど本当にあたしにとっては同一のものだった。それを突きつけられることが彼には自尊心に障るだろう。

（構ってられないのよ）

そういう人が多すぎる。ここには。

皆のプライドを守ってやれる余裕もなければ、もはやする気もなかった。

* * *

まだ、なんとかなる。

心の奥底でそういう想いがあることは否定できない。

あたしと悠汰のこと。

出来ることなら今すぐにでもここから飛び出して、悠汰のもとへ駆けつけたい。今なら修復可能でも、時間が経てば日を追ってその亀裂は大きくなっていく……。

(誤解を、与えているのかもしれないわね)

これでは世羅のことを言えない。

それでも駆けつけるところか電話で話すということさえ、あたしはまだ出来ないでいる。

すべてをやめて、放棄して、この場から立ち去っても、きっとお祖父様は許してくれるだろう。

だけど、一時の感情に流されてそれで本当に後悔しないのか、今のあたしにはみえない。いや、後悔はすると思うんだ。

(きつと、する)

このまま続けても、投げ出しても後悔するのなら、せめて出来るところまで頑張りたいと思うから。

だから、電話はできない。悠汰の声を聞くと迷いが生まれるから。迷うことが、とんでもないことになりそうで、怖い。

自分が二の足を踏んでいるせいで犠牲が出ることが、最も悔恨の情に駆られる。

比路から強制的にプレゼントされた写真は、とりあえず机の奥底に入れておいた。棄ててしまえばいい、とは思っけれど。

これは罰だ。

悠汰へヒドイことをしたからその報復だ。悠汰を責める資格なん

かない。これはあたしが持つておかなければならない気がした。

「ああー、ウオツカを一気飲みしたい気分」

早朝、寝ずにあたしの部屋のソファで一夜を過ごした久保田さんが、やはりソファに寝転がったままぼやいていた。

落ち込みが半端ない。それはそうだろう。不本意な結果になったのだから。

この時間帯になると千石さんも帰ってきていた。それも不愉快にさせているようだ。

「いい加減落ち込むの止めてよね！お通夜みたいだわ！」

「実際にやるべきお通夜を先伸ばしにしていることがあるのに、ここでそんな気分でいるのはおかしいよなー。そうだよなー」

あたしの言葉の揚げ足をとりながら、なおもぼやく。

「つつても、オレのせいで悠汰が死ぬなんてことになったら……」

「勝手に殺さないでよ！千石さんが大丈夫そうだったって言ったでしょ」

「ってあいつに何がわかんだよ。あの鉄面皮によー。だって普通しばらく様子見るだろ？本当に送り届けて終わりだぜ。せめて意識戻るまで待とうとか、そういう心意気はないわけか？」

「玲華様のほうが危うい。そう判断しました。それぐらにはあの少年は問題ないかと」

千石さんも寝てないのに、その態度には変わりがない。

そうなのだ。

全然眠れなかったので、朝方まで千石さんの連絡を二人で待つていたのに、彼はひとつの電話もよこさず、嫌な予感だけが増長して限界を感じ出した頃にその身一つで帰ってきたのだ。

なので少しは久保田さんの気持ちもわかる。

でもそれは千石さんの性格なので、仕方ないとあたしは思うようになつていた。

大丈夫だという彼の言葉を、信じただけなのかもしれないけれど。

「おまえ医者かよつ。そうかよつ。じゃあ治してこいよつ」

「あんた、だんだん性格壊れてきてない……？」

寝転がったまま悪態をつく久保田さんに、あたしは情けなさを感じた。

ここまで落ち込むなんて、想像以上だ。

「治せるのであれば、初めから病院に連れて行きはしません」

「……おまえらつてオレを慰めたり励ましたりつて絶対しないよな」
重いため息を吐いている。

やはりかなり責任を感じているようだ。

(なに言つてんのよ。そんなことされても怒るくせに……)

素直に人の言葉を聞くタイプなら最初からやっている。けど天邪鬼のじやくなところがあるから、あえてあたしは発破をかけるほうに持つていつているというのに。

「こいつは人の気持ちが変わってない。医者が大丈夫って言ったのをそのまま信じて帰ってきただけだろ。せめて意識戻ってから帰ってこいよつ」

「いつになるかわかりませんでしたので」

「おい！それで安心できるか！」

(うーん……)

確かにかなり久保田さんに同意しそうになった。

ガバつと起き上がり睨みつける久保田さんに、少し考え込みながら千石さんは言った。

「あの少年は、怪我よりもなにか、もっと別のところで痛手を負っているのではないでしょうか」

その言葉に再び久保田さんはソファに寝転がる。

それはあたしの心にも刺さった。

悠汰に怪我以上の傷を負わせたのは、まぎれもないあたしたちだ。

(心の傷を……)

そして、それを行なった久保田さんだって例外ではない。どちらがより重症かなんてあたしには把握できないけれど、そこには確か

に存在する。

「なんせそれを目的として、このオレが出て行ったんだから」

「そうではなく……」

「これ以上ウジウジすんなら、この部屋から出て行ってってくれて構わないのよ。今すぐに！」

この話を断ち切りたい。それにそろそろ久保田さんに立ち直ってほしくて、あたしは最後の一言を投げた。

そこまで怒鳴られると、ようやく久保田さんにも気持ちの切り替えが出来たようだ。

ひとつ深呼吸して身体を起こしていた。

「はやく犯人見つけなさいよ。重要人物でもいいから」

あたしたちがするべきことは、この家のなかのことだ。ああいう危険な人物はさっさと白日の下に晒さないといけない。

正直誰が犯人でも今さら驚かないけれど。

久保田さんはなにも言わずに、とりあえず昼頃から調査を再開し出した。

立ち直らせることに成功したあたしは、窓の外を見る。

久保田さんには大口を叩いたけれど、やっぱり油断すると、頭の中は昨夜のことですばいだった。怪我が気かりでならない。

比紹はおそらく、すでに大学に行っている。普通に我が家としての役割しか見だしてなく、夜以外はいない。

客室に限定的に住んでいる親戚筋もそれは同じだった。用事があればここから出て、ここに帰っている。あたしだけが、ここに引き込もって外出していないのだ。

「玲華様」

見るに見かねた様子で千石さんが声をかけてきた。

あたしは窓から離れて振り返る。

「これは言うべきか、迷ったのですが……。彼は車内でうわ言のように呟いてました」

本気で逡巡しているような顔をしながら、でも千石さんは真面目

なまま続けた。

「あなたに、ごめん、と」

思わず、涙が出そうになった。

悠汰が何に対して謝りたいのか、罪悪感を感じているのかは解らない。

これほど遠くなってしまった現状と、あんな状態になってまで謝罪の言葉を口にしたという、彼の立ち位置が……切なかった。

謝らなければならぬのは、あたし。あたしなのに、と思う。だけど、あたしは……。

「千石さん。悠汰の怪我が大丈夫だと思った根拠はなに？」

気持ちを切り替えて、先ほど聞きそびれたことを改めて尋ねた。

「視診のみですが、瞳孔も問題ありませんでしたし、早めに痙攣が治まっておりましたので。嘔吐も無く脳内出血は今のところないと判断しました。外傷によるショック状態もないようでしたし……。無論頭部のことですので、今後注意深く見守ることが必要ですが、しかしそれも病院にいれば見落とされることもないでしょう。医療ミスでも無い限りは」

淡々と説明される内容に安心しそうになったけど、最後の一言は恐ろしかった。

冷静にそういう悪い予見を付け足すのは止めてもらいたい。

「ま……あの病院なら医療ミスは大丈夫じゃないかしら」

「信頼は大事だと思いますが、しかし……」

「分かってるわよ！どんな事故が起こるか分からないってことぐらいは！」

医者と言えども人間だ。完璧は持続しない。

それでも、あたしが千石さんに連れて行ってとお願いした病院は、悠汰のお父様が勤務している病院なのだ。メールでそう指示させてもらった。

お父様は内科医だから、担当になることはないだろうけど、それでもまだ心強いものがある。

悠汰にどういふ言葉を紡ぐとも、我が子に対する想いはちゃんとあると思えるから。

「それと、外傷の他に気になることがあります」

千石さんは続けた。

変わらない口調だったけど、少し聞くのに勇気を要した。

「もしかしたらあの少年は、もともと体調を崩していたのかもしれない」

「どういうこと？」

「殴られる直前、何もないとところでバランスを崩していたのが気になりました。そうしましたらやはり、触診でかなり高い発熱を確認しました」

「熱？」

「はい。恐らく風邪を引いていたのを無理して悪化したか、インフルエンザ時ほどの体温じゃないかと」

「あんのっ……バカっ！」

なにをやっているのよ！

さつきとは違う意味で悠汰のもとに駆けつけた気分が駆けられた。思い切り馬鹿と本人に言ってみてやりたい。

自己管理くらいじゃないの！
「こっちはおちおち戦つてもいられないじゃないの！」

突然怒りを露にしたあたしに、ちょっと千石さんが怯んだように見えた。

それで落ち着く努力をする。

「それより詳しいのね。医療の心得でもあるの？」

「いえ、護衛に必要な知識のみです」

どこまでも謙虚に千石さんは頷いた。

この人も出来た人だ。お祖父様が近くに置いていた意味がよくわかる。

「そっ……でもありがとう。安心したわ」

もっ少し。

あと少しだから待っていて悠汰。必ず最後には笑える結果にするから。その為にあたしは今奮闘しているのだから。

だから悠汰も頑張ってほしい。

あたしは窓の外、病院のある方角に向かって祈りを捧げた。

* * *

夕方になっても夜ご飯の時間が過ぎても久保田さんは帰ってこなかった。

こんなことはここへ来て初めてだ。

いつもどれだけ自由に彷徨さまよっていても、一度顔を出してから自分の部屋に帰っていたのに。

何をしているのだろうか。あの人は。

……なんかどこかでこのフレーズを思った気もするんだけど。

(進歩ないったら)

誰にも何も言わずに姿をくらます、ということ実は初めてじゃない。

あまりそういうことを当たり前のように繰り返すと、心配してもらえなくなるから止めた方がいいわよ、と言いたくなる。というか言えばよかった……。こんなことになるなら。

とりあえず、まだ、今の段階ではあたしは心配していた。

なんと言っても本家内での失踪だ。

「そのうち帰ってきますよ。玲華様」

夜ご飯の片付けをしながら麻衣ちゃんが気を遣ってくれた。

「そうよねえ。また飄々と帰ってきてきそうではあるわね」

あの人は強いから、大丈夫。

前に通り魔の犯人から守ってくれたときも、あたしは見ていたけどすごく強かったし、ジムにも通って鍛えてるって言ってたし……。だから大丈夫。

それでも感じるこの胸騒ぎはなに？

このままもし帰ってこなければ千石さんを聞き込み……。いえ、それでは駄目だわ。同じようなことが遭ったら困る。久保田さんだけでなく千石さんまでいなくなったらあたしに未来はない。

久保田さんが戻らなければ、切り捨てるという選択も入れておくことが必要だとそれは判る。知識として解る。

(こんな考え方じゃダメ。勝てないわ)
後手にまわる。どうしても。

それはあたしの立場上仕方がない。久保田さんに動いてもらってようやくあたしはじつと守りに専念できるのだ。そこは認めなければならぬ。

ここの連中と同じことなんてしない。人を駒のように考えたりしない。あたしは染まらない。

「玲華様！」

そのとき、部屋の電話と千石さんの呼びかけが同時に聞こえた。ビクリとした。

ここの電話は一度も使っていない。盗聴の疑いがあったし、携帯電話があつたから必要なかつたものだ。

良くない予感が、本格的なものになる。

あたしは唇を噛み締めながら電話の前に立った。

すぐには手が出せない。

「玲華様。私が……」

千石さんが気遣って手を伸ばそうとした。あたしはそれを制する。「大丈夫」

覚悟を決めて電話に出た。けれどすぐには声を出さずに相手を窺う。

すると。

『もしもし、玲華ちゃん？』

「稔、叔父様？」

フィルターを通して聞こえた声は、間違いなく稔叔父様のものだった。意外な相手だと思つた。

ここ数日ぱったり会わなくなった人。

『ああ、やっぱり。良かった、内線に出てくれて』

『どうなさいます？』

震える指先をなんとか抑えた。

ここへきて急に不安は確信へと変わる。体内の温度が冷えていく感じがした。

『ちよつとね、いまからおれの部屋に来てもらおうと思って。もちろん一人でね』

『もう遅い時間ですわ。明日では、いけませんの？』

『きみに断る選択はないと思うよ』

『どういう、意味でしょう……』

ぎゅっと受話器を握り締める。

『きみの護衛はおれが預かっている。きみが断れば命の保障はない、と言わせてもらうよ』

「稔叔父様！」

あたしの叫びも空しく、ガチャリと通話が途切れた。

やはり予感は的中していたのだ。前回の時には感じなかった嫌な

予感。胸騒ぎ。それらが。

(それで、あたしはどうするの?)

すでに胸中では決定されているのに、わざと疑問符を挟み込む。

それは自分自身に対する確認だった。

そう、決まっている。

あたしに出来ることがあるなら、それをするのみだった。

第二章・・・7

電話の内容をしつこく千石さんに聞かれ、仕方なく話したら案の定、千石さんには止められた。

危険すぎる、と。

そんなことは百も承知だ。

「あの人は貴女を守ることが仕事です。それで貴女が自ら危険を冒してどうするんですか？」

「解ってるわ。だからといって無視はできないでしょう？」

「だったら私も行きます！」

「一人でと言われたのよ。助かるものも助からないかもしれないじゃない」

「駄目だ！これで貴女に、玲華様に万が一のことがあれば私は源蔵様に顔向けができない！」

千石さんにしては、かなり熱い想いをぶつけられた。

痛いほど、よくわかる。

けどあたしだって同じような想いはあるのだ。

無視はできない想い。

警棒を握り締めながら意地でも行くと言ったら、せめて途中まで一緒に行かせてくださいと言われた。

だから、ついてきてもらったんだけど……その“途中”の段階でまた衝突した。

「これ以上来たらバレるじゃないの」

「構いません。どうせ廊下に私がいたとしても、あの人はやりたいようにやるだけでしょう」

だから淡々と怖いことを言わないでほしい。

意外に千石さんは頑固だった。それだけ熱心なのは有難いけど。

稔叔父様から話がいつているようで、途中にいるガードマンに制止されたりはしなかった。

それは千石さんもだったの、結局稔叔父様の部屋の前まで来てしまった。仕方がないと諦めて、ドアをノックするときには隠れてもらう。

「やあ。やっぱり来てくれたね、玲華」

憎らしいほど爽やかな笑顔を振り撒いて、稔叔父様はあたしを招き入れた。

「うちの護衛がご迷惑おかけしましたわ。これ以上はおかけしたくありませんので、お返し願えますか？」

「まあ待ってよ。そう焦るなって。ソファにでも座ってよ、話をしようね」

さつさと返せ、バカ！ってちゃんと顔には出していたハズなのに、まったく通じず悠長なことを言ってくる。

とはいえ、稔叔父様に主導権があるのだ。逆らえるはずがない。

「どなたもいらっしやらないのね」

座りながら部屋を見渡したけれど、久保田さんどころか使用人の姿さえなかった。

その部屋は全体的にシックだった。モダンなインテリアで埋め尽くされているこの空間には、あたしの部屋とはまた一味違った絢爛さがある。

おまけに間接照明が好きなようだ。仄暗くてなんか怪しい。

稔叔父様自らがコーヒを持ってきて、窓際にある黒いソファに促された。

「まあね。邪魔者はちゃんと排除しといたから」

「うちの久保田はここに来たのですか？」

「ああ、あの人、久保田さんって言うの？そうだよ。幸祐のことを聞きたがっていたから、おれが招待したんだ」

それで敵の手の内に墜ちたというわけか。意外とどんくさい。

「それで今は？」

「うん。実はこいつをさ、向けたんだ」

不意に稔氏は身を乗り出した。

それから、すごく自然な流れでポケットから何やら取り出し、またソファに沈むように深く座った。

「イタリア製の小型拳銃。」

「前言撤回だ。こんなものがあれば、どんくさくなくても太刀打ちはできない。」

「あたしは鋭く稔叔父様を睨みつけた。」

「卑怯ね。幸祐様が持っていたものは毅叔父様ではなく貴方の庇護だったわけね。」

「同じような反応をするんだね。」

「それはそうだ。こんな物を出されたら深刻になるし出所だって気になる。」

「確かに幸祐にあげたのはおれだよ。でも兄も持っているよ、これくらい。」

「なんでもないことのように言いながら、稔叔父様は指でクルクル拳銃を回した。腹立たしいほどの余裕ぶりだ。あまりに慣れたようにその銃を無造作に扱う。」

「こついうものが当然として近くにあるのだから、この家は本当に油断ならない。」

「それをあの人に撃つたの？」

「いいや。彼が立ち上がったから、何をするつもりだろうと思って様子を見てたんだ。そしたらさ、なんと、この窓から飛び降りてさ。あれにはさすがにおれも呆れたね。」

「飛び降り、た……？」

「ここは四階だ。なんて無茶をするんだろう。五体満足でいられるはずがない。」

「馬鹿だ。」

「悠汰のことが言えない。充分にあの人も馬鹿だ。」

「大丈夫だよ、玲華。彼は噴水に落ちた。いや、落ちるように狙ったんだろっね。それでもかなり勇敢だとは思っよ。まあ、だからと

りあえずは無事。でもウチの浜本はまもとが出てくるところを捕まえてね、今は別の部屋に閉じ込めてあるっていうわけ」

「……………」

素早く立ち上がり窓の下を一瞥した。

その下は例の無駄にでかい噴水。狙えば確かに飛び込める距離にある。それでもかなりの勇気がいるだろう。

あたしが立つても稔叔父様はそれにあわせて銃口を上げただけで止めはしなかった。この人は掴み所のない雰囲気醸し出していた。どこまでが真実なのか嘘なのか読めない言い方をする。

それでも久保田さんが帰ってないのは事実で、ならば今は稔叔父様の言う“無事”を信じたい。

「それで貴方は彼の身と引き換えに署名をしろと、そういうことね」「相変わらず話が早いね。まあそうだよ」

それはできない。

久保田さんには申し訳ないけれど、まだ署名をするわけにはいかなかった。

まだ無事ならば、きっと他に助ける方法がある。すべてを挑戦しないうちから折れたくない。

それに久保田さんの性格上、あたしがここで署名をしたら怒るだろうと勝手な決意をした。

「そういうことでしたら、交渉は決裂ですわね。彼は必ず取り返しに参りますので、それまでしばらくお世話になりますわ」

彼を傷つけたら許さない。あたしは強引にそういう意味を含めた。

この部屋に久保田さんが居ないなら、ここにもう用はない。すべての部屋の中に入れてでも見つけてやるわ。

「そういう強気なところ嫌いじゃないよ、玲華」

稔叔父様も立ち上がった気配を後ろから感じた。その瞬間、背中に別の体温が押し当てられていた。

背後から抱き締められたのだ、と気づいたらゾクリとした。

咄嗟に警棒を伸ばし身構えようとする。

けれど振り向いた時点で彼は銃口を向けていた。
思わず体が固まった。

「コレがあるのを忘れたら駄目じゃない？」
忘れていたわけじゃない。撃たれそうな気が不思議としなかったのだ。稔叔父様からは殺気が感じられない。

それでも、金縛りにあつたように下がれない。目の前にあるだけで、それは脅威になる。

「ああ、そうだ。じゃあきみに選んで貰おうかな。おれとしてはきみが死んで、即分け前が入るのもいいし、もちろんきみが署名するのでもいい。それから三つ目」

わざわざ指を折りながら稔叔父様は付け足した。

「おれたちが一緒にこの家を支配するってどう？きみがそんなに父の後継者になりたいなら、おれが手を貸すよ。パートナーとしてね」

この提案には驚きよりも呆れた。思いきり冷ややかな目になる。

「叔父様、ご存知だとは思いますが、叔父と姪は婚姻は結べませんわよ」

「ああ、そう？でもそんなのどうにでもなるよね。戸籍イジるのって容易いよ」

まったく気にも留めていないように、稔叔父様はさらりと言い退けた。

(げっ。こいつマジだ)

呆れすぎて少しだけ緊張がほどけた。あたしはすぐ後退する。

だけど稔叔父様はそれを許さず、拳銃を持ってない左手であたしの右腕を掴んだ。警棒を持っている腕を。

「おれとしては三つ目がおススメなんだけど」

耳元に口を近づけて、悪魔の囁きのように低い声を出してきた。
嫌悪感しかない。

「幸祐ではきみは手に余っただろうね。だけどおれは失敗しない」

「そんなに目を掛けていたのに、どうして彼が亡くなったときにあの場にいなかつたのですか？」

ずっと不思議だった。

幸祐が稔叔父様に懐いていたのは知っていた。そしてそんな幸祐を稔叔父様も拒絶せずに世話を焼いていたのだ。本当の親子以上に仲が良いのは間違いないのに。

「ああ、おれは生きている人間にしか興味はないんだ。それに幸祐は死んで良かったと思うよ」

「よかった？」

聞き捨てならない発言だ。

どういつつもりで言っていようと、死んで良いことなんてあるはずがない。

「きみも久保田ってやつと同じ目をするね。幸祐は好き勝手に生きすぎた。その報いがこれからくるってときに死ねたんだ。一番幸せなタイミングだったよ」

稔叔父様の表情に初めて翳りが含まれた気がした。

この人は本当は哀しんでいるのではないだろうか。あたしの知らない何かを知っていて、彼なりに悼んでいる。そう思えた。

「報いつてなに？」

どうしても訊かずにはおれなかった。猫を被っている場合じゃないと思った。知らなければ後悔する気がしてしまったのだ。地下室に送ったあたしが聞くべきだと。

「ここから先は言えないんだ。ごめんね。おれも全てを把握してるわけじゃないし」

「まさか、貴方知ってるの？犯人が誰か……知ってるんじゃないの？」

どうしてそう思ったのかわからない。直感だった。彼の目が別の誰かを見ている気がしたんだ。

どこか哀しそうに。

あたしがずっと目を逸らせないでいたら、稔叔父様は被せるように抱き寄せてきた。

「勘違いしないで。きみはおれの支配下にある。きみは選ばなければ

ばならないよ。さっきの三つをね」

あたしの右腕は自由だ。彼の銃口もきつと今は下に向いている。抵抗するなら今しかない。

それは解っていた。けども、先ほどの嫌な感じがしない。それよりももっと……。

(傷ついているの?)

この家は複雑すぎる。様々な糸が絡み合って、すでにほどくのが容易ではなくなっているんだ。

その一本の糸であるあたしも、きつと今は絡みかけていて、今抜けさなければそのうち本格的に結び目ができてしまう。固く。

「あたしは……どれも……」

それでもあたしは揺らいでいてはいけない。当初の目的を見失わずに成し遂げることだけが、今のあたしを支えているんだ。

だからどれも選ばないとちゃんと言わなければいけなかった。

「玲華」

稔叔父様がそつと離れた。

哀しげな表情を向けて見つめてきた。あたしも目が離せない。頭が真っ白にならないように、それだけ意識して次の行動を瞬時に巡らせていた。

そしてそのまま顔が近づいてくる。

あたしは迷うことなく警棒を持ち上げた。そして叔父様の喉元のどもとへ強く押し当てる。手加減せずに。

「それはダメよ」

予測してなかったのか、稔叔父様はあたしから離れて激しく咳き込んだ。

「きみね……」

それから眉を寄せて頂垂れた。

「ほんとに、幸祐が失敗したのがよく分かる」

その次の笑顔が本当に優しく、あたしはこの人は嫌いじゃないと思った。

ただ女にだらしないだけの人かと思っていたけど、そうじゃないんだって思った。

「叔父様はあたしを殺せない。だから三つの内の一つはないわね」

「そうかもね。でもおれは女は殺せなくても男なら殺せる。だからおれを信じたら駄目だよ」

「久保田さんを殺せなかったのに？」

「彼は人質だから殺さなかったんだ。あ、きみの四つ目の選択肢があったね。あの男を見捨てて代わりにおれをそばに置く」

人差し指を一本立てて稔叔父様は真面目に言った。

それは三つ目とどう違うのだろうか。気が抜けそうになったのを何とか絶える。

「それは有り得ないわ」

この人があたしの味方になることはない。それは解っていた。いくら本当は優しい人でも、この人は本家側の人間であたしに試される方にある。

「署名なら、考えてあげてもいいわ。まだ出来ないけどね」

謎を含んだ言い方をあたしは選んだ。稔叔父様がすべてを語れないように、あたしにもまだ言えないことがある。

「玲華、きみは……」

叔父様が何かを言いかけたときだった。

勢いよくこの部屋の扉が開かれた。

「お嬢！」

あたしは思わず目を瞠った。

久保田さんが焦っているような顔と、物凄く怖い顔を足したような顔をしてそこにいた。

それとなぜか全身がびしょ濡れだった。

「生きていたのか……」

同じように稔叔父様も瞠目していた。

「え？」

どうということだろう。

確か久保田さんは噴水に飛び込んで、稔叔父様はその身を引き上げ、捕らえていたのではなかったのだろうか。

「生きていた？」

なんだか凄く騙された感じがする。それだけは直感的にする。

稔叔父様に問い詰めないと、と反射的に思ったときだった。

ズカズカと部屋の中までおかまいなしに入ってきて、久保田さんはあたしの腕を掴んだ。物凄く素早い動き。

(痛っ)

かなり力強い。本当に怒っているんだとわかる。

「生きてて悪いな。彼女は返してもらおう」

凄く低い声で久保田さんは一言だけ言った。そのまま引きずられるように部屋から連れ出される。

抵抗する暇がなかった。

稔叔父様も何も言わなかったし追ってこなかった。

ただどあたしには振り返る余裕が無いくらい、意味がわからない。「ちょっと！どういうことよ！痛いじゃない！」

なにがなんだかわからなくて、あたしはどうしていいか解らなかつた。

部屋の外には千石さんがいて、やっぱり訳が解らないといった顔をしていた。

「話しは後だ。こんなところで怒鳴り合って周りに聞かれないのか？」

そんな状態なのに、こちらも見ずに拒絶だけする。

それってここじゃなければ自分も怒鳴ってるってことじゃないの！

そう思ったけど、とりあえずあたしに怒っているのは確かみたいなので、大人しくついて歩くことにした。

痛いと告げてから、掴んでいる手の力は緩めてくれたみたいだ。

もう痛くない。

それでも空気が張り詰めたままで、部屋までの道のりがすごく長く感じた。

千石さんも後ろから何も言わずに歩いているだけで、執り成すとか、仲介するとかそういう気の使い方はしない人だった。そんな人は知ってたけどさ……。

「おまえ！なんであいつの部屋にいる？」

あたしの部屋について扉が閉められた瞬間、あたしたちに説明することを後回しにして久保田さんが訊いてきた。いや、怒鳴っていた。

「なによっ！怒られるようなことしてないわよ！あたしは！」

「どうせオレを盾に呼び出されたんだろう！それでなんでノコノコ出向いてるんだ！てめえは！」

なるほどね。

つまり千石さんが言ったことと同じところで怒っているのだ。護衛される側がその護衛の身を案じ敵の元へ出向くなどもつてのほかだと。

「自分の失敗を棚に上げて言うことじゃないわね！実際ここに顔出さなかったんだから、心配になったんじゃない！」

そこで従順になれないところがあたしの欠点だったりする。

「おまえはなんでも一人で決めて確かに偉いと思うけどな！こういうときぐらい任せるよ！信用されてないと思うだろ！なんのためにオレが噴水に飛び込んだのかわかってんのか！」

「わかるわけ無いじゃない！バツカじゃないの！そんな情報無いんだから！だけど、悪いけど信用なんてしてるわよ！それでもあんなになんかあつたら悠汰が悲しむじゃない！それが嫌なの！あたしの判断基準なんてそれでできてるのよ！」

「おまえっ……！！」

いきなり久保田さんの言葉が詰まった。途切れたと思ったたら、ずるずる膝からしゃがみこんで。

「結局そこかよ」

次に聞こえた声は弱々しいものになっていた。

千石さんがタオルをどうぞって言って渡したら、ちよつと戸惑い

気味に久保田さんは受け取っていた。おお……とか言いながら。

あたしはその光景を微笑ましく思ったけれど、とくにコメントは挟まなかった。

まだ話しは終わってない。

久保田さんはタオル越しに上目使いでこちらを睨みつけた。

「それって、おまえにも言えることだろ？あんまりでしゃばるな」

「あら、それならあたしにはもうひとり、顔向けできない人がいるわ。祥子さんよ。だからあたしの勝ちね」

「勝ち負けじゃないだろ。それを言ったらおまえの方が悲しむ奴が多いだろうが……」

最後の方は彼のぼやきだった。

だからあたしは敢えて聞かないフリをしておいた。

確かにこんなことで言い争っていても何も進展しない。何人悲しむ人が多かったからどうだとか、そんな比較は何の意味もなさない。

「で、あなたはどこにいたの？こんな時間まで水泳してたわけ？」

「……………いろいろあったんだよ……………」

色々で片付けようとしてるわね、こいつ。

久保田さんは時々変なところで秘密主義になる。でもここは聞かないといけないところだと思った。

「おまえはあいつと何の話をしたんだ？」

「だけど久保田さんの切り替えの方が早かった。」

「あんたが言ったら教えてあげるわよ」

お互いしばし睨み合う。

あたしたちが頑固に火花を散らしていると、ようやく千石さんが一人冷静に口を挟んできた。

「どちらの情報も今後必要になりそうですね。とりあえず落ち着いて話ませんか」

千石さんが間に入ったのは実はこれが初めてだった。よつぼど放っておけないと思われたのか、それともようやく打ち解けてきたのか……。

なんにしてもあたしたちは、今の彼に言われて無視できるほどの神経は持ち合わせていなかった。

* * *

加藤のところに行っていたんだ、と久保田さんは切り出した。報告を聞くと毎日行っているの、それはとくには驚かない。

ただ、今回は別の展開になったんだそうだ。

「幸祐を恨んでるやつとか心当たりを聞いていたんだ。なんの変化なのか加藤が情報をくれそうになったとき、稔氏が現れた」

「タイミングよく？」

「そうだ。いつの間に仲良くなってるの、とか言いながら。気配を消されていたから話しかけられるまで気づかなかった。あれは会話の内容を聞かれていたと思ったほうがいい」

パツタリ見なくなっていた人だから、まだいたのか、というのが久保田さんの感想だったらしい。

元々ここに住んでいるのだから、それはおかしい感想なのだが、それぐらい唐突な現れ方だったようだ。

警戒すべきかどうか、迷いがでたそうだ。

「加藤が稔氏に緊張していた。軽々しくウチのことを他人に話したら駄目じゃない？って冷たい笑いを浮かべていたからな。一応まだなにも聞いてないと庇っておいたが、代わりに稔氏が話をしてあげると言われて……」

「それでラッキーってついていったの？無用心ね」

「仕方ないだろう、稔氏がここじゃ何だから部屋で話そうだったんだ。あちら側の領域に行けるとなると、この件の核となる部分に近づける。初めての重要人物との接触だぞ。これを断れば恐らく二度と真実には近づけないだろうと思ったんだ」

顔をしかめて硬い声を出す。

久保田さんも焦燥感を感じていたのかもしれない。まったく犯人

に近づけないから。

「情報交換をしようと言われた。稔氏も聞きたいことがあるから程度いいと」

「で？なにか聞いたの？」

「殺すぐらいなのは知らないけど、あいつ女にはいい加減なところあったから、それ関係の女には憎まれてたんじゃないって……」

「具体的には？」

「たくさんいすぎて、さすがに全員は知らないだと」

肘をつき、深く座りなおして久保田さんは面白くもなさそうに言った。

それってなにも進展してないってことじゃない。

「幸祐と稔氏って同類っぽいだろ？幸祐は稔氏に近づき、彼の真似をしようとするところがあつたんだと」

「それは知ってるわ。確かに子供の頃から尊敬してる感じが伝わってきてたもの」

だからきつと、稔叔父様にとっては辛いことだったんだろう。今回の件は。

「女を落とす技とか伝授してたけど、結局幸祐は半人前のままだった。やるだけやってフォローが出来ていない。そこが大事だと思うけどとか、聞いてもねえのにベラベラ喋っていた」

不愉快そうに久保田さんがため息を吐く。

しようがなく会話をしたというのを隠してなかった。

(合わなさそう……)

まるで悠汰と綾小路先輩くらい正反対なタイプだと思う。

「じゃあ二股かけて恨まれていた線が濃厚ね」

「……二股どころじゃなかったうえに、そういった女性が親戚筋にもいたらしいぜ」

「それって誰よ」

そこが一番重要なところだ。

よそ者はこの際関係ない。あの日あの時間この洋館にいた人物、

もしくはそういう人物を操れる誰かが怪しいのだ。

「ちよつと前は美雪っていうお嬢だと。しかしちゃんと別れて結婚しただろ、彼女は」

「うわーうわー」

つい最近の話だ。七月に行われた結婚式。まさにその彼女ではないか。

(あんなに清楚そうだったのに……)

まさか幸祐の毒牙にかかっていたとは。

あたしは思わず両手で自分の頬を挟んだ。まったく想像もできない。

しかしその女性は結婚後すでにこの家からいないのだ。相手と一緒に暮らしている。だから彼女ではない。

「他には？」

「はぐらかされた」

「……………」

やっぱり進展しないか。

まあ、それを知っていたら、久保田さんだってそこから話すだろうと思った。

「そこで銃の登場だ。初めから会話なんていらなかったんだ。あそこにおれを呼び出すことだけが、あいつの作戦だったらしい」

一生の不覚、と久保田さんは呟いた。

よほどプライドに障ったとみえる。

(だから防弾チョッキ着ろって言ったのに)

確かに頭を狙われればそれまでだが、もう少しましな選択ができたのではないだろうか。

「それで飛び降りたのね。無茶したわね」

「無茶じゃない。計算どおりだ。あいつはおれを人質におまえを呼び出す算段だった。だから撃つ気は最初からなかったんだろう」

「そう……………」

やっぱり、口だけだったのだ、あの人は。

「おまえが、オレの危機に飛んでくるってことが、どうも腑に落ちなかった。そんなことは荒唐無稽の話だと……」

「久保田さん」

「それでも、あの場所に居続けることが良くないことだけは、はっきりしていたんだ。もしも稔氏の言う通りになったら……。そんなことになったら、何より自分が許せない。死ぬことより有ってはならないような気がした」

こちらも見ないで、淡々と語っていた。

「それなのに、あたしは飛んで行っていったってわけね」

「そうだ。部屋に何とか戻ってきたつてのに、もぬけの殻で前田も行き先は知らないと言っし。まさかとは思ったらまさに」

「なるほどね。でもね、謝らないわよあたしは。それからもう一度同じようなことがあったとしても、あたしは飛んで行くから」

「おまえ！オレの話きいていたのか！」

勢いよくあたしを見ながら、かなり真剣に怒鳴りつけられた。

「ただどあたしだつてそこは譲れない。」

「あたしだつて後悔する人生は歩みたくないのよ」

罪悪感なんて抱えて生きていきたくはない。これ以上、一ミリでもこの家の風習に馴染みたくないのだ。

そう、あたしはお父様とともにこの家を捨てたと言っても過言じゃない。

久保田さんが舌打ちをして顔を背けた。

「やっぱり生意気だな、おまえ」

本来あたしは護られるタイプじゃないのだ。自分からなんでもやりたい。だけど今回だけは人の手が必要だった。

「それで？結局どうやってあの噴水のなかで持ちこたえたの？」

このまま討論をしても仕方がない。もう千石さんも間に入るうとしないし。

ならば話を変えるほうが得策だった。

久保田さんもそう思ったようで、一度座りなおしてから説明をし

でした。

その後の足跡を　。

* * *

あたしが久保田さんと情報を共有して二日が経った。

萩原くんから待ち望んだメールがきたのも今日だった。もう悠汰の怪我は大丈夫だって、ちゃんと報告をくれた。

だけど心の傷はどうか分からない。久保田さんに殴られたという事実は変わらないから。

久保田さんにも教えただけれど、“とりあえずは安心”っていうところの域から出ない、という複雑な顔をしていた。あたしたちは、こういうところでは気持ちも共有していたと思う。

それでもここにいる以上、あたしたちが出来ることは限られている。

話し合いの結果、いまは幸祐が付き合っていた女性を探そうという事で落ち着いた。

もちろん警戒は怠らないでいくのに変わりない。今日も扉の前の護衛の人が、必死でやってくる人を蹴散らせている。

「思ったより危なくなってるのは、やっぱりあいつらが強いからだよねー」

首をゴキゴキ左右に鳴らしながら、唐突に久保田さんが言った。

目の前の応接スペースのテーブルには、あたしがまとめた家系図が置かれている。可能性のある人たちを家系図から洗い出していたのだ。

お昼の四時半。もちろんここに余計な人は入れていない。久保田さんと千石さんとあたしの三人だ。

「なによ、いきなり」

「いや……べっつにー」

頬杖をつきながら再び下に視線を移す。

あれだけ本人たちの前では失礼なことを言っていたのに、あれは意図的に言ったことだったのだろうか。

確かにそうだと思った。

いまはあの二人もとうに復活してくれている。それでも、交代制とはいえ二十四時間扉の前にももらうのに、いつか限界が来ないとも限らない。

穴が出来る。

そうなったときにこの室内がどういう状態に陥るか、想像しただけで恐ろしい。

本来、この家のなかにいる全員で襲撃に來られたら、太刀打ちはできないのだ。多勢に無勢で四面楚歌で悲劇的結末にとつくになつてゐる。

いまそうなっていないのは、あくまで個人主義の集まりで纏まりまとがないから。どうしても協力し合う人たちじゃないのよね。

本当にそこだけは今回助かっている。

しかしあれから深影慎が大人しいのは気がかりだ。やはり期限が延びたことで様子を見ることにしたのだろうか。

慎がというよりは、命令を下す側の人間が。

「それより……ここに住んでるはずの千石が、全くその系統の噂を知らないってのは問題じゃないか？」

話しが戻されていった。

幸祐のやりたい放題加減を、まったく千石さんは知らなかったというのだ。

まあ、お祖父様にずっとついているんだから、それどころじゃないのも解るけど。久保田さんはそれでも他の使用人との会話とかで伝わるものだろ、と言いたいみたいだった。

「興味も有りません」

あくまで真面目に、千石さんは傍らに立つたまま意にも介さない。

「加藤さんはなんて？」

「さあな、だつてさ」

噴水ドボン事件　あたしはあの日からこう呼んで久保田さんに牽制をかけていた　から、また加藤さんのところにお邪魔したみたいけど、もう何の情報も持ち帰ってない。

「そもそもあの人、結局誰のために動いたのかしら」

「毅氏が稔氏が、だろうな」

久保田さんのなかでは、毅叔父様の可能性が高かったらしいけど、噴水ドボン事件　皮肉にこう呼ぶことで、久保田さんはなぜか大人しくなる　から稔叔父様も視野に入れ始めたみたいだ。

「それは言わないのよね」

「もっ、すっごい黙秘。完璧っ」

投げやりに久保田さんはふざけた言い方をする。

この人もなんだかんだ言って限界に近いのかもしれない。一応ずっと神経を外に向けて過ごしているのだから。なんか輪をかけてボロが出ていた感じがした。

「せめて、なぜその人のために動いたのか、それを言ってくれればいいんだけど」

「なぜ？」

「本当に忠義を尽くしたのか、それとも何かで脅されているかよ　忠義を尽くしたのであればまだ良い方だ。脅されているのだとしたら、同じように弱みを握られている人が他にもいないとも限らなくなる。」

「あー……。それも言わねえんだよな……」

久保田さんはぼやきながら天を仰いだ。

完全に行き詰っているみたいだ。

確かに誰にも話しを聞けないとなると、ヒントを得る場所がない。あたしがもう一度稔叔父様にあたる、なんて言い出したらまた激怒されそうだし……。でも、それしかもう道はないんじゃないかしら。

「ねえ、久保田さん……」

「それは駄目だ」

「ちよっ！まだ何も言ってないじゃないのよ！」

「言わなくても解る。お嬢の考えてることぐらい」

かなり冷ややかに久保田さんは威圧してきた。

もうー。真面目なときとふざけてるときのギャップ、なんとかしなさいよ！

「めんどくさい男！」

なんでこんな男が良いのかしら、祥子さんは！余計なお世話だと言われるだろうけどね！

いや、言わないか祥子さんは……。ただにっこり微笑んで、お互い様とか言われそつだ。

「おまえなあ、一言で切り捨てるなよ」

「だったら他に良い方法あるの？あるなら言ってみなさいよ。聞いてあげるから！」

「そんなこと言つて、本音はちょっとあの稔氏のことが入っただけじゃないのか？」

「さいつてー！なんてこと言つたよ。このバカ！」

この男はああああ。ほんっと時々すごく無神経なんだからっ。

昔は傍若無人だったって祥子さんが言ってたけど、こついうところまで垣間見える。

「あのかなー、あつちには拳銃あるってこと忘れてるんじゃないか？」

おまえ

「忘れるわけじゃない！」

ほんとに。あれ　噴水ドボン事件　からこの手の話題になる

とささくれ立った雰囲気になる。

お互いの主張がぶつかって、どちらも折れないから先に進まない。

「つまんねえ女」

仕返しとばかりに久保田さんが呟く。つたくもー。

「じゃあ加藤さんに聞いてくるわ。あたしから聞けば教えてくれるかもしれないしね」

「はあ？おまえぜんっぜん解つてねえな！そういう勝手な行動が危険を招くんだよ！護衛する方の迷惑ぐらい考えろ」

偉そうに。なんで悠汰もこの男を兄事してるのかしら。

「千石さん！あたしが加藤さんのもとに行くのは迷惑かしら」

「いえ、まったく……」

いきなり話しを振られてたじろいでいたけど、千石さんはさすがプロフェッショナルでそう即答した。

「おつまえ、そいつに聞くなよ。ズルイだろ」

久保田さんの声が弱くなる。千石さんはあのときりで、そうそう頑固な一面はみせてこなくなっていた。どこかでまだ自分を抑えているのかもしれない。

「ってゆーか二日もかけて何をしてるのかしら、あたしたち」

いくら行動範囲が限られているからって、あまりにも流れが遅い。ぐずぐずしてたら期限に到達してしまう。それまでには犯人を捕まえたいのに。

「焦るな。それまでには見つけるから」

見透かして久保田さんはそう断言する。頼もしい言葉だとは思いますが、その足がかりがなにもなしでは安心なんて出来るはずがない。

可能性のある女性だけで十人以上いるし、絞って消去法で選んだとしても消去した根拠があまりにも薄い。つまり多分タイプじゃないだろうとか、この歳の女性まではわざわざ手を出さないだろう、とか。想像の域を出ないのだ。

それに幸祐がちゃんとした範囲の女性を相手にしていたかわからない。つまり人妻だとか近親者にまで手を出していたら数は格段に増える。禁断の愛に燃える人も確かにいるわけだし。

「そこまできたら愛じゃないわね」

「愛なんて人それぞれだろう」

「らしくない人がらしくないことを……」

「あのなあ、じゃなくて！この家の奴らは普通じゃないだろう？特に色恋沙汰は源蔵氏の血を引いてるってだけで怪しいもんだ」

「それって……あたしもそうだと言いたいわけ？」

いま確実に聞き捨てならないことを聞いた気がした。

一瞬は男目線で擁護してんのかと思っただけど、結局そういうことなわけね。でも否定しきれないところが悔しい。

「おまえは普通に見えるから心配するな。少なくともいまは」

冷やかな目線を送ったけれど、久保田さんは飄然と言った。

ふーん、そう。

まったくフォロースされてる気にならないけれどね、最後の一言であたしたちがこんな言い争いをしている間に、遠くから騒がしい怒鳴り声が聞こえてきた。

防音完備なこの部屋にまで聞こえる音。

扉のすぐ前で騒ぎが起こっているのだと気づいた。

久保田さんの顔色がすぐさま変わり立ち上がって扉に近づく。あたしも立ち上がったけれど、前に庇うように千石さんに立たれた。

久保田さんが扉を開ける。

「ちよつと離してよ！いや！触らないで！」

「落ち着きなさい！その手に持っているのを渡しなさい！」

今までにもあったようなやり取り。護衛の前田さんが襲撃に来た誰かを抑えているのだとこのやり取りで判断した。

しかしこれまでと違つところがある。その奇襲をかけてきた者が女性だったということだ。

久保田さんも、応戦しに出て行った。

あたしは相手が誰だか気になった。声しか聞こえなくて見えなかったけれど、若い女性。

本能が告げた。幸祐絡みの誰かではないのかと。

こういう話をしてきた最中の出来事だから、そう思ったのかもしれない。

「千石さん。部屋に入れてあげて」

「玲華様！危険です」

「だからあなたたちがいるんでしょう？ボディチェックはあたしがするわ」

言い捨ててあたしは扉に近づいた。

慌てながら千石さんが制止をかけて、まずは私かと声をかけられた。それであたしの提案は呑んでくれたんだと解釈する。

だからまずは大人しく千石さんに任せた。

「触らないでよ！玲華！いるんでしょ！玲華に会わせて！」

扉が開くとクリアに聞こえる。やっぱりあたしに会いにきたようだ。

男たちの背中しか見えないけれど、聞き覚えのある声であたしは瞬時に思い当たる人を探した。

その間に千石さんが一歩前に出る。

「玲華様がお話を伺うと。中に」

指示すると久保田さんが信じられないという顔でこちらを見た。

また少し怒ってる。

あー嫌だわ。また衝突するのかしら。

内心でそう思っているうちに、取り押さえられた状態で部屋の中に女性が姿を現した。

その人は。

「瑞穂……」

清志郎伯父様の三番目の子供、次女の瑞穂だった。

背中まである長い黒髪は振り乱されて顔面が半分隠れている。余程興奮しているようで、肩で息をしながらもあたしをしっかり見据えていた。

そしてテーブルの上にある家系図に視線を移して、一言あつと呟いた。

瑞穂はあたしのなかでは大人しいタイプの女性だった。

外で遊んでいるあたしたちに近づこうともせず、ただ一人、部屋にこもって読書をしているような少女時代。何度かその部屋に強引に押し入ったことがあったけど、その頃から難しい本を読んでいた。強引に誘っても一緒に遊ばないし、姉弟きょうだいともそこまで仲良くないから、彼女はほとんど独りでいた。

あたしだけでなく、誰とも関わりを持たずとしていなかったのだ。だからあたしはすごく驚いている。

このタイミングで、このように振り乱した彼女が現れたことを。念のため、武器とよべるものを所持してないかあたしがチェックしたところ、最初に振りかざしたという小さいナイフだけだった。その後瑞穂をソファに座らせた頃には、彼女も何とか落ち着きを取り戻していた。

だからなのかもしれないけれど、彼女から発せられる言葉は何も無い。ずっと俯いて膝の上で掌をきつく握り締めている。

「あたしに用があつたのよね？」

仕方なくあたしから促したら、ビクリと肩を震わせて……泣き出してしまった。

座らず遠巻きに傍観していた久保田さんが、目で合図をしてきた。なに泣かせてんだよ、早く本筋に入れ、と言いたいみたいだ。

強引にこういう形をとってまだ怒っているのだろうか。

「瑞穂。あなたがここに来たのは幸祐のこと？」

身を乗り出して確認する。

すると瑞穂はポケットからハンカチを取り出して涙を拭った。それから暫くして、頷く。

それまでの時間、三分くらい。

あたしはようやく、はーと長い息を吐いた。息が詰まるかと思っ

た。

こういう女性は扱いに困る。京香みたいにガンガン来てくれたら、こちらも手加減なしでいけるのだけれど。

「まさか瑞穂が幸祐と付き合ってたとわね」

あたしと同じで義理の従姉弟いとこになるわけだから、まだ許される範囲か。

そして瑞穂は頷いたきり、また黙り込んだ。

「もしかして瑞穂もあたしが幸祐を殺したと思ってるの？それで許せなくてここへ来たってこと？」

ひとつの仮説のもと、またあたしから促す。もしそれならば瑞穂は犯人ではないということになるけれど。

「わ、わたし……もう、どうしたらいいかわからなくて……」

消え入りそうな声で瑞穂はそう呟いた。肯定でも否定でもない。

あたしはソファから移動して瑞穂の足元にしゃがんだ。覗き込むように下から彼女を見る。

「どうしたの？一から話してくれる？」

「幸ちゃんが、わたし以外の人と付き合っているのは、知ってたの。わたしが遊びのほうだっていうこともちゃんと……でも幸ちゃん
はわたしといるときが一番落ち着くって言うてくれて……」

「……………」

ええと。この部分は聞かないといけないところなんだろうか。

「だからわたし許せなくて……幸ちゃんを奪った犯人が」

「そうなの……」

ちゃんと悲しんでくれている人、いるじゃない。

無慈悲な大勢に隠れた端の方にも、ちゃんとしているのよね。幸祐にも哀悼する人が。

「でもあたしは犯人じゃないわ」

「そう、よね。うん、わかっているつもりだったんだけど……」

自認するように瑞穂は頷いた。

「杏里あんりが言うの。わたしのところに来る前に玲華をなんとかするべ

きだつて」

「杏里？」

意外な名前が出てあたしは反問した。

全部で二十家ある分家の中のひとつ。松倉家の長女で二十歳。今は親とこの洋館に住んでいるはずだ。

「わたしは杏里が怪しいと思うの。幸ちゃんも杏里とちよつとだけ遊んでやったら、それから凄くつきまとわれるようになって困ってるって。わたしに話してくれたことがあったから」

「ちよ、ちよつと待って。幸祐は杏里とも関係があったの」

杏里はどちらかといえば勝気な女だ。

(タイプが両極端)

いや、ああいう人にタイプとか聞くのは愚問なのだろうか。

しかしあまりに見境がないというか……呆れる。

「杏里の部屋に何度も話を聞きに行つたわ。一番最近まで付き合があつたのはわたしと杏里だから。わたしじゃないなら杏里しかいないって……」

「それで杏里はなんて？」

静かに瑞穂は首を横に振つた。

「否定してる。それからあたしに聞くぐらいなら玲華をなんとかしなさいって。玲華が幸ちゃんを殺したのよって……。それでわたし、最初はそんなはずないって思ってたけど、ずつと言われているうちにそうかもしれないって思うようになって……。杏里がなんにも言わないなら玲華からって」

また、瑞穂は泣き出した。

何度もごめんなさいと繰り返している。

「もう違つて思ってくれてるってこと？」

その態度からあたしはそう受け取つた。瑞穂からは嫌悪の情が感じなかつたのだ。いままでの人たちから感じ取つた負の感情は。

それならばあたしもそういうものを抱いたりしない。

「家系図、見たから……」

ああそっか、とあたしは思った。

今はソファの隣に退けているけれど、あたしたちが広げていた家系図には、いろいろ書き込みがしてあったのだ。幸祐の名前に赤丸印と、該当しないだろうという人にはバツ印が。

そういうのを見て、あたしたちが何を話し合っていたのか、彼女は読み取ったのだろうか。

賢い女性だと思う。伊達に難しい本を読んでいるわけではないのだ。

「だったら別に杏里が怪しい行動をしたとか、そういうのは見えないのよね？」

念を押してあたしは確認する。

「当日は見てないけど、ただ……すごく大喧嘩してたから」「いつ？」

「幸ちゃんが玲華の部屋を訪れた前の日よ。わたしの部屋に幸ちゃんが来てたときに、杏里が乗り込んで……」。そこで杏里が、幸ちゃんを殺してあたしも死んでやるって」

修羅場だ。恐ろしい。

本当にあるのね、そういう話。

つい、自分に置き換えてしまった。

あの写真。京香に対して何の嫉妬もないかと聞かれれば、それは否定は出来ないから。怒鳴り込むようなことはしないでおうと、固く心に誓った。

「わたしはオロオロしていただけだったんだけど、何とか幸ちゃんが宥めて一応その場は収まったの」

「そうだったの」

本当に、瑞穂には悪いけどとんでもない男だ。でもそういう人を選んだのは瑞穂で、そこは本人にも前程として責任はある。

「しょうがないわね、こればかりは」

理屈でなんとかなるくらいなら初めから恋愛なんてしない。

あたしが感慨深く思っていたら、瑞穂はジツとあたしを見つめて

言った。

「わたしも、牢屋に閉じ込められるの？」

何か誤解をされているのかもしれない。あたしは思わずため息が出た。

「あのね、あたしが地下に送っていた人って、二つのことに該当する場合なのよ。ひとつは財産絡みの奇襲であること。これは瑞穂には該当しないでしょう？それからもうひとつは、そのまま返したら再度襲ってくる可能性がある場合よ。これはあなたはどうかしら？なるべく解りやすく優しく尋ねた。すると再び瑞穂は首を横に振る。

「そつでしょ？」

「変わらないのね、玲華は……」
目を伏せながら瑞穂が言う。

「昔から、お父様にあなたたちとは遊ぶなときつく言われていたの。いつも懂れながらあなたたちを見ていたわ。ずっと玲華が羨ましかった。だから……見てたから、わたしは知ってる。今も玲華はあの頃とちつとも変わってないって」

「知らなかったわ。だから独りでいたのね」

少し茫然とあたしは呟いた。

そんな事情があったのか。まったく思いもよらないことだった。法律に定められた生粋の血筋の家族と、元が内縁から発生したここにいる家族と、そこには見えない壁がしっかりと存在する。

扶佐子様から産まれたこちら側の人間は、どこか内縁出身者を見下しているところがあった。そして逆に内縁からの人たちは、こちら側に媚を売るか攻撃的な態度を取る。不安定な立場にあるのだ。くだらない、とあたしなんかは思うけど、きつとあたしがそんなことを言っただって、あちら側の人には嫉妬の対象でしかないんだ。清志郎伯父様があたしに言いたいこともきつとそれで。京香もそれであたしを憎んでる。

瑞穂は純粹に懂れていてくれたのだ。まだ好意的だ。

「ありがとう瑞穂」

「えっ？」

だからお礼を言いたくなつて、素直に口にしたらけど、瑞穂はなぜお礼を言われたのか解らない顔をした。

「じゃあ、大変だったわね。幸祐と付き合つのも」

幸祐もこちら側の人間だから。

清志郎伯父様にばれたら大変なことになつただろう。

「隠していたから……。幸ちゃんはほんとうに酷い人だったけど、わたしの存在を認めてくれた初めての人だった。だからこの関係は守りたかつた」

そう言つと、また瑞穂は泣いた。

賢いけれど、感情の面では不器用なのかもしれない、と思つた。不器用で、純粹な人。

あたしはそういう人に弱いのかも知れない。やっぱり幸祐は許せないけど、絶対に犯人は見つけなければいけないと思つた。

* * *

杏里に話を聞きたい。

当然のようにあたしがそう言つたら、当然のように久保田さんは反対した。

「どうしてよ！女性同士の会話よ！あたしが適任だと思つわ」

「だからな、おまえ突つ込みすぎなんだよ。最初はオレに任せてただろうが、どうしたんだよ」

どうした？

確かにあたしはおかしいのかもしれない。

もしかしたら無意識に、自分を見失っているのかも知れない。

(焦ってる？)

多分それは悠汰の侵入を目撃してから。彼が怪我をしたのを見てからだ。

早く終わらせて帰らなければならぬから。

「杏里の話聞き出せたのはあたしがいたからよ。だからあたしが聞きに行く」

「おまえ……」

なぜか久保田さんは詰まった。もしかしたらとうとう呆れられたのかもしれない。

それでも、本来のあたしは自分でやらなきゃ気がすまないところがある。

麻痺、してる。

ずっと同じ状態が続いていて、危機感が麻痺しているのかもしれない。

「杏里様にもお付きの方が数名いらっしやいます。我々も皆で訪問すれば良いのではないですか？」

また、千石さんが仲介した。

それはそうなんだけどさ……。警戒されたら終わりなのよ。

「あまり大所帯で行っても仕方ないだろう」

ここだけは久保田さんと一致して、あたしは結局久保田さんと二人で行くことにした。

まだ納得できないのか、ブツクサ隣でぼやいてるけど。

無視してあたしはさっさと直行した。誰がどこの部屋にいるかは久保田さんが調査済みだ。

勝手に空室に移ったりしてなければ……。だけど。

「はい」

ノックをするとちゃんとそこに杏里はいた。

まずは杏里の使用人が出てきて、あたしが会わせてほしいと伝えるとき、なんとすんなり通してくれた。

しかし中に入ると、不機嫌丸出しで、何しに来たのかしらって顔を向けている。

ずっと黙ってあたしの話と聞いていたけど、瑞穂が来たというと、ようやく会話をする気になったようだった。

「へえ、本当に行ったんだ。瑞穂」

「そうなんです。で、あなたの名前が出たので事情を窺いに参りました」

一応、適度に猫は被っておくことにした。別段仲良くないし、歳が離れているせいか一度も遊んだことはない。

人を無意識に見下して見る癖があるみたいなので、敵に回すと厄介な相手かもしれないと判断したのだ。

それが功を奏したのか、面白くもなさそうに、それでも杏里は話してくれた。

「事情もなにも、あの子の思い込みよ。こつちも迷惑してたの。毎回来られてさあ。あの子ほら、空想癖なところあるでしょ」

「空想癖、ですか？」

「そうよ。本の読みすぎじゃないかしら？瑞穂の話しは殆ど間違い信じてない方がいいわよ」

茶色く染めてゆるく巻いてある髪をかきあげながら杏里は言う。

大人の女性を醸し出していて、同姓のあたしから見ても色気を持ち合わせているタイプだ。

「では幸祐兄様とはそういう関係ではない、と？」

「まあ、それはさ、色々あるじゃない？もうお互い義務教育を終えたくらいにはいい歳だし。野暮っていうものよ」

どこか決まり悪そうな表情で杏里はアイスティを口にした。

ええと、つまり関係はあったってことで良いのよね？

「幸祐兄様のことで瑞穂の部屋に行つたつていう話しは？」

「あれは違うのよ。普通に用事があつただけよ。こつちだって遊びのつもりだったし。いまさら嫉妬なんかしないわ。虚言癖もあるのよ、あの子。ほんといい迷惑！」

これは一体……。

ほんの一瞬、あたしと久保田さんは目を合わせた。彼はあきらかに迷惑そうな顔をしている。面倒なことになった、とか思っただけだ。

「えーと……じゃあ瑞穂よりは本気じゃなかった？」

「知らないわ。瑞穂の気持ちなんてどうでも良いもの。だいたいあたしがあんなガキに本気になると思う？」

「……………」

あたしに聞かれても困るわと、つい言いそうになった。

あたしにとつては、あの男は遊びでも御免被りたい。

「用事つてなんだったんですか？」

「別れ話よ。いい加減飽きてたし、すつきりしたかったの」

「じゃっ、犯人は誰だと思えますかっ？」

「あんだじゃないの？」

とつても自然な流れで、サラリと杏里は言った。あまりの返しに挫けそうになっただけど、寸でのところで思いとどまった。

「あたしだったら犯人探しなんてしていません」

「ふーん。ま、あたしはさ。ほらみんなが言うから、そうなのかな？つて思っただけよ」

愛想良くもなければ、かといって機嫌が悪そうでもない。

笑顔がないから、無愛想に見えてしまうタイプなんだろうけど、

あたしは困ってしまった。

こつ淡々と言われてしまうと、どれくらいの力量で否定をして良いのか考えてしまう。

「えっと、他に怪しい人とか心当たりある人いない？」

「さあ……。外には腐るほどいると思うけど、この家の中では、あたし、あんたか瑞穂だと思ってたからさ。葉子（かづこ）もそれであり得るかもしれないけど、さすがにないかなって」

光線寺葉子（こうせんてい）。こちらも分家の一人だ。

「葉子……って、まだ中学生じゃない！」

信じられない。範囲外だと思っていた。バツ印も悩んだ上でだけど書いていた。

この流れで出るということは彼女も関わりのあるひとりということだ。

「あいつ女なら誰でもいいみたいなところあつたし。深雪の件を知ってる、マトモな女（ひと）はもう相手にしてなかったでしょ。中学生ならまだ騙せるとも思ってたんじゃない？葉子はわりと早熟してたしさ」
「……………」

もうコメントしたくもありませんって感じた。

だけど聞かなくてはならない。事件解決のために。

「深雪さんの件というのは……………」

「ああ、あんた知らないか……………。幸祐、深雪の結婚が決まったときに、相手の男のところへ乗り込んで行ったらしいわよ」

ようやく杏里に笑みが出たけれど、噂好きそうな厭らしい笑い方だった。

「暴力まで奮ったって。これは深雪から聞いたから間違いないと思うわ。泣いてたもの、あの子」

「げっ」

ここにも修羅場が。

なんか幸祐の短命は実は寿命だったんじゃないかと錯覚しそうな壮絶さだ。

「そのこと葉子に教えたら怒り出しちゃって。瑞穂はまだ遊ばれてる自覚持ってたみたいだけど、やっぱり中学生はダメね。本気になっちゃってさ。過去のことでも気になっちゃうのよね」

瑞穂よりも本気だったということか。

「葉子はじゃあ……………いまは泣いてるのかしら」

「さあ……………。あいつが死んでから葉子帰っちゃったから知らないわ
一種冷たいと思わせるように杏里は吐き捨てた。

「帰ったの？」

「そう、父親は残ってるけど、母親と一緒に帰って行ったわよ。落ち込みが半端なかったんじゃない？」

「そうなるように、教えたんじゃないの？幸祐と深雪さんのこと」
じつと杏里の目を見据えながらあたしは確信を読んだ。

「違うわよ、忠告しただけ」

杏里は口ではそう答えたけれど、僅かに気まずそうな顔をした。この人、遊びだつて言つたけど、まんざらでもなかったのかもしれない。割りきつてるなら、わざわざ葉子にそんな話はしないし、幸祐ではなく瑞穂の部屋に行つたつていうのも、どこか違和感が残る。

「ほら、うちのパパと葉子のパパ仲良いでしょ？だからよ」

あたしがまだ見つめていると、取って付けたように呟いた。

「そうなんですか？」

「え？」

「お父様同士が仲良いつて……」

「ああ……」

あきらかにしまった、という顔をした。言う予定ではなかったのかも知れない。

「仲良いというか、たまに会うことがあるみたいね。好意を持っているかどうかは知らないわ」

あたしはそんな事実さえ知らなかった。それぞれ個人主義だと思つていたけれど、もしかしたらこの家にもあるのだ。

派閥が。

（それはそうよね……）

しかしそれは巧妙に隠されていて、数日間戻ってきただけのあたしにはわからない。お祖父様にも聞かなかつた。聞いたところで自分で情報を集めると言うだろうけど。

「因みに……他には誰かいました？噂だけでも上がった人」

恐る恐る聞いたなら、不機嫌になって睨まれた。

「知らないわよ。なによ、あんた。幸祐は関係があつた女に殺されたと思つているわけ？」

「いいえ。そんなことは……。ただ、男性があまり出てこないの。稔叔父様以外には」

「貧相な収集能力ね」

鼻を鳴らして杏里は馬鹿にした。

「では、あなたは誰が犯人だと思う？」

「だからあんたか瑞穂でしょ！」

「矛盾していませんか？」

ニヤリとあたしは笑った。そう、揺さぶりをかけたのだ。この流れに。

口数の多い人は、結局本心を隠しきれない。

杏里はなにかを知っている。犯人とまでは言えないかもしれないけれど、あたしたちが欲しい情報を持っているとみえた。それが端々に出てくるのだ。

案の定、杏里は言葉を詰まらせた。

「あたしか瑞穂が本当に犯人だと思っっているなら、あなたも女性絡みだと思っっていないとおかしいわ。誰かいるのね。別の人が」

「……知らないわ！なにを勝手に突っ走ってるのよ！」

輪をかけて不機嫌になった。まるで動揺しているふうに見える。

「不愉快だわ。出て行って」

いくら宥めようとしても、腕組みをしてそっぽを向いたままだ。

これ以上聞いても仕方ないと思って、あたしたちはお礼だけ言って立ち去った。

「おまえ、端々で地が出たぞ」

嫌味なくらいなっがいで廊下を歩きながら、久保田さんが先に口を開いた。どうでもいい内容を。

とりあえず今は、そんなこと気に留めておけない。

「ねえ、どう思った？杏里の話」

「おまえの睨んだとおり、なにか隠している気はしたな。しかしもし杏里の話がすべて真実なら瑞穂が言うことがズレているのも頷ける。筋は通っていたな」

「空想癖に虚言癖か……。本当かしら？」

「まあ納得できると言えばできてしまうが」

「久保田さん、顔で判断してない？」

「ぶっとばすぞ、おまえ」

足早に歩きながらも感じたまま言ったら、すごく心外そうに返された。

だってさー……。

「じゃあおまえは？」

「わからないわ。ただ………」

ただ、杏里は嘘をついている感じではなかった。

それならば瑞穂が嘘？

なんだかそれも信じられない。だって……。

「ただ？」

途中で詰まったあたしに久保田さんが促した。

「ただあの涙は本当だと思ったの。瑞穂が真実なのか、それが空想癖による思い込みのものか……それは分からないけど」

嘘だと、思いたくないだけなのかもしれない。

本音を語ってくれたと、思いたいのかもしれない。

なんとも言えない悶々とした感情をあたしは抱いていた。

* * *

二人の彼女の話があったのは昨日のことだ。それからこちらでも少し慌ただしくなった。

ようやくやるべきことがはっきりしてきたのだ。久保田さんは張り切って、瑞穂に突っ込んだ話を聞きに行く、と言ってまたここにはいない。

本当は自分から動きたいけれど、久保田さんは来るなど相変わらぬの主張をする。

一理あるとは思えるのだ。動く範囲が広がるほどあたしは危険に晒されるのだ。だから我慢していた。

それでも、出来ることはある。あたしはずっとパソコンをいじっていた。本格的に。

「玲華様、アールグレイです」

亜衣ちゃんがあたしのリクエストした紅茶を持ってきてくれた。

「ありがとう」

「休憩を挟まれてはいかがですか？何時間もディスプレイを見つめられて、目に悪いです」

千石さんも気遣ってくれる。

そうね、とあたしは答えた。

扉の前には二人の護衛。また、同じ状態が続いてる。あたしの周囲では。

だけど、それを認識するたびに不安になる。いつまで続くのかと。それは破綻する前程の想いだ。

この状態は続かない。

なぜかそのような考えがこびりついて離れない。

内部犯がいるのは確かだ。このまま出てこない訳がない。それなのに、未だ現れない。

一応目はつけてるけれど、信じたくない想いは常にあつた。このまま最後まで何事もなく終わって欲しいと。

（最後？）

それはいつなんだろう。

期限なんて関係ない。財産がはつきりあたしに決まったとしたら、警戒は恐らく続けなければならぬだろう。様々な手を使ってでもあの人たちは諦めない。奥の手を探し出すのだから。

久保田さんの聴取は停滞していた。

昨夜と今日の午前中に行ったときには、瑞穂は話せないと泣き崩れるばかりで、杏里はもういい加減にしてよと怒り出したらしい。

その頑なさにあたしは予感していた。誰かがかんこうれい箝口令を出したのだと。

そういうところからも感じる内部犯の可能性。情報が漏れている。だから一層焦る。

やるべきことを早く終わらせないといけない。

まずは幸祐を殺害した犯人なのだ。

こんな状態を利用して最も醜悪な過ちを犯した人を野放しにすることは許されないから。

「お嬢」

あたしがぼーと休憩していたら、久保田さんが帰ってきていた。

「どうだった？」

「これまでと変わらない」

「そう……」

「だからまた加藤に聴いてきた」

「あなた、好きねえ加藤さん」

意外だ。余程ウマが合ったんだろうか。

でも加藤さんも黙秘続けてるのよね、確か。久保田さんの片思いだわ。

「そういう返しは違うだろ？」

「わかったから、早く、報告」

複雑そうにぼやく久保田さんをあたしは催促した。

逸る気持ちがあることは否定できない。

「あ……」

だけど久保田さんはまた微妙な返しをする。

そうか。

キッチンの方とはいえ、今は亜衣ちゃんと麻衣ちゃんがいるからだ。

これまでは千石さんを含めた三人のときにしか、この手の会話をしていない。

いまはちょうど夕食の準備をしているから、人払いするのは不自然だし迷惑だろう。

でも。

「大丈夫よ。言って」

あの二人ももう大丈夫だと判断した。どうせ忙しそうで、聞いてないし。

盗聴器の有無は常に確認している。いまは間違いなく聴かれてる

心配はない。

「加藤を必死に説得した結果、とんでもないことを話してくれた」
あたしは出されたばかりの紅茶を持って、机から応接スペースに移った。その前に久保田さんもドカッと座る。

「最近、幸祐は金に困っていたそうだ」

「……ウソでしょ……?」

よりによってこの人間が?あり得ない。

「あくまで自分が自由に使えるお金だ。どうやら金遣いが荒かったのか、何かの戒めかは知らないが、毅氏から口座から引き出せないようにされていたようだ」

「ああ」

それなら納得できる。

俺をいつまでも認めないから俺にだって出来るってところを見せたいだけだ。

前にそう言っていたのは、こういうことも関係しているのかもしれない。

「それでひどく揉めていたらしい、あの親子は」

「どうしてそれを加藤さんが知っているのかしら」

「そこは言わなかった。……が、恐らくやはり毅氏に影で仕えていたのかもしれない」

「なら、久保田さんが前に言ったことが引っ掛かるわ。どうして加藤さんが野放しになっているか」

「そうなんだよな……」

久保田さんも同じ思いだったようで、眉をしかめて唸った。

「たいした情報じゃないということかしら。それとも別の人にそう言えと命じられたのか……」

小出しに情報を発するやり方に釈然としないものを感じた。

「さーな……。ただ嘘ついてるふうじゃなかった。オレの拷問に才手たのかもな」

「拷問したの?」

「いや。拷問並みのしつこさを出したただけだ。なにせ奴には逃げ場がないからな」

ウケケ、と久保田さんは笑った。

しまった。ちよつと加藤さんに同情しそうになったわ。

「じゃあ、信じるしかないわね」

信じるわ。久保田さんの人のみる目を。

「あとな、こつからが重要だが。それで金が必要な彼は女に貢がせてたらしい」

「女？瑞穂かしら」

「たぶんな。それと瑞穂嬢だけとは限らないだろう」

「そうね」

内にも外にも協力する女性はいたかもしれない。

お金が目当てで幸祐に近づいた女性がいたとしても、中には瑞穂みたいに尽くすタイプもいただろうし。もしくは、恩を売っておけば後々大きくなって返ってくるって複線を敷いた人だっていないとも限らない……。

「それでかなり豪遊していたようだな。酒の臭いをきつくさせて、朝方帰ってくるのがしばしばあったようだ。ハイテンションでな」「げっ」

「それでさらに毅氏は怒るっていう流れだ。止めてくれるやつっていなかったのかね」

「稔叔父様はどこで関わっていたのかしら」

「あいつはどちらかと言うと甘やかしていたみたいだな。金の援助は稔氏からもあったと考えていいだろう」

「はあー。なにやってんのかしら」
すこし哀れだわ。

でもだから、稔叔父様はあんな表情をしていたのかしら。

まるで 後悔しているみたいなの……。

「あつ。そうだったわ」

ふとひとつの考えに至って、あたしはパソコンの位置まで戻った。

久保田さんもついてくる。

「お得意のハッキングで、なにかわかったか？」

「だから！嫌な言い方しないでっ！」

ひと睨みして指を動かす。

すでに保存済みの情報の中から、ひとつ選んで表示させた。

そして。

「これよ」

映し出された。幸祐名義の口座。

「おかしいと思ってたの。ここ半年でかなりの額のお金が動いてる。でもそれなら筋が通るわね」

「ネットバンクか。毅氏が押さえた口座以外にも独自で作ってたんだな」

「そのようね。開設は半年前だったわ」

その流れの不審さは先ほど見つけた。

出入りを繰り返して徐々に減っていく残高。

「誰だ？このヤマダ。同じ奴に定期的にお金を入れてるな」

それも一回につき何百万という単位だ。

「ヤマダさんね、ありがちな名前よね……」

「偽名くさいな」

「まあキレイなお金じゃなさそうだしね」

「これプリントアウトしてくれるか？」

険しい顔で覗き込みながら久保田さんは言った。

「どうするの？」

「これを元に話を聞き出す」

「余計に警戒されそうね」

そう言いながらもあたしは動いた。まずはプリンターを接続しないといけない。

「私がやります」

よく気の利く千石さんが、すかさず部屋に取りに行ってくれた。

あたしの寝室じゃない、その隣の部屋に。

そこは書斎として使っている。パソコンが新しくなってからは、そちらに機器を置くようにしていた。

これで、新たなことがわかればいいんだけど、揚げ足とられて告発なんてされたら元も子もない。

「これがあれば稔叔父様もなにか話してくれるかしら」

あと一步の押しで、打ち明けてくれそうな気配がしていたように思う。あれ以来、また会わなくなって話してはいないけれど。

「駄目だ」

「なにがよ」

「やばいわ。」

なんだかまた押し問答になりそうな空気。

「オレが訊いたところで間違いないく稔氏は言わないだろう。で、たぶんおまえが行ったら教えるだろうな。だから駄目だ」

もしかして。

あまりに瑞穂たちに相手にされてないもんだから拗ねてるのかしら。それであたしが活躍したら沽券に関わるとか思ってるのかも…

…。

男の面子^{めんつ}ってやつで。とりあえず、仕方なくだけど一旦は引くことにした。

「じゃあ頼りにしてるわよ、久保田さん」

「うっせ」

皮肉に聞こえたようで、もっと拗ねられた。難しい人だ。

その間にも着々と千石さんはセッティングしていく。手際がいい。

「できました」

「ありがと」

あたしは再びチェアに座り、証拠になりそうなところをピックアップして印刷した。

「でも、ま。最後の手段にしとこうぜ。それは」

ウィーンとプリンタ音がしてから、久保田さんがつまらなさそうに言った。

ちよつと、意外だった。

あれだけ目くじら立てていたのに。

もしかしたら、先が見え出しているのかもしれない。それはあきらかにならないで、このまま終わる予感を、感じているのかもしれない。

(確かに流れは良くないけれど)

それでも前に進んでいる。着実に向かっているのに。

「じゃあ行ってくる」

プリンターから排出された紙を掴むと、すぐさま久保田さんは出て行こうとした。

休みなく動く。それなのに付き纏う焦燥感。

あまり無理しないでと、あたしは言えない。ここまで巻き込んでおいて、そんな中途半端なことは言えなかった。

「待つて。せめて瑞穂たちのところへは一緒に行かせて」

「おまえな……」

「稔叔父様は諦めるわ。でも彼女たちの雰囲気でも知りたいの。一度だけでいいから」

あたしは真剣に懇願した。

絶対に引きたくなかった。危険だとわかっていても、進みたいから。

「……一回だけだぞ」

悩みまくったうえに、超絶に不機嫌そうだったけれど、とりあえず久保田さんは頷いてくれた。

ほっとしながら、千石さんに待っていてと指示した。

第三章・・・ 2

久保田さんと一緒に、南東の塔に入った。

稔叔父様の部屋に行ってから、なぜかこの界限にも来ることを拒まれなくなっているんだ、と久保田さんは言った。しかし最上階の毅叔父様たちがいる部屋にだけは、まださすがに通してくれないんだとか。

あたしたちは瑞穂のいる三階で廊下に出た。

確かにずっとガードマンがあたしたちの行く先を見守っている。

「無言ではいるが、最上階まで登ると制止をかけてくるんだぜ」

こっそり教えてくれる。きつと体験済みなんだろう。

「どれだけ陰湿なんだここは。きらびやかな外装と反比例してやがる」

ウンザリ感たっぷりで久保田さんは皮肉った。

同感といえてしまうところが悲しい。あたしだってここに住んでいたのに、そのあたしの目の前でも言うつてところが久保田さんらしいけれど。

あたしたちは瑞穂の部屋の前までいくと、久保田さんが扉をノックした。

しばらくして暗い表情の彼女が出てきた。瑞穂一人に与えられた部屋だ。清志郎伯父様とはいまは別々にいる。

「またアナタですか。言ったはずです。もうわたしに話すことはないと……」

聞こえ辛いボソボソとした声で拒絶する。

「いえそれがですね。今度は別のことを伺おうと思ひまして。オマケもついてきてるんですが」

誰がオマケよ！と思うまえに、妙に愛想のよい久保田さんに唾然とした。こういう対応も出来るんだ。

(それはそうよね……)

依頼主全員にあの偉そうな態度じゃ、誰も寄り付かなくなる。

一応コミュニケーションはとれるわけだ。

まあ瑞穂みたいな人には冗談とか通じないから注意が必要なのだらう。

「なんのこと？……あ、玲華」

実は死角に隠れていたあたしは、ひよっこり扉越しに顔を出した。やほーと手を振る横で、さっさと久保田さんは進行する。

「幸祐くんがお金に困っていたと伺いまして」

「！」

はつきりと、瑞穂嬢の顔が驚愕の色を滲ませた。それをあたしは見逃さない。

やはりか、と思った。少なくとも彼女はその事実を知っている。

「どうぞお入りください」

またぼそぼそと彼女は呟いた。こもっていて変化がわかり辛い。ただあの咄嗟の表情が答えだ。

あたしたちは初めて室内に入らせてもらった。

意外とシンプルだった。けど節々にピンク色のカーテンだったリテーブルクロスだったりが目立つ。女性特有の部屋。中には誰もいない。使用人がいなかった。

「あなたにはいいんですね。付き人みたいな人」

「わたしは、独りが好きだから……」

久保田さんの率直な疑問に、一言だけで説明した。

実は使用人の数は権威の象徴だけではない。あくまで使用者の都合がついてまわる。

「どうしたの？玲華までわざわざ来て」

彼女は俯いたまま震えていた。今にも泣き出しそうだ。

あたしたちはここにくる間、ちよつとした打合せをしていた。久保田さんが主に進め、あたしはついてくるだけだと。

「うん。あたしも瑞穂に会いたかったから」

だからなるべく軽く答える。

「まずはこれを見ていただけますか？」

久保田さんは先ほどプリントアウトした、A4の用紙をテーブルの上に置いた。

また、彼女は目を瞞った。それが何か瞬時に気づいたようだった。「彼はかなりの回数で、このヤマダさんにお金を渡していたようですね。貴女は何かご存知ですか？」

彼女は逡巡させるように視線を動かすだけで、すぐには答えない。「わ、わたしからは……」

彼女は躊躇っていた。これはやはり口止めをされているんだろうと感じた。

「心配無用です。もちろんあなたから聞いたことは言いませんので」久保田さんはじつと彼女の次の言葉を待った。急かしたり促したりしない。

やがて瑞穂は顔を上げた。

「わかりました……。お話しします」

あたしは彼女の決断に一瞬胸が高鳴る。ひとつ、先に進める。

「確かに幸ちゃんも毅然に怒られて、お金を取り上げられていました。でももちろんバイトなんて出来ないって言ったので、少しわたしもお金を貸してました」

隣で久保田さんが僅かに嫌な顔をした。

しろよ、バイトくらいとか思っただいそうさ。あたしからしたら、幸祐が地道に働く姿は想像できない。

「失礼ですが、おいくらぐらいですか？」

「一千万円くらいです。お父様に習い事したいとか嘘ついて……」

額を聞いて久保田さんが不自然に黙った。

あたしにはどこで引掛かったのかわからない。

「では、この日にこの口座に振り込まれるのがあなたから？」開設して一番最初に振り込まれる額が一千万円だったのだ。

彼女は無言で頷いた。ハンカチを手にし、時折鼻をすすっている。

幸祐の話だけで泣けてしまうのだろうか。

「そのあとの、この三百万円もわたしです」

「そうですか。彼はギャンブルとかに興味があったんでしょうか？
この減り方は普通ではないと思うんですが」

「ギャンブルは一時期遊んでいたみたいだけど、飽きっぽいから、
のめり込むまではいかなくて……。実は、そのお金は……………」

また、ここで一旦黙る。ものすごく言いにくそうに顔を歪めた。

「大丈夫ですよ。誰にも言いません」

瑞穂はなにか言いたそうな顔をあたしに向けた。それに安心感を
与えるようにあたしも微笑む。

何に使われたのかは、はっきりさせないといけない。

「……………はい。……………あの、薬物です」

元々小さな声がさらに聞き取りにくくなる。だけどその一言で
充分だった。

「まさか、それを知って口座を凍結させたのか……………彼の父親は」

「そう、だと思えます。毅様にばれたと言っていましたから……………」

彼女は顔面蒼白にして言った。

「止めようとして……………したんです。いけないことだつてわかるから。
でも彼は飽きっぽいから、こんなのいつでもやめられるって……………」

「やめれてなかったじゃないですか。実際に借金までして！」

つい、という感じで久保田さんは感情をぶつけた。あたしは突然
変異したその態度に驚く。

瑞穂もビクリと震えた。それからハンカチで目元を押さえながら、
そうですね、と呟いた。

亡くなってしまった人にいくら嘆いても、責めても、すべてはな
ににもならない。無だ。

すべての報いがこれからくるつてときに幸祐は死ねた。

稔叔父様はあたしにそう語った。

それがこのことに該当するなら、稔叔父様も知っていたことにな
る。

「稔さんも幸祐くんにお金を渡していましたね？」

「はい。稔様は薄々感じていたんじゃないかと思えます」

「ということは、とくに幸祐くんから言ったわけではないということですか？」

「はい。幸ちゃんわたしにだけに話してくれたと思うので……」

あたしは杏里の言葉を思い出していた。この目の前の女性には妄想癖があると。

「実は杏里さんにお話を伺ったときに、彼女があなたの部屋に行つたのは、別れ話をするためだとおっしゃいました。どちらが本当ですか？」

久保田さんもあたしと同じ想いのようだ。追求したいところが先ほどから被る。

「ここもはつきりさせないといけないところだった。妄想ですべて虚言であつた場合、この証言も怪しくなる。」

「杏里が、そんなことを？」

また瑞穂は震えた。今度は小刻みだった。

それから考え込むように黙りこくる。

あたしはひとつとして、仕種や表情を見落とさないようにただ見つめた。

「杏里はわたしを嵌めようとしているのよ」

「なぜ？」

「わたしが邪魔だから。自分から疑惑の目を逸らすためよ！恐ろしい女なのよっ」

とうとう声を上げて泣き出してしまった。

(うーん……)

これが演技ならアカデミー賞をとれそうな勢いだ。ただ、もしも妄想で思い込んでいる場合、彼女にとってはそれが真実となる。

結果、わからないという結論に至った。

「実際にはどういう会話をしたの？」

あたしは我慢の限界がきて口を挟んだ。

「会話なんて……。早口で怒鳴り込んできたから、殆ど聞こえなかったけど。……。確か、そう。こんな関係のまま終わりになんてさせないって言ってたわ。幸ちゃんが決断しないなら殺してあたしも死ぬって」

人は嘘をつくとき、無意識に右上を見る。そして過去のことを思い出そうとするときには、左上を見ると聞いたことがある。疑似科学で根拠は明確ではないらしいのだが。

瑞穂はまさにこのとき、一瞬ではあったが左上に眼球を動かした。
(本当かもしれないわ……)

瑞穂は嘘は言っていない。

しかし。

「もしかして彼女にも借金してたのかしら？だから返して貰えないと終われないっていう意味だったのかも……」

それなら一見相違をみせた二人の証言も辻褃が合ってくる。杏里自身、お金が返ってこないピンチな状況だったのかもしれない。

「可能性はあるな」

久保田さんも頷いた。

「まさか……。幸ちゃんがわたしに嘘を？」

「そうと決まったわけじゃないわ。事情を話さずに、お金だけ借りたのかもしれないでしょ？」

なんとか言い繕ったけれど、瑞穂だけに薬物のことを打ち明けたとは思えなかった。杏里の性格ならうやむやなままで貸したりしなさそうだし。

なにより幸祐は関わりのある人が多いし、ストイックに黙っているタイプじゃない。

(あくまであたしのイメージだけだね)

昔から自慢話が多かった。そんな人は変わらないだろう。

「ところで、なぜずっと黙秘をされていたのに、いまは教えていただけたんでしょうか？」

まだ愛想よくしている久保田さんが話を戻した。

っていつか、この人笑っているけれどピリピリしたものが、ヒシヒシと伝わってくる。

(うわっ気にしていたのか……)

宣言通り、あたしがきてから瑞穂の態度が変わったから。

それが瑞穂にも感知されたのか、またも言いよどんだ。

「あの……それは……」

「誰かに口止めされたのでしょうか？」

「いえ、あの」

「それは誰です？」

「……怖かったから」

「はい？」

「あなたが恐かったんです！」

どんだん前のめりになる久保田さんに対して、じりじり避けるように体を反っていた瑞穂がとうとう叫んだ。叫ぶと言っても、それが普通の人ぐらいの音量ではあったのだが。

答えを聞いて久保田さんが固まった。

(はああああ)

それが理由か。ちよつと大袈裟に考えすぎていたみたいだ。

確かに久保田さんって高圧的などころあるし。

あたしが慰める意味を込めて肩をポンと叩いたら、思い切り睨まれた。

だからそれがいけないんだっていうのに……。

* * *

その後、とくになんの収穫もないまま瑞穂の部屋を出た。

「オレのどこか怖いんだよ……。あんなに愛想よくしてたのに」

まだ久保田さんにダメージは残されているようだ。

普段ならともかく、気遣いをしまくった相手に、そんな思われ方をしたら落ち込む気持ちもわからなくもない。

「まあまあ、瑞穂は知らない男性と二人きりで話すというだけで怖いよ。久保田さんが悪いんじゃないわ」

もつとすっかり瑞穂の性格を考慮しておくべきだった。しかしこれでなんの策略も絡んでいなかったことがわかったのだから、良しとしたい。

いくらあたしが宥めても、久保田さんの気持ちは晴れないらしい。納得いかない顔をしていた。

だから歩く間そつとしておいた。そのまま杏里の部屋を訪れる。

久保田さんはこのルートは三度目だと言った。

過去二回、会う前に使用人にシャットアウトされて終わっているらしい。

杏里は瑞穂のような性質は持ち合わせていない。だから別の理由があるはずだ。

また久保田さんがノックする。

すると三十代くらいの男性が出てきた。久保田さんの顔を見て、無表情なものが迷惑そうに歪んだ。

「またあなたですか？」

「ええ。またです」

無駄に、どちらかといえば自棄になつてくるくらいの笑みを久保田さんは作っていた。

「何度来られてもお嬢様はお会いになりません」

淀みなくスラスラ話す。厭味なほど。

「今度は別のことが聞きたいんですけど。これです」

シャットアウトされる前に、とても思っているのか、急ぎ目に同じ用紙を掲げた。

隠すことなくウンザリして、使用人はお待ちくださいと言って中に入る。数十秒待たされて、再び顔を出した。

「やはりお会いできません。お帰りください」

「はあっ？ちよっ！」

言うや否や扉は閉められた。遠慮なく。思いつきり抵抗感なしで。

「久保田さん……」

あたしも少し呆然としてしまう。

(まずいわ)

見られるだけ見られて拒絶とは。一番心配していた事態になってしまった。

これではますます警戒されてしまう恐れがある。

ノックを繰り返す久保田さんの横で、あたしも声を上げた。

せめて話だけでも聞いてもらわないと。

「少しでもいいの！お願いします！話を聞いて」

すると、三度使用人みたひが出てきた。

期待した顔を向けたけれど、そのまま後ろ手に扉を閉めてあたしたちの前に立ちはだかる。

「これ以上騒ぐと人を呼びますよ」

そう言われてしまったては、引くしかなかった。いまは目立つ行動がなにより危険だから。いつどこで誰に聞かれているのかわからない。

久保田さんも同じ考えだったようだ。軽く頷いて離れた。

「あれは相当なものね」

「おまえがいても駄目だったか……」

久保田さんは深い息を吐き出した。

確かにこれでは立つ瀬がない。

「これは怪しいわね。誰かに口止めされているか、もしくは杏里自身に疚しいことがあるか」

「なににせよ、強行的に行けないのは辛いな」

渋い表情のまままだスタスタ歩き階段を降りていく。この客室の多い界隈からあたしの部屋に行くのなら、このまま廊下を歩くか、階段を登らなければならない。

方向が違う。

「どこ行くの？」

「加藤のところだ。いい機会だからおまえの意見も聞きたい」

あたしは思わず片手で口元を覆った。

(珍しいわ……)

そんなことを久保田さんが言うなんて。

本当に、どういった気持ちの変化だろうか。あたしの身の安全を通り越し、よもや意見まで受け付けてくれるとは。

「ようやくわかった？あたしの力量」

ちよつと嬉しくなつて、開きかけた久保田さんとの距離分、跳ぶように走つて行く。

「うるせえ」

ばやきの続きのように久保田さんは呟く。それでもからかうような、媚を売るようなものは一切感じない。

「まあ、でも。おまえがすげえ精神力で切り抜けていて偉いってことはわかった」

「どうしたの？悠汰の熱が移つたの？」

「あ、もう一生褒めてやらん」

前端的に意外だという反応を示すと、久保田さんはどうとう怒つてしまった。

(だってさー……)

充分意外だったのだ。高評価をくれることが滅多にないから。

この人も偏見の目で見ない人だ。悠汰のようにわかりやすすくないし、呼び方がお嬢とかだからすぐには気づかなかつた。

あたしたちは一階まで降り、ホールの横を突っ切り地下室の方まできた。

それでもずっと廊下を歩いていると、暗くごちゃごちゃした模様の壁に覆われていく。

知らずに通れば見逃してしまいそうな細い曲がり角。

すべての部屋から遠ざかつたそこを曲がると、地下への細い階段が見えてくる。壁と同じ模様。

僅かに螺旋を描いて降りていく。

そこは先ほどのホールと反比例するぐらい光が届いてなかつた。

わざと暗い照明にしてあるのだろう。数あるうちのひとつの部屋に彼はいた。鉄格子の向かい側で目を閉じて瞑想をしているみたいだった。

「また来たのか」

「おまえの挨拶はそれしかないのか」

あたしたちの足音で気配を感じ、久保田さんを見るなり加藤さんは呆れた表情を浮かべた。そして隣にいたあたしの姿を見て一瞬止まる。

「驚いた……。まさか貴女がこのようなところまで来られるとは……」

「あたしも驚いたわ。ずいぶん久保田さんと打ち解けていたのね」
護衛として近くにいたときには、こんなに表情の変化を目にすることはなかった。前田さんたちのように自分というものを、奥に潜めていたんだと思う。

千石さんの場合は元からあんな性格っぽいけど。

「いえ、この者が毎日のように来るもので。私は逃げ場もないので仕方なく……」

「おまえな、そういう言い方ないだろう」

「本当のことだ。言っておくがもう話すことは何もないぞ」
なるほど。久保田さんに聞いていた通りの人だ。

こんなところに閉じ込められているというのに、まったく心が弱まってない。少しぐらい鬱積するものがあるかもしれないと思うのだが、久保田さんは鉄格子の前に座り込んだ。あたしもその隣に、スカートが地につかないようにしゃがむ。

ここは暖房がきていない。薄い部屋着ほどのワンピースだけでは寒かった。

「いいからこれ見てくれ」

前例通り、久保田さんは幸祐の口座を見せる。しかし加藤さんの反応に変化はない。

「これは？」

「幸祐の隠し口座だ。ここ半年で動きが凄まじいだよ」

「幸祐様が……」

そして眉をしかめる。

これは知らないとみて間違いないだろうと直感で思った。

「信じられないって顔だな。何に引つ掛かっている？」

久保田さんが真面目に尋ねると、加藤さんも真面目に答えた。

「幸祐様が毅様の陰に隠れてこんなに大胆になれるものか……」

「正直者だな、おまえ。まあ、そこは同感だ。だからオレは稔氏が力を貸したんじゃないかと思ってる」

「あり得る話ではあるが……」

喋りながら久保田さんは周囲を見渡した。それにあわせて加藤さんも黙る。

警戒してるような素振りだった。おそらくそれは、以前のように稔叔父様に突然登場されることがあつては大変だからだろう。

あのあと久保田さんはあたしに教えてくれたことがあつた。

確認したところ、この付近にも盗聴器があつたんだそうだ。タイミングよく現れた稔叔父様は聴いていたと思われる。設置した本人かどうかは置いとくとしても。

そして他にも無いかと思い、発見器を持って館内をうろろろしていたら、廊下にある監視カメラ並みに等間隔に見つかったと言っていた。

なんと、久保田さんはすべてを取り外したそうだ。聴かれて都合悪いところだけ外せば良かったのに、というと、誰が取り除いたのが明確になるだろうかと、偉そうに言っていた。

「ところで加藤。面白い話を聞いたんだが……」

「なんだ？いちいちもったいぶるな」

「幸祐はクスリに手を出していた、という噂を聞いた。知っているか？」

「……………」

じっと射るように久保田さんを見てから、ゆっくり息を吐き出し

た。何かを知っている仕種だと判断した。

「知っているんだな？」

「とうとう、そこにたどり着いたか……」

「経緯いきわだちを話してもらえるか」

「悪いが俺は詳しくは知らない。ただこの相続の話が出る少し前に、幸祐様がひどく震えておられたことがある。そのお姿をみてもしやと、勘ぐっていたただけだ」

「禁断症状か……」

「ああ。昔知り合いが同じような過ちを犯してな。そのときの症状に酷似していた」

最後の方は入金が少なくなっていた。女性から貢がせたお金は、クスリのため以外にもあったようだ。金銭感覚なんてないに等しい。それでももう、借りる当てがなくなっていたのかもしれない。

「どうして毅叔父様は、気づいていて止めなかったのかしら？」

あたしはそこが知りたくて、加藤さんに聞いてみた。

口座を凍結させるようなやり方ではなくて、もっと本質的に。

「……毅様は、止めたくても止められなかったのかもしれない」

加藤さんも深刻に考え込むように呟いた。それに久保田さんが反応する。

「なぜそう思う？」

「不器用なお方なのだ」

どこか控え目に、加藤さんは一言だけで答えた。

不器用かどうかはともかく、人として冷めているのは確かだろう。今回の件では怒っていることが多いが、普段の姿は淡泊だ。主観的な感情によって、己が左右されるような人じゃない。

「それはあなたが感じたイメージ？それとも、感情移入した果ての言葉？」

「……見ていて、感じたことです」

加藤さんは気まずそうに目を伏せた。

関わりがなければ不器用な人なんて出てこない。一步先に入って

ようやく毅叔父様のことが理解できるというものだ。

あたしが尋ねた後者部分が該当するなら、やはり加藤さんは毅叔父様に付いていたと判断できたのだ。

直感で思っただけなら、人を見る目があるということと終わられたのだけれど……。

この態度と回答には、どちらとして受け取るべきか迷われた。

(もしかしたら)

あたしたちに、少しずつではあるが協力的になろうとしてくれているのかもしれない。しかし最終的なところをあかさないのは、この人が忠実に主人に尽くす人だからだ。ただ、人伝で聞いただけの判断ではないと思われた。

久保田さんが手こずった意味がよくわかった。

* * *

あたしたちは加藤さんと別れて、一階上の一室に来ていた。

そう殺害現場だ。

こちらは下と違ってトイレだけでなくシャワーも付いている。それ以外は死角がないようだった一部屋だ。十一畳くらいあり、ベッド以外にもソファなどあり、暖房器具、照明、どれをとっても普通に暮らす分には不便なところはない。ただ出られないということと、プライバシーが護られないということだけだ。

(それが一番嫌だわ)

しかしだからこそ、誰でもここに来れば殺害できたということになる。

幸祐は背中を鉄格子に預けて死んでいた。後ろから絞められたと思うのが妥当だろう。少なくとも幸祐が柵越しにでも近づいていく人物。警戒している相手なら不可能だったということだ。

鍵はひとつきりで、あたしたちが持っている。死体が発見された後は開いたままだ。

「なにか怪しいものとか、手がかりになるようなもの落ちてなかったの？」

久保田さんに尋ねながらも、あたしは中に入り目を皿にして床を見渡した。

あればとつくに久保田さんが見つ付けてるだろうとは思っただが、自分でも見なければ気がすまない。

といつてもあれから何日も経っているのだから、なにかあっても証拠隠滅の時間はたつぷりあった。

「ない。発見直後から遺体回収までは、毅氏と椿原氏が中心となつてこの場を仕切っていたからな。それまでに調べられたら良かったんだが」

そう。あたしたちはあまり近づかせてもらえなかった。この鍵を中立である椿原さんに預け、開けたらすぐに返してもらった。ただ、それだけだった。

第一発見者は給仕役の使用人だ。朝食を持ってきたときに悲鳴を上げていて、その声に皆が駆けつけたのだ。あたしたちが来るころには、十人以上がすでにいた。

不審な流れはまつたくない。

この数日で知れた事実がそのときになれば、あたしは瑞穂や杏里、そして葉子といった女性人の表情をまず注視したと思う。

(思い出せないわ……)

大人たちの迷惑そうな顔しか、出てこない。

「なあ、加藤だが……どう思った？」

まだ中を観察していたあたしに、柵にもたれかかったままの久保田さんが尋ねた。

これは、本気で意見を聞きたいようだ。

「なにをあたしに期待してるの？」

うすうす気づいていた。久保田さんがなにを言わせたいのか。

「いや……あいつ、危険な奴だと思っつか？」

「言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ」

あたしが鋭く言い放つと、久保田さんはため息をついた。

「おまえ言っただろう。ここへ入れる条件は再犯の可能性のある者と、財産を狙う者。後者は加藤は該当しない。本来そこに狙いを置いていないわけだからな」

「解放してほしいっていうこと？」

「さつき、ここから出してやるうかつて言ってみたんだ。いま自由の身になったら再びおまえのことを裏切るのかと……」

余程、味方に引き込みたいと思っているようだ。もしくは助けたのか。

「それで加藤さんはなんて？」

「いきなりどうした？と目を丸くされた。それから、また裏切ったらどうする気だと、妙な気を起こすのはやめておけと言われた。オレは不思議でならない。ただ忠実に動く、単なる護衛には見えないんだ。しっかり自分を持つているから。それなのにこうまで納まってしまうのはなぜだと思う？」

久保田さんはソファまで移動して勝手に座った。

あまりここがどういところか気にしていないようだ。あたしからしてみればただの牢屋で殺害現場だ。長居する気も起きなければ、その家具を使用するなんて考えられない。

「ここから出たくないのかと聞いたが、ここにいるのが似合いだと返された。自分は自由になどなつてはいけなと言っているように感じた。どこか翳った表情をみせるあいつに、話をきいてやりたいと思っただ」

そういう衝動が湧いてくるのは、ただのおせっかいか、それとも職業病なのか……。

あたしはまだ話してなかった事実を告げた。

「彼らはここがスポンサーとして出資しているスポーツ団体から、引き抜いてこられたのよ。でも怪我かなにかで、その競技では使えないものにならなくなった者たちだと、前田さんが言っていたわ。その中で身体能力がもともと高かった者をお祖父様を選び、護衛として

育てたんだって。だから元々は仕えるタイプじゃない人がいてもおかしくはないわ」

「そうか……」

加藤さんが危険な人だとは、あたしも思えない。だが再犯しないかどうかは別問題だ。同じ人物に命令されてしまえばそれまでだろうから。

「久保田さんの判断に任せるわ」

あたしよりもずいぶん仲良くなったみたいだし。洞察力は信じられる。

「その言葉、忘れんなよ」

「やっぱり偉そう……」

ここだけは治らないわね。でもこういう態度に出られて、ホッとなっている自分がいた。

いつも通りの久保田さんだから。

彼は立ち上がり、あたしたちはこの場から出て行くことにした。階段を上がるときに、ふと久保田さんがあたしに近づきこっそり耳元で囁いた。

「誰かつけてきている」

「えっ……」

「振り返るな」

まさに後方を確認しようとしたあたしは、その言葉でなんとか耐えた。

このタイミングでつけられるなんて。

(盗聴器は全部、取り除いたんじゃないの?)

監視カメラを見てということだろうか。それならば中立と銘打っていた監視システムチームも怪しくなる。

中立だからこそ、久保田さんがこれまで何回行っても、殺害時のカメラを見せてはくれなかった。もちろん交渉には行ったのだけれど「映っていませんでした」とだけ言われたそうだ。本当かどうかはともかく。

「いいか。階段を上がりきつて角を曲がったら走るぞ」
緊迫した声のまま、そう指導する。目だけであたしは了承した。
そしてその通り角を曲がり二人揃って走り出す。長い廊下に出た
ときに、隣で久保田さんが後ろを向いた。

後から聞いたのだけれど、黒いフードを被った男が見えたそうだ。
顔までは見えなくて、久保田さんに見られたその男は追うのをやめ
たと言っていた。

「おまえを怖がらせるのが目的だったのかもしれないな」
それぐらい危険なものは感じなかったそうだ。

ただ不気味ではある。常に見張られている感じがする。あたしが
動けば気づく者がいるのだ。

あたしたちは部屋に戻った後、念入りに隠しカメラや盗聴器がな
いか調べたけれど、今回は見つからなかった。

第三章・・・3

次の日、久保田さんは杏里を見張ると言いだした。

事件前のことはよく知らないが、事件後のことは杏里の方が情報を握っている。そんな気がしてならないのは、久保田さんだけではなくあたしもだった。だから止めようとは思わなかった。

しかし杏里の部屋の隣が空室になっている。そこで張ると聞いたときにはさすがに口を出した。

「ばれたら大変よ。あくまでもあなたはあたしが雇った使用人つてことになっているわ。使用人がひとりで客室にいるなんて、理由も聞かれずに咎められても仕方ないの。そういう暗黙のルールがこの家にはあるのよ」

「わかってるつもりだ」

あたしの注意をうるさそうに顔をしかめながらも、大人しく頷いてから出て行った。

また稔叔父様から内線が入ったのは、その午後だった。

こういうタイミングでこれると訝しがらずにはおれない。

「今日は人質はいないんだけどさ、こちらに来て話をしてくれると嬉しいな」

「それでノコノコ出ていく人がいると思っているのかしら。稔叔父様？」

「けっこうきてくれるよ、みんな」

「ずいぶん友好的な人間付き合いをなさっているのね」

「まさか。女性だけだよ」

……ああそうですか、としか言えない。

あたしはついたため息を吐いた。

ここに久保田さんの足取りはわかっている。

だから今日は、確かに稔叔父様に捕まっているということはないんだけど。

「でしたら稔叔父様がおいでくださいませんか？わたくしあまり出歩けませんの」

これ以上ないくらい愛想を振りまいてみた。我ながら良い案だと思う。話をしたいとは思っていたのだ。久保田さんに止められ続けられてさえいなければ。

初めから呼べばよかったのだが、どうせ来てくれないと考えていたところだった。

あちらが話したいならば誘う理由ができる。

『いいよ。ただし邪魔者は遠ざけておいてくれるかな？』

「できかねます！」

もう！どうしてそういう言葉がスラスラ出てくるのかしら。ある意味才能ね。

二人きりでは会えないと遠まわしに言っているのを、わかったうえで発言だ。

『ふうん。でもいいや。じゃあ今夜行くから待っててね』

「なぜ……夜……」

『夜の方がいいだろう？きみも』

意味深なことを言い残して叔父様は通話を切った。

まったく。自分本位な男が多いわね。少しぐらい返事を待ったらどうなの。

「玲華様。まさか……」

千石さんはちゃっかり聞いていたようだ。

「夜に来るってさ。千石さんいてね」

「私が居てよろしいのですか？」

律儀に確認してくる。いいわ、とあたしは答えた。

稔叔父様が何を話すつもりかはわからないけれど、間違いなく重要なことだと思う。あたし以外の人がいたら話さない可能性もある。だけど一応断らなかつたわけだし、一人で対応するのは物騒極まりない。ならば少人数で対応しようと思った。

久保田さんには遠慮してもらおう。敵対的な態度をとって終了な

んてことになつたら嫌だし。何も言わない千石さんが適任だと思つた。

「久保田さんは喧嘩しちゃうから、千石さんだけにいてもらうわ」
あたしがそう言つと、千石さんが、初めて 笑つた。

僅かだつたけれど、確かに優しい笑みだつた。

それから久保田さんが帰つてきて、黙っているのはやつぱり躊躇われたので、正直に打ち開けた。ぶーぶー文句を言っていたけど、とりあえずは引いてくれたみたいだ。変わりに千石さんに何か言っていたようだけど、あたしは聞いていない。コソコソ話していたから。

宣言どおり、夜に稔叔父様は来たけれど、すでに時計の針はてっぺんを超えていた。

しまつたわ。

もつとちゃんと時間を打ち合わせしておけば良かった。

いくらなんでも遅すぎる。その前に何度催促の内線を掛けても出ないし。

「もう寝てしまつところでしたわ」

あたしはぎりぎりのところで皮肉を言った。遅いんじゃ、ポケと翻訳無しで言えないところが苦しいところだ。

「本当に？夜はこれからだよ」

夜だというのにイタリアンスーツに身を包み、さらにそれを着崩した姿で彼はやってきた。

おバカなのかしら？……と思つてしまふ……。

稔叔父様にとっては我が家だろうに。

「それでお話とはなんでしよう？」

手振りでソファを勧めながら促す。

だけど稔叔父様は座らなかつた。それどころか部屋中を見渡して、うろろろしだした。

「叔父様？」

「しっ」

唇だけしって形にして人差し指を立てた。
そういう仕様ひとつひとつが気障に見える。

何をするつもりかと思守っていたら、扉の近くまで戻り絨毯を大きく剥がした。

まさか……と、ここで気づく。

あたしは無意識に千石さんを見たけど、彼はじつと叔父様を凝視して目には合わなかった。

「あつた」

叔父様は軽く笑んでそれを見せてくれた。

薄型の盗聴器。

いままで見たことのない形。最新型なんだろう。

「また、ですか……」

嫌になる。今日も定期的に発見器で確認したのに。

「でもどうして？ 全て取り除いたはず……」

すんなり見つけた稔叔父様。発見器も使ってないし、なにより盗聴器の存在をなせ……。

「そうなんだ。なら良かった、遠慮なく話せるね。これはね、おれが仕掛けたものだから。市販の発見器じゃ見つからないだろうね。

周波数が違うから」

「なんですって？」

様々なケースを思い描いていたけれど、あっさり叔父様は白状した。

お陰で一瞬思考が止まった。

「おれの特注品だから他の人にはバレてないと思うよ」

だから心配しないで、と稔叔父様は続けた。充分ヤラレタ感が満載だというのに！

「どういうこと？ 一体いつそんなところに？」

「幸祐に取り付けさせたんだ。だから実はずっと聴いていたよ、きみたちの会話」

「悪趣味ね！ 他のもあなたが誰かに取り付けさせていたの！？」

許せない思いが浮上した。どれほど気味が悪かったか、ネチネチ言ってるやりたい。

「違うよ。他のおれじゃない。だから気を付けたほうがいい。こは覗き趣味の巣窟だ。こういうのはどこに潜り込んでいるかわからないからね。普段の常識は捨てたほうがいいよ」

「その第一人者がよく言うわね！みんなやってるから自分に罪はないって？」

「そうじゃない。冷静になって、玲華。どうしておれがわざわざ白状したのか」

確かに……。そこも気になってはいた。

自首することで罪を軽くしよう、なんてことは考えていないはずだ。第一この人に罪の意識は感じられない。

「きみたちの会話は聴いていたと言ったよね。だから止めに来たんだ。きみの探偵は全然検討違いなことをしている」

「なんのこと？」

動悸が早くなるのを感じた。とんでもないことを耳にする予感。

そしてそれはきつと当たる。

「幸祐を殺したのはおれだ。彼女たちのどちらでもなければ、ましてや葉子ちゃんでもない」

「！」

千石さんが一気に警戒心を高めたのがわかった。

そして、いつでもあたしたちの間に入れるように僅かに近寄った。あたしは目の端で確認しながらも、稔叔父様からは逸らさない。

「うそよ」

「どうしてそう思うのかな？本人が言ってるんだから間違いないでしょ」

呆れたような、仕方ないなって笑い方をする。

そんな顔、できるの？本当に自分の舎弟みたいに思っていた人を殺した人が。

「だったらなぜいま言うの？久保田さんにわざわざ怪しい女性がい

ると示唆したのは他でもないあなたよ！誰かを庇ってんならさつさとそれも白状しなさいよ！」

怒るとあたしは早口になる。滑舌も良くなるから不思議だ。

本当に腹が立っていた。こんなこと簡単に言っただけで欲しくない。

(だって……この人は)

あたしに切ない顔を見せた。あれが嘘だとは思えなかった。思いたくなかっただけなのかもしれないけれど。

「あの時は、逆に彼女たちに疑惑の目を向けさせようとしたんだ。まだおれも逃れようと思っただけだからね。でもずっとときみたちの話を聞いていたら、なんだかやる瀬なくなっただけ。それでもういいかって」

「そんなんじゃ説明つかないわ！だって……あなたの行動は……」
どこか一致しない。あたしの部屋にも、食事のときにも現れなくなっただけ。いきなり起こした行動が殺人？しかも現場にも姿を見せなくて。

「言ったはずだよ。おれは女は殺せなくても男は殺せる。そういう意味だよ」

「だって……動機なんてないでしょう？」

「それも言ったよね。幸祐には一番幸せなタイミングだって。殺してあげたんだ、おれは」

「薬物で狂う前に？」

「そうだよ」

やはり稔叔父様は知っていた。幸祐が生きていた頃から、彼がドラッグに手を出していたことを。

でもそれだけだ。稔叔父様は嘘をついている。嘘と本当が入り乱れている。

だけどそれは直感でしかなかった。根拠のないもの。

「そんな……それじゃあ署名は出来なくなるわ。それでもそんなことと言えるの？」

「もうね、そんなことはどうでもいいんだ。どうでも良くなったん

だよ」

「稔叔父様……」

笑みの状態から動かない表情。

「ほんとう真実のことなのだろうか。それとも心変わりさせた別の何かがあるのか。」

「それに忘れてない？この盗聴器は幸祐がこの部屋に侵入したときからあった。これが何を意味するかわるよね？」

「そうだ。久保田さんに今回の目的を話したとき。」

「あれは、幸祐が来た後だ。」

「あたしは思わず口元を両手で覆った。」

「聴かれていたんだ、あれも。決して知られてはいけない、そのありのままの事実を。」

「ひどい。酷いわ」

「よりによつてこの人に。お祖父様の婚内子である稔叔父様に。」

「どちらが酷いかな？きみのしていることが、どれだけおれたちにとって非道か、考えたことある？」

「当たり前だわ」

「何度も迷ったわ。なにがなんでも断るつもりでいたわ、最初は。」

「それでもあたしは決めただ。一度決めたことだから、やり遂げなければいけないだと思っう。」

「はっとあたしはある考えが結びついた。」

「もしかして加藤さんもあなたが動かしていたの？」

「幸祐にそういうことを頼んでいる時点で、加藤さんの存在が自然と出てくる。」

「ああ。彼ね。そうだよ。あれもおれだ。残念だったね兄じゃなくて」

「あなた、何が目的だったの？」

「幸祐にチャンスを与えてやりたくてね。兄の……父親からの縛りが解ければ、幸祐は自由になれる。彼の禁断症状を止めるには覚醒剤が必要だった。いきなり絶つとすぐく暴れるんだ。あれでは周囲

に教えているようなものだから、徐々に回数を減らしてやめさせようとしたんだよ。体裁のために、絶対に隠し通さなければいけないかった。だけどそれは間違ったやり方だったみたいだね。おれにまで隠れて使用するようになったんだ」

淡々と叔父様は説明する。そう、ただの説明だった。そこに感情の色がない。

幸祐の症状は予想以上に進んでいたようだ。そういえば、あたしが幸祐の足を殴ったとき、彼は痛みがりもせずすんなり立っていた。骨折をさせようとまで思って、力を込めたのに。

ならばこの話は本当のことなんだろう。

「しかもその頃、おれが幸祐に金を渡していたのを兄が気づいてしまった。それでおれにまで妨害をしようとしてきたんだ。だから幸祐が玲華を負かせることができたなら兄も認めるだろうって、おれが言ったんだ。早く手を切りたくなっただよ。そう、失敗してもこれを期に幸祐を切れる。成功していたらそれを利用しておれが財産を手にする。どちらにしても損はない」

「なんてことを……」

「そう、こういう人間だよおれは。信じたら駄目だと言ったでしょ」「違うわ！よくそこまでベラベラと淀みなく嘘が言えるわねって呆れていたのよ！」

辻褄は合う。それなのにこの違和感はなに？

彼の表情が動かないから？どこかでまだ、彼を信じたいのだろうか、あたしは。

「おれが呆れるよ、逆にどう言ったら本当だと信じてくれるのかな？」

本当に呆れ返ったようで、稔叔父様はため息を吐いた。

悪かったわね、頑固で！

「やっぱりおかしいわよ。切りたいと思ってそんな遠回りなやり方をしておいて、それでどうしてわざわざ後から殺すのよ。損はないんでしょ？」

「切りたいと思ったから、殺した。それでは駄目なの？もういい加減うんざりしてたんだ。あまりにも幸祐は子どもすぎる。フォロ―するのにも限界はあるよ。あの牢屋に入れられてまで、クスリを持ってきてなんておれに頼むからさ。咄嗟に殺気がうまれたのかもしれないね」

かもって何よ？

馬鹿にしてるのかしら、あたしを。

「それで、どうしたいの？叔父様は。あたしに牢屋にぶち込んでもらいたいの？」

あたしだつていい加減うんざりだった。上滑りするような感覚に陥るこの会話は。

どうしても結論が出ない。納得できないのは多分そこだ。この人の目的が見えない。

「きみはやっぱり放っておけないね」

ずっと叔父様は目を細めた。ここへきて初めて笑みを取り去った。あたしを責めているんだって思ったのに、その言葉は釣り合わない。その言葉と表情も一致してないような、そんな感じがした。

「きみによく似ている人がいたんだ。すごく強くて頑張り屋さんでそして明るかった」

“いた”っていうところに引っかかった。

過去形。

「だけどあるとき頑張りすぎてね、壊れちゃったんだ。人が壊れるってこんな感じが、ってどこか冷静におれは見てたよ。それから彼女もクスリに手を出すようになった。それからあまり会わなくなっただけだね。なぜかきみを見てると思い出すよ」

「好きな人だったの？」

「たぶんね」

「いまも、好きなの？」

あまりに切ない顔をするから、つい訊いてしまっていた。ただどこれには首を横に振ってはつきり言い切った。

「そんな純粹さはないよ。彼女が壊れたのはおれの所為せいだったのに、そのことさえも忘れていたぐらいだからね。幸祐の症状を見て思い出したんだ」

あたしの倍生きている彼には、きっとその分の重みがある。

ひどい、なんて軽くは言えない。あまりに無関係だから。でも。

「でもあたしはその人じゃない。壊れたりしないわ、あたしは」

あたしは以前、悠汰のことを壊させないと誓った。それと同時に悠汰がいれば壊れない。心の底からそう言える。

「彼女も、そんなことを言っていたよ」

「それなら叔父様、やっぱりあなたは……」

あなたは幸祐を殺してない。人を傷つける痛みを知っているあなたに人は殺せない。

その言葉が続けるつもりだった。

だけど、そこで突然激しくて重い音がした。遠くて小さかったけれどしっかりと聞こえた。

そこにいる皆の顔色が変わった。

「ごめん。話はまた後で」

まず一番最初に稔叔父様が動いた。素早くここから出て行く。音のした方へ向かうんだと思った。

「ちよつと……」

待って、という言葉が途切れた。千石さんがそれより早く動いたからだ。

振り向きざまに言われる。

「見てきます。玲華様はここで待っていてください」

「嫌よ、冗談じゃないわ！あたしも行く！」

考えるまでもなかった。

だってあの音は……。

爆発。

どこかが爆破された音だ。なぜあたしの部屋じゃないのかが、わからない。ここ以外に狙う場所がこの家の中にあるとは思えなかつ

た。

でもだからこそ、次はここなんじゃないかと思えて恐慌した。行きたい理由はここが怖かったからじゃない。様子を少しでも知りたい気持ちからだ。

「わかりました。離れないでください」

千石さんは頷いて部屋から飛び出した。あたしもそれについていく。

言われなくても離れられないわ。

走りながら、久保田さんのことが気になった。あの音は恐らく使用人が寝泊りする界隈がある方向からはなかっただろうか？

彼を狙ってのことじゃなければいい、と祈った。

* * *

千石さんについてあたしは本気で走った。

思いのほか千石さんが速かったからだ。あたしに気を遣って遅めにしてきているんだと思う。それでもあたしにとっては本気だ。待つて、なんてあたしの性格上死んでも言えないし、かといってこれ以上速くされたら追いつけなくなるので、ただ黙って走っていた。

エレベーターを利用しなかったのは、すでに人が並んでいたから。非難するのかしら、と思いながらその横を通り過ぎた。

そして一階まで出ると、どこに行けばいいのか迷わなくて済んだ。他の部屋からもほとんどの人が起きていて、わらわらと廊下から移動していたからだ。これに着いていけばいい。

やはり皆も何事か不安に駆られているのだろう。逃げるように慌てて……。

「なんだ？いまの音は」

「使用人の塔の方らしいぞ」

「全く迷惑ねえ。こんな時間に」

「そう言いつつ楽しそうじゃないか」

「あら、それを言うならあなたもでしょ」

「そうだな。こんなこと前代未聞だ。いったいどんなバカがやらかしたのか見に行かずしてどうする」

「後々の語り草になるかも知れんな」

「まっただ」

いや、野次馬と化していた。

長生きするわ、あんたたち……。開いた口が塞がらないとはこのことか。

とりあえずあたしたちは、野次馬を追い越しながら、なるべく前の方に出るように走った。

出遅れるのは避けたい。

そうしたら、廊下の前方に白い煙が立ち込めているのが見え出した。使用人が何人中ににいるようで大声が聞こえる。

「そつちはどうだ？」

「被害有りません」

「こちらのようです。とにかく煙が凄くて見えませんが、壁が破壊されてます」

何事かすぐには把握できないが、やはり爆発音だったようだ。

手分けして勇敢な護衛や使用人たちが、確認しているということだけがわかった。

煙を避けるように野次馬たちは止まる。遠目から見守っていた。テロか？とかそれにしては規模が小さいだとか、ざわめきの中から会話が途切れ途切れに聞こえた。

前の方に久保田さんらしき背中を見つけた。いつものスーツだ。見間違えじゃない。

「久保田さん！」

後ろからかきわけるように近づくと、久保田さんが振り返った。

「またなんで来てるんだよ、おまえは。千石！わざわざ危険なところにつれて来るな！」

ああ、間違はなく久保田さんだわ。

かなり怒って千石さんを睨みつけていた。

「後事は託します。私も皆を手伝ってきますので」

しかし硬い表情のまま、有無を言わさず千石さんは更に中に行く。めったに見ない顔だった。

久保田さんが怪訝そうな顔であたしに近づく。あたしは千石さんの背中を見送りながら言った。

「あの人は本来お祖父様に仕えている人なの。お祖父様のこの家を壊されたくないんだわ」

「だからつてな……」

久保田さんが言葉を続けようとしたときだった。

再度爆発音がした。

今度は先ほどよりは小さいようだけど、近くにいたためか、かなり耳に衝撃が残る。それから照明が落ちた。

「きゃあ！」

野次馬から悲鳴が上がった。

それをきっかけに様々な場所から叫び声が聞こえ出した。

これだけの密度で、ここにいる皆がパニックに陥ったら恐ろしいことになることを、あたしは知識として知っていた。

「非常灯が点きます！大丈夫です。落ち着いてください！」

どこからか冷静な声がした。

（千石さん？）

彼の声に聞こえた。こんなときでも冷静そうではっとする。

それでも周りは騒然となる。

「外だ！外に誰がいるぞ！」

「追え！」

そんな中で、わらわらと黒服たちが破壊された壁から出て行ったようだ。声が遠ざかることでそう判断した。

それを確認すると、久保田さんはあたしの肩に右腕をまわして押した。

「ここから離れるぞ」

「ええ」

これ以上ここにいる必要はない。

振り返るとすでに、後方だけで五十人くらいの人が集まっている。だけど同じように周囲も動いていた。野次馬が危機感をようやく持ったのだ。

爆弾よりある意味質が悪い。

非常灯がついてもまだ仄暗い。そんな中で、次々にぶつかられる肩に腕に。そして後ろの方でも同じ状況のようでも悲鳴がまた上がる。まずい。人が邪魔だわ。

そう思ったときだった。久保田さんが少し離れた。逆流に乗って向かい側から強引に歩いてきた男がいた。その人にぶつかられたようだ。

その間にあたしにも後方からきた誰かにぶつかられて、更に久保田さんと離れた。

人の波にさらわれる。

「お嬢！走れ！部屋に戻っている！」

後方から久保田さんの声が聞こえる。

確かに彼が辿り着くのを待つより、先に進む方が安全だと判断した。

部屋に戻れば前田さんと山元さんがいるし、爆弾犯は外に逃げたようだから、三弾目はないはずだから。

この騒ぎに乗じて刺されたりでもしたら元も子もない。

部屋に戻る。

久保田さんのことは心配だけれど、その言葉だけがあたしを動かした。

こういうことがあるかもしれない、という想定はあった。久保田さんとも話した。でもあたし目当てのものではないにしろ、実際に目の当たりにすると怖くなってしまふ。

誰が何の為に謀ったのかわからない。外からの攻撃かもしれない

し、そう見せかけた内部犯かもしれない。

得体の知れないということが、この世の中一番怖いかもしれない
と思った。

様々な人に負の感情をぶつけられても、幸祐に襲われそうになっ
ても、魂胆が明確だからまだ良かったのだ。不安が介在してない。

「……っ！」

太ったおば様があたしを押し強引に割り込んできた。衝撃が来
て悲鳴を上げそうになったのを耐える。

なるべく存在感を消したかった。あたしに気づかないほどの恐慌
状態ならまだいい。

ここであたしが一人きりだと誰かに認識させたら、どんな強硬手
段に出られるかわからない。

（もう！誰よ！こんなこと仕出かしたバカは！）

迷惑極まりない。

入り組んだ廊下が終われば玄関先のホールに出る。そこまで行け
れば走れるはずだ。

エレベーターはまたいつぱいだろう。だから階段で上りきる。そ
う思って近道を選んだ。

そして角を曲がったときだった。

誰かに腕を引かれた。目の前の光景がぶれてあたしの身体は左側
に体重が傾いた。

まさか強行犯？

思わず体が硬くなる。

それとは逆に柔らかい衝撃であたしの動きが止まった。

「危ないよ、玲華」

左上から声が落ちてきた。見上げると稔叔父様だった。ここで稔
叔父様があたしを引き込んだんだと気づく。

先に来たはずなのに、どうしてここにいるんだろう。

質問する隙もなく、そのまま奥へ進んでいく。この先は行き止ま
りに厨房の出入り口しかない。

それなのにあたしの腕を掴んだまま、構わず歩く。厨房には入らずにその隣の壁に触れた。

すると、視界が変わる。見たことのない石畳の廊下が目の前に広がっていた。

回転扉。

模様で巧妙に隠されていて、隙間などが見えなくされていたのだ。

「なによ、ここは？」

誰もいない。稔叔父様とあたしだけ。

そして一人が通るのにやっとという細い道。静謐せいひつな空間。

「隠し通路だよ。探偵が言っていたよね、それを聞いておれも探してみたんだ。びっくりしたよ。三十年以上ここに住んでいて、まったく知らなかった」

そうだった。久保田さんはあたしに話してくれた。見つけた隠し通路と天井裏の存在を。

盗聴器で稔叔父様は聴いていたんだ。

「叔父様も知らないって、それじゃあ……」

「うん、密かに父が作らせたんだろっね。この家はあの人が当主になっってから建てられたものだから」

どこか寂しそうに叔父様は言った。

親に秘密を持たれて寂しい気持ちは、あたしにもわかってる。

知ってる。いまのあたしなら。

「部屋に、戻らなくちゃ……」

稔叔父様のことは恐くない。得体は知れないけれど、なぜだか怖くなかった。

それでもあそこに戻っていないと久保田さんが心配する。

「近道がある。こっちだ。案内するよ」

すつと離れて先に叔父様が進んだ。

躊躇う理由がなくて、あたしもついていく。

会話はなかった。先ほどまで部屋で言い合っていたのが嘘みたい

それでもひとつだけ確認したくて口を開いた。

「稔叔父様は、あたしがこのまま突き進むのは迷惑だと思っの？」
全てを知った上で突然語ったあの話。真実かどうかはさておき、
あたしを止めるためだったのは確かだと思っ。じゃないと、話す意
味がないから。

でもどうしてほしいのか、肝心なところが不明だ。

「悔しさはあるよ。でももういい。好きなようにすればいいさ」

「嘘つき……」

そんな短時間で変化する気持ちなら初めから言いに来ない。そう
思っ。

「きみに愚痴りたかっただけかもしれないな」

だったらどうして助けてくれたの？

知っているでしょう。あたしが署名できないって。

稔叔父様の背中を見ながら、あたしは疑問に思っっていた。

そのとき、ここにも電気が通っっていたんだって知っった。明かりが
点いたのだ。

石の隙間から電球が見える。そんなところから拘りこたわが感じられた。

「電気戻ったね。もう大丈夫だ」

そう言いながらも前だけを向っていた。一度も振り返らない。

いまはきつと、何を訊いてもはぐらかされるか嘘をつかれる。な
らば何を言っても無駄だ。あたしは部屋に戻ることをだけを考えた。

くねくねと直角に何度か曲がった後、階段が見えた。

「ここを登っつて真正面の扉を開けばいい。きみの部屋に最も近い廊
下に繋がっつてるよ」

そう言っつて、叔父様はそのまま真っ直ぐに進もうとする。

「ありがとうございます」

助けてくれた事実に変わりはないから、あたしは頭を下げた。

それでも稔叔父様は振り返らず、片手だけ振った。気障な振る舞
いだけど、嫌な感じはもうない。

あたしは気持ちを切り替えて、石の階段を駆け上がる。

ヒールのあるパンプスで何度も転びそうになったけど、止まらなかつた。

止まらない。

気持ちが悪く行く。

稔叔父様の言うとおりに、登りきったら扉が五十メートルくらい先に見えた。

走り寄り、まずは外の音を確認した。

出るところを見られるのはまずい。

だけど聞こえないのか人がいないのかは識別できなかった。

そつと、ゆっくり開けてみる。

誰も、いなかった。

(誰もいない?)

おかしい。

あたしの部屋が先に見えるのに、その扉の前にも誰もいないのだ。前田さんと山元さんがいるはずなのに。

待機命令をする暇がなかった。だから二人も騒ぎが気になって後から離れたのだろうか?

この部屋を無人にするわけにはいかないって、知っているのに? 少しでも嫌な予感がした。自分の部屋の前で躊躇する。

(この先に、なにかあったら……)

動悸が止まらない。

でも意を決して金のハンドルを握り締めた。死角になるように身を隠しながら扉を開く。

とりあえず、開くと爆発する仕掛けにはなっていないかったようだ。そのままゆっくり中を見た。

電気は点けたままだったから、復活していても元通りに明るい。

だからすぐに変化に気づいた。

「え?」

侵入者が視界に入った。

あたしはすぐに中に入り、扉を閉める。

中にいたその人は、応接スペースのソファの端にこちらに背を向けて、ひじ掛けに凭れ掛かるように座っていた。

「ゆ……た……」

その人物があたしの声に、振り返る。

悠汰、だった。

第三章・・・4

これは夢なのだろうか。

こんな場所に悠汰がいる。

あたしはとうとう、幻を見始めているのかもしれない。

瞬きをすると消える幻。

だからかもしれない。閉じられなかった。大きく眼を見開いたままだった。

悠汰は立ち上がって、ずっとこちらを見ている。彼の方もしばらく動かず、何も発しなかった。

どれだけその状態が続いたのかわからない。瞬く間だったのかも

先に悠汰が動いた。俯いてから、部屋を見渡す。

「すぐえ部屋にいるんだな、おまえ。しかも家の中広すぎ」

低い声だった。喜んでいいのか呆れているのか、それとも怒っているのか読めない。

だけどそれで幻じゃないことを確信した。

「なに……やってんのよ、あんた」

ようやくひとつの可能性にぶち当たった。

さっきの爆発。

あれは悠汰が潜り込むために？

「なんてことしてくれたのよ！」

どれだけ無茶なことをすれば気が済むのよ。どれだけ怖かったと思っのよ。

いろいろ言いたいことが多すぎて、どこから言えばいいのかわからない。

本当は、会えた喜びを最初に口にしたかったのに。まず悠汰に会ったら、笑顔を向けたいって思っていたのに。

それが出来ないほどの、不測の事態。

「第一声がそれかよ」

「こちらも見ずに吐き捨てる。」

怒っているんだ、と気づいた。悠汰はあたしに対して怒ってる。

「あたしだってこんなこと言いたくないけど。でも困るのよ、こんなやり方」

「うるせえよ。こうでもしねえと入れないだろ」

それが答えだった。

やはりあの爆発は悠汰が仕掛けたことだったんだ。でも彼が一人でそんなことが出来るはずがないことは知っている。

「比路と来たの？なにか言われたの？比路に」

「違う。自分で決めたことだ」

少し遠くて、悠汰の真意がわからない。

あたしはもつと中に踏み込んで、悠汰に近づいた。

「扉の前に護衛がいたはずだけど、誰かいなかった？」

「知らない」

じゃあ本当に前田さんたちは離れていたんだ。帰ってきたとき、

安全を確認するためにこの中に入るかもしれない。

「とりあえず悠汰、ここはまずいわ」

どこに行けば安全かしら。

空室の客間は選べるほどたくさんある。だけど廊下に出れば監視カメラだってあって……。

そうか、だから停電させたんだ。

悠汰がここまで来る間だけでも、暗闇になればって。本当になんて軽率な。

「また、追い出すのかよ」

その言葉に、はっと胸をつかれた。

悠汰に酷いことをしたことを、忘れてなんていない。けれど、それどころではなかったというのが本音で。

でもやられた本人は決して見過ごすことはない。いつだって、加害者よりも被害者の方が克明に憶えているんだ。

「悠汰……あたしは、あなたに来て欲しくなかったの」
「なんでだよ」

真つ直ぐに見つめる瞳。

あたしは受け止められなくて僅かに逸らした。

「待っててって、言ったわよね。必ず戻るって約束したわよね？悠汰」

「……って、俺のせいだよ」

「違……」

「確かに！」

違つと最後まで悠汰は言わせてくれなかった。言い訳みたいに続く言葉を瞬時に遮られた。

「悪かったと、思ってる。信じることもできねえで、こんなところまで押しかけて。みつともないって解ってはいるんだ。それでも知りたい。玲華本人から、事情を聞いて納得したかった。それで何か力になればって……」

亀裂が……。

修復可能だと思っていた亀裂が、確かに在る。

信じることができないと、彼は言った。

(やっぱり)

あの噂なのか、比路が話した何かなのか、どこで彼が引つ掛かっているのかわからないけれど。不信感を与えている。

そのことを考慮しても、彼に真実を語ることはできない。

「力になれることはないわ。できれば関わらないでいて欲しい。それだけよ」

「玲華……」

悠汰は驚いたように目を瞠った。

「比路から少しでも事情を聞いているのよね。どこまで真実を比路が語っているのかは知らないけれど、ここが危険だってことは聞いたんでしょ？こんな……侵入なんてして、必ずあんたは罰を受ける。その前にできれば逃がしたいと、あたしはいま考えてるわ」

嘘が嫌いな悠汰。

事実を言わずに嘘もつかずに彼を納得させることは難しいと思っ
た。

それでもあたしだけは悠汰に嘘をつきたくない。

違う……。あたしが、悠汰にだけは嘘をつきたくないんだ。

「それが答えかよ」

「そうよ」

「比路はおまえが狂ってしまったと言った。見えない力を振りかざ
して人を裁いてるって……。そこだけは信じられなかった。でも…

…」

悠汰は言葉の途中で黙ってしまった。

そしてあたしは見た。彼が握り拳を震わせているのを。

怒りを抑えている。

こんな状態になる前から、稀にそういう素振りをしていた。

無意識かどうかはわからないけれど、怒鳴るのを抑えたり、感情
を押し殺したりするのにあたしは気づいていた。

その度に、やめて欲しいと思った。

(じぶんをころさないで)

そんなのらしくない。

そうすることで大人になれると思ってるんなら、それは果てしな
く勘違いだ。

「なによ？言いたいことあるんなら最後まで言いなさいよ！せつか
くあたしが目の前にいるのよ。全部言いなさいよ！」

「うるせえ、怒鳴んな」

悠汰は一言で切り捨てた。

(どうしたの?)

数十日会わなかった間に起こった変化。あたしの知らない時間が
ある。

「なにも話す気がないんなら、もういい。ここにおいても無駄だ」

「待ってよ！好きに動かせないわ！お願いだからあたしの言う通り

にして」

あたしの前を通り過ぎ、そのまま本当に帰ってしまいそうな悠汰を、なんとか引き止めたくて手を伸ばした。

悠汰の腕を掴もうとした。

「さわんな！」

一言、悠汰が怒鳴る。

ビクリとしてあたしの手は止まった。拒絶が伝わって、これ以上伸ばせない。

初めてだった。悠汰に拒まれたのは。

「触るな。いまの俺は何するか分からない」

また、感情を呑み込んだ。

こちらも見ずに、押し殺した。

「何ができるの？いまのあんたに。冷静さを失って、すぐ人の言うことに流されて」

悔しかった。あたしの知らない間に変わってしまった悠汰が。

それも全部あたしのせいだとしたら、こんな哀しいことはない。

「比路に操られないで」

「操ってるのはおまえだろ、玲華」

振り向いて悠汰は断言する。

「俺をコントロールするな」

「どうしたの？」

はつきりとあたしは眉をしかめる。先ほど思ったことを、ついに口に出した。

説明のつかない感情が確かにそこにあるみたいだ。なにに悠汰が拘っているのかわからない。

「俺が離ればおまえは満足なんだろ。足を引っ張る俺は、おまえの側にいる資格がないから。だから、なにも言わないんだろ」

もしかして。

（あたし間違っていた）

悠汰が怒っている理由が初めて見えた気がした。

あたしはずつと悠汰を追い返したことに怒ってるんだと思っていた。久保田さんをお願いまでして、あんなやり方をしたあたしに。だけど……。そうじゃない。

悠汰はあたしが関わらないように遠ざけたこと自体を怒っている。もつと根本的な、最初の段階。

ならば比路は関係ない。比路に会う前のあたしの行動だから。誤魔化しようのない。

「世羅が、あたしに遠慮して遠ざかっていったんだって。そう思ったとき、あたしが怒ったのを悠汰は知っているのよね」

だからなのか。

（なんだ。そうか）

あれは別の理由があったと結果わかったけれど、そういう想定をしたときに、あたしは嫌な気分になった。変な気の遣われ方だと非難した。

そんなあたしが、同じ理由で悠汰を遠ざけたから、彼は信じられなくなつたんだ。

あたしの言葉に反応して、悠汰はこちらに体を向けた。

「今でもそうというのは嫌いよ。でもここはそんなこと通用しないの。普段の常識が通用しないところなのよ。ここにいる人みんな、虎視眈々と獲物を狙う野生の狼みたいなものなの。だからお願い、悠汰はこれ以上関わらないで」

比路や京香を伝つて、ここまで接点をもつただけでも、こんな状態になつている。侵^{おか}されたくないで。純粋なまままでいて欲しい。

悠汰は大股で歩いてきた。

素早く、ハッと顔を上げたときにはすぐ近くに彼がいた。

そして左手があたしの肩に置かれ、右の拳が振り上げられる。

殴られる、と思った。全身が固まる。

だけど悠汰の拳はあたしの髪を掠め、空^{くう}を切った。

彼は下を向いた。右腕はまだ、伸ばしたままあたしの後ろにあった。

「なんにもわかってねえ！」

そして怒鳴った。

あたしの脳と身体はまだ、固まったままだ。

ただ、悠汰は嘘がつけないから。演技なんてできないから。殴られる前の恐怖は本気だったことを教えた。寸前まで、本気で殴ろうとしていた。

それが、痛かった。その思いが。

やがて右手もあたしの右肩におかれて、彼は顔を上げた。

泣きそうな、顔だった。

「危ないから問題なんだろう！俺にも護らせるよ！おまえがなんか目的もってやってるってことぐらいは、わかるんだよ。だったら手伝わせるよ。おまえのためならなんでもやってやるから……」

「悠汰……」

まだ、想っていてくれていたってことを、心臓で感じた。

比路や京香の言うことに揺れたわけではないけれど、本人からぶつけてもらった方が、より感じられる。

(だから悠汰も、ここにいるのね)

確かめ合うために。

「おまえは強くて、どんどん先にいくから、俺は追いつけなくて焦るんだよ。負けらんないって頑張ろうと思うけど……。おまえがないと意味がない」

「……そう思ってたんなら、自己管理してよ」

だったら、あたしにだって言いたいことはある。

「また、痩せて。聞いたわよ、風邪でぶっ倒れたって」

「風邪じゃねえだろ、あれは」

「同じよ！元を正せば熱でバランスを崩したんでしょ！」

これは千石さんに聞いたことだけだ。

萩原くんからの報告にもあったし、間違いないと思う。

「おまえっ……。よく言えるよな」

「だったら！ちゃんと睡眠とってた？食事は!？」

上目遣いで睨みつけると、悠汰はたじろいだ。

すぐに頷けないってことは、それが答えじゃない！

「なにやってんのよ！あたしだって心配だったんだから！行けるんなら、すぐにでも帰りたかったわよ！人間の三大欲求の、二つも疎かにするってどういうことよ！生きるつもりないんじゃないの！？」
一度叫びだすと止まらなかつた。今までの鬱憤が、自分でも気づかぬうちに溜まっていたみたいだ。

悠汰は黙って聞いていたけど、徐々に考え込むような顔をした。
なによ？言い訳あんなら聞くわよっ。

「じゃあ三つ目は？」

構えていたのに、悠汰の呟くような問いに一瞬出遅れた。

（なんていったの、いま……）

三つ目がなんたるかを思い出すのに少し時間がいった。

「そんな他の二つをばつちりしてからの話よ！凶々しいわね！」
ここでこんな返ししかできないから、あたしは可愛くないんだろ
うな。

って、ふと思った瞬間。

気づいたときには、あたしは背中に衝撃を感じていた。

視界がシャンデリアを含めた天井を映す。

悠汰が、あたしをソファに押し倒していたのだ。そのまま流れで、唇を塞がれた。

（え？）

あたしはすごく驚いた。

それは悠汰が仕出かしたことでじゃない。あまりに自然な流れだったからだ。

確か、あたしはずっと警戒していて。こんな簡単に受け入れるようには、まだ精神がついていってなかったはずだったのに。

手で顔を固定されていて逃げられない。

本気で逃げるつもりがないからかもしれない。でも、動かせなかった。

「悠汰……」

「黙って」

離れたときに、吐息と共に呼びかけたのに、一言で悠汰はバツサリ切った。

悠汰の唇があたしの首筋に伝っていく。

腕を押して退けようとしたけど、びくともしない。抜け出そうと位置を変えようとしても無理だった。

力強くて強引な腕力とは対照的にどこか淡泊に感じた。

ゆっくりというか、躊躇いがちな動き。

そのアンバランスさが気になって、あたしは悠汰の表情を見ようと首を曲げた。雰囲気を感じ取ったのか、悠汰が少し顔を上げる。

それは触るなど怒鳴った直後の顔のままだった。

確認するように、その顔を左手の指先で触れる。

「ちよつと、待って……」

「待てない」

あたしの髪を撫でながら、はっきりと意思を伝えてくる。

（また、抑えてる）

本当はもつと激しく求めてきているのを、我慢しているように感じた。

悠汰は以前、攻撃的な自分を出したくないと言った。ドメスティック^Dバイオレンスやジェンダーバイオレンスに、今後自分が陥ってしまうんじゃないかと恐れている。

だからこそ、暴力でものごとを解決することを今後も考えないように、久保田さんも殴らなかつたのだ。

いまも、あたしに対してどれだけ本気でぶつかっていいのか、迷っているみたいにみえた。

それでも欲望が止まらないくて。

（あたしはイヤじゃない）

それが伝わればいいのに。そうやって他人と距離を置いて接する生き方なんて認めないって、あたしは前に言った。それでもなかなか

か変われないみたいだ。

これが我を忘れての行動なら、あたしは意地でも抵抗する。けどどういった乱暴的なものではない。

唇がまた重なる。そしてそれは下に移った。

徐々に、考えられなくなっていく。全身の血が、逆流して沸騰しそうになる。

このまま身を任せていたくなかった。

悠汰だからだ、と思う。再確認する。

満たされていくのを感じた。これまでの受け続けた負のエネルギーが全部清算されていくみたいだった。

こういう脆いところも含めて、悠汰が好きだと思った。

(だから……誰が、来るのか……わからない……って……)

はたつと、我に返らせる現実があたしを襲う。

一気に全身が冷静になつて、あたしは悠汰の頬を平手打ちした。

「待てつつつてんのよ！このバカ！」

悠汰の力が抜けて、どこか呆然とした顔でいた。

その隙にあたしは、いつの間にか開いている胸元を焦りながら整えて、ソファの端っこに座りなおす。

逃げるまではいかない。相手は悠汰だから、そんな必要はない。

だけど悠汰は、あたしのそんな振る舞いをじっと見つめて、俯きがちに横を向いた。

「いまのは……傷ついた……」

(あああ！もう！なんて顔してくれちゃつてんのよ！そこでため息を吐くな)

デリケートすぎる。殴り殴られることに、拘りすぎなのだ。

人差し指をびしつと悠汰につきつけてあたしは言った。

「あんた話を聞きに来たの？それともやりに来たの？どっちよ！」
すると悠汰は。

しばらく考え込んで、首をかしげた。

「両方？」

(あーのーねー)

訊かないでよ、そんなこと。知らないわよ、わたしは。でもその仕種は可愛いわ。ちつくしよう。

そう思っていると悠汰も完全に身体を起こして、座りなおした。左の膝をソファの上に曲げて置き、あたしの方を見る。神妙に。

「いろんな人にバカって言われた」

それは……。あたしも言ったし、何度も思ったことだった。

確か久保田さんも言っていたわね。

「それから、いろんな人に何で玲華が俺を選んだのか解らないって言われた」

「誰よ！そいつ！」

もう、余計なことを。

確か比路も言っていた。一人は間違いなくあいつだ。

「世羅と綾小路と、京香と、確か比路も……」

言いそうな人全員じゃない。ムカつく。

……悠汰から初めて京香の名前がでて、少し複雑だった。そんな自分にもムカつくわ。

あれは天罰だと思うことにしたのに。

「俺はそれに答えられなかった。俺にも、わからなかった」

ソファの背もたれをひじ掛けの代わりに置いて、左手の人差し指の第二関節を曲げて悠汰は唇に押し当てた。どこか悔しそうに。

バカってあたしはまた思った。

「前に言ったでしょう？」

「^{あが}崇めないってやつか。でも、そんなの……。それだけじゃ」

「じゃなくて、理由なんてあってないようなものよ！」

きっぱり断言したのに、悠汰はまだ不満そうな眼を向けてくる。人を好きになる理由なんて、言葉でいくら並べてもぴったりとは合わない。自分だって、本当のところの理屈なんてわからないんだから。

仕方ないわね、と思う。なぜか悠汰は気づいていないことがある。

あたしは悠汰の腕をかくぐり、右手で彼の頬に触れた。先ほど、殴ってしまったところ。

悠汰は自然に、左手を持ち上げて退けた。

「それにね。気づいてないの？悠汰。選んだのは、あなたの方よ」

「嘘だろ」

「なんで嘘になるのよ」

そこでそんなに驚かないでほしい。

あたしは少し睨む。

「だって、おまえにはいっぱい好きだっていう奴がいるし」

「あのねえ、あのときは間違はなくあんたの方が想われていたわよ」
どうしてわざわざ、教えてあげなくちゃいけないんだろう。こんなこと、知らせなくていいのに。

悠汰は知らないんだ。

あやなちゃんとか美緒ちゃんのような、態度に現していた女性だけじゃない。

入学したての頃、あたしはすれ違いざまの廊下で女子生徒の会話を聞いた。悠汰のことが気になると打ち明けた同級生がいて、友達にマニアックですわね、と評価されていたことを。

その時はまだ、気になる程度だったけど、マニアックって単語がやけに耳に残っていたことを憶えている。

あたしもマニアックなの？って思ってしまったんだわ、あのとき……。

それから、あの学校の人からしてみれば、自由奔放に見える彼が、ちゃんと優しさを持っていることに気づく人が増えていった。

本人は認めないだろう。それは無意識のものだろうから。

それぐらいのささやかなものだけど、それでも女性はギャップに弱い。ときに周囲の人は、本人よりもちゃんと見てる。

(それに、顔もまあ整ってるし……)

だからほとんどライバルが増えていって、一時は困ったんだけど。「あたしの方が先に好きになったのよ。だからね、選んだのは悠汰」

「ふうん……」

まだ納得してないわね、この“ふうん”は。さり気なくモテてきたみたいなお余裕は何とかしてもらいたい。あたしは悔しいからこれ以上教えてあげるのはやめておいた。

代わりに、右手を上を動かす。悠汰の髪をかきわけ、食い入るように見つめた。

あたしのせいでついた傷が、まだ残っている。久保田さんから聞いていた血の量のわりには、切れた部分はそんなにひどくなかったようだ。

「おまえはよく、俺の傷に触るよな」

「そうよ。早く治ってって、念じてるのよ」

「怪しい気功師かよ」

唇の端を持ち上げて、ハッと悠汰は笑った。

久しぶりに見た笑顔に泣きそうになる。

あたしが怪我した場所に触るのは、いま言った理由もあるけれど、それよりも憶えておくためだった。

誰かにつけられた傷も、あたしのせいでついた傷も全部。憶えておきたかった。

それは悠汰のなかに、確かに残っていくものだと思えるから。

「ごめんね……」

痛い想いを、残してごめんなさい。

謝罪が口から出るのと同時に、あたしの眼から涙があふれて、頬を伝った。

傷が消えても心には残る。

年月を重ねて薄れていったとしても、しこりとして必ず心のどこかには在る。それが哀しかった。

ここへきて初めて泣いたのが悠汰のことって、あたしにとっては当たり前だった。

本当はもっと早く、謝りたくて。

やっとそれができたっていう、想いもあったんだと思う。次から

次へと水分があふれてきて、止まらない。

「ごめんなさい」

「もう痛くない」

悠汰はあたしの手をとって握った。それからあいている手で、あたしの涙を拭う。ぎこちなかったけど、嬉しかった。

それでも止められないしていると、彼の方が痛そうな顔になった。

「おまえが、わかんねえよ」

「……………」

「全部言ってくれ。思っていること全部」

「言葉がみつからないわ。いまのあたしの気持ちと、あなたの心理状態で、誤解なく伝えられる自信がないの。だから感じて」

あたしは悠汰の体を引き寄せて、抱き締めた。温かい体温が伝わってくる。

それでも悠汰は抱き返してくれることもせず、しばらくじっとしていた。

また迷っているのだろうか。

「俺は、おまえを好きでいていいの？」

好きだと、普段悠汰は言葉にしてくれない。付き合うことになった日とあわせて、これで二回目だった。

久しぶりに聞いたものが、こんな流れってひどいと思う。

その代わり、あたしが好きだと伝えたら、必ず困った顔を一瞬する。どういう反応をするべきか迷うみたいだ。

「訊かないでよ。自分で決めなさいよ、そんなこと。あたしが駄目って言ったらやめるの？」

悔しくて、腕を伸ばし、泣きながらも悠汰を睨みつけた。

「でもおあいにくさま。あたしはあなたが離れても追いかけるわよ！悠汰に嫌われたのが原因じゃなかったら、どこまででも追いかけるわ！ストーリーカードってしちゃうんだから！」

「ストーリーカード……………」

「それくらいの想いってことよ！真に受けんな！」

本気で引いた悠汰の胸ぐらをつかんだ。そのままぶんぶん力任せに振る。

「やめろよ」

弱く発しながらも、あたしの腕を引き離そうとした。

困ったような悠汰の顔に、あたしは立ち上がる勢いで唇を押し付ける。

それはある意味暴力に近く、ぶつかった感じになった。ジンジンして痛いけれど、気にはならない。

「もっと自信持ちなさいよ！あたしをこんなに取り乱させることができるのは、あんだだけなんだから。自分の意思で動いて、自分の想いで決定してくれないと、いつまでたっても自分なんて変われないのよ！」

いつもそうだ。本当に嫌なことは嫌だとはつきり言うくせに、それ以外ははずると人に引き寄せられている。良くも悪くも、影響されるから不安になるのだ。

「俺のことで泣くなよ。おまえには笑っていてほしい」

しばらく考えて、出した彼の言葉はこれだった。

(もう……)

本当に響いてるのかしら。解ってくれているのかしら。

すぐに本筋とずれたことを言うんだから。これが計算されたものじゃないから、あたしには驚きだったりするのだけど。

「だったら悠汰も笑って」

じつと顔を見つめて、様子を窺う。

彼は笑うことが少ない。それでも最近は増えてきた。けれど、腹をかかえて笑うまではどれも至っていない。

笑えない状況が、小さい頃から絶え間なく続いてきたからだとは思っ。

あたしは悠汰を笑わせたかった。無駄な心配事はなくして、肩の力を抜いた生活を一時でもいいからしてほしい。それがあたしの一番の望みだ。

「ごめんな」

だけど悠汰は謝った。

「ごめん、余計なことして。大変だったんだろ、本当は……。それなのに余計なところまで、気をまわせることしてるよな」

そして額を肩に押し付けてきた。

もしかしたらまた、自己嫌悪にでも陥ってるのかもしれない。

全然解ってない。

きっとこの部分が伝わるのには時間を要するんだろう。

あたしはすべての罪悪感を切り替えた。捨てることはできないけれど、それでも先に行くために。

少し離れ、悠汰の顔を真正面から見つめて微笑む。

「お互い謝ったから、この話はこれで終わりにしない？」

以前と同じ事を口にした。すると悠汰も微かに笑ってバカって言った。

きっと悠汰を笑わせるのには、あたしがまず笑わないといけなかったって思った。

「おまえ、切り替えんの速すぎ」

普通でしょ、って返そうとした。これまでの悠汰みたいに。だけど。

ガタンっ、バサって音がして、それから。

「おい、そのバカッブル」

不機嫌そうな久保田さんが現れた。例によって、天井裏から。

どうしてこのタイミングで天井裏なのかしら。前回否定してたけど、本当は狙ってきているんじゃないの？

「久保田さん！」

天井裏なんてものを知らない悠汰は、慌てふためいてあたしから離れて立ち上がった。

（ちえー）

付き合ってたわかったことだけど、意外と悠汰は手が早い。でもそれは二人きりになったときのみだ。根本は照れ屋のようだった。

これまでの久保田さんの足取りを確認しようと、あたしは問いた
だそうとする。だけど久保田さんの方が速かった。険しい顔で先を
続けた。

「まだイチャイチャしたい気持ちはわかるが、急いで逃げる。人が
来る」

「え？」

「いちゃいちゃって……」

あたしは一気に緊迫感が高まったけど、悠汰はどこか釈然としな
い表現だったようで、ぶつくさ呟く。

「ちよつと、どういうことよ」

「話してる暇はない。悠汰、おまえが居たらまずい。とりあえずお
嬢の部屋にでも……」

部屋中を見渡して、あたしの寝室の扉に久保田さんが目を向けた
ときだった。

いきなり扉が開かれた。また防音が仇^{あた}となった。

前田さんがまだ帰ってきてなかったのだ。こんな簡単にここが破
られるなんて……。

あたしたちが動く間もなく、一斉に黒服の人たちがこの部屋を埋
め尽くしたのは、本当に瞬く間だった。

* * *

どうしてこんなことになってるんだろう。

見たくなかった光景だつて言ってるのに、どうしていま、あたし
の瞳にそれが映ってるんだろう。

先ほど悠汰が現れたときとは対極で、あたしは目を見開いていた。
閉じたいのに、消し去ってしまいたいのに、それを許してくれな
い神経。

これこそが幻であつたらどんなに良いかわからない。
なのに……。

黒服の護衛の人たちが、二人がかりで悠汰の腕を押さえつけ、別の二人が欧州風の長い槍、ランスを彼の前にクロスさせて向けている。

久保田さんが危ないからってあたしを下がらせた。

悠汰との距離が僅かに遠くなる。それでも視線が外せない。

「侵入者だ！捕まえろ！」

そう叫びながら乗り込まれて、この状態になるのに、その時間はいくらもかからなかった。

本当にいきなりで、あたしはただ驚く。

護衛役の人は、主に清志郎伯父様の下にいる護衛だった。一緒にいたところを見かけたことがある。だからかもしれない、いまこの状態を指揮していたのは彼だった。

「こいつが爆弾犯かもしれない！気をつける」

あたしは動けなかった。

悠汰もただ驚愕していて、抵抗しない。乱暴に行動を封じられて、ボデイチェックをされていた。

ひどい、と思った。

彼はこんな扱いを受けるような人じゃない。

「やめて！」

やっと声が出て、近づこうとしたけれど、久保田さんに止められた。いま出て行くのは得策じゃないって顔をする。

そんなの関係ない。

一瞬でも一秒でも早く、彼を解放したい。悠汰は関わらせてはならない人、なのに。

「汚い手で悠汰に触らないで！」

これまで感じたことのないほどの怒り。怒ることで体が震えるのを初めて体感した。

悠汰のまわりの男たちをひとりひとり取り除いていきたい。でも、まだ久保田さんが抑えているから動けない。

腹が立った。

久保田さんには、悠汰を助けたと思っていてくれないといけないのに。久保田さんだつて、彼を殴ったとき取り乱したくせに、どうしていまは冷静なのだろう。

「どうした？玲華。この男は不法侵入者だぞ」

清志郎伯父様がしたり顔で前に出てくる。あたしと悠汰の間に立っていた。

そこでようやく気づいた。

ここにいるのは護衛の人たちだけじゃない。先ほど下でも見た野次馬が混ざっている。見世物を見るような視線で、笑みを浮かべながら集^{たか}っていた。

「よもやまさか、強引にとはいえ、現在第一後継者であらせられるご令嬢の部屋に侵入する輩^{やから}がいろいろとはな」

皮肉たつぷりな物言いで清志郎伯父様はせせら笑う。そして拳銃を懐から取り出して悠汰に向けた。リボルバー！

幸祐や稔叔父様が持っているのだ。この人が持っていてもおおしくはない。

（おかしくはないけど、許されることじゃない！）

あれを向けられると何もできなくなる。逃げ道が塞がれる。

そんな人権を無視したもの、全部なくなつてしまえばいいのに。

「やめてよ！悠汰を殺したらあたしがあんたを殺すわ！」

初めて、人に向かって殺すと言った。

嘘じゃない本心。

ここで彼が死んだら、あたしは理性なんて手放す。狂つていく。

そうなる道が見える。

落ち着け、と久保田さんが制止をかけてきた。

そんなのは無理だ、と本能が叫ぶ。久保田さんの方が落ち着きすぎているように、いまのあたしには見えた。

「化けの皮がはがれたな、玲華。そんなことより、この男とはどういう関係だ？先日発表した綾小路の嫡男がおまえの相手だろう？あれは嘘で実はこの男が想い人か。それとも両方か」

動じることなく清志郎伯父様は問いを突きつける。

ここで綾小路だと言えば、悠汰はただの外敵ということになる。ならば処分しても構わないという結論に到達しそうな勢いだっただ。

悠汰と答えれば、あたしの弱みを得れて人質として使うだろう。

相手が綾小路なら手を出せずとも、悠汰なら何の防壁もない一般市民だからだ。

(どう、答えれば……)

どちらにしても悠汰にとつては地獄を見る。

あたしのせいで、また傷が増える。

「どうした？なぜ答えない。ここでこの男を選べば解放してやってもいいぞ」

伯父様は優越感を含めて口をゆがめた笑い方をする。

そんなふうにあからさまにされなくても、嘘だとわかっていた。

初めてあたしが隙を見せたのだ。ここで手放すような人はここにはいない。

(それでも、命があるほうが……)

まだチャンスがあるのは、悠汰を選ぶ方だ。

震える手を握り締めて、あたしは覚悟を決めた。

「何を生ぬるいことを言っている」

そのとき、低い男の声がこの部屋に響いた。

扉付近にいた野次馬が一齐に両脇に避けて、彼の通り道を作った。

その先にいたのは毅叔父様だった。

一番、出てきて欲しくなかった人が、ここで現れたのだ。

「そちらの少年はこちらに引き渡してもらおう」

「なに？」

義兄弟の間で因縁の火花が散る。

この二人が仲が良いはずはなかった。嫡出子ちやくしゆしと非嫡出子だ。逃れ

られないしがらみがある。

毅叔父様は悠然とこの緊迫した空気に足を踏み入れた。

「その少年が何者かは関係ない。曲者は曲者だ。皆、聞いたな？清

志郎はいま、侵入者を擁護する発言をした。これは我が一族にはあってはならぬことだ。彼には任せられない。この不屈き者は私に任せてもらえるか？」

周囲の人に話しかけるように見渡す。拒否する者はいなかった。最も権力を握っている人だからだ。

「貴様あ！」

清志郎伯父様は切り札を取られて激昂する。

「詭弁きへんも大概にしる！これはおれの獲物だ！先におれが捕らえたのだ！貴様は引っ込んでいろ！」

「相変わらず物の見えん奴だ。四面楚歌なのは一体誰だ？よく周りを見る」

毅叔父様のその一言で、大半の護衛が毅叔父様側に立った。

主に悠汰を抑えている人たちは清志郎様伯父様側だ。しかしあとは烏合の衆だった。普段は別の主の下に付いている。ここにいる清志郎伯父様以外の血族が毅叔父様についたのなら、その護衛も毅叔父様につく。

だけどそれだけじゃなかった。

毅叔父様の後に入った人物。

（深影の！）

とうとうここで、深影慎が現れた。

毅叔父様だったんだ。彼に命令を出していたのは。

周りから、この事実にごわめきが起こる。

武力においても、知力においても、清志郎伯父様が敵うものはなかった。

どちらがマシかわからない。

いや、もっと酷い状況になったと言っても過言ではない。

「貴様。このままで勝ったと思うな」

清志郎伯父様は齒軋りして睨みつけ、そして観念して殺気だったまま出て行った。

悠汰を押さえつけていた護衛も、別の人に託して出て行く。

あまりにスムーズで隙がない。

でもそれよりも、一度も悠汰が抵抗してないのも気になった。いままでの彼なら、こういうとき暴れるのではないだろうか。

「そういうことだ、玲華。地下の鍵を渡してもらえるか？」

「いやよ。待つてお願い。彼は大事な人なの！連れて行かないで！冷静になれない。毅叔父様に駆け寄りながら、懇願することしか出来なかった。

だけど、毅叔父様のところまで、あたしは近寄ることができなかつた。外から新たに入った護衛がいて、その人があたしの前に立つ。

「前田さん……」

いなくなっていた前田さんだった。彼だけじゃない、山元さんやその他のあたしのボディガードだった人が、いつの間にかそこに勢ぞろいしていた。皆が皆、無表情だった。

「彼らはもう玲華の護衛じゃない」

そして突きつけられた現実。

「どういう意味？」

頭が混乱する。何も考えられない。

「そのままの意味だ。前田、鍵を取り上げる」

毅叔父様の命令で前田さんが動いた。

このタイミングでの裏切り。最大の痛手だ。

前田さんは真っ直ぐあたしの寝室へ向かった。

(え？)

どうして迷うことなく、そこへ行くんだろっ。

背筋が凍った。

あそこに鍵がある。それを扉の前にしかいなかった前田さんが知っているはずがないのだ。

知っているのは中にいた人。あたしと久保田さんの会話を聞いていた人だけのはず。

「待つて！そこは……」

鍵がどうというより、あたしの唯一安らげる場所に入って欲しく

なかった。こんな敵に寝返る人にはとくに、だ。

日常の、喧騒を離れた唯一の場所だから。

寢室の扉の前で、前田さんは一瞬立ち止まった。僅かに躊躇したように見えた。

「早くしろ」

毅叔父様にもそう見えたみたいで、促す言葉を厳しく言う。

「待て前田、鍵はそこにはない。オレが持っている」

いままで黙っていた久保田さんだった。

(どうして自ら言うの?)

確かにいまは久保田さんが持っている。悠汰が最初に侵入を試みたとき、久保田さんはオレが預かっておくと言った。

それは最悪の事態に陥らないためではなかっただろうか。こんなことになったときを想定して。

「久保田さん！契約不履行よ！」

「冷静になれ、お嬢。本来のオレとの契約はなにか思い出せ」

そう言っただけ久保田さんは上着の内ポケットから鍵の束を取り出して、前田さんに投げた。

前田さんは難なくそれを受け取る。

本来の契約。それはあたしを護ることだ。

(違う)

そんなこと前面に出さないで、と思った。あたしはただ探偵だから呼んだんじゃない。久保田さんの人柄を見て、この人しかいないと思っただけ。

「連れて行け」

目的が達成されると、毅叔父様は護衛に向かって命令する。

護衛役が悠汰を立たせる。すると、彼は顔を上げた。目が合った。

「玲華！」

有無を言わず強引に押されながらも、悠汰は力強い目でなんとか踏み止まるうとしている。

初めて表情が見えた。暴力行為にも負けてない目。

「玲華！俺は後悔なんてしてない！それに、おまえのせいだなんて思っていないからな！だからおまえも、こんなことで責任なんか感じるなよ！」

以前あたしが言ったこと……。

責任を一方的に感じられるのが嫌で、悠汰に言った言葉だった。

おあいこだからやめようって。

あたしはまた、泣きそうになった。

でもここで泣いちゃいけない。心配をかけるし、一番辛いのは悠汰の方だ。

（笑わなきゃ……）

安心させるように笑って。いつものように、大丈夫よって言わないと。

「黙らせる」

低く毅叔父様が言うのと、即座に悠汰は一発殴られた。押さえつけてる人じゃない、それは山元さんだった。弾かれたように悠汰は山元さんを睨みつける。

もうやめて、と思った。

あまり自らが不利になる行動をとらないで。

（あたしは勝手だわ……）

彼が気持ちを抑えるのを見るとやめてほしいと願い、無謀なことをすると心配する。ぶれすぎている。悠汰のことになると、自分を見失う。

だからこそ遠ざけたということも、本音ではあって……。

問答無用で悠汰はこの部屋から連れ出された。

「今日はもう遅いから、また明日来ることにしよう。おまえに残された道はただひとつ。印判を用意して待っていれば良いんだ」

毅叔父様が言う。冷徹で、温かみの欠片もない言葉だった。

そこにいる皆を促すように毅叔父様が出て行くと、他の人も従って解散しだした。埋め尽くしていた人が次々と出て行く。笑っている人がほとんどだった。面白いものが見れた、とあからさまにバカ

にしている。

やっぱり、最後には殺叔父様に持っていかれるのか。お祖父様のすべてを。

あたしは目の前が真っ暗になるのを感じた。力が抜けてその場に座り込んだ。汚れるとか、全然気にする余裕がなくて……。

「お嬢……」

隣に、久保田さんが視線を合わせるようにしゃがむ。

「どうして久保田さん」

「なにがだ？」

解っているくせに、あたしが言いたいことなんて。解っていて全然優しくない、大人な聞き方。

あたしは、絨毯を見つめたまま言う。

「悠汰よ。絶対助けてくれると思ったのに……」

あたしよりもまず先に、久保田さんが行動に出てくれると思っていたのに。成功するかどうかは二の次でも。

それなのに鍵まで渡して。

「あのな、言つたる？オレは、悠汰よりおまえを護るためにいるんだよ」

「嘘つき」

そんな理性的な人じゃないくせに。本当はあたしより激情型だつて知ってるんだから。

でもその契約のせいでこの人が抑えたんだとしたら、それは辛い。悠汰だつて助けてもらいたかつたはずだから。久保田さんの事情より、悠汰の気持ちの方が最優先なんだから、あたしには。

あたしの貫きたかつた目的と、悠汰の危機は相反するもので、どうしたらいいのか全然わからない。

頭が、まったく働かなくなった。

「とうとう目的が達成できたんだ、悠汰くん」

人々が出て行くその隙間をぬって、ひとり入ってきた。比紹だ。

扉は誰も閉めないでいたから遮るものがなにも無い。最悪のタイピングだった。あたしはまだ立ち上がれない。

「それなのに大変なことになっちゃったね、玲華。でも自業自得だよ。玲華も本当はそう思ってるんでしょ？」

「おい」

なにも言わないあたしの代わりに、久保田さんが立ち上がった。比紹が近づいてくるのを遮るように。

「悠汰くん、せっかくぼくの誘いを断って拓真くんと実行したのに、結局こういう結果になるなんて、笑っちゃおうよ」

「……………」

萩原くんだったんだ、と思った。

本当に比紹と来たわけではないのだ。

「萩原くんのことを、なぜ比紹が知っているの？」

「ようやく出たのは質問だった。どこまで関わっているの、悠汰に。おい、こいつの話の話を聞くな。おまえは出ていけ」

これまでより最も硬い久保田さんの声を聞いた。

「あなたには用はないんですよ。ああでも、聞いてもらったほうがいいのかも……。あなたも悠汰くんが心配なんですよね」

「だからなんだ。おまえの話の聞いて得があるとは思えない」

「恐い人を傍においてるね、玲華。悠汰くんの友達ぐらい誰でも調べられるよ。一度失敗した後にはさ、ぼくの仕掛けた縛りがとれかかってね。それが拓真くんのせいだったって知ってたんだ。でもそのお友達はキーパーソンになると思った。なるべく彼と引き離すか、逆に彼をも利用するか……。わくわくしながら考えていたんだ。でも必要なかったね、自滅したんだもの」

「比紹！あんたっ……………！」

あたしは怒りが力となつて立ち上がることができた。

悠汰への攻撃が一番あたしにダメージを与える。それを知っているわざととしているのだ。

「これ以上、悠汰に負担をかけたなら許さないわ！」

「お嬢！」

あたしは久保田さんを押し退け、比紹に突進した。予測を超えた行動だったらしい、あの久保田さんがついてきていない。構わず掴もうと伸ばした掌は、しかし比紹に届くまえにあっさり捕まってしまうた。

「怒りで隙だらけだよ」

腰に右腕がまわされ、動きを封じられた。

「らしくないね。玲華がこれほど取り乱すとは思わなかったよ」

「やめて！離して！」

離れたいのに、比紹の力には敵わなかった。

本当にらしくない。

あたしは唇を噛みしめた。

こつこつという連中に、やめてなんて言っても無駄だ。元よりやめる気ならば最初からしない。それよりも、もっと増長させるだけだ。

それを心得ているからこそ、これまでこつこつという状況のときに、決して“やめて”なんて言わなかったのに。

「警戒しないで、玲華。ぼくはきみには何もしないよ」

案の定、さらに力強くなる。言ってることとやっтерることが違う。「何もできないんだ。これが何を意味するかわかるかな？」

少し間を開ける。

久保田さんは様子を見ていた。あたしが人質のようにいるから手が出せないのだろう。

もしかすると比紹の性質を見抜こうとしているのかもしれない。

二人は初めて対面するから。

比紹は極上の微笑みを浮かべて続けた。

「ぼくはきみの兄だからね」

「えっ？」

あたしは目を瞞って、思いきり近くで比紹の顔を見る。

その反応に満足そうに目を細めた。

「なに、言ってるの？」

嘘か否か、誤ることなく追及しなければならぬ。

あまりのことにあたしの声は震えた。

「本当だよ。きみもぼくも産まれる以前の話だけだね。ぼくの母親は源蔵に好かれてしまった。それでこの家に招かれたんだ。母親の意志も通さず、強引にね」

遠くを見ながら、比紹は語っていた。

悦に入った表情。

あたしがダメージを食らっているときに話そうと決め、ようやく話すことができるという感じだった。

「だけどそのとき、源蔵のものになる前に、きみの父親が母親に惚れてしまったんだって。猛アピールをされたと聞いているよ。だけど母親は他に……この家の誰でもない人と恋に落ちていた。それをきみの父親は知っていたのに、脅迫まがいのことまでして関係を持った。そして産まれたのがぼくだ」

「そんなはずないわ!」

あたしは否定するのがやっとだった。

信じられない。比紹は視点を切り替えて、最も残酷な捉え方をさせるように話す人だ。

「まあ信用できないのもわかるよ。薫さんは軟弱でそんな度胸持ち合わせてないって、周囲にはそう思わせることに成功してるからね。だったら本人に連絡とって聞いてみるといい。きっと何も言えなくなるか、言い訳してくるかのどちらかだよ。あれはお互い同意があつて事を為したんだって」

「……………」

「でもね、一般的にこういうケースでは女性の言い分の方が正しいよ。玲華だって、もし幸祐に穢されてさ、同じ事を言ったら、とんでもないって反論するだろう?そして最大の証拠は実際にぼくがいることだ。きみの母親と、もう出逢ってる頃だよ。小百合さんは知ってるのかな、このこと」

あたしは比紹の腕の中で頭を抱えた。

幸祐があたしにしたようなことを、お父様が比紹の母親に……。
駄目だ、いまは頭が整理できない。

(だからこそ、いまなんだ)

このタイミングを狙って比紹は言ってきたんだと悟った。

「でも……笹宮様は……」

「笹宮は義理の両親だよ。一人この家からなんとか逃げ出した母は、そのあと身籠っているのを知った。そして復讐を誓ったんだ。ぼくを少しでも関わりのある家に養子に出そうとね。笹宮の義母は子供が出来にくい身体だったらしくてさ、喜んだらしいよ。事情は知らせないで、母親はうまく義母と仲良しになったんだって。あの二人の知らない隙に母はぼくに幾度となく会いにきて、密かに復讐の念をぼくに埋め込んでいった」

「そんなの……間違ってるわ」

実の母親が自分の息子を復讐に使うなんて。

「間違ってる？それはきみだから言えることだよ。きみは正式に愛された両親の間に生まれ、護られながらここまで生きてきた。ぼくがそんなきみに嫉妬しなかったとでも思う？」

あたしは言葉に詰まってしまった。

比紹は人の弱みだとか痛いところをつくのが上手い。子供の頃から、ここにいる人たちをよく観察していたのだろう。

「でもきみは無邪気にさ、ぼくに笑いかけるんだ。子供のころからさ。残酷だよ……」

「……それで、どうしたいの？比紹は」

「ぼくの目的はひとつだ。この家をぐちゃぐちゃに掻きまわすことだよ。手始めがきみだったんだ」

「それで悠汰を巻き込んだのね」

「そうだね。でも誤解しないで。ぼくが手を入れた部分は実はそんなに多くはないんだよ。掻き乱すつもりでいたのに、あっさり彼から崩れるんだもの。可笑しくってしかたがないよ。精神だけの問題じゃなくて、身体に負担があれば気持ちも弱まるよね。それは仕方

のないことだと思っけどね」

「気づいて、いたの？……悠汰が体調を崩していたこと、知っていてやらせたの？」

なんてひどい。

助けるどころか、侵入なんて無茶なことまでさせるなんて。

「彼は本当に分かりやすいね。あまりに簡単すぎて、実はすべて演技じゃないかと思えてくるほどだったよ。彼のささやかな反応は見えてよく分かった。他の感情が乏しくなっていたからとくにね。でも玲華はぼくに八つ当たりできる立場じゃないよね？」

「……………」

「それでね。彼がここに来る間、庭でばったり会ったからさ。いまきみに話したこと、彼にも教えておいたよ」

「！」

あたしは血の引く思いがした。

知って、悠汰はどう思ったのだろう。なぜそのことを言わなかったんだろう。

複雑な感情が錯綜する。

「きみと一緒だね。すごく信じられないって顔をしていたよ。でも彼はすぐに信じた。本当に彼はぼくの言うことにいちいち揺らいじやって面白いね。欲を言えば、悠汰くんには玲華を切り捨ててほしかったけどね。でも彼はまだ利用できる存在。そのことがわかっただけで充分だよ」

「比紹！」

もうやめて、と思った。

これ以上あたしを怒らせないで。

つい怒鳴ったあたしに、比紹は眼光を鋭くさせた。口元の笑みはそのままで。

「隠させたりしない。きみたち一家の汚点。完璧に見えるきみの一家は光輝いて見えるけれど、光があれば影ができるんだ。光が強ければ強いほど、影はより深く濃くなる。きみに怒る資格はない。間

違つてもきみたちだけ幸せになんてさせないよ」

この家に来て、最も深い恨みを感じた。

「唯一残念だったのは源蔵が先に逝つたことだ。元はあの人がすべての元凶なのにね。仕方ないから、その分きみたちに罪を背負ってもらつ。悪く思わないでね」

ようやく比紹はあたしの腰に回していた腕を離した。支えがなくなつて、あたしは再び膝から崩れ落ちる。

目の前が真っ暗だった。

「楽しみにしてるよ。これからのきみの行動を。悠汰くんをどうやって助けるのか、誰に署名するのかもね」

そう言い残し彼は立ち去る。

あたしは全身が震えるのを止められなかった。いままでの大変さなんて、今夜のことに比べたら天と地ほどの差があるんじゃないかと思えるほど、絶望を感じた。

「大遅刻だね」

遠くで、そんな一言が聞こえる。

扉の方で千石さんが見ていた。きつといま到着したんだろう。

比紹がいなくなつてから、千石さんが扉を閉じた。再度密閉された空間で、すぐに口を開く者はいなかった。

太陽がすこしずつ自分の存在を皆に知らしめている頃。

結局朝まで眠れなかった。ソファに座りながら、悠汰のことと比紹の話で、脳は安らぐことを拒否したみたいに休むことを許さない。数年分の悲しみと、切なさ、そして怒りがいつぺんにきて、疲労感が限界に達していた。

「お嬢……なにかいい案見つかったか？」

久保田さんも千石さんも自分の部屋に帰らずに、ここにいる。

千石さんはその場にいなかったことを詫びてきた。

たといいたとしても、避けられなかったと思う。

あのとき、集団でここまでやってきた清志郎伯父様より、久保田さんは出遅れたと言った。それで天井裏で先回りしたのだと。

悠汰のことはモニター室で見られていて、何人かに報告がいったそう。その反応を見て久保田さんは察したのだという。

悠汰は予備電源のことを考えなかったのかしら。

考えてなかったんだろう。なにせ悠汰だから……。

「おい、会話しようぜ。怒っても構わないから」

久保田さんが嘆いた。

確かにあたしはまだ怒ってる。

だけどそれで無視してたわけじゃない。考え事に集中していて聞いていなかっただけだ。

「怒られる理由、あるってわかってるのね」

「だから何回も言ってるだろ。お嬢が取り乱せばそれだけ悠汰にも不利になるって。あそこでごちゃごちゃするより改めて助け出す方が利口だ」

いまならそう、そう思える。

なのにあたしは駄目だった。すべてのことが考えられなくなって。あんなところに悠汰を入れさせること自体が、あり得ないと思っ

てしまった。許せないって。

久保田さんにそう言ったら、「あれぐらい持ちこたえる」って力強く断言した。

確かに今の悠汰なら、以前ほど縛られることに対して拘りを抱^{いだ}いていないだろう。

それでももつてという想いは捨てきれない。それでも、陥らなくて良かった状態だ。避けられるならば避けたかったと。

あたしの方がいまは悠汰に対して過保護みたいだ。

「それに奥の手ならある」

奥の手。

久保田さんはあたしから鍵を預かってから、一度ここを離れたことがある。

そのときに合鍵を作っていたんだそうだ。

本来は加藤さんのために。

仮にこのまま展開が悪くなって、そのときまだ加藤さんを解放するまでに至っていない場合、隙を見て助け出したいと考えていたようだ。

悪い展開とはまさにいま進んでいる状態だ。毅叔父様にこの家の主導権が渡りきったとき。

他の、地下一階に閉じ込めた人たちは、叔父様たちの手によって解放されるのは容易いだろう。でも加藤さんは下の立場だし、失態をおかした人だ。それも、毅叔父様には敵わない稔叔父様の指示でそのまま処分、って考えが毅叔父様にないとも限らない。

「そもそも地下に入れないのにどうすんのよ！しかも鍵を変えられてたら終わりだわ」

「地下には入れるかもしれない」

「隠し通路？」

あたしも通った。稔叔父様の手引きで。

けどあの道は上には続いていたけれど、下には続いていないと久保田さんはあたしに教えたところだった。

……稔叔父様はこんな騒ぎでも姿を現さなかった。

あの後からはまた、見ていない。

「ああ。まだ見つけていないが、必ずどこかにはいるはずだ。それがなくても天井裏という手もあるしな」

「なにがしたかったのかしら？お祖父様は。誰にも言わずに、そんな道……」

千石さんに聞いてみたけれど、やっぱりというか千石さんも知らなかったと答えた。

それはそうよね。千石さんが来る、ずっと前の出来事だから。

「さあな。ただ身の危険をいつも感じていたのかもしれない」

「どういうこと？」

「オレがこの家の中で見つけた通路は、天井裏の入れる場所も含めて三箇所。すべて源蔵氏の部屋に繋がっていた」

あたしは息を呑みかけて、不意にやめた。辺りをつい見渡してしまふ。

盗聴器の存在が、いつどこでまたあるかわからない。

そしたらまた、久保田さんがあたしの不安を読んだ。

「大丈夫だろう。稔氏はあれを取り除いた後、他にはないとお嬢が言ったら、なら話せると答えたんだろう？あれは自分のものが最も範囲の広い機器だと自負しているからだ。やつだって聞かれたくない内容を話しただろうしな」

あたしが稔叔父様から聞いたことは、久保田さんには報告済みだった。

報告するときに、この不安に駆られなかったのは、やっぱりまだその時は冷静になりきれなかったんだ。

「そんなことで優越感に浸れるなんて、わかんないわね。男心ってヘルツで争ってどうするのかしら？」

でも確かに、そのおかげで稔叔父様だけがひとつ事実を掴んでいる。

正直、申し訳ないけれど幸祐のことは今ではもう二の次になって

いた。稔叔父様の言葉が真実なのかどうか、突き詰めていかないといけないのに。

諦める気はないけれど、第一は悠汰のことで。

「隠し通路が実際にあったと仮定して、それで本当に上手くいくのかしら」

なにか。見落としてしまっていることがあるような気がする。

簡単に考えすぎてしまっていないだろうか。

なにか穴が……。

「とにかく今のお嬢がするべきことは、なるべく時間を延ばすことだ。署名捺印を引き延ばせ」

「そんな偉そうに言われなくてもわかってるわよ」

「なら、良かった」

変わらない態度で、久保田さんは出て行く。

久保田さんには久保田さんのするべきことがあるみたいだ。きつと探しに行くんだと思った。隠し通路を。

あの人は、あたしが思っているよりずっと大人なのかもしれない。

結局どこか壊れたふうになっても、本当に醜態を晒すようなことはしてないから。

きつとあたしの知らないものを見てきたんだ。それだけ人の人生は重い。手抜きしては生きていけないものがある。

「不思議な人ですね」

千石さんは、久保田さんが出て行った扉を見ながらポツリと言った。

「久保田さんのこと？」

「ええ。私には不可解でならない。まるで違う生命体であるものにさえ見えてくる。一見適当に生きていそうなのに、いかなることがあっても崩さない。いや、僅かに滑稽なときはありますが、それでも誤らないというのは……。私にはあんなふうには保てない」

「人それぞれなものね。向き不向きもあるし。自分らしく、自分を誤魔化さずに生きていればそれでいいわ。それでときにジェラシー

とか劣等感を感じても、自分に嘘をついていなければ後悔だけはないわ。人の真似をしても上手くいかない。所詮自分でしか生きられないのよ」

「玲華様、誤解をなさっては困ります。私はあの人のようになりたいなどとは一片たりとも思いません」

なぜか千石さんは不満げに、でもきつぱりと断りをいれてきた。

「そうかしら？」

少なくとも、千石さんがこんなことを言い出すということは、それは変化だ。認めないとわざわざあたしに言ってきた過程がある。

それにあたしだけが影響しているとは思えない。

「あの少年がバランスを崩した瞬間に必然的に隙をつくったさまは、素直に驚嘆しました。振りかざしたときと、実際に殴ったときで勢いがあれほど抑えられたのも、技術があるからこそ可能なふり幅だと思えます。自分にはできない。あの状態で体勢を変えることが、ではなく、変えようと思うほどの感情になることです。私には、どれだけの想いがそこにあるのかは一生かかっても理解できないでしょう」

「一生と言い切っちゃうのはどうかと思うわ」

千石さんにしては素直な気持ちなのだろうけど、どうしてそこで遠まわしな表現をするのかしら。

……この人は裏切らない。

心の底からお祖父様に仕えていて、今はあたしに同様にそれを示してくれている。

それは感じる事ができた。

だからあたしは悲しんでばかりはいられない。

一緒にここまで来てくれた千石さんと、それから久保田さんのためにも。たとえどんなに裏切られても、あたしは突き進むしかない。

本来の目的も、悠汰のことも諦めたりしない。抜かりはない。

あたしはようやくいくつもの自分を取り戻せた気がした。

夜が明けて陽が上がり始め、まず最初にあたしの部屋を訪れたのは、なんと清志郎伯父様だった。

時間にして午前八時。

なにがなんでも稔叔父様より先に行動を起こしたかったようだ。

もしかしたらこの人も、あの後あまり寝ていないのかもしれない。そう思わせるような興奮振りで、無遠慮にいきなり飛び込んできた。

(もう、護衛の人はいないんだわ)

心の準備が全くの無しの状態で、誰かが訪問に来ることがなかったから、そう再考せずにいられない。

本当に護ってもらっていたんだ。有り難味が改めてわかる。

「玲華！誰が管理しているのなんて関係ない！俺はいくらでもあの男をなんとかすることができるとさ！そうされたくなければ署名しろ！」

興奮しててウダウダ言っていたけれど、要訳するとそのようなことを言ってきた。

これは毅叔父様だけを相手と考えない方がいいようだ。この人を怒らせて自棄になられたら、本当に禄でもないことをやらかしそう

だ。
「清志郎伯父様。どうか落ち着きください。わたくしといたしましても、そう言われましては領かずにはいられません。しかしやはり署名はわたくしにとつて最後の砦。完璧に彼が助かることを確認できなければ、叶うものでありません」

なるべく丁重に引き延ばす。

そのことだけに意識を集中した。

もう猫を被っても仕方ないのに、その為だけにへりくだる。

「完璧に助かる？甘い考えだな。どういう道を辿ってもあの男は毅に痛めつけられる。ならば今すぐ俺に署名し全権をこちらに渡すことだ。そうすれば助けてやると言ってる」

「逆ですわ、伯父様。きつと同様なことを申し出てくる人が他にもいるでしょう。毅叔父様だけではなく……。そうなればわたくしは見極めなければなりません。本当に助けていただけの方を」

おそらく、もうこの二人以外は出てこないだろうと、あたしは踏んでいた。昨日のことをみると、皆すでに高見の見物人と化していたから。敢えてそう言うことで時間稼ぎを狙う。

もちろんそれはフリで、突然空気も読めずに出てくる人もいるかもしれないけれど。

そんなことよりも、注意するべきは比紹だ。

彼からはとても深い禍々しさを感じた。柔らかな口調が、より不気味でそぐわなかった。本気であたしを憎んでいる。

叔父様たちなら、まだ利用価値があるうちは無茶な扱いはしないだろう。でも比紹はひとり狙いが違う。

いつ悠汰に手を出してもおかしくない。

だから一刻も早く。悠汰をあの場合から解放しなければならないのだ。

なんとか伯父様を説得し、まだ毅叔父様にも署名はしないと約束して帰ってもらった。

まだできない。

違うわ。署名をしたら終わりなんだ。

あとは毅叔父様を説得するんだ。

清志郎伯父様が毅叔父様を抑えることができるとは思えないから。ここが最大の勝負となる。

そして、毅叔父様がこの部屋に来たのは十時頃だった。一応常識ある範疇だ。

しかしその内容は非常識極まりない。

「彼の将来はおまえによって決まる。最悪の結果になるか、最も最悪の結果になるかのどちらかだ」

用紙をテーブルにこちら側に置き、淡々とそんな話をする。

(つて、どっちも最悪なんじゃない！)

五体満足で返すつもりはないようで、ぞつとした。

突然激しくキレて、強行突破しそうな清志郎伯父様と、練りに練って最も最悪のところまで見ている殺叔父様。

どちらがマシかしら？と一瞬考えたけれど、どちらも有ってはならないことに変わりはない。

「悠汰に手を出せば、貴方のお立場も悪くなりますわ」

「別に殺さなくてもいい。彼を存在しないようにすることは、いくらでもできるんだ。例えばそう、彼の身元イデオの証明を抹消するのはどうだろうか？この先彼は就職もできず、なにか起こっても病院にも行けず、やがて自動的に本当に消える」

やっぱり恐ろしい人だ。そんなことを考えていたとは……。

そんなことになればきつと悠汰は耐えられない。死ぬより辛い目に遭うのは容易に想像できた。

いくら家族やあたしの家がフォロイーをしても、悠汰の性格なら、自ら死ぬことも選んでしまう可能性がある……。

(そんなの駄目)

可能性だけでも残してはいけないのだ。

殺叔父様も言っていた。戸籍を弄るのは容易いと。こんなことに権力を使うのは許されない。殺人犯と何も変わらない。

「彼の自我を完全に崩壊させるという手もあるな。洗脳してこき使ったあと捨てればいい」

それも駄目だ。提示だけでも恐ろしい。

また取り乱しそうになる心を、キユツと整えた。

「叔父様。それは困りますわ。ですが、いまは署名はできません。他にも不安材料があります。それらを取り除いた後でない」と

「なんだ、それは」

「清志郎伯父様ですわ。あの方も同じことをおっしゃいました」

「なに？あんなやつはただの雑魚だ！気にすることはない」

清志郎伯父様の名前にピクリと反応する。

本当にこの人たちは仲が悪いのだと再認識できた。

(そこは利用できる)

あたしはあくまでも殊勝な態度で挑んだ。

「そういうわけには参りませんわ。貴方にとつては格が下かもわかりませんが、わたくしみたいいな小娘では敵いません。……わたくし、いまは本当に彼のことしか考えていませんの。ですの、僅かでも良い方向へ持っていきたいのです。そのためなら署名も惜しみませんわ」

「だからあいつを黙らせろ、と言うことか？」

「ええ。ご存知だとは思いますが、わたくしが署名できるのはお一人様のみとは限りません。僅かでも叔父様は他の方に渡るのは嫌なのではありませんか？」

毅叔父様は眉を歪めた。凶星とっているようなものだ

お祖父様は一人に遺贈するとは言っていない。

(署名をゲットした者にはあげると言っただけ書かれているのよね)
「それだけではありません。笹宮比紹、彼も悠汰に対して危険な存在なのです」

「ああ。笹宮な……」

敵同士で刃を交えさせ、その隙を狙おうという作戦だ。間違ってもこの三人が手を組むことはないから。

しかし毅叔父様の言い方は、しっかりと納得しているようなものだった。

なにかを、知っているのだろうか。

(どこまで……)

この人は見えているんだろう。比路が独自に動いていたことを知っていたとしたら、前回悠汰が侵入したことも気づいていたのだろうか。

だから、これまで表面上は大人しかった？

(考えすぎ?)

わからない。だってそんなことが本当にあったとしたら……。あたしは再びゾクリとなった。

間違いなくこの人は油断ならない人だ。

殺叔父様は読めない表情のまま立ち上がった。

「なるほどな。意外におまえは豪胆だな。面白い。いいだろう、まだ期限はあるからな。こちらも動かされてやるとしよう。その代わり俺よりも前に誰かに署名をしたことが判明すれば、問答無用で彼を殺す」

「憶えておきますわ」

あたしもお見送りするように立ち上がる。叔父様はそのまま部屋を出て行った。

さしあたっての危機は去った。

あたしはそう確信した。

恐らくあたしの意図ぐらいいは読まれているんだろう。

時間が稼げるだけでも、ここでは申し分ないことだと言える。

だけど。深影慎をここで持ち出さなかったことが、逆に怖かった。

一種異様な空気を持つ男。

あれから千石さんが仲間の使用人から聞いた情報があった。慎と

いう男は、最近お祖父様のために仕事をしようになった、所謂新

人だという。やはり父親以上の働きをすで見せているとか。

彼が拷問をすれば、耐えられる人はいないでしょう。

そんなことを聞けば誰だって慄く。

あたしだって署名させるために、そうされてもおかしくなかったんだ。

もしかすると、期限がきてもまだあたしが誰にも署名してなければ、間違いなく……。

(でも、これからは反撃よ)

殺叔父様が何をするつもりかは不明だけど、これ以上悪い方向へは行かせない。

防御体勢という状態は、気持ち的にも状況的にも、もう充分だった。

昼食時間前になっても、麻衣ちゃんと亜衣ちゃんがこない。実は朝から来ていなかった。

朝だけなら寝坊かもしれない、なんて暢気に考えられるけれど、こんな時間になっても来ないのは間違いなくなにかあったとしか思えない。

実際には一度も寝坊なんてなかったし、いつも時間ぴったりにこの部屋に二人揃ってきていたのに。

(まさか……)

ここまですると、なにも驚かない。ただ悲しいだけだ。

兆候は、あった。

それがどういうことか、考えなかったわけではないけれど、判然とはしなかった。

後回しにしていた。

「玲華様、私が昼食をつくります」

考えに耽っていたら、なんと千石さんが意外なことを言ってきた。また新しい一面だ。

「あなた、お料理できたの？」

「……………知識ならあります」

なんなのよ、今の間は。

まったく。知識はあっても実際のところ作ったことはないというわけね。

「いいわ。あたしがやる」

「玲華様が？出来るのですか？」

「できるようになったのよ！」

なんで意外そうに言うのよ。まあ、あたしも同じような反応を示したんだけどね。

ただ。

(あたしの場合、できるものが限られてるのよね)

以前ヒデに教わったものなら完璧につくれるようになった。

しかしどういうわけか、そこから先に進まない。新しいものに一人で挑戦しようとしても、なぜか失敗するのだ。

「玲華さまは無茶苦茶すぎますよ。普通ビーフストロガノフにキュウリを混ぜようとは思いません」

えっらそうにヒデにそう批判された。

大好きなものに大好きな野菜を入れたのよ、それでなんでそんなこと言われなくちゃいけないのだろうか。

だいたい苦手なのだ。料理だけじゃなくて、例えば芸術面とかでも。

結局受け入れられるかどうかって好き嫌いの世界になる。人それぞれ評価が違うってやつだ。それでピアノもある一定以上は上達しなかったわけなんだけど。

きつちりリズムとつても、ミスなく弾いても何かが足りないと言われる。

正解がないのなら、あたしの好きなように弾かせてもらいたかったのだけど、あまりにそのときの先生が決めつけてくるんで、口論になってやめたのだ。あときはあたしも子どもだった。

「しかし玲華様にそんなこと……」

「いーって、気にしないで」

冷蔵庫を開けてみると、あまり食材は多くなかった。とくに野菜が少ない。

こんなんでどうやって作っていたのかしら。

というより、ご飯はあるのかしら。どこに？

ぱったんぱったんとあらゆる扉を開き、中の物をテーブルに置きながら、右往左往していると千石さんが声をかけてくる。

「玲華様」

「なによ？別に困ってるわけじゃないのよ！いいからあなたは大人しく……え？」

顔を上げると、千石さんはこちらを見ずにドアの方を見ていた。

視線を追うと、そこに麻衣ちゃんがいた。ひとりで体を堅くしている。

「も、申し訳ございません。玲華様」

「いいのよ。寝坊？亜衣ちゃんは？」

内心ホツとして、持っていた秋刀魚を手放した。

「実は亜衣が体調を崩してまして、午前中はずっと看病を……。ご連絡しなくて申し訳ありません」

「なんだ、そうだったの……。最近寒くなってきたものね。それなら無理しなくて良かったのに」

「いえ。そうはいきません。わたくしが作ります」

麻衣ちゃんは、血相をかえてキッチンまで走り寄った。そしてあたしがテーブルの上に置いたものを見て一言。

「あの？なにをお作りになされよう？」

「考え中だったのよ！」

丁寧に直球で困らないでほしいわ。あたしが手を洗う隣で、麻衣ちゃんは手際よく支度にとりかかる。

「そうですか。……なにかリクエストはありますか？」

「うーん。そうねえ、パスタかしら」

「和食ブームは終わっただんですか？」

「ぎこちない笑顔を見せて麻衣ちゃんが訊く。」

「うん。いまは麺ね。千石さんなに食べたい？」

「私はなんでも……」

「またそう言う」

千石さんは一度もオーダーしてない。付き人という立場をわきまえてなのかもしれないけれど、あたしはただ単に食にこだわりがないんだと見た。

「かしこまりました。ではペスカトーレなんていかがでしょう？」

「いいわね」

あたしが頷くと、麻衣ちゃんは早速とりかかる。

その姿を、あたしは後ろからジッと見つめていた。

あたしが出してしまった調味料や魚を冷蔵庫になおし、使用する貝類を取り出す。

まずは海老を取り出し皮をむき始めた。ペスカトーレは野菜がなくてもできる。

「あの……玲華様？あちらでお待ちいただいてもいいんですよ？」

居心地の悪そうに麻衣ちゃんは少し振り向く。

「いいのいいの。勉強のために見ているだけだから」

秀和はあまりこういうの作らなかつたから、確かに見ていたいと思つところはあつた。

それと、同時に気になつていた。

麻衣ちゃんは何かを隠してる？

理由が明確にあるわけではない。手際は変わらずいいし、笑顔も向けている。だけど、どこかいつもよりぎこちない。

もう、周囲の変化を見落とすわけにはいかない。

何か言いたげに、それでも諦めたような感じで麻衣ちゃんは料理を再開した。

「そういえばいつもこんなに食材ないの？」

「ええ。なるべく旬なものと思ひまして、毎朝配達されるものを取りに行くのです」

「そう……」

毎日、配達されていた？

ということとは、毎日この家に配達に来る人がいるっていうことだ。全然気づかなかつた。部外者が、ここに來ていた。

(これはつかえるかもね)

どうして思いつかなかつたのだろう。

悠汰を助け出す相談はしていたけれど、助けてから外に出るまでが実は最大の問題だつた。

地下から出したところで外に出れなければ意味はない。

きつと配達の人ということは裏口だ。正面の門は開かないだろう。それでも裏口のその時間は開いているというわけだ。

もつとそのことを麻衣ちゃんに訊きたくなった。だけど。

「麻衣ちゃん」

貝をすべて下ごしらえを終えて、フライパンを取り出したとき、あたしは声をかける。

彼女は手元だけを震わせた。

常識は捨てたほうがいい。

稔叔父様の言った言葉が気になっていた。

まだアレはある。

それはきつとどこかに取り付けられているものではなくて。

あたしは麻衣ちゃんに近づく。

彼女はすごく強ばった表情になった。初めてみせる表情^{かお}。

それだけ、あたしから与える空気が緊迫しているのかもしれない。

固まって動けないでいる彼女の、白いフリルのエプロンのポケットに手を伸ばす。

彼女は抵抗しなかった。もう観念したのか、動けないのかはわからない。

硬いものが指先に触れる。

躊躇わずに引き抜くと、小型の盗聴器がそのまま、そこには入れられていた。

「あ……申しわ……」

青ざめながら掠れた声で謝りかけ、そして彼女は途中でやめた。目をかたく塞ぐ。

その態度であたしはひとつの可能性を感じ取った。

あたしに見抜かれたと、この向こう側にいる人に知られると彼女に危険が及ぶのではないかと。

おそらくそれは麻衣ちゃんだけでなく……。

あたしはスイッチを切らずに千石さんに目配せをする。

彼も自体を察したようだが、あたしがなにを言いたいのかまでは解らないようだ。

役目をし続けている盗聴器を、強引に彼のスーツのポケットに入れる。そしてキッチンを指差した。

あなたが麻衣ちゃんになりすまして、適当に料理しておいてあたしが言いたいのはそれだ。

なんとか身ぶり手振りで伝えようと、あたしは麻衣ちゃんの手を引き寝室へ連れていく。

同じ女性ということもあるし、寝室に入れることに抵抗はなかった。

扉を閉めて腕を組みながら振り返る。

「さて、と。ここなら大丈夫かしら？」

「あの……どうして……」

あたしに見破られたのが信じられないのか、この行動に違和感があったのか、素直に驚いていた。

「消去法ね。これまで数々の盗聴器よ。最初に取り付けられていたのはわからないけれど、取り外しても付けられている第二陣目以降って、あなたたち以外にいないの。さすがに身につけているのはいまま思いついたんだけど」

「申し訳ございません……」

麻衣ちゃんは怯えた顔のままお辞儀をした。

こつという態度に出るといふことは……やはり。

「誰かに脅されてるのね。もしかして、亜衣ちゃんが体調を崩したっていうのも嘘かしら？」

あたしが思ったままに突きつけると、更に彼女は青ざめた。恐怖を感じているときの人の表情だ。血の気が失せている。

「わ、わたくし……わたくしが独断で行ったことです」

「嘘はもういいわ。ここなら誰にも聞かれてないんでしょう？それともまだどこかに隠し持つてるのかしら！」

語尾を強めに尋ねる。そんなことで終わらせたりしない。前田さんたちのように、後々に延ばしてとんでもない事実が隠されていたってというのは、もう懲りたから。

「……はい。もうごさいません」

「だったら言つて。口止めされているのはわかるわ。その人にこれからも従うのか、あたしに言つて協力してもらうか。あなたなら判断できるわよね」

「協力……ですか？」

初めて陥つた選択肢のように彼女は小さく呟く。

「そうよ。状況によつては助けられるかもしれないわ」

ここで一人で行動しなくてはいけなくなった彼女。そして、これまでの双子の仲の良さを見ていると容易に思いつく。

加藤さん同様、相手が誰なのかはあたしには読めないけれど、これが不本意な状況であるということは間違いない。

かなり思い詰めた顔で、彼女は実は……と呟いた。

「実は、亜衣は人質にとられているのです。わたくしたちがあまりに何の行動も起こせなかったから……」

「行動？」

「玲華様を殺めることでごさいます。あの方は最初からあなたを亡き者になさろうとしておられました。それでわたくしたちに目をつけられたのですわ。いつも近くににいるわたくしたちに」

「なにで、脅されていたの？」

「違うのです」

哀しげな表情のまま、なぜか彼女は首を横に振る。

「わたくしたちにもあなたをうらやむ気持ちはあつたのですわ、玲華様。……だつてそうでしょう？ わたしと亜衣は生まれながらにして誰かの下に付くことを宿命づけられていた。それに反してあなたはその対極にいる。間違つても、たとえお父上がこの家を出ても揺らがないその身分。羨ましくないはずがない！」

「麻衣ちゃん……」

「親も周りもその為の能力ばかり押し付けようとして、わたしたちのことなんて見てなかった！ だつて両親とも、わたしと亜衣のことをいつも見分けられないでいたの！ それで紛らわしいから変化をつ

けるだなんて。……それってまるでわたしたちが悪いみたいじゃない？そんなのおかしいっていつも二人で言い合っていたわ！」

とうとう麻衣ちゃんも泣き出してしまった。泣きながらも抑えられないその感情。それは十五年間の想いがすべてぶつけられているように見えた。

これが本来の彼女なんだ。

なんの飾りも植えつけられたものがない、真実の姿。

「だからわたしたちにも、あなたをどうにかしてやりたいという気持ちはあつたんです。最初は……。二人で話し合って、からかってやりたいって……。そんな軽い気持ちで。だけど、玲華様は違った。初めて見抜かれました何度も。何度も、あなたは正しい名前を呼んだ」

「そうね」

やっぱりあたしは間違っていないかった。

最初は自分を疑った。知らないうちに、自分でも気づかないうちに、心理的に追い詰められているのかと。しかし何回も同じことが続けば、それは確信に変わる。

演じていたことをあたしが見抜けたのは、あたし自身が猫を被ってしまふ習癖があるからだろう。同じ事をしている人は敏感に感じてしまうところがある。

「あなたたちはわかり易いほど、極端すぎた。まるでアニメみたいに、キャラをわざとつくっているみたいに見えたわ」

「でもそれはここへきての姿じゃないんです。なのに他の誰も気づく人はいなかったんですよ、これまでは。両親でさえもそう。わたしたちはたまに入れ替わりを楽しむようになっていた。でもそのうちやり切れない想いが溢れ出てきて……。あたしたちってなんなのって。あたしたちは個々として認めてもらえないのって」

疲れているのか、辛そうに掌を額に押し付けている。

あたしは彼女を支えるようにベッドまでつれていき、一緒に座った。ちゃんと聞きたいと思ったから。彼女の、彼女たちの想いを。

創られていない暗い表情を麻衣ちゃんはしている。いままでのほんわかとした笑顔とは違う。人間味があった。

「申し訳……」

「いいわ、それは」

氣遣われたのを謝ろうとしていた彼女を制止した。もう使用人のするような姿勢はいらない。彼女は普通の同世代の女の子だから。

「普通に喋って、麻衣ちゃん」

「ですが……」

「最初に言っただしょ。堅苦しいのは嫌いなよ、本当はね。家のしがらみなんて取っ払って話しましょう。ここにはあたしたちしかないわ。それで、どうなって今に至っているの？」

わかりました、と彼女は頷いた。幼少の頃から叩き込まれたらうその態度は、そうそう崩せないのかもしれない。

あたしからしてみれば、そんな距離はいらないのにと思っただけど。

「最も近い場所にいるわたしたちに目をつけたのは、清志郎様です」
「そう」

「ここでもでてくるのね、あの人は。」

あまり意外性はなかった。あの人だって、一応は人を使う立場の人だ。しかも下働きの人を見下しているから、彼女たちを利用するのになんの弊害もなかっただろう。

「それから光泉寺様もです」

「光泉寺？」

二人目の名前が出てくるとは思わなかった。光泉寺は分家のひとつで、彼女が言っているのは葉子の父親にあたる。松倉様と仲が良かったと杏里は言っていた。

これは、どうということなんだろうか。

「最初は清志郎様とあなたを陥れる話しをしていました。脅されてなんていません。ただ清志郎様から正当な血筋の人間に一泡吹かせてやるうと、持ちかけられたのです。そうすれば自分が支配し若村

の格を上げてやると言われました。そう、わたしたちは自発的に乗ったのです」

噛み締めるように麻衣ちゃんは語る。

その様から、後悔しているような感情を感じ取れた。

「そのことに気づかれたのが光泉寺様でした。光泉寺様は見抜かれて、清志郎様には支配する力がないからおまえたちの望みは叶わな」と指摘されました。それならばこちらに情報を回せと。それだけで、変わりに自分から毅様に希望を伝えてやると。わたしたちは踊らされていたのです。それに気づかず、ただ言われるままにやることが、道が開けることだと……」

光泉寺様は毅様の派閥にいた。

あたしはドキドキするのを止められなかった。隠されていた、事実。

ということとは、松倉様もその一派ということになる。

「あ。それで悠汰のことが毅叔父様までばれていたのね……。でも、あなたたちの前ではそんなに悠汰と比路のことは話していないはずよね」

「わたしにはわかりません。ただ、あなたに本当に大切な想う人がいるのかもしれない、とは感じました。綾小路様以外に、ひっそりと。それを幸泉寺様に伝えてしまいましたので、おそらくそこからあの方自身が調べたのではないでしょうが」

女の勘で気づいたのだろうか。

これにはやられた、というしかない。

完全に女性を相手にしているという認識があれば、そこにも気をつけられたのかもしれない。けれど、常に身近にいる彼女たちには、隠し切れず漏れて伝わったようだ。

あたしは思わずため息をついた。

それにビクリと麻衣ちゃんが震える。

「申し……すみません。あの……ほんとに、謝ってすむことではありませんが、わたしも亜衣も後悔し始めていました。だからもうや

めたいと、清志郎様に申し出たのです。光泉寺様からの命令は情報を回すことだけです。断りを入れる必要はまだないと判断してまだ言ってませんが、清志郎様からの命令はまだ、逐一ありましたので、そうしたら激しくお怒りになられて、亜衣を、人質に……」

「その命令ってなに？」

「ですので、玲華様を殺めることです。食べ物に毒を……」

彼女は涙ぐみながら自分の胸元の赤いリボンをほどき、ボタンを二つほど外した。

首から下げられた小さな袋。

「この中に、青酸カリが入ってます。はやく殺せと言われていました。それはさすがにできなくて、ずっと毒見役がいるから意味は無いと説得して時間稼ぎをしていたのですが、とうとう痺れをきらしたようでした……」

「そうだったの」

覚悟していたとはいえ、かなりの衝撃だった。殺したいほどの悪意。

実際に耳にすると身震いしてしまう。

(いつ殺されてもおかしくなかったんだわ)

自分が頭で想定するよりも、現実には凍りつくものがある。

でもそれでは署名には至らない。おそらくそれ以前のものなのだ、この殺意は。

「嫌になるわね。それで亜衣ちゃんを人質にさっさと行動に移して来いってことなのね」

「そうです。玲華様。わたしは、亜衣をとるかあなたをとるのか、選択を迫られました。こうなってしまいましたので、申し上げますが、わたしはそれには迷いなく亜衣を選びました」

「当たり前よね！」

姉妹なんだから。

ここでは血のつながりはあってないようなものだけど、そのなかでこの二人はちゃんと想い合っている。二人でここまで乗り越えて

きたからこそその絆。

それを引き裂くなんて許せない。

ひとり憤慨していると、麻衣ちゃんはやや気圧されたようにあたりを見ていた。

「なによ？」

「いえ、その……。もつと怒られるのかと思いましたが」

「怒っているわよ！こんなやり方しかできないこの家の人間に腹が立って仕方ないわよ！自分より弱いものを使うんじゃないの！直接自分から来なさいよ！バカじゃないの！」

「つて、ここでいくら言ってもどうしようもない。」

「しかも麻衣ちゃんしか聞いてないのに。」

「あの、玲華様。そうではなくて……」

「怯えたまま遠慮がちに彼女は俯いた。」

「あなたは気さくで、高慢に見えるけれど実際にはそうではなくて、いつもちゃんとわたしたちを別々に見てくれる。だから、これ以上ご迷惑をおかけするわけにはいきません。これはわたしたちの罰です。わたしたちで解決しなければならぬのです」

「麻衣ちゃん」

「やっぱりわたしには玲華様を殺すなんてできません。きっと亜衣もそう思っているはずです。ここまで来てしまつて今更ですけれど、わたしはこのまま帰ります」

「ちよつと待つて」

簡単に結論を出さないで、と思った。それで帰るなんてそれこそ迷惑じゃない。あたしだって見て見ぬフリなんてできるはずがないのに。

そう言おうとしたとき、寢室の外側から久保田さんの声が聞こえてきた。

「お嬢？つわっ、おまえ何してんだ千石っ！つていう驚きの声が……」

「ああ！もっ！」

台無しじゃないの！これからのことをもっと練ろつと思っていたのに！

仕方なくあたしは、麻衣ちゃんを連れて寝室から出ることにした。

「で？なんでこんなことになってんだよ」

なんとか久保田さんを黙らせて、千石さんにはそのままこの部屋から出て行ってもらった。

野菜の調達という意味でもなんでもいい。

身振り手振りでもにかくこの部屋から追い出した。盗聴器とともに。

すっごおおく複雑そおおな顔を千石さんはしていた。

申し訳なかったな、と思う。

でも麻衣ちゃん無しで今後のことは語れないし、久保田さんの案も欲しかった。

その後の第一声があれた。

むすつとした顔でソファに態度悪く座って、それでもあたしの話聞いてくれていた。

あたしは向かいに座り、麻衣ちゃんはあたしの隣にいる。

その彼女はまた、少しビビっていた。あたしは許したけど、久保田さんが許すかどうかわからないからだろう。

しかもこんな態度だ。

足こそテーブルには置いてないけれど、ぐわって腕は広がって背もたれの後ろにまわされている。どこの輩やかいよ、まったく。

黙らせるときに手荒なことをしたから、それでちよつと怒ってるんだとあたしはみた。

「そりゃあ、また……。ぶっ飛んだ展開だな」

もう何もいりませんって顔で、久保田さんのため息を上に向かって吐いた。

ようやく納得したみたいだ。片腕だけ外して頭を抱え出した。

「でね、あたしとしては亜衣ちゃんも助けたいの。久保田さんよろしくね」

うふつと笑って首をかしげながら、わざとぶりっ子してみた。
そしたら本気でやめろって顔をされた。

ふーんだ。

「それで、肝心のその子はどこに囚われてるって?」

「それはまだ聞いてなかったわ。麻衣ちゃん、どこ?」

「え、つと……助けていただけるんですか?」

腑に落ちない顔で彼女は反問した。

「じゃないとわざわざ千石さん出したりしないわよ」

「あいつもつくづく可哀相な奴……」

ぼそぼそつと久保田さんが呟いてたけど、あたしは聞こえないフリをした。

千石さんといえば、あたしたちが寝室から出てみたら、キッチンが物凄いことになってた。実際に料理をしようとしていたようなのだが、フライパンは海老と共に焦げてるし、パスタの麺は折れに折れて短くなつた状態で鍋の中で泳いでいた。

やっぱり知識だけあっても駄目なのだと再確認する。

とりあえずそれはまだ片付けられていない。麻衣ちゃんは性分から何とかしたそうだったけど、そんな時間はないと無理矢理応接スペースまでつれてきたのだ。

「でも玲華様は、そんな余裕ないじゃないですか。昨日もわたしたち見てました。後ろの方で、ここで起こったこと、ちゃんと見てたんです。あの人、悠汰さん?彼が、大変なことになってるのに。こんなところで他人のことなんて……」

「まあね。順位をつけるなんて失礼なことだとは思うけど、悠汰は第一ね。当たり前だわ。けどあたしはそれだけであとは適当になんてしない。欲張りだから、全部手に入りたいの」

自分が後悔しない道を選ぶ。全力で、手は抜かない。

そうしないと悠汰にも偉そうにいろいろ言えないじゃない?悠汰に、顔向けができないじゃない?

「っっておまえが言うんなら、オレは従うしかないだろ」

麻衣ちゃんが次に久保田さんの顔を見つめたとき、彼はぶつきら棒にそう返した。

素直じゃない。

けど、充分だ。彼は大人だから断るときはちゃんと断るだろう。

実際口論もたくさんしたし。

「だつてさ。だから信じて言つて、麻衣ちゃん」

「はい……。清志郎様のお部屋です。わたしたちは密談するときは別の空室を利用していました。ですが断りをいれたところ、かなりお怒りになられて、そのままわたしたち二人とも連れて行かれてしまつて」

「まさに真つ只中だな」

嫌そうな顔のまま久保田さんが呟く。

「とくに昨夜はあんなことがあつて。機嫌が最高潮に悪いときで」

「なんでそのタイミングを選んだのよ」

「見たあとだったからこそ、わたしたちも感情が高ぶっていたんです。どうしても言わなきゃって思つたら、そのまま止まれなくて……」

あたしは頭が痛くなつた。

（有り難いことなんだろうけどさ。感情のまま突っ込んで、結果とんでもない状態に陥つてるような人は一人で充分よ）

悠汰の顔が浮かぶ。

「んで？清志郎はいまどうしてる？」

久保田さんがとうとう呼び捨てになつた。

彼の中でかなりの格下になつたようだ。当然というか、とつくにあたしもそうなんだけど、とりあえず伯父様とまだ呼んでおこうと思つ。もう一戦、交えないといけないみたいだし。

「どうでしょうか。とりあえずわたしがここに来る前は一旦落ち着いて、それでまた激怒されてましたけど……」

「なんでまた？」

「地下の鍵は毅様がいま所有なさってますよね。しかしその地下へ

と続く扉は、清志郎様の配下の方が護りになられてたんです」

「そうだったの？」

それは知らなかったことだ。当然見張りはついてるんだろうとは思ったけれど。

「ええ。すぐその間にもバトルはあったのですが、ひとまずその状態で落ち着いたんです。けどなにがあつたのか、直々に毅様がその場に来られて、強引に清志郎様の配下を追い出し、ご自分の手のものをそこに置いたのです。報告を受けた清志郎様はまた激しく怒り出して。それでわたしが一人、ここに来させられました」

「あら……」

それはあたしのせいだ。まさかそんな流れが裏で起こっていたとは。

(因果つてあるのね、ほんとに)

でも誰がそこにいても変わらない。見張りは必ずあたしが通るところを見逃さないだろう。

「地下と清志郎の部屋か……。二つ同時には無理だな。まずは清志郎をなんとかしよう。あちらの方がまだなんとかなりそうだ」

久保田さんにはすでに考えが浮かんでいるようだ。

麻衣ちゃんは隣で、またえっ？て反応をした。

「そんな。まずは悠汰さんをなんとかしてあげてください。わたしたちのことは自分たちの責任でこうなってるんです。最悪わたしたちは……」

「物事には順番つてもんがあるんだよ。二兎を得るものは一兎も得ずって昔の人はよく言ったよな。だから二兎得ることがどうしても必要な場合、少しタイミングをずらす。最もいいタイミングで狙うんだ。悠汰を先行したら君の片割れは助からない。かもしれない」「なに弱気になってるのよ、最後で」

断言すれば格好良かったのに。

うるせえと久保田さんは悪態をついた。

もしかしたら彼だつて悠汰のことを先行したい思いがあるのかも

しれない。しかし迷いは失敗を生む。

「だったらそうしましょう。久保田さんにはもう何かしら考えがあるんでしょう？それでいいわ」

「おまえ、何も聞いてないうちから……」

「ダテに朝からいなくなかったわけじゃないんでしょ？これでなにもしじゃあ久保田さんの面目が丸つぶれだもんね」

ふふん、とあたしは笑う。

信じるわ。久保田さんを。

昨日から何か考えていそうだったから。じゃないと、あそこで悠汰を売るような真似をしたことが許せなくなる。

「現金すぎる奴だな、おまえ」

「ずっとこれで生きてるんだもの。そう簡単には変われないわ」

もう、迷わない。

もう大丈夫。

今のあたしは無敵なんじゃないかと思えた。悠汰との誤解はすでに解けている。それがこんなにも違うんだって、それが凄いと思っ

た。
「なんか……お二人ともわかりません。お人好しなのか厚かましいのか……全然わかりません」

口元を押さえて、震えながら麻衣ちゃんは言った。

また、涙ぐんでいる。

あたしはホワイトブリムを避けて、頭の下の方をくしゃくしゃつと撫でた。

「悪かったわね、ふてぶてしくて」

「二人つて、オレも入ってるわけか？」

不満げに久保田さんがぼやく。

端を発した張本人が何を言ってるんだか。自覚してもらわないと困る。あたしが認めただから。

「いいんじゃないの？皆で勝ちに行けば。あたしは何も譲る気はないわ」

そう言って、力づけるように麻衣ちゃんの背中を叩いた。

* * *

それから久保田さんは作戦を語りだした。

今日、得たものを聞きながら練らていく作戦。ちゃんと悠汰のとまで考えている。

だけど。

「久保田さんって絶対長生きしないタイプだわ……」

「うっせえな、嫌ならやらねえぞ」

拗ねた久保田さんを何とか宥めているうちに、千石さんがそーっと帰ってきた。

そういえば帰るタイミングを教える時間も手段もなかったけど……。それはもう、充分すぎる時間だった。

盗聴器を麻衣ちゃんに渡して、彼女にはとりあえず帰ってもらった。

「なんか知らないけど、怪しまれて食べてもらえなかったって言うのよ。絶対バレたなんて思わせちゃ駄目。まだチャンスはあると思わせるの」

前もってそう指導したから大丈夫だと思う。彼女ひとりのことなら返したくないけど、亜衣ちゃんがあちらにいるからそうもいかない。

「行く場所がなくなりました」

その後、千石さんが少し冷や汗をかきながらそう言ってきた。

本当に悪いことをした。根が真面目な人だから余計にそう思う。

それから千石さんを交えて更に深いところを打ち合わせる。最後の方はまだ麻衣ちゃんには聞かせられないところがあった。

そう、あたしの本来の目的に関するところだ。その話も出た。

「では、彼にも協力してもらおうということですね？」

「そうだ。だからまずは悠汰に会うことだな。やつにも作戦の一部

は知っておいて貰わないといけない」

「悠汰ねえ。やってくれるかしら」

「やらせるんだよ、おまえが。大丈夫だろ？お嬢が言えばなんでもするだろう、いまのあいっなら」

「確かにそう言ってたけどね、昨日は」

なんでもやってやるからって、言ってくれた。

こんなに嬉しい言葉だとは思わなかった。心苦しくなる前に、素直に感激した。

「でもねえ。これはねえ……」

「なんだよ？」

「できればあたしが見たくないっつーか、やりたくないっつーか…

…」

「グチグチ言うな。だったら他にいい方法あるのかよ」

「……やるわよ、やればいいんでしょ」

「ああ。それにあいつらオレたちを一步も出さないつもりのようにだぜ」

苦々しい顔で久保田さんが言う。

「なによそれ？」

「今朝正面玄関に十人ぐらい黒服軍団がいた。出かけるフリをして近づいて行ったんだが、みごとに止められた。オレも含め玲華嬢が逃げ出さないようにするためだろうな」

ちっ。

やっぱりという思いはあるけれどムカつくわね。これではただ外に出るだけでも骨が折れる。

だけど先ほど麻衣ちゃんから聞いた裏口の情報があつた。他にも選択肢はあるのだ。ここからはこれからの状況を見ながら進む必要が出てくる。

あたしも腹を据える必要があるようだ。

って、すでに何度もそういう覚悟は決めてきたはずなのに。悠汰が絡むと途端にあたしは弱くなる。悠汰は強いつて評価していたけ

ど、あたしにだって弱点はあるのだ。

だけど、それさえも誇らしい気持ちも確かにあった。
それが悠汰で良かったって思えるから。

（待ってて、悠汰）

何度も思った言葉。

だけど今回は少し意味合いが違う。

逢いにいける。すぐに、今夜。

まずはそこが楽しみになった。不謹慎で、そういう気の高ぶりは
良くないことだと解るのに、高揚が止まらなかった。

そう、久保田さんは今日、ちゃんと悠汰までの道のりを見つけて
きたんだ。

怪しいと思う箇所は前からあったんだそうだ。

そういうの、どうやって見つけるの？って訊くと、久保田さんは
仏頂面のまま答えた。

「違和感がするんだよ。部屋と部屋の中を見て、それから廊下に出
ると、そこだけなんか無駄に壁が広かったりする。あとは排気口が
やたらと大きいと、入れそうだなって眺める癖がもともとあるんだ」
「どつという癖よ、それ」

「野生児というか、犯罪をして逃亡する男の心理ではないですか？
そこまでいくと」

千石さんにまで呆れさせてしまっただけは終わりだと思う。

家中をうろついている間、そんなことをしてたのか。

「せめてスパイ大作戦と呼べ」

「また古いものを……」

「オレだってリアルタイムじゃないぞ、別に」

千石さんの呟きに、久保田さんは丁重に訂正していた。

確か昔の映画よね。あたしはよく知らないけれど。

探偵ってスパイの別名だったのかしら。それも知らなかったわ。

「おい、おまえはまたなにを真剣に考えてんだ」

「なんでも」

「そういえば貴方は何歳なのですか？」

「おまえよりは上。だから敬え」

「敬ってないように見えますか？」

「見える。だから敬え」

「なに二人で遊んでるのよ、いまは作戦会議に集中しなさいよ」

「どこが遊んでるように見えるんだよ。おまえの頭はどうなってるんだ？」

「そうですね。私の不覚でした」

「おい、てめえ」

うーん。これは仲が良くなっているのだろうか。確かに今までにはないやり取りではあるけれど。

とりあえず二人とも全く笑顔はない。気が合ってる感じも全くない。

だけど、出会いが最悪だったようで、お互いピリピリしていた当初のことを考えると、きつとこういう親睦の深め方もあるんだと思ってしまう。

「まあ、作戦に支障を来さなければいいわ」

「なんの話だ」

「あんたたちの仲よ」

「おまえも敬えよ、少しは」

「悠汰がちゃんと敬ってるじゃない。それで充分でしょ」

実はこっさりだけど、少しだけだけど、ライバル意識を持っている。

この夏休みにやたらめったら久保田さんの事務所に行きたがっていたから、ちよつとムカムカしてたっていうのはここだけの話だ。そんなところで意識持つてるなんてあたしらしくない。

出会い方は、あたし的にも最悪だった。あれは久保田さんが一方的に悪い。

本当は尊敬できるところもあるけど、なぜか隠したいと思わせるものが久保田さんにはある。

なぜだろう……。
千石さんじゃないけど、確かに久保田さんはある意味不思議な人だった。

* * *

計画の打ち合わせが終わって、それを実行に移すまでのときだった。

ちょうど時計の針は午後七時を告げていた。
夕食をどうしようかという話になっていた。麻衣ちゃんには、あたしが「来なくていい」という命令を出したということにしてある。亜衣ちゃんと離れない方が良さと思ったし、近くにおいて出来れば敵の情報がなにか得られるかもしれないと思ったんだ。

あたしたちはダイニングに雁首そろえながらも、一応話し合いというものをする。

「おまえ何が作れるんだよ」

「久保田さんは？」

「オレは何でも適当にできる。なにせ一人暮らしが長いからな」

「適当ねえ。一人暮らしつつつてもお弁当とかでしょ」

「馬鹿。栄養バランスはバッチリ考えてる」

「なに威張ってんのよ。じゃあキッシュつくってよ」

「あ？何語だ？それは」

期待したあたしが馬鹿だったわ。ほんとに……。

一日ぐらいならあたしだって贅沢は言わない。だけど久保田さんに任せて、本当に大丈夫なのかも果てしなく不安だ。

「麵ブームなんだろ。ラーメンつくってやるよ」

「インスタントは嫌よ」

「馬鹿か、おまえ。最近のインスタントなめんなよ」

「じゃあ、一応言っておくわ。ここにインスタントものは一つとしてないわよ」

「はあ？まじかよ？困ったときにはインスタントって相場は決まってるんだぞ」

「どの相場なのかしら。」

「別に知りたくもないけれど。」

「ちなみにおまえ、インスタントものって食ったことあるのか？」

「興味本位で一度だけね。悠汰が作ってくれたのよ」

「ちっお嬢が」

「けつと久保田さんは吐き捨てる。」

「大人の男の癖みって嫌な感じね、まったく。」

「では私が……」

「ああ、おまえはいい。座ってる」

「ここで千石さんの出番はないようだ。あのフライパンの残骸を久保田さんも目にはしている。」

「これじゃ埒が明かないって状況になったときだった。」

「部屋の扉がノックされた。」

「さつと久保田さんも千石さんも立ち上がって警戒する。あたしも何者かすごく気になって扉の方を凝視した。」

「すると、誰も応じてないのにその扉が開く。」

「あれ？どうしたんだい？玲華。ずいぶん清々しくなったね、ここへの出入り口」

「……綾小路だった。」

「制服姿で、ものすごく懐かしく感じる。」

「はああああとあたしは息を吐き出した。大の男二人も、なんともいえない顔つきをした。」

「紛らわしいと思ったらない。綾小路先輩は、なぜか毎回突然の登場をする。」

「なにしてんの？あんた」

「ダイニングから結局立つこともなく、呆れながら訊いた。」

「ずつと毅さんに止められていたのに、今日はすんなり入れてくれたんだ。聞いたよ、神崎のこと。あいつはやっぱり馬鹿なままだった。」

たな」

白い歯を見せながら綾小路は近寄ってきた。

まあ、一応この人もちよいちよい協力をしてくれてはいたんだし。この人間は顔見知りも多くて、あたし以外にも情報源はあるだろうし。

(だから怒ってはだめよ)

何とか自分を抑える。あきらかに悠汰を馬鹿にしてる感じが伝わってきたけれど。

「あんた、馬鹿ねえ。このタイミングで来るなんて……」

「れ、玲華こそ、そのタイミングで馬鹿と言わないでもらえるかな……。あいつと同類みたいに聞こえるから」

「心配しなくても質は全然違うわよ」

どちらがどうか説明してないのに、なぜか綾小路は満足そうだ。まあいいか……。

「おい、こいつにも協力してもらおうのか？」

久保田さんがつまらなさそうに提案してくる。

協力者が増えると思えば助かるけれど、命の危険が脅かされる人が増えるのは問題だ。

人が増えるとそれだけ穴もできる。

「なんだい？玲華のためになることならなんでも言ってくれ」

そのために来たんだから、と綾小路先輩は続けた。

試しにあたしは言ってみる。

「じゃあ悠汰を助けて」

「……………」

あからさまにイヤそうな顔になった。こいつ……。

「他にできることはあるかな？」

「かな、じゃないわよ。それが最大級のやるべきことなのに、そこで協力できないなら用はないわ！さっさと帰ってくれる？」

「それがそうもいかないんだよ、玲華」

かなり真面目な顔で綾小路が言った。

「なにがよ？」

「ここに入るときの条件でね。一度入ったら事が終わるまで出すことは出来ないがそれでもいいか？つてさ。もちろん僕は二つ返事でオーケーと言ったよ」

「バカ……。なにがオーケーよ、バカ。」

あたしは思わず久保田さんと視線を合わす。あちらも頭が痛そうな顔でいた。

「しょうがねえな。こいつも一蓮托生か」

「はあ……」

まあ、なにか役に立つかもしれないしね。一応出来る男ではあるし。

ふと、あたしはある考えにたどり着く。

「ところでえ、綾小路先輩？」

「なんだい？玲華」

「あなた、料理はできて？」

ぶりっこをして満面の笑みで聞いてみた。

「ああ。そんなこと……。もちろん出来ないさ。僕には必要ない技術だからね」

ふつと前髪をかき揚げながら、格好つけている。

「やっぱりね……。万が一にでも期待したあたしがバカだったわ。」

「仕方ないわね。あたしが作るわ」

「食べるもん。頼む」

「食べられるわよ！作ったことあるわよ！キツシユは！」

「まったくもう！作る気が失せるようなこと言わないでほしいわ。」

お昼は結局、残った時間で綺麗に片付けたあと、麻衣ちゃんが手際よく作ってくれたから、食事の心配をする必要はなかったのだ。

「なにか手伝えることはありますか？」

「気を利かせて尋ねてくれたのは、千石さんだけだった。」

「ないわ。こっちはいいから綾小路先輩に今までのこと話してあげて」

あたしがテーブルの方を振り向きつつ言つと、すでに難しい顔をしながら久保田さんと話し合いが行われていた。
やるのが早い。

こういうときの男性は羨ましさを感じる。女性のように感情で会話をしないから、やるべきことがあれば建設的な行動に出る。

千石さんも混ざり着々と今後のことを話しているようだったけど、あたしには会話を聞いている余裕はなかった。

秀和に教わったことを思い出しながら、あたしはそれを忠実に再現していく。

キツシユだけでは足りないので、悩みに悩んだ拳句、祥子さんから一度教わったオムライスを作ることにした。これなら久保田さんの口にも合うだろう。

そして出来上がった頃には、すでに綾小路はすべてを把握していた。

(二時間もかかっちゃったから当然か)

無駄な動きはなかったと自負しているが、もっと素早く作れるようになりたいものだ。

「だったら僕も協力するよ。玲華は僕に護らせてもらえないか？」

「おまえの戦力をオレは知らない。だから組み込むにはどこまで出来るのか把握しておきたい」

「そうだな……。とりあえずあちらが銃を出してくるのなら、僕は弓で対戦できる。感謝するといい。今日はとうとう断りきれなくなつて、部活に久々にでていたんだ。そのまま来たら愛用の弓を持っている」

ちようどこんな話をしている最中だった。

確かに綾小路先輩は弓道部に入っていて、その腕は全国レベルだ。だけど矢を構えてる間に撃たれるんじゃないの？と思う。もし本気で銃撃戦になれば、だけど。

そのままの流れで食事会になった。

「ありがとう。玲華。すごく美味しいよ。まさか君が料理まで出来

るなんて知らなかったよ」

ものつすごく感激してくれた綾小路先輩の言葉で、雰囲気ガラツと変わった。

「ありがとう。いっぱい食べてね。久保田さんはどう？」

「初めて食ったから比較ができません。あと出来れば量がもう少し欲しい」

(こーいーつー)

量があればそれでいいのかつ！これが美味しいかどうかは言えるんじゃないの！オムライスなら比較できるでしょ！

言いたいことをあえて抑える。絶対、意見を言うのが面倒くさかつただけなのだ。ここで言い合うのは時間の無駄だ。

「相変わらず失礼なやつだな、貴様」

「おまえもな」

綾小路と久保田さんは、計画の話以外はやっぱり気が合いそうではなかった。

(でも綾小路先輩が、ここまで年上の人にぶつかるのも珍しいことだわ)

ある意味、素直に。

久保田さんがそうさせてしまう人柄なのかもしれない。

ただ嫌いなタイプっていうことだけならば、綾小路先輩は非の打ち所がないくらい、隠して付き合うことをするだろう。そうやって大人たちと渡り歩くことが多いから、そういう術は身につけているはずだった。

(ずっとあたしの傍にいるから、焼きもち……とか……?)

まさか、そこまで馬鹿じゃないだろう。たぶん……。

「玲華様。キツシユの焼き加減もちょうどよく、卵の半熟さ加減もまさに完璧です。微塵のズレもありません」

「……ありがとう」

千石さんの評価は、どれも専門的な箇所だった。

三種三様とはこのことだ。全く面白いほど三人ともバラバラだ。

これで上手くいくのだろうか。
こっそりあたしは先が思いやられる気持ちになった。

* * *

「え？」

誰かに、呼ばれた感覚がした。

後ろを振り向いても、そこには誰もいない。

「どうかしたか？お嬢」

「なんでもないわ」

なんとなく胸騒ぎを感じたけれど、あたしはそれを呑み込む。

こんなところで止まってなんかいられない。

だって作戦はもう始まってるんだ。

あたしはいつものワンピースやスカート姿をやめて、Tシャツに
ジャケットを羽織り、デニムのパンツを穿^はいていた。動きやすくす
るためだ。

髪も後ろでひとつに束ねる。

「じゃあ、行くか」

あたしの準備が出来るのを待って、久保田さんが言った。

あたしは頷く。

久保田さんが先頭に立って前の状況を確認してくれた。人に見ら
れることがあれば、この作戦は止まる。

まずは稔叔父様と通ったあの道を目指した。

地下と直結こそしてないけれど、こちらを利用したほうが人目に
つかない。

だからかもしれない。その道に入ると少しホツとした。

「気を抜くなよ、お嬢。稔にバレたんだ。他にも知られていると考
えたほうが無難だ」

「抜いてないわよ！」

とことん信用してないわね。あたしの稔叔父様の評価を。

でも確かに稔叔父様が言わなくても、情報はどこから漏れるかわからない。

久保田さんと角度は違うけれど、あたしも気を引き締めなおした。結局誰にも会わずに、食道の隣にある厨房のすぐ近くの壁に出る。そのまま厨房に入ると、そこには誰もいなかった。

その中から天井裏に行く。そこから地下牢がある覚に移るのだ。打ち合わせ済みだから、とくに久保田さんとの会話は不要だった。でも。

「想像したより汚いわね」

「厨房の煙全部吸ってるからな。これでもちゃんと掃除してあつて綺麗なほうだ」

「げっ」

これ以上汚いところを知っているということか。つくづく使用人の人には感謝だ。

「嫌なら帰れ」

「行くわよ」

小声でもしっかりとあたしは答える。あたしが行かなくてどうするのだろう。

いくつもあるコンロの上に飛び乗り、ガタガタと久保田さんは天井に取り付けられた蓋を開けた。

「こういうところに入りにしてんのに、その割に服は綺麗なままよね」

今日は久保田さんも動きやすいデニム姿だけれど、いつもはスーツだった。

てゆーか、あたしがいつぱいスーツの替えを用意してあげてたのに、毎日同じスーツだった……。

見かねてあたしができることを指摘すると、インナーのシャツとか下着は替えてるからいいだろ？って偉そうに言われた……。

んなのは当たり前よ！って怒鳴ったんだけど……。

「ああ。上に行くときはさすがにジャケットは脱いでた。あとここ

を通るのは初めてだ」

「……なんですって？」

本当にこの人についていって大丈夫かしら？

あたしは一抹の不安を覚えた。

「大丈夫だ。ここから地下に行けるのは間違いない」

言ってる間にも蓋は開き、久保田さんは懸垂して上に登っていく。梯子はしもないのに器用なものだ。

感心していると、上から顔と腕が伸びてくる。

……間違いない。あたしもこうやって登らないといけないようだ。

「ちよつと！あたしが運動神経良かったことに感謝しなさいよ！」

「当たり前だ。それを見越しての作戦だ」

微塵にも悪びれず、久保田さんは言う。

もつとちゃんとこの部分を確認しておけば良かったわ。

久保田さんを信頼しすぎちゃいけない。それを改めて知った。

それでも今さら帰ることはあたしの頭にもなくて、仕方なく久保田さんの手を取る。

物凄い力で引っ張りあげられる。あたしも少しは懸垂しないとい

けないと覚悟してたのに、あっさりあたしは上にいた。

(あら……)

最初からちゃんとこの人、自分だけでもなんとか出来るっていう判断だったのだろうか。

少し見直しかけたけれど、そのなかを見ただけでそんなことは払拭された。

真つ暗で埃つぼくて何より狭い。これでは歩くことができない。

「ほら」

茫然としているあたしの頭に、ダサくて昔ながらのライトを躊躇うことなく乗せると、さつさと久保田さんは先に行く。匍匐ほひく前進で。

(ああ！もう！)

あたしは今までとは違う種類の覚悟を決める。

(うえーん。油つぼくって気持ち悪いよー)

こんな姿で悠汰に会わなくちゃいけないんだ。
なんだかそれが一番キツいものを感じる。

あたしは肘と膝だけで支え、腕と脛は決して下に着けないように
気をつけて進んだ。

しかしその状態でいけるのも途中までだった。いきなり細くなり、
あたしでも寝転がった状態ではないと通れない幅になったのだ。

「これで行き止まりだったらマジぶっ飛ばす」

「安心しろ。ここは地下の悪い空気も併せて外に出している構造だ。
どこに通じてるかも把握している」

つい怒りからボソボソ呟いたら、久保田さんに聞こえたようで、
あちらもボソボソ返してきた。

ちゃんと根拠があつてやってることぐらいは解る。しかし愚痴り
たくなる気持ちは止められない。

「言つとくが、ここ以外に道はないからな。好きでこんなところ選
んだと思うなよ」

そこまで言われては文句も出せなくなる。仕方がないので黙って
進んだ。

しばらく行くと久保田さんが止まった。見えないけれど前の方で
なにかしている。あたしには音だけが聞こえてきた。ガンガンと叩
いているようだ。

六回くらいで開いたようで、また久保田さんは前に行った。
どういう仕掛けなんだろうか。

あたしは通り掛かるときに、ちらりと見てみた。そしたら普通の
一枚の衝立ついたてで、ただ単に立て付けが悪かっただけみたいだ。それで
も黒いそれは一見行き止まりに見えて、先があるようにには思わせな
い。煙が通るように穴が小さく開いているだけだった。

そこを通り過ぎると久保田さんが言った。

「あつち側に別の道があるだろ？あそこを通つたときにここを発見
したんだ」

本当だ。同じ方向になるように遠くにも道が見えた。一瞬だけ隙

間があつて垣間見える程度だけだ。

「こんな空間だらけでこの家、耐震とか大丈夫かしら」

「そこはちゃんと考えてあるみたいだな。綿密に構成されてあるとしか思えないぐらい、肝要なところに柱がある」

「ならいいけど」

久保田さんは、建築のことも詳しいようだ。

不意に気づいたことがあった。少しずつだけど、下がっている。

下り坂みたいになっていた。

「もう油っぽくないだろ。厨房の煙は全部上に向かっていってんだよ」

「……………あ、本当だわ……………」

いつの間にか地につけてもベタベタしない。

「にしてもなんでこんなに変な造りなのよ。なによ、このカーブは下の方から強い風が吹いてくる。間違いなく作り物の風ね、これは。」

「ここも逃走に使うんだろ。敵の手に堕ちて、牢屋に捕らわれたときに脱出するために」

「どこのお城の話よ、それ。昔話を読みすぎだわ」

「同意見とは意外だな」

「いちいちうるさいわね」

一言が余計なのだ、いつも。

「ついたぞ、ここが地下の天井裏だ」

最後は一メートルくらいの段差になっていた。

もう距離が得られなかったのかしら。案外抜けてるわね。

でも脱出には充分だ。本当に久保田さんの言うとおりの狙いならそこからまた細い道になって、同じようにもう一段降りた。そこから更に進み久保田さんが止まった。

「ここだ。もう声を出すな」

ジェスチャーでそう言っていた。

でもそこには先ほどのような蓋はない。でも何か手作業をしてそ

つと久保田さんが開けたようだった。光が漏れる。

同じように続いていたのに、久保田さんの頭の中身はどうなっているのだろうか。すべてこの方向や部屋割りを把握している。

(さすが、と言うしかないわね)

この人間よりもたった一ヶ月足らずでここまで把握できるとは、迷いなく久保田さんは飛び降りた。

着地の音が小さい。

あたしが続こうと除き込んだら、そこは拷問部屋だった。

お祖父様が趣味で集めた道具が密集している。

(ほんと、悪趣味)

何回見ても嫌な気持ちができる。ここにいる頃はしょっちゅうお祖父様に進言していたのに、まったく聞き耳を持つてくれなかった。

あたしも飛び降りようとしたけど、久保田さんが手を伸ばしてきた。

どちらが意外だろう。

ちゃんとフォローはしてくれるのだから。喋らなければもっといい男だと思う、ほんと。

そう思いながらあたしはゆっくり降りた。フォローが上手くて衝撃を感じない。

だけどあたしが着地すると、さっさと自分は先へ行く。

(読めない)

いろんな人格を持つてると冗談めかして言っていたけれど、仕事になると本当にそういうところが見えてくる。だからいまも仕事モード最高潮つてところだろう。

考え込む時間もないので、あたしも続いた。だけど久保田さんが角のところまで止まっている。

「久保田さん？」

「しっ」

鋭く制止されて、でもその先を見せてくれた。

ひとつの牢の前に護衛役の人が立っている。一番手前の向かい側

おかげであそこに悠汰がいるんだってすぐにわかった。

確認すると久保田さんは少し中に戻る。そして小声で呟いた。

「まずいな。あんなところで立たれているとは」

麻衣ちゃんの情報では、地下に降りるところにしか警備していないと言っていたのに。

だからわざわざこちら側になるように、久保田さんも考えたんだらう。

でもこれでは近づけない。

あたしたちがここに来たことが完全にバレないようにすることが、これからの作戦にも生きてくるんだ。

(あと少しなのに)

悠汰はもう、目の前にいるのに。

「迷っている暇はないな」

少し考えたあと、久保田さんは決断したような顔つきをした。

「どうするの？」

「俺が戻って表で騒ぐ。ここまで聞こえるようにな。時間稼ぎしておくから、その際にお嬢は悠汰と話せ」

「そんな……」

「それしかない。いまあいつを倒すことは簡単だが、ここにオレたちがいいた証拠にもなってしまうから、それは避けたい」

「……捕まらないでよ、久保田さん」

ここで久保田さんまでいなくなったら、あたしはもう打つ手がなくなってしまう。

それだけじゃない。悠汰ならともかく、久保田さんはすぐにでも罰が与えられそうで、それも怖かった。

「当たり前だ。オレを誰だと思ってる」

久保田さんはいつも通りの力強い言葉を残して、素早く上に戻った。そして一度もこちらを見ないまま、もう行ってしまったようだ。

本当にスマートな対応で驚く。

どれだけの想いをして、その術を身につけたんだらう。

きつと生半可なものではないはずだ。

(だから悠汰も憧れるんだわ)

見抜いていたんだ、悠汰は。あたしよりも久保田さんといった時間が長いから。

(喋らなければね)

そこは間違いなくある。

あたしはそう納得すると、気持ちを切り替えて角に身を潜めた。それから、騒ぎが聞こえてくるまで本当に長く感じた。

実際には十数分だと思う。

ここまで喧騒が伝わってくる。男の人の怒鳴り声と、それから銃声も何発か聞こえた。

護衛役もただならぬものを感じたようで、予測どおり飛んで行く。心配する気持ちはあったけど、それよりも。

(悠汰！)

満を持してあたしも飛び出した。

(！)

だけ。

あたしはすぐに立ち尽くした。

悠汰はこちらに背を向けて、だけどころとそこにいた。居ただけれど。

その背中が。

(どうしたの?)

悠汰は耳を両手で塞いでいるようだった。

そして、とても小さく、心細そうに見える背中。震えていた。

「悠汰？」

あたしが声をかけると、ビクリとして。それからすぐぐゅっぐり振り向いた。

「あ……」

小さくもれる息。見開かれた目。

とにかく、尋常ではないくらい驚いてるみたいだった。

「どうしたの？顔が真っ青よ」

なにがあったの？そんなに辛い目に遭わされたの？

（あたしのせい？）

その考えに至って、あたしはいてもたってもいられなくなった。

急いで悠汰の前まで駆け寄る。

すると悠汰もギリギリまで近くにきた。

そして手を伸ばして、柵ごとあたしを抱き締めた。とても、力強く。

「待って。あたし汚れてる……」

「いいっ！そんなんっ……全然いい！」

どうしてあたしがここにいるのかとか、どうやって来たのかとか、そういうことが悠汰から吹っ飛んでいるみたいだった。

柵が鎖骨に当たって痛い。

だけど離れちゃいけないと本能で思う。だから少しだけ、すっぽりと悠汰に収まるようにずれた。そのまま手を中にいれて、悠汰の背中に回す。

そしてもう一度呼びかけた。

「悠汰？」

「比路が……ここに来た。……さっき」

「なんですって？」

毅叔父様の馬鹿。動いてくれるっていったのに、阻止しきれなかったようだ。

「それから京香も……。京香は……。辛いのに、辛いままで……。比路は……。なんとかかしたくて、俺。余計なこと、言って……。そのせいで玲華が死ぬって……。思って……。そしたら……」

悠汰の喋り方は要領を得なかった。

いや、それよりも。

悠汰の呼吸が乱れている。時々すごく苦しそうな息の吸い方をする。

(過呼吸?)

あたしが悠汰の過呼吸を実際に見たのは二度だ。学校と病院で。どちらもすごく苦しそうで、何度も何度も息を吸っていた。そしてどちらも、そのまま気を失うほどひどいものだった。

でも今はそこまで壮絶なものは感じない。ちゃんと吐くこともしている。

(でもきつと、これも過呼吸だわ)

小発作なのか、もう落ち着きかけているときなのか、それはあたしにはわからない。

……最近、起きていなかったのに。

あくまでもあたしが知る限りは、だけど。

「落ち着いて。もう大丈夫だから」

よくわからないけど、あたしはそう言った。

たぶん、あたしのことでごうなってると思ったから。

「あたしは死なないわ。悠汰をおいて死なないからなるべくたくさん悠汰の背中をさする。」

すると悠汰は、小さく消え入りそうな声で、うんって呟いた。

第三章・・・7

計画はまた失敗だったんだろうか。

俺を最初に捕まえた男が言った言葉で、菊池さんは無事に逃げたんだとわかった。

聞いたときから完璧だと思ってしていた計画。けれど俺が失敗した。

スムーズに玲華の部屋まで行けたけれど、いったいどこでバレたんだろう。どこが失敗だったんだろう。

俺はいま、牢屋に見立てた部屋にいる。

途中から目隠しをされたから、どういう経路で来たのかは不明だ。拓真に狭所恐怖症もなにもないって言ったけど、狭いのは本当に大丈夫みたいだ。

一応簡易だけドベッドがある。トイレも簡易だけど、ちゃんと隔離されている。

だけど、とにかくここは寒い。それだけ何とかしてもらえればと思う。

そんな中で、これまでのことを振り返っていた。時間だけはあるから、どこが失敗だったのかちゃんと考えようと思った。

そう、比紹に庭で会ったんだ。予定外だったのはそれだけだ。

ただ、比紹はすごく重要なことを話してくれた。ただ、比紹はすごく重要なことを話してくれた。

玲華と比紹の秘密。

「もしかして玲華から聞いてなかった？玲華に義理の兄がいること彼の方が驚いていた。」

俺が玲華から聞いている家のことって、本当にあの一回だけで、後は玲華の家に行って知ったことだけだった。玲華が一人っ子だとは、そう言えば誰も言っていないような……。

「玲華は意外と何もきみに話してないんだね。そう、ぼくは虐げられてきたから玲華のことは嫉妬していたよ。すごく酷いことを子ども頃にたくさん言われたんだ。本人は無意識だったと思うよ。だから憶えてもいないかもれないね。でも敗者のぼくには忘れられないんだ」

とても強い怨念みたいなのを比路から感じた。

これまでの比路からは想像がつかないほどの感情。

俺はその話を聞いてから、また苛立ちだしていた。平常心を保つのに苦労した。

比路が嘘をついてるようには思えない。でも玲華が酷い人かどうかと聞かれれば、それはまた別の話で。だからそのことで腹が立っていたわけではないんだ。

ただ、何も言ってくれないから。こんなに嫌悪的な感情を持っている人が京香以外にもいたっていうのに、俺はなにも知らないで自分のことばかりで。自分に苛々していたのかもかもしれない。それと、そんなに俺は頼りがいがないのか、とも思った。

(そりゃあ……………ないよな……………)

いまならそう思う。

理事長が俺に言ってくれたこと。それを俺は全く解ってなかった。理解できてなかったんだ。

ここは想像してたより壮絶で、凄かった。

いきなり銃とか出てくるし、押さえつけられた腕も、悲鳴を上げてしまいそうなほど痛かった。押さえつけると同時に密かに捻られていたのだ。

でも声だけは出さないように必死で耐えた。それだけは意地だった。

ここに連れて行くように命じた人。毅叔父様って玲華は呼んでいたから、理事長の兄弟なんだろうと思う。あの人がここから去るときに言った。

「おまえに未来はない。おまえを殺すことは容易たやすいが、そう簡単に

はしない。おまえの未来を奪うことは殺すことだけじゃないんだ。おまえの存在というものをどこまで守れるかは玲華次第となる」
あっさりと、なんの弊害もなくそんな恐いことを平気で言う人だった。

理事長と似ても似つかない。顔のつくりは少し似てたけど、発しているものが対極だった。

俺の存在って表現がどういふものかは解らなかつたけど、綾小路が止めてきた意味が、初めて解つたんだ。玲華に迷惑をかけるってこういうことかって、身を持って理解した。

(でも……)

その玲華も、殺すとか言うから、恐くなった。それだけは言わせたらいけないと思つた。

俺なんかのために自分を見失うな。縛られないで欲しいと切実に願う。

結局なにも玲華から聞けていない。綾小路との噂のことも、こんなことしている目的も。

いきなり拒絶するし……。

(わからない……)

玲華がなにを考えているのかが、わからない。

拒絶をするつもりなら、最初からしてほしかった。そういう気分
に完全になってしまつてからだと、倍にダメージがくる。

(殴るし……)

その後の行動も理解不能だ。怒るポイントが読めなかつた。
だけ。

……大事な人だと、言つてくれた。

それだけで充分すぎるくらい、満足を感じている俺がいた。

玲華は俺に対して変化がなかつた。それがわかつただけで、俺は
もういい。

いま冷静になると、そういう拒絶のされ方も玲華らしいといえる。
これ以上玲華の足を引っ張らないようにしたい。

(どうすれば、いいんだろう)

こんなところで、俺にできることはなんだろう。少しでも玲華のやりたいことを助けてやれることができれば、本当にもう、心残りはないのに。

(とりあえず脱走だよな……)

ここにいることが最も玲華のためにならないことはわかった。

しかし造りも完璧だし壊すものもない。

(もっと痩せたらこの柵、出られねえかな……)

腕が一本通るくらいだ。骨がある段階でいくら痩せても無理だろうに、俺はそんなイメージを膨らませていた。

* * *

丸一日地下室（こ）にしていると、さすがにしんどくなってきた。寒さが身に染みてくるし、さらにやることがない。

ただジツとしていることが、こんなに辛いとは思わなかった。

謹慎処分を受けて、家でジツとしていたことがあった。あの時も辛かったけど、まだ寝ていられたし、正直それどころじゃなくて“退屈さ”というものとは無縁だった。

もう夜も更けたわけだから寝ればいいんだろうけど。ただここは布団も薄いから、被ったところでそこまで暖かにならない。

というわけで、解決策といえば……。

腕立て伏せと腹筋くらいだ。

体を動かせば暖かくなるし一石二鳥。疲れれば睡魔も来るだろうし……。

実は体力づくりは普段からしていた。あの事件が終わってから。

最近はこんな状態で何もする気もおきなくて、サボりまくっていたのだけだ。

(別に……マッチョに……なりたいわけじゃ……ないけどっ)

腹筋で起き上がる瞬間は思考すら途切れる。

筋肉つけたほうがいいわよって、以前玲華に言われた。彼女はもしかしてマツチヨが好きなんだろうか。

そこは聞くのを忘れていた。

今度聞いてみよう。生きて帰れたら。

(うわっ、いますんげえ弱気なこと思った)

生きて帰られたらとかシャレにならない。こんな状態では余計に。けどこの空間は、闘争心とか土気とが剥ぎ取られそうな気持ちになる。

ここは一番左端の牢屋みたいだ。ギリギリまで顔を出して周囲を見渡してみても、わかったことだ。他の人は見当たらない。

さらにこの連なった先、左側にはまだ奥があった。

あれは拷問の道具、ではないだろうか。はじめて見たけど。

石の壁に手枷がついてる。天井からはたぶんあれも枷にするためのロープだろう。それから鉄の架台とか棘だらけの椅子とかある。

いつの時代か不明だけどかなり年季の入ったものばかりだ。

そしてひとつだけ名前がわかるものがあった。あれはギロチンだ。

……俺は別に秘密ごともないし、嘘もついてないから大丈夫だよな、とつい自問自答してしまった。

拷問は何かを白状させるためにするもんだし……。

しかしあんなの見せられて、誰が不安にならず平常心を保てるんだろうか。道具を見ただけで身震いする。

落ちそうになる心を阻止するためにも、俺はただ体を動かしたかったのかもしれない。

頭を外側に向けて腹筋していると、何度目かに視界に人影が現れた。

「あ……」

ちょうど起き上がりかけたそのときで、不意の出来事に、その一回はそのまま重力に負けてしまっただけで起き上がりきれなかった。

あーあ……と少しへこみながらも、寝転びながらその人を見る。

京香だった。

何も言わずに俯いている。だけど俺の角度からはその表情が見えてしまった。

泣き腫らした眼と、変色した頬。

たぶんあれは殴られた痕だ、拳で。一発じゃない。

なぜかそういう痕にはよく遭遇してしまうから、すぐに分かった。

あ、と呟いてから数秒たって京香がこちらに近づいてきた。

やっぱり俺に用事があるんだよな、と思って俺も起き上がる。

「そういえば、京香はここに住んでるんだったよな」

なんとなく気まずい雰囲気、俺から声をかけた。いままで見か

けなかったけれど、拓真がそう言っていた。

京香は鉄格子の前に座り込んで、俯いたまま言う。

「謝ろうと、思って……。いままでひどいことしたから。騙すよう

なこといっぱいしたから」

「そのためだけにこんなところへ？」

「……うん。話したいだけって言ったら通してくれた。ボディチェ

ックされちゃったけど」

会話してるのに、京香の目は俺を見てなかった。ずっと空虚に見

開かれて下を向いている。

「ごめんね悠汰くん。これまでのことごめんなさい」

「殴られたのか？」

誰かに。

誰に？

それはわからないけど、様子がおかしいのはそのせいかな。

俺の言葉に京香がピクリと反応した。

「わたし、ヒロのことが好きだったの。でも悠汰くんの方がいい。

ヒロが、わからなくなってきた」

そう言うつと泣きそうな顔をした。

泣きすぎて、もう、涙は枯れてしまったのかもしれない。顔だけ

が歪んでいて、それが見ていてよりいたたまれなくなった。

「なにか、あった？」

「……わたしにもずっと秘密にしていたんだ。ヒロの出生の事実。今日、聞いた。わたしに教えるとわたしが誰かに喋っちゃうと思って内緒にしてたんだって。ひどいよねえ。全然信頼されてなかったんだ」

「京香……」

「だからヒロは初めからこういう形にもっていきたかっただけなんだ。玲華が最も窮地に陥るように。わたしもそれを解ってて……。ううん。むしろ同調して手を貸していた。嫌いなところは同じだって知っていたから」

「そうか」

二人の共通したところだから。一緒になるのも自然だったんだろう。

比紹が利用してたなんて全く気づかなかったけれど、あの話を聞いたいまならすんなり納得できた。

「怒らないの？わたし、利用するために悠汰くんに近づいたんだよ」「俺には怒る権利がない。あの写真は俺にも隙があったから」

あのまま世羅が来なかったら、そのまましていたのかもしれない。だけどきつと何も感じなかった。

それで京香だけ悪いつてことにはならないと思った。それだけ自分が中途半端で無神経だっただけだ。俺がしっかりしていれば済む問題だったのだから。

他の事だつてそうだ。彼女は最初から利用したいと意思表示していたから、そこは怒る理由にはならない。

ただ、比紹も利用していただけてというのが悲しかった。

「わたし、ヒロから聞いて知ってるんだ。悠汰くんちのこと。親に虐待されてたつて、あとお兄さんのことも」

「え？」

いきなり変わった話よりも、なんで比路が知ってるんだろつて、そのことが不思議でならなかった。

兄貴のことなら少しだけニュースになったみたいだから、ばれて

いてもおかしくない。しかし両親のことまでは公になってないはずなのに。

そう、両親が俺に仕出かしたことは、本人たちが必死に隠したはずだ。

「悠汰くんはそれで、誰かを恨んだりしなかった？憎んだりしなかった？」

京香の問いは虚につかれた。かなり深いものに思えてすごく考えた。

恨むってどういうことを言うんだろう。

憎しみは、思い出せない。

「ム力つく奴とか許せない奴とか憤りを感じた奴とかは、当て嵌まらないんだよな」

そういう奴らはいくらでもいるんだけど。

逆にすぐ思ってしまうのだ。止めようとしても止められないくらい。

「すぐに出てこないってことはいないんだと思う。……家族のことも、もう許しているんだね」

ふつと京香は切なげに笑う。

「わからない。そんな単純には思えねえよ、さすがに……。でも、憎んでても仕方ないとは、思った。俺が捨てきれないから。だって俺から逃げてても仕方ないって」

「やっぱり強いね」

「強くないんだ。多分いまは忘れてるだけで、恨んだ奴はいると思う」

「普通は忘れられないよ……。わたし悠汰くんは他人に対して無関心な人だと思ってた。学校の噂でも型破りな人だとか言われてるんだよ。それにわたしの家の事情も知らなかったでしょう？……でも話しているうちにわかった。他人に無関心ってことはある意味強さだよ。気にしないのは赦ゆるしているから。赦すということは、誰のことも憎まないということなんだって」

そんなことはない。ただ無神経なだけなんだ。

人間関係をつまく構築できないで、深く入っていけない臆病者だ。「わたしは全部玲華のせいにした。親が離れたのも全部、玲華がいるせいだつて」

「玲華は……」

「玲華がなにも悪くないことなんてわかってる！ただの僻みだつてことも！だけどヒロだつてそう。会話してても、いまはすべて復讐の方へ向かうんだ。その恨みは一時も離れることはないんだから、わたしよりも深いよ。わたしが好きな人みんなそうなるんだ！玲華を憎むには充分だ！」

やっぱり。

前にうらやましくもないなんて言つてたけど、それは嘘だつた。

「嫉妬と憎しみも同じじゃねえだろ。勘違いすんなよ。すり返るな。ちゃんとおまえの好きな奴と向き合えよ。そこに第三者をもつてくるからややこしくなるんだろ？」

比路や両親よりも玲華のほうに目がいつているのは、京香も同じではないだろうか。

憎むことでバランスを取っているような感じがした。

「珍しく、随分大口を叩いてるね、悠汰くん」

そのとき、比路の声がした。

俺からはまだ見えない位置から。

だけど京香がそちらに首を曲げて、それからその横顔が凍りつく瞬間を見た。

京香は恐怖を感じている。比路に対して。

そこが痛烈にわかつてしまった。

「どうして、ここにいるの？」

掠れた声で京香は訊く。

「ちよつと目を離れた隙にいらなくなっていたからね。君こそ、どうしてここにいるの？京香」

ゆっくり歩いてきた比路が、ようやく俺の視界に入ってきた。

いつもの細い目が笑っていない。それだけですごく冷たい眼に見える。

その眼が俺を捉えると、彼は笑みをつくった。

「やあ、悠汰くん。なかなか面白い光景だね。記念写真でも取る？」
そう言うと、カーキ色のジャケットのポケットから携帯を出し、俺に向けて構えた。

「やめてよ、ヒーロー！」

止めたのは京香のほうが早かった。立ったままの比路の足元に縋りついている。そのままつたって立ち上がるうとしたようだった。

そこへ躊躇いもなく比路の脚が上がる。

京香は悲鳴を上げないで、そのまま倒れた。

「比路！」

駄目だ。彼女はなにか傷ついていたのに。そんな扱いをしたら駄目だと思った。

「ちよつと邪魔だから退いててね」

それなのに比路の口調は変わらない。気づいていないのだろうか。京香の状態に。

さきほどまで京香がいたところに、比路は同じようにしゃがみこんで、携帯を持ってない方の手で別のものを取り出した。

「これね、催涙スプレー。こんなんでもやられちゃうなんて、護衛として失格だよ。おかげでぼくはきみに会いに来れたんだけどね。

ひどいんだ、毅さん。ぼくに言ったんだ。悠汰くんは最大の取引の材料だからぼくには手出しをさせないって。手出ししたらぼくの命もないんだって。だから護衛にもぼくのこと通すなって言っただけだよね」

「玲華を助けたいって言ったのは、嘘だったんだな！」

「違うよ。ぼくは助けられたよ。きみと玲華を」

勢い付いた俺の気持ち揺らいだ。

比路はいつもの調子だった。

「みんな誤解してるだけなんだ。だってなんだかんだいってもぼく

の義理の妹になるんだよ。情がわかないはずないじゃない？」

「え？でも京香は……」

「京香は嘘つきだよ。ぼくのせいにして自分の罪を半減させたいだけなんだ。もちろん嘘ついてる自覚はないだろうね。思い込みで捻じ曲げて伝えてしまうのって、女性特有のものだよ。女性ってね、嘘を思い込むことによって真実ほんとうに変えてしまう人種なんだ」

比紹の言い方があまりに説得力があつて、俺は頷きそうになつてしまった。

(なんで……)

どうして比紹はこんなに関心をつくることが出るんだろう。

「ねえ。悠汰くんはこのままここにいていいの？」

「いや……それは……」

「いいはずないよね。このままじゃあ玲華が自由に動けないよ」

「それは解る。俺も」

殺さんが言った言葉が、俺の中を駆け巡る。

俺の命が玲華次第って。つまり俺を盾に署名させることなんだって、それぐらいは解るから。

「でもぼくは鍵を持ってないんだ。ごめんね、きみをここから出せない。だつたらひとつしか手はないよね」

「手が、ある？」

ひとつでも手があるなら、それは希望となる。

なにもないこの中で、それだけは考えていたのだ。玲華の負担にならないこと。

比紹は鉄格子を握り締めながら、近寄ってきて囁くように言った。

「それはね、きみが死ぬことだよ」

「え？」

「きみが死ねば玲華は脅されることがないんだ」
俺の胸にさらりと降りてきた。

そう言われれば、そうだと。

納得してしまった。

(俺がいなくなれば……玲華は、自由になる)

「世羅ちゃんとか亨くんとか使って、きみをいろいろ気遣っていたよね。あれもね、玲華には大変なことだったんだ。そういうことをしなければ、もっと玲華もこの家のことに集中できてたよね。そうすればさ、玲華に降りかかった様々な災難も起きなかったかもしれない。だって玲華は本来完璧な女性だからさ、抜かりなくできてたと思うんだ」

「俺の、せい？」

「そうだよ。幸祐くんに襲われたのも、実際の期限よりずっと拘束されてしまうことになったのも、結局は玲華が防衛の方にしか力を入れられなかったからなんだ。きみに目を向ける分をさ、攻撃にまわしていたら、今頃彼女の思うとおりになって彼女の望みが叶っていたよ」

俺は頭が混乱しだした。

玲華が襲われたのが、俺のせい……。

それだけがはつきりと頭の中に残る。

「騙されないで！ヒロは悠汰くんを殺したいだけなんだよ！」

鋭く切り込む叫び声。

見ると、京香がその身を起こして泣きながら怒鳴っていた。

「最初は悠汰くんがこの件で傷つけば傷つくほど、玲華に対しての攻撃になるって言った！でもいまは玲華から悠汰くんを失くすことが最良の策だって……大人たちが署名に躍起やっきになっているうちに、あっさりその重要人物を消し去ることが目的なんだよ。玲華だけじゃない。この家人間すべてに復讐ができるから……」

言葉の途中で、比紹が京香を殴った。

俺の中のなにかが壊れた。

おそらくそれは比紹のイメージだ。

こういう、人だったんだ。

知らなかった。気づけなかった、俺は。

「黙っててくれる？」

まったく心が痛んでないみたいだ。こういうことを平気でできる人だったんだ。

京香は半狂乱になってなおも叫ぶ。

「わたしに彼を殺せって言ったじゃない！」

「うるさいよ。結局殺すことを断っておいてしゃしゃり出てこないで」

比路が俺を……？

すぐにはその言葉の意味がつかめなかった。

(はつきり殺すと言った)

それも穏やかな声で。いつもどおりの声で、本人の口から。

「なんで、比路。京香は関係ないだろ。なんでそんなこと……」

「関係ない？ 違うよ。京香もこここの人間だ。一応復讐のメンバーには入っているんだ。ただ利用できているうちは利用しておこうと思っただけ」

打って変わって、比路の言うことが変化した。

これが彼の本性。

「俺も利用されてただけかよ」

自虐めいた独白をした。さっき聞いたばかりなのに、目にするまではまだ信じられなくて。

「京香に同情は必要ないよ。本当に女ってバカだね。きみを色仕掛けで落とすっていう作戦にも失敗しちゃって、おかげでぼくが出ていなくなっちゃなくなるし。殺すかぼくの性欲の捌け口になるか選べって言ったら後者をとるんだよ。それなのに最後に裏切るって無意味なことしてるよね」

京香が思いきり両耳を掌で塞ぎ、踞った。

ではやはり最初に殴ったのも比路か。きっとこの変化もすべて比路が原因。

「もうやめろよ、比路」

「きみは面白かったよ。一緒にいて。全然ぼくのまわりにいないタイプだったからかな。きみほどガードの弱い人は初めてだ。ああ、

だから玲華も好きになったんだ？物珍しい者って惹きつけられるよね。最初はさ」

「おまえ……」

「馬鹿にしてないから怒らないでね。きみ、馬鹿にされるのも嫌いでしょ？」

「どこから俺の情報なんて手に入れたんだよ。そういうことも、親のこともそうだ」

いまから思い返せば、比路は俺の弱い部分を如実に突いてきた。すべて俺という人間を知っていて、言葉を選んでいたような気さえしてくる。

「玲華に聞いたんだよ。玲華は嬉しそうにきみのことを言いふらしていたからね」

「それは、嘘だろ」

もうわかる。比路が言う玲華像は、まったく俺のそれと一致しない。

そこだけは元々信じられなかったんだから、確信に変わったと言った方が正しい。

俺が比路の目を見据えると、彼は鉄格子を握ったまま上を見上げた。

「あーあ。本当につまんないな。完全に取り戻しちゃったね、きみ。ぼくに操られてるときの方が面白かったのに」

「比路、答えるよ」

「べつつにい？身元を調べることぐらいわけないよ。きみの好きな探偵だつて得意じゃない。いまごろ驚くことじゃないよね」

操っていたのは玲華ではなく比路だった。

なんだ、そういうことか。

それですべてがはつきりした。やっぱり、まだ玲華を信じられる。

久保田さんは仕事でしてるんだ。人を陥れるためには使わない。

そう思える。久保田さんのことも信じられる。

(なんだ、大丈夫じゃないか)

だったらもう、なにも心配することなんてない。

「比路が言ってきたこと。どこまでが本当でどこからが嘘なんだ？」

「好きに解釈しなよ。教えたって、それもまた嘘かもしれないよ」

「比紹……」

「純粹すぎるのも哀れだね。この家に関わるならとくに、そんなもの付け込まれるだけだよ」

「付け込んだ張本人のくせに……」

俺はもう利用されてやらない。玲華にこれ以上の足枷になるつもりはなかった。

「このままでは終わらせないよ。殺さんの邪魔にも屈しない。あの人、子どもは寝ているだって。よく言うよね。ここまでお膳立てしてあげたのは誰だと思ってるんだろう。利用しているのはぼくの方だ。勘違いされたら困る。玲華に署名させてすべてを終わりにさせたりしない」

独り言のように彼は入り込んでいった。不気味な笑みで、自分自身確認するように呟く。

俺は眉をひそめた。あまりに異様なその姿に。

比紹は目を細めてこちらを見ると、自分の膝を肘置きにして頼杖をついた。

「やっぱりきみに生きててもらおうと困るな。もっと略奪戦みたいになって、きみがボロボロになるのを想像してたのに。結局あの人一人勝ちみたいになってるからさ。玲華もちよつと持ちこたえてしまってるよね。こんなんじゃあ全然足りないのに」

「足りないってなんだよ！」

「きみも馬鹿で結局受け入れちゃったしね。ああ、そうか。悠汰くんにとっては、京香よりも他の大人たちよりも、ぼくに殺された方が苦しいよね。騙された男にさらに殺られるんじゃあさ。で、悠汰くんが苦しいことはきつと玲華も苦しいよね」

「そんなに、玲華が邪魔か？」

「きみにも言ったよね。彼女の存在は罪だと。あんな残酷な存在は

いないよ」

それは片側でしか玲華のことを見れてないからだろう？

余計な感情が邪魔をして、本来の玲華を認めることができないんだ。それではなにも生まれないのに。

そのとき、京香が目の端で動いた。

起き上がって、それでも何も発せずただ座り込んでいた。もう何も口を挟みたくないのかもしれない。

あんなふうには、氣力をなくして、ただぼんやりと見ているだけになっってしまう状態は知っていた。

よく、知っている。俺自身もそうなったことがあるから。

「比路。それでも俺は……」

彼の目的はすべてわかった。

玲華が比路を遠ざけようとした理由も、ようやく理解できた気がした。それでも。

「俺は比路を嫌いになれない。憎めないんだ、どうしても。ただこの家を眺めるしかなかった俺を、ここまで引つ張ってきてくれたのはやっぱり比路だから。このままこの家に来れなくてすべて終わっていたら。それで後からすべてを知ったら、俺はずっと後悔してたかもしれない。だから、たとえ利用されたんだとしても、俺は感謝してる。比路に」

最低な男なんだろうな、俺は。

こんなに玲華に迷惑かけてるって自覚してんのに、これが本心なんだから。

比路の右手が柵を越えたと思ったら、俺の襟元は鷲掴みにされていた。

状況を把握する前に、すごいスピードで引き寄せられて、俺は左側から鉄格子に容赦なくぶつかった。

すごく力強い。有無を言わせない感じがあった。

「なにそれ？自分だけキレイなままでいよつっていうの？この家に来てそんなことは有り得ないよ。ここは腐ってる。関わった人間も

みんな腐っていくんだ。だからぼくは根元から壊さないといけない
と思ってる。きみもだよ。きみも腐る。だから殺さなくちゃいけ
ない」

耳元にかかる低い声が、薄気味悪く響いた。

「おまえの、目的って……」

すべてを壊すこと？それだけのためにこれまで生きていた。

なんて長い、深い想い。

「先ほど、面白いことを言っていたね。嫉妬と憎しみは違う？笑っ
ちやった」

「なに？」

「嫉妬と憎しみは同じだよ、悠汰くん。嫉妬が深くなれば憎しみに
変わるんだ。同類だよ。愛と憎しみも似てると思わない？どちらも
その人のことをすごく深く想ってる」

いまさら、美山の言葉が浮かんだ。

あいつは奥が深い。俺らじゃ辿り着けないところまで墮ちて
いて……歪んでる。

本当にそうだと、今なら感じられる。

「そうだ。こんな会話がしたかったんじゃないんだ、ぼくは。あま
り長く時間をかけると問題も生じるしね」

比路は手に持っていた携帯をその場に置き、左手も柵の中に入れ
てきた。俺の髪を乱暴に掴み、そして右手で首を掴んできた。

本当に見た目にそぐわず力が強い。

俺は痛みに顔をゆがめた。

「前に言ったよね。玲華をレイプしようとした男、幸祐くんのこと
だ。彼はこの一階上の地下牢で殺されたんだ。こんなふうに首を絞
められてね。あれはぼくがやったんだって言ったなら、きみはどうす
る？」

「うそ、だろ……」

なんとか声が出せた。

これは虚言だと、本能が告げる。きつと、これまで同様、俺を最

も恐怖に陥れようとするために選んだ嘘。

「本当だよ。あのときは紐があっただけ、今はないからこうするしかないね。ぼくは人が殺せるんだ。だから覚悟してね」

徐々にきつくなる握力。

だけど。

俺は抵抗しなかった。

虚言だと告げたのは本能であって、根拠はない。でもその本能が働くのにはちゃんと理由があつて。

「無理だ、比路。……おまえには殺せない」

「なに言ってるの？」

口調と違い厳しくなる声音。

俺は首を動かして、なんとか比路の目を見た。

「俺は本気で……殺意を持って、絞められたことがある。兄貴に。」

……だから知ってる。こんな絞めかたじゃ……人は、死なない」

少しだけ咽の上の方を締めていたんだ、比路は。まだどこかに迷いがある証拠だった。

あのときは本当に苦しくてすぐに喋れなくなった。そこから迷いがわかる。

目を睨りながら、僅かに比路の力が緩んだ。

きつとこのことは知られていないだと思つた。

当たり前だ。俺は誰にも言わなかった。刑事の池田さんにも久保田さんにさえ言つてない。知つているのは本人と玲華と世羅。

でも誰も言わないだろうと思えた。玲華は軽々しく話すタイプじゃないし、世羅だって兄貴の不利になることは言わない。兄貴自身も少しでも刑を減らしたかっただろうし、たぶん言つてない。

だから、知られるはずがないのだ。

俺は比紹に思つていたことをそのまま口にした。

「なあ。こんなこと、俺に言われたくないだろうけど……。理事長のしたことで、玲華とか京香とかこの家の人全部恨むって、それは違うんじゃないか？当時の理事長がどんな人だったかなんて知ら

ないけど、いまの理事長だったら絶対ちゃんと比路の話聞いてくれると思う」

「なにそれ？ぼくを諭さとそうっていうの？」

ピクリと比路の眉がひそめられる。

「そうじゃない。ただ俺は兄貴のフォローがあつて、玲華に勇気付けられて父親と話すことができたんだ。次元が違つて言われればそれまでだけど。そういうふうには、周りの影響で変わることはあるんだって知つて。だから比路だつて、ずっとそんな憎しみとか持つてんの、辛いだろ？」

俺は元に戻りたくない。

玲華の存在を知つてから、とくにそう思うようになった。

だから比路も、そういう人と出会えば変われるかもしれないって思つたんだ。

「意外と、傲慢だね、きみ。冗談じゃないよ。ぼくはここまでこれで生きてきたんだ。すべて壊れることこそがぼくの望みだ。いまさら理解なんていらぬ。ぼくがそんな話をしたくないんだ。あの人の言い訳なんて聞いてやらない」

比路は首を絞める代わりに爪を立ててきた。

ガリツと耳の下のほうに痛みが走る。思わず顔をしかめた。

「言い訳って……。なにか誤解があるのかもしれないだろ」

「それが余計だつて言うんだ！」

らしくな荒ぶり方で、比路は俺を突き飛ばした。

ガンツと鉄格子を拳で叩く。

「誤解がなんだつて？そんなのあつたとしてもそれが何だつて言うんだ！それでぼくの今までが無しになんてならない！同じほどの苦しみをあの男にも味わせてやる！……そうだ。そうだよ。……それには玲華が死ぬことが最大の復讐になるんだ。ぼくは目先のことにとらわれ過ぎていた。玲華よりあの男の方が最も罪深い。決めたよ、悠汰くん。きみより先に玲華を殺す！」

「比路！」

聞いてられなくて、俺は体勢を整える間もなく、手を付きながら比路に駆け寄る。

「そんなことさせられない！駄目だ！だったら俺を殺せ！」

「うるさいよ！きみのせいでぼくはターゲットを変えるんだ！だから玲華が死んだらきみのせいだからね！それでもまだ、誰のことも憎まないなんて大口が叩けるか見物だよ！」

比路は口元を歪めたような笑い方をした。眉はずっとつり上がっているのに、口だけ歪んでて恐ろしい形相だった。

(なんてこと……)

その言葉に俺は息を呑んだ。

考えなしの発言で、比路を怒らせたんだと気づいた。

比路は、置いていた携帯を拾い上げ、そのままかさず立ち去る。俺の言葉をもう聞くつもりはないみたいで。京香のほうも一度も見向きもしなかった。

なんでこうなるんだ。

どうしていつも、俺の言葉は間違ったふうにしか届かないんだ。

「京香！」

俺はここから出られないのがすごく悔しかった。

こんなことを、傷ついている女性に頼まなければならぬのが、本当に辛かった。それでも、何もしないわけにはいかなくて。

「京香！頼む！比路を止めてくれ！」

まだ京香はぼんやりしている。

「止めなくてもいい！玲華か久保田さんに伝えて！京香！」

伝われば、きっとなんとかしてくれるから。久保田さんならちゃんと護ってくれるから。

俺じゃないのが悔しいけれど、そんなことは言ってられなくて。

京香が動き出すまで、俺は叫び続けた。

それからわりとすぐに、黒い服の男たちが何人もやってきた。

比路のかけた催涙スプレーから目覚めたのか、俺の叫びがうるさすぎて異変を感じたのかはわからない。多分両方だ。

強引に京香は連れて行かれてしまった。比路の仲間だと疑われているみたいだった。かなり手荒に扱われていた。

それも止めたくて違うって叫んだけど、聞いてもらえなかった。

俺の主張はなにも届かない。

ただ黙々と仕事をこなしてるように見える。その様が怖かった。

本当に同じ人間なのか、と思った。

それから一人、男が俺の前に立つことになったみたいだった。何も言わずにこちらも見ずに、ただ立っている。

絶望的な気分になった。

いまでも着々と比路は玲華に近づいてるんじゃないかと思うと、息苦しくなつて。目の前が真っ暗になった。

妄想が膨らんで。パンパンに膨れ上がって、押しつぶされるんじゃないかと思った。

そしたら、聞きたくないような、嫌な、渴いた破裂音が何発も聞こえ出してきて。

だけ。

「悠汰？」

本当に、幻聴がすると思ったんだ。

とうとうやられたんだって。

でも、振り向いたら玲華のような人がいて。幻覚まで見えたら終わりだなんて思って……。

だけど幻覚にしたらいつもと雰囲気違うし、どこか汚れているし。どういふ反応に出るべきか迷った。

声をかけて消えたらどうしよう。

そう思っていたら、その幻覚が近づいてきた。

離れたらいけないと思った。そのとおりにした。そうしたら、すぐにわかった。

(本物だ)

温もりが、本物だった。

「待つて。あたし汚れてる……」

そんな変なところ気にするなんて、本当に本物だ。

俺はすべてを話したかった。

でも上手く言えない。息苦しさが引きずっていて、伝えるのに苦
労した。それでも玲華は言ってくれた。

「もう大丈夫だから。あたしは死なないわ。悠汰をおいて死なない
から」

その言葉ですごく安心した。いままでの暗い闇を拭い去ってくれ
る呪文みたかった。

俺はなんとか落ち着いて、これまでのことを一からちゃんと話し
た。絶対に比路の企みを知っておいてもらわないといけないって、
一番強く思っていたから。

「じゃあ、比路は悠汰を狙ってきたってこと？」

「そう……でも、俺が身の程を知らずに余計なことを言ったから怒
って……」

「それって躊躇ったんじゃないの？比路は悠汰を殺せなかったのよ。
だったらそれは余計なことじゃないわ」

「でもそれでおまえに殺意が向かうんだったら、俺に向いていた方
がマシだ！」

だから、後悔した。

失敗したんだと、後から気づいたんだ。

それでなくても俺は、いっぱい玲華の足を引っ張っているのに。
助けたいと思って来たはずなのに、更に危険にしてどうするんだっ
て。

「悪いけど、あたしも同じ気持ちよ」

玲華はきっぱりとそう言う。

同じって、つまり。俺のことより、自分の危険が増した方がマシ
だということか？

そんなん最悪だ。

どれだけ迷惑かければ終わるんだろう。俺の存在がわからなくなる。

「悠汰。あなたにはいま逃げ道がない。でもあたしは自由に動けるわ。その差がどれだけのものかわかる？……あたしだって絶対やられたりなんかしない。だって、あたしは帰るから。あの学校に戻らなくちゃいけないんだから、大人しくやられたりなんてしてあげないわ」

いつものように強気な発言。

玲華が言つと、本当にそうなる気がする。戻れる気に、なっていく。

「お願い、悠汰。だからもう無茶なことはしないで。死ぬことで決しようなんて考えないで。あたし、久保田さんと作戦を立ててるの。そのことを伝えにきたのよ」

「俺に？」

「そうよ。時間がなくて全てでは話せないけれど。悠汰にも協力してもらいたいことがあるのよ。だから、ここに来たの」

俺は玲華の顔を見たくなった。

まだ抱き締めたままだから、玲華の顔が見えない。だけど、この温もりも手放せなくて、どうしていいのかわからない。

とにかく、嬉しかった。俺にもできることがある。

それが、嬉しかった。

「なんでも言つて。なんでもするから」

もしこれが、比路の言う玲華が操っているものだとしても、俺は一生操られてもいいと思った。

それぐらい……。

（ああ、そうか）

ようやく俺は実感した。愛いとしいってこういうことか。

「その台詞、忘れないでね」

「当たり前だろ」

だから、こんなにすんなり素直になれるんだ。

……。ただ。

玲華が言った、次のその協力の内容は、俺の全身の血の気を失わせた。

百八十度変わる気持ち。いままで感じたなかで、最も両極端ではなからうか。

「いやだ」

考えるまでもない。嫌だ。っていうか、無理だ。

すっかり意思表示をしたら、しばらく妙な間が空く。

数秒それが続いて……。

「ちよつと！一言で片付けたわね！後にどんなフォローが続くのか待っちゃったじゃないの！」

玲華は怒りまくって俺から離れて、そして睨みつけてきた。

それに俺はムツとなる。

「んなことできるか！知ってんだろ！そんなん向かないことぐらい！」

「知ってるけどしなさいよ！なんなのよ、その変わり身の速さは！なんでもするって言ったばかりじゃない！」

「いつも人には向き不向きがあるって言うてんの、おまえだろ！」

「向いてるじゃないの！ちゃんとあんたの人柄を見抜いた役割じゃないの！」

「どこがだ！これってあいつの作戦だろ！俺を馬鹿にしてるとしか思えねえ！」

「いいじゃないの！それでこの先上手くいくのよ！人命だって救えるし、あたしだって悠汰と一緒に外に出られるわ！」

「えっ……外に……出る？」

誰が？ってか、一緒に？

しばらく心の中だけで今の台詞を反芻した。

「そうよ。もうここにいないくていいの。あたしたちがこれからすることは脱出よ」

ここから出るために？

戻れる？玲華と一緒に？

(……………)

そんなこと言われたら断れないじゃないか。

俺は仕方がないので決心することにした。

頷く変わりに、玲華の手を取って握り締める。

「じゃあ約束しろよ。俺にどんなことがあっても、復讐とか考えないって」

「……………」

玲華はすぐには答えなかった。変わりに彼女からも握り返された。どう返すのか迷ってるみたいだった。どんなことが彼女のなかに渦巻いているのかまではわからない。

「じゃあ、悠汰も約束してくれる？逆のことが起こっても、復讐しない？」

卑怯な返され方をした。

(……………)

俺がそのときどうなるのか、想像もつかない。

偉そうなことを比喩に言ったけれど、自分は本当に憎しみに支配されないで居られるんだろうか。

考えたくもなかった。

「なんか…………俺らの間の取り決めて難しいこと多くない？」

責任を感じないとか。別にそんな大袈裟に決めたくてもないのだけ。

「普通じゃないの？」

あつさり玲華は言い捨てる。

普通なのか、これが。そっか…………。

やっぱり普通って厳しいと思う。

「でも、あんたは復讐に走るより……………」

不意に玲華は言葉を止めた。不自然だった。

「なんだよ？」

「なんでもないわ」

玲華が止めた先を俺は知ってるような気がする。

恐らく俺はなにも考えられなくなる。魂が抜けたようになって、そのまま墮落するだろう。そして、どこかで壊れる。

どちらがマシかはわからない。

「やめましょ。最悪なことを話し合っても仕方ないわ」

「そうだな……」

「ごめんね。すぐに助けてあげられないうえに、こんなこと頼んで……」

「おかしいだろ、おまえが謝るのは」

悪いのは誰だ？ここに閉じ込めたやつか、こんなアホな案を出してとつと死んだやつか……。

でも多分俺だ。

なにも考えずに乗り込んだ俺自身が最も悪い。

「それより、俺のせいで最初の計画が狂ったんじゃないのか？」

そのことのほうが重要で、気になった。

「そんなことないわ。ほんとはね……」

「おい、そのバカッブル」

玲華が何かを語ろうとしたときに人の近づく気配があった。ふざけた言葉とともに。

「その呼び方やめろよな！」

誰かを確認するまでもなく久保田さんだった。

なぜか不機嫌そうに右から歩いてきた。

「まだイチャイチャしたい気持ちもわかるが、時間切れだ」

「おまえ、俺の主張聞いてねえだろ……」

どこがイチャイチャしてんだよ。いまは手を繋いでるだけなのに。そういえばさつきも久保田さんに邪魔されたんだよな、そういえば……。

せつかく玲華が話してくれそうだったのに。恨んでやろうかな。

「仕方ないわね。もう行くわ、悠汰。よろしくね」

玲華と繋いでいた手が離れた。温もりが遠ざかる。

「ああ……」

俺は無意識にその手に拳をつくっていた。いつまでも縋らないために。

「じゃあな、悠汰。頼んだ」

久保田さんはそう言っただけでそのまま左側に消える。玲華はその後についていきながらも、何度かこちらを振り返っていた。

結局、久保田さんとはあれからまともに喋っていない。

謝れてない。

でも。

頼んだ。

去り際に言われた一言が嬉しくて。おまえは必要ないと、切り捨てられなかったのが誇らしくて……。

(ああ……でも……)

自分のやるべきことを思い出して、すぐに気持ちは落ち込んでいった。

第四章・・・1

あたしはすぐに久保田さんに比紹のことを話す。もちろん天井を移動中にだ。

「悠汰には言えなかつたけど、今さら殺意もつた人が一人増えたつて、あたし的にはそんなに変わらないんだけど……」

「その一人が比紹だつてのが問題なんじゃないのか？」

まあ、確かに……。

遺産がらみじゃないし、比紹だけ比紹次第で動けるといふところがあるし。

「それより、地下一階に入れた者が全員解放されていた」

「ふうん。いつのまに……」

毅叔父様が情けをかけてあげたとは思えないけれど、かなり早いタイミングだ。

「地下一階だけなの？」

「そうだ」

つまり加藤さんだけがまだということになる。

ああ、だから機嫌が悪そうなんだわ。もしかしたらどこかやられたのかと思つて、心配しちやつたじゃない。

「じゃあ加藤さんにあなたの姿、見られたのね」

悠然と入口から歩いてきていたし、あそこは一方通行だ。

「加藤はチクると思うか？」

「試したの？方が一でもバレたらいけないこの状況で？」

信じられない。自分が一番うるさく忠告していたのに。

「加藤は寝ていた」

「え？」

「見られてはないが気づかれてはいるだろう。あんなにうるさくしたのに、大人しく寝ている奴ではない。だから寝たフリだ」

「だから？」

「なぜ寝たフリをしたのかがわからん……」

「あ、そう……」

最後はそれなのね。

心配なのもわかるけれど、欲を出しすぎれば失敗する。

加藤さんのところは鍵を開けてあげて、あとは彼自身に頑張ってもらうしかないと思うんだけど。

(でも)

あたしにももう一人気になる存在が出ていた。いまの悠汰との話の中で。

「京香はどうしているのかしら？」

仲が良いとはお世辞にも言えない。

策略のうえで悠汰に近づいたことは今でも許せない。だけど。

表情がぼんやりとしていたと悠汰が心配していて。あたしとしてもそんな京香なんて見たことないし。

心配ではある。

「とりあえず一旦戻るぞ。話はそこからだ」

それはわかる。

この騒ぎで誰かが様子を見に来たときに、あたしがいないとまずい。それは初めから話し合っていた結論でもあった。

仕方なく気持ちを切り替える。

ただ戻ることには専念した。

厨房から出ると、行きるときより廊下が騒がしい。久保田さんをまだ探してるんだろうか。

「久保田さん。そういえばどうやって騒ぎを起こしたの？」

「オレはとくに何もしてない。姿を見られないように変装したんだが、すでにそこは大騒ぎだった。そこへ奇妙な奴が現れたから、かなり警戒されて、何もしてないのに発砲してきやがった」

「ええっ？」

どうということよ。大騒ぎって……っていか奇妙な変装ってな

に？聞いてもいいのかしら？

「その話も後だ」

だけどさつさと久保田さんは先に廊下の様子を窺って、人のいない隙について外に出た。あたしも続く。

久保田さんは動物並みの直感をしていた。ギリギリのところでは通路に入り、あたしたちは部屋に向かって走った。

そして部屋で千石さんと合流した。千石さんはここで誰も来ないように見張っていてくれたのだ。

「玲華様大変です。京香様がいま地下一階に囚われているようです」「えっ!？」

あたしの顔を見るや否や、千石さんはあくまでも落ち着いた声で、まったく大変さを出さずにそう報告してくる。

「比紹様も捕えようと動かれているようですが、比紹様は行方不明です」

「行方不明？外に出たの？」

「いいえ。外へと続く道はすでに毅様の手によって固められていますよね？比紹様も貴女と同様、このまま出ることを許されておりません」

ああそうか、だからあんなに何人も人が行き交っていたんだ。

つまらなさそうに久保田さんが間に入ってきた。

「この家でいなくなったのなら捕まるのも時間の問題だろう」

「隠し通路は？」

「どうだろうな、あいつが見つけれられているかはわからんが、稔の例もある」

「稔叔父様と比紹にはまったく接点はないわよ」

むしろ比紹は憎む対象に入れているはずだ。あのふたりが関わりがあるとは思えない。

「なにも稔が喋ったとまでは言っていない。同じように何らかの形で情報を得た可能性があってもおかしくないと言っただ」

「独りで、見つけて……?」

あるんだろうか、そんなこと。

「千石さん。京香の様子は？」

「申し訳ありません。私もこちらに数少ない親しい使用人が来まして、誤魔化すのに必死でしたので……。何があったのか確認するのがやっとでした」

いたのね。親しい使用人。

って、そこじゃなくて。

やはり来たのか、ここに人が。千石さんを置いておいて正解だったようだ。

逆に言えば、一度来たならもう安心だ。

「ねえ、隠し通路がばれていないのだとしたら、比紹はどこにいると思う？」

あれだけの精鋭たちが探しているのだ。いくら広いといえども隠れる場所なんてない。

「誰かが匿っている、か？」

「そうね」

久保田さんの反問にあたしは頷く。

ではそれは誰かということだ。

比紹は目立たない存在だったが、それだけではない。誰とも関わりをもつてこなかった。

そう、京香だけだ。

だけどその京香はいま囚われの身。だから匿えない。

そうなつてくると自然と浮かび上がってくる人物。

久保田さんも同じことに思い至ったようだった。

「まさか……。しかし、理由がない」

「でも稔叔父様しかないわ」

毅叔父様に関わるものが匿うはずがない。一番対極にいとされているのは清志郎伯父様だが、それこそ比紹とも離れすぎている。清志郎伯父様に得だつてない。

「稔叔父様が一番どつちつかずな態度でいるのよ。一番ありえるわ」

「だから、なぜだ？」

「もしかしたら、あたしの義兄おにだって知って……。比紹が殺叔父様に処分されないことを、あたしのためだとか考えていたら……。」「思考とともに口から言葉として出た。

きつと比紹が囚われたら、あたしは比紹もそのままにはしておけないと思うだろう。

稔叔父様は、少しでもあたしの負担を軽くしようとしている。

それがこれまでの彼を見てきて感じることだった。

(だって、結果助けてくれた)

すべてを知って久保田さんを人質にしようとした理由。いまなら署名のためじゃないってわかる。だからといって、はつきりこれだという確信は持てないけれど。

(まさか本当は違うことを提示しようとしていた?)

例えばそう、お祖父様のこと。

自分の父親の本音を、あたしを介して聞きたかったのではないだろうか。

きみに愚痴りたかっただけかもしれないな。

あの人があたしに最後に言った言葉。あれが全てを物語っているのではないだろうか。

つまり、稔叔父様自身にも迷いがあった。だからこそ一見、一貫性のないように傍から見える行動を取っているのではないのか。

「ちよつと待てよ。おまえ……。それはおかしくないか……」

「あ……」

ふいにあたしも矛盾に気づいた。

そうだ。比紹が義兄だとあかしたのは、稔叔父様が盗聴器のことをばらした後だ。

「……んだよ。そういうことかよ、あの野郎」

鬱陶しそうに久保田さんが毒づく。

「常にひとつはずっとこの中であっただってことね」

「おまえはもう寝ろ。明日もあるんだ」

「久保田さん、それはあなたも同じでしょ」

あたしたちは結局進歩がない。同じことを繰り返している。しばらくお互い睨み合い、深いため息を吐いた。

「なんか悠汰の苦勞が窺える」

「どういう意味よ!」

「まあいい。千石、そういうわけだ。もう一度出てくる」

「ごめんなさい。そういうわけだから留守番お願いね」

「……仕方ない方たちですね」

「ひと括りにしないで」

微かに穏やかな空気を醸し出した千石さんに、釘を刺すことを忘れず、あたしたちは再び部屋から出た。

もちろん、目指す場所は稔叔父様のところだ。

「お嬢、ゴタゴタしていて報告するのを忘れていたことがある」

「これ以上にながめるの?」

「オレが杏里嬢の部屋を見張っていて、一つだけ変化があった」

「……………まさか」

この流れで話が出るということは。

「ああ、稔が訪問してきた」

「いつよ?」

「悠汰が来た日……おまえの部屋に行く前だ。会話内容までは聞かえなかったが、あの様子じゃあ杏里嬢は稔が本命だな」

「どうしてわかるのよ!」

「杏里嬢から迫ってキスしていた。かといって、稔が嫌がる素振りもまったくない。あれはただの恋人とも違う雰囲気だ」

「……………」

稔叔父様の場合、迫られたら女性なら誰でも受け入れそうな気もするけど。

(……って思つのも失礼か……)

二人は親戚以上の繋がりがあったのだろうか。

やはり、稔叔父様は読めない。なにがしたいのか解らない。

しかし杏里の動向も不可思議だ。幸祐は遊びというのが本当だと
して、ならば稔叔父様は……？

(どちらでもいいわ)

問題はどのような会話をしていたかだ。

それと稔叔父様が箝口令を出した場合、杏里には従うだけの理由
があつたということ。

そのことについても聞かないと、と確認しているうちに部屋の前
についた。

「夜分遅くにすみません」

また礼儀正しく久保田さんがノックする。

するとあっさり本人が出てきた。

「やあ、やはり来たね」

「やはりつてことはやっぱりなのね」

あたしたちの会話はこの人に筒抜けだ。現在も。

「玲華だけなら入れてあげると言いたいところだけど、そうもい
かないみたいだね」

「当たり前です」

ムスツと久保田さんが答えた。

「わかった。でも静かにしてね。まだ寝てるから」

意味深長な言い方をしながらも、あたしたちを中に入れてくれた。

「比紹が寝てるの？」

聞かれているなら話しは早い。

「そうだよ。おれに助けられても嬉しくないだろうし、説得してい
る暇もなかったからクロロホルムを嗅がせたんだ」

「起きたら凄いいことになりそうね」

間違はなく反発するだろう。

でもここなら毅叔父様も強引には入り込まない。よほど核心的な
証拠でもない限りは。ならば時間稼ぎにはなる。

「なぜ、助けようと思われたのですか？」

二度目になるそのソファに初めて三人で向かい合わせで座り、久

保田さんがまず切り出した。

今回も稔叔父様しかこの部屋にはいなかった。久保田さんが来たときには女性の秘書が一人と、二人の男性の付き人がいたと言っていた。前もって人払いをしてきているようだ。

「さあね。玲華のためになにかしたくなかったのかな」

「比紹を助けることが？」

「もう誰の犠牲も出したくない。違う？」

ふと、稔叔父様が久保田さんからあたしに視線を移した。

「違うわい」

たとえそれが比紹だとしても。いや、比紹だからこそ、このまま処分なんてさせたくない。

俺は比紹を憎めない。

一連の出来事を語ってくれたとき、悠汰はその気持ちも吐露した。感謝してるから、と言っていたけれど、きつと悠汰にはどこか比紹の気持ちがわかったんだと思う。解ってしまったんだ。

似たような立場で、自分も一歩間違えばああなっていたと。

だけどあたしは許していない。

比紹が悠汰にしたことだけは、絶対に謝罪させたいと思っている。自分がいくら傷ついているからって、他の人を傷つけていってことにはならないのだから。

そのためには、いま処分なんてさせやしない。

「でもあなたはあたしのためじゃない。……あたしたちの会話を聴いて全てを知り、あなたはお祖父様に対して憤りを感じた。そして、あたしが署名をしないことも知ったから、あたしの元へも来なくなった。けどそこへ幸祐の死という大事件が起こったわ。それであなたは何かをしようと動き出した。その内に心に変化が現れたのよ。そう、お祖父様のためになることをしたいと。だから比紹を……」

「きみはやはり聡明だね。否定はしないよ」
「動じることなく彼は目を細めた。」

「ただ、きみのためというのも嘘じゃない。認めたくない兄弟がい

る状態つていうのは理解できる。一方的に言い逃げされたままでは、その気持ちにも収集がつかないだろうしね」

「……………」
いつか、納得できる日がくるのだろうか。

初めてお祖父様がしていることが本当に残酷なことだと、自分が同じ状況になったことで身を染みてわかった。

こんな……………。

いくつものやり切れない想いが誕生してしまうのに、どうしてお祖父様はわざとこんな関係をつくったのだろう。会話する機会はあるが、その本心には触れられていない気がする。

「あなたが比呂を助けた理由はわかりました。いままでの会話、盗聴器で聴いていたのなら、もうひとつ聴きたいことがあることもわかりですね？」

身を乗り出して久保田さんが仕切る。

しかし稔様の反応は弱かった。小首をかしげるような動作を微かにする。そして耳の辺りを押さえた。

「待つて。比呂が起きたみたいだ」

注意深く稔叔父様を見ると、イヤホンをしているのがわかった。髪で隠れていて、ずっと気づかなかったのだ。受信機は後ろのポケットにでも入れているのだろう。

「まさか、自分の部屋を盗聴してたの？」

「混乱していきなり脱走でもされたら困るからね。二人とは会わせられないから、帰ってくれるかな？きみたちがいることがわかれば興奮する」

稔叔父様は立ち上がり、自分の寝室と思われる扉の向こうに入って行った。

忠告のみで、強引に出すような真似はせずほったらかしのままなんて、意外ともものぐさな性格なのだろうか。

あたしたちは当然素直に帰るわけはなくて、でも叔父様の言うこともわかるので、鍵穴あたりに耳を寄せる。

比紹の態度を知ること、今後の対策が見えるかもしれないと考えてのことだ。

少しだけドアを開けると、塞ぐように稔叔父様の背中があった。扉付近に止まっている。

しかし一方で盗聴器なんて、ハイテクなものを使ってる人が目の前にいるのに、あたしたちはなんて原始的なんだろう。

「起きた？」

「……稔さん」

驚く比紹の声が聞こえる。姿までは見えないけれど、確かにここにいた。

呟くように名前を呼んだあとは、どういっつもりだ？とか、あなたがぼくにクロホルムを嗅がせたんだな！とか、かなりエキサイティングしている。悠汰への態度を変えてから、そのままここにきているという感じだ。

「話してる暇もなかったしね。手を貸すと言っても、きみは断るだろう？今捕まれば、きみは消されるよ」

あたしたちに言ったことと同じようなことを本人に説明している。「それで同情的な気分にも陥られたんですか」

「そうだ、と言っただら？」

「最悪だ」

惨めさを感じているのか、憎々しげに比紹が毒を吐く。

「あなたも、あの護衛たちもほんと馬鹿。ぼくなんか目に向けている場合じゃないだろうに。罰せられるべき人間がたくさんいるのに……」

「きみ、あまり京香ちゃんに酷いことしたら駄目だよ。可哀想に。今きみの仲間だと思われて囚われてるんだって」

「そう思うのなら、あなたが助ければいいことですよ！ぼくなんかより女を助けたいんでしょう、あなたなら」

比紹からみても稔叔父様のイメージはそんなものか。

あたしはこっそりため息を吐く。

京香のことを聞いてもまったく動揺した素振りがない。本当に利用していただけということか。

「まあね……。おれだって兄を止めるにはそれなりの覚悟がいるわけよ。手に落ちる前に間に合ったから、きみは助かったんだ。じゃないとおれは諦めてたね」

「だからなに？そんなことで、ぼくに交換条件を持ち掛けようたって無駄ですよ。ぼくはあなたのためになることはしない！」

比紹にはすべてが怒りの理由になるようだ。誰のことも気を許さず生きてきたんだろうと思った。

それでも、あたしは同情なんかしない。絶対に比紹は間違っている。

「とにかく、まだここから出ない方がいいからね。おれだって不本意だけど今夜はここに泊めてあげるから」

「なにを企んでるんです？」

「さあね。玲華のためになにかしたくなかったのかな」

「な……。あなた、まさか……」

「ああ。すべて知ってるよ。玲華の義兄なんだってね、きみは」

「はっ！それで玲華のため？ふざけてるのか？なぜぼくを逃がすことが玲華のためになるんだ！」

あたしは思わず顔をしかめた。

あっさりとバラすなんて、本当になにを考えているのだろう。手の内をあかしてまで、比紹をここにとどめておきたいのだろう。

比紹にとっては稔叔父様はいきなり登場した人物だ。気味が悪くて、理解できない人にあたる。

そのせいか、いつもより怒りを顕にしている。素直に、といても良いくらいに。

「結局あなたも玲華が好きなんだ。玲華側の人間で、ぼくを哀れに思ってるんだな」

「そう怒るなって。おれはきみについてどうしようという気はないよ。復讐したければいいさ。それにおれは玲華の味方を

しようとは思ってないんだ」

「だったら……」

「結局はおれのためだよ。こう言ったところできみには有り難くないことだろうけど、それで納得してもらえたかな？」

「誰が納得などするか。そんな精神論など聞いてない。結果、玲華のためになるのならそれは同じことだ」

「でも女の子の扱いはちゃんとしなよ。京香ちゃんがきみを想う気持ちは尊いものだよ」

「だからあなたの意見など聞いてない！」

カツと一喝してなにかバサッという音がした。おそらくベッドの近くにあつた雑誌かなにかを投げつけたんだらう。稔叔父様に当たつた様子はない。

「きみが仕出かしたことはすべて知ってるよ。それをおれは同じ男として許せない」

何の話だらうと思つた。

悠汰から聴いた情報からも繋がるような話はない。だけど稔叔父様の声は硬かつた。

「勝手にほざいていればいいんだよ！女たらしが！……京香はただの馬鹿だ。そう、ぼくは京香を抱いたよ。無理矢理にね！でもぼくが襲つてるつてのに、怯えた表情をしながらもまったく逃げなかつたんだ。まだどこかでぼくの優しい一面を探しているみたいだよ。そんな目を向けられるたびにぼくは殴つてやつたんだ。そんなもの初めからただの虚像。すべてが粉々になるように、消えてなくなるように殴つた」

あたしはあまりにも無残なその内容に目を瞠つた。

京香には比組がすべてのようなどころがあつたのに、それを根底から壊したんだ。

(だから京香が、ぼんやりしてるなんて……)

悠汰がどこまで知つていたのかはわからない。だけど彼は理由までは言わなかつた。ただすごく京香がやられているということだけ。

(ひどい……)

こんな傷つけ方。最も非人道的で、残忍だ。

「それだけですごく悲壮感漂わせちゃって、おかしいよね。べつにやること自体は初めてじゃないのにさ。人が壊れることって、なんて簡単なんだろうね。……そう、馬鹿だよ。京香だつて最初は、玲華とつるまない貴重な存在であるべくに近づいたただだったんだ。理由こそ言わなくても、ぼくが玲華を憎んでいることぐらい気づいていたはずだよ。そうすればぼくが、ただ利用したかっただけだつて、すぐにわかったはずだ。そうすればおのずと普段の優しさがただの餌だつてわかるよね」

比紹も壊れている。

おそらく稔叔父様は、それも盗聴器で得た情報なんだ。どこまでその手を広げているのかは不明だ。

しかし比紹はその疑問に到着することなく、笑い声さえ聞こえるほど陽気に話していた。

これは正常な人の言葉と態度じゃない。

「それも復讐？」

「復讐はまだ終わってない！あなたのことも利用するだけして壊してやる」

「それで？その後は？」

「ここを破綻させるんだ。この家の財産なんてどうでもいい。けど源蔵のあとに毅を継がせたりしないよ。トップが変わってあとは同じじゃあ、意味がないからね」

誘導するように、稔叔父様は導いていく。

まるで、あたしの代わりに聞きだしてくれているような感覚に陥った。きつと稔叔父様のことだから、ここで盗み聞きしてることくらい気づいているだろう。あたしでは、冷静に比紹とこんなやり取りできないことも、知っているのだろう。

だから……。

何度も飛び出して行きたくなっている気持ちを押し込めて、ただ

聞いた。

「それから？」

「それから、玲華を殺して、薫を苦しめて……」
比紹の勢いが弱まった。

彼自身、確認するように言っているんだと思った。

「それから…… やつとぼくは、幸せに、なれる……」

いろんなものがあたしの胸を騒がせた。

悲しみなのか、同情なのか、怒りなのかはわからない。ただ、涙がこみ上げてきた。

それに気づいたのか、久保田さんがあたしを扉から離すように肩を押す。

「そのあとにまだ京香がぼくに幻想を抱くのであれば、相手にしてあげてもいいよ。でもきつと無理だよ。あんなに怖がっていたんじゃないあ、もう近づいてもこないよね……」

久保田さんが扉を閉めて、最後に聞こえた言葉がそれだった。

あたしは顔を伏せた。

(どうしてわからないのよ)

馬鹿な男ばかりだ。比紹は失ってから京香の大切さに気づくことになるだろう。いまは無意識でも、その未来がすでにあの言葉に表れている。

あたしは久保田さんの支えを借りてソファに座った。

比紹から発せられた内容がすべて、様々な形を変え胸に刺さった。いままでのことを総合的に見ても、意地でも同情なんてしない。それは先ほど思ったことと少し変化していた。

もう悠汰のことで許せないなんて単純なものではない。

「じゃあおれはこの向こうにいるから、何か入り用があったら呼んで」

しばらくして稔叔父様がそう言いながら出てきた。

カッチと音がして扉を閉めたあと、あたしたちの存在を確認した。やはり驚いていない。

「そういうことだから……帰ったほうがいいよ。ごめんね。もうひとつの話って幸祐のことだろう？おれ自身、いまは話せる状況じゃないかな」

きつとこの人も複雑な想いを抱えている。あたしたちはいろんなことがありすぎた。

ええ、と一言だけであたしは頷き、久保田さんと一緒に出た。

廊下でも久保田さんはなにも言わなかった。この人がなにを考えているのかはわからなかったし、窺う余裕もなかった。

それでもあたしの部屋の階に来たときに初めて口を開いた。

「あいつ、廊下には盗聴器つけてないな」

「え？」

「もうひとつの話って幸祐のことっていうより杏里嬢のことだよな。それにわかっているだろって切り出したら首を傾げていた」

いきなり、なんの前触れもなく普通に語りだした。いままでと同じ調子で。

おかげですんなり頭が切り替えられた。

「すべてを聞いていたわけではないということね」

「普通の周波数の盗聴器ならオレが外していつている。あいつの持っている特殊なタイプはそう無いようだな。特定の部屋にのみに付けられているとみた」

「確かにそうよね。でもそれがなんになるの？」

「いや……」

やっぱり久保田さんの調子もおかしい。そう呟いたきりで部屋に入った。

この中に入ってしまったえば、稔叔父様に聞かれている。おそらく聞かれてはならない方向だと感じたので、問い詰めることは躊躇われた。

あたしを部屋に送っただけで、久保田さんは寝ると言っただけで自分の部屋に戻って行く。

それから暫く考えて、なにが言いたいのか少しだけわかった気が

した。

* * *

体中がギシギシする。

あたしは三時間くらい寝たところで久保田さんに起こされた。叫び声とドアをノックする音が、どこか遠くの方から聞こえる。

聞こえるんだけど、頭と瞼が重くて、しばらく無視していた。

いや、無視はいけない。少なくともどういふ事態かあたしには解ってる。

(いか、な、きゃ……)

ああでもあともう少し……。

起き上がろうと持っていく意識を、叩きのめすかのように襲ってくる誘惑。

あたしはそのままの体勢をなるべく維持しながら置時計を掴んだ。

(九時すぎ……)

いつもなら爽やかに目覚めてる時間帯だ。

結局朝方まで眠れなくて……。それでも三時間は寝ているはずなのに。

やっぱり疲れが溜まっていたんだ。身体は正直だ。ここ数日であるんないろんなことがあるすぎて、気持ちは高ぶったままでまったく眠れなかったのだ。

「お嬢！いい加減に起きないとこのドア、ぶち破るぞ！」

一際でかい罵声が聞こえた。

その内容に眠気も吹っ飛ばす。

「起きたわよ！起きてるわよ！だからちよっとは待ちなさいよね！」
あたしも負けずに怒鳴ったら頭がクラクラした。

大きく深呼吸をひとつして、素早く支度にとりかかる。

「ちよっとはって……どれだけ待ったと思ってるんだ……」

どこか呆然と呟く声がドアの向こうからしたけど、完全に無視し

た。時間がないことなら解ってる。

最後に全身が写る鏡の前で身だしなみを整えて、あたしは寢室を出た。

「おう。悠汰が待ってるぜ」

応接スペースのソファに行儀悪く座ったまま、皮肉たっぷりな一言をもらった。

「わかってるわ。千石さんは？」

「もう動いてる」

「そう、じゃあ行きましょ！」

あたしたちの作戦が本格的に始動する。

上手くいくつて信じてる。だって、僅かでも疑ったら取り返しのつかないことになりそうだから。

あたしは久保田さんと走った。

悠汰のいる地下へ。

そこにはたくさんの人が溢れていた。恒例の野次馬だ。

（みんな早起きね。偉いわ）

「あ、玲華。おはよう」

久保田さんと人並みを掻き分けていくと、ちゃっかり綾小路先輩が前の方にいた。

だけどあたしは挨拶する暇がなかった。

ばか騒ぎのような声が聞こえていたからだ。

「頭が痛えつつつてんだろっ！あー！ちくしょう！目眩までしてきやがった！」

「えっ？」

騒ぎの中心にいたのは悠汰だ。

あたしと久保田さんはしばし立ち尽くす。

「黙れと言ってるだろうが！大人しくしていれば薬を持ってきてやる」

応対してるのは、もちろん毅様の護衛を務めている人たちだった。あのとき、あたしの部屋で悠汰を連れていった人、四人が牢屋の前

を取り囲んでる。

その先にいるだろう悠汰が、よく見えぬ。

あたしは見えるところまで移動した。

久保田さんもびったり離れずにくっついてくる。

「そんなん効くかよ！俺は頭を打ってたんだ！内出血してるかもしれない。助けてくれ！」

「えっ？」

あたしは繰り返すことでしか反応ができなかった。

「安心しろ。内出血してたらそんなに叫べないだろう」

「そうだ。それに朝からおまえが暴れたおかげで俺等に迷惑かつてんだよ。いい加減黙れ」

「そんなつ。このまま意識を失って俺は死ぬぞ！医者にそう言われんだ！いつ死んでもおかしくないつて。だから医者に連れていってくれ！」

「意識を失ってくれれば静かになって良いんだがな」

「ひでえ！血も涙もねえ……。だったら今すぐ殺せよ。ああああ。吐き気までしてきた」

悠汰の顔は耳まで真っ赤だった。かなり必死そうな顔で頭を押さえつけている。

実はこれは計画の一端だ。

あたしが悠汰に伝えたこと。

尋常じゃないくらい体調悪いつて騒いで。人が集まるくらいに。

そうすれば同情心から出してもらえるかもしれない。それはチャンスになる。

本当に病院に連れて行ってくれるとまでは期待してない。いや、そもそもここに人を集めるだけでも狙いとしては成功なのだ。

だからいまは成功していると言っている。いい。けれど。

（なんつてダイコンなの！）

演技が下手というか、わざとらしい。嘘くさい。自然じゃない。みんな心配して来てくれることを想像していたのに、ここにいる人は皆、どこか呆れ返ったような顔をしていた。

そう、バレバレだったのだ。

真つ赤な顔はきつと恥ずかしいんだろうなあ。

それでもやり切つてるところは褒めてあげたい、かも……。

「まあ、なんて無様な」

「あそこまでして命乞いがしたいのですわ」

「別の意味ですでに精神が病んでいらっしやるのではないかしら？ ええ、別の意味で」

後ろの方からそんな会話が聞こえてきた。

それでもあたしが動けずにいると、久保田さんがこっそり肘をついてきた。

「おい、早くフォローしてやれよ。可哀相じゃねえか」

わかつてるわよ、と目だけで返す。

ここであたしが出て行って一緒に大騒ぎする。それが台本の続きシナリオだ。

でもどうしてだろう。足が動かない。

なにか鬼気迫っていて、恐ろしいオーラが悠汰から発せられている。そこまでの迫力はばっちりなんだけど。なにせ棒読みだし……。

「あつ。玲華！」

うっ、見つかった。

男たちの隙間から目が合った。

（そこで手を振るな！おかしいでしょうが！体調悪いのにそのノリは！）

そして悠汰は鉄格子を握り締めて、あたしに向かって叫んだ。

「助けてくれよ！玲華！俺、死んじゃう。病院に行つて治療しないと絶対死ぬ！」

ああ、はいはい。

なぜかしら。そんな返しをしたくなるのは。

「おい、呼んでるぞ」

また久保田さんが隣から圧力をかけてきた。

言われなくてもわかっているってば！自分が考えた作戦のくせに！仕方なしにあたしは硬直した足を無理矢理動かした。

男たちを押しつけて、柵の向こうで座り込んでいる悠汰の前に屈まる。なぜかすんなり彼らは退けてくれた。

「まあ悠汰！それは大変だわっ。どこが痛いの？」

ああああ。あたしまでつられて大根役者になっちゃったじゃないの！

おかしいわ。この家ではかなりのハツタリをかまして、ここまでやり切ってきたあたしなのにっ。

「頭だよ。久保田さんに殴られたところがガンガンする」

そういつつ。悠汰の右手は頭にあっただけど、左手はお腹をさすっていた。

あたしが寝ている間にも叫び続けていたようで、声が少し掠れている。

「大つ変。頭を強く打つと、後からが怖いってよく言うものね。脳がダメージを受けて腹痛まで引き起こしてるんだわ。これは重症ね」

そんな合併症は聞いたこともないけれど、とりあえずあたしはそうやって無理矢理こじつけた。

「そうなんだよ。もう痛すぎてどこが痛いのかよくわかんねえ……」

わかんないじゃ困るのよ！バカ！

仮病使うときはちゃんとひとつに絞りなさいよね。

「いやっ！死なないで、悠汰。あたし悠汰がいなくなったらどうすればいいかわからないわ」

「このまま死んだら、悔やみきれなくて俺は玲華から離れらんねえよ！そしたら玲華に酷いことするやつに取り憑くかもしんない」

「そんな護り方されても嬉しくないけどお……でもあたしには止められないのね。それならここにいる人みんな危ないってことじゃない」

もう、このわざとらしい感じに乗っかるしかない。あたしはそう
思っ、危ないと言うときにわざと周囲を見渡した。

一人一人をしつかり目でチェックする。あなたもターゲットよ、
という意味を込めて。

迫力だけは充分だから、みんなビビッていた。

だけどその隙間から久保田さんが一人、声を押し殺して笑って
のが見えた。超ムカつく。

「玲華、頼む。こんなところが最後なんて嫌だ。せめてここから出
してくれ」

「そうしてあげたいんだけど……」

あたしは恨めしげに護衛の四人を見上げる。

彼らは顔を見合わせて困惑した表情を見せた。

「なんだ？何を騒いでる？」

だけど毅叔父様が登場したら彼らの顔も引き締まった。毅叔父様
はお付きの人を二人従えて、そこにいた。皆はまた、自然に通り道
をつくっている。

重役出勤並みに遅い登場だ。

「はあ。実はこの捕らえた少年が死ぬ死ぬと騒いでまして……」

一人が説明すると、射抜くような目で毅叔父様はあたしたちを見
比べた。

隣で悠汰が、鉄格子を握る拳に力を込めたのがわかった。叔父様
にただならぬものを感じたみたいで力りきんでる。

「俺は本当はまだ入院してないといけないって言われてるんだ。強
引に退院してここにいる。なにがあるかわからない」

その言い方にあたしは悠汰を思わず見た。先ほどまでのそらそら
しさがなくて、力んでるのに声は静かだったから。

もしかしたら本当にそういう診断だったのかもしれない。そう思
えた。

(それでなんで来てんのよ。もう……)

「だから！俺がいま死んだら困るんだろう？一度病院に連れて行っ

たほうがいいぜ」

あ……戻った。

大袈裟な物言いに戻った。本当、わかりやすい。これでは虚言ですと教えてるようなものだ。

「なるほどな。そういう手に出たか」

毅叔父様の出方を注意深く見つめていると、叔父様は僅かに笑みをつくった。一瞬だったけど、あたしは見逃さなかった。

「ちょうどいい機会だ。おい、出してやれ」
うそ！

あたしは信じられなかった。こんな陳腐なプロセスで、叔父様が動かされるとは思っていなかったのだ。これがただの演技だとバレたときには、さらに酷い扱いになることも予想していたし、良くて一喝されて終わりだと……。

（なにか、企んでる？）

計画の流れが変わるのを感じた。

毅叔父様は鍵を持って来ていたようで、それを護衛役に渡す。悠汰もやや呆気にとられながら出てきた。

「悠汰」

あたしが駆け寄ろうとすると、すぐに止められた。出してもらえてもその身は自由にはされていない。

そして毅叔父様は皆に呼びかけるように言う。

「いまから謁見の間で公開署名を執り行う！私が父の後を継ぐ瞬間を皆にも見ていただきたい！」

なんていうことを。

突拍子のない話にあたしは口元を両手で覆う。

計画が、乱れる。

久保田さんの顔を搜した。でも見つからなくて、代わりに綾小路先輩がこちらを見ていた。いつもの笑顔で片目を閉じている。あたしにウィンクしたみたいだった。

（それだけじゃあ何の合図かわからないんですけどっ）

齒痒い思いが生まれた。

「全員を集めるんだ。来ない奴は後々後悔することになるとも言
つて連れて来い。証人として椿原も呼べ。あいつに立ち合わせるん
だ」

毅叔父様はそう付き人に命令をくださった。そしてあたしの方を向
く。

「玲華は実印を持って来い。それまでこの少年はこちらで治療をし
てやろう」

「昨日話したじゃない！それはもうちょっと待ってって！」

「そうだな。不安材料を取り除いてからだと言ったな。だから公開
でやるのだ。私が表立って父の後を継ぐ。誰にも文句は言わせない。
それですべてうまく収まるんだ」

つけ入る隙が、ない。

あたしはもう何も言えなくなった。

公衆の面前ではもう清志郎伯父様を餌に取引はできない。

(そういえば、清志郎様は……)

あたしは彼の姿を探す。

すると真ん中の方で、その恰幅のいい体格をすっぽりと皆の姿で
隠しながら、怒りを顕にしてそこにいた。いまにも血管が切れそう
で、目が充血したように赤い。

どうすんのよ、この状態……。

あたしは背筋が凍るような思いだった。

* * *

綾小路先輩と急いで部屋に戻った。計画の変更をするからと指示
を綾小路先輩に伝言したまま、久保田さんはひとりで勝手に動いて
いるようだ。

部屋につき千石さんと合流すると、計画の大まかな流れは千石さ
んが聞いていた。

「で、本人はどこに行ったのよ！」

「やることがある、とだけ……」

まったく、いくら時間がないからって困るわ。

でも久保田さんのことだからきつと大丈夫だろう。

それに予想ならできた。

(加藤さんだわ……)

ここで加藤さんを助けなければ、もうチャンスはないだろう。

それにきつと久保田さんは京香も解放してくれる。それならば、

怒る理由はどこにもなかった。

「千石さんの方は？」

「問題ありません」

こちらは一足先に成功したようだ。

いままでの流れで、悠汰が大騒ぎをすれば野次馬が集まることは予想できた。そして悠汰のことで、清志郎伯父様が無視できるはずがないということも。

人を集め、その際に千石さんが亜衣ちゃんたちを救いだす。

「お二人は言われたようにあの場所で待機してもらってます」

会話をしながらあたしは寝室でドレス着替えていた。扉越しに聞こえる千石さんの声が遠い。

着替えをするのはいろいろ仕込むことがあったからだ。しかしいきなり服装が変わったことを気取られてはならない。とはいえ動きにくい服は元より選ぶつもりはない。動きやすく、体のラインがはず、かつ正装に見えるドレスだ。

靴もヒールの低いパンプスに履き替える。

「んじゃあさ。署名が終わったら、いい機会だから一緒に行っちゃおっか」

「……………良いのですか？」

「うん。本来の家があるんだもんね。ここにももう用はないでしょ。さつと着替えを済ませて、あたしが次に向かったのはキッチンだった。」

目当ての物がどこにあるのかわからない……。

「だからさ、千石さん誘導をお願い」

「でしたら本来の役目もありますので、もう行かなくてはなりません」

「ホールへは綾小路先輩と行くわ」

あたしがそう言つと、当の本人はなぜかすごく嬉しそうだった。

「頼ってくれるのかい？玲華」

「あなたもすでに一蓮托生よ。協力してくれなければ困るわ」

「勿論だよ。ではぼくも準備が必要だね」

最後は独白のようだったので、無視をして探し物をする。

その隙に千石さんは早々と出ていったようだ。

「ところで、なにを探してるんだい？」

あらゆる扉や引き出しをボタンボタン開閉しているあたしは、綾小路先輩には奇妙に映つたようだ。

「あつた！」

“こういうものがある”ということは、秀和に聞いて知っているのだ。ただ使ったことはないけれど。

あたしは目を光らせて、それをガツサリ持つ。一枚を綾小路先輩に渡して、用途を説明した。

「さすが玲華だね。脱帽だよ」

「ふふん。じゃあ行きましょう」

「あつ、待ってくれ。僕もすぐ準備するから」

「部屋に帰るんでしょう？あたしも行くわ」

「どんなときでも一緒にいたいって？」

「なに言ってるんよ、バカ！ついでに寄った方が効率がいいだけよ」

解ってるはずなのに、わざとだ。

こういうことを軽々しく言わなければ、もっと信用できるのに。

あたしの周りには素直じゃない意地っ張りな人が、こういうタイプしかないのかしら。

頭が痛くなりつつもあたしたちは部屋から出た。
毅叔父様が指定した場所は、奇しくもお祖父様が声明を発表した
ところだった。

どうしても、俺は芝居が出来ない。

わかっていることだった。だって兄貴に寝たふりもばれてたわけだし。

そのうえあんな大勢の前で命乞いみたいな真似……。

(正直、マジで死にたくなっただかも)

でも玲華が必要なことだって言うから……。

それで成功したんだろうか。俺はこの使命のことしか聞いていないから、そこがわからない。

人を集めて、その隙に助けたい人がいるって言うっていた。俺より優先してごめんって。

そんなのはまったく問題じゃない。玲華が望むことなら、俺なんか後でいい。

だけど久保田さんの姿が見えた。

(ついでに綾小路も見ってしまった……)

それで一体誰が助けに行っただろう。

(あ……、まだだ)

もう一人いる。俺を病院に送り届けた人。

地味めで暗い人って拓真が言っていたっけ。その人の存在を忘れていた。多分まだ俺は会ってないけれど、玲華が気を許した人なら、きっとまだ玲華のために動いてる人だ。

「ずいぶん大人しくなったな」

玲華の叔父、毅さんが入ってきた。

ここは謁見の間の隣にある個室らしい。控え室のようなものだと説明された。

ここでやつても充分じゃないか、というほど広いけど。

とくに縛られもせず、俺はソファに座らされている。だけど見張りはいた。あの牢屋にいた四人がそのまま俺を連れてきたのだ。

もう騒ぐ必要はなくなった。それだけだ。

「やはりあれは演技か。聞こえていたがあれで騙せると思ってるなら改めた方がいい」

「う……」

やっぱり恥ずかしい。わざわざ蒸し返さないでくれ。

俺は体温が上昇するのを感じた。

二度とやらない、あんなこと。

そう固く心に誓っていると、毅さんはそれに、と続けた。

「おまえはどうやら、本当に苦しいときは黙って堪える性分のようなだしな。そこにも違和感があった」

少し、意外だった。

俺を捕らえたときは、本当に虫けらを見るような目をしていたのに、こんなことを言われるなんて。

相変わらず怖い顔をしてるけれど。

「玲華が署名をしたら、どうなるんだ？」

この人がこの家のトップになる。それはわかる。

だけど玲華がどうなるのが気になった。

「もう誰も彼女は襲わないだろう。そんな必要はなくなるからな」

「そう、だよな」

「だが笹宮はどうかかわからない」

まだ比路は玲華を狙ってる。そういえば比路はどうしたんだろう。

「比路は……」

「笹宮を捕らえろと命じてあるが、まだ見つかっていない。やつ如きが逃げ切れるとは思えん。おそらく協力者がいるな。だが安心して、必ず捕らえて消す」

「消すって……殺すってことか？」

なんでここの奴らは、すんなりそういうことを言えるんだ。

ム力つくなんてもんじゃない。激しい嫌悪感がする。

「なぜ怒る？玲華にとってもその方が良かったらう」

「そんなの当たり前前だろ！それしか解決がないみたいじゃないか！

だったら比路は一生憎しみに囚われたままで終わってしまう。そんなのは嫌だ！」

「ならばどうする？大口を叩いたところで他の解決策など見出せてない。それが実情ではないのか？」

まったく届かず跳ね返された。そんな空虚なものを感じた。

確かに比路の想いは深い。ちょっとやそつとの説得で晴らせる恨みではないだろう。

「それに忘れてないか？小僧。おまえは人の心配をしている場合ではないぞ」

ふと、毅さんの声音が低くなった。

これ以上は戯言を聞いてやらない。そんな意志を感じ取れた。

自分の中にある威圧感を最大限に相手に与えるような、そんな空気が出ていた。

「おまえは不法侵入した。その罰はこれからだ。玲華が署名をしたからといって、俺は許す気はない」

「わかってる」

俺のことは……自分が犯した失態で、その報いがくるのなら、それは仕方のないことだ。

侵入することが普通より許されないうちやんと聞いていたんだ。比路が教えてくれたから。それから理事長にも、抹消されるつて。

知った上で来たんだから、いまさら後悔なんてしない。きつと過去に時間が遡ることができても、俺はこの家にきていたと思う。ただ、やり方は変えられたかもしれないけど……。

「準備が整いました」

そのときもう一人この部屋に入ってきた。

（あ、この人）

玲華のことを裏切った人だ。前田さんと呼んでいたっけ。

この人じゃないよな、拓真が言った人は。

もしそうなら最悪な状況なのではないだろうか。

なんにしても、どれほど玲華が信用していたのか知らないけれど、彼女を裏切ったことは許せない。自然と睨むように見てしまう。

「そうか、集客率はどうか？」

「まだ半分ほどでしょうか。それでも続々と集まっております」

「いよいよだな」

待ち構えるように毅さんは不敵な笑みをみせる。

本当に、これで良かったんだろうか。

玲華が署名して、それで玲華にとって望ましい結果になるんだろうか。

ちゃんとすべてを聞いていないから、俺にはそこが不安だった。

これまで署名しなかったのには目的があつてのことだって、予測はしていたんだけど。

(玲華……)

もう一度、ちゃんと玲華と話したい。そんな気分には陥った。

* * *

そこは全体の七割ぐらいが金色で出来ていた。窓とか絨毯以外の装飾品がすべてゴールドで統一されている。テーブルも椅子もゴールド。

ライトがなくても眩しいんじゃないだろうか。これは……。

絨毯はグレー系だけど、中央に赤い絨毯で通り道が作られている。バージンロードとかレッドカーペットみたいだ。

俺は世羅んちのパーティー会場しか行ったことないけれど、そこよりも広かった。

謁見の間って行ってたけれど、誰と誰が謁見するんだ。こんなに広いところで。

「まさかこの場で、このような形で継承できるとはな」

壇上上がったとき、毅さんがそう言っていた。

これまでのことを知らないけれど、その言葉には並々ならない重

みがあるみたいだった。

壇上の中央には玲華が署名するための台が置かれている。もちろん金色だ。

その後ろ側に俺は立たされていた。先ほどの見張りの男たちに後ろ手を捕まれていて動かせない。それは力づくで、腕力で対抗しても勝てないことがわかるほどだ。

だいたい四人ともガタイがすでにデカイから試すまでもない。

俺とは反対側に初めて見る人がいた。

この人が椿原さんというらしい。毅さんがそう呼んでいた。

フロアにはすでにたくさんの人がいた。みんなパーティーでもないのにキツチリとした格好をしている。

そして玲華が扉を開いてやってくるまで、そう時間はかからなかった。

皆に注目されながら中央に敷かれたカーペットを歩く。

一人だった。

久保田さんとは思って探したら、大勢の中の一人に紛れていた。

綾小路も同様だ。

近くに行くことを許されていないんだろうか。

だけど、いくら探しても比路も京香もいなかった。

玲華は一度だけ俺を見た。

すごく申し訳なさそうな顔をする。そんなのは見たくない。玲華のせいじゃないって言ってるのに。

だけど玲華はすぐに凜、とした空気に戻った。堂々と胸を張って壇上に上がってくる。

「よく逃げずに来たな」

「あたりまえよ。馬鹿にしないで」

「もう君子ぶるのは辞めたのか？」

「必要ないわ」

短いやり取りが目の前で繰り広げられる。玲華がちょっと機嫌が悪そうだった。

それから毅さんが持っていた用紙が台の上に置かれた。

「遺産分割協議書？」

玲華がその内容を怪訝な顔で読み上げる。

「いまとなつては、誓約書なんかよりこちらが確実だ。最終的には相続人である者には一人残さずサインさせ、完成させる。本来はおまえは未成年だから特別代理人を要するが、今回は特例だ。少し順序が違うが問題はない」

「用意周到ね。こうすれば独り占めできるってことね。でもみんな納得するかしら。特に清志郎様は」

「あいつのことはすでに手を打つてある。父がいない今、俺にたて突く奴はいない。おまえ以外にはな」

「そしてそのあたしには悠汰という弱みがある」

「そうだ。これでおまえも幕切れだ。あとはすんなり進むと思うとさすがに気持ち躍るな」

「躍るついでに悠汰も手放してもらえると有り難いわね」

「安心しろ。最も最悪な状況にはさせん。俺としても情状酌量の余地くらい考えている。ただ何も無しでは示しがつかないからな」

「初耳だわ」

なんか……。二人の間に火花が見えるのは気のせいだろうか。

玲華に遠慮がなくなっているからかもしれない。

俺はなす術がなかった。こんな形で玲華が動かされるのは納得できない。だけどここで暴れるのも彼女の足を引っ張ることになりそうで、どうしていいのかわからない。思考が霧の中にいるみたいだった。

「椿原。この書式でも父の遺言に対して有効、ということ間違いはないな」

「はい。問題ございません」

椿原さんはその内容を見ることなく頭を下げた。すでに確認させていたんだろう。

すると毅さんはマイクを通し、皆に呼びかけた。

「これから正式な継承式を執り行う。遺産分割協議書の内容は、いま玲華が持っている財産と権力のすべてを私に移すというものだ。つまり私が全権をもつ。私が父の跡を継ぐことに異を唱えるものは、今のうちに出てくるが良い」

玲華のものとは比べ物にならないほど強い声が、ピリツと会場に響き渡った。

静寂に包まれ、僅かでも声を発するものはいない。

思わず俺も息が止まった。息することすら許されない空気だったのだ。

「よろしい。皆承諾したものとみなす。以後不服を申し立てても通らぬものと思え。玲華、あとはおまえだ」

「はい」

玲華が一步前に出て台により近づいた。

あらかじめ用意されていた金色のペンを持つ。

ここにいる全員が玲華の動きを見つめていた。混沌としていた期間が終わるその瞬間を。

だけど玲華の手が止まった。

迷いがあるのだろうか。なかなか署名をしようとしなない。

「早くしろ、玲華」

小声で毅さんが急かす。

わかってるわ、と玲華は小さく呟いた。

そしてゆっくり記入し始める。

西龍院玲華つて一文字一文字しっかりと、噛み締めるように書いているように見えた。

だけど。

その途中。俺からは見えなくて、どの文字まで書いたかなんて知らない。

パンっ、という乾いた音がこの会場に響いた。

俺は目を睜る。

玲華が。

皆に背を向けて書いていた玲華から血が噴出した。背中を、撃たれた。

一度仰け反って、玲華はそのまま崩れ落ちた。

(え)

なんなんだ、これは。何が起こったんだ。

すぐには把握できない。

俺は撃ったやつを見た。レッドカーペットの始まりのところ。扉の前に一人の男が拳銃を真っ直ぐにこちらに向けていたままだった。

「加藤っ！貴様っ、また裏切る気か！」

久保田さんの怒鳴り声が静寂を破った。

そして、久保田さんの手にも拳銃が握り締められていて、それをその男に向かって発砲した。

なんで久保田さんがそんなもの持つてるんだろっ。

加藤って誰？

いや、そんなことよりも……。

「その男を出すな！取り押さえる！」

毅さんがマイクを通して叫ぶ。

それから遅れてあちらこちらから悲鳴が上がった。悲鳴と、何発かの発砲の音。

護衛たちがみんな拳銃を出していたのだ。

加藤という男はテーブルを立てかけ、その身を隠しながら発砲する。

もう誰がどれだけ撃ってるのかわからなくなった。一気に戦場と化していた。

他の人は地に伏して、逃げ惑っている。

(なんだよ、これ……)

この目の前で広げられている光景がすべて、映画を見ているようだった。現実から遠くて、よく、頭が働かない。

「ちっ。これでは助からんな」

毅さんが玲華を見ながら吐き捨てた。近づこうとしたところに――

発打ち込まれて、彼は護衛に護られた。

なんだって？なんと言った、いま……。

台が、邪魔で、よく見えない。

いや見たくない。見たくない現実があるようだ。

きつと見たら俺はどうなるかわからない。

(まさか、ほんとうに……？)

あたしになにがあっても復讐しない？

そう語り合っただのは昨夜のことだ。こんなにもはやく、その答えが表れるのか。

気づいたときには、俺の後ろにいた男たちは皆、殺さんについていた。盾となり護りながら壇上から降りる姿を目にした。

俺は自由になっていたんだ。もう制限されていない。

弾丸が飛ぼうが関係ない。周りがどんなことになるうとどうでも良かった。

俺は玲華に近づいた。

足元に跪く。

「うそだろ……こんなの……」

白系のワンピースが赤い血に染まっている。顔は青ざめている。

これは本当に玲華なんだろうか……。

俺は確かめるように、玲華を抱き上げた。まだ温かい。

これが冷たくなっていくのか？信じられない。

顔に触れてもピクリとも動かなかった。

一気に衝撃が全身を駆け巡った。それに反して上手く動かない体。

指一本動かすのに、すごく時間が要った。

少しでも体温を取り込むように、全身で上から玲華を抱き締める。

「悠汰……」

そのとき、耳元に小さく呟く声が聞こえた。

「れっ」

「黙って、悠汰。そのまま、姿勢を変えないで」

玲華の声だ。

小さいけれどしっかりと聞こえる。幻聴……ではないよな……。確認したいのに、抱き締めたままで動くなと言われてしまって、為す術がない。

「黙って聞いてね。実はね、これも計画なのよ」
（なんだって？）

俺は一瞬怒りが込みあがった。だけど、怒鳴るとバレるっていうことが頭を掠めて、何とか抑制した。

そしたら、代わりに。
涙が溢れてきた。

ほっとしたせいだと思う。あんなに泣きたくなっても耐えていたのに、あっさりと俺は安堵感から泣いてしまった。

「なんだよ、それ……」

どうせ銃撃戦で声なんて聞こえてない。俺は玲華の耳元に顔を埋めて隠しながら、こっそり弱音を吐いた。

「俺……おまえといると、もたない」

「泣いてるの？悠汰」

「うるせえ」

何度心臓が止まりそうになったか分からない。玲華との関係だつて、もう駄目だと、何度諦めそうになったか……。

いつになったら、安息が来るんだろう。もっと安心して付き合いたいのに。

「ごめんね。こんな助け方しか出来なくて」

「……おまえ、今回謝りすぎ」

俺は噛み締めるように玲華の体を抱き締めた。

もう離したくない。離さないと思った。

それでも気になることは山ほどあった。鼻水をすすって、深呼吸をしてから口を開く。

「加藤って誰だよ」

「加藤さんね、幸祐に手を貸して一時期に地下に閉じ込めていた人なの。会わなかった？同じ階にいたはずだけど」

「俺、目隠しされてたから」

誰もいないんだと思ってた。

じゃあ、あそこでのやり取りは全部聞かれてたってことか。なんか恥ずかしいじゃないか。

「そうなんだ。でね、久保田さんが惚れたみたいでね。ずっとアップローチしてて、ようやくさつき口説き落としたみたい」

「なんだよ、その言い方。気持ち悪い」

「それより血のりで汚れちゃうわよ」

「関係ねえよ。どうせ俺、二日風呂に入ってないし……」

「げっ。そうだった……。ちよつと離れなさいよ」

突然玲華の態度が変わって、腕で背中を叩かれ、その足はバタついていた。

ばれるぞ、こら。

「おまえ時々すげえ失礼だよ」

しょうがねえだろ。別に好きで俺も不潔にしているわけじゃない。でも俺は意地でも離してやらない。

離せなかった。

すると玲華も力を抜いた。声の調子を落として言う。

「ね、悠汰。本当はいつまでもこっすしてられないの。こっそり。不自然にならないように周り見て」

また簡単に難しいことを……。

あんな寸劇して落ち込んでる後で、不自然にならないようにとかわざわざ付けるか？余計に意識するじゃないか。

不満はあったけど、確かにいま本物の弾丸に当たっては元も子もない。

だから俺はそつと首だけ持ち上げた。

出入り口の扉がひとつだけ開かれて、そこから人々が逃げながら退出していた。

加藤さんは隠れているみたいですがすぐには見つからないけれど、久保田さんは派手に撃っている。多分加藤さんはあの先にいるんだろ

う。大きなテーブルの先に。

だけどよくよく見ていると、久保田さんの撃つ場所は定まっていなかった。なるほど、混乱させる為だけの作戦か。

毅さんは怒鳴り声を上げて指示している。

「どう？誰かこっちに注意払ってる？」

「全然。それどころじゃないみたいだ」

護衛たちは加藤さんに近づこうとするんだけど、そんなときに限って久保田さんの銃が逸れてその道を阻んでいた。

いや、よく見るともう一人、久保田さんと同じような行動をしている人がいる。

存在感が影みたいに薄くて、地味めな感じの。

「あ……」

あの人が拓真が病院で会ったっていう人？

「どうしたの？」

「なあ、おまえの命令で俺を病院に連れて行ってくれた人って」

「ああ。千石さん？」

千石というのか。じゃあ、前田じゃないんだ。ということはやっぱりあの人？

なんだそつか。やっぱり久保田さん以外にもちゃんと護ってくれる人はいたんだ。

「そういうことでしたか……」

不意に俺の後ろの方向から声が降ってきた。

一瞬マジでゾツとした。全く気配を感じなかったからだ。

「前田さん」

玲華が呟く。

確かに前田がそこに立っていた。無表情さに変化がない。

「てめえ！」

「お静かに。そういうことでしたらお早めに去られた方が適切でしょう。いつ毅様がこちらに注意を払われるかわからない」

「どづいこと？」

玲華が驚いていた。

それを無視して前田は俺の前にまわり込む。

「私が連れて行きましょう。控え室でよろしいですか？」

「おい」

何も答えてないのに、強引に前田は玲華を抱え上げた。いとも簡単に、軽々と。

「離せよ！」

「悠汰、しっ」

止めようとした俺になぜか玲華が人差し指を唇にあてていた。本人は抵抗することなく、そのまま上手かみての方に連れて行かれた。

慌てて俺もついて行く。

チャリとフロアを見たけど、まだ誰もこちらを見てなかった。ここで騒ぐことが一番の問題だって解るけど、それでもなんであんなに冷静なんだよ、あいつは。

フロアから完全に隠れた先の控え室で、前田さんは玲華を降ろす。見た目血みどろなのに、しっかりと玲華は立った。

良かった。本当に怪我はひとつもないみたいだ。

「どういふことが説明してくれるかしら？前田さん」

「その時間は無いかと思われます。私ももう行かねば怪しまれる。

ただ、私はひとつの駒に過ぎないということです。今の貴女でしたら、その意味がお解かりになれるかと……」

「解ったわ」

えっ……解ったのか？今の説明で？

俺には正直まったくわからないけど。

「貴女は千石は信用したけれど、我々は信じなかった。しかしそれでいい。それで正解だったんです」

前田さんは本当に玲華を隠しただけで、それだけ言うともう一度あのフロアに戻っていった。

「玲華、俺には何がなんだか……」

「逃げながら話すわ。悠汰、スイッチを探して」

「スイッチチ？」

「このどこかに隠し通路を開くスイッチがあるはずなの」
「はあ？」

なんだその怪しげなものは。

玲華は言いながらも壁を触りだした。ってこのどこかって、この広い部屋中のどこかか？どれだけの広範囲だ。

ゲツソリしながらも俺はとりあえず床を触ってみる。

「なあ、このままあのドアから出たら駄目なのかよ」

「逃げてきた親戚たちと会いたいなの？いまなら完全に捕まるわね」

「おまえどこまでも冷静だな。だから玲華っていつのか？」

冷静と玲華……。似てるかもしれない。

どっちも令つて入ってるし、名は体を現すって本当だったんだ。

「なにくだらないうこと言ってるのよ！いつとくけど、まだ全然安全じゃないんだからね」

「そうだよな」

玲華が壇上から消えたことが解れば、まず真っ先に探しに来られるのはここだと思う。

ああああつ、そう考えたら焦りが出てきた。

俺は目を皿のようにしてスイッチとやらを探し回る。

しかしこの絨毯。変な模様。ペルシャ絨毯っていうのか？

なんか端の方に黒い丸の模様が。

(まる……？)

一部だけ浮いている丸があった。何十個もあるうちのひとつ。

俺は絨毯を剥がしてみた。

すると、フローリングに自然に反した四角い線があった。指が一本はいる穴があって、そこに突っ込むとすぐ開いた。

中にはボタン。

「これじゃねえのか？」

「そうよ！それよ！あたしに押させて！」

なんか玲華が振り向いてすごく感動していた。

「いいけどさ……」

別にボタンなんかに興味はないし。

玲華が跳ねるように近づいて、ボタンを押すと花瓶が置いてあった台が勝手に動く。

そして壁紙が自然と左にずれると、そこに扉が開かれた。

「おおっ」

「すごいわ！なんか興奮しちゃう！」

ええっ……。確かにすごいけど、興奮するほどか？

呆れながらも俺はボタンがあった蓋を閉じ、絨毯を元のように戻した。

「いままで驚くことが多かったし、そんな状況じゃなかったから楽しむ暇がなくて、実はウズウズしてたの」

「いまでも充分危険な状況なんだろう？」

「さっ、行きましょ！」

「……ああ」

まったく話を聞いてない、大はしゃぎな玲華に押されながら、俺はその道を先に入った。中にもボタンがあつて、玲華がそれを押すと細い扉が閉まった。

よく出来てんな。

感心していると外の方から大声が聞こえた。

「玲華を探せ！そんなに遠くには行ってないはずだ！玲華以外は殺しても構わん！」

殺さんの声。

俺たちは思わず顔を見合わせる。

「ばれたわね」

「そうだな」

「とりあえず進みましょうか」

「そうだな……」

玲華も沈静されたみたいに着いた。

ほんと危機一髪だったんだな。今頃わかる。

俺は玲華を先頭に細い石畳の道を走り出した。

「それで？聞きたいことが山ほどあるんだけど……」

「もうちよつと待てないの？」

「逃げながら話してくれるんだろ」

「じゃあ何から聞きたい？」

「とりあえずこの展開の説明頼む」

「ちつめんどくさいわね」

いま舌打ちしたか？おい。

「でもここで内緒にしたら久保田さんと同じね。いいわ、話してあげる。つつつても、あたしたちにも予測を超えた展開の早さだったのよ。計画が狂って困っちゃったわ」

「そうかよ」

なんだよその言いようは。なんだか脱力する。

「でも人が集まる時間とかあったから助かったわ。その間に打ち合わせしといたの。ちよつと早くなっただけで血のりとか拳銃って用意してあったからさ」

「マジ？」

「そうなの。久保田さんが外出したときに調達してきたのよ。この連中がそういう危ないもの持つてるって知った段階でだって、でもあたしにもずつと内緒にしてたんだから信じられないわ！」

玲華はなんだか怒りだした。

俺も全く同じ仕打ちをされたはずなんだけど……。

「そうそう、悠汰にお願いした“あれ”のときに助け出した二人もね、ここにつれてくるようにお願いしてあったの」

玲華が失速した。

一人分ほどこしか通れないその通路で、俺も自然と止まる。

変だ、と気づいたからその先を垣間見た。

「玲華様」

同じ顔、同じスタイルの二人の少女がそこに立っていた。この二人が、俺の小芝居の間に助け出された子たちということか。

玲華は小走りに駆け寄って、ひつしと一人を抱き締めた。

「良かった。無事だったのね、亜衣ちゃん」

「はい。千石さまに助けていただきました」

「玲華様もご無事で」

「ええ。良かったわ。あなたたちが離れ離れにならなくて」

「麻衣からすべて聞きました。有り難う御座いました玲華様」

「本当に感謝してもしたりません」

「いいのよ。本当に良かった」

玲華は公平にハグしていた。感動のご対面のようにだけど、なにも知らない俺は少し離れて見ているしかない。

その後、思い出したように玲華は二人を紹介してくれた。

「亜衣ちゃん、麻衣ちゃん。見分けつく？」

「玲華様……」

なぜか嬉々として言ってくる玲華に、亜衣と呼ばれた方が脱力していた。

「まあ……なんとなく……」

「ほんとっ？立ち位置入れ替えてテストしてみる？」

「玲華様！そんなお時間ないのではっ？」

今度は麻衣と呼ばれた方が怒り出していた。この流れの意味が、まったく解らない。

「それもそうね。このままこの敷地から出なくちゃいけないのよ、悠汰」

「そうなのかよ」

確かにこんなにメチャクチャな状況になったいま、解決策は脱出ということになるのだろう。脱出先を確保しているからこそ、強引にこういう方向に持っていったというわけだ。

俺たちはまた先へ急ぐことにした。玲華、俺、麻衣、亜衣の順番だ。

走ると同時に、玲華は説明の続きをしてくれる。

「で？どこから逃げるって？」

「こついつぶうに隠された道がたくさんあるのよ。その中のひとつが外に続いているの。場所はついてからの楽しみ」

「あんまり良い展開が期待できないんだけど！」

最後の一言で悪寒が走る。

そう言われてついて行って、良かった試しがない。

「いいから先を急ぐ」

駄目だ。言う気はないようだ。俺は悪寒の正体をすぐ後ろの二人に聞いた。

「おまえら知ってる？」

すると麻衣は強張った表情を向け、亜衣は少し遅れて必死についてきているところだった。

「あ、あの……」

「なに脅してんのよ」

「どこがだよ。普通に聞いただけだろ」

「この二人、妙にあたしに気を遣ってるのよ。とくに麻衣ちゃん。あたしを差し置いて話してはいけないとか考えてるから、聞いても無駄よ」

「なんだ？それ……」

「わたくしたちはただの使用人ですので」

澄ました顔でそう返されてしまった。

「使用人でも言っていていいと思うけど……」

俺はぼやきを止められなくて、つい口に出した。

そのとき視線を上の方に向けていたため、突然立ち止まった玲華に前方不注意でぶつかりかけた。

「あつぶねえ……」

なんとか体を斜めにして横に立つ。

文句を言おうと玲華を見ると、彼女は厳しい顔を前に向けていた。視線を追うと、その先にT字路のように分かれ道があつて、そこに京香が立っていた。

まだ生気が失われたような表情をしている。

そしてその隣に、比紹がいた。

視線を外さないまま玲華が口を開く。

「あのね、久保田さんは加藤さんが誰に操られていたのか言い当てたのよ。それでずつと頑なだった加藤さんは素直に協力してくれたの。京香も捕まっていたけどその時に開放したのよ」

さすが久保田さんだと思う。やることに抜かりがない。

「それで、比紹はどうしてここにいいのかしら？」

ここに比紹がいるはずない、ということだろうか。

比紹はなにも言わずに拳銃を取り出した。

こいつも、持っているのか。

俺は舌打ちをしながら強引に玲華の前に出た。絶対に玲華を狙わせたりしない。

「その拳銃って、もしかして」

後ろから玲華が声を発する。

「知ってるの？玲華。そう、稔さんのだよ。ぼくにくれたんだ。それとこの通路も稔さんから聞いた」

「それは、嘘ね」

「ふん。徹底的にぼくのごときは信じられないみたいだね。まあ、どうでもいいけど」

憎々しく比紹は吐き捨てた。

その手にあるもののせいで、俺たちはその先に進むことが出来ない。

「京香は、どうしたんだ？」

「ああ。こいつ？なんかさっきその辺で拾ったんだよ。ぼくを見るとすぐ怯えた顔をするんだ。なんだか面白い玩具おもちゃみたいでさ」

「やめるよ。もうやめてやれよ」

彼女をこれ以上傷つけなくてもいいだろう。

京香は比紹のことを好きだったのに。好きだったって俺に言ったのに。

「そう言うなら、きみが助けてあげればいいよ。そうだ、今度は本

当にキスしてあげなよ。それで満足して治るんじゃない？こいつアバズレみたいだからさ」

「比紹！」

感覚が鈍っているからといって、この会話が聞こえてないわけではないはずだ。

「どんなに酷い言葉かってことぐらい、俺にもわかる。」

「ほんと、に……？」

ボソリと玲華が呟いた。

そういえば、玲華にもあの写真見られてるんだった。そしてこの反応はやっぱり誤解されてるみたいだ。

「だけど俺は後ろを振り向く余裕はなかった。」

「まずはあの拳銃をなんとかしないとイケない。」

「どきなよ、悠汰くん。ぼくの狙いは玲華だ。このままだときみも死ぬよ」

「そんな脅しに屈するかよ」

「いまさら、俺が自分の命を玲華より優先することはあり得ない。」

捕らえられたとき、すぐに死んでもおかしくなかったんだ。それがなくてもあり得なかった。

「どいて悠汰」

「だけど玲華もそんなことを言う。いつも俺たちは譲り合ってばかりだ。玲華がもっと弱くて、助けてって毎度言ってくるタイプなら良かったのに。」

「いやだ」

比紹を睨みつけたまま、俺は断る。

「だけど、きつとこんな玲華だから俺は好きになったんだ。」

「それなのに。」

いきなり膝がガクンと折れた。玲華が俺の膝関節の裏を、自分の膝でしゃがむようにして押したんだと後からわかった。

（てめえ……）

その隙に玲華が俺より前に出る。

「玲華！」

「あたしを撃てばいいわ！」

制止する俺の声と、玲華がそう言って両手を広げるのが同時にな
った。

「美しい愛情劇だね。反吐が出るよ！」

俺がまた玲華の前に出ないと、って思った瞬間。

先ほどフロアでも聞いた乾いた音が、この狭い空間に反響した。

第四章・・・3

玲華が撃たれた。

自分が電撃を食らうよりも、それは衝撃的だった。だけど。

(え……)

玲華は立ったままだった。少しよろけたけれど、その程度だ。広げた両腕も下がらない。俺の前から居なくならない。いや、居なくなったら困るんだだけど。

「なんだと？」

比路も驚いていた。そうだよな。俺だってびっくりした。

「どこを狙ってるのかしら？当たったのは脇腹ね。ここじゃ死なないわよ、比路」

自信たっぷり、いつもの強気な口調で玲華は言う。

「防弾チョッキ？どこまでもふざけてるね、きみは」

比路が言う言葉で、ようやく俺もこの事態が飲み込めた。

はあ。

本当にびっくりした。

また、心臓が止まるかと思った。

(そうならそうと……！)

それでまた、俺は怒りたい気分になった。どこまでこいつは俺を驚かせれば気が済むんだろう。

「玲華。もう引っ込んでろ」

俺は玲華の肩を掴んだ。

そのまま前に出て比路に近づく。

「ちよつと！」

不満そうな玲華を目で制する。

防弾チョッキだって衝撃はくる。それに今度は頭を狙われるかもしれない。実際には致命傷になるところを比路が撃てなくても、流

れ弾で当たる可能性だつてある。そんなことになったら終わりだ。

「なに來てるの？悠汰くん。誰が來て良いつて言った？」

「比紹、おまえに人は殺せない。そうだろ？」

「だけど、なぜかそう確信していた。」

きつとそれを言つと玲華とか久保田さんには、ただの思い込みだと一喝されそうだけど。

比紹は口だけだ。良くも悪くも……。

本気を出していたなら、とつくに俺はどうにかなつていなければおかしい。

いまだつてこんなに近づいていつてるのに、比路は撃たない。表情こそ毅然としているけれど、その手は止まつたままだ。

「うるさいんだよ。きみはそんなに死にたいんだ？」

「……おまえが言つたんだろ。京香は俺が助ければいいつて」

「へえ……。じゃあ本気でキスするんだ？彼女の前で？そつか。意外と神経図太いもんね、簡単だよねえ」

「黙つてろ！」

口数が多いのは誤魔化したいからだ。

会つたときは、俺にも分かりやすく理屈を並べてくれていると思つていた。確かに分かりやすく、すんなり入り込んできたけど。

ではなぜいまは何も届いてこない？

それは、いまブレてるのが比紹の方だからだ。一定の感情を保てていないんだ。

俺は京香の前に立つた。比紹まではあと二歩分。

「なんで俺がここまで來るのを許してんだよ」

「なに？」

恫喝どっかつすることさえやらないで、ただ突つ立つてるだけだった。隙だらけで。

京香を俺の後ろに押しやり、さらに右手を伸ばして比紹をぶん殴つた。

比紹は咄嗟のことに驚いて発砲した。だけど、倒れるときでそれ

は石の天井に当たる。

簡単だった。

いままで拘こたわつてたのが嘘のように体が動いた。怒り以外で誰かを殴るのは初めてだった。

目を覚ますための一発。

こんな殴り方もあるんだって瞬時に思った。

そのまま俺は馬乗りになって、比紹を押さえつける。

「おまえ、喧嘩すらししたことないだろ」

いつも本当の自分を笑って隠して。それで切り抜けてきたように見える。

「なに、偉そうに！暴力振るう奴がそんなに偉いかよ！」

「偉くない。絶対偉くない！……でも普段抑えて、その陰で自分より弱い人間に当たるのは、もっと質が悪い！」

まるで、自分自身に言っているような気分になった。

俺も苛ついて、玲華に手を挙げようとした。自分の欲望ばかりを押し通そうとした。

最低なのは俺も同じだ。人のことを言えた義理ではない。

でもだからこそ、解るからこそ、比紹に伝えたかったんだ。比紹にも解ってほしかった。

「いつからぼくより上にいるんだよ！きみなんか、ぼくがいなきやここまで出来なかった！それを認めて感謝してるって言ったじゃないか！」

「初めから、比紹は許してくれていた！俺がタメ口きいても怒らなかつた！でも、どうしても比紹は友達には思えなかつたんだ……」

繰り返し、問いかけた。

比紹は俺にとってなんだろう？って。

比紹にとって、俺はなに？

それは。

ただの玲華の弱点だ。だからだ。片方がそう思ってるんじゃない、友達とはいえない。

それでも比紹も京香も憎めないのは。

(同じなんだ……)

憧れて憧れて、ときに許せない人がいる。立場が変われたらと、何度思ったかわからない。

俺も同じなんだ。嫉妬してたんだ。

だから俺にとって比紹は、同類。決して届かない星を追う側なんだ。

「当たり前だ！きみと友達なんてぞっとするよ！」

「そうかよ！俺は同じ穴のムジナだと思っけどな！」

「ふざけたことを！きみはぼくよりずっと下等な生き物だ。ぼくが操る側できみは操られる側なんだよ！」

「比紹は、逃げていていろいろ理由をつけて逃げるだけだろ！最初は俺を殺せなくて、玲華に逃げた。だけどその玲華だって結局殺せないんだ！」

「うるさい！どけよ！」

比紹は力だけは強かった。俺を押し退け、再び拳銃に飛びかかるうとする。

俺は咄嗟に地を蹴り、その上に覆い被さった。そして比紹をもう一度押さえ込む。

必死だった。絶対にこれを比紹に渡してはいけなと思った。

これは本人にその気がなくても、人を死に至らしめてしまうな残酷な物だから。間違っても比紹を殺人者にはしない。

その想いのせいかもしれない。比紹の力に俺は勝った。いくら振り払おうとされても、比紹の胸ぐらと肩を押さえつけて、テコでも動かなかった。

「なんだよ！きみは泣き言だけ言って怯えていればいいんだよ！だれが逃げてるって？きみと一緒にしないでくれるっ！？」

「泣き言を言うのも逃げるのも、もう飽きたんだよ……。比紹、おまえも飽きないか？疲れないか？そんなふうに憎しみを糧に生きるのは」

なぜか、心が静かになった。

怒りとか苛立ちとかも消えていて、ただ哀しさだけが残った。

どうすれば比紹にわかつてもらえるんだろうってことより、どうすれば比紹は心安らぐんだろうって……そういうことが気になって。「なんか俺にはよくわからないけど……。比紹を見ると、その先には幸せはない気がするんだよ。どうしても見えないんだよ、その先が！このまま墮ちる姿を俺が見たくないんだ！」

「余計なお世話、なんだよ……」

目を見開きながらも、比紹は呟く。あきらかに勢いが収まっていた。抵抗してくる力が弱いものに変わった。

「京香。大丈夫よ。もう大丈夫だからね」

ふと途切れた不協和音の隙間から、玲華の声が耳に届いてきた。

彼女は京香を抱きしめていた。小さな子どもを慰めるように、何度も何度も背中をさすっている。

その京香の後姿は、必死に耳を塞ぎ、小刻みに震えて小さくなっていた。

「馬鹿な男たち！ちよつとはこつちのことも考えなさいよね」

なぜかひと括りにされて叱られた。

「怯えなくてもいいわ、京香。怖がらなくていいの。みんな必死に生きているだけなのよ。だからたまには怒鳴っちゃうし、行き過ぎると酷いことを言っちゃったり暴力的なことをしちゃったりするの」

玲華はさすりながら、京香に囁いていた。慈悲深げに笑みまで乗せて。

後ろなんか無視して怒鳴り合っていたから、恐怖感を与えてしまったんだと気づく。これには反省するしかない。

それで俺は比紹を離れた。比紹ももう暴れなくて、その隙に拳銃を取りに行く。

「それが正しいなんて言わないわ。実際それであなたはすごく傷ついたものね。でもね、だからこそあなたも必死で生きればいいんだわ。比紹なんて見返してやればいいのよ。酷いことを言わせないよ

うに、思いとどまらせるくらい魅力的な女になって、後悔させてやればいいのかよ」

座ったままにも言わないで、比紹は複雑そうな顔を背けた。

俺も、言わなかった。玲華が京香を慰める様を見ていたいと思っ
た。

それは一番俺が好きで玲華の姿だから。

「わたしは玲華が嫌い……。憎い……」

京香から声が漏れる。でもそれは口癖を言うみたいに、脳で考え
ないで出た言葉だと思った。まだ、朦朧とした様子が伝わってきた
から。

「いいわ。いくらでも憎めばいいわ。あたしは構わない。受けて立
つんだから。そうやって小さい頃からライバルでいたじゃない？今
更そんなこと言われても、知ってるわとしか答えられないのよ。た
だ、本当にそれで京香が幸せになれるなら、だけどね。どうせなら、
ちゃんとしたライバル関係になればいいじゃない。本当のライバル
って知ってる？理解を共に出来たりもするのよ」

「ライ、バル……」

「そう。あたしたちはこんな家に縛られているという共通点がある
わ。ねえ、一緒にそんなもの捨てない？きつと軽くなって、いまま
で出来なかったことも出来ちゃったりするわよ。そしたらあたしも
負けちゃうかもしれないわね」

玲華はちゃんと解ってる。京香が嫉妬して目の敵かたきにしたこと、
わかっていたんだ。そのうえで、ちゃんと見捨てないで……。

(自分も危険なのに、人のことばかりで)

だから、俺も放っておけないんだ。

もしかしたら一人で頑張りすぎるんじゃないかと思って、助けた
くなるんだ。

「玲華に、勝てる……。なにで？」

「京香？」

少しだけ自分より低い身長身長の京香を、玲華は覗き込んで見ていた。

「何を持って勝ったことになるんだろう……。成績？運動？それとも……」

少し語り、彼女はまた黙り込んでしまった。

消してしまった感情の奥底で、断続的に思考は続いているようだ。

（まだ、壊れきっていない）

希望はある。この世のすべてを否定するまでには至ってない。

（寂しいからな……）

なにも見ないことは傷つかなくて済むけれど、結局一人だ。

自分もそうだった。余計なものは排除した。何度も。

そういった世界から、いろんな人のおかげで脱け出したんだ。と

きに訴えられ、ときに優しく諭され、ときには叱られながら。

出るときが一番きつかった気がする。いまでも完全には抜けきって

いない気もする。

（それでも）

今の方が良い。

だから京香も、逃げないでほしいって思った。それから、あと一

押しがあればもっと彼女もこちらに意識を向けるんじゃないかと思

った。

だけど、もう玲華はなにも言わない。

京香の言いかけたその先。それはおそらく。

（さまざまな、愛）

愛されるということ。

質の高い愛が玲華には与えられていると彼女は思っている。俺に

もそのようなことを言った。

どうして玲華にはいつもそういう人ばかり集まるの？

そう言って悔しがって……たぶん泣いていた。

（話半分にししか聞いてやらなかったな……）

あのとき。

俺にも余裕がなかったなんて、ただの言い訳にしかならない。

しばし重い沈黙が続いた中で、比呂が上半身起こして、俺に向か

つて片手を伸ばした。

「返しなよ、それ。そんなもの持っていても仕方ないよね」

俺はずっと隙だらけだったのに、強引に奪う真似もしなくてどこか落ち着いていた。

「ぼくたちは追われてる。まだ必要なんだ」

比紹は、無表情だった。いや、少し睨んでるけれど、あきらかにその目には力がない。

どんな本音を隠しているのか、俺は読めなかった。

京香越しに玲華がこちらを窺うように見ていたけれど、やはりなにも口を挟まない。

それはたぶん。

比紹がぼくたちと言ったからだ。きつと、そこには京香が含まれている。変化があった。

ちよつと嬉しくなる。でもそんな状況じゃないから、俺は笑みをかみ殺した。

「ああ。確かに俺には邪魔だ。でも比紹にも必要ないだろ」

「勝手に決めないでくれる？殺さなくなつて防衛するためには必要なんだよ」

「俺たちと一緒に逃げようぜ、比紹。そうすればこんなもの使わなくてもいい」

どんな作戦か、まだ俺は全部を知らない。

それでも久保田さんの作戦だし、玲華だつて持ってないってことは、こちらの道はまだ安全なんじゃないかと思った。

比紹は虚につかれたようで、今度は言葉を失っていた。

「この家にいる必要なんてもう無いだろ。玲華も俺もいなくなるんだ」

「やっぱり、きみは馬鹿だ。殺す側の人間と一緒に逃げるなんて」
「だから比紹は殺さないって」

いくら馬鹿と言われても、これだけ確信してるんだ。だからしょうがないだろ。

なぜなんて俺にも分からない。理由を聞かれたって、そんなに頭は良くないんだ。説明できる自信はない。

だけどふと、独断で進めすぎたことに気づいた。

しまった。玲華の意志を聞いてなかった。

「玲華、良いよな？」

「別にあたしは構わないわよ。馬鹿がもう二人増えたところで補ってやるわよ」

ふんと鼻で息を鳴らしたけど、玲華は傲然と笑った。よくする、強気な笑みだ。

二人のなかに京香が含まれている。

それが俺と同じ気持ちなんだと感じて、すごく嬉しくなった。馬鹿には俺も含まれているだろうけど、そんなことは気にならない。

「なるほどね。なかなか面白い展開になってるね」

比紹が立ち上がったとき、ここにもう一人別の男の声が入り込んできた。右の細道から、初めて見る顔が近づいてくる。

「誰だ？」

「きみとは初めまして、だね。玲華の父親の弟だよ」

「え？」

「稔さん」

あまり歓迎しているとは言い難い顔で、比紹がその人を見て呟いた。

稔さんと呼ばれた男がこちらに近づき、中央に出てくると、玲華も反応した。

「稔叔父様。いままでどこにいたの？」

玲華から特に緊迫したものは感じない。それでも怪訝な表情をしていたから、俺は判断を決めかねていた。警戒すべき人物なんだろうか？

「ちよつとね。比紹くんがおれのものを持ち出しちゃったからね。返してもらえるかな？それはおれのだ」

後半は、俺に向かって言われた。それで拳銃のことだって解った。

「待てよ。弟って、叔父って……えつと……」

「ああ。言つとくけど義理じゃないよ。正式な兄弟だ」

「ええっ！」

つまり理事長と毅さんと兄弟？

全然違うじゃねえか！ここには何人も義理の兄弟姉妹がいるって聞いているけど、父親も母親も同じで、なんでこんなに違うんだ？

「驚いてるね。みんな初めは驚くんだよ。なんでだろう？」

「それは当然だわ。共通点といえば個性が強すぎるのところだけよ。なんつー見も蓋もない言い方……」。

とりあえず俺はそこにはこれ以上触れないようにしようと思った。

「で？これって返して大丈夫なのか？」

「悠汰はどう思う？」

京香を抱き締めたまま、鋭い目で言う。

(俺に聞くなよ……)

どうするんだよ、これ。俺だって出来ればこんなの持っていたくないんだけど。

ちらりと稔さんを見てみた。

穏やかな笑みのままだ。けどこういう笑顔に騙されてはいけないことを、俺は学んだばかりであって結果迷う。

「これ取り返してどうするんですか？」

「普通聞く？そんなこと。面白いね、きみ。玲華が選んだ理由がわかるよ」

クツと咽喉を鳴らして稔さんは笑った。

「まったく正反対なことを言われる方が多いんですけど……」

「いまだけじゃない。ずっと聴いていたよ。きみの言動は」

「は？」

言っていることがまったくわからない。

玲華が口を挟んだ。

「除き趣味なの、その人。いやらしいことに盗聴器であっちこっちの会話を聴いてるのよ」

「げっ」

久保田さんでさえ発信器で止めていたのに。

そんなものあったのか、ここには。

「もしかして玲華、気づいていた？」

「って言うってことは、当たり前なのね。……昨日、もしかしたらと思っただのよ」

「おれはカマをかけられたて見事にはまっちゃったわけか」

「たまたまよ。久保田さんはどうかわからないけどね」

俺にはわからない話を二人はしていた。

玲華が厳しい表情のままだ。

（なんなんだろう、この人）

掴みどころのない人だ。

比紹もそういうところがあるけれど、彼よりも一枚上手な感じがある。それは比紹がどこか用心してるから。先ほどから何も喋ってないから感じたことだ。

「それで、あんたは味方なのか？それとも敵？」

なんかはつきりしなくて苛々した。

きつとこんなことしてる時間はないはずなんだ。それなのに玲華でさえ読めない行動をしているんだから。明確にさせたい。

「さあね。味方じゃないし敵でもないんだな、これが」

「じゃあこれは渡せない」

「それも困るんだけど」

「知らねえよ。嫌なら目的をはつきりさせるよ。なにに使うんだ？鋭く切り込んだら稔さんは仕方なさそうに息だけで笑った。

「きみたちと一緒に連れていってもらおうと思ってね。この先には兄がいる。おれも力になるよ」

「騙されたら駄目だよ。この人、ずっとこの家のことを調べてたみたいだ。建物だけじゃない、人間関係もね。これを拳銃と一緒に見つけたんだよ」

比紹が手帳サイズの一冊のノートを出してきた。

その中から一ページ選んで開き、俺につきつける。

「なんだこれ……」

「この家系図じゃない」

京香ごとよたよたと近寄ってきて、玲華も覗き込む。離してやれよ、と言いたくなつたのはなぜだろう……。

麻衣と亜衣も集まつた。控え目で、なにも意見を挟まないけれど。「それだけじゃない。誰と誰が裏で手を組んでるとか、実は嫌い合つてるとか、どこに盗聴器が取り付けられているとか全部書いてあるよ」

「なるほどね……。あたしたちがノドから手が出るほど知りたかつた情報がびっしりね」

「ここ見てよ。浩祐くんと関係があつた杏里さんは、稔さんと元々付き合つてたんだ。浩祐くんは稔さんから女を奪つてたんだよね」

「嫌な言い方をするね、きみは」

暴かれたというのに、稔さんの表情には変化がない。言葉だけが迷惑あはそうだった。

「あつ。わたくしたちは清志郎様と繋がつてることになってます」

「ひどい！取り消してください！」

一緒に見ていた亜衣と麻衣が真剣に稔さんに訴えた。

「ひどいって事実じゃないの」

「違います。改心しました」

冷やかな目線を玲華が向けると、麻衣は涙目になって訂正していた。

「清志郎……つて、あいつか」

俺の中に最初に息巻いていた男の顔が浮かぶ。あいつと、この双子が共犯だった？

（また玲華は……）

お人好しなのか公平に物事を捉えているのか不明だ。

でも俺も人のこと言えない。比紹を助けたいって思うのだから。

「そういうことだったの。稔叔父様はやっぱり嘘をついていたのね」

「浩祐を殺した理由が女性絡みだったって？」

「違うわ。あなたは杏里をも庇ってるんじゃないの？」

「ちよつと待て……。なんだ、この展開は。なんの話だ？」

途中からここにいる俺にとっては、わからないことが多すぎる。

まず杏里って誰？この人が幸祐という男を殺した犯人？

「それは違う。杏里とはそこまで深い仲ではなかった。そういう勘違いのされかたは心外だな」

「あなた、あたしのところに来る前に、杏里の部屋から出てくることを久保田さんに目撃されてるのよ」

「そうなの？それは困ったな……」

どこか悠長に聞こえる口調で、だけど稔さんは険しい表情になった。

「さつさと白状しなさいよ。杏里と何を話していたの？久保田さんには話すなって釘を刺したのもあなたね？」

「まったく。きみたちの話を聴かなければよかつたな……」

腕を腰に当てて、本当に参っているように呟いた。

否定も肯定もしていない。

俺は話の内容はわからないけれど、この人がどういう人か見抜こうとして、ただ黙ってじつと見ていた。

「聴いてしまふときみの気持ちまで知ってしまったて、思うように動けないからね」

「そんなことは無用よ。あたしはとっくに捨てているわ」

「そうだね。胸中の奥底まではわからないけど、きみは立派に捨てていたね、おれたちへの情けを。知ったときはおれは感動さえ覚え

たよ。おれには到底出来ない」

「わざと遠まわしに話してない？」

比紹がとつと口を挟んだ。どこか不満そうだ。

確かに傍から聞いていただけでは、なんのことだか全くわからない。

それに答えたのは稔さんの方だった。

「いずれわかるよ。このまま一緒に行けばね」

「そこには、あたしが知りたいことも含まれているのかしら？」

「あまりおれを苛めないでくれる？きみに尋問されると、つい話してしまいたくなるから不思議だね」

「だったら話して。宙ぶらりんな状態なのよ、いまは。そういうのが一番気になるのよ」

「言ったところできみは信じないだろう？」

「あたしは取り繕った話が聞きたいわけじゃないのよ」

玲華が鋭く切り込む。それにも稔さんは困った笑い方をした。

言いたくても言えないんだ。きつと。

軽口そうに聞こえるのに、本質は語らない。

だからかもしれない。仕方ないわね、と玲華は語調を変えた。諦めるようにため息を吐きながら。

「とにかく時間が無いの。言い合ってる場合じゃないわね。ねえ、悠汰。どう？彼は信用できると思う？」

また俺かよ、と思いつつ、時間が無いらしいので思ったままに言う。

「そんなんは知らないけど、いいんじゃないかねえの？一緒に行きたいっていうなら。ヤバい感じはしないし。でもこれはちよつと預かってくつてことで」

「それはないんじゃない？ちよつとつてどれくらい？」

稔さんが肩をすくめた。

先ほどのやり取りを見ていたせいだろうか。そこまで困ってるようには見えない。

「状況による」

なにせ俺自体がそれをよく呑み込めてないんだから。玲華も強引に同意した。

「そうよね。じゃあ行きましょう、この先まで走るのよ。京香、走れる？」

いつの間にか京香はしつかりと立っていた。だけど何も言わずに

頷く。

「どういう状態か、俺にはわからないけど、玲華が大丈夫と判断したのなら大丈夫なんだろう。」

「あーあ。いつの間にか手懐けちゃってる」

複雑な顔で比紹が言った。

「いつの間についてねえ、あんたたちが馬鹿な言い合いをしてる間よ」

またそんな言い方を……。

しかも手懐けたって否定しないし。

俺が比紹と向かい合ってるときから、玲華は京香に語りかけていたんだろう。

そしてなぜか稔さんを先頭に俺たちは走った。

まるでルートを知っているかのように稔さんは先に行く。

（つて……、盗聴器で作戦を聞いていたわけだし、ここの住人なんだから迷うわけないよな）

最初は玲華と二人だけだったのに、すでに大所帯だ。

後ろの方で玲華は京香を注意深く見ながら走っている。

玲華からは京香に対して、敵意を抱いているわけではないようだ。

こういうところは見習いたいと思う。

人数が増えただけ足音も増える。

俺はどこをどう走っているのか把握できないまま、出口に到着した。

* * *

仕掛けのボタンを再び押して、駆け抜けた先は中庭に通じていた。出口は閉めるとびったりと同化し、ただの壁になった。

ただっ広くてちゃんと整備されている洋風の庭。

車一台分は余裕に通れるほどのレンガ敷きの道ができています。その脇には、侵入するときにも見かけた大木が、人工的に植えられて並んでいた。それ以外はまた厚みのある芝生。詳しくないけど質の

いい草とかなんじやないだろうか。

しかしその大木は銃弾を避ける盾としての機能をいまはさせられている。芝生もかなり踏み荒らされており、見るも無惨な箇所があった。

そう、中庭ではまさに戦場の中心地となっていたのだ。

「なに、ここ……」

玲華が呟く言葉で、これは計画外の事態だと知った。どうすべきか迷い、俺たちは立ち止まる。

木々に身を潜めているのだろう。人の姿はあまり見えないが、怒号と銃声がうるさい。

「そんなところにいたのかっ！玲華！」

遠くの方から、遠くても怒鳴り声だとわかる声が聞こえてきた。清志郎さんだ。

右側の十メートルほど先の樹から、顔を出している。よく通る、野太い声。普段から怒鳴り散らして鍛えられているようだ。

「あの人馬鹿？わざわざ他の人にも教えてあげてどうすんのかしら」
またそういう言い方をする。

俺が頭を抱えなくなったときに、やっぱりそこにいた全員がこちらを向いた。毅さんもこの空間にいる。なにやら近くの人に指示を与えていた。やっぱり玲華を捕まえるとか、玲華以外は殺せとかそういうことなんだろうな。

（あ、久保田さん）

幸いなことにこちらから最も近い陣地にいたのは、久保田さんだった。近くに加藤さんと、千石さん（おそらく）がいる。

「おまえらなにぼつと突っ立ってんだ！とりあえず隠れる！」
血管ぶちきれそうな迫力で久保田さんに叱られた。

「危ない！悠汰！」

ぐんつと俺は玲華に引つ張られてしゃがんだ。さきほどまで俺の顔があったところに弾丸が通過する。

「うわっ。超こえええ」

「怖えじゃないわよ馬鹿。ちょっと久保田さん！なんなのよこれは！共犯だつてばれたの？」

姿勢を低くしたまま、玲華は久保田さんのところまで小走りで行った。それを俺たちも続く。草木に隠れて気づかなかつたけれど、だいたい二メートル先にいた。

さり気に馬鹿をつけないでほしい。

「おうよ！さすがにオレも、この状態でここに来るつもりはなかつたんだが、追い込まれた！」

「なに威張つてんのよ！」

「申し訳ございません。玲華様。このようになるはずではなかつたのですが……」

「別々に逃げるべきだと思つと、私は言いましたよ。しかしこの男が駄目だと言ひ張つて聞かないのです」

まったく表情を動かさない千石さんと、すつごく迷惑そうな顔をしている加藤さんがそれぞれ玲華に言い訳をしていた。どこか暢気に聞こえる口調で。

この人たちは何者なのだろう。絶対ピンチだと思つていないと思つ。

「いちいちチクるな！仕方ねえだろ。見よう見真似でやつてるオレに比べて、こいつらはレベルが違う。悪いけどな、あっちの人数考えるとこの方が都合が良かったんだ、よ！」

最後の、よつで久保田さんは前を向いて発砲する。そこには、毅さんの指示でいつの間にか近づいて来ていた護衛がいた。手にあたり、持っていた拳銃を落とす。そのままその人は慌てて引き戻して行つた。

充分レベル高いじゃないか。

（だからそういうこと、あつさり出来ちゃうつてのが、信じられねえんだつて……）

久保田さんはメカ好きと豪語していたし、なんでも器用そうだし……ズルイよなあと思つ。

その十分の一でもいいから分けてほしいものだ。

「どうでもいいけど。おまえらなんているんだ？」

久保田さんが比組と稔さんを見て険しい顔をした。それで、久保田さんはこの二人のこと信用してないんだって気づいた。

「悠汰と一緒に逃げようって！ねえ？」

なぜか嬉しそうに玲華が俺に言う。もしかしてこいつすべて俺のせいにしようとしてないか？

嫌な予感がしていると、久保田さんは俺を一瞥した。

「あつそ」

それしか言わない。

「なんだよ？言いたいことあるなら言えよな」

「おまえがそう判断したならいい。それより一旦戻って別の道から行け」

さらつと話を変えられた気がする。

「別の道なんてどこにあるのよ」

「自分で探せ」

視線を前方に向けたままでいる久保田さんに、玲華は少し息を吐いた。

「やっぱりそうなるのね。……で、あなたたちはどうするの？」

「適当に足止めして後から行く」

軽く適当になんて言ってるけど、そんな簡単な話ではないだろう。相手は四方八方わんさかいるし、本気で殺すつもりできている。

「一緒に逃げればいいだろ。ちゃんと用意してあるんだよな、逃げ道」

こういう場面で別れてはいけない気が、本能的にする。だいたい映画でもなんでも、こんなところが後悔するポイントになるんだ。

「おまえらを確実に助けることがオレの仕事だ。固まって逃げるのと、どちらが安全性が高いか考える。戻れと言ったためだけに、こちら側に陣取ったんだよ。それを無駄にするな」

久保田さんたちと合流できたのは、ただのラッキーではなかった

のか。

「行きましょ、悠汰」

まだ納得できない俺に玲華も促す。

一人で抵抗して手遅れになったら、それはすべてが無駄になるんだ。

「納得できないけどわかった」

「なんだ、その言い方は」

「久保田さん。あたしが言ったこと憶えてるわよね」

「……ああ」

仏頂面で俺に答えて、そのままの顔で玲華に頷いた。

「よし！みんな、そういうわけだから戻るわよ」

玲華はやっぱり切り替えが早かった。それに皆も頷く。

なんだか久保田さんとわかり合っているみたいで面白くなかった。しかしそんな場合ではないので、押し込めた。

「待て。カウントする。合図を出したら走れ。おまえらもタイミングを合わせて総攻撃をかけるぞ」

「玲華様のためになるならやりましょう」

「それしかないようだしな」

久保田さんの指示に千石さんと加藤さんは従う意思を表明した。

「行くぞ」

「あ、待って！綾小路先輩ってどこにいるの？」

カウントダウンを遮って玲華が訊いた。

そういえばあいつもいたはずなのに、どこにもいない。

鬱陶しそうに久保田さんは舌打ちをする。

「知らねえよ。千石、なにか聞いてるか？」

「先に向かうと仰いました。出口で玲華様をお出迎えしたいようでしたので、そのままお願いしましたが」

「いねえじゃねえか……」

「後のことは存じ上げません」

パンパン合間に打ちながらも、千石さんの動作に隙がない。この

人もできる人だ。

「まあいいわ。じゃあそろそろ……」

「なあ。そんなに撃つて弾切れになんないの？」

ひとり撃ち続けている加藤さんに俺は聞いた。なんか遠慮とかないし、心配になったのだ。

「ただ加藤さんは戸惑いを表した。」

「は？」

「それを見越して大量に用意してある！いいからもう行けよ、おまえら！」

とうとう久保田さんがキレた。

せつかちな性分って損するぞ。いや、本当に急いだ方がいい状態なのかもしれない。

「悠汰はやく」

「おう」

仕方なく走る体勢を整える。

「ホントに行くぞ。三、二、行け！」

久保田さんのカウントは心なしか速い。一秒が半分くらいだ。

それでも皆で揃って動いたら、ザッて地を蹴る音がした。

「おい！逃げるぞ！追え！」

後ろの方で清志郎さんの叫び声と銃声を聞きながら、俺たちは後ろを向かずに走った。

一番前はやはり稔さんで、彼は仕掛けを熟知していたらしく、俺がたどり着く頃には開いていた。

俺は一度だけ振り向いた。

たくさん上がる硝煙。

すでに久保田さんたちの隠れ場所が見えない。

死ぬなよ、と思いつながら俺はこの場を後にした。

第四章・・・4

稔さん、比紹、麻衣、亜衣、そして京香をずっと支えながら動かしている玲華。最後に俺が後ろからついて走った。

体力の差だろう。前二人から徐々に距離があく。だけど稔さんは時折振り返り、スピードを調節しているようだった。必然的にそれで比紹も抑えるから俺たちはまとまって移動できた。

誰ひとり欠けたくない。そう思うから、稔さんの心遣いには素直に感謝できた。

（大人なんだ）

大人の優しさに焦がれることがあることは、最近自覚しつつある。そしてちゃんと周囲を見渡すと、本当に優しい人が多いのに気づいて、たまに驚く。それから、自己嫌悪に陥る。自分の不甲斐なさがいよいよ際立つような気がして。

ふと玲華が京香を麻衣に頼んで、ひとりで前に出た。比紹を追い越し稔さんに話しかける。

「控え室に戻りましょう。遠回りだけどサンルームから行くべきだと思っわ」

「おれもそれがベターだと考えていたところだよ」

「どこへ行くつもりなんだよ！」

つい我慢出来なくて、後ろから怒鳴ってしまった。いい加減教えてほしい。

「噴水よ！中庭を回り込むの！」

「そんなところに何の用？外に出るんじゃないんだ？」

比紹もなにも知らないようで、納得いかないといった顔で口を挟む。

「どこから出れるっていうのよ」

「壁、よじ登れば？」

「簡単に言っわね、悠汰。いまはセキュリティが生きてるから駄目

よ。正式な手順をふんで正面の門を開く以外は、本来は仕掛けが作動するようになってるの。だけどひとつだけセキュリティの穴があるわ。外に繋がってる場所がね」

「噴水ドボン事件だね」

「そうそう。あれよ」

玲華と稔さんだけが解りあっていて、そしてなぜだかすごく楽しそうに笑いあってる……。

「あの時は本当に驚いたよ。彼が上がってくるところを待ち構えていたのに、全然浮かび上がってこなくて。深いからもう沈んで死んだのかと思っちゃったわけよ」

「ああ。それで、いないことには変わりないからと思って、あたしに脅しをかけたのね」

「そうなんだ。カマをかけてみたら、やっぱり帰ってないみたいだったしね。でも生きてるんだもん。一瞬ゾンビかと思ったよ」

「まあゾンビ並みの精神力ではあるわね」

「ちよつと待て。ちゃんと俺らにも解るように会話しようぜ」

頼むから……。

そんな恐ろしい単語だけ聞いていたら余計に怖いだろ。しかも笑ってるし。

「久保田さんが稔叔父様にその銃を突きつけられたことがあったの。そのときに稔叔父様の部屋から飛び降りたのよ、噴水に。で、底に穴があつて泳いでいったら外の川に出たんだって」

「まさか……」

嫌な予感が俺の中を駆け巡る。

「そうよ。これから脱出するのは、その噴水からよ」

「俺は嫌だ」

っていつか、やっぱり無理なことだ。

思わず俺は立ち止まる。

「ここまでできてなに言ってるのよ」

その雰囲気を感じたのか、玲華も止まりながら振り向く。自然と

皆を立ち止まらせてしまった。

「俺は別の道を探す。じゃあな」

玲華がガタガタ言ってるのを無視して、俺は皆を追い越すように横を向いて通った。

とりあえずこの先に比組たちと合流した分かれ道が見える。あそこから横に入りしばらく隠れよう。皆が騒いでる隙に逃げればいい。つてところまで考えた。

玲華の横を通り過ぎたところで、後ろから肘鉄を食らわされた。マジで、普通に……ってか凄く痛い。

「なにすんだよっ」

「今さらなんなのよ！それで納得できるわけじゃないでしょう！ちゃんと説明しなさいよ、ほら早く」

「だからって殴んなよ。痛いだろうが」

「わざとよ！あたしの溜飲を少しでも思い知れ！」

「……………」

俺は面食らった。玲華の言うことはいちいちわからないけれど、とりあえずメチャクチャ怒ってるのは判った。

「あたしたちがなんのためにいま！ここまで！危険な目にあつてまでここにいると思うの！全部あんなのためだって、あえて恩着せがましく言ってるわよ！じゃないとまったくわかってないみたいだから！」

「なっ……………」

「あたしだけが……あんな以外の誰が脱出できても、この場合意味がないのよ、この馬鹿！！」

玲華が涙目で訴えてきた。きっと彼女のなかでも無事に終わるかどうかに懸かっているときで、気持ちが張り詰めているんだとは想像できる。

（そんなこと言われても……………）

俺だって、さっさとこんなところから彼女を解放してやりたいと思う。それでも。

「あのな、俺は……」

「ちよつと待つて、誰か来る」

一番先頭にいた稔さんが、先のほうを見つめて言った。

控え室からは真つ直ぐ一本道だったけれど、曲がり道が二箇所あった。だからその先は見えない。

ただどずつと見ていたら、小さい人影が現れた。足が速く、すぐに姿が捉えられる。

「深影慎だわ！」

玲華が真つ先にその名を口にした。

初めて聞く名前だった。だけど俺以外のものから一斉に緊張感が伝わってきて、歓迎されない者だとはわかった。

「どうしてこんなところに？」

「あの岐路を曲がるしかない！」

比紹の呟きに稔さんが瞬時に判断した。

「ええ……でも……」

青ざめながら玲華が呟く。

その男はその分岐ポイントを通過して、すでにこちらに向かっていたのだ。

「なにぼーつとしてるの？貸して」

稔さんが強引に比紹を押し退け、前から手を伸ばした。

突然のことに呆気にとられていた。この人が何をするつもりだとか、考えている余裕はなくて、強引に拳銃を奪い取られる。

その間に稔さんはそのまま右腕を持ち上げ、迷いなく、引き金を引いた。すごく近い場所で高く大きい音を聞き、思わずびくりとする。

深影という男は避けるように壁を駆け上がった。しかも数歩壁を走っている。銃弾はその速さについていけない。

すごい身体能力だ。

あつという間に俺たちの前に深影は立った。止まったときに風が起きる。

深影はナイフを持っていた。拳銃じゃないところが意外だ。だけどその目は普通じゃなかった。ニタリと笑みを浮かべているのに、光がない。

「ようやく殺れる」

男が言ったのはそれだけだった。それから後ろ足を引いた。

「やっぱり毅叔父様に命令されたから前回は殺さなかったのね」

来る、と思う寸前に、自虐的な笑みを浮かべながら玲華が言う。

前回という言葉が引つ掛かった。こいつには前科があったようだ。

「そうだ。あいつは脅かせとだけ言った。次回まで殺すのは我慢しろとな。そこからは長かったぞ」

深影はナイフを舌舐めずりするように舐め上げた。

(なんだ、こいつ)

いままで触れたことのない情念みたいなものを、この男は隠さず出していた。

ずっと稔さんが銃口を向けているのに、御影には目に入っていないかのように気にしていない。そんなところも常人ではない気がして、気味が悪かった。

だから動けない。

逃げようとしてもこの細い道では団子状態で後ろを取られて全滅だ。かといって、前にも行くことができない。

「どうして命令に従ったの？」

深影が動こうとする空気を発する前に玲華が続ける。それにクツと咽喉を鳴らした。

「あの人が一番有意義な命令を与えてくれる人だからだ。ただ殺せばいいってもんでもない。長くこの仕事を続けることが自分には最も大切なのだ。トップが不在なままでは俺の腕も鈍る」

「なるほどね。清志郎伯父様に加担したのでは先もないものね」

なんか何気にひどいこと言ってる。

(それで、どうする?)

きつと玲華は時間稼ぎをしているんだと思った。会話をすること

で引き伸ばしている。だけどそれにも限界は来る。

「それでこの道はどうやってわかったの？」

「簡単だ。ひとつだけ別のところから銃声が聞こえた。そう、壁の中から。隠し通路があると予測できればあとは簡単だった。空気の流れを読めばいい。開け方がわからなくて、そこはぶっ壊したがな」
「やっぱり普通の人間じゃない。」

しかもなんか愉しそうに笑ってる。常軌を逸した目で。

「おしゃべりは終わりだ」

深影のほうから断ち切ってきた。

俺は玲華を庇うために全身に力を込めた。自分がどうなってもこいつだけは護る。

一触即発の雰囲気の中、深影が動いた。しかしそれは攻撃ではなかった。

素早い動きで後ろを振り向きつつ左側に寄る。そこへ一本の矢が通過して、俺たちからみて右側の壁に突き刺さった。

それを確認すると同時に、すでに深影は動いていた。俺たちとは逆の方へ走る。

「綾小路先輩……」

飛んできた方を見ながら玲華が呟く。

綾小路？　そういえばあいつ、弓道やってるんだった。

よく見ていると、確かに綾小路が岐路の中央から深影に向かって矢を放っていた。

背中を向けているところに、稔さんの拳銃が深影を狙う。稔さんは走りながら距離をとりつつも寄っていった。

しかし深影はジグザグに走り避ける。まず綾小路を仕留めようとしているのがわかった。一気に間合いを詰め、ナイフを持っている右腕を振り上げる。

「危ない！」

接近戦で弓は不利だ。あんなやつでも死んでもらっては困る。俺は背筋が凍るのを感じた。

綾小路はそれでも矢を放つ。荒っぽくて捨て鉢なその矢は、高すぎて丸で違う方向へ行つた。援護するように稔さんが銃を撃つ。

「最後の一発だわ……」

玲華が後ろで言った。

こいつこんな大変な状況なのに、弾の数を数えていたのか。

「え？」

音が鳴ると間髪入れずに深影はナイフを落とした。

「ウソ、だろ……」

高めに描いた綾小路の矢に稔さんの銃弾が当たり、その弾は軌道を変え深影の腕に当たったのだ。左腕で抑えながらも、苦しそうな声ひとつ上げない。

矢はどこかに突き刺さることなく、真つ二つに折れて落ちていた。

「なんつー神業……」

「見えたの？ 凄い目だね。普通に攻撃しても当たらないと思つたらね」

飄々と稔さんは軽い口調で話した。

その間に綾小路が素手で深影に殴りかかっていた。少しは動揺があつたようで、それはクリーンヒットした。

あ、と自分にも出来そうなのがあるって気づき、すかさず走ってナイフを取りに行く。

「悠汰！」

ナイフしか目に入ってなかつた俺は、拾う直前玲華の声を聞いた。ハツと顔をあげると、綾小路の何打目かを避けながら脚を振り上げている深影が目に入った。

蹴られる。

そう思った瞬間、体が勝手に動いていた。ナイフをつかんだまま、それを両手で向かつてくる足に突き刺した。

そのまま蹴り上げられ、衝撃が顎にくる。

（なんつてやつ……！）

確かに刺した手応えはあつたのに、まったく威力が弱まってない。

倒れていくギリギリのところ、稔さんが深影を押さえにかかっていくのが見えた。そのまま俺は石の壁に頭を打つ。

「ちよつと！大丈夫？悠汰」

気づいたときには玲華が寄ってきていて、ガバツと俺の上に体重を乗せてきた。

「また頭打つて！どうしよう、益々おバカになっちゃったらっ」

「おい、本当に心配してんのかよ……」

正直なところ、頭より顎の方が痛い。でもそんな反応されたら意地でも痛いなんて言いたくなかった。咄嗟に歯を食いしばったおかげで、舌を噛むなんてへマは避けられたのだけれど。

「当たり前じゃない！バカ！」

なんか必死な玲華の叫びを聞きながらも、俺はその向こう側を見ている。稔さんと綾小路の二人でなんとか深影を抑えているけれど、やつは自分で自分の脛からナイフを抜き取っていた。

「早く！いまの内に逃げろ！」

綾小路がそう指示する。比紹を先頭に皆右側から走ってきた。

駄目だ、と思った。

その瞬間二人の腕力をものともせず、深影は振り払い距離をとった。俺たちが進むべき控え室までの方向側へ。

「こいつ、痛みを感じてないのか……」

その動作に稔さんが驚嘆の声を上げた。深影は不敵に笑いながら再びナイフを舐めた。自分の血がついているナイフを。

気持ち悪い。

ぞつとする感覚を抑えられない。

「まさか、あなたも薬物ドラッグを？」

俺を抱き締めたまま玲華が首だけ深影を捉えていた。

「普通の奴らは使い方を間違っているんだ。俺くらいになれば上手くつかいこなせることが出来る」

「久保田さんが聞いたら発狂しそうな言葉ね」

憎々しげに呟きながら先に玲華が立った。

「ここから先は通さない」

血が流れてるのに、ひどく愉しげだ。

「悠汰、立てる？」

「当然」

深影という人物に呆気にとられていただけで、足になどきていない。ただ鈍い痛みはあった。それを堪えて立ち上がる。

それから玲華は稔さんと綾小路と目配せをして、小さく頷き合った。

なんだ？って思っているところに、綾小路が弓矢を引く。

「みんな！走るわよ」

そう叫び玲華が先頭をきって向かった先は、分かれ道を横に反れる方だった。

慌てて皆で走り出す横で、綾小路が距離をとるための矢を放つ。

後ろを振り返りつつ確認すると、そこにはピンク色の煙がたちこめていた。

時間を稼ぐために、煙幕を矢の先に付けて放ったのだ。あんなもん持つてるなんて準備のいいやつだ。

皆が通つたのを確認した後、稔さん、綾小路と続いた。

「こつちにきても中庭には出られないよね！」

怒鳴るように比紹が玲華に確認する。

「仕方ないでしょ！三人がかりでも仕留められそうにないんだから！」

「なにそれ？計画ってそんな行き当たりばったりでいいわけ？」

「そう言うならあんたが戦ってくれていいのよ！その間にあたしたちは逃げるから！」

「冗談でしょ？ぼくは頭脳戦向きなんだよ」

前の方でそんなやり取りが繰り返り広げられていた。友好的とはお世辞にも言えない内容だ。

「きゃっ！」

小さな悲鳴が後ろから聴こえて、再び振り向くと亜衣が派手に転

んでいた。

その後ろには、煙をかいくぐり伸びてきた深影の魔の手。

「亜衣ちゃん！」

悲痛な叫びを玲華がすると、稔さんが拳銃をぶっ放つのが同時だった。

その隙に俺は亜衣の元へ走った。

「大丈夫かよ？」

「もうだめです。走れませんか。置いていってください！」

「ああ？」

「亜衣は運動が人一倍苦手なんです」

麻衣が律儀に説明する。そういえば毎度遅れそうになっていたし、何回かずっこけそうになっていた。そしていまはその足首が少し腫れていた。

（捻挫か）

こんなときに。

その間にも深影は弾を避けながら寄ってくる。

さすがに怪我をしているせいか、深影に先程までの俊敏さが無い。何回目かの弾が、稔さんの銃はやつの右腕に当たっていた。それでもなんでも無いように歩いてくる様は、やはり不気味でしかない。

「亜衣が残るならわたくしも残ります。皆さま先に行ってください」

「出来るわけないでしょう！悠汰、おぶれる？」

「迷ってる場合じゃなさそうだな」

こいつは小柄だし問題はなさそうだ。そう判断し、俺は頷く。

「乗れ！」

「ええええっ！できません」

「するのは俺だろ！おまえはただ乗ってりゃあいいんだよ！」

なぜか顔を赤らめる亜衣に、無理矢理腕を引っ張って背中に乗らせた。

「すみません……」

ボソツと俺にだけ聞こえる小声で謝ってきた。こういう言い方し

か出来ない自分に腹が立つたけれど、後悔している暇もないので走り出した。見た目通り、亜衣は軽かった。

深影は痛みを感じているのかどうか不明だが、あきらかにスピードが落ちていた。念には念をの精神なのか、稔さんも綾小路もたまに牽制している。

「つーか、弾切れだったんじゃないのか？」

確かに玲華がカウントしたあと暫く撃ってなかったのに。

「さつき君たちが久保田くんと話している際に頂戴したんだ。走りながら弾を詰めた」

「あつそ……」

油断も隙もない人だ。

そのまま進むと階段が見えてきた。玲華はそこを昇る。

「二階に行くのか？」

「そうよ。ちよつと！致命傷は与えないでよね、あなたたち！」

玲華が思い立ったように怒鳴った。けっこう派手にやっているからかもしれない。

「わかつてるよ、玲華」

「どさくさ紛れに動けなくしておいた方がいいと思うけど」

綾小路は予想通りの回答だが、稔さんは恐ろしいことをあつさり言っていた。これは血筋だろうか。玲華もわりとこんな言い方をするときがある。

重い仕掛け扉を開くとそこは長い廊下に出た。客室が並んでいる。

「そういえば、おまえ今までどこで何をしていたんだ？」

俺が綾小路に尋ねると、それを聞いた玲華も再び参戦してきた。

「そうよ。あんた実はもつと前からあの通路にいたでしょ。もつと早く出てきなさいよ」

「玲華以外はとくに助けたくもないし。最大のピンチで登場するのが、この場合のヒーローのセオリーだろう？」

本当になんてやつなんだ。しれつと言うな、そんなこと。

「だったらもうよつと完璧に助けるよ」

「貴様！誰のせいでこんな状況に陥ってると思ってる！」

「おまえには関係ないだろ！少なくとも」

「関係あるさ！だいたい僕は忠告しただろ」

「してねえよ！おまえが言ったのは教えるつもりはないってことだけだ！」

「うるさいわね！黙んなさい、あんたたち！亜衣ちゃんが逃げるに逃げれなくて怯えてるじゃない！」

「あ……」

ちよつと後ろを見ると、亜衣は引きつった笑みを浮かべてはいたが、少し涙目だった。

「い、いえ……わたくしは、あの……」

「……悪い」

またやってしまった。男の怒鳴り声にトラウマがあったり、慣れてない人には怖がらせるものだって、もう知っている。だから怒らないように気をつけていたつもりだったのに。

「玲華！僕はこの男に現実の厳しさを」

「あーもう！……つと、京香？」

まだ食い下がろうとする綾小路に、なにかを言おうと振り向いた玲華がその途中で視線を止めた。

麻衣が心配そうに京香を覗き込みながら走っていたからだ。京香は苦しそうに肩で息をしていた。目は真正面を見つめて動かないが、どこか虚ろだった。汗が半端ない。

「体力落ちてるわね。大丈夫？」

深刻な顔で玲華は麻衣とともに京香を支えた。

「仕方ないね。じゃあおれが連れて行くよ。いいかな？比紹」

「どうしてぼくに聞くわけ？」

これ以上ないってほどに比紹の機嫌が悪くなった。

（もしかして……）

稔さんも知っているのだろうか。なぜ京香がいま、こんな状態にいるのか。

稔さんは肩をすくめながら拳銃を玲華に渡した。

「これ頼めるかな？」

「撃てないわよ、あたしは」

とかぶつくさ言いながらも玲華は受け取る。

「きみに預けるのが一番適任だと思う」

そう言つと稔さんは京香を横抱きに持ち上げた。所謂お姫さま抱っこというやつだ。

「いやあ！」

弾かれたように京香は悲鳴を上げて暴れだした。

「触らないで！」

「大丈夫だよ。なにもしないから安心していい。もう走らなくていいからね」

京香の耳元で稔さんは囁く。京香が震えながらもしっかり稔さんを見た。少しずつ大人しくなっていく。

（やつぱり、知ってるんだ）

なんか様になってる。間違っても自分もしようなんて思わないじゃ。

比紹はそっぽを向いていた。

（もうどうでもいいのか？比紹……）

いいのか、本当にこのままで。後悔しないのか。

届く当てのない問いかけを、胸中で繰り返す。

「てめえら。生きて帰れると思うな」

すぐ近くに深影が来ていた。銃弾を二発受け、俺の刺した傷でもう血塗れだった。

（血のにおい……）

こんなんで、どうして動けるんだ。いくら走って切り離しても、気づけば後ろにいる。物凄いほどの執念。

臭いよりもそんな男を目にしなければならぬことのほうが、堪えられなかった。

俺の背中から小さく悲鳴が聞こえた。亜衣も怯える。

(もつと離れないと……)

姿が見えなくなるまで。徹底的に突き放さないと駄目だと思った。だけど先頭の玲華は追い越せない。道を知らないだけでなく、玲華を後ろに置くのは絶対にしなくなかった。

「スピード上げるわよ！悠汰、大丈夫？」

なんで真つ先に確認するのが俺なんだ。確かに気力が人並み以下であることは、玲華にはバレている。

「っか、どこまで逃げればいいんだよ！」

「もう少少！もう少少で目的の部屋につくわ！」

目的の部屋。玲華はただ闇雲に走っていたわけではなかったんだ。さすが、としか言いようがない。ならばこの大きすぎる建物が悪いのだ。

(くらくらする……)

目眩を起こしそうになるのは、この臭いのせい、スタミナ電池が残り僅かなのか。

拳銃を握ったまま玲華は大振りに腕を動かす。

そんな扱いをして大丈夫なのかと、心配がないわけではない。でもきつと自分より知識を持っているはずだ。離せというにはあまりにもこの状況には不似合いだった。

「麻衣ちゃんは大丈夫？」

玲華はもしかしたら余裕があるのかもしれない。周りを気遣ってばかりだ。

「ええ。わたくしは運動が出来るかわりに勉強はまったくダメなんです。その代わり勉強は亜衣が優れてるんですよ」

「充分個性別れてるじゃない。自信もちなさいよ！」

「はい！」

なぜか麻衣が満面の笑みになった。っていうか、このままでは女子より先に音を上げそうだ。

(音を、上げるだけなら、まだいい……)

ちらりと沸き上がる不安。それを胸の中だけで打ち消す。

こんなところで昔の症状を出してたまるか。俺だけならまだしも亜衣がいるんだ。ぶっ倒れたくはない。

途中で警備員の服を着た人が立っていた。ってというか警備員だ。「怪我したくなかったら退いて！」

当初は足止めをさせようと厳しい顔で立ちはだかっていたが、あまりに人数が多いのと、玲華の勢いある一言から直前で諦めた。

いいのかそれで、と思ったが、本気で気迫を出している玲華に敵う人はいない。

「止まれ！おまえら！京香をどこに連れて行く気だ！」

しばらく走ると、太ったオジサンが一人前方に立っていた。すごい汗を掻きながら、余裕のない顔色だ。

俺たちは思わず立ち止まる。というか玲華が止まったから、自然に止まらざるを得なかった。深影はまだ遠くを歩いている。

隣にいた比紹がこっそり俺に言った。

「京香のお父さんだよ」

「ああ……」

あまり似てないけど、こういう状況なら頷ける。

あれが、玲華と比べてばかりいる父親。頭が薄くて五十歳くらいに見えた。

「和志伯父様……いままで目立ったことはしてなかったのに……」

玲華が厄介だと言わんばかりに呟いた。

肝心の京香は稔さんの腕の中から、そちらを向いているけれど特に何も言わない。

どういふ感慨でいるんだろうと気になった。無感動なわけは絶対ない。きつと比紹の次か、それ同等の執着があったはずだから。

「京香！そいつから離れる！おまえ！何をたぶらかしている！？」

一方的な物言いだ。

なにも状況を知らずに、一方的に京香に命じ、稔さんを責めている。

こういう親は、身近に知っている。俺の父親と同じタイプだと思う。

った。

理事長とか、拓真の親みたいなのもいるのに、どうしてこういうタイプもいるんだろう。傍^{はた}で見ているだけで嫌悪感を覚える。

玲華が数秒考え込んでから、行動に出た。きゅつと表情が変化した瞬間を見た。俺に対するものから、大人に対するものの違いだと思った。言葉では上手く言い表せないけれど、顔が僅かに引き締まっている。

そして稔さんの隣に立って、横から京香の手を握った。

「あら、伯父様。たぶらかすなんて言葉が悪いわね。あたしたち友達なのよ。友達になったの、いま」

「そんなわざとらしいことを、真に受ける奴がいると思うのか！おまえがようやく死んだと思ったのに……気を持たせるようなことをしやがって！」

「それはご愁傷様と申し上げるわ。他人が落ちることでご自分が躍進なさると思ってるっしやるようだけど、それは大きな勘違いですわよ」

(……なんか)

丁寧な言葉だけど、これでもかっていうほど、すごく馬鹿にしている。

こつという態度に出るからひんしゆくを買うのではなからうか。

「なんだと！おまえらみたいなもの一人残らず絶えてしまった方が世のためになるんだ！ならばお望みどおり俺がこの手でやってやる！」

ああ。やつぱり。

いまさらこの人が拳銃を出したところで、すでに驚かなくなっている自分が悲しい。

驚かないからといって脅威が減るわけでもないが。

「あなた、昨夜京香がどういう状態だったのか知っていますでしょう？このままここにいれば、間違いなく京香のためにならないことぐらいわからないの？」

「黙れ！それもこれもすべておまえが悪いんだろっ！人のせいにするな！おまえがいなければすべて丸く納まるんだ」

「あなたはご自分では一向に動こうとなさらない。今回も清志郎伯父様みたいに野望に燃えるわけでもなく、周りの動きばかり気にして様子を窺っているだけでしたでしょう？いつも京香に命令して喉けるばかりで。そんな人の思い通りにはならないように世の中なつてゐるってご存知かしら」

「黙れと言っている！この銃が見えないのか！」

「玲華、撃って」

眉根に皺を寄せて稔さんが囁いた。こちら側にしか聞こえない声で。

俺もハラハラしていた。京香の父親は力んでいてブルブル震えていて、いつ引き金を弾いてもおかしくないほど取り乱している。そしてその先は玲華なのだ。

(でも……)

「撃たなければ撃たれる」

「嫌よ。出来ないわ」

俺の予想通り、玲華は首を横に振った。

「亨くん！」

稔さんがかさず綾小路に顔を向ける。綾小路はすでに矢筒から矢を一本引き抜いていた。構えるところに玲華がカツと言いつつ。

「駄目！あの人を傷つけたら絶交よ！もう二度と口をきかないわ！」
絶交って、拓真みたいなことを言う。

「だけど綾小路には最も効く言葉だった。情けない顔をしながら、弓を引く力が弱まっている。

「ははっ！仲間割れか！所詮おまえの周りにはその程度の輩なのだ！」

「やかましいわね！あたしは京香の前だからやめさせただけよ！勘違いしないで！」

玲華の感情が大爆発してしまった。いままでの鬱憤をもすべて吐

き出したような勢いだった。

「ゴチャゴチャ言ってるけどね！じゃあ自分はどんなのよ！なりた
い自分があるなら、もっと努力することに目を向けなさい！いい加
減鬱陶しいのよ、そういう嫉妬！いくら恨んだって、出生の環境な
んで産まれてしまったら変えようなんてないじゃない！結局そこか
らどうなるかなんて自分でしか決められないのよ。人間の感情なん
て自分の意識で変わろうとしなければ変わらないわ！だからあたし
はいちいち相手になんかしない、あなたたちのことは。悪いけど、
あたしはあたしで幸せになるんだから！」

その内容は京香にも向けて言ってるんじゃないかって、勝手に思
った。先ほどまでとの態度の差がそう思わせた。本気で訴えている
から。

だけどそれよりも、すごく俺の胸にも響く言葉だった。

(いくら、現在ある状況いまを恨んでも、自分を変えなきゃ変わらない)
どうして玲華はいつも正しいことを言えるんだろう。正しいと思
ってもここまですっきり切れる人はきつと少ない。

きつと玲華が常に努力を怠らない人だからだ。

京香の父親は絶句したようで、すぐには反論しない。

「お気をつけて。あなたも深影の視界に入れば、いまなら殺されて
しまいます。大人しく去ることをお勧めするわ」

そしてまた、凜とした表情になった。これで、京香の父親は完全
に恐れをなしてしまったようだ。固まったまま二、三步後退する。

「行きましよう。悠汰、あたしたちが行くのはちょうどあの部屋よ」
厳しい顔のまま目線でその場所を指し示した。京香の父親が後ず
さり、扉までの道が出来たその部屋のようだ。

後ろを向くとフラフラになりながらも、しっかりと地に足をつけ
て歩く深影がいた。

もう京香の父親は撃たない。

俺も直感でそう思っていた。だから一歩ずつ皆でその部屋に近づ
いた。

京香の父親は、怯えながらも視線をこちらから外そうとしない。いや、京香を見つめていた。たった一日で変わってしまった娘の姿を。

「パ、パ……？」

玲華と比紹が中に入り、稔さんが入ろうとしたときだった。最も父親と近くになったときに京香がポツリと呟いた。

「ハッと彼は顔を上げる。」

「京香！無事か？」

そして駆け寄ろうとしたが、不意に固まった。京香は一瞬だけで、もう脱け殻のような状態に戻ってしまったからだろう。それをあの父親も感じとってしまったのだ。

「すみません」

一言だけ稔さんは口をついて断ち切った。ここで京香の復活を待つ時間はない。

でもきつといま、彼女は揺れている。その心情までは計り知れないけれど、あのままではいられないから。

部屋に入ると、そこは空室だった。玲華が窓際で立っていた。

「ここは稔叔父様の部屋の真下の二階にあたるの」
近づいていくと、徐々に噴水が見えてきた。

(そういうことかよ……)

つまりここから飛び降りるということか。

「あの……ありがとうございます。もう大丈夫ですので」

「あ、ああ……」

俺は亜衣をおろした。軽いと思っていた少女だけれど、おろしてみるとすごく身軽さを感じる自分がいる。

改めて窓から下を覗くと、遠くの方でまだ銃撃戦が繰り広げられていた。久保田さんたちの姿は見えないが、たくさんの護衛たちが丸見えだった。

「光泉寺様と松倉様もいらっしやっただんですね」

麻衣が呟くと、玲華も頷いた。

「殺叔父様がいないわ」

「まずいな。深影から情報をもらってるのかもしれない」

稔さんも京香をおろして、硬質な声を出した。

玲華が背中を向けて、大人しめのドレスの胸元からなにやら取り出したようだった。

「ジップロック……？」

それは袋状のジップロックだった。あの冷凍庫に入れて保存するのに最適なものだ。

なんでこんなものこいつが持つてるんだ。しかもわざわざそんなところに入れてまで。

「綾小路先輩には渡したわね。はい、皆にもあげるわ。これに携帯をいれてチャックすれば濡れて壊れることもないから」

なるほど、という空気になった。本当に玲華はいつも用意が良い。そう早口で言いながらひとりひとりに渡していく。だけど俺は飛ばされた。まあ、俺は携帯もってないし濡れて困るものもない。

早く行くこうという空気になるまえに、俺には言わなければならぬことがあった。

「なあ、俺はやっぱり独自で逃げるよ。他に隠し通路があったら教えてくれ。壁よじ登るから」

玲華が信じられないという顔で俺を見た。

「そこまで言うのなら、ちゃんと説明してくれるんでしょね？」

「言いたくない」

「なに言ってるのよ！壁にはセキュリティあるって言ったでしょ！」

「大丈夫だろ？センサーに触れたところで、そのまま走って逃げれば良いんだから」

かつて拓真に言った通りのことを言った。しかし玲華はキツと睨む。

「じゃあ教えてあげるわ。停電してない状況でそんなことをするとどうなるか。センサーが反応したら家の壁に備え付けられているレーザーが自分に向くの！焼かれて丸焦げよ！」

「だったら、ここに留まる。俺は捕まった段階でいつ死んでもおかしくなかったんだ。頼むからおまえだけ逃げてくれ」

「ずいぶん、見くびられたものね。ここであたしが言うとおりにすると思うの？あんたは！」

玲華が怒っている。それで俺は、なるべく言いたくなかったことを言おうと思った。言いたくない想いがあつたせい、相乗効果なのか俺もついヤケ気味に怒鳴る。

「仕方がねえだろ！泳げねえんだよ、俺は！言っとくけど水恐怖症なんだからなっ！風呂も普段シャワーまでだ、悪かつたな！」

「ええっ！」

玲華が……あの冷静な玲華が度肝を抜かれたようだった。

だから言いたくないんだ。拓真には言つたけど。

「なんでそういうことを毎っ回言わないのよ！あんたは！」

「聞かれなかつたからだ！」

一字一句しつかりと俺は発音した。

嘘じゃないぞ。だいたいどこの誰が聞かれないのに自分の弱点を人に言うんだよ。

小さい頃、親に風呂に投げ込まれたせいだとか、言い訳にもならないだろ。今となつては。

あの、運動に力を入れている学園の一番すばらしいところは、なぜかプールの授業がないところだ。もちろん飛び込み台までついているデカイプールは設備されているけれど、それは水泳部用だ。部活にはとことん金をかけてる。たまたまか誰かの差し金かは知らないが、体育の授業はなぜか球技が多かつた。

だから玲華も知らなかつたし、俺も言う必要はなかつたんだ。

「夏休みに海に行こうって誘つても頷かなかつたのはそのせいだったのね。水着が恥ずかしいのかインドア派なんだと思つてたわ」

「勝手に思つてんなよ、そんなこと……」

あのときは、強引に連れまわされている印象があつたけど、気づけば絶対嫌なことは避けてくれている。自然とそうなっていて本当

に今頃気づいたけど、合わせてくれていたんだ。

「ねえ。二人の思い出話なんてどうでもいいよ。それでどうするの？行くの？」

比紹が催促する。

ちよつと待て、まだ覚悟決めてないって。

「しょうがないわね。あんたはただ息を止めてジツとしていればいいわ。あたしが一緒に泳いでいってあげるわよ」

「そんな情けない真似できるか！」

そこまでしてもらうと本当にただの足手まといになってしまつ。それだけは避けたい。

(ホントに……自分が嫌になる……)

ゴクリと俺は唾を飲み込んだ。

そつと噴水の中を見つめる。雨とかシャワーは息できるから問題ないんだ。顔を洗うのはちよつと気合が必要だったりする。そのレベルだ。顔にちよつとでもかかったら駄目だとか、そこまでじゃない。

(多分、息が出来ないのが……)

水中で過呼吸になったらどうしようとか、そういう不安から起因してたりするんだ。

だったら大丈夫だ。過呼吸にはならない。

(押さえつけられて無理矢理沈まされるわけじゃない)

あの頃とは違う。

逆に、助かるためにすることなんだ。

思い込みでもなんでも良い。すこしでも前向きに向かえるように俺は想い続けた。挑戦的な姿勢をつくりだすように。

「あまり悩んでる時間はないみたいだよ」

稔さんが出入口を見ながら言った。

俺はそちらを振り向く。すると深影が到着してしまっていた。扉に片手を置き、俺たちを見て冷笑している。

「どうした？もう逃げないのか？」

もう一方の手には拳銃。警備員の人から奪い取ったようだ。

「もうフラフラじゃない。大人しく病院行った方がいいわよ」

「ぬかせ」

拳銃が玲華に向いていた。それで俺は手近にあった高価たかそうなソファを持ち上げ、深影に投げつける。もう形振り構ってなどいられない。投げると同時に玲華を引き寄せて俺の体で隠す。

深影は奇怪な笑い声を上げながらバンバン撃ってきた。

その殆どがソファの底側に当たる。

そしてその間に綾小路は弓矢を引いていた。最後の一本だった。

「玲華、すまない。きみの意向には応えられない」

そう言いながらいつぱいに引く。

玲華の意向。つまり致命傷を与えるということか……。

綾小路もとんでもないやつだ。ここにいる人たちと同類の人種だと思っただ。こんな静かな目で人を殺そうとしている。

(でも、俺より玲華のために役立っている)

ふと思いついた事実にドキリとなった。

ここにいたのが俺と玲華だけだった場合、玲華を無事にこの部屋まで導けたのかわからない。

玲華はなにも答えなかった。仕方ないと諦めたのか、言うべき言葉がすぐに出てこなかったのかは不明だ。

しかし。

綾小路が放つまえに、少し遠くから発砲音がした。そのまま深影は膝をつくことなく倒れる。

真つ先に玲華に腕をぎゅっと握られた。

そこに、二十人くらいの部下を引き連れた毅さんが立っていた。

凄惨な状況だった。

深影はピクリとも動かなくなった。殺したのは毅さんだ。

(この人。本当に自然に撃った)

迷いだけじゃなく、気合とか意識の変化とかそういうのが無かった。

「どうして……。あなたの命令で動いた人を……」

玲華が青ざめている。

「そう、こちらから話を持ちかけたのだがな。ここ数日抑えるのに苦勞していたのだ。感謝するぞ。おまえたちがここまで弱らせてくれたおかげで、簡単に仕留めることができたのだ」

「とうとう本性をあらわしましたね、兄さん。いつも裏で動く人とは思えない行動じゃないですか」

稔さんは冷ややかな笑みを浮かべていたが、冷や汗が見える。

「さすがに俺もおまえがそちら側につくとは思ってなかったぞ。どこまでも馬鹿な弟だ」

「あなたには一生わからないでしょう」

「軟弱なおまえの言葉など耳に入らぬわ」

弟と言いながら、まったく毅さんにとっては抑止力になっていなかった。後ろの護衛たちともに一斉に銃口を向けられる。

「あーあ……。最も最悪な展開じゃない？これって」

面白くもなさそうに比喩がばやいた。

この危機的状況が本当に解っているのか？だったらなんでそんなに間延びした口調なんだよ、おまえは。

「もう逃げないのか？玲華。賢いおまえのことだ。逃げてても無駄だということぐらい薄々気づいていただろう」

毅さんは勝利を確信しているようだった。

陶醉感に満ちた笑みを浮かべている。

「悠汰」

玲華は俺の名を呼んだ。

一言だけ。他には何も言わない。

だけどわかつていた。俺の決心を玲華は待っている。

俺が決めないと、きつと玲華もここから先には行かない。それも、なんとなくわかってしまった。

「おまえが生きていて良かったよ。さあ、続きをしようか玲華」

「しないわよ。馬鹿じゃないの」

だけど一刀両断に切り捨てる。

（おまえが馬鹿だ！）

こんなときに挑発してどうするんだ！

思ったとおり、毅さんから怒りが含まれた目を向けられた。

俺は焦りだした。

ゆっくり噴水の中をチラリと覗いてみる。そこまで汚い水ではないようだけど、緑色の照明が当たっていて底が見えない。太陽に反射してキラキラ光っていた。

あそこに、入るのか？本当に……？

ゾクリとする。

「ほお、死にたいようだな。いつまでその強気が続くか見物だ。ひとりひとり順番に殺^やつていこうか。おまえが頷くまでな」

「性格悪いわよ」

「誉め言葉としてとっておこう」

俺が決めかねている間にもどんどん会話は進む。しかも望まない方向へ。

毅さんが俺たちの顔を見ていった。同等にひとりひとりを見て行き、それが京香で止まる。

「ではまずはその女からだ」

その台詞で前列にいた護衛たちが、一斉に京香へ銃口を向けた。

まさか、本気か。

今までの流れから、本当にそれをやりそうな人だと思った。ただ

の脅迫とは思えない。

玲華が京香の前に立った。

「させないわ。あたしなら殺さないんでしょう?」

「玲華!」

いくら最終目的が玲華だからって、無謀すぎる。

(どうすればいいんだ)

たとえ俺が決意したところで、これでは背中を向けた段階で撃たれそう。後列にいる人は、それぞれに照準を向けてきているから隙がない。

しかも沈んで浮かんでこなければ、追ってこられるかもしれない。

こんなとき、久保田さんならどうするんだろう。

テンパって働かないのに、そんなことが頭を掠めていた。

「やめろ! 毅!」

姿を隠したと思われていた京香の父親が、この部屋に足を踏み入れた。護衛たちを通り越し、毅さんの前まで行く。

「京香を殺すだ? そんなことはさせん!」

そして両手で拳銃を突きつけた。しかし発砲したのは毅さんの方が早かった。もともと撃つ気でいたのだから、そのままスライドさせれば良かったんだ。

「きゃあ!」

亜衣と麻衣が手を取り合って悲鳴をあげた。

「いたのか和志。あまりに存在感が薄くて気付かなかったぞ」

「貴様……」

京香の父親が唸るように跪いた。腹を撃たれたようで、苦しそうにうずくまっている。

「安心しろ。おまえは殺さない。さすがにいくら和志とはいえ後々面倒なことになるからな」

「こんなことをして、本当に継承出来るとお思いですか。兄さん」

「当然手は加えるさ」

「そうやってあなたの経歴は白いままか。表だけいくら取り繕った

ところでその黒い腹は濁ったままだ」

「それがどうした？稔」

毅さんに揺らぐところはない。稔さんはギリリと歯を食いしばった。

俺にはわからない想いがあるんだろうと思った。

(これが、兄弟……)

シヨックを隠せなかった。こんな兄弟もいるんだという事実を目に当てられて。

しかし俺だって例外じゃない。ずっと誤解し合ったままだったら、こんなふうになったのかもしれないと思ったら、いたたまれなくなつた。

「パパ……」

また、京香が呟いた。だけどその顔は血の気が引いていて青白かつた。

真つ直ぐ父親を捉えていて凝視している。

その声に京香の父親も痛みを堪えて、ゆっくり振り返つた。血だらけの掌を、京香に向かってまっすぐ伸ばす。痛みで声が出ないみたいで、口だけが京香と動いたみたいだった。

「パパ？」

再度呼びかけながら、京香は近づこうとした。それを玲華が押さえる。

「駄目よ。いま行つては駄目」

「パパが、わたしを、求めている。玲華じゃなくて、わたしを……」

「……………」

つい、と言つた感じで玲華はその手を離した。

多分それはその内容に。いくら玲華が、周囲の人が優しくしても、たつた一度の親の変化はそれを上回る。

京香は一步また一步と父親に近づいていく。脳が勝手に指令を出しているように見えた。

駄目だ。恰好の餌食となっている。

そう思った矢先、毅さんの腕が動いた。

「京香！」

一番近くにいた玲華が京香を抱き締めながら一緒に転がった。何度か回転し、壁の近くで玲華が上になって止まった。むくつと玲華が顔だけ上げる。

「バカ！動くなっつたじゃない！ちゃんと周りを見なさいよ！」
玲華に遠慮がなくなっていく。

動けない自分に腹が立った。いくら助けたいと思っても、結局助けたのは玲華だ。

同時に、この面子のなかで本当に京香に撃った毅さんに、俺は不合理性を感じていた。

最も弱いものを選んだのだ。しかも弱っている彼女を。
なんて残酷な心を持つてるんだろう。非道な人だ。

玲華が咄嗟に庇ってなかったら、京香の頭は打ち抜かれていた。
間違いなく。

（俺が、早く覚悟を決めないから）

だから、行き詰っている。好き勝手に動くことを許している。

（しつかりしろよ！）

命と代えられないものじゃないだろう。俺のこんなささやかな恐怖なんて。

「玲、華？」

そこにいる誰もが、毅さん側の人以外の誰もがハツとなった。

あまりの衝撃からだったのかもしれない。玲華の優しさがようや
く伝わったのかもしれない。本当のところは本人にはわからない
だろうが……。

（京香……戻ってきた）

その目に、光が。

「玲華、もしかしてまた綺麗になった？」

自分の上に乗っている人物の顔をまじまじと見つめて、復活した
京香が一番最初に言ったのがこれだった。

「はあ？あんなになっ……。いいわ、もういいから黙ってなさい」
さすがの玲華も脱力して、再びそのまま倒れ込む。

「良かった。ちゃんと覚醒したのね」

「ただどその優しい声で倒れ込んだんじゃないやなくて、もう一度抱き締めただと気付いた。」

「覚醒？」

「いいから周り見なさいよ！この状況を早く察して！」

ノロノロと京香が上半身を僅かに起こす。玲華もそれに合わせてすこしずらした。

「なにこれ……。どうやったらこんな最悪な状況になるわけ？」

「うるさいわね。いいから寝てなさいよ」

「命令しないで！相変わらずムカつくんだね、あんたは」

「ちょ……。助けてあげた恩人に言うセリフ？ソレ……」

「しょうがないじゃない。いままでそんなふうにはしか、玲華に接してないんだから」

京香の言葉が弱くなり、そして俯いた。

やはり、いままでの声は彼女に届いていたんだと、俺は確信した。
今更どう感謝の気持ちを表したらいいかわからないんだ。

玲華がこっそり何かを京香に耳打ちする。

「勘違いしてないか？玲華」

硬い声で毅さんがこの空気を切り裂いた。

まだ、京香の上に庇うように包み込んでいる玲華を、威圧するよ
うに見下している。

「俺はおまえを殺さないと思ってているようだがそれは違う。おまえ
が領かなくても俺は困らない。別のやり方をとるだけだからな。そ
れでもここまで付き合っやってっているのは、ただの退屈しのぎにす
ぎない。それからけじめだ。ずいぶん好き勝手してくれたおまえに
は懲戒を与えねばならん」

「な……」

どこまでもこの人は他人を凌駕している。

決して踊らされることがないんだ。つけ入る隙がないくらい、人に弱みを見せない。

毅さんの本気を感じ取ったんだろう。玲華は起き上がった。それでも京香の前にいることに変わりはない。

俺はすぐにも走り寄りたくなくなった。だけど銃が容赦なくそれぞれに向いている。一步でも動けば躊躇うことなくやられそつだ。

「それで？狙いをあたしに変えるってわけ？」

「バっ！」

もう、ホントに馬鹿だ！

なんでそう堂々とできるんだよ。

(だから……)

やっぱり俺だって負けてられないっていう気持ちになって。

「玲華！行こう！先に進もう！」

こんなところでこんな奴らに停止させられてる場合じゃないんだ。そのためだったら、苦手な事だつてするし、情けないプライドも捨ててやる。

玲華は俺を見た。それからなぜかすごく嬉しそうに笑った。

いや、だから笑っている場合でもなくて……。

「何かを企んでるな。そんなことはさせん」

鋭く言つて毅さんの指が動いたのが見えた。

その先にどうなるか、とかそんなことを頭が掠める前に俺は動いた。もちろん玲華のところへ。

しかし誰かが俺にぶつかって阻止された。

稔さんだった。

俺が動くより早く玲華の元に行き、そして。

「っ……！」

左肩を撃たれた。一瞬だけ痛みに顔を歪めたけれど、すぐに玲華から拳銃を奪い取り毅さんへと向ける。

「本気か？おまえに俺が撃てるのか？」

「侮られては困る。だがおれは、あなたとは異なる意味で撃ちます」

稔さんも本気だった。ピリピリした空気が充満する。

「こんなのは嫌だと思った。」

「やめろよ！実の兄弟が撃ち合うなんて、そんなことあり得ないだろ！」

「黙れ小僧。ここにいる奴等から聞かなかったか？血の繋がりなど、なんの意味も為さないことを」

「そうだよ。邪魔しないで」

毅さんだけでなく、稔さんからも睨まれた。

確かに比組が言った。そういうものが希薄だと。

（まさか、本当に？）

いや、そんなはずはない。結局、京香だって父親の言葉がきっかけで目覚めたのではないのか。なんの感情も生まれないなんて、そんなことあるはずない。

「悠汰」

玲華が俺の近くまで来て腕を引っ張った。

（おまえまで、こんなこと許すのか）

俺には堪え難い。これ以上傷つく人だって見たくない。

「切り抜けるためよ。どのみちこのままじゃ、飛び込めないわ」

こっそり玲華が耳打ちしてきた。俺にだけ聞こえるように。

そうか。稔さんは憎しみで撃つわけじゃないんだ。

ならば仕方ないと思わなければいけないのだろうか。

（でも嫌だ）

どんな理由があつたって、ただの作戦だつて嫌だと思った。

そのとき、俺の目に第三者の人影の動きが目映った。

その人たちは影のようにこっそり動き、部屋の中に入る。

「動くな」

それは久保田さんたちだった。久保田さんは毅さんの後ろにピタリとくっついていて、千石さんと加藤さんは護衛たちに左右に別れて拳銃を突きつけている。

「久保田さん、どうして……」

突然の登場に玲華が驚きの声を発した。

「頭数が減ってるのに気づいてな。もうあそこで予防線を張る必要はないと判断した。おかげでおまけもすぐここまで来るだろう。おまえたちはいまのうちにに行け」

どこまで格好いいんだ、この人は。普段が普段だけに、とても信じられないけれど、久保田さんは仕事はデキる人なんだ。

久保田さんの言葉に玲華は頷いた。そしてまたこつそり囁く。

「じゃあ行きましょ。でもあたし、さつきはああ言ったけど、状況が変わったわ。あたしは京香をつれて泳ごうと思うの。だからあんたは綾小路先輩とでも来てくれる？」

「えっ……」

せつかく湧き上がった決意が崩れ落ちそうになった。

そこへ京香も確かな足取りで歩いてきた。

良かった。ちゃんと目に意識がもどってる。でもまだ顔色は悪い。

「わたしは大丈夫だよ」

「なに言ってるんのよ。まだ本調子じゃないでしょ。そんなんで潜水なんて出来ないわよ。足を攣って溺れるのがオチだわ」

確かに京香にもサポートが必要なんじゃないかと思えた。そうしたらそれは玲華しかない。

稔さんは怪我をしてしまった。いまも出血している。こんなんで潜水なんて、俺としては考えただけで見も毛もよだつが、本人は大丈夫だよと気にしてなさそうに言った。

比紹はそもそも興味もなさそうで、してくれそうにないし、預けるには京香の方が心配になる。でも。

「綾小路に任せたら、俺、無事に辿り着けるかわからない」

ウヤマヤに何をされるかわからない。信用できない。

「貴様、この僕がそんな卑劣な真似をすると思っのか？撤回しろ」

「無理だ。日頃の行いが悪い」

綾小路が俺のためになることをするはずがない。なぜかそれは心

髓から知っていた。

「しょうがないわね。だったら比紹くらいしかないけど？」

「ああ。その方が全然いい。比紹と行く」

さらりと振られた玲華の提案に俺は大きく頷いた。

そしたら、えって比紹がものすごく驚いてこちらを振り返った。

驚くというか、ちょっと呆れが含まれているような気がする。

貴様……とまた綾小路が怒っていたけど、それは無視した。

「亜衣ちゃんは何行ける？」

「わたくしが連れていきます」

麻衣がきりりとした表情でそう言った。とても頼もしい。

「じゃあそういうことで。綾小路先輩は稔叔父様のフォローお願いします」

時間がないせいか、さくさくと玲華は仕切っていった。

刻々とその瞬間が近づいてくる。水に浸からなければならぬと
きが。

「おまえら！なにをゴチャゴチャ喋っている！」

「動かないでください。死にたいんですか？」

息巻く毅さんを背後から久保田さんは抑え続けている。

「おまえみたいな素人に俺が、いや、人が殺せるのか？」

「確かにオレはこんなもん扱うのも初めてなら、人を殺したこともありません。ですが、こいつらを殺るといふのなら、オレだって覚悟は疾うはげにしてるんです」

久保田さん、すごく険しい表情のままだ。仕事用の顔を持っている人だけど、ここまで厳しいのは初めて見た気がする。

「久保田さんはどうやって脱出するんだ？」

俺は気になって玲華に囁いた。ここで俺たちが先に進んでも、久保田さんは残されたままになるんじゃないだろうか。

「心配しないで、自分のことだけ考えて。あたしたちがここにいる以上、あの人は防御にまわるしかなくなるのよ」

玲華のそれは答えではなかった。俺を納得させるだけのただの説得だと思った。

つまり、すでにこれは計画の範疇になかったことなんだろう。久保田さんが抜け出す算段までは出来ていないんだ。

「悪いけど案内も兼ねてあたしから行かせてもらっわ。次は亜衣ちゃんも麻衣ちゃん。女性が先のほうが安心なもの。あとは好きにして、でも絶対すぐに着いてきてね」

玲華は窓の上に押し上げた。冷たい風が吹いてくる。

「じゃあね、悠汰。先で待ってる」

目に力を込めてそう言うと、玲華は京香を連れて噴水に飛び込んだ。派手な音が二階まで聞こえてきて、その辺りが一瞬血のり色に染まる。

本当に、行ってしまった。

「おまえらなにをっ！」

毅さんが突然飛び降りたことで追おうと一歩踏み出した。それを久保田さんが押さえる。

その中で、亜衣と麻衣が続き、綾小路は一度稔さんを見た。

「おそらく大丈夫だと思うけど……」

「なに言ってるんですか？玲華が心配してるんだから大丈夫なはずないでしょう？」

「きみの基準は相変わらずだね」

軽口を叩きあいながら、二人揃ってダイブする。

……っていうか、なんでみんなそんなに早いんだ。自分たちの番に否応なくなってしまった。

比紹がちよつと困った顔をして、ため息を吐いた。

「なんでぼくが、こんなことしなくちゃいけないんだよ。知らないよ、ぼくは。勝手に決められても迷惑なんだけど」

「いいから行こうぜ。もう迷ってる場合じゃないし」

久保田さんもいつまでも押さえられない。他の連中もすぐに来ると言っていたし、状況がまたいつ悪くなるとも限らない。

「ねえ。また間違えたね、悠汰くん」

俺を直視して、比紹は笑う。良くないことを企んでいるときの笑

みだつて、もう知っていた。

「ここまでぼくがついてきたのは、決して諦めたわけでも、心を許したわけでもないんだよ。まだチャンスを狙っていたんだ。それなのに簡単にぼくを選んでさ。信用したら駄目だって言ったよね？どうなつても後悔しないですよ」

「おまえ、またそんな人を惑わすようなこと……」

それでも心は折れそうなのに。

でも比紹は何もしない。きつと口だけだ。俺が綾小路より信用したんだ。なにがあつても後悔はしない。

「中でおいて行つてさ、窒息死させても事故だったとぼくには言い張ることが出来る。証拠なんて出ないから」

「まだそんなこと言つてんのか。だったらなんでわざわざ言つんだよ。脅かすためだけのセリフは聞き飽きてんだよ、こっちは。いいから行くぞ。早く行かないと決心が鈍るだろ」

窓の棧に両手をついて、そこに乗った。みんなあっさりと跳んで行つたけれど、そこまでの思い切りがまだ出てこない。

俺を見下すように見ながら、比紹は嫌な顔をした。

「ぼくの手に残るよ、こんなの。玲華からお荷物を押し付けられた気分だ」

また、俺の胸を騒がすような言い方をする。

(お荷物って……)

否定できないところが辛い。とくにいま、この状況ではなにも言うことができない。

「なんだ？おまえらは行かないのか？」

モタモタしている俺を見て、毅さんが嘲笑った。本当に銃を突きつけられてるとは思えないほどの余裕っぷりだ。もしかしたらもう、俺たちがなにをしたいのか見極めたのかもしれない。きつと隠し通路の存在は深影から聞いていて、そしたらこの先を予測することぐらいこの人なら訳無いだろう。

「悠汰、どうした？」

俺よりも高いその身長は、毅さんよりも頭ひとつ分出ていて、久保田さんは悠々とこちらの状態を見ている。

そういえば久保田さんにも水恐怖症のこと言っていない。だからかもしれない。すぐく怪訝そうな顔をしている。かといって、ここで皆に聞こえるように事情を話すつもりは毛頭なかった。いや、それがなくても言いたくはないが。

俺が比組を催促するように見ると、彼は仕方なさそうに呟いた。「わかったよ、仕方ないな。じゃあはい、息吐いて」
吐く？

なんで吐く？とか思いながらも俺はその通りにした。

「次は思いつきり吸って」
すつと大きく息を吸う。
と。

突如、比組は俺に飛び掛かってきて、そのまま一緒に空中に投げ出された。頭脳派だと言っていたのに、その跳躍は素晴らしいものだった。ただ単に協力的なことをしたくなかったただだったらしい。浮遊を感じたと思った刹那、背中から一気に水が全身を覆う。水に浸かる場所から侵食されるように鳥肌がたった。

(つ！)
冷たさだけが理由じゃない。恐怖からだ。わかっていたはずなのに、一瞬、恐慌状態に陥る。
圧迫感が半端ない。

なにかに掴まりたい衝動に駆られた。掴むように手で水をかき分けたが、いくら掴んでも水は逃げていくだけで、そのまま沈む。水の中で目が開けることができなくて、見えない恐怖感がプラスされた。

苦しい。息が、出来ない。

自分の意思で呼吸が出来ないのは、俺にはパニックでしかない。だけど比組の腕が俺を押さえ込んでいて、思うように動けなかった。これではストロークしても上昇することも出来ない。

(元の位置に)

待て。

一旦ちよつと待て。戻らせてって思ったけど、待てるはずはなく容赦なく沈んでいく。

克明に、浮かび上がる記憶。

何度も何度も風呂湯に顔をつけられて、沈み込められた。あの時の記憶。

過呼吸を治すためだつて、父親が言っていた。

そんなのは嘘だ、とそのときは反発心を持っていたのだけど。

(ああ、そうか……)

あながち嘘だけでもないのかもしれない。必要以上に呼吸をすることで起こるつて、今なら知っているから。水中で過呼吸なんか起こるはずがないんだ。

でも、息継ぎのときに焦って短く呼吸を繰り返してなってしまうことはある。まさにそうだったんだ。

結局俺がそれでも治らなかつたから、途中でやめたのか？

(だって、あれからはしてこなかつたから)

そう、三回でやめた。

もしかしたら全部、父親には父親の理由があつてやっていたことなのかもしれない。褒められた行為じゃないことが多かつたけれど。そのとき、なにかが俺の口を塞いだ。

(比紹……)

どついつ意図かわからない。だけど鼻を含め片手で口元を塞がれている。

あなたはただ息を止めてジツとしていればいいわ。

そして玲華の先ほどの言葉が思い出された。

それで、ようやく俺は自分が暴れて比紹に迷惑かけてたんだつて

……理解した。無意識に息が漏れていたんだ。

目を固く閉じているままだから、状況がつかめない。

でも俺は、その通りにすることが正しいと思つた。なにがあつて

も動かない。死にそうに苦しくても、動いちゃいけないんだって。空気はなくなっていくばかりだけど、少しずつ、気持ちは落ち着いていった。

するとそれに気づいたのか、比紹は加速しだした。

やっぱり、俺が暴れたせいで遅れていたようだ。これでは比紹がなにか仕掛けてこなくても二人とも息絶えていたかもしれない。

圧迫されていく気圧。

十月とはいえ冷たい水。

冷静になればなるほど、リアルに感じる。

どれだけ距離があるか玲華から聞いてない。つまり、何分息を止めていれば抜け出せるのかってところだ。

普通そこを教えるものじゃないのか。聞くのを忘れた自分も悪いけど。

不意に速度が落ちたのを感じた。

そして比紹からの拘束がほどけた。嫌な予感がする。

(なにかを、企んでるのか)

まさか本当に、俺を殺そうとしているのか。

(いや、違う)

それならわざわざ口元を覆ったりなんかしない。

もしかすると、比紹にも迷いがあるのかもしれないと思った。自分に素直になれないで、俺を殺すことが幸せに繋がると思っているならそれは間違いだ。

ならば断じて俺はここで死ぬわけにはいかない。

彼に手を汚させたりなんかしない。

思いきって俺は薄目を開けてみた。ぼやけていてなにも見えないけれど影の感じで比紹がこちらを覗きこんでいるのはわかった。

比紹だって苦しいはずだ。それなのにこんな水中で余計なことでも迷って全滅するなんて馬鹿だ。

俺は空気を出さないように配慮しながら、なんとか口パクで意志を伝えようとした。

はやくしろ。一緒に死にたいのか。

俺を憎んでくれていい。だけどそんな俺と一緒にには死にたくはないだろう。比紹だって。

それから。想いが伝わったのか、再び比紹は加速した。

(そうだ。それでいい)

おまえが俺を殺したら、憎んでいるあの家の人間と同類ということになる。だったらそんな感情捨ててしまえ。

きつと後悔するから。

* * *

次に目が覚めたときには、俺はコンクリートの上に寝ていた。すごく体がダルい。

濡れた髪のままの玲華が覗き込んできていた。

「良かった。目覚めたのね」

そういつて抱きついてくる。

俺は意識を失っていたらしい、ってそのときに気づいた。

横を向くと、コンクリートで統制された間を水が流れていた。地下水路みたいだ。

「玲華」

「玲華」

そつと俺は彼女の髪を一掴みした。まだ湿っている。

いまにも泣きそうな顔で玲華が顔を上げた。

「なに？」

「重い」

「馬鹿！」

思ったまま口にしたら玲華に頬をビンタされた。ひでえ……。

こいつは俺の気持ちを知っているくせに、平気で殴るんだからやっつてられない。

「あんたね！言いたくなかったけど、呼吸止まっていたのよ！あたしが人工呼吸しなかつたら死んでたんだから！このぶああかつ！」

「えっ……」

力いっぱい馬鹿つて言われた。

そんな成り行きとは知らなかったとはいえ、目覚めた第一声が重
いだったら、それは怒るよな。ひどいのは俺の方だったみたいだ。

でも玲華が重いつてわけじゃなくて、体が重いつて言いたかった
んだけど。

「ごめん」

そんな説明したところでただの言い訳だなと思って、とりあえず
謝った。

それからこんなことしてる場合じゃないって頭に閃いて、無理矢
理体を起こした。

玲華のすぐ後ろに京香と双子の二人がいた。眉尻が下がっていて、
同じような顔をしている。双子じゃなくて三つ子みたい。もしか
して心配してくれていたのだろうか。

ちよつと遠くのほうでは、稔さんと綾小路が先を見つめながらな
にやら会話をしていた。その間には比紹がひとり、座りながら水の
流れを見ている。

「みんな無事だったんだ」

「あんた以外わねっ！」

あつ、これは怒りの根が深い。きつとそれだけ心配させたんだろ
う。

そつぽ向いている玲華を抱き締めたい衝動に駆られた。だけど人
の視線が気になって俺はぐつと抑える。

「ホント、悪い……」

「いいわ。先に行きましょう」

仕方ないというように、彼女に笑みが戻った。

頷いて俺は立ち上がる。少し立ちくらみがした。それを隠して歩
き出す。

「生きてたの？」

全然歓迎してなさそうに比紹が言った。

「ああ。サンキュな。マジで助かった」
俺が礼を言つと、比紹は何も答えずにふいつと先に進んでしまつた。

なんだ、あいつは。
いつものように皮肉を言われるのかと思つたのに。

そう思っていると、玲華が手を握つてきてそのまま引つ張つていく。これもなに？と思つたけど、聞く前に玲華は反対側から後ろを向いた。

「行くわよ、みんな」

「わかつてるよ！」

ぼんやりと俺たちを見つめていた京香が、はつとしたように慌て寄つてきた。亜衣と麻衣もしっかりとした足取りでついてくるが、とくになにも言わない。

なんなんだろう。この空気は。

俺の知らないところだなにかあつたんだろうか。そう思わせる気まずいような妙な空気が流れていた。

しかし聞けるような雰囲気でもない。

稔さんと綾小路がこちらに気づいて振り向いた。

「あああつ。なにをしているっ！」

俺と玲華が手を繋いでいることで、綾小路はぎゃんぎゃん騒ぐ。

こいつだけは変わらないよな。

玲華は玲華で無視してさっさと追い越すし。

稔さんの肩は白いハンカチできつく圧迫されていた。

妙な空気のまま、俺たちは出口に向かっていく。だいたい三十分ぐらい歩いたところだろうか。上へと上る階段があつた。

上がりきると古めかしい扉があつて、その先は何の変哲もない空間が広がつた。

「ビルの地下になつてるらしいの」

誰にというわけでもなく、説明口調で玲華が言う。

きつとここも西龍院家が持っているビルなんだろう。でもなにも

物が無い。ただの出口として買われた敷地なんだろうか。

ビルの外に出たら、確かに水路は川に繋がっているのがわかった。ちようど合流地点で地下水路は終わる。

「考えたな。これならこの地下水路から侵入しようなんて思いつかないもんな」

「っていつかあんた知らなかっただろうけど、間に柵があるのよ。」

普通の身体能力じゃ逆流してるから泳ぎきるなんて難しいわ」

「あ、そうなんだ……」

また浅墓な発言をしてしまった。

どこで失神したかなんて憶えてない。それでも川の流れを逆らって行くことが難しいことぐらい気づいても良かったのに。

一時はあれだけ侵入することを頭に思い巡らせていた。つい思っってしまっただけだから許して欲しい気もする。

「玲華様」

その川沿いにあるビルの出入り口で、俺たちに近づいてきた人がいた。

「えっ？あれ？」

俺の知っている人だ。玲華の専属の運転手、眞鍋さんだったのだ。

「やだ。そういうことなのね……」

玲華はとくに驚いてないようで、隣でそう呟いたきりだった。

眞鍋さんはすべて承知というようにバスタオルを持っていた。全

員分ある。

「はい。皆様用のお車もご用意しております」

なんで？

分からないことだらけだ。

驚いてないのは他に稔さんと綾小路だけだった。これが計画の全貌を知っている人とそうじゃない人との違いだろう。当たり前だ。ど。

「車で今までのこと一から全部話すわ。悠汰はあたしと一緒に来て」
そう言うと、玲華は俺の手を離してタオルを受け取る。そして、

はい、って固まったままの俺にも渡してくれた。

用意されていた車は三台。

綾小路は玲華に頼まれて比紹と一緒にの車に乗った。比紹への説明を頼んだのだ。そして稔さんには京香と亜衣と麻衣を預ける。

でも一台がまたすごいデカイベンツだったもんで、皆で乗れるんじゃないかな、と思った。どこに座ればいいのか一瞬迷う。

「あたしからの話なんて聞きたくないでしょうからね」

誰が、とは言わなかったけど、玲華は車内でそう言っていた。

あたしが真つ先にお祖父様に言われたことがね、誰を後継者にするか決めかねているってことだったの。あの発表をしたうえで、誰がどういう動きをするのか見極めたいって。

だからあたしに協力してもらいたいって。

最初は当然断ったわ。だってあたしには誰が跡を継ぐかなんてどうでもいいもの。

それにやめるようにも説得したわ。みんなを試すような、そんな馬鹿にした話ってないじゃない？

でもお祖父様は言ったのよ。

「このところ学生生活が楽しいようだな。それを泡沫うたかたのものにしたくはあるまい」

すぐに悠汰のことを言ってるんだと思った。お祖父様の呼び出しよりパーティを優先にし、そこで同伴させた見知らぬ男がいるってことで、お祖父様の耳にも届いてしまっていたの。

「あたしを脅すつもり？」

「この程度で狼狽するようでは、これから先が辛いぞ。代え難い駆け引きや選び難い選択が待ち受けるだろうからな」

「それはあたしがやることを前提とした言葉ね」

「そうなる。もう決まった未来だ」

「ならば、引き受けるだけ引き受けて、あっさりあたしが適当に署名して終わらせたらどうするの？」

「おまえにそれは出来ない。そういう性分だと見抜いておる」

「でもあっさり負けて、強引にさせられるっていう流れもあるわよ。そしたら見極める前に終了ね」

「それならそれで構わん。予告どおりその者に望むものをやるだけだ」

「えっ。マジ？」

「そうマジだ。だからおまえももつと軽い気持ちでやってくれれば良いんだよ、玲華」

柔らかい口調で引き受けてくれるか？と、お祖父様は続けたの。そのときはとりあえず考える時間を欲しいと伝えたわ。だけどお祖父様はしたたかね。期限を与えられちゃった。

玲華は一旦言葉を切って、濡れた髪を拭くことに気を取られていた。

車が走り出し、怒涛のごとく話し出してくれたけど、これからどこに向かうのかは教えてもらっていない。

そこまでまだ到達してないんだろうけど、気になっているところから教えて欲しいものだ。

「その期限ってあれだろ？おまえが結婚式抜け出した日だろ」

「知ってたの？」

たまらず口を挟んだら、玲華がちょっと驚いていた。

「理事長に聞きに行った」

そういえば俺がどこまで知ってるか言ってなかった。

あまりこの部分は面白おかしく話せるところじゃない。一番最初に俺が玲華を信じられなくなった起点だから。

「そう……。他には何を聞いたの？」

俺は聞いたことすべてを答えた。二重説明をしてもらう時間を避けるために。理事長に余計なことするなと釘を刺されたところまで。「お父様は悠汰に期待をしようとしたんだわ。自分が動けない代わりに動いてくれる別の人を探していた。でもそれがとても危険なことだと、悠汰と話しているうちに改めて感じてしまったのよ。それでそんな中途半端なこと言っただわ」

「中途半端……」

「だってあたし、もうひとつお父様に重大なことを話していたの」
僅かに眉を寄せて、切なそうに吐息を吐いた。

話すことさえさせてはいけないような。そんな気分を、傍から見ているものに与える哀愁があった。

「あたし……。比紹が、あたしの義兄あにだって知ったとき、ものすごく驚いたわ。……でもそれは、それが比紹だつてことに驚いたの。つまり知っていたのよ、そういう人が存在するっていうこと」

「えっ？」

「それは、今回のことで知ったんだけどね……」

フェイスタオルを被って玲華はちよつと俯いた。

あたしがお祖父様の提案を決意して、条件を出したのは、時間をもらつてもつとじつくりやりたかつたからなの。どうせ逃げ切れないことはもうわかつてたしね。

でもあのときはそれどころじゃなかつたし、こんなタイミングでやつてもすべて失敗するような気がして。それが怖かつたんだわ。

お祖父様は了承してくれた。

世羅と悠汰の件が解決して、何度かお祖父様のところへ行つたの。打ち合わせをすることにしたのもあたしの提案だつた。

話を進めていくうちに、どうしても気になっていることを聞いたのよ。

「でもどうして毅叔父様では駄目なの？みんな薄々、継ぐのは毅叔父様で間違いないと思つてるわよ」

「それだよ。本人も確信めいたものを持ってしまつて、最近はどうも粗野な態度が見える。とはいえ清志郎はあの気性だしな。和志もいまいち度胸が足りん。稔は女第一でこういうのは向かない。他のものは論外だな。平均点でも劣つておる」

会話を続けていくうちに、お祖父様もくだけた口調になつていった。本当に孫との会話を楽しむ祖父つて感じだつたわ。だからあたしも遠慮がなくなつてしまつたのよね。

「稔叔父様のその評価は、間違いなくお祖父様に似られたと思うの

よね」

「言うようになつたな、玲華。男を知つたな」

「やだ」お祖父様、その表現エロい。相変わらずねーもう」

「あたりまえだ。まだまだ現役だぞ」

豪快に笑うお祖父様の隣で、青ざめている千石さんがとても印象的だったわね。

でも、その会話の後、ふっとお祖父様が真面目な顔になつたの。

「このまま毅に任せては騒乱が起きる。おそらく清志郎あたりが派閥をつくり、この血族は決裂するだろう。それを抑える力は毅にはない。あやつはただ腕づくで抑える手立てしか知らんからな。……上に立つものの素質、本来必要なのはそれだ。下のものに信頼を得られないものは、未来永劫立ち続けることは叶わん」

「そういう人はここにいるの？」

「さあな……。それに最も近い者を探したいんだよ、玲華。まだワシにも見せてない、そういう一面を持った者がいるかもしれんからな……」

何かを探るようにお祖父様の目が泳いだ。

その表情であたしはあるひとつの可能性に気づいたんだ。

「もしかして……お祖父様……」

口にしようかどうかしようか、あたしはすごく迷つた。

それでも、止められなくてつい言ったの。

「本当はお父様に継いでもらいたいんじゃないの？……まだ、お父様を……」

それは禁句だった。

この家で除籍されたお父様は、お祖父様から正式にいないものと思えと、言われたようなものだから。里帰りすることが年に一回くらいあつた。許されていたのはそれだけで、こういう話題で出すことはとくに禁断とされていた。

でもお祖父様は制止したりはしなかった。ただ少しだけ寂しそうに笑つたんだ。

「あやつは最も均衡が取れていた。おまえには情けないように見えるかもしれないがな」

「そんなことは……」

「ただあやつ……薫は、小百合さんに会っておまえが産まれて、そして変わった。それは間違いない」

「以前のお父様はどんな人だったの？」

「自分というものをひたすらに隠しておった。このワシにもな」

そして、あたしは聞いたの。

あたしのまえに、お父様が子どもをつくっていたことを。

それはとても許されない、裏切り行為だった。お母様とすでに婚約していたうえに、お祖父様の相手を寝取ったってことだから。

「ワシは薫の話も聞かずにただ怒ることしかやらなんだ。そのとき初めて口答えをしたあやつのお話を、ひとつも聞いてやらなかったんだ」

「お祖父様……」

「信じられるか？玲華。そのときの薫の言い分は、女性側、まなみ眞奈美から仕掛けてきた毘だったと言いおった。一昔前からよくある言い逃れだ。ワシは到底信じられなかった。それでも眞奈美を完全に追い出し、薫にはその時任せていた企業をすべて撤退させることで終わらせた」

苦渋の表情を、お祖父様は浮かべていた。

あたしは初めて聞く話の連続で、すぐには何も言えなかったんだ。「おまえの前だから言えることだが、あのときの処分を悔いておるよ。今ではな……。ワシは知らなかったのだ。女は奥が深い。今でも理解することは不能だと思っておる。そう眞奈美の性質を、あの頃のワシは洞察することができておらなんだ……。あれから調べさせて、薫の言うことが事実だとわかったのだ」

「聞いて、どういうこと……？」

直接的に聞いたなら、お祖父様は珍しく一瞬言葉に詰まった。

「まあ、それはあれだ……。仮にも未成年の玲華に話すとなると……」

…どこまで言っているものやら……」

「あ、そう。ふうーん。そんなところで都合よくあたしの年齢を気にするんだ。まー男は単純だもんねー。どんな色仕掛けだったとしても、起こしてしまった過ちは女からしてみれば許せないのよねー、お祖父様ー」

「そう言うな。……ともかくワシは共感してしもうたんだ、薫の苦しみを。それでは仕方ないと……」

「いいわねえ男同士で理解できるってねー」

「玲華。気をつける。男とはそういう生き物なのだ。いくらおまえが信用していようと、なにが起こるかかわからん。今の男とて例外ではないぞ」

「……って、言われたのよねー」

なぜかそのときだけ、玲華は目を細めてチラリと俺を一瞥した。完っ全になにか言いたげだ。しかも俺にとって良くない方向。

(無責任なことを！)

いまは亡きそのお祖父様とやらを、俺はちょっとだけ恨んだかもしれない。そうか、恨むってこういう感じか。

「えっと……それで？」

なす術なく、俺は先を促した。

玲華はちよっと、どうしてやろうかって目をしたけど、話を続けてくれた。

「それで、お祖父様はその後、その眞奈美さんに子供がいたって事実を知ったのよ。で、たまたまとはいえ、お父様の血を引いてる男がいるってことを知って、その子供を捜したいって打ち明けてくれたの。これが今回の本当の目的だったってわけよ」

「えっ……。比紹の存在は知られないまま……？」

こんなにいるんなことがすぐ耳に入ってしまうのに、比紹のことだけわからなかったっていう事実が納得いかなかった。

「そうなの。その女性がどこでその子供と生活しているのか、手がかかりが無かったんだって。眞奈美さんはかなり聡明な人だったみたいね。巧妙に自分を隠し、こっそり笹宮さんに預けていた。でも必ず彼女なら現れるとお祖父様は思ったみたい。だから隅々にまで今回の発表のことが届くように通達を出したの。その女性は西龍院という名に拘っていた。そう、初めからお祖父様に近づいたのも計算のうちだったらしいわ。後から気づいたみたいだけだねっ。あのお祖父様でもっ」

なぜか後半ちよつと怒ってる。男全てが、そういう……女性に騙されるもんだと思わないで欲しいんだけど……。

目だけでそれを訴えたら、とりあえずそれについてはなにも言わなかった。

「でもあたしも違う想いでその子供のことを知りたいと思った。だって、お義兄様になる人よ。知りたいじゃない？まさかそれが比組だとは思わなかったけどね」

複雑な表情を玲華は浮かべた。とんでもない展開で、俺にその気持ち解るはずなくて、どういう顔をしていいかわからない。

「でもあたしだって、簡単にお父様を許せたわけじゃないの……。話を聞いたその日に、お母様のいないところで、ちゃんと本人から聞きたくて伝えたのよ、あたしが知ったこと」

「理事長はなんて？」

「一瞬青ざめていたわ。それでどんな言い訳をするかと思ったら……。ただ謝ってきたの。……最悪ね」

玲華の目が赤くなってきた。俺はその横顔を見ていることしかできなない。

「でも許したわ。だって仕方ないじゃない？お母様が許したのよ。だから現在があるの。いまさらあたしが何かを言ったって……それがなんになるの？」

必死で泣くことを堪えながら、でもそう言う玲華は、すごく大人に見えた。

許すつてことは容易じゃない。だからみんな苦しむんだ。

「その仲直りの印が冷蔵庫なのよ」

へへつと玲華が笑う。

俺は堪らなくなつて、玲華を抱き締めた。

「おまえ……俺になにも言わねえで……」

聞いたところで、俺になにかできたとは思えない。それでも不参加だった事実があまりにも悔しかった。

やっぱり後から聞くだけなんて嫌だ。

「悠汰……。このことはトップシークレットだったのよ。だってお祖父様はその子に期待してたんだから。とくに直接的にはなにも仰らなかつたけど、あたしにその女性の子供を見つけて欲しいと思つてると察したわ。……お父様の子供っていうことだけで……。お祖父様は結局、お父様しか認めてなかつたのよ。このことが知れたら、毅叔父様や清志郎伯父様が暗殺してしまう可能性があるでしょう？」

だから言うわけにはいかなかったの、と玲華は続けた。しっかりとした声だった。

家の事情で言えなかつたのか……。

ならば仕方ないと、思うべきなんだろうな、俺は。

「いつからか、あたしね。お祖父様の想いとか、今までのこととか、なんとかしたいと思うようになって……。これが解決しなければ、あたしも前に進めないと思つたのよ」

「前に、進むため？」

「そうよ。晴れやかな気持ちでこれからも悠汰と進むためよ。だから徹底的にやろうと思つたの。こんなふうにあたしがやることも、お祖父様にはお見通しのことだったんでしょね……」

それは俺も考えたことだった。進むために、拓真を選んだときと同質の想い。

「そこに、俺が邪魔しに行ったのか……」

「それは違うわ。悠汰ももう歯車の一員だったのよ。様々な要因が重なつて結果があるのだから。悠汰がいなければ、比紹は明かして

こなかったかもしれない。それに悠汰がいたことで、間にクッションになってくれたから、まだ被害が最小限に抑えられたのよ」

いつものように、確信的に彼女は言う。

それが本当ならば、どれだけ良いか……。

俺のしたことが役立つていて、無駄じゃなかったって玲華が言うてくれたことで、本当に救われた想いがした。

「じゃあいい。良かったんだよな」

「そうね。何回もヒヤヒヤさせられたけどね」
悪戯っぽく彼女は笑う。

そんなのは俺だって同じだ、バカ。

そう返したかったけど、胸が一杯で何も言えなかった。

* * *

結局、どこへ行くのか説明してもらえないまま、ベントは目的地にたどり着いた。

というのも、これまでの話をお互いに行っていたら案外長くなってしまつて、その内に着いてしまつたのだ。

駐車場につけることなく、ベントはその建物のロビー口につけられる。常備佇んでいる制服姿の人が、何人も左右に分かれ花道で丁寧に迎えられた。

そこはホテルだった。

レイシエ口煌ホテル^{レイシエ口}。五ツ星で豪華で世界的にも超有名なところだった。

「ここ西龍院の系列のホテルなの。あのときの結婚式もここであつたのよ」

玲華がそう説明して車を降りる。

優秀なドアマンは、あきらかに濡れて渴いた状態の俺たちを見ても顔色ひとつ変えないで、お辞儀をしていた。

「お待ちしております」

なぜかそこに燕尾服の椿原さんがいて、俺たちを案内してくれた。あの混乱に乗じていつの間にか移動していたみたいだ。

比紹たちもちょうど同時に着いたから、六人で案内されるままエレベーターに乗車した。フロント係の人やホテルマンたちも、とくに気に留めたりしない。

でもおそらく俺がこんな姿で一人突っ切ろうとしたら、怪訝な顔をされるか最悪止められるんだろうな……。この差はすげえよな。

「ここで休憩でもするのか？」

「行けばわかるわ」

またこの対応だ。

俺はこれまでと同じように納得できない感情に陥る。

目の前にわかってる奴がいるんだから、さっさと聞いて落ち着きたい……。元から俺はそういう性分みたいだ。

それでなくても、先ほどまでの妙な空気がまだ漂っているのに。

(つていうか悪くなつてないか……)

とりあえず誰も口を開かない。居心地が悪い。

また乗ってる時間も長かった。どこまで上がるんだろう。

「こちらです」

エレベーターを降り、謎めいた微笑みを残し、先に椿原さんが歩く。

誰もなにも言わないで、椿原さんにただ着いて行くだけだ。だから俺も黙っていた。

きらびやかで長くて広い廊下。ホテルの警備員が二人立っている奥の扉の前で椿原さんは止まった。

ノックをしてから促すように扉を開けてお辞儀をする。

それに稔さんから入っていく。

足を踏み入れたとき、中の豪華さに啞然とした。いや、あの家にいて少しは耐性ができていると思ってたんだけど。それでもこれが噂のスイートかって……。別の凄さがある。

(この人……)

中には使用人が五人ほどいたが、それを除くと二人の人物が顔を並べていた。

一人は知らない顔だ。でももう一人に俺は意外に思っていた。なぜ、ここにいるんだろう。

(まさか……)

俺が気後れするほど広くて豪華な部屋に、その人はこんな部屋には似つかわしくない和服だったりする。それなのに当たり前のようにそこにいた。気後れすることなんてあり得ないようだ。

もう一人の人は馴染んでいるうえに悠然と構えている。それどころか、その人の前ではこの部屋さえくすんで見えた。高価そうなスーツ姿で、見る人が見ればマフィアっぽい。

いや、それよりも二人の間にあるのは将棋盤ではなかるうか。洋風のテーブルの上にあつて、不似合いすぎる。

「おっ？ やつときたか。遅かったな」

見知った顔がそう言う。

「どういうことだ？ 玲華。なんでこの人がここにいるんだよ」

「それはあたしも知らないわよ。遊びにきたんでしよう？」

俺が疑問をぶつけると、玲華はさして驚いた様子もなく淡々と答えた。

あ、遊びつて……。

そついう表現がまったく似合わないんですけど。

「驚いてるのは少年だけのようだな、つまらん」

どこか不服そつにその人 浅霧功男さんがひとりごちていた。

えつ、ちよつと待てよ……。その功男さんよりもオーラがハンパないこの人つて……？

「そつ言うな、いっちゃん。遙々戦場の地から戻ってきた者たちだ。もつと笑顔で迎えてやれ」

「そつは言つてもな、ワシはそこを楽しみにわざわざこんなところまで、げんちゃんの暇潰しの相手をしに来てやつたんだぞい」

なんか和やかすぎる二人の会話。そして極めつけ。玲華の挨拶が

……。

「お久し振りですわ。功男様。お祖父様もお元気そうで」

おじ……お祖父様っ!?!

あれが玲華の祖父? いや、そんなことより。

「えええっ! どういうことだ? 死んだんじゃないのかっ!」

「こら! 言葉に気をつける!」

驚きのあまり玲華にたたみかけたら、なぜか綾小路に怒鳴られた。自分は知っているから余裕かましていらられるだけのくせに……卑怯なやつだ。

「ごめん、悠汰。なかなか話すチャンスなくて。今もほら、会話途中で着いちゃったでしょう?」

「真っ先に言うだろ! 普通は!」

「知らないわよ、普通なんて」

申し訳なさそうに両手を合わせていたくせに、俺が突っ込むと腕組みをしてそっぽを向いてしまった。

あのなあ。矛盾してないか?

「ふおっほっほ。久しぶりだの玲華さん。それに少年も。変わりないようだな」

軽く笑いながら片手を上げる功男さんのその奥で、源蔵さんが言う。

「死んでなどいない。もちろん幽霊でもないから安心してよい」

俺の非礼を責めるどころか、豪快にその人は笑った。

安心してよい、って……そういう問題じゃない気がするんだけど。

「本当……だったんだ」

聞いていても信じられなかったのか、どこか茫然と比組が呟く。

「今までのこと、全て嘘だったんですね。どこまでも人を馬鹿にしたっ……」

「嘘ではない。芝居だよ。なかなか難しかったのう、死体役は」

「その場にまずワシを居合わせると言ったのに、げんちゃんは頑なに拒否しおった。まったく頑固じじいが」

「当然だ。流れがおかしくなる。あと、頑固さではいつちゃんまさが勝つてるぞ」

「そんな話しはどうでもいい！」

笑い合う二人に比紹が爆発的に怒鳴った。

(比紹……)

そうだ。比紹はこの人も憎むべき対象としているんだ。

そんな人が死んだと思っていたのに、いま目の前に存在している。俺にはそれがどんな想いなのか計り知れない。

きつと、戸惑いとか憤りとか……半端ないんだろ。感情が高まって真つ赤な顔になっている。

「ぼくのことを知ってたつていうのは本当なんですか！？それでこんなことをしたつて言っんですか？」

「おまえがあの時の子か。随分長らく日影に隠れておつたな」

優雅に肘を突き、まったく動じずに源蔵さんは口を開く。

それでも感慨深かつたはずだと思った。玲華の話によればきつとそうだ。

「逸らさないで答えて！」

「そう逸り立つな。嘘ではない、と言つておこつるか」

比紹の癪にもまつたく意に介さない。本来醸し出されている威圧感が凄いから、比紹も言葉に詰まつたようだった。

だけど、代わりに稔さんが比紹の肩を押さえて、一步前に出た。

「ちゃんと説明していただけますね？なぜこんなことをされたのか、これまでのこと全て」

「よもやまさか、おまえが殺より早くワシのところまで辿り着くとはな」

「それも想定内だったので不是吗？おれよりもずっと内情を把握されていたのでしょうか」

「どういふことだよ」

なぜ中にいる稔さんより、いない源蔵さんが詳しいんだろ。

聞かないとどんどん進みそうだったんで、口を挟ませていただい

た。

「おれが持っていた盗聴器、実は父が設置したものだ。おれは便乗受信をしていただけだったんだよ」

「え？」

「あら……やっぱり？」

「なんだと？ええとつまり……稔さんが聞いていたことはすべて源蔵さんも聞いていた？」

混乱してきた。

「ただ玲華は少しだけ意外そうに口元を押さえただけだった。」

「それがなくても、沢山自分の配下を置いていったわけだからね。情報を得ることぐらい容易いことだったと思うよ」

「それはそうよね。お祖父様、あたしも実は言いたいことがたくさんあるの。ええ、苦情に類するものかしら。聞いていただけるわよね」

「あ、玲華がむくれてる。丁寧な口調で怒るパターンだ。」

「源蔵さんが苦笑した。この人が玲華にビビるわけではないだろうけど、どこか視線を逸らして誤魔化そうとしてるように見えた。」

「まあな。しかしもうじき皆も来る。集まってからにするというのはどうだ？」

「みんな？」

「皆って、つまりどういう範囲を言うんだろう。」

「そう、みんなだよ」

「俺の眩きに律儀に源蔵さんは答えてくれた。」

「もうじき薫が連れてくるだろうからな」

「え？理事長が……？」

「俺はおうむ返ししかしていない。それくらい動揺が引きずっていった。」

「それから、すごく納得いかないことがあって……。」

「そつだ。なにか問題があるかね？」

「……それってアナタが一人で家に帰れば、その方がスムーズだった。」

たんじやないですか？」

「だから立場をわきまえろと言っているだろう！神崎！」

また綾小路に注意された。こいつ俺ばかり目の敵にしてる。

だつてそうだろう？

みんな集めるんなら、おまえが来い……とまではさすがに言えないけれど、言いたくなる気持ちはあるじゃないか。それくらい大変だつたんだから。

（この人が来れば一発で解決したんだから！）

そうだよ、俺は泳がなくても済んだんだ。……実際には泳いだとはいえなくて、ただ比組につかまっていただけだ。

「まあ、よい。亨君。しかしな、薫が出向いたのはあやつ判断なんだ。ワシはここから離れて明かすつもりは今も尚、皆無なのだよ。しかしあやつはいくら止めても全く聞こうとせんかった」

「完全にお主の子だな」

再び功男さんが茶々をいれる。頑固つて言いたいんだろう。

つて、そうだ。実は見た目より軽いキャラだった、この人……。

一度会話したときのことを思い返した。

「お父様はなにしに向かったの？」

「何をしにつてな、おまえのことを憂慮ゆうりょしたに決まつておろつ、玲華。ワシがここにいる情報をつかむや否や怒鳴り込んできたんだぞ。あの薫がな。滅多に見れんものを見せてくれたお礼に話してやったんだが、それから行くと言つてきかん。それでも暫くは薫を止めていたのだが、ある情報が入り込んだ途端ワシでも止められんようになつてしまった」

その時を思い出したのか、源蔵さんが僅かに柔らかい顔になった。それに合わせて威圧的な雰囲気なくなる。こんな一面もあるんだ。だつたらずつと笑つていてくれたら周りの人も恐くないんだろうに。

でもその次にちらりと俺を見たときには、源蔵さんは不敵な笑みになつていた。

うつ、と思わずたじろぐ。

「お主のことだぞ、神崎君とやら」

「は？」

「お主が忍び込んだことを耳にしたからだ。大局が動くことを予見したのだから。ワシは邪魔をされなくなかった、玲華が自発的に出てくるまではな。しかし薫は全てを振り切り、先のことも考慮せずに飛び出して行きおった。娘が関わると冷静になれんのは相変わらずだな」

「うわ……」。

俺も理事長の制止を無視して行っただって今頃思い出した。しかも俺のせいって……。

なぜか理事長には嫌われたくないって想いがある。それはやっぱり、玲華の父親だから。

（これを期に引き裂かれたらどうしよう……）

もう逢っちゃいけませんとか……。実に言いそつだ。

「それでああなたは手を貸したのですか？兄さんに」

稔さんの声が一オクターブ低くなった。

「なぜそう思う？」

「あなたは昔から兄さんだけは鼻屑目で見ていた。わかっていて、むぎむぎ不法侵入なんてさせないでしょう」

すべて知ってるんだ、この人。

理事長しか認めてないって玲華が言ったこと。稔さんはきつと長年近くでいて、肌で感じていたのかもしれない。

「気にすることはない。この期に及んで復権などさせん。ワシがしたことはあくまで時間稼ぎだ。力を貸す代わりに一日待てと言ったまで」

稔さんは俯きがちに黙る。

きつと、そういうことじゃないんだ。理事長だけが特別扱いされてるって感じているのは、権力のことだけじゃなくて……。

兄弟間の嫉妬って多かれ少なかれ、どこにでもあるんだって思っ

た。

「皆が来るまで別の部屋で休むといい。ワシがすでにくつつか手配しておいた。おまえたち、寒中水泳をやったままだろう?」

不意に源蔵さんが話を変えた。

そついえばそつだ。気持ち悪いままだったりする。車内でガンガンに暖房をかけてくれたらから、寒くはないし、大方渴いてはいるけれど。

「まさかいくつかある脱出口のなから、あの場所を選ぶとは思わなんだわ」

「え……」

ちよつと待て、本当に必要なかつたんじゃないか?俺の決意……。これには玲華も眉をひそめていた。

わざとじゃないわけだ……。

「ではワシは帰るかの」

よいしょ、と一声かけて功男さんが重い腰をあげた。

玲華がそれに反応する。

「えっお帰りになられるんですか?」

「暇つぶしという努めは果たしたからの」

「勝ち逃げとは見下げたやつだな」

「心配せんでもそれもワシの勝ちだ。言っておくが、動かすなよ、じじい」

功男さんが将棋盤を指差した。

「抜かせ。ワシはチエスでは誰にも負けんのに。ルールを覚えろと言っておろつが」

「あんなもの無用の俗物だ」

ふん、と功男さんは鼻を鳴らす。

というかこの二人、いつもこんな感じなのだろうか……。

(すごい二人なんだよな……)

確認せずにはいられない。それは以前功男さんと会ったときもそうだったんだけど、今日は輪にかけてそう思うし、もうひとり増え

てるときだ。

功男さんが出ようとするちょうどそのタイミングで、ノックもなしにいきなり扉が開いた。

「玲華！」

理事長だった。いつものスーツ姿でビシツと決めているけれど、その顔には余裕がない。

その後ろには久保田さんたちが続いていた。どんどん人が入ってくる。

久保田さん、無事だったんだ。

「玲華！よかった無事だったんだね」

人目もはばからず、理事長は思い切りガバッと玲華を抱き締めた。いや、抱きついたというのが正しいかもしれない。

いまは玲華以外目に入ってないんだろう。

「お父様……」

玲華の顔が、俺からは見えなくなった。だけどぎゅっと理事長を抱き返しているところを見ると、玲華もいろんな想いがあつたみたいだ。

いつもは適度にかわしてる。

俺が二人から視線を外すと、そのとき視界に入ってきたものがあった。

少し離れたところで、比紹が複雑そうに視線を逸らしたのを、見てしまった。

駆け寄って、何か語り掛けたい気持ちになつたけど、なにも言うべきことがみつからない。

俺なんかがなにを言ったって、結局何にもならないんだ。軽々しく慰めるなんて、比紹だってされたくないだろうと思った。

「おっ。間に合ったか。久しいのう久保田君」

のんびりと功男さんが出入り口付近でそう言った。

いろいろ顔見知りはあるんだろうけど、真っ先に久保田さんにくなんて……本当に好かれてるんだな。

「げっ」

「げつと言ったのはこの口か？」

久保田さんは功男さんに頬をつねられて、大袈裟に痛がっていた。あそこはあそこで放っておかれる。なにやってんだか、久保田さんは。

だけど久保田さんがきつちりお別れの挨拶を終えると、本当に功男さんは出て行ってしまった。もしかして、久保田さんを待っていたんだらうか。

代わりに毅さんが驚愕の色を示して、中まですかずか入ってきた。源蔵さんの前まで強引に入り、仁王立ちになる。

「なんだ、これは？どういうことだ、いったい！」

俺よりも驚いている。

与えられた影響を考えればそれも当然と言えた。

「見たままが真実だ、毅。これであるの声明は、白紙に戻ったということになるな」

「なんだと？……いや、どういうことですか？私はあなたの遺体を見ている」

偉いもので、もう毅さんは自分の中の憤りを押し殺した。

しかしその声色には怒りが含まれていて、抑えている分過剰に恐かった。

「他の者が去った後も、椿原たちが運んでいるところを見ていたのだ。とても芝居であそこまでできるとは……」

「さすがだな。そう、演技などではない。さすがに近くまで寄られれば、いくら芝居をしたところで公然となるのは必至。だからな、あの時は本当に死んでいたのだよ。人為的に仮死状態としてな」

「なぜ、そこまでして……」

「知ってしまったのだよ、ワシは。眞奈美を手引きしてワシに近づかせたのはおまえだということ。それだけでなく、薫に裏切り行為をさせようと眞奈美をけしかけたのもおまえだな、毅」

「えっ！」

「なんですって！」

そこにいた誰もが、驚愕の声を上げた。源蔵さんの眼光が鋭くなっている。眼だけで圧倒されそうなくらい、迫力があつた。

玲華も、理事長でさえも知らなかったようだ。

源蔵さんをただ凝視するばかりで、啞然としていた。

(比紹は……)

比紹は、青ざめていた。一番皆から離れて、壁に寄りかかりながら、ただ青ざめていた。

もしかしたら比紹は、母親から仕掛けたことだっということも、いま知つたんじゃないだろうか？

ずっと、すり返られた情報を与えられていたのではないだろうか。幾ら聡い女だろうが、独りで隠れ続けることなど叶わん。それには協力者がいると思うてな。毅、おまえ薫を陥れたかつたんだな」
毅さんは否定をしなかつた。ただギリリと齒軋りをして、源蔵さんを睨みつけている。

もう言い逃れはできないと思つてるんだ。

これまでそのことを言わなくて、今明かすということは、ちゃんと源蔵さんは確かな証拠を持つているということだから。

「それで私に継がせられないと思つたのか……」

「ふははははつ。これは傑作だな！」

緊迫した空気を打ち破つて、高笑いを仕出したのは清志郎さんだつた。

本当に愉快そうに、目に涙を溜めてまで笑っている。心底嘲る、悪い表情かおだつた。

「覇権をとるために策を弄して自発的に墮ちるとはな」

「黙れ！清志郎！」

毅然として毅さんは一喝した。ピリツと空気に走る声。

それと共に抜き出された拳銃が清志郎さんに向いた。瞬時に周囲に囲つようにいた護衛たちが毅さんへ銃口を向ける。

(え?)

彼らはいままで、毅さんの指示で動いていたはずなのに。

玲華についていたはずの千石さんも、先ほどのタイミングで源蔵さんの横についていた。素早い動きで、いつの間そこに行き着いたのかわからない。

でもとくに何も言わずに傍らに落ち着いていた。まるでそれが、当然であるかのように。

源蔵さんもそれについては何も気に止めてない。

なんだろう、この状態は。

胸が騒ぐのを感じた。

源蔵さんは指を絡めて悠然と座った状態から、僅かさえも変化がなかった。いまここで起こっていることが特別ではないかのように、難なく。そして、あくまでも静かに口を開く。

「初めから遺言などという物はなかった。つまりはまだ、決定していないということだ。どちらもそう、功をあせるな」

「なにを……。いまさら何を言う!? 私を零落れいらくさせたかったんだろう！」

「いいや、計略はもとより結構なことだ。ワシをも一杯食わせる策ならば、見てみたいと思うもの。あの際にはワシにも落ち度があったしな。しかし露見した今、責任は負わねばならん。この件に関してはすでにワシが言うことではない。薫、おまえはどうだ？ 毅を特赦できるか？」

そこにいた者が一斉に理事長を見た。

まだ玲華の肩を抱いたままだった理事長は、そつと彼女を離し一歩この緊迫した中心に近づく。

「私よりも、最大の犠牲者は彼です。私にはその判断をすることはできません。彼が裁決するのが最も相応しいかと」

そう言つて、比紹を垣間見た。それに合わせて人々の視線も移る。比紹はまだ混乱しているような表情でそこにいた。

突然振られて、唇が震えてしまっている。

「な、に……? この状況で、この流れで……ぼくに、何を言わせた

いわけ？」

声も震えていた。

「比紹」

俺はそこでようやく比紹に近寄った。

きつとこれは転機となる。ここで考え方を変えなければ、一生恨みは晴れないんじゃないかと思った。

だから余計な気のまわし方はやめた。ただやりたいように、動いたんだ。

だけど比紹は、俺が差し出した手を弾いた。

「許せるか、だって……？許せるはずがないだろう！ここにいる奴らみんな、全員そうだ！同罪だ！みんな地に堕ちればいいんだ！」
いまにも飛び掛っていきそうな勢いで比紹は叫ぶ。

だから俺は咄嗟にそれを抑えた。こんなところで暴れて、源蔵さんにも飛び掛ろうものなら、間違いなく撃たれる。

それだけは阻止したかった。力強かったけど、だから必死で、全身の力で抑えた。

「ただひとつの計略なら良いって？バレなければ問題ないって！？冗談じゃないよ！母親は本気でこの家を憎んでいたんだ！復讐をしたらっ、幸せになるって言われ続けていたんだ！ぼくだって……！ぼくだって、ずっとそれを信じてっ……！」

比紹の細い目から、大粒の涙が溢れていた。

それと共に弱まる力。

「比紹……」

覗き込むと彼は目を伏せた。

だけど涙は途切れない。溢れて零れていくのに、比紹は笑みを浮かべていた。俺を騙そうとするときでもなく、自分を誤魔化すためでもなく、もう笑うことしか残されていないような……。

きつとこれまで、人前でこんなふうに素直に泣いたことがないんじゃないかと思った。それがわかるくらい、引きつった泣き笑いだった。

「知らないよ。誤解、なんて。そんなもの……あつたとしてそれが何だつて言うんだよ。それでばくの今までは、無しになんてならない……」

それは俺に以前言っていた言葉。

あの地下で。

俺がああ地下で言ったことが、実は比紹の心に引つ掛かりとして残っていたことを、知った。

やはり比紹はすべて、源蔵さんと理事長が悪の権化だとして教えられていたんだ。

それが、どちらかといえば逆だつたつて解ってしまった。思い当たるどころがあつたのかもしれない。それは俺にはわからないけれど。

比紹は、源蔵さんの言葉の方を、信じたんだ。

「誰のせいとか、関係ない……。ぼくの邪魔をするやつが……全員、敵だ。実母ははだつて……憎い！そうだ、あいつも憎むべき対象だつたつていうだけだ！なににも変わってない。ぼくのやるべきことは変わらない！」

カッと赤い目を見開く。

(違う。それじゃダメだ)

なぜか鮮明に俺にはみえた。このままでは比紹は憎しみに戻っていく。更に深く。

それを止まらせない。そんな場所から引き上げたかった。

「そうだな、比紹。許せるはずないよな」

いつも玲華が俺にしてくれたように。俺が心を乱したときに、光になってくれたように。少しでも俺に出来ることがあればと、それだけが頭にあった。

比紹の肩を強引に引いて俺に向かせた。視線を合わせて、思ったままを言う。

「間違つた話をされ続けて、実の両親とも離されて、寂しかったよな。それは悔しいよな。馬鹿にされた気分になるの、すごくわかる。

だからこれからは幸せになろうな。復讐なんてしなくても、幸せになつていいからさ。良いんだからな、比紹は。素直に、本当に望むものを手にして良いんだ。間違うなよ、誰かのために生きるんじゃない、自分のために生きるんだ。自分が欲しいものを掴みに行くんだ」

選ぶのは比紹自身だ。

だから間違えないでほしい。復讐なんて、本心で望むことじゃなかったはずなんだ。

きつと望むものは両親の愛だ。それは子供から見れば、誰もが平等に与えられた渴望。

親が、それをくれることが、たとえもう、無くても。

それに代わるものを求めてほしい。

俺にはそれが、玲華だったように。比紹にもきつと、比紹だけの人がいるから。

「いまさら、そんな……」

絶望に双眸を見開いて、涙を流しながら、比紹は膝から崩れ落ちた。もう、笑つてなかった。怒りでつり上がった眉尻も下がっていた。素直に哀しんでいる顔だった。

すぐには切り替えることなんて出来ない。それは当たり前だろう。二十年という時間は、あまりに長すぎたんだ。

(それでも諦めん)

幸せになることを、自分から手放したりするな。

そう思いながら、俺は比紹を支えるように隣にしゃがむ。

すると、人影が俺たちを覗き込むように近づいてきた。

理事長だ。

比紹に向けて、理事長が辛そうな顔で口を開いた。

「少し、二人きりで話をしないかい？ 別室もいくつか押さえてあるんだ。そこで、これまでのことを聞かせて欲しい」

やっぱり、理事長は優しい人だった。ちゃんと逃げずにそう言えるんだから。

少しだけ比紹が羨ましくもあった。

だけど、そういう羨みが妬みに変わってしまうって、今なら解る。それにどう足掻いたって、自分の親が変わるわけではないんだ。

比紹は迷っているのか、なかなか動こうとしない。

「行けよ」

だから俺が背中を押した。

行ってこい。すべてが無にならなくても、ほんの僅かでもわだかまりが解けるようにぶつかればいい。一度まっさらな状態にして一からやり直すんだ。

そうすれば前に進めるから。

ゆるゆると、それでもしっかりと比紹は立ち上がった。

理事長に背中を支えられて、二人で出て行く。

「ありがとう」

一度だけ理事長が振り返って、俺にそう言った。なんの為のお礼なのか、よくわからなかった。

気恥ずかしい気分だけがして、何も返せなかった。

二人が立ち去って、この中も少し騒然となった。

源蔵さんが毅さんと清志郎さんをこの部屋から出させたのだ。

「この後説明会を別に設けよう。二人はそれまで与えられた部屋から出るな」

そう指示していた。

きつとこの二人がいたら、怒鳴り合いが絶え間なく続くと考えたんだろう。

それにこの部屋は定員オーバーだ。こんなに広い部屋なのに、親戚筋がほぼ来ているから、入りきらずに廊下にまで並んでいた。それは俺も後から知ったんだけど。

そして椿原さんがその為の会場を用意するために立ち去ったら、とりあえず拒否する者もおらず、ここでは解散となった。

玲華は室内にまだ残っている人を見つけては、話しかけていた。

俺としては早くシャワーでも浴びて着替えてもらいたい。風邪をひいたら大変だ。

でもそういうと、あなたに言われたくないわと返された……。

(つつく)

そのなかで、加藤さんからその後のことを聞いた。あのあと割とすぐ清志郎さんたちがあの場所について、もうひと騒動起きそうなところに理事長が現れたらしい。

そのときの衝撃はこの部屋にきて源蔵さんを見たときより、皆震撼したようだ。

それはそうだろう。いままで不参加だった人が、突然何の前触れもなく来たんだから。その場で予め源蔵さんが生きてここにいると告げて連れてきたらしいので、そのこともこちらの衝撃度が和らいだ理由とも言える。

もうひとつ外と繋がっている隠し通路は、地下室から出ていたそ

うだ。牢屋の方ではなく毅さんたちが住んでいた塔の下らしい。ここを源蔵さんは理事長に教え、椿原さんもそこからこのホテルに向かったのだとか。

久保田さんは立ち入ることを禁止されていた場所だから、見つけれなかったとしても無理はない。

そして一番俺が驚いたのが。

なんと深影はまだ生きていて、いま集中治療室にいますという話だった。しぶとすぎるだろう。

だけどそれを聞いたときの玲華のほっとした顔は、間違いなく素の顔だろうと思った。やっぱり玲華だって誰かが死ぬのは嫌だったんだ。当たり前だ。

「悠汰くん」

玲華が前田さんと話している間に、京香が俺の元へ来た。周囲と離れて、壁に寄りかかっている俺の隣に同じように肩を並べた。

すっかりとした、明るい表情。ただ、元の無邪気さは窺えなかった。

「良かったね。無事に、終わって」

「ああ……」

良かったと一言で言える彼女は凄いと思った。完全に吹っ切れてはいないだろうが、吹っ切ろうとしている。それだけでも前向きだ。「パパは、病院に直行したんだって。さっきママが教えてくれたんだ」

「大丈夫なのか？」

「うん、致命傷は避けられたって」

「良かったな」

もっといろいろ言ってやりたいことや聞きたいことがあったけれど、どう伝えればいいのかわからない。

「ずっとね、聞こえてた。玲華の声」

「そうか」

「うん。不思議なんだけど考えていたのは玲華のことばかりだった。

わたしは本当に玲華に勝ちたかったのかなとか。じゃあ、一体何に勝ちたかったのか、何を持って勝ったことになるのか、ずっと考えてた」

それは呟いていた。あの通路で。

やはり思考が無意識に出た言葉だったんだ。

「玲華をずっと羨んでいたけれど、でも今回はすごく恨まれているのをよく目の当たりにしたんだ。わたしだけじゃない。……ヒロにも、この家の人もみんな、玲華のことを憎悪と嫉妬の含んだ目で見ている。とても重く、深く」

京香からすんなり比組の名前が出た。少しドキリとしたけどそのまま黙って聞いた。

「……あんなにきつい目を向けられて、どうして玲華は平気でいたんだろうって不思議だった。わたしだったら耐えられない。もっと早く逃げていたと思う。悠汰くんのおかげかな？」

「そんなことねえよ。俺はなにもしていない」

「そうかな？悠汰くんとやり取りが、わたしの知らない玲華だったよ。いつも通り強気で憎らしい発言なんだけど。悠汰くん相手だと、さらに遠慮が無いんだって初めて知った。だけど相手がきみだからなのかな。深刻にならなくて、すぐに流れていくんだね」

それは……。

俺は喜んでいいのだろうか。遠まわしに馬鹿だと言われているような気がしてならない。それとも俺が玲華に敵わないとバレてしまった瞬間か。

「あいつは強いから。それだけのことだろ」

「そう思うんだね、きみは」

「京香は、どうやって戻ってこれた？」

なにをきっかけに、戻ってこようと思えたのか。そこが気になっていた。本当はずっと。

「それもね、玲華だよ。温かい温もりが感じられていて。誰だろうと思ってたけど見たくなくて。視界を外に向けたら、完全に自分は

壊れるんだって信じて疑わなかった。でも背中に衝撃を受けたときに、ふっと視界に向こうから入ってきたのが、玲華だったんだ。気づいたら、それまでと同じ温もりだなあって。もしかしたら幻想だったかもって思ったかっただけ、そう思うにはあまりにも優しすぎて……」

「そっか」

やっぱりあいつはすげえな。

俺だけじゃない、京香のことも助けてる。

「それとね、悠汰くんもだよ。嫉妬と憎しみも同じじゃない。好きなやつと向き合えて言ってくれたでしょ。あの言葉も頭の中をグルグルまわっていたよ」

それは浅曇だったんじゃないだろうかと考えた。あそこまで深く傷ついていたのに、更に傷つけてないだろうかと不安になっていた。

「比紹のことは……」

言いかけて、俺は口を閉ざした。彼女が静かに首を横に振ったから。

「正直、まだちゃんと見れない」

翳った京香の表情を見て、すぐに自分を責めた。せつかく明るく笑ってくれていたのに。

馬鹿なことを言ってしまった。無神経だった。

「でもね、わたしヒロがしたことよりも、ヒロを助けられるのがわたしじゃないって感じたことの方が、ショックだったな。完膚なきまでに拒絶されたって感じで……。それが……」

「悪い」

もう言わせたくなくて、咄嗟に謝った。言わせるべきじゃなかった。

重苦しい空気が流れる。

それを断ち切ったのは玲華だった。

「ああ！あんたたちなに話しているのよ！あたしのいない隙に！」
また、なに変な誤解してんだよ……。

ガツクリと肩の力が抜けた。

「わたしたち仲良しだもん。ねえ」

なんたることか京香が手の平を返したように乗ってくる。

また妙な表現だ。間に挟まれた身としては、どういう対応をするべきか迷う。

「助けなければ良かったわ」

「もう遅いよ。わたしは玲華に勝てるって聞いたからここにいるんだもん」

「あんな言葉信じたの？もっと努力しないと無理なんじゃない？」

「ちよつとあんた、忘れてるようだから言わせてもらうけど、わたしはあんたより二個も先輩なんだよ」

「学校では先輩って呼んであげてもいいわよ。土下座して頼んでもらえればいくらでもね」

「ムカつくー」

なんかこれって。喧嘩？

喋ってる会話が凄く刺々しい。しかしその表情は柔らかくて、判断に迷った。

そのとき、ひとりの大人な女性がこちらを見ているのに気づいた。

「あ。わたしもう行くね」

そしてその人を見るなり、京香がこの場所を離れる。

玲華は手を振りながら、こっそり母親だと教えてくれた。

そうか。あの人が。

ぎこちない笑顔をお互いに見せている。京香の家族もここからが執念場なんだろうと思った。

「玲華！」

またひとり、女性が玲華に近づく。

「瑞穂。あなたも来てたのね」

「玲華がほんとに死んだのかと思った」

瑞穂と呼ばれた女性は言葉を発した途端、泣き出してしまった。

確か幸祐と付き合っていた人だと、名前だけは玲華から車内で聞いた。

ていた。

「もう、また泣く」

「だって、わたしにも出来なくて。お父様も、わたしじゃ止められないし……。ずっとどうしようって」

「ありがとう。もう大丈夫だから」

玲華が瑞穂を慰める。なんか玲華のほうが年上みたいだ。

彼女からは地味めな印象を受けた。

（地味といえば……）

拓真が言っていた人、千石さんを俺は探した。その場を離れて全
体を見渡す。

（あ……）

変わらず源蔵さんの後ろに佇んでいた。

源蔵さんは女性陣と会話をしている。後から玲華に聞いてわかったことだけど、毅さんや清志郎さんの奥さんや、娘たちだったそう
だ。周りの会話もあるせいか、はっきりとは聞こえなかったけれど、
嫌味とかクレームを言っているのはわかった。

「千石がどうかしたのか？悠汰」

久保田さんが近づいてくる。

「あの人なんだろ、俺を病院に連れていった人」

「……ああ、そうだな」

「お礼言ってくる」

「行かなくていい」

俺が軌道を千石さんに向けると、後ろから久保田さんに腕を掴ま
れた。

「なんでだよ」

「あいつは鉄面皮だ。冷血人間だ。おまえの身なんて案じてないし、
気にもしてない。どうせ命令されたから連れて行っただけだと答える
だろう。だから行かなくていい」

「ああ……？」

なんか、すごい言われようじゃないか……？

つていつか久保田さんがつつても嫌そうな顔をしている。

……なにかあったに違いない。

「あのさあ、殴った張本人が言うことじゃねえよな」

「……………」

俺が真実を言ったら、久保田さんは神妙な顔つきに変わった。

この人も実は気にしていたのかもしれない。そう思った。

「あのな、あれはおまえも悪いんだぞ」

「勝手に来たから？」

「そうだ。仕方なくやったんだ、こっちも」

「でも俺はまた来てしまった……………」

「ああ。それで予想より早く解決できたってわけだ」

「じゃあ良かったんだよな」

「おまえ、ふてぶてしいな。そんなのは結果論だ。ただのラッキーだ。実際本当に危険な目に遭っただろうが」

「もう忘れた」

玲華が言ってくれたことで、俺にはもう精算されていた。

勝手に開き直ってやる。

「てめえ…………二度と忘れられないように拷問してやる」

「うわっ、やめろよ！」

「なに二人でジャレてんのよ」

久保田さんが俺の髪をぐしゃぐしゃにかき回してきて、それに抵抗していたら、冷ややかな目で玲華が入ってきた。

ジャレてなどいない。絡まれてるんだ！一方的に！

「早く部屋に行きましょう、あたし着替えたいのよ」

あのな。毎度のことだけど、玲華のその切り替えの速さにはついていけないんだけど。

「いいのか？源蔵さんにクレームつけなくて」

「神崎！」

ちっ。綾小路だ。まだいたのか。しかもまた怒ってくるし。

「いいわ。どうせいまならかわされて終わりよ。改めてゆっくり聞

くわ」

そのときの玲華の顔は、いま源蔵さんの周りにいる人たちと同じようなものだった。

結局俺たちが出る頃には、やかましいという理由で全員がこの部屋から出された。確かに様々な性格の人種がいるけれど、お世辞にも静かとは言えない家族だと思う。

* * *

用意されていた部屋というのがまた、広い部屋だった。源蔵さんの部屋、最上階にはさすがに劣るけれど、その辺のビジネスホテルとは訳が違う。シャワーを浴びるだけだから別に俺なんかは下位の方で充分なんだけど、玲華が隣の部屋にしてと言ってきた。

じゃあ一緒にいいじゃん、とつい本音をぶちまけたけど、それは却下されてしまった。亜衣と麻衣がお手伝いしますと申し出ていたが、それも玲華は断っていた。

そして部屋の前まで来ると、すぐさま玲華は自分の部屋に俺を招き入れる。

「行動がわかんねえ……」

「いいから、ちょっとだけやってほしいことがあるの」

「え？やる？」

部屋の奥のまで入ると玲華はドレスの胸元からなにか取り出した。ポケットみたいにいるんなもの入れてる。

どぎまぎして見ていると、真っ黒い器機をソファの前のテーブルに置いた。

「これ盗聴受信機。さっきこっそり付けておいたのよ。一緒に聴いてほしいの」

「あ、ああ……」

なんだそんなことか、と一瞬思ってしまった。

なにを考えてるんだ俺は。こんなに玲華は真剣な顔をしているの

に。

「ついかいつの間に……。まったく気づかなかった」

「盗聴器だけは嫌ってほど手元にあったからね。あたしがいる前では語らないんだから仕方がないわ」

そう独白しながら、聴こえるようにツマミを弄いじった。

『……今回のこと怒っているのか？』

源蔵さんの声が雑音とともに聴こえ、玲華が調節していくうちにクリアになった。

「おまえが盗聴器つけた部屋って……」

「もちろんお祖父様のところよ」

悪びれもなく言う。

バレたら大変なことになるんじゃないのか？それなのに、しれっとしていて恐ろしいやつだ。

『おれがなにを言ったところで、あなたにはなんの痛みにもならないでしょうね』

相手をしているのは稔さんの声だ。あのあと稔さんは一人残った。真っ先に話したいことがあると源蔵さんに告げ、中に入れてもらっていたのだ。

『ならばなにが言いたい』

『おれが言いたいことぐらいあなたにはすでにおわかりかと思いますが』

『甘えるな。自分の言葉で言え』

『……杏里がおれに打ち明けてくれました』

杏里、という名前に玲華がピクリと反応した。

『あの日あの場所に杏里は行ったそうです。もちろん幸祐に会うために。しかし先客がいた。それが兄です。貴方にはご存じだったのでは』

『こちらも準備があるのだ。要点をまとめて話せ』

源蔵さんの声も稔さん同様に硬い声だ。

それだけで緊迫感が伝わってきた。どういふ揺さぶりをかけても、

源蔵さんから言うことはない。

『貴方は幸祐が兄に殺される瞬間を耳になさっていた。それだけではない。兄が杏里に脅している一部始終をご存じのはず』

なんだって？

つまり実の親が実の子供を？

「殺叔父様だったんだわ」

「なんでだよ。動機とかあんのかよ？」

「しっ。会話は続いてるわ」

玲華に鋭く制止された。自分から呟いたくせに。

『おまえはあのと聴いていなかったのか』

『ええ……。そこまで広げていませんでした。それを機に受信して情報を集めることに専念したんです』

悔しそつに稔さんは言う。もし聴いていたら、真つ先に止めに行くことが出来ていたわけだから、悔やむ気持ちはわかった。

そして源蔵さんは聴いていたのに止めなかった。ここにいたんじや、間に合わなかったから仕方ないなんて、そんなことでは納得できない。だって計画を中断して誰かに連絡すれば、幸祐は死ぬことはなかったかもしれないんだ。

『ほう。それで？ワシにどうしろと？』

『兄と杏里をどうなさるおつもりかお伺いしたい』

稔さんの声に力が加わった。ここが一番言いたいところなんだろう。

しかしこれが親子の会話だろうか。稔さんが緊張しているような心配がした。先ほどまで一緒にいた感じと違う。

そして稔さんは責めないんだ。止めなかった源蔵さんを。

『おまえは自分が犯人だと玲華に言っておったな。あれはなぜだ？』

『幸祐の罪が暴かれたくなかったです。騒ぎにはしたくなかったですよ。結局玲華には知られてしまいました』

『隠すのならそれはそのままおまえの罪になる』

『それでも。あいつは幸せなまま死んだ。止めることをできなかった』

たおれが、最後にできることだと思ってます。それが唯一……」

その声が弱まる。つい顔を器機に近づけた。気づくと盗み聞きしている罪悪感なんてこれっぽっちもなくて、惹き込まれていた。

『よかるう。このことはワシの胸に止めておく。後のことはすべてワシがなんとかしよう。……だが、忘れるなよ。一生涯かけて胸に刻んでおけ。誰に幸祐が殺されたかを。それから毅にもおまえにも継がせない』

なんの会話だ、これは。

俺の聞き間違いでなければ、つまり隠蔽するということか。一人の死を？

それもだけど、皆が知りたくても知ることのできないこのような内容を聴いても良いのか、というところに畏怖を感じた。だいたいこういう内容を知ったら殺されたり……。

(いやいや、いくらなんでも漫画の読みすぎだろう)

だよな。誰かそう言うってくれ、と思っても唯一聴いている玲華がまったく気にしていない。先ほどから集中して受信機を見つめている。

『もとより。淘汰された先に自分がいるとは思っておりません。…

…おれはあなたにそれを頼みただけなのです』

『そうか？それだけには思えんが？』

『はい……いえ、良いんです。誰かを責めなくなるのは己の修行不足でしょう』

『そう結論づけるか。それが迷いの果ての答えなのだな』

『……………』

『知らなかったぞ。おまえにも狡猾な部分があったのだ。惜しいな』
実に惜しいと、源蔵さんは繰り返した。

稔さんの評価が上がっていたんだと、俺は思った。

玲華が言うには女第一だから候補から外されているというものだった。確かにあの逃走劇を一緒にしたあとでは、それだけの人には思えない。

いまあのとこの状況が、再度訪れるようなことがあるなら、俺はこの人にすんなり拳銃を返していただろう。

『……兄もすでに候補から？』

『あくまで他言無用だ。混乱が生じる。おまえは毅と範義のりよしと一正いちまさが密談をしていたのは聴いたか？』

『はい。何度か……』

『あの少年が一度失敗した後に、一正からすでに情報は得ていた。しかしあやつの判断は期限はまだあるから様子を見るというものだった。上前をはねるつもりでな。そのやり方にワシが気に入らんかっただけだ。ワシなら自分で動き期限などおつりをくれてやる』
あくまで、そのことで毅さんを見限ったのだと源蔵さんは言っているのだ。幸祐や比紹の件ではなくて……。

どちらがどれ程ひどいかなんて、俺でもわかるのに。

基準があまりにもかけ離れている。

「範義というのが松倉様で、一正が光泉寺様よ。中庭で久保田さんたちを狙っていた人の中にいたでしょ」

かなり早口で玲華が説明してくれた。

そう言われてもはつきりと顔まで思い出せない。あときは自分としても驚きの連続だったから、よく覚えていなかった。

『では、どなたに……』

『いくら秘密を共有したとはいえ、ここからは話せん』

冷たく源蔵さんは言い捨てる。

『わかりました……。おれはこのあとの会には出席しません。もう、関わり合いになりたくない』

『好きにしろ。おまえが……』

唐突に玲華は受信機のスイッチをオフにした。そのまましばらく一点を見つめて動かない。

玲華、と声をかけようとする前に彼女は勢いよく立ち上がった。

「先にシャワー浴びるわ。ここで待ってて」

そして俺の回答を待たず、さっさと浴室に入ってしまった。

これは……玲華なりに落ち込んでいるのかもしれない。だからといって俺がなにか言えるわけでもない。

(言ってもわからないとか思われていたらどうしよう……)
またいつもの弱気な考えに辿り着く。

だからなにも言わずに、一人で心の整理をしているのかもしれないと思った。

(話を聞いてやりたくても、フロジャーな……)

まさか一緒に入るわけにもいかない。

俺はやることなく、もう一度受信機をオンにした。

あんまり良い趣味とは言えない。でも源蔵さんだつて聴いていたんだから、こちらだけ罪悪感を抱いていても馬鹿みたいだ。

しかしすでになにも聴こえなくなった。衣擦れと思われる音や、足音が遠くでするだけだ。きつと稔さんも出て行った後なんだろう。

(毅さんが息子を)

深影を撃つたときのあの変化のなさ。比紹の母親を裏で手を引いていた事実。どれをとっても自分から遠く離れすぎていて、得たいが知れないもののように感じる。

いくら想像しようにも取っ掛かりすらないのだ。これでは動機なんて思いつくはずがない。

そういうことばかり考え込んでいたら、機器の向こう側で変化があった。

(やべ、つけたままだつた)

ノックの音がして、誰かが入ってきた気配がしたのだ。これ以上盗み聞きも心が痛むのでスイッチを切ろうと手を伸ばした。

どうぞ、という千石さんの声が耳に入る。

『よお、久しぶりだな。千石』

訪問者の声に、思わずその手を止めた。

『どこが久しぶりなんですか？相変わらずいい加減な挨拶ですね』

『おまえの主こゝろがなんの用だつて？』

間違いない。この腹が立つほどの余裕っぷり、久保田さんだ。

なにをやってるんだ？あの人は。

確か久保田さんは俺たちよりも下の階に部屋を設けられていて、エレベーターで途中まで一緒だったはずだ。そのあと呼び出しをくらったということか。

しかしその会話で、この盗聴器がわりと出入り口付近に取り付けられていることを知った。声が大きく聴こえる。

「こちらです。源蔵様にくれぐれもご無礼のないように」

「へいへい。……あ、お邪魔します。何の御用でしょうか？」

一応敬語になったけど、千石さんと対するときと温度差がない。

きつと俺同様に、久保田さんにはこの人に対してなんの関わりもないからだと思う。畏敬する必要がないのだ。

「君が久保田君か。いっちゃんから噂は聞いているよ。だが噂と相違があるようだな」

源蔵さんも稔さんと対していたときと、その声質が違った。和やかな雰囲気の声を通して伝わってきた。

というより何の用なのか、俺も気になってしまっただけ音を消すことが出来ない。

「どつという噂でしょう」

「相違があつて、ワシは有能な男だと判断した。とだけ言っておこうか。結局君は誰もが気づけなかったことをこの一ヶ月であっさりと成し遂げたのだからな」

「はあ。そうですか……」

功男さんはあまり褒め言葉を源蔵さんには伝えてなかったようだ。久保田さんが脱力したように聞こえた。

「功男は気に入ったものを独り占めにする癖があるからな。まあ気にするな。……さて単刀直入に言おう。ワシの元で働かないか」

「え、えー……」

久保田さんより先に俺は弱々しい声を出してしまっていた。ちょっと驚いて頼杖をついていた体をのけ反らせる。

「はい？」

『損はさせん。今以上の充実した仕事と報酬を与えよう』
源蔵さんは本気だ。本気で久保田さんを買っている。
どういふ答えを出すんだらうと身を乗り出した。

「なにしてるの？」

タイミングよく玲華がタオルで頭を覆いながら出てきた。

「いや、久保田さんがスカウトされてる」

「あっそ」

受信機を指差しながら言う俺に、玲華はさして驚いた風でもない。
バスローブ姿で、髪を叩くように拭きながら近づいてきた。

「どうせ断るでしょ」

こんな玲華を見ているのも刺激が強すぎるが、久保田さんも気になつて、ややパニックに陥る。

器機の向こう側では源蔵さんが具体的な金額を言っていた。高すぎてピンとこない。

『お断りします』

しばらく聞いた後久保田さんははっきり言った。玲華がほら、と
呟く。

『なぜだ？悪くない話だろう』

『そうですね。魅力的な内容です。ただオレは人の下につくのは死んでも嫌なので』

(うわあ……)

一歩間違えば、高慢ともれそうなことをあっさり言いかけた。
ある意味最強なんじゃないだらうか。この人……。

「良かったわね、悠汰」

なぜか玲華がにっこり微笑んでそう言った。

「な、なにが？」

「また久保田さんちに遊びに行けるじゃない」

こちらが考えていることなど、すべて見抜かれている。

嫌だなあとか思いつつ、まあなと一応頷いておいた。

「さっ。悠汰もシャワー浴びてきて。早くね」

「おまえな……」

少しはサツパリしたのか玲華の切り替えが早い。

釈然としないものを感じながらも、促されるように立ち上がり、風呂場へと向かった。

「ちよつとなにやってんのよ！自分の部屋で入りなさいよ」

「……いいだろ別に、ここまできたら」

「部屋にちゃんと着替えが用意されてるの。それ着てきなさいよ」
面倒くさい。

ただどこには玲華のものしかないし、女物を着るわけにもいかないので足を隣の部屋まで動かした。

あいつ、俺のこと男として見ていくれているんだろうか。上手く手の平で転がされている気分になる。

そんなことを思い巡らせながら、貰ったカードキーで開けた。

クローゼットを発見し、まずそこを開いてみると、着替えとして用意された服が確かにあった。それがまた……。

(なんでタキシード……)

二度と着ないと思っていたのに……。

まさか、この流れに持って行きたくて噴水に落としたのだろうか。もちろんそんなはずはないけど、そう思わずにはいられない展開だ。

別に俺は説明会なんか出なくても、玲華から教えてもらえればそれでいいんだけど。

そう思いつつさっさとシャワーを終わらせ、仕方なく着てみる。

しばらくしたら玲華が来た。彼女も身だしなみを整え終えて、すっかりドレス姿だ。あのときのパーティを思い出す。

そして俺の着慣れない姿を見て笑っている。

「苦しかったらタイは外していいわよ」

そう言いながら玲華が外してくれた。ボタンを二つ外して襟元も微調整してくれる。

なんだ、そこまできっちりしなくて良かったのか。それならそうと言っておいてほしい。

「ごめんね、悠汰」

一息ついてベッドにでも寝転がるうかと思つた矢先、後ろから玲華が口をついた。どこか遠慮がちにそこに立つたままで、まだ玲華らしさが出ていない。

いい加減元に戻ってほしいと思う。俺に言えないのなら尚更。

「なんだよ」

「あんなものを聞かせて。共犯にしちゃったわね」

「一緒に聞いてほしかったんだろ？だったら良いんだよ」

僅かに苛立つ。そんなこと気にする必要ないと思うし、遠慮されているような気になるから腹が立つんだ。

俺はそんな気持ちを押し隠すように、使用済みのタオルを片すためにバスルームに入った。適当に置くこともなく、洗面台の隣のスペースにバツサと置く。そのまま出ると、玲華は同じ位置から動いていなかった。

「ねえ、悠汰はどう思った？揉み消すなんてこと、してもいいと思う？」

ここ最近、玲華はよく俺の意見を聞こうとする。

それがなぜだかわからない。俺が意見を言える立場だとも思えなくて、すごく困る。

「わからないけど……。玲華が許せないと思うなら好きにしたらいい。俺は反対しないし、いくらでも付き合う」

なにか思うところがあつて、本来の自分が出せていないのなら、そんなの俺としても不本意だ。

「そうよね。……ちょっとついて来てほしいところがあるの」

それから俺の手を引いて部屋を出た。まったく表情が変わってない。

その雰囲気は地下水路を歩いたときのことを思い出させた。だからそのまま疑問をぶつけた。あのときの違和感の正体を。

「あんたたちがやけに遅いな、って思ったところに、悠汰だけがぐったりしてたから。あたし比組にどういふことか尋ねたのよ」

俺の方も見ないでまっすぐ歩きながら玲華が話し出した。

「比紹がね、悠汰を殺したって言うの。見捨てても良かったけど殺叔父様に殺させて終わりなんて面白くなかったって。だから空気をすべて吐き出させて、試したんだって。天に見放されるかどうか……。出口まで持ちこたえられなかったら、それまでの生命いのちなんだから諦められるでしょって」

「比紹の、いつもの嘘だろ」

人を動揺させるための。

「いまなら、わかるわ。でも本当に息してないし、あたし頭が真っ白になって。人工呼吸が最優先だと思つたのに綾小路先輩は、ならば僕がするとか言つてぎゃーぎゃー騒ぐしさ。それで稔叔父様に綾小路を抑えといてって頼んだのよ」

なんか想像以上に壮絶な現場だったらしい。綾小路じゃなくて良かったとか、ここで俺は思つていいんだろうか。

「それですごく後悔したの、あの場を比紹に預けたこと。それから先に行かずに後から行けば良かったんじゃないかって。ううん、それだけじゃない。あんなに嫌がつてたのに、むりやり水の道を進ませたこと自体、間違つてたんじゃないかって」

そのときのことを思い出したのか、繋いでいる手に力を込めた。

応えるように俺も握り返す。

「大丈夫だったんだから、もう心配すんなって」

「でも怖かった。一步間違えば死んでいたのよ、悠汰」

ふと玲華が立ち止まり俺を見る。

それで情けなくて言いたくなかったことを伝えた。

「比紹は助けてくれていた。実は入った瞬間、俺はパニックになつて暴れたんだ。息も自分から吐き出していた。だけど、それを押さえてくれていたのは比紹だ。それは覚えてる」

「……あんたが綾小路より信用してるのはわかったけどね」

どこか皮肉そうに玲華は笑った。それでも笑みが戻って俺はほっとする。

比紹があのと看、たとえそんな気持ちになつていたとしても、いま俺は生きている。それで充分だと思えた。

(そう、たとえ一瞬、殺気を感じたとしても)

比紹は最後の最後ではトドメをさせない。それは知っていたから。「それで、これからどこへ行くんだ?」

「お祖父様のところよ。確認したいことがあるの。悠汰は黙つて隣にいてくれればいいわ」

また硬い表情になつた。

具体的なことは不明だけど、何についてなのかは俺でもわかつた。

* * *

源蔵さんの部屋に戻ると、すでに久保田さんもいなくて、中は部屋の主と千石さんだけだつた。

椿原さんたち使用人は会の準備に掛かりつきりだという。それがなくても、源蔵さんはいつも千石さんだけを近くに置きがちだつたと玲華が教えてくれた。

その千石さんが通してくれる。

俺たちが訪問しても源蔵さんは追い返さなかつたのだ。

すでにテーブルの上には将棋盤が片付けられている。上にあつた駒はどうしたんだらうと、どうでもいいことを俺は不思議に思つていた。

「どうした?もうじき始まるぞ」

奥の方から正装に着替えた源蔵さんが出てくる。

「その前にお話したかつたのですわ。皆のいないところで」

千石さんにソファを勧められても、立つたまま玲華は言つた。

源蔵さんになるほどな、と言つて向かいのソファに腰かける。と、ようやく玲華も座つた。

礼儀のひとつか、つてようやく気づいた。俺は玲華に促されるまま同じ動作をしただけで、まったくそういうことが身についていな

い。

俺は感心してしまった。良かった玲華がいて。

「苦情とやらか？」

「ええ。あたしはお祖父様が死ぬ予定だったってことも、遺言の期限が延びることも聞いていなかったわ」

「まじかよ。恐ろしい人だな……」

チラリと源蔵さんを見たら、当の本人はなんともなさそうな顔をしていた。

「あれは玲華の為を想ってしたことだぞ」

聞き捨てならなかったようで、玲華の目がつり上がる。しかし源蔵さんは変わらず動じてない。

「へえ。その心は？」

「全く事態が動いていなかったようなのでな、皆に危機感を与えてみたのだよ。期限の件は、あのまま事が進めば、この目的も叶わず玲華への危険のみが増えると思うてな。それを阻止する為の完璧な手段だ」

「あらそう。ありがたくって涙が出るわね」

「そう怒るな。終わりよければ全てよし、という言葉があるだろう。なんか最後の言葉については同感しなくなった。

「仕方ないわね。だったら護衛の人たちはどういうことかしら？」

「護衛がどうした？立派な人材を派遣してやっただろう」

「結局、前田さんたちも加藤さんも、お祖父様の指示で動いていたんでしょ？久保田さんがそう推理したのよ」

前田さんといえば、控え室で意味深な発言を聞いている。ひとつの駒にすぎないって……。つまり源蔵さんの駒だったってことか？「あやつらには自然体でいると命じたのだ。誰ぞに誘いや脅しをかけられることがあれば、不自然にならん程度に付き合っただけとかな」
「なんで、それが自然体……」

つい俺は呟いてしまった。黙っていてと玲華に言われたのに。それぐらい突飛な内容だった。

「あとは適当にやれと言っておいた。各々が思うとおりだ。加藤がまず、幸祐なんぞの誘いを乗るとはさすがに思わなんだったがな。最終的に前田は玲華に、加藤は久保田君に心が動いておったようだよ」

聞けば聞くほど、なんて人だと思う。

実は楽しんでるだけじゃないか？今回のこと……。玲華も頭を抱えていた。

「稔叔父様、そこでも嘘ついてたのね」
「嘘？」

俺が気になって聞くと、止められることなく玲華は頷いた。

「そう、自分が幸祐のために加藤さんに手引きをしたと言ったのよ」
「それもすべて今回のことを隠蔽するために？」
なるほど、頭を抱えなくなる内容が少し違ったようだ。

「つまりすべてお祖父様の仕業だったということの良いのかしら？」

「……ああ、そう思ってくれていい」
「なぜか一瞬だけ間が開いたような気がした。

きっと嘘だからだ。聴いて把握した内容から、そう持っていこうとしているんだ、と思った。隠蔽にもう動いている。

玲華も解っているはずなのにすんなり頷く。

「でしたらもういいです。そのまま引き続き受け入れたのはあたしですから。やっていくうちに、徐々に気づいていたの。もしかしたらお祖父様はいまも生きてるんじゃないかって。これも作戦の内だつて。だから今更ぐちぐち言うつもりはないわ。理由を聞きたかっただけなのよ」

「さすがだな」

本当に愛しい孫を見るような顔になった。

とりあえず源蔵さんが玲華をめちゃくちや認めているのは肌で感じた。

「だって車椅子も体調悪くしていたのも、そもそもそこから芝居だったんだもの。病気が悪化なんてするはずないのよ。病魔なんて

襲われていないんだから。椿原さんがあたしまでお祖父様に近づけないようにしたのも、そちらから何のフォーローもなかったことも怪しいと思っただわ」

「鋭いな。しかしワシがさすがだと褒めたのはそのことではない。潔いところだよ、玲華」

「あたしはお祖父様の期待に応えられたのかしら？」

「ああ。期待どおりだ。おまえじゃなければ疾うに毅に全権が渡っていただろう。人命の被害も結果無く、眞奈美の子ども見つかった。眞奈美自身もすぐに探し出せるだろう」

「以上でも以下でもないということね」

ぽつりと玲華が小声で呟いた。どこか悔しそうに聞こえる。

その次の言葉でその真意が俺にも分かった。

「人命の被害者は一人いたわ。それでなくても傷ついた人もいる」
ひとりには幸祐という男のことか。玲華の従兄で、今回命を落とした人。

「おまえたちは犯人探しをしておったな。あれは悔やむことは無い。その他のことについても、玲華に責任はない」

悔やむこと無いと言った源蔵さんは、睥睨^{へいげい}するような空気が漂っていた。

それでも玲華は切り込んだ。

「お祖父様、さきほどすべてご自分の仕業と仰いましたよね？」

「それがどうした？」

「あたしには稔叔父様をも向けての言葉に聞こえました。稔叔父様とどんな会話をなさっていたかはわかりませんが、叔父様は真犯人を確認されたのでは？その返答、ということですね。貴方はすべてを引き受け、この件を揉み消そうとなさってるのではないのでしょうか？」

聴いていなかった前提で玲華は話す。

それで俺には黙ってると言ったみたいだ。俺がここで下手に口を挟むとおかしくなる。

源蔵さんは一度ソファに座りなおした。

「このことは公にはならない。だからおまえも忘れなさい」

それが答えだった。決して逆らってはならない命令。

すでに源蔵さんからは軽い雰囲気を感じられない。もし俺がいまタメ口をきいたなら、刺されそうな……そんな迫力があつた。

「お断りするわ。ひとりの命が亡くなったのよ。稔叔父様だって瑞穂だってそんなこと耐えられないはずだわ」

「稔はすでに納得しておる。瑞穂はワシに何かものを言う度胸はないだろう」

「そういうことが問題ではないわ。納得したって、何も言わないからって心中が穏やかでいるわけではないもの」

源蔵さんの目に迫力が深まる。目で制するように玲華を見ていた。けどすぐにふつと不敵な笑みを浮かべる。

「その中に足りない名があるな」

玲華がハツと顔を上げた。

そうか、両親だ。

いくら玲華が聞いてないことにしようとしても、毅さんを悲しむ一人に入れていない。

恐らくけど源蔵さんはなにか気づいたのかもしれないと思った。

逡巡し、そして玲華は口を開く。

「お祖父様。わたくしは一度、あなたと真剣に対決したいと思っていました。これはまさに絶交の機会ではないでしょうか」

「むざむざ悲傷にその身を投じることはない。これは決まったことだ。一人の人間の他愛ない過ちで一族が……いや、西龍院が与える

経済への影響に波が立ってはならぬ」

「よく仰いますね。ご自分のスキャンダルを棚に上げて。幸祐の覚醒剤ぐらいで、ぐらつくような家ではないでしょうか？」

「そうではない、玲華。ワシのことは周知の事実で今更騒ぎになどならん。しかしこれは別だ。継承時は最も注意せねばならんのだ。

揺るぐことがなくても発端になるようなことは困る」

「つまり、引退するお祖父様の過ちよりも、次に継ぐ者の不祥事は問題って……」

不意に玲華の言葉が途切れた。

何かを予測して、続けることが躊躇われたように見える。

「急くな。ワシはまだ誰を跡に就かせるか決めてはおらん。その者が揉み消す力が無いやもしれぬと言っておるのだ。その前にワシが処理する」

「その人が、揉み消さない可能性もあるかもしれないし？」

どこか挑戦的に玲華は身を乗り出した。

それに源蔵さんはクツと咽喉を鳴らして笑った。

「玲華。おまえは度胸があるし聡明だ。ワシはおまえが継いでくれるなら、今でも思うておる」

「冗談でしょう？あたしとお祖父様の思想は異なります。継いだ瞬間、違うものに生まれ変わってしまうわよ」

「それも面白いと思うがな。ワシとしても一度、本気でやりあってみたい」

「先ほど申したことは机上の空論ですわ。お忘れください」

玲華が手の平を返したように深々と頭を下げた。

その行動に意外に思う。玲華は諦めたのだろうか。

「それより玲華、そろそろ時間だ。おまえはワシの隣にいなさい」

「お断りするわ。あたしはもうお祖父様の命令に従う理由はないもの。貴方にはもう、ついていきません」

そう言つと、玲華の手が俺に伸びてきた。

(玲華……)

何かを求められている気持ちだけわかって、俺はそれに応えるかのように握る。

もう、どこにもやらない。

「おまえがいないと好き放題、虚実取り混ぜて話すぞ。それでもいいのか？」

なんつー卑怯な脅し方だ、と思った。

あの玲華でさえ言葉に詰まってしまった。

きつと本気でそれをやってしまう人なんだ。本気で、玲華を継がせたいと考えるなら、どんな強行な手段でもとってしまえる人なんだって、今ならわかった。

そうというのは、ム力つく。人の意思を無視したやり方なんて許せない。

「そんなの、いたっていなくたって一緒だろ？あんたの言うことが絶対になるんだったらさ。そんなみえみえの駆け引きで人を縛るのってどうかと思う」

ここで口を挟むと、今回初めて源蔵さんの目に俺が映った。

凄いやつで睨まれたけど、俺は負けじと睨み返す。絶対に譲れないものがある。だから負けてはいけなところだってあるんだ。

それがここだと思った。

「もういいわ。行きましよう悠汰」

だけど玲華がそれを断ち切る。少し強引さを感じた。

一瞬戸惑ったけど、玲華に続いて俺は立ち上がった。いつまでもここにいたら確かに不利になるかもしれない。

(あ……)

ひとつ忘れていたことがあった。多分いまやらなければ、一生その機会は訪れないと思ったら、こんな空気でもしないわけにはいかなくて。

「千石さん。ありがとうございます」

玲華と繋いだ手を離さないまま、立ち止まってそれだけ言った。

少し玲華がきよとんとした顔をしている。説明する余裕もなく、それだけ言うのが精一杯だった。

「は……」

突然振られた千石さんはとても困惑していた。それから俺が何を言いたいのか、ようやくわかったようで、一瞬源蔵さんの方を窺ってから言った。

「いえ、私は玲華様に頼まれたことをしただけです」

なんか感心する。久保田さんの言ったとおりの返答だと思った。あまりここにいても恥ずかしいので、逆に玲華を引っ張った。

「あ、ちよつと待って」

次は玲華が立ち止まる。

そして俺の手を離すと、出入り口を入れて右側の壁にある絵の額縁を掴んだ。

ヒョイと持ち上げ裏にあった黒いものを取る。盗聴器か……。

「これは回収していきますわ、お祖父様」

そして傲然と微笑む。

(あっさり自分からばらしやがった)

いつもの玲華に戻った瞬間ともとれた。ビビってんのは俺だけみたいだ。

源蔵さんはとくに驚いた様子もなく、やられたなと言った。俺でも、それがそのままの真意じゃないことはわかる。

やっぱりとんでもない一家だ。

「なんで突然やめたんだ？源蔵さんとの話」

「あのままあそこにいたら、あんた間違ひなく怒鳴ってるわよね。」

駄目よ、お祖父様は度胸がある人が好きなの。お祖父様にたて突けばたて突くほど好かれるのよ。しかも裏切らないで、たて突く人よ。あんたぴったり当て嵌まつちゃうの。そんなところ見抜かれたら、もう一騒動起きるのは目に見えてるわ」

っていつやり取りを廊下に出るや否やした。

玲華は常に先のことを考えていて、本当に偉いと思う。当人から言わせてもらえば、好かれている気はこれっぽちもしないんだけど、すごい睨まれてたし。

それから俺たちは、会が始まるまでロビーの隅っこにあるソファで休みながら待っていた。

そのときに毅さんの動機に繋がるだろうことを教えてもらった。

「あの人、ずっと遺言状を探していたと思うの。どれだけ手を尽くしても見つからないから、お祖父様と共に眠ってる考えたのかもしれないわ。だからお祖父様の遺体が置いてある場所へ、椿原さんに案内させたかったのよ」

「……って、え？まさかそれだけのために、自分の子を……」

いくらなんでも違うだろ？

(でも……)

弟にだってあれだけ冷たい目を向ける人だ。まさかと思うと、ぞつとした。

「今回の条件に法を犯した者には相続もしくは遺贈させないってあったの。一般的には当たり前のことだけどね。それでも殺人が起ったことがポイントだと思ったのよ」

こういう説明を俺にしてくれるときに、とくに疲労感とその表情に表れている。言わせない方がいいのかもしれない。だけど玲華は

続けた。

「それでも殺人を犯してしまった犯人なら、もつとばれにくくすると思う。死体を隠すとか……。だけどそれが理由なら隠す必要がなくなるわ。むしろ見つけてほしいのよ。そこに違和感にもたれないようにするには、牢屋の中において隠せない状況だった人を狙えばいい」

「だからって……」

「毅叔父様も幸祐のやらかしたことが不祥事だと思っていたのね。稔叔父様はまだなんとか戻れると考えていたようだけど、毅叔父様には終わりが見えてしまったのかもしれないわ」

「……………」

だからせめて自分の手で我が子を？

そういう、ものなんだろうか。父親の心理というものは。

「間違ってることだとあたしは思うわ」

片手を俺の腕に添えて、玲華は俺を見た。

「でも揉み消すなら、お祖父様が稔叔父様に伝えた理由が表向きなものになるでしょうね」

そうか。そういう意味で稔さんも尋ねたのか。

毅さんを候補から外す理由。

「玲華」

俺たちの空間と化していたところに、一人の女性が近づいてきた。メイクが派手で、露出度も高い若い女性。ちよっともの憂げに立っていた。

「杏里」

呟くように玲華が呼びかける。この人が稔さんの元彼女で幸祐とも関係をもった人。

なんか知らないけど、なるほどと納得してしまった。

俺は一瞥しただけなのに、この女性はジロジロと俺を見てきた。品定めされてる気分になる。

「ふーん。この人があんだのカレシ？」

「なんだよ？」

意外だ、なんてまた付けられたらたまらない。自分から口を開いた。

「うん、そうよ。……悠汰」

なぜか隣で玲華が焦っている。そしてこっそり耳打ちした。

「悪気はないの。変な喧嘩売らないで」

俺が売ってんのかよ、この状態は……。なんか理不尽。

それでもこの家の人に睨まれたら玲華にも迷惑かけると思い、抑えることにした。

「あなたもいたのね。お祖父様の部屋で会わなかったから知らなかったわ」

完璧でいて、そつのない笑顔を玲華が向けると、杏里は抵抗の欠片もなく俺たちの前に座った。

足を組んでダルそうにしている。

「後ろの方にいたからね、解散直後に出ていったし……。稔さん、さつき帰ったよ」

「そうなの。話、したの？」

「うん。……それで、もうあんたとも話していいって言われたからさ。ごめんね、シカトしてて」

まったく笑みを見せないけれど、その内容は否定的なものではなかった。

「やっぱり稔叔父様に箝口令敷かれていたのね」

「そうよ。最初は余計なこと言うなっていう一言だけだったんだけどね。玲華が来たときの会話、聴いていたんだって。ベラベラしゃべると、言う気がなくても玲華は嗅ぎとるから会うなってさ。酷くない？お喋りな女扱いしてさ」

いや、いまでもすごい勢いで喋ってる。稔さんが正しい。

口を開きだすと、すでにアンニュイな雰囲気は払拭されていたから不思議だ。

「ちよっと！いま同感したでしょ！言っとくけど今は抑えられたの

が解き放たれたから特別なのよ！」

すかさず俺の顔色を読んで、ビシツと突き付けられた。こういうところ、玲華の血縁者だな。

「えと、二人はやっぱり、付き合ってたの？」

どこか遠慮がちに玲華が訊いた。

「あの人があたしなんか相手にするはずないでしょ」

「え？ そうなの？」

「あんた、あの人のこと、女なら誰でも良いって思ってたない？」

「違うの……ね」

鋭く突かれて、玲華は力ない笑みをみせた。なんか玲華が圧されているように見える。珍しい状態だ。

「そういう節操のなさは幸祐だけよ。あたしは助けてもらっただけ。幸祐と一緒に堕ちていったあたしをね。必然的に好きになっただけ諦めたわ」

「堕ちた？」

「もう知ってるんでしょ？ クスリ」

僅かに気まずそうな顔で言った。

「あたしはまだなんとかなったけど、あいつ根性ないからね」

「そういえば……あなた、幸祐様のところに行っただんですって？」

「そう。クスリ持ってこいって稔さんじゃない、あたしに言ってきたの。あたしはもう手を貸すつもりも無かったからさ。断りに行っただけど……」

不意に彼女は黙った。でも俺たちはその先をもう知っている。

殺さんを見たんだろう。玲華はそう、とだけ返していた。

「あとね、あなたをつけて怖がらせたのも稔さんだつて。ごめんねつて言つといてくれて言われちゃったわ」

「ああ……。確かに一度あつたわね。現場から立ち去るときに」

思い出しながら玲華が呟いた。

ここは聞いていなかったところだ。淡々と説明されたけど、やっぱり怖い目にいろいろ遭っていたみたいだ。

でも、忘れていたわと続けた彼女から、それが本音に聞こえた。
忘れるか？普通。

「まあ……そういう事情だから。気にしてるって聞いたし、説明だけしようと思つて。なにか知りたいことあるなら、いまだけ話してあげるわよ」

「だいたいわかつたわ。ありがとう」

盗聴で知った事実と統合し、玲華はそう結論づけた。俺としては怖がらせたつてときのことを、もっと知りたかつたんだけど。

あつそう、とあつさり杏里が立ち上がると、あわてて玲華も立ち上がり改めてお礼の言葉を言う。

そして去り際に杏里は初めて笑みをみせた。

「あたしはあんたたちお似合いだと思うわよ。性根が同類だもんね」
だけどその内容はどういう意図なのか不明だった。俺は眉を潜め、玲華は見送りながらゆっくり座る。

「なんかお姉さまって感じね」

二人きりになるとそう本音をこぼした。

それについてはなんとも言えない。逆にいまのやり取りの、どこで引つ掛かつたのか謎だ。とりあえず玲華は良い意味にとつたらしい。

俺はふと疑問が生まれ、そのまま口にする。

「そういえば毅さんはなんで拳銃を使わなかつたんだろう」

わざわざ紐で絞殺なんて。あの人ならあつさり拳銃を使いそうだ。「拳銃を持っている人は限られているわ。杏里に脅すような口止めをしていたつて言うし、すこしでも疑惑の目が向けられる可能性を減らしたかつたんじゃない？」

玲華がまた、厳しい表情になった。やっぱりやりきれない想いが拭えないようだ。

しばらく俺は余計なことは言わなかつた。少しでも気持ちの整理する時間をやりたくて。

そうこうしている内に、千石さんが近づいてきた。

「玲華様。源蔵様がお呼びです。控え室まで来るようにと」
あの人、まだ諦めてなかったんだ。どうしても玲華を隣に置きた
いようだ。

玲華はため息をついた。

「仕方ないわね、行ってくるわ」

俺を見ながら立ち上がる。

「え……行くのか？」

「話を聞いただけよ。わかっていると思うけど先に帰らないでね、悠汰」
そう言っただけは、千石さんとともに本当に行ってしまった。

説明会と称した立派な大会場の壇上に、玲華は結局付き合っ
ている。そう、源蔵さんの隣に座っていた。

それも俺のためと思うとちよつと情けなくもある。今後、大事に
ならないように、我慢してあそこにいるんじゃないかと思えた。そ
んな大袈裟なことじゃないわよ、って笑っていたけど。

俺は家のことは関係ない人間だし、ちよつと離れた場所からそれ
を聴いていた。

ところどころで毅さんとか清志郎さんとかが怒鳴っている。

玲華は本当に隣にいただけで、澄ました顔で何も言わずに、源蔵
さんとか椿原さんに任せていた。

なんか……。これを見ている限りでは、説明会というより、苦情
受付会になつてる。

それでも軽食とか飲み物とかバリエーション豊かに用意されてい
て、まったく雰囲気は違うけど、世羅の家のパーティを思い出した。
「よお。電話したか？」

同じように無関係で爪弾きされている久保田さんが近づいてきた。
実は会が始まる前、玲華に携帯電話を渡されていたのだ。

「どうせ連絡まだしてないでしょ。これ貸してあげるから、心配
かけてる人にもう大丈夫だって報告しなさいよね」

偉そうにそう言いながら……。
なぜそれを久保田さんが聞いているんだよ。そう思いながら答える。

「まだ」

「だらしねえやつだな」

「こいつも偉そうだ。」

「おまえは祥子さんにしたわけ？」

「まだだ」

「一緒じゃねえか！」

まったくもう……。どうしてこいつは俺に偉そうに言うのを、生きがみたいにしてるんだろう。

実は拓真に真っ先に掛けたんだ。一番心配してるだろうと思ってでも、話中だった。

よく考えれば今日は金曜日で平日だ。いま頃はきつと、部活中だと思う。

ちゃんと玲華が拓真にメールで伝えていたし、心配はさほどしてないと思う。

あとは自宅なんだけど……。

(つーかさ、なんで玲華まで兄貴の連絡先知ってただよ！)

そう、電話帳のが行を表示させると、ウチの自宅の番号の下に兄貴の名前と、十一桁の携帯番号とメールアドレスまで登録されていたのだ。

これに関してこそが“いつの間につ？”というのに相應しい。

俺が知る限り、番号を交換しているところは見えていない。つまり、俺のいない間に二人は逢っていた日があるということだ。これは問いたださないといけない。

衝撃が強くて、そこから携帯を閉じたから、まだ掛けることが出来ていないという流れだ。

俺だって知らないのに、兄貴の番号。

携帯を持っているのは薄々感づいていたけれど、きつと親の目を

ごまかして契約したんだと思う。兄貴はそういう巧妙な手が得意だから。

「おまえって意外と頑丈だよな」

久保田さんが壇上に視線を移したままそう言った。

怪我のことだと思った。確かに結局ひどくなっていし、完治したも同然だから。

「良かったよな、俺が頑丈で。殺人罪にならなくてさ」

「ああ。本当に良かった」

皮肉として言っただけなのに、真面目な顔して久保田さんが肯定した。

少し意外な反応だ。それに戸惑いを感じて顔をしかめる。

「でも言っとくけど傷害罪には間違いないからな！」

「おまえは不法侵入罪だな」

「どつちが重いんだ？」

「……一般的には傷害罪だ」

硬い声のまま、それでも答えてくれた。ふうん、としか返せない空気だ。

謝りにくいことこのうえない。

「あれ？なんで俺が謝らないといけないんだ？」

不意に思ったことをつい口にした。

「はあ？」

「なんか謝らなくちゃいけないと思っただけで、でもよくよく考えたら、俺は謝らないといけないことは何もしてないんだよな？」

「おまえ……打ち所が悪かったのか？」

「まあいいや、玲華には謝ったし。久保田さんは玲華のついでだもんな。だから久保田さんも謝らなくていい」

独り言から久保田さんに向かって言う言葉に流した。

「オレがなんで謝るんだよ」

「本当は気にしてたんだろ？でももういいから。終わりよければす

べて良しだよな」

いい言葉だ。本当に。

おそらく久保田さんは謝らないと思った。たとえどんなに後悔していても、仕事としてやったことだから。そこには真情を挟まずに納得したうえでやってるから。

「おまえさ……何を思ったかは知らないが、謝ろうと思ったんなら素直に謝った方がいいぜ」

「嫌だ。なんか損した気分になる」

俺だつて後悔はしてないんだから。謝ったら無駄なことをしたつて認めたことになりそうだ。

俺はなにもしてない。暴れて捕まつて一緒に逃げただけだ。そういうところが頭の片隅にあたりするから、余計に認めたくなかつた。

「強くなつたな」

なんの前触れもなく久保田さんが言った。

「何度かもう駄目だと思った。だけど悠汰は持ちこたえた」

「よほど弱いやつだと思われてたんだな」

なんか失礼だ。つい拗ねたような顔をしたら久保田さんは俺を見た。

「自覚してないのか？自分の変化に」

「……どこが？」

「そこは相変わらずだな」

薄く笑みを浮かべられた。

「いま馬鹿にしただろ。それだけはわかる」

ホントに、不思議だけれどそういうところは敏感みたいだ。

こんな会話をしていると理事長がやってきた。

そうか、この人もここでは無関係な人物にされてるんだつた。

「やあ。久保田君今回はどうもありがとう。玲華から聞いてるよ。

君には感謝の言葉をいくら並べても足りないな」

「いえ、仕事でしたので……」

「依頼料を支払うから、これが終わったら家に来てくれるかな？」
なんか大人同士の話になった。

俺は途端に居辛くなる。とくに理事長に合わせる顔が無くて。
それで下がるうかなくなって思ったとき、理事長が俺を見た。

「良ければ神崎君も一緒に。夕飯をご馳走したいんだ」

「え……？」

嫌われてなかった。ここで無視されてもおかしくないのに。でも、
それはありがたいんだけど、いきなりな展開で戸惑った。

「ではお言葉に甘えて。請求書を作成してから伺います。悠汰、お
まえもいいだろ？」

さくさくと久保田さんが進めていった。

それで断る理由もなく俺も頷く。

「結局誰が継ぐんでしょうね」

また舞台上に視線を移して久保田さんが呟いた。

「さあね。でも父の中ではすでに順位は決まっているだろう。その
胸中は直前まで誰も知られることのないままね。あの人のことだ。

自分が動けるうちに決断し、引継ぎしていくだろうと思えるよ」

「本来であれば、こんなやり方を通す人ではなかったということだ
すか？」

「そうだね。私はずっと腑に落ちなかったが、話を聞いてようやく
納得したってところかな」

理事長は軽く笑っている。自分も辛かったはずなのに。この人には
辛いことが何度も起こってるはずなのに、それでも笑えるってす
ごく強いことなんだ。

俺が求めていくのは、そういう強さじゃないといけないんだって
思った。

* * *

すべてが終わった。

そう実感したのは玲華のうちについてからだった。時間にして夕方四時半。

いつまでも終わりそうもない会を途中で切り上げ、強引に帰ってきた。あのまま残っていたら、身内のパーティになだれ込み、抜け出せなくなるんだそうだ。

どういふ空気の流れかは解らないが、とりあえず帰る直前には源蔵さんがすべてを押さえ込み、和やかなものに変化していた。というより毅さんや清志郎さんといった、主に怒っていた人たちが先に帰ってしまったせいだと思う。

帰るや否や、小百合さんと玲華がひとしきり抱き合っていた。

こんなにわかりやすく両親に甘える彼女って、実は珍しかった。いつも自分でなんでもやっってしまうし、この家では玲華が一番しっかりしてるんじゃないかと思ったこともあったし。

久保田さんは一度事務所に戻っていて、まだ到着していない。

そして夕食の準備が出来るまで、応接間にいるように勧められた。玲華の両親と玲華と共にいるから、俺がその間に入っているのかなと恐縮してしまう。

しかも話の内容が比紹のことだったりする。

理事長が小百合さんに詳細を話していたのだ。

居心地が悪いなんてものじゃない。

でもみんな何も言わないから、その場所から離れず、俺はジッと黙って聞いていた。

「でね、彼と二人きりで話したんだ」

「そうだったの」

どんな話の内容でも小百合さんに変化は無い。いつものようにのんびりと構えているように見える。

何も感じてないはずがないのに。凄いな、って素直に思う。

「ママになにも言わずに勝手なことをして申し訳ないけれど、これからのことは全て彼の望むとおりにしたいと思ってるんだ」

「そうね。それが良いわ。可哀相だものその子」

「お母様、本当にそれがどういうことか、意味が解ってて言ってるの？」

間に挟む玲華は厳しい目を向けた。だけど理事長に責めるわけでもなく、小百合さんに諭そうとするでもなく、ただ現実を見ているだけのように見える。あまりにも小百合さんがあっさりしてるからだと思う。

車内で見た玲華はどこにもいなかった。

「ええ。もちろんよ、玲華ちゃん。それでその子は何を望んでいるの？」

小百合さんも伊達に歳を重ねているわけではなさそうだ。

こんなこと言ったら、ぶっ飛ばれそうだけど。

「まだ混乱していたよ。すぐには難しいだろうね。今日は彼の不満を聞いて終わっただ」

それでも、比紹には前に進むきっかけになったと思う。

それで良かったんだ、今回は。

「もしこのまま彼が立ち止まってしまふのなら、彼の母親にも会おうと思ってる。いくら成人を迎えたといっても、これまでがこれまだったからね。私にも責任はあるんだ。話し合いが必要ならば、逃げるわけにはいかないよ」

「わかってるわ。それでもし彼が望むなら認知も惜しまないということね」

「すまない……」

「本当にそれでいいの？お母様。なにも怒らないの？」

「つい、と言った感じでまた玲華が間に入る。」

「解つてると、答えたでしょう？ママはね、玲華ちゃんよりずっと早くこのことを知っていたのよ。いつかこんな日が来るかもしれないと思っていたわ。そのときは、その子のことを第一に考えようって決めていたの。だってパパの子よ。それには間違いないもの」

「お母様……」

なんて、深い愛。

理事長だけじゃない。理事長に関わるものすべてを認めているんだ。これが愛なんだと思った。恋と、愛の違いかもしれない思った。

俺は初めてそれに触れた気がする。

それで、泣きそうになった。

(やべえ、な……)

ここで関係ない自分が一番に泣くななんてありえない。それだけは自分が許せなくて、恥ずかしくて必死で耐えた。

きつと一番強いのは小百合さんだ。女なんだ、いつだって。

「良かったわね、玲華ちゃん。この歳で兄弟なんてなかなかできないわよ」

「ママ……」

「お母様……」

小百合さんの一言で、玲華と理事長がガツクリしていた。俺としてもすっかり眼から水分が引っ込んだもんだから不思議だ。

でも小百合さんはお構いなしで、ニコニコ笑って両手を合わせていた。

(ほんと大物……)

いろんな意味で。

「あつ。でもまだいけるかもしれないわ。パパ頑張っちゃおう？」

「もういいわよ！悠汰とあたしの部屋にいるから、夜ご飯できるまで呼びにこないで！」

玲華がキレた。

まあ仕方ない流れだと思う。思うのだが……。

(え……?)

いいのか、それで。

理事長の顔を確認したら、やっぱり顔面蒼白していた。

「待ちたまえ！部屋で何をする気だ、玲華！」

「なにもしないわよっ！なに考えてんのよ！馬鹿！」

ああああ。

俺のせいじゃない。これは決して俺のせいじゃない。
だから恨まないでほしいんです、理事長……。
でも玲華は俺の腕をつかんで強引にズカズカと歩く。

「いいのかよ、おいっ！」

「いいの！」

こう言われたら、俺に断る理由はない。居心地も悪かったわけだし、すんなり玲華についていった。後ろで響く理事長の絶叫を聞きながら。

* * *

実は玲華の部屋って初めてじゃない。

だけどそれは理事長が不在にしていたときのみだった。

「やっぱりこっちの方が落ち着くな」

「どうせね、本家よりは小さいわよ」

「いや、そこで卑屈になるのはおかしいから……」

ここだって超がつくほどの大豪邸だ。あちらはそれに、スーパーとかデラックスとか加わるような物で、どちらも非常識並みであることに変わりはない。

この部屋も本家ほど広くはないが、俺と兄貴の部屋を足しても余るくらいある。

俺は勝手にベッドに座った。大きくて、俺が三人ぐらい余裕で寝れるんじゃないか。このまま寝たい気分になる。知らない間にも疲労は溜まっているみたいだ。

頭が重たい。

「ねえ、比紹は認知なんか望むと思う？」

窓際に置いてある白い花を愛でながら言う。ちなみに種類のごとは俺に聞かないでくれ。

「イヤなんだ？玲華は」

「そうじゃないわ。ただピンとこなかっただけなの。眞奈美さんや

笹宮様の感情も無視できない。比紹自身も、認知なんかされたところでそんなに得なことなんてないのよ」

「そう、なのか？」

「笹宮様だつて分家の端っことはいえ、それなりの地位はあるの」「確か比紹はそんなにお金持ちじゃないって……。運転手もいなかつたし、俺は庶民感覚でいたんだけど」

そのうえ奢つたりするから、余計に悪いと思つたわけだし。

「独立したウチよりは最終的に財産残るんじゃない？ただ、本人が気を遣つて自分用には運転手を雇わなかつたつていう可能性はあるわ。もしくはあんたに同情させようとしたかね」

「……………」

そうだったんだ。最後の最後で、また騙されたつて感覚に陥つた。しかし玲華もよく把握してる。同じ高校生でいいんだよね？本当に。

そう思つてると、ふつと玲華がこちらを見た。

「ねえ、どうしてお祖父様は全ての子どもを認知したんだと思う？」

「さあ……。子どもが好きだったからじゃないのか？」

そんな深い問題、俺に理解できるはずがない。

「少しでも優秀な人材を得るためだと、今回のことであたしは思つたの。本当に好きつていうだけの理由なら養子でも良いじゃない？でも養子は一人もいないのよ」

「あ、そうなんだ……………」

つて、認知と養子の違いつてなんだ？

俺の顔色を読んだのか、玲華はふつと笑う。

「相続するときに、認知だと養子の半分しかもらえないの。だからお祖父様は境界線を張りたかつたんじゃないかしら。本当に認めた子が非嫡出子にいた場合、その子のみを養子にしようつてね」

「はあ……………」

やばい。まったく理解ができない。それは言葉の意味でというよりは、その気持ちだ。

「だから養子ならば、出生が誰からだろうと関係ないわよね。もし比紹が本気である家が欲しいなら、お祖父様の養子になれば良いのよ」

比紹の望むものが、あの家の権力や財産だった場合……か。

でも比紹はそういうのは興味ないと言っていたよ。まあ本音はわからないし、これから変わる可能性だってある。

「悠汰はどう？お祖父様の地位と名誉欲しいと思う？」

「いらねえ。あんなとんでもない人達を束ねるの、まず無理だし……。それに自分で築いた方が面白そうだ」

「ふふん、言うわね。でも同感だわ。あたしもそう言って最初に断ったのよ」

そのときの玲華の顔が自信たっぷりって感じで、早くも俺は挫けそうだった。

(だから、その強気なところがさ……)

時においていかれそうになるんだって。そして、次には負けてられないって思うんだ。

けど同じ感覚というのは嬉しくもある。

「結局良かったのか？源蔵さんの思う通りにして」

あんなに威勢よく反発していたのに。いまの玲華にはその威力が半減していた。

「うん。いまでも本音は揉み消すなんて良くないことだと思うわ。

でもお祖父様には敵わないだろうし……」

「池田さんに話してみるか？」

数カ月前に知り合った刑事の池田さんは、すごくいい人だ。力になっってくれそうな気がした。

「駄目よ。本気で告発するつもりなら警視総監ぐらいじゃないと。

……でもそれも無理ね、あの人お祖父様に頭が上がらないって感じだったし」

「警視総監？」

いま、サラリとすごい一言を聞いた気がする。玲華も知り合いら

しい。

(しかも否定的)

そういえば玲華は一時期源蔵さんと各国廻っていたんだ。

「それに残された者の気持ちを考えるなら、誰も望んでないことをして意味があるのかわからないの」

玲華が目を伏せた。

それは稔さんのことじゃないかと思えた。

俺には、わからない時を玲華は過ごしている。

誰かの想いとか、その背景とか、俺は玲華からしか聞いてない。

でも玲華の気持ちは、迷いながらも隠すほうに向いているんだと思った。

でなければ、きつとこんなふうにウヤムヤには終わらせない人だから。

「一つ聞いていいか？」

ずっと気になっていて、だけど聞けなかったことがある。

本当は聞くべきじゃないかもしれない。玲華のことを想うなら。

だけど見て見ぬフリは出来なくて……。

「なあに？」

「その幸祐って、おまえにさ……」

「うん？」

とりあえず俺からこの名前を出しても変化はない。だったら大丈夫なんだろうか……。

どういう言葉のチョイスをしようか、少し考える。無神経にならないように注意しなければならぬ。

「あー……なにもされてないわよ」

考えているうちに……なにも聞いてないのに、あっさり玲華は答えた。

(なんでわかるんだよ)

俺が聞きたいこと。

比紹の話聞いてから、ずっと心配していたこと。

「おまえ……」

「なに気を使ってるのよ。らしくないわね。あたしがひどい目に遭わされてるとでも思ったの？」

「……いや、なにもないなら良いんだ」

安心しても良いらしい。

玲華のあっさり加減にそう思った。

「そこは信じていいわよ。助けてくれたのは久保田さんだから、彼に聞けば証言がとれるわ」

「あ、そう……」

やっぱりすげえな、久保田さん。調子に乗るから本人には言わないけど。

自分がそこにいたとして、俺は護れたんだろうか。

いや護る。なにがなんでも護るんだけど、護れたとしても俺は無傷で終われたとは思えない。そこが久保田さんと俺の違いだ。

「なに落ち込んでんのよ！ なにかあったほうが良かった？」

「それは違う！ 絶対に違う！」

自分で思ったより力一杯否定してしまって、少し照れくさい。

というか、俺は相変わらず読まれすぎだ。

「じゃーあたしも聞いていい？」

わざと甘ったるい声を出してきた。ギクリとするのはなぜだろう……。

「京香ちゃんのことなんだけどー」

「ああ……」

そっか。そんな問題もあったっけ。どうして今だけ京香“ちゃん”なんだろう？

「あの写真は未遂だ。比紹も言ってたよな？ 確か」

「聞いてないわね」

「うそだろっ！ どこかで俺、これで誤解がとけたってホっとしたよっな……」

どこでだったか思い出せそうで、出てこない。

考え込んでみると、玲華が深いため息をついた。

「あんだね、もう少しあたしに対して思いやり持ってくれてもいいんじゃない」

「持つてるだろ。……俺にも責任があったんだ、あの写真に関して」

「責任？」

「言い訳に聞こえそうだから、説明はあまりしたくないんだけど……」

「ズルいじゃない！」

説明したところで楽しい内容じゃない。どうしようか考えあぐねていると、こつちにも目撃者がいることを思い出した。

「世羅に聞いたら、未遂だってわかってもらえと思う」

「世羅とは連絡取ってたわよ」

「そうだったよな……。そう言ってただろ？」

「世羅からはしてるように見えたって」

「はあ？」

まじかよ。なんか冷や汗が出てくる。やばい、頭が真っ白だ。

あきらかに俺の方が悪いよな……。しかしこのことについては謝った後だし。今更謝っても、取ってつけたように思われたら終わりではないか。

「言っとくけどね、お母様は許しても、あたしはそういうこと許さない派だからよろしくね」

「……するかよ」

しまった。何だこの弱々しい間は。

疚しいことなんて何もないのに。ないよな……？

……あるとしたら抵抗しなかったことぐらいで。

（それが！）

世羅は俺の態度そのものを告げ口していたに違いない。

「悪い、玲華。おまえを裏切るとか絶対にありえないことだけど、あのときはすべてがどうでもよくなつて。ほらっ熱あつただろ？」

たぶんそれで朦朧としていたというか……」

結局言い訳してんじゃないか……。情けない。情けなさすぎる。

なんとか別の言葉を探すように頭を抱えていると、すぐ近くに玲華が近寄っていた。

影が視界を暗くする。

それで、顔を上げると。

ふいに唇を触れあわせてきた。ほんの一瞬、重なるだけの。しかも派手な音だけさせて。

びっくりして何も反応が出来ずにいると、その口元がくいと上がった。

「冗談よ。怒ってないわ」

「おまつ……」

すかさず手を伸ばして腕を掴もうとしたけど、あっさりとかわされた。しかも笑いながら。どんだけ余裕なんだよ。

反して俺といえは、勢いあまつて体重が前傾になり、自分の膝で上半身を支えた。

「きったねえ！なんだよそれっ」

はああああと息を吐き出しながら俺はベッドに寝転がった。あいかわらず悔しいけど、こいつんちのはソファだけでなく、シーツまで肌触りがいいときた。

「心臓に悪い……」

でもそのおかげで、二度と裏切り行為だけでなく、誤解を与えることもしてはいけないんだって思ったけど。

「バレなければいいわ」

傲然とした笑い方で、玲華は立ったまま俺を見おろした。

「バレなければ、ねえ……」

「そう、あんたには無理よ。だから最初からやらないことね」

「やっぱりそういうオチか」

もちろんする気なんてないけど。

なんかこういう流れが嫌だ。やっぱり人を試すって良くないよな、

うん。

俺は少し拗ねていた。玲華に背中を向けるように右手で頭を支える。

それで言えたんだと、後から思ったんだ。でもこのときはただ、正直にするつと口から出た感じだった。

「あのさー……おまえ殴つたよな、ちよつと待ってって。……あの続きは？」

言いながら顔だけ玲華に向けて、ポンポンと自分の横のスペースを叩く。

玲華の顔が一気に真っ赤になった。

「ちよつと！何よその色気のない誘い方は！目がエロいのよっ」

「エロ……」

そんな一言つてあるかよ。おまえがそついうことするから、こつちだつてそついう気持ちになるんだろつ。

「だいたいわかってんの？あときは誰が来るかわからない状況だから止めたのよ。いまだつてそれは変わらないの」

冷静だなおまえは。あるとき一言もそんなこと言つてなかったのに。

しかし俺だつて抜かりはない。何回久保田さんに邪魔されたと思つてるんだ。

「それなら大丈夫。鍵掛けといたから、内側から」

「あんつ、たはっ！」

「玲華。もつと強い男になるから。今回みたいなことがあつたときに、真つ先に呼んでもらつた久保田さんより、強くなる」

認めさせてやるから、そのときには頼つてほしい。

「目指す方向が違うのよ」

玲華は腰に手を当てて、冷たく言う。玲華だつて久保田さんのことを信頼したから依頼したはずなのに。

損するタイプだな、久保田さんつて。

「だつたら玲華つてマツチヨ好き？」

「なに言ってるんの、あんだ。噴水に入って熱ぶり返した？」

この反応は違ってることだろうか？

どつという方向にいけばいいか、狙いがわからないじゃないか。強くなるのは大前提であるとしてもだ。

じつと玲華の次の言葉を待っていると、再び彼女は近寄ってきた。俺の額に手のひらを触れさせる。

「大丈夫そうね。じゃあ真面目に言ってたのね」

「……あんまり触んなよ。とくに、そういう気がないんなら俺は背けるように顔を横にした。」

すると傍らに玲華が座った。マットレスの質の違いか、ゆっくりと沈み込む。

「もう強引に持っていていけないの？」

「……やらないことにした」

「ふうん。また我慢するんだ」

視界が陰って、ふと見ると玲華がゆっくりと近づいてきた。けどどストレスのところまでピタリと止まる。息が掛かるほど近い。

「なんだよ。誘ってるのかよ」

「違うわ。誘ったのは悠汰」

心臓がバクバクする。けどどの行動の意味がわからなかった。

手も顔も、どこでも少し俺が動かせば触れる。そんな状態で玲華は喋り続けた。

「京香と比路のことが引つ掛かっているのね。だから抑えてる。違うっ？」

「……………」

違わない。けどあっさり読まれたのが面白くなって、言えなかった。

俺が行き過ぎたことをして、玲華が傷つくなんてことになったら、恐ろしくてたまらない。

「一度ついた傷は消えないものね」

玲華も俺と同じことを考えていた。

そつだ。だから万が一でも玲華が京香のようにならないように、最善の注意を払わねばならない。

耳にかけても落ちてくる髪が俺の頬に当たりそうになる。

銀のネックレスも律儀にギリギリのところをうるついていた。どうでもいいからこの状態をなんとかしてくれ。

「でもね。ひとつ重要なことをあなたはわかっていないわ」

「なにがだよ？」

「あなたがあたしのこと想ってくれてるの、わかるわ。伝わってくる。あたしのために自分を変えようとしてくれてるのも、凄く嬉しい」

「なに言っただよ、おまえ」

「でもじゃあ悠汰は？あたしがどれだけ想っているか、わかってる？」

「……………」

即答が、出来なかった。電気が全身に走ったような鮮烈さを覚えた。

初めて突きつけられた難問。

そこには触れてはいけないと本能が訴える。

「考えたことがなかったって顔ね。怖いのか？人から想われることが、信じられないの？」

思考が止まる。

「あたしがあなたを平手とはいえ殴ってしまったこと。ちゃんと真意を考えてほしい」

「気にしてないから。大丈夫だから。……俺がおまえを好きなんだから。いいだろ、それで」

結局自分から玲華に触れた。右手で頭を抱き寄せる。玲華は声も上げないで一緒に横になった。

顔が見れなかった。

「ありがとう。嬉しい。だけどそれだけでは駄目なのよ。万が一また同じようなことがあって離ればなれになったら、悠汰はどうする

？」

顔を埋めたまま言う玲華の言葉にハツとなった。

確かに、その通りだ。

玲華に会っていないと、会話をしていないと、触れていないと、俺はぶれていく。安心が出来なくて、すぐに荒んでいくのだ。

きっと比紹が何かをしなくても、俺は心が乱れていたと思う。

綾小路が言った、どれだけ玲華に縋れば気が済むのかと。

(でも違う。縋るよりも質が悪い)

離れていたらすぐに信用できなくなる。玲華の人柄のことじゃない。

そう、玲華が本当に俺を好きでいてくれるのかどうかだ。人から、好かれる術がわからない。

「あたしもあなたを壊したくないのよ」

俺は壊れないとは、口が裂けても言えそうになかった。

だいたい確かな保証なんてないじゃないかと思う。

自分の感じたものが、ただの勝手な勘違いだとしたらどうするんだ。

(もう二度と)

俺が好きで期待して、それが全部錯覚だとしたら……。

落胆する絶望感は一度味わえば充分だ。

(裏切られたくない)

とくに、玲華には。

「悠汰は“普通”を気にするわよね。だけど、あの家族を見てもらったらわかると思うけれど、あたしも普通の感覚とは言えないわよ。そうだ。誰より普通に拘っていたのは自分で。」

“玲華の普通”がいいんだ。玲華のデッドゾーンに知らない内に入り込んで、嫌われたくないと思うから。

だけどこんなこと重く感じられそうでは言えない。

「あなたを想っているのって、あたしだけの話じゃないのよ。お兄様や萩原くんだってそう。ちゃんと悠汰を見てる。だから自信を持

って」

「自信……?」

人に好かれる自信?

そんなものどうやって作れば良いんだ。

嫌われてるかどうかならわかるんだ。悪い方が伝わりやすいのは何故だろう。

逆なら良いのに。

「拓真に殴られたんだ」

「いつ?」

「怪我した後。あの美山が拓真のこと知ってる感じだったから、俺といるせいだと思っただ。だから俺といた方が良いんじゃないか?って、言ったら殴られた」

「そう……」

出し抜けに語っているのに、玲華は口を挟まずに相槌だけ打っている。

自分でも何が言いたいのかわからない。

「あいつ怒って泣くんだ。怒るのも殴るのも馴れてないのに、泣きながら怒るんだ。それぐらい酷いことを言っただけで。でも、俺にはなにか拓真を怒らせたのか理解ができなかった」

「悠汰……」

「だから……本当はそういう人間なんだ俺は。無神経で常識はずれで……いつかこの無神経さで玲華が傷つくかもしれない。いや、それよりも嫌気をさすかもしれない。心変わりを、してしまふ。そういうのが、イチバン……」

一番、怖い。

銃を向けられることよりも、牢屋に閉じ込められることよりも、噴水に入ることよりも正直怖いんだ。

玲華は一度おでこを俺の胸に押し付けた。それから首を曲げて俺を見る。その顔は笑んでいた。

「わかってないの?萩原くんが怒ったのって、悠汰があたしに怒っ

たことと同じことよ」

「え？……あ……」

そう玲華に言われてストーンと自然に納得した。

それからすごく恥ずかしくなる。なんでこんなこと気づかなかつたんだ。

（危険だから遠ざけるって、そのままだ）

「でもそれで怒られたからって、悠汰は萩原くんのこと嫌いになつていないでしょう？萩原くんもちゃんと協力してくれたわね？」

「俺が嫌いになる理由なんてないから。それに拓真は優しいって知ってる」

「そういうことよ。あなたが気にしてるほど、周りは大袈裟にとつてないの」

「優しいからこそ無理やり合わせてるかもしれない。穏和なやつを俺が悪い方へ影響を与えてるんだとしたら、それは……」

「あまり否定してあげないで。気にするのなら、これからは思いやりを与えてあげるようにすればいいわ」

「……………」

「いまさら誰もそう簡単に嫌わないわよ。とくに悠汰はマイナスのイメージから入ってるから、全然問題ないわ」

「……それって褒め言葉じゃないよな」

何気に傷ついた。

でも心はずいぶん軽くなった。不思議だけど玲華の言葉には説得力がある。信じたいと思わせるものがある。

「おまえのもそうだけど、拓真のも痛くなかった。ただ胸にきたけど」

「悠汰」

自己嫌悪に陥っていると玲華は両手で俺の頬を挟むようにおいた。また殴られたところを触れているだけかもしれないのに、勝手にドキリとなる。

「格好良かったわよ。比呂に立ち向かっていく悠汰、本当に格好良

かった」

「いきなり、なに……」

「だから無理しないで。無理に感情を殺したりしないで」

「……………」

どうして彼女がこんなことを言うのか、俺にはわからなかった。

無理なんて……。努力は必要だろう？なんだった。

間違っても怒りに支配されるようなことがないように、規制を張るのは当然の努力だろう。

「あなたと久保田さんは違う。なろうとしたって、なれるものじゃないわ。それよりねえ、有りのままの悠汰でいてほしいの」

「そんなこと……」

「自分を否定しないで。比紹に言った台詞、あれは悠汰にしか言えなかったことだわ。いままで耐えて頑張ってきたあんただから言えたのよ」

あのときは必死で。誰かの言葉を借りる余裕なんてなかった。

でもそんなに大それたことを、心に響かせられるような内容を伝えられたとは思えない。

「いまなら言えるわ。比紹を、見捨てないであげて」

「え？」

「きつと比紹は水の中で本当に実感したんだと思う。自分は悠汰を殺せないってこと。なにも言わなかったけれど、心の奥底ではあなたが息を吹き返すことを祈っていたと思うわ」

「なんで、わかるんだよ」

人の心が。比紹の言葉に怒っていたのは、他でもない玲華だったのに。

「あのときはわからなかったわ。あたしも頭にきてたから。でも必死であなたを連れてきていた。水の中から持ち上げるときも、とても素早かったわ。確実にあなたに対する扱いが変わっていたのよ。比紹にとって初めて気を許せる人に、悠汰はなっていくと思う」

「……………」

「だからもつと自分に自信を持ちなさいって。あたしが悠汰を好きなように、悠汰も悠汰を好きでいて」

とても切実に聞こえて、簡単には流せない。

比紹はもちろん見捨てるつもりなんてないけれど、それは向こうが拒否しなかった場合と考えていた。

だけど自分のことを好きになるって、最大の難関じゃないかと思えた。

俺がいままで考えてやってきたところが、すべて崩れ落ちるようなことだ。自分をありのまま受け入れるということ。

だけど応えたい。

自然な気持ちで、俺は玲華に近づく。唇が触れる瞬間、彼女から発せられる空気がふと変わった。

「あ、ちよつと待って」

「……なんだよ」

またこの展開かよ。

玲華は寝返りを打って俺から少し離れ、片手で自分の体を支えた。

「その前に携帯返して」

「ああ……」

そういえば借りたままだった。俺はちよつと体を持ち上げてズボンのポケットから抜き出して渡した。

玲華は携帯を開き、操作しながら言う。

「電話した？」

あのあと二人とも連絡がついて、一応話をしたのでそのまま素直に頷く。

「した。っていうか、おまえいつのまに兄貴の連絡先なんて……」

「晩ご飯いらないうって言った？」

俺の言葉を遮って、たたみかけてきた。

「言っていない。じゃなくて！」

「ダメじゃない。作って待ってたらどうすんの？」

「そんな家じゃない。っつか、人の話を……」

「あ、もしかして萩原くんとメール読んじゃった？」

駄目だ。とことん誤魔化す気だ。

これは教えてくれない方向だと、これまでの経験で判断する。返す言葉を失っている、玲華は距離は変えずに腕だけ伸ばしてきた。俺の首に絡みつき、したり顔でニンマリ笑いながら玲華から近づいてくる。俺が諦めたのを見抜いたようだ。

だけどそれを止めたのは今度は俺だった。

「玲華、最後にひとつ確認したい」

俺は玲華の頬に触れる。すると彼女は悪戯っぽく笑った。

「なによ。まだあるの？」

「もう、隠してることはないよな？ 実はあの頃に大変だったとか、後から俺が知るようなことは何もないよな？」

「ないわ。悠汰は？ もうあたしに隠してることない？」

少し語調を上げて、そう返された。

「最初からあるわけないだろ……あっ……」
「そういえば。」

美山が手下にしたいとかなんとか、不穏なことを言ってたような気がする。

あいつはあれからどうしたんだろうか。

「なによ、そのあからさまな“あっ”は」

大丈夫だよな。最終的には期待はずれだったわかったみたいだし、いつどうやって比紹と出会ったのか、結局よくわからずじまいだけど、もうあの二人が関わることもないと思った。

まあ美山ならなんとかなるか。

「いや、なんでもない……。なんにもない」

改めて玲華に気持ちを向き直す。

だけど俺が近づくと、玲華はふつと顔だけで逃げる。

ちよつとムツとした。首を押さえてキスしようとしたけれど、再度首を横に向けられる。笑みを作ったままで……。

「俺で遊ぶなよ」

真意なんてあるはずない。絶対からかってるに違いないんだ。

「ふふふ。あたしが言いたいことわかってくれた？」

「ああ……努力する」

「わかってないじゃない」

玲華が唇をとんがらかせた。でも隙はない。

（はやく、しないと……）

そんなことより、いま問題なことが別にあつて。

「わかったから」

「ダメよ。なげやりね」

また、強引にもつていこうとしたけど、むにと頬を押された。

どれくらい力で、玲華の行動を制限させてもらっていいのかわからない。

でも。

はやくしないと俺の体力がもちそうにないんだけど。

（やばい。本気で、眠くなってきた……）

そう、疲れていたんだ。

こんなやりとりを寝転がったまましているのが失敗だったと、後からわかった。包み込むような寝心地のいいベッドは、俺の残り少なかった体力を吸い取るようにして奪っていく。

「悪い。玲華……。もう、限界」

頭も瞼も重い。性欲より睡眠欲に先に限界にこられると、非常に困るんだが。

薄れ行く意識ギリギリのところ、玲華が起き上がったのを肌で感じた。

「なによそれ！自分から誘ってきたくせに」

そう怒るなよ。あの牢屋みたいなところでは全然寝れなかったし、寒中水泳だつてやったんだ。

よく考えたら酷使しすぎじゃないか、自分の体。これじゃあもたないのも納得がいく。

「なによ。あたしなんてあんたがケガしてからよ。全然寝付けなか

「ただだからねっ」

体力だけじゃない。いろんなことが精神にきてたみたいだ。それも疲労の原因になってる。

玲華が死んだのかと思っただけで……。

「もうっ！いま寝たら、あたしが襲うわよ！」

ああ。玲華なら何をされてもいい。なんの問題にもならない。そう思うんだから不思議だ。

宿題が残ったような状況だけど、とりあえず俺は幸せだった。もうこれからは玲華と離れなくて済む。それだけでいい。も

大満足のなか、俺は深い眠りに落ちた。

エピソード

信じられない。

本当に寝た。

ボソボソと呟きながら、そのまま寝息に移行された。

しばらくあたしは、どうしてやるうかと悠汰を見つめる。

(かわいい寝顔しちゃって)

爆睡はくすいつて言うんだわ、これって。掛け布団もそっちのけで寝るとはよほど疲れていたようだ。

お泊りは実は初めてだったりするのだけど、悠汰の寝顔にはよく遭遇する。思えば最初の 一方的な 出合いもこの顔だった。熟睡すればするほど年齢相応……いや、それより下の子みたいにかわいくなる。

(結局、解ってくれてないし)

あたしだって悠汰に嫌われるのは普通に怖い。

けれど彼の一種逃げ腰ともとれる自己規制は異常にあたる。

お祖父様にもビビらないし、あの家の皆にも堂々としていたのに、あたしといるときはとくに弱くなるのだ。知り合ってから、それがひどくなってきたような気さえする。

(そこが可愛い……なんて思っちゃうあたしはやっぱりSかしら)

でもこのままでは日常生活にまで支障をきたす。友人にまで萩原くん顕れているのがいい証拠だ。だからなんとか直せたらと思ったのだが。

(これは長期化するわね)

おそらくいままでの環境のせいなのだろう。この人格形成の結果は。

ならば気長にほぐしていくしかない。

聞く前に好きだと言葉にしてくれた。それだけで今回は大幅な進歩だといえる。

ジッと見つめたまま、どう襲ってやるうか一瞬本気で考える。

しかし鼻をつまんでみても、頬を引っ張ってみても起きる気配がない。規則正しい寝息。

あたしって女性としての魅力がないのかしら。

それとも、焦らしすぎたせいなのだろうか。

(やめた)

せつかく襲つても憶えてないんじゃないあ面白い。

あたしはベッドから降り、窓際まで歩くと、先ほど花瓶の横に置いたものを手に取った。

盗聴内容を受信したものだ。それだけでなく録音機能も内蔵されている。

あのあと、悠汰が部屋に帰ったあと、流れでとんでもないものを録音してしまった。

決して多くはない、途切れ途切れなお祖父様と千石さんの会話。

もう一度聴きたくなり、該当する部分まで早送りした。

『玲華と数日共にして、どう感じた？』

前触れなく、お祖父様が千石さんに話しかけたところからだった。

『やはり不思議な方としか……』

どこか言いにくそうな感じが、千石さんの声からしたのだが気のせいではないだろう。

お祖父様はそうか、としか返さない。

もとより使用人の話に価値を見出されない人だ。

『千石、紅茶をいれてくれるか』

『はい』

料理は駄目だったけれど、お祖父様の好きな紅茶ならば千石さんは完璧にいれることが出来る。完璧な時間、温度、手順の知識があり、慣れもあるから。

お祖父様の好みはジョルジだ。打ち合わせするときも飲んでいたので、いまもそれなんだろう。

そして、カタンとティカップがテーブルに置かれる音がしたとき

だった。

『おまえは何もしなかったな』
タイムングを計ったようにお祖父様は言う。

『それが答えだと、受け取って良いのか？』

『ご存知、だったのですか？』

千石さんの声は僅かに震えていた。あの、千石さんが。

『ああ。おまえはワシの最後の子供だ。母親とよく似ておる。比紹同様、何か仕掛けるかと思うたがな』

あたしはその言葉で、なぜお祖父様が千石さんを近くに置くようにしたのか、そして千石さんのお祖父様への従順な姿勢を理解した。他の人に比べ千石さんだけが今回特別だった。前田さんたちのように指示を与えるわけでもなく、ただあたしの傍らにいただけ、あとは野放しにしていたのだ。

(千石さんが一番したたかなのかもしれない)

あれだけ素知らぬ顔してたのに、実際には自分も参加者の一員だったわけだ。

しかし千石さんは推定二十六歳。お祖父様は七十二歳。四十六歳ぐらいのときの子供。

(やるわね、お祖父様……)

これで一途なら言うことなしなのだが。

『私の母は、西龍院家に関わることを良しとしませんでした。比紹様とは違います』

『そうであるう。あの者は自ら出て行った。この家に馴染まなかったのだ』

馴染めない者の方が一般的ではある気がする。お金や権力を念頭においている者ならばともかく、一般家庭出身のものでは、ついていくことは容易ではない。

『しかしワシが認知することさえもあの者は断った。ならばもう、関わることはないと思っておったのだが……。なぜお主は西龍院系列の企業に入社した？』

千石さんから近づいたことが解った。

『私にも、わかりません。貴方に少しでも近づきたかったのかもしれませんが、他にしたいことが無かったというのが正しいかもしれません。気づいたときには面接を受けていたんです』

『奇特なやつだな』

『ですが、比紹様のように憎む心は無かったように思います。母は一度も貴方を悪く言わなかった。その違いかもしれません』

一番純粹にお祖父様に仕えていたのだと感じた。

でなければ外から来た人が、五年もあの我が儘なお祖父様のお傍にはつけないだろう。

『貴方に子供として見て欲しいと願ったことは一度もありません。』

ここにきて、解ってしまったんです。一般的な親子とどれほどかけ離れているのか、そういう情に意味が無いことを理解してしまったんです。だから、名乗らなかつただけなのです』

『ではお主も継ぐ気はないと？』

『私なんてとても……』

『ワシの好む相手は皆、ワシの期待を裏切りおる』

僅かに、本当にわずかだったが、残念そうな声音が混じっていた。その筆頭がお父様で、その中にはあたしも入っている。そして千石さんのことも、期待していたのだ。

『あり得ません。私はどうあっても仕える側の人間。そこに意志は存在しないのです。玲華様に仕掛けるどころか、この秘密さえも明かすつもりは無かった。このままの関係でいさせて頂くのが……なにより、望むことです』

『このまま、か……』

千石さんの言葉を繰り返してはいるが、別の意識がそこに介在していることが読み取れた。それが何かを知る術はない。

ただ、少なくとも否定でないことはわかる。

『ワシの次に立つものにもお主は同じように仕えることが可能かな』
『もう、お心は決まっていますのですか？』

『誰が最も玲華を追い詰めることが出来たか、だ』
あくまで、今回のこととお祖父様は決定したということのようだ。
そしてそれは。

(比紹だわ)

唯一悠汰に目を付け、実際に接触した人。

やはり最終的にはお父様の子供を選んだようだ。

『すこし子供過ぎるが、これからいくらでも育てて行けばいい。それぐらいの時間はまだワシにも残されておる』

素質はあると判断したんだろう。

本来であればこういうやり方は許せない。でももう発言の場はないのだ。

控え室で、お祖父様は悠汰の不法侵入のことを言ってきた。無罪放免にする変わりに隣に立てと。

もちろんただで領いたわけではない。

二度とあの家の人たちが、あたしたちを狙うことのないように約束させた。

そう、関わらせないように。そこで完全にあたしはこの件から離れたことになったのだ。かわりに、こちらからも関わることはできない。

悠汰に言えば、必ず気にするだろう。だから言わない。

これで最後にする。悠汰へのこういう気遣いは。

『お主……、ずっと聴いていたが玲華に感化されつつあったのう。あれは聴いていて面白かったぞ』

千石さんが　おそらく困惑して　押し黙り、二人の会話はここで途切れた。

あたしもスイッチを切る。

きつとこの千石さんの秘密は、一生誰にも知らされることはないだろう。あたしは知ってはならないことをたくさん知ってしまった。もちろん後悔なんてしていない。

ただ、あたしはまた迷うかもしれない。告発するか否かのこの分

かれ道で選んだ方を。良かったのかなって。

(でもそんな暇はないのよね)

あたしには普通の高校生活だけで忙しいのだ。もうすぐ体育祭だつてある。

なにより悠汰のことも、まだまだ導いていかなければならない。そう幸せへと続く道へ。

花瓶の中の白い造花の下に、この器械を隠すように入れた。

きちんと封印してしまいたいのだが……いまはあたしだって疲れ
ている。

(あたしも寝ようかな)

悠汰の隣の空いているスペースに注目した。

(えーと……)

夕食の準備が終わると葛城さんが呼びに来るだろう。しかし悠汰は中から鍵を掛けたと言った。すると葛城さんは……。

(合鍵を使うだけよね)

悠汰ったら、そういうことも気にしないでつて思う。知らないんだから仕方ないのかもしれないが、少しは応用を利かせてほしいものだ。

問題はそのことではない。

例えばあたしが悠汰の隣で一緒に寝ていると、目撃した葛城さんはお父様に伝えてしまうはずだ。主の指示を仰がなくてはならない。もちろんお父様は飛んで来るだろう。

(嬉しいかもしれないわ^{たの})

ささやかな仕返しとまではいかないけれど、少しくらい困ってもらった方がいい。

いつもは服を着替えなければベッドには寝転ぶことさえしない。

だけど今日は、敢えてそのまま悠汰の隣に寝転がり、足元にきちんとたたんで置いてあった掛け布団をかぶった。

ちゃんと悠汰の肩にもかかるように添える。

顔の横に左の手の平が見えるようにそこにある。あたしはその上

から自分の左手を重ね、ぎゅっと握り締めた。

お父様の卒倒する顔が思い浮かぶ。

でもきつとついてきたお母様が冷静に対応してくれるはずだ。邪魔しちや駄目よ、なんてまた暢気なことを言いながら。

今回のことでそれぞれの心に傷が残った。

それだけは紛れもない事実。あたしたちだけじゃない、恐らくあの家の人たち全員と、それから久保田さんにも。

だけどそれを傷のまままで無駄に終わらせるか、乗り越えて力にしていくのかは、これからの生き方にかかっている。

なるべく沢山の人が後者になるように祈りながら、あたしは目を閉じた。

朝になって花瓶の中を見ると、そこにはなににもなかった。

久保田さんだと思う。あんなもの見つけ出しただけでなく、持つて行く人なんて他にはいないから。

あのあと予測どおりお父様たちが気づき駆けつけたと葛城さんから聞いた。そのときに、あの人もそこにいたんだって。

持つていても仕方ないだろうって、思ったのかもしれない。

あたしが公にする気がないことを悟り、ならばこんなもの、持つていても重いだけだと判断したのかもしれない。心変わりしたらいつでも返してやるとか思って、そしていまは預かってくれているんだと確信した。

あの人はそういう優しさを出す人だ。

解りにくいけれど、必然性のある思いやり。

こういう情報の取り扱いは確かに適任なんだろう。だからあたしは、自分からそのことについて触れることはしなかった。

だからそれは、完全に闇に葬られていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2158r/>

believed it daybreak

2011年3月21日16時55分発行